

1997年度～2000年度文部省科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))
研究成果報告書 課題番号09410045 2002年3月

高齢者のライフスキルと
サクセスフル・エイジング
に関する実証研究

研究代表者

小田 利勝

神戸大学発達科学部
人間科学研究センター

神戸大学

研究組織（研究開始年度 / 最終年度末の所属）

代表者 小田利勝 神戸大学教授(発達科学部人間科学研究センター)
分担者 野上智行 神戸大学教授(発達科学部人間発達科学科 / 神戸大学長)
小石寛文 神戸大学教授(発達科学部人間発達科学科 / 発達科学部長)
浅田 匡 神戸大学助教授(発達科学部人間科学研究センター)

研究経費 平成9年度 4,000千円
10年度 4,000千円
11年度 1,500千円
12年度 1,800千円
計 11,300千円

成果公表

- 小田利勝(1998)。「退職に関する新たな視点とサード・エイジの生活課題 - 高齢期のライフスキルとサクセッフル・エイジングに関する実証研究へ向けて -」『神戸大学発達科学部研究紀要』第5巻第2号。
- 小田利勝(1998)。「高齢化社会とシルバー産業 - 公的介護保険とシルバーサービス産業の展開」『神戸大学発達科学部研究紀要』第6巻第1号。
- 小田利勝・石原誠二(1998)。「公的年金制度の改正と自助努力による老後生活資金の確保をめぐる - 日本人の貯蓄行動と資産処理行動との関連で -」『人間科学研究』5巻2号、神戸大学発達科学部人間科学研究センター。
- 石原誠二・小田利勝(1999)。「公的年金制度の改革案における『5つの選択肢』の検討と『もう一つの選択肢』」『神戸大学発達科学部研究紀要』6巻2号、171-188。
- 小田利勝(1999)。「高齢期における自立生活と日常生活活動能力をめぐる」『神戸大学発達科学部研究紀要』7巻2号、201-221。
- 小田利勝(2000)。「年高齢者の生活行動 - 神戸の高齢者を対象として -」『人間科学研究』8巻1号、神戸大学発達科学部人間科学研究センター。
- 小田利勝(2000)。「高齢者の老年規範意識の構造」『神戸大学発達科学部研究紀要』8巻1号、255-269。
- 小田利勝(2000)。「日本社会学会第73回大会テーマセッション「高齢期の自立生活をめぐる今日の課題」コーディネータ(2000年11月11日広島国際学院大学)」
- 小田利勝(2001)。「高齢者のテレビ視聴時間と番組選好」『神戸大学発達科学部研究紀要』8巻2号、283-301。
- 中嶋康之・小田利勝(2001)。「サクセッフル・エイジングのもう一つの観点 - ジェロトランセンデンス理論の考察 -」『神戸大学発達科学部研究紀要』8巻2号、303-317。

は し が き

高齢化社会におけるサクセスフル・エイジングの課題は、次のように大きく三つに集約できると考えている。

一つは、個人の側の課題として、年をとることへの、あるいは高齢期への適応能力や社会的変化への適応能力を高めることである。二つめは、社会の側に求められる課題として、個人のそうした適応への努力を支え、適応力を促進するための社会的条件を整備することである。そして、三つめは、言葉の真の意味での長寿社会という新しい社会システムの構築へ向けた世代間の合意形成を図ることである。これら三つの課題は相互に密接に関連してはいるが、相互に代替可能あるいはいずれか一つが他を包含できるものではない。そして、これら三つの課題は、個人のサクセスフル・エイジング(successful aging of individual)の課題であると同時に、その社会のサクセスフル・エイジング - それを私はsuccessful aging of societyあるいはsuccessful aging of populationと呼ぶことにする - の課題でもあることが理解されよう。

この報告書は、そうした諸課題のうち、第一の課題に主眼をおいて試みた研究の成果である。周知のように、これまでもそうした観点からのサクセスフル・エイジングに関する研究は数多く行われてきた。そして、サクセスフル・エイジングの測定尺度の開発・検討が進められ、サクセスフル・エイジングの条件・要因の解明に力が注がれてきたが、この研究では、高齢者の適応能力の問題をライフ・スキル(Life Skills)の観点からあらためてとらえなおしてみることにした。

この研究課題を着想したときに、先行研究をライフ・スキルをキー・ワードにして先行研究を数多く調べたが、高齢者(高齢期)のライフスキルに関する研究に真正面から取り組んだ研究は、少なくとも日本においては見あたらなかった。また、欧米の老年学関係の著名な事典類やハンドブック等においてもライフ・スキルの概念には触れられていないように、エイジング研究においてはライフ・スキルは主要な概念となっておらず、そうした観点からの研究もごく少なかった。

ライフ・スキルという用語は1980年代から主として学校教育の領域で使われてきた概念であるが、高齢期の自立生活に関する論議が高まる中で、ライフスキルの観点からの研究は、青少年や学校教育に関してだけではなく、サクセスフル・エイジングや高齢者の適応問題にとっても有用かつ早急に取り組むべき課題であると考えに至ったことが、「高齢者のライフスキルとサクセスフル・エイジングに関する実証研究」という研究課題を設定した理由である。4年間の研究の過程で多くの資料やデータが収集されたが、それらすべてがこの成果報告書に反映されているわけではない。それらの分析は現在でも継続中であり、その結果については、順次公表していく予定である。

この研究を進めるに当たって実に多くの方の協力を得た。一人ひとりの名前を挙げることはできないが、ここで深甚なる謝意を表したい。とくに、A4判32頁にも及ぶ調査票に回答を寄せていただいた方々に感謝したい。「高齢者には、ごく簡単な調査しか頼めない

よ」という声をよく聞く。しかし、私は、そんなことはない、とずっと以前から確信していたし、これまでも高齢者を対象に“膨大な”質問数のアンケート調査を実施してきた。そして、そのたびに、高い回収率を得ており、私の確信が間違いではないことを実感してきた。いうまでもなく、そうした調査は回答者に多くの時間と労力を費やすことを強いるものであり、多大の迷惑をかけることになる。それゆえ、いつも、申し訳ないと思いながら調査をお願いすることになる。自記式の郵送調査の場合は回答者の顔が見えないので、いつ、どこで、どのようにして調査票に回答を記入しているか想像しながら、その回答票が返送されるのを楽しみに待っている。

今回の調査期間中にも、調査票への質問や問い合わせが数多くあった。80歳を超えるご夫婦が、足の不自由をおして大学まで私を訪ねてこられたこともあった。子どもや配偶者の方から、調査票を受け取ったが本人が入院していて回答ができない、あるいは、数日前に亡くなったので、という電話も少なくなかった。読み書きが不自由になった本人に長時間にわたって聞き取りをし、回答を寄せて下さった家族の方もあった。ご自身が書かれたものや長文の感想、随想などを回答に添えて返送して下さった方もいる。その後、年賀状や暑中見舞いをお送り下さる方もいる。

お叱りや励ましも多く頂戴した。いずれも、肝に銘じて、今後の調査研究に活かしていきたいと思う。

(研究代表者 小田利勝)

目次

はしがき

第 1 章 サクセスフル・エイジングの概念 ----- 1

はじめに

- 1．大衆長命時代とサクセスフル・エイジング
- 2．サクセスフル・エイジングの概念
- 3．おわりに

第 2 章 高齢期における「適応」をめぐる問題 ----- 11

はじめに

- 1．適応・順応・Adaptation・Adjustment
- 2．社会老年学における適応概念の用語法
- 3．社会的適応の概念
- 4．結び

第 3 章 高齢期の生活とライフスキル ----- 23

はじめに

- 1．ライフスキル研究とライフスキルの概念
- 2．高齢期への適応課題とライフスキル
- 3．高齢期における変化への適応方法とライフスキル

おわりに

第 4 章 サード・エイジの概念とサクセスフル・エイジング ----- 37

はじめに

- 1．退職と高齢者の社会的役割
- 2．退職制度と退職形態の多様性
- 3．サード・エイジの概念とライフスキル

おわりに

第 5 章 高齢期における自立生活とコンピテンス / ライフスキル ----- 55

はじめに

- 1 . 社会保障構造改革と高齢期における自立生活への社会的要請
- 2 . 高齢期の生活活動能力
- 3 . 日常生活活動能力の測定尺度
- 4 . 日常生活活動能力の測定上の留意点と課題

おわりに

第 6 章 サクセスフル・エイジングのもう一つの観点 - ジェロトランセンデンス
理論の考察 - ----- 79

はじめに

- 1 . ジェロトランセンデンスの例示
- 2 . ジェロトランセンデンス理論の生成過程
- 3 . ジェロトランセンデンス理論研究の概要
- 4 . ジェロトランセンデンス理論からの展開と可能性

むすび

第 7 章 高齢者の日常生活行動 ----- 95

- 1 . 問題の所在と研究の目的
- 2 . 研究の方法
- 3 . 結果
- 4 . 要約と結論

第 8 章 高齢者の老年規範意識 ----- 129

- 1 . 問題の所在と研究の目的
- 2 . 分析の枠組みと方法
- 3 . 結果
- 4 . 結論

第 9 章 高齢者のテレビ視聴行動 ----- 145

- 1 . 問題の所在と研究の目的
- 2 . 分析の方法
- 3 . 結果
- 4 . 要約と結論

第10章 セカンド・マジョリティ・グループとしての高齢者の社会観 ----- 167

はじめに

1．研究の枠組みと方法

2．結果

おわりに

第11章 高齢者の日常的コンピテンス／ライフスキルの構造 ----- 203

1．問題の所在と本稿の目的

2．測定項目とデータ

3．結果

6．むすび

第12章 高齢者の日常的コンピテンス／ライフスキルとサクセスフル・エイジング 251

はじめに

1．幸福感と主観的老化度の測定尺度とデータ

2．幸福感、老化度とコンピテンス／ライフスキルとの相関関係

3．コンピテンス／ライフスキルを予測変数とする老後幸福感の重回帰分析

4．むすび

補 論 少子・高齢化社会の構造的特質と高度産業社会の行く末 - 21世紀の
サクセスフル・エイジングの課題 - ----- 281

はじめに

1．高齢化社会とは、どのような社会か - パンドラの箱？

2．高度産業社会における高齢化問題

3．少子化と人口減少

4．風が吹けば桶屋が儲かる？

5．産業社会への適応行動と人口高齢化の必然性 - 産業社会の構造的矛盾
としての人口高齢化 -

6．少子・高齢化の行き着く先 - 人口消滅？

7．期限付きの社会システムとしての産業社会 - 現代社会論としてのエイ
ジング研究 -

結び - 人口減少過程にどう対応するか

第1章 サクセスフル・エイジングの概念

はじめに

サクセスフル・エイジング (successful aging) は、エイジングに関する社会科学的研究の中で、最も古くから、しかも今日まで一貫して研究されてきているテーマであり (George, 1990; Baltes and Baltes eds., 1990)、社会老年学の調査研究の中で最も一般的でよく用いられてきた従属変数である (Markides and Black, 1996)。日本社会学会においても、1991年度の第64回大会においてサクセスフル・エイジングに関するテーマ・セッション(「大衆長寿時代の老い方」)が設けられ、翌1992年度の第65回大会においても(1992年10月31日・11月1日、九州大学)、引き続き同じテーマ・セッションで議論が続けられた(小田, 1993)。それ以降も多種多様なサクセスフル・エイジングに関する研究が累積されてきているが、ここでは、あらためてサクセスフル・エイジングの概念について整理しておくことにする。

1. 大衆長命時代とサクセスフル・エイジング

(1) サクセスフル・エイジングの日本語表現

サクセスフル・エイジング (successful aging) にピッタリと当てはまる日本語を探そうとすると案外難しいことに気がつく。エイジングは「老化」あるいは「年をとる」と言い換えればよいが、サクセスフルを日本語に置き換えようとすると普通の日本語にならない。「成功した老化」や「上出来の老化」、あるいは「首尾よく年をとる」などと表現すれば、日本語ではなくなってしまいそうである。

「幸福な老い」とか「寿齢」という表現が当てられることもあり、「長寿」や「寿老」という言葉を当ててもよさそうである。「寿齢」や「長寿」には輝かしい響きと重厚感があり、「幸福な老い」には明るいほんわかしたムードがある。それでも何となく漢語調で堅苦しい感じがする。「上手に老いる」とか「上手に年をとる」、「うまく年をとる」というと日本語として違和感がなくなるように思えるが、それらが指し示す内容は、何となく個人的な心構えやハウツー的、精神訓話的な事柄という印象を与える。そうした誤解さえなければ、それらの表現を用いてよいかもしれない。

「寿命」にしる「寿齢」あるいは「長寿」にしる、長生きすることを「寿」(ことほぎ)という言葉で表現するように、日本語では、本人だけではなく、長生きする(した)ことをまわりの人たちが「おめでたい」こととしてお祝いするという意味が込められている。ついでに言うと、平均寿命が伸びて多数の人々が長生きすることが一般化した状態を指す mass longevity を大衆長命ではなくて大衆長寿と表現するのも同じ理由からである。

以上のように、サクセスフル・エイジング (successful aging) をそのまま違和感のない日本語に置き換えるのはやっかいである。それは、後発の産業国としての日本が欧米の先進

産業国に比べて人口の高齢化に関しても後発国であり、そうした発想が欧米諸国に比べて乏しかったからであると考えられることができるが、ここでは、ひとまず、「身も心もつつがなく年をとっていくこと」と表現しておこう。

(2) 大衆長命時代とサクセスフル・エイジング

ごく単純に考えれば、「身も心もつつがなく年をとっていくこと」は、いつの時代でも、どこでも、誰でもが望むことであるといえるかもしれない。しかしながら、そのことに多くの人々が関心をもつようになったのは、そんなに古いことではないのではないか、と考えることもできる。

老化や死に対する人々の観念は、不老不死から不老長寿を経てサクセスフル・エイジングに到達したという仮説も立てることができるのではないだろうか。寿命の短かった時代ほど不老不死や不老長寿に対する関心が高く、寿命が長くなるほど、そうしたものへの関心が薄れたということである。これは、ある意味では逆説的発想である。

昔に比べて寿命は著しく伸長し、若々しい高齢者が増えたことは周知のところである。体力的にも外見的にも若さを保つ様々な方法・手段も工夫、開発され、それを利用する人も少なくない。いつまでも若々しく元気で長生きできること、すなわち、不老長寿はもはや夢物語ではなくなったかの感がある。そうであれば、不老長寿や不老不死への関心がますます高まってよいはずである。

しかしながら、サクセスフル・エイジングという発想は、人間はまさにエイジング＝年をとること・老いること、そして死ぬことを前提にする。サクセスフル・エイジングは、いつまでも若々しくて年をとらないように生きることを意味しない。不老不死や不老長寿の観念を否定するところからサクセスフル・エイジングの議論は始まるといってよい。このことは、単に不老不死や不老長寿が非科学的なおとぎ話や伝説の中に込められた人間のほかない夢にすぎないものとして問題にしない、ということではない。

寿命の短かった時代には、長生きする＝長く老い続けることは多くの人にとって例外的な他人事であった。働いて、子供を育てて、とやっているうちに寿命が尽きた＝死を迎えたからである。そうであれば、老後をどう生きようかなどと考える余地はなかったことになる。したがって、もし、長生きしたとすると、そのこと自体が幸運に恵まれたメデタイことであった。長命は即ち長寿であったのである。

寿命の伸長は、多くの人々が長くにわたって老い続けることになったことを意味する。かつては例外的で他人事であったことが、多くの人にとって自分事になったということである。大衆長命(mass longevity)の時代の到来である。不老不死や不老長寿は、長く老い続けることが全くの他人事であるときにこそ、まさに夢として意味を持つ。それが自分事になったとき、老い続けなければならなくなった現実に直面して、不老不死や不老長寿の夢よりも、いかに老い続けるかが関心事になった。長命は必ずしも長寿を意味しなくなったということである。サクセスフル・エイジングということに関心が寄せられる意義もここにある。

長寿社会や大衆長寿時代という表現が使われることが多いが、長生きすることが、本人や家族にとって不安や苦痛に満ちたものであれば、その社会は大衆長命社会であっても大衆長寿社会とは呼べない。誰もが安心して老いを迎え、長生きすることを真に言寿(こと

ほ)ぐことができる社会こそが正しい意味での大衆長寿社会といえるであろう。そして、それこそが、まさに人類にとってのサクセスフル・エイジングといえることができよう。

2. サクセスフル・エイジングの概念

Successful Agingという表現は、life satisfactionやmorale あるいはsurvivalやgood healthさらにはwell-beingと同義に用いられ(Palmore,1979 ; Maddox and Campbell,1985 ; George,1990)、より包括的にはsurvival(longevity)、health(lack of disability)、life satisfaction(happiness)の3つの要素すべてを統合した概念とみなされることもある(Palmore,1979)。Successful Agingを「身も心もつつがなく年をとっていくこと」と表現したのは、そうした概念規定を念頭においたものである。

それらのうち、断るまでもなく、survival(longevity)やgood health、physical healthは客観的に測定できる指標であるが、他は概ね主観的測定指標である。また、well-beingは、physical well-beingやpsychological well-being(Palmore et al., 1985)、economic well-being(Smeeding, 1990)など、高齢期における身体的・精神的・経済的な良好状態を包括して表現する概念として用いられるが、life satisfactionやmorale、happinessといった主観的側面を包括して表現する場合には、subjective well-beingが使われ、日本では主観的幸福感と訳されることもある。

(1) サクセスフル・エイジングの主観的側面

サクセスフル・エイジングの主観的側面は、高齢者の態度や心理、精神状態の問題として早くから多くの研究が試みられてきた。その過程で種々の測定尺度が提案され、それらを用いた研究が蓄積されてきた。今日でも広く知られている代表的な尺度は、生活満足度尺度A(LSIA = Life Satisfaction Index A)やPGCモラル・スケール(Philadelphia Geriatric Center Morale Scale)に代表されるような主観的幸福感(subjective well-being)の測定尺度であり、それらを用いた測定結果の要因分析に関する研究が多く試みられてきた。

(2) サクセスフル・エイジングの客観的側面

longevityとhealthという客観的指標に基づいて「元気で長生き」の要因を分析した研究では(Palmore, 1979; 1982; Nowlin, 1977)、satisfactionやhappinessはサクセスフル・エイジングの構成要素ではなくて、「元気で長生き」の要因の一つとして扱っている。元気で長生きできる人とそうではない人との違いを、遺伝的要因や医学・生理学的要因だけではなく、社会心理学的要因にまで拡張して検討しようとしたものである。いってみれば、「元気で長生き」の秘訣を社会心理学的に解明しようとするものであるが、この種の研究は多くない。精神的・心理学的要因が果たしてどの程度その人の寿命と健康に作用するかは、ストレスの問題とも関連するが、今後さらにパーソナリティーの問題との関連をも含めて究明されるべき課題であろう。

(3) サクセスフル・エイジングと社会的適応

サクセスフル・エイジングは、老化あるいは高齢期の生活への良好な適応過程・状態

(successful adaptation to aging / late life adjustment)でもある(Maddox and Campbell, 1985; Atchley, 1988)。adaptationあるいはadjustmentの概念は、successful aging や life satisfaction あるいは morale よりも早くに老化研究に導入され、それらは、successful aging と同義に用いられてきている。しかしながら、老化や高齢期に良好に適応している状態とはどういう状態かということに関しては共通の見解を見いだすことが難しい(小田, 1991)。

たとえば、高齢期の社会的不適応の例として、孤立、アルコール中毒、薬物常用、自殺があげられることがある(Atchley, 1988)。逆に言えば、通常的生活から大きく逸脱していなければ良好に適応していることになるから、大多数の高齢者は老化や高齢期の生活に良好に適応していることになる。そうだとすれば、どの程度良好に適応しているか、そしてまた、その要因は何かを問うことよりも、高齢者の不適応(逸脱)行動からサクセスフル・エイジングの課題にアプローチする方が意義あることになるともいえる。

ごく一般的には、社会的適応は、環境からの要請に応えることと、環境とのかかわりあいの中で一般的な幸福感を経験するという客観的要素と主観的要素とからなる(George, 1980)。前者に関しては役割理論や社会的ストレス論からのアプローチが試みられており、後者にはsubjective adaptationといった表現が当てられることもある。

この種の観点からの研究は古く、Burgess(1950)は、良好な個人的適応(successful personal adjustment)は、その人が、その人自身の必要や欲求を満足させると同時に社会の期待や要求にも応えていることであり、個人的適応の失敗は、新しい状況に適応するように態度や行動を変化させることができない、あるいはしようとしなないことを意味すると述べて、健康度、活動の内容と量、満足感、幸福感、有用感、他者による適応評価によって高齢期の適応度を測定した。

幾つかの生活満足度尺度を作成して、その有効性を検討した Neugartenらは(1961)、他者評価と主観的生活満足度との関連についても検討している。彼らが行った他者評価は、直接インタビューに参加することなかった大学院生がインタビュー記録を読んで、あらかじめ設定された評価方法にしたがって被調査者の生活満足度を評価するという特殊なものであった。したがって、それは、適応の客観的要素を評価したものとはいえないが、被調査者の回答は、それがどんなに熟慮したものであったとしても、外部観察者の評価と一致するのはごく一部分にすぎないと述べている。この指摘は重要である。

(4) 環境と適応

環境圧力と個人の能力に着目して高齢者の適応問題を論じたLawton(1989)は、環境を以下の5つのカテゴリーに分類している。personal environment(配偶者、世帯員、親族、療法士、職場仲間、親友など)。small group environment(所属する小集団の目標や期待といった独自の特性)、supra-personal environment(年齢特性、民族性、学歴など)。social environment(文化、価値、社会規範、法律、組織、制度)。physical environment(無生物世界全体 - 住居・近隣・地域など)。

人々はそうした様々なタイプの環境からの要請(環境圧)に対応しながら社会生活を送っているが、Lawton(1989)は、環境圧への対応をenvironmental docility modelとenvironmental proactivity modelの2つのモデルで説明している。前者は環境従順型適応モデル、後者は環境改変型適応モデルとでも表現し得るものである。

environmental docility modelにおける適応過程の特徴は次のようなものである。環境圧が徐々に上昇あるいは下降する場合は刺激意識が小さく、環境圧の変化に努力することなく適応することができ、不快感を覚えない。しかし、その変化の幅は個人の能力に規定され、環境圧への応答程度と個人の能力が対応していれば好ましい行動や感情を結果することになるが、環境圧が能力を大幅に上回ったり、逆に下回ったりすれば、不適応行動と否定的感情をもたらすことになる。過剰圧はストレスになり、過小圧は剥奪感を引き起こすからである。最大の快適感(幸福感・満足感)は、能力が環境圧を若干上回っているときに得られる。

environmental docility modelにおいては、環境は所与のものとしてとらえられ、それに適応する過程を問題にするから、環境圧の変化は、高い能力を持った人に対してよりも低い能力の人により大きな影響を与える。Lawton(1989)は次のような事例をあげている。

計画住宅の入居者で健康な人は、新しい友人を選ぶのに地理的な制約を受けない(遠方の人からも友人を選ぶ)。その結果、友人選択において好ましい結果が得られるが、健康度が低い人にとっては物理的距離が圧力になり、友人として選ばれるのは隣人に限定されることになる。

しかし、人間は、環境を所与のものとして、それに柔順に従うだけではない。環境に働きかけて、それを改変する。この場合は、環境圧の水準は、環境からの要請に対して当該個人が有する資源と機会によって規定される。個人的資源の水準が低いと利用できる環境資源が少なくなり、個人の能力が高いほど、ニードや希望を追求するのに利用できる環境資源の量が多くなるということである。これがenvironmental proactivity modelの基本的枠組である。

proactivityはchallengeとほぼ同義と理解してよい。環境資源を増加させる、気に入るように積極的に変える、うまく選ぶ、といった意味で使われている。ある条件があった場合、それに対応することができたり、それを使いこなすことができる人と、そうではない人とは環境は全く異質のものになる。

客観的には同様の環境にみえても、そこにおける感情的・認知的・行動的な反応が人によって違うのは、そのためである。そして、個人の能力が高いほど、望ましい反応を引き起こすことができるように、すなわち、自己効力と幸福感を拡大するようにその人自身の環境を変えることができる。

docilityモデルは、適応様式における安全・機能維持・狭い経験といった保守性・受動性の側面から、proactivityモデルは、挑戦・成長・広い経験といった革新性・能動性の側面から環境からの要請に対する高齢者の応答と幸福感・満足感を説明しようとするものである。docilityモデルにおける高齢者は、挑戦よりも安全を、変化よりも安定を求める。自分の現有能力以内で処理できる課題以外には手を出さずに挑戦的なことをしなければストレスを生じないから、幸福感・満足感の従前の水準は維持され、不快感を覚えることもない。

しかし、他方では、そのことは、個人の能力や、環境を能動的に処理する力量を高めることがないから、環境圧が上昇したときには要求水準(aspiration level)を相対的に低下させざるをえない。proactivityモデルにおける高齢者は、状況に挑戦することによって幸福感・満足感を維持あるいは高める。新奇性や情緒的豊かさを求め、新しく学ぶことによって要求水準を低下させることなく自己の欲求を充足しようとする。

(5)文化と適応様式

周知のように、Merton(1957)は、現代アメリカ社会の文化原理から適応問題を検討して、同調、革新、儀礼主義、逃避主義、反抗といった5つの適応様式を設定した。そこでの適応対象は、Lawton のいうsocial environmentであるが、それらの適応様式は、いずれも個人が幸福感・満足感を維持するための行動様式である。このうち、同調は、その社会の文化的目標と、それを実現するために制度的手段とを共に承認し、それに従って目標を達成しようとする行動様式であるが、他は、文化的目標と制度的手段とのいずれか一方を、あるいは、その両方をともに拒否する行動様式である。それらを要約すれば表1および表2のようになる。

表1 . アメリカ社会の文化原理

三つの文化原理	心理学的解釈	社会学的解釈
1 . 同じ高遠な目標がすべての人に開放されている以上、万人は、この目標に向かって努力せねばならない	刺激を象徴によって第二次的に強化	十分に平等な機会に恵まれないような社会に地位を占めている人々が批判の眼を社会構造から転じて自己自身に向けるようにすること
2 . 現在失敗だと思われているものも、最後に成功に至る中間駅であるにすぎない	しかるべき刺激を与えて、反応が消滅するおそれのないようにすること	相対的に低い社会階級の人々が、自分の仲間とではなく、頂点にある人々と所詮同じだと思い込むことによって、社会権力構造が維持されること
3 . 真の失敗とは、大望を手加減したり引っ込めたりすることに他ならない	終始報いられることがなくとも、いつも反応を引き起こすような動機力を強化することである	揺るぎない大望を促す文化的命令に同調できなければ、一人前に社会に参加する資格がないと威嚇することによって、あくまでこの命令に同調するよう圧力を加えることである

同調は、社会が安定しているほど、最も一般的で広く普及する適応様式である。

革新は、制度的規範から離れて目標を達成することを指す。大望というアメリカの基本的な美德が、それが逸脱行動であっても目標を遂げれば成功という悪徳を促す。アノミー状態の社会では真価や努力ではなく、運やチャンスが強調される。真価や努力に対して報酬が与えられない状況の下では、抜け目なくて積極的に行動する者が得をすることになるから、そうした革新的実践が普及する。

儀礼主義は、あきらめと型にはまった活動であって、高遠な文化的目標の放棄や切り下げで自己の志望を達成する。外的行動は文化的には望ましくなくても制度上は黙認される。

社会的地位が当人の業績によって強く左右される社会で多くみられる。大望を抱くと欲求不満や危険が生じ、志望を引き下げれば満足と安全が得られる。主要な文化的目標をめざす競争に必ずつきまとうと思われる危険や欲求不満から個人的に密かに逃避しようとするために、文化的目標を放棄して安全な慣例や制度的規範にますます固執する。「幸福(満足)とは、達成を分子とし、志望を分母とする分数で言い表すことができる」(カーライル)からである。

表2 . マートンの個人的適応様式の類型

適応様式の類型	文化的目標	制度的手段	
同調	+	+	… 社会が安定しているほど、最も一般的で広く普及
革新	+	-	… 制度的規範から離れた革新的実践(要領のよさ)
儀礼主義	-	+	… あきらめと型にはまった活動
逃避主義	-	-	… 宿命論的消極主義
反抗	±	±	… 価値変革、保守主義的神話と対立

注：+は「承認」、-は「拒否」、±は「一般に行われている価値の拒否と新しい価値の代替」

逃避主義は宿命論的消極主義である。葛藤を回避するために目標と手段を放棄する。正当な手段では常に目標に近づき得ず、また内心の禁止によって不当な手段を持ち得ないからである。文化的目標に価値を認めず制度的手続きも顧みない。社会からの報酬が得られなくても欲求不満をほとんど持たない社会的無関心の適応様式であり、社会的に孤立することになる。

反抗は、新しい目標や新しい手段を制度化して、他の社会成員にも共有せしめようとする過渡的な反応である。それは、現存の社会的文化的構造を変革しようとする努力をさすのであって、既存の社会的文化的構造の範囲内で適応しようとするのではない。したがって、それは、価値変革を志向し、欲求不満の原因を社会構造に求める結果、保守主義的神話と対立することになる。

マートンの適応様式の類型論から示唆されることは、サクセスフル・エイジングの研究における従来の適応論、満足尺度は、みな「同調」のみを扱っていて、「革新」や「儀礼主義」、「逃避主義」、「反抗」といった適応様式については考慮してこなかったということである。それらは高齢期における不適応的な態度ないし行動とみなされてきたといっ

てよい。
しかし、サクセスフル・エイジングの指標を個人の主観的幸福感に求める場合には、そうした態度や行動は主観的幸福感を必ずしも低下させるとは限らない。なぜならば、そうした態度や行動は、個人の主観的幸福感のある水準に維持しようとするあらわれだからである。

(6) 幸福感・満足感の類型化の試み

LawtonやMertonの議論からも明らかなように、幸福感・満足感といったサクセスフル・

エイジングの主観的要素も、その個人と環境との対応関係を離れては論じられない。いま、ここでは、要求水準と生活志向、現状評価という3つの要素を考えてみると、幸福感・満足感は表3に示すように24の類型に分類される。

表3．幸福感の類型化の試み

幸福感	高				低			
	い		い		い		い	
要求水準	高		い		高		い	
現状評価	+	-	+	-	+	-	+	-
生活志向	過	現	將	過	現	將	過	現
24類型	A	B	C	D	E	F	G	H
	I	J	K	L	M	N	O	P
	Q	R	S	T	U	V	W	X

注：現状評価の+は現状肯定、-は現状否定・批判。
生活志向の「過」は過去志向、「現」は現在志向、「將」は将来志向。

幸福感・満足感が高い、あるいは低いといっても、それは要求水準の高低や自らが置かれている立場や社会状況に対する評価によって、また、生活志向によって同一ではない。たとえば、要求水準が高くて現状を否定的に評価し、過去や現在よりも将来の生活に重点を置いている人と、要求水準が低くて現状を肯定的に評価し、過去や将来よりも現在の生活に重点を置いている人とでは、幸福感・満足感が同じレベルであっても、その意味するところは大いに異なる。

表3の幸福感・満足感の24類型に、老後生活における努力の有無を加えると48類型になり、さらに能力の高低を加味すれば96類型になる。いうまでもなく、こうした類型化を試みる場合には、個々の類型の中には論理的にありえない、あるいは矛盾するものもでてくるが、幸福感・満足感といった主観的要素について考える際の一助にはなるう。

3．おわりに

サクセスフル・エイジングは、内的基準(主観的成分)としての幸福感・満足感と外的基準(客観的成分)としての社会的役割や対人責任の遂行といった社会的適応との両面から検討されることが必要である。環境圧力とか環境の要請というのは、一つには、ある状況の下で、その個人に期待されている役割の十全な遂行が求められていることである。それに応えることは、社会的役割と対人責任を果たすことであり、そうすることによって社会的に統合されることである。しかし、環境からの要請に応えていなくても(客観的にみて不適応と判断されたとしても)幸福感・満足感を覚える場合と、その反対に、客観的にみて環境からの要請に応えている(良好に適応している)と判断されても、本人は幸福感・満足感を覚えない場合とがあるう。

先に、サクセスフル・エイジングを「身も心もつつがなく年をとっていくこと」と言い換えたが、これでは十分ではなさそうである。サクセスフルをどう規定するかの問題にすぎないといえばそれまでであるが、客観的要素に焦点を当てたサクセスフル・エイジング

の研究が大衆長命時代の老い方を考える上であらためて重要になってきているように思われる。それは、高齢者が様々なレベルにおける環境からの要請にどう応えているか、応えようとしているか、という適応過程を明らかにしていく作業である。社会の変化に応じて、高齢者に対する環境からの要請もまた量的にも質的にも変化する。問題は、良好な適応状態とはどのような状態であるかという評価規準と、適応過程における客観的要素を評価する際の適切な評価者は誰かということである。この点についての検討が、大衆長命時代の老い方や新たな高齢者像に関する論議をハウツー的あるいは精神訓話的なものから救うことになる。

文 献

- Atchley, R. C. (1988). *Social Forces and Aging* (Fifth edition), Wadsworth.
- Baltes, P. B. and M. M. Baltes eds. (1990). *Successful Aging: Perspectives from the Behavioral Sciences*, Cambridge University Press.
- Burgess, E. W. (1950). *Personal and Social Adjustment in Old Age*. In M. Derber ed., *The Aged and Society*, Industrial Relations Research Association (reprinted edition, 1980, Arno Press).
- George, L. K. (1980). *Role Transition in Later Life*, Brooks/Cole.
- George, L. K. (1990). *Social Structure, Social Process, and Social-Psychological States*. In R. H. Binstock and L. K. George eds., *Handbook of Aging and Social Sciences* (Third Edition), Academic Press.
- Lawton, P. M. (1989). *Behavior-Relevant Ecological Factors*. In K. W. Schaie and C. Schooler eds., *Social Structure and Aging: Psychological Processes*, Lawrence Erlbaum Associates.
- Maddox, G. and R. T. Campbell (1985). *Scope, concepts, and methods in the study of aging*. In R. H. Binstock and E. Shanas eds., *Handbook of Aging and Social Sciences* (Second Edition), Van Nostrand-Reinhold.
- Markides, K. S. and S. A. Black (1996). *Race, Ethnicity, and Aging: The Impact of Inequality*. In R. H. Binstock and L. K. George eds., *Handbook of Aging and the Social Sciences*, fourth edition.
- Merton, R. K. (1957). *Social Theory and Social Structure: Toward the Codification of Theory and Research*, The Free Press (森東吾ほか訳 『社会理論と社会構造』 みすず書房、1961年)。
- Neugarten, B. L., R. J. Havighurst, S. S. Tobin (1961). *The Measurement of Life Satisfaction*, *Journal of Gerontology*, 16.
- Nowlin, J. B. (1977). *Successful Aging*, *Black Aging*, 2:4-6, 8-17 (reprinted in E. Palmore et al. eds., *Normal Aging*, Duke University Press).
- 小田利勝 (1991). 「高齢者の適応に関する概念的考察」 『徳島大学社会科学研究所』 第4号。
- Palmore, E. B. (1979). *Predictors of Successful Aging*, *Gerontologist*, 19 (reprinted in E. Palmore et al. eds., *Normal Aging*, Duke University Press).

第2章 高齢期における「適応」をめぐる問題

はじめに

適応(adaptation, adjustment)という言葉は、生体や動植物、人間、集団・組織、さらには一国の経済、社会、文化、政治の体制など、さまざまな分野・領域で用いられている。老年学(gerontology)や社会老年学(social gerontology)の研究においても、adaptationやadjustmentという概念は、高齢期における生活の質やsuccessful agingを測定する指標として早くから用いられてきた(George and Siegler, 1982)。例えば、“physical adaptation”、“social-psychological adaptation”(Palmore et al., 1979)、“personal adaptation”(Atchley, 1988: p.239)、“subjective adaptation”(Palmore et al. eds., 1985: p.456)といったように頻繁に用いられている。

高齢者の適応問題に関する研究はアメリカを中心に発展してきたが、1950-60年代には、Friedmann and Havighurst(1954)を嚆矢とする「活動理論」(activity theory)と、それを真っ向から批判する形で提起されたCumming and Henry(1961)を始めとする「離脱理論」(disengagement theory)を生み出し、「社会老年学の領域で構築された代表的な、あるいは『たった二つの』理論として」(袖井, 1975)、高齢者の適応問題に関する以後の研究の理論的検討課題を提供することになった。

退職に伴う自己喪失感を回避して退職後の生活に良好に適応しうるかどうかは、職業に代わる新しい自己同一性の源泉となるような代替的諸活動が見いだせるか否かにかかっている、というのが活動理論の説くところである(Havighurst et al., 1968)。離脱理論でいう離脱とは、高齢者と社会の他の成員間との多数の関係が相互に離れていく過程である(Cumming et al., 1960; Cumming and Henry, 1961; Cumming, 1963; Henry, 1965)。産業社会においては、この過程は不可避的なものであるが、高齢者にとっては否定的な過程ではなくて肯定的過程である。なぜならば、たとえば、退職は、職業を軸にしていた社会的役割や地位から解放され、社会的な責任や義務が軽減されることでもあり、それまで取り結んでいた幾多のフォーマルな社会関係から離脱することによって、主意的で選択的な社会関係の比重が高まることでもあるから、離脱は、高齢者にとって老後生活への良好な適応をもたらすことになる。

活動理論と離脱理論とのいずれが高齢者の適応問題をよく説明しうるかについては長い論争の経緯があるが(袖井, 1981)、いずれの理論も、そうした問題全体にわたって普遍的に妥当する説明を可能にするものではない。とはいえ、高齢者および高齢期の生活に関する俗説や思い込みを再検討することの重要性を教えており、高齢者の適応問題の一端を検討する上で有効ではある。その意味では、それらは理論というよりは高齢者の適応問題のそれぞれの側面を明らかにした事実認識の表明と言ったほうがよいかもしれない。それと同時に、以上のような相反する二つの「理論」が提起されてきたことは、高齢者の適応の

現実には、これまでに提起された「理論」のどれか一つで説明しうるほど単純ではなく、きわめて多様性に富んでいることを教えている。

今日では諸多の調査結果が活動的な高齢者の方が幸福感・満足感の度合いが高いことを示している。離脱理論をそのまま支持することができないというのが大方の見解になっている。しかし、また、離脱の程度はそれまでの社会的役割と地位に応じて異なるとして、離脱理論の修正版ともいえる「分化的離脱」(differential disengagement)という観点が示されたり、高齢者は、退職後もそれまでに身につけてきた習慣や選好を可能な限り維持する傾向があるとする「継続理論」(continuity theory)なども提起されている(Atchley, 1976; 1988; 1989)。また、社会心理学の領域では、パーソナリティーと適応の問題に関する多様な研究が早くから蓄積されてきており、たとえば、パーソナリティーの類型化から適応型高齢者と不適応型高齢者に分類したレイチャードの研究(Reichard, 1962; Reichard et al., 1962)などがあるが、パーソナリティーと適応の問題を老化過程に焦点をおいて取り上げるようになったのは比較的新しいこととされている(Kermis, 1984; 下仲, 1988; Cunningham and Brookbank, 1988; Lachman, 1989)。

日本においても、人口高齢化や高齢者に関する問題を扱った研究の中には、適応概念を用いた研究が少なくない(例えば、松村, 1980; 青井・和田編, 1983; 岡村・河合, 1987)。人口の高齢化が進み、高齢者の自立や新しい高齢者像に関する論議が盛んになっている今日、人口高齢化問題や高齢者問題に関する研究において、適応概念はますます重要な鍵概念になっているが、適応の問題を検討するためには、まず、高齢者の実際の社会的適応度を測定することが必要である。そのためには何らかの測定尺度が必要になる。そして、社会的適応度を測定する尺度がどのようなものになるかは、社会的適応の概念規定いかんによる。

老化や退職への適応に関する研究では、それぞれ独自の尺度を用いて適応度を測定している。あるものは多様な次元・側面をもった尺度を用い、あるものは適応度の間接的測定尺度と呼べるような尺度を用いている。しかしながら(したがってというべきか)、それらの研究で使われている適応概念は、必ずしも明確に規定されることなく曖昧なままで多用されているように思われる。かつて同様のことが指摘されたことがあるが(Tréanton, 1962)、今日でも事情は変わっていないといえる。そこで、本稿では、高齢者の社会的適応度の測定尺度と測定方法の開発のための基本的準備作業として、これまでに提起され、また用いられてきた適応概念あるいは適応概念に関する幾つかの見解を取り上げながら高齢期における適応の問題について考察することとする。

1 . 適応・順応・Adaptation・Adjustment

「適応」という言葉を使おうとするときに、日本語では「順応」が、英語では“adaptation”と“adjustment”が類語として思い浮かべられるであろう。ごく一般的には、適応という言葉が指示する内容は、「その状況によくかなうこと。ふさわしいこと。あてはまること/生物が、環境に適合するように、自己の形態・習性などを変化させる現象。遺伝的な変化と、そうでないものがあり、狭義には後者を順応と呼んで区別する」(広辞苑第三版)と説明されている。

英語圏では、adaptとadjustは次のように説明されている (Longman Dictionary of Contemporary English: New Edition, 1987)。

adapt : to make or become suitable for new needs, different conditions, etc. : He adapted an old car engine to fit his boat/ When we moved to France, the children adapted (to the change) very well/ I'm afraid he can't adapt to the idea of having a woman as his boss.

adjust : to change slightly, esp. in order to make right or make suitable for a particular purpose or situation: You can adjust the colour on the TV by turning this knob/ He adjusted (himself) very quickly to the heart of the country/ Your tie needs adjusting/ We made a few minor adjustments to the plan.

上の説明では、adaptationは、新しく生じた必要や状況に都合がよいように適合させる、あるいは適合的になる、または馴れることである。その意味では、日本語の順応という言葉に置き換えられる。これに対してadjustmentは、特定の目的や状況に合わせるために何かを若干変化させることである。adjustはラテン語の「...に正しくする」の意味から来ていることを考えると、何かの基準があって、それに正しく合わせるために微調整することと理解することができる。

研究社の新英和中辞典第5版(1985)では、adaptの項で、「adaptは新しい状況に合うように柔軟に改変する(こと)、adjustは二つのものの比較的小さな違いを技術または計算・判断によって調節する」と注記している。一般の英和辞典でもそうした違いを強調して、前者に適合・適応・改造・翻案・脚色などが当てられ、後者には調整・調節・加減・修正などが当てられている。しかし、実際の用法では両者の区別は曖昧である。

社会学でも心理学でも、適応と順応の英語表記は、それぞれadjustmentとadaptationとしているが(社会学小辞典, 1982; 新版心理学事典, 1981)、両者を厳密に使い分けているわけではない。たとえば、適応(adjustment)は、「個体が環境に対して適合的な行動や態度をとること。個体が環境条件に次第に慣れていくことを順応(adaptation)として区別するのがふつうであるが、適応と順応を同義に用いたり、adaptationを適応と訳すこともある」といい、順応(adaptation)は、「広義には、生活体が環境および環境変化に自己を適応させてバランスを保つことを意味するが、狭義には、知覚活動の一面を表わす特徴として使われる」という(社会学小辞典, 1982)。

パーソンズが社会システムの4つの機能的先行要件(AGIL)の一つとしてあげたadaptationは適応の訳語で通っており(Parsons and Smelser, 1956; 富永訳, 1958)、マートンが『社会理論と社会構造』で提示した“A typology of modes of individual adaptation to anomie”は「個人的適応様式の類型論」と訳されている(Merton, 1957; 森ほか訳, 1961)。また、セリエ(H. Selye)がストレスに対する反応に名づけたadaptive reactionおよびストレスに対して体内で起こる一連の症候に対して名づけたadaptation syndromeは、それぞれ適応反応、適応症候群という訳語で知られており(心理学事典, 1957)、Helsonのadaptation level theory(AL説)は順応水準説で通っている(新版心理学事典, 1981)。

以上のように、既に専門用語として定着しているものに関してはそれを踏襲するほかはないが、辞書的説明ほどには、実際の用法上では、adaptationとadjustmentあるいは適応と順応の区別は厳密さを要求されていない、ということができる。社会老年学の研究においても、以下に見るように原則的には adaptationとadjustmentを区別して説明している場合も

あるが、両者が時には互換的に用いられるという点では事情は同じである。

2 . 社会老年学における適応概念の用語法

アチュレーは、adaptation を "the process of adjusting oneself to the situation or environment" と過程概念として説明している (Atchley, 1988 : p.373; 1987 : p.289)。adjustmentについては説明していないが、そこでの adjustingの用法からすれば、彼はadjustmentを調整・調節・加減・修正といった辞書に説明されているような一般的意味で使い、社会老年学の概念としての重要性をadjustmentよりもadaptationに置いていることがうかがわれる。

これに対して、老年学の学際的なテキストでは、adaptationは用語解説欄でも本文中でも取り上げられていない。そして、もっぱらadjustmentだけが、" a harmonious relation to the environment in which an individual is able to meet most of his or her own needs and those of the society " の意味で用いられている (Cunningham and Brookbank, 1988 : p.279)。アチュレーとは逆に adaptationよりもadjustmentの方に概念的な重要性を置いていることがうかがわれるが、明らかのように、そこでのadjustmentは状態概念としてとらえられている。この説明で重視すべき点は、環境との調和した関係を指すadjustmentという概念を、adjustmentの主体である個人のニーズと客体(環境)である社会のニーズをともに充足しうる状態と規定していることである。この点については後にあらためて触れることにする。

ハリスは、老年学においてこれまでに用いられてきたadaptationおよびadjustmentの概念を集約する形で、それらに対して以下に見るように簡潔にして包括的な解説を施している (Harris, 1988)。

Adaptation : (1) In biology, where the term originated, it refers to any change in an organism that makes it better suited to its environment. (2) The way in which an individual or group fits into its social or physical environment. Sometimes used interchangeably with " coping ", which is a form of adaptive behavior. The relationship between aging and successful adaptation is one of the most persistent and widely studied issues in the field of aging. (3) A temporary change in the responsiveness of a sense organ. (p. 4)

adjustment : (1) The relationship an organism has with its environment. (2) A process in which an individual has a harmonious relationship with his or her social or physical environment; the end result of adaptation. Influences on good adjustment of older persons include health and personal security, independent action, group membership and social experience, and worthwhile activity. " (p.5)

ハリスの解説にあるように、adaptationという言葉が元来は生物学の概念であり、生体が生存のために環境によりよく適合するような何らかの変化を指すことはよく知られている。また、adaptationの項の(3)の説明は、感覚器官が刺激に対して一時的に刺激効果を示さなくなるように変化した状態のことを指しており、日本語では感覚的順応と表現されている (新版心理学事典, 1981)。

老年学研究に直接関係するのは(2)の説明である。先にみたアチュレーの説明ではadaptationは過程概念として説明されていたが、ハリスの説明を特徴づければ、個人や集団が社会環境や自然(物理的)環境にどのようにして適合していくかという「やりかた・方法 (way)」としてadaptationを説明していることである。そのことから、adaptationは、adaptive behavior(適応行動)の一形態である " coping " と相互互換的に用いられることもあると付加

的説明をし、coping以外にも幾つかのadaptationの方法や形態があることを示唆している。そして、ここでも、老化(aging)とsuccessful adaptationの関係は、老年学の主要課題の一つであることが指摘されている。

ところで、copingは、周知のように心理学の多様な研究領域で用いられている概念であるが(新版心理学事典, 1981)、George and Siegler(1982)によれば、この用語もまた多様な定義づけのもとで使われている。ストレスフルな状況に対する精神内界的反応(intrapsychic responses)と行動的反応(behavioral responses)とを区別して後者だけをcopingとみなす場合や、ストレスフルな状況を変化させることを明らかに意図しているとみなすことができる努力に限定してcopingを用いることもある。そして、また、不安を軽減したり安楽を維持しようとする努力や試みに対しては、それらをcopingという用語ではなくて、防衛(defenses)やストレス管理技術(stress management techniques)と表現する研究者もいる。George and Siegler(1982)では、実際にストレスフルな状況を変化させたときには、ストレスに対する認識もまた同時に変化するのであるから、以上のような区別は現実には容易ではないとして、copingとは、個人がストレスフルな状況の生起を防いだり、それを緩和したり、また、それに対応するために用いるあらゆる行動(顕在的行動：overt behavior)およびかくれた(あらわではない行動、潜在的行動：covert behavior)のこと、と包括的な概念規定を行なっている。

adjustmentに関する(1)の説明は生物学的・一般的用法であり、老年学における用法は(2)である。高齢者のgood adjustmentに影響を及ぼす / good adjustmentを促進するものとしては、健康であることや安全が保たれていること、自立行為ができ、集団に所属していること、社会経験や社会的接触が豊富で、やりがいのある活動を行なっていることがあげられている。これらはこれまでの研究成果として例示されたものであるが、ここでは、まだadjustmentやadaptationの概念論議が終わっていないので、その詳細については触れなくておく。

先にみたように、アチュレーはadaptationを過程概念として規定したが、ハリスはadjustmentを個人と環境とが調和した関係を保っている過程と規定している。しかし、その規定に続けて、adjustmentをadaptationの最終結果と付加しているのは矛盾している。むしろ、adjustmentを前述の老年学の学際的なテキストにおける説明、および、adjustmentを、個人と環境とが調和・適合している状態(Adjustment may be defined as a state of congruence between the individual and the environment)として定義している George and Siegler(1982)のように状態概念としたほうが明快であろう。とはいえ、他方では「adaptationをライフ・イベントのストレスを処理するためにさまざまな資源を利用する試みの結果とみなす」こともあるから(Palmore et al., 1979)、そうした区別も、実際の研究上では強く意識されていないともいえる。

人間および人間社会に関していえば、個人にしる集団・組織にしる、環境との関係は静態的・一方向的なものではなくて動態的・双方向的なものである。このことが、環境条件を所与のものとして、それが生物の生存可否の決定的要素になり、もし、生存不可能な環境の下でも生存しようとすれば、それは突然変異という遺伝的適応(genetic adaptation)によってのみ可能であるとする生物学的な適応論を人間および人間社会(社会システム)にそのまま適用できない理由である(Parsons, 1937: 稲上・厚東訳, 1976: 180-195頁; Klausner,

1971 : pp.25-31 ; Kuhn , 1974 : 38-41 ; Parsons , 1977 : p.51)。したがって、adaptationであれ adjustmentであれ、固定した状態を指す概念とすることは不適當である。状態概念といっても、それによって指示する内容は固定的な静態的調和状態ではなくて、あくまでも主体 - 客体間の相互作用を通じて動態的な調和が保たれている状態に他ならないのである。

3 . 社会的適応の概念

社会的適応に関しては、一般的に、「人間の場合には、社会生活を営んでいくうえでも、単に自然環境に適応するだけではなく、集団・社会システム・人間関係などの社会的環境にも適応していかなければならない。特にこの面を指すときに社会的適応という」と説明されている(社会学小辞典 , 1982)。心理学辞典(1957)でも同じような説明がなされている。要するに、適応対象の違いを明確にするために、「自然的」と対置させて「社会的」という形容詞を付けるということである。しかしながら、社会的適応という表現は、また、個人的適応と対置させて使われることもある。

ハリスは、adjustment を personal adjustment と social adjustment に分類し、以下のように解説している(Harris, 1988)。

personal adjustment : (1)An individual's reorientation in response to new or changed situations. (2)Differences between the expressed wishes of a person and the activities that he or she actually performs. (3)General happiness. ” (p.134)

social adjustment : An individual's adjustment as evaluated against criteria and standards set by others. ” (p.164)

personal adjustment に関しては、新しい、または変化した状況に応じた個人の再方向づけ(再修正)という意味、表現された願望と実際に行なっている活動との相違(を調整すること)という意味、さらには「全体的な幸福」(general happiness)と同義に用いられることがあることをつけ加えている。最後の点に関しては別の機会に触れることにするが、personal adjustmentにしる personal adaptationにしる、また、日本語で適応と表現されるときにも、その程度(適応度)が専ら主観的幸福感や満足感を測定することによって議論されることが少なくない(ついでにいえば、本稿は、そうした点に対する疑問から、あるいは、そうすることが正当性をもつならば、その根拠は何か、という関心から企てられた研究の基礎的作業の一部に他ならない)。social adjustmentに関しては、個人のadjustmentが他者によって設定された基準や標準に照らして評価される場合に用いられるとしている。ここでの他者は、個人や集団、あるいは広く社会(環境)や時代と理解してもよいであろう。主観的側面からだけでなく客観的側面からadjustmentをとらえるという点は重要な観点である。ただし、ハリスは、adaptationに関してはpersonal とsocialに分類していないが、老年学研究では、すでにみたように、personal adaptationやsocial adaptationという表現も比較的よく使われている。

早くに、personal adjustment と social adjustmentを区別して論じたのはバージェスである(Burgess , 1950)。かれは、personal adjustmentとは「個人が、新しい状況に直面したときに態度や行動を変化させること」であるとし、「良好な個人的適応(successful personal adjustment)は、その人が、その人自身の必要や欲求を満足させると同時に社会の期待や要望にも答えていることを意味する」という。これに対して、社会的適応に関しては次のよ

うに述べている。Social adjustment is the adaptation of society or one of its component institutions or groups to social change. 具体的には、社会全体の福祉および個々の成員の幸福につながるように政治や計画、手続きを改革(revision)することであると述べている。adaptation of societyというadaptationは、したがって、英和辞典に掲載されているような改造、翻案といった意味で使われている。

日本社会心理学会では、1972年に『現代と社会的適応』と題する年報を発行している。特集論文の多くは、概念論議を行なわないままに社会的適応という言葉を使っているが、唯一その中で前田は社会的適応に関して次のように論じている(前田, 1972)。

……「社会的適応」は、一般には「適応」と同義と解されているが、場合によっては、「適応」を「個人的適応」と「社会的適応」の二つに分け、後者に独自の意味を持たせる……たとえば橘覚勝氏は「個人的適応」を「座の変化にともなって個人の要求や態度を調整すること＝行動による個人の要求の満足」とし、「社会的適応」を「社会の規範や秩序、制度や風習の変化による社会変動に対して個人の身分や地位に応じて適切に対処することを意味する＝行動の社会的効果の充足」とし……大橋薫氏は、「社会的適応とは、いわば社会もしくは社会の諸制度の一つが社会変動に順応できるようにすることであり、いいかえれば、社会的能率を増大し、社会の成員の個人的適応を容易ならしめるように、社会的規準や手続きを修正する過程である。……」としている。……個人に対してまったく一方的に適応を要求するだけではどうにもならない。適応できるような条件作り、いってみれば社会そのものの変革も必要があるという大橋氏の主張は、特に老年者の社会的適応を論ずる場合の非常に重要な視点となるものである。……

前田が紹介している大橋の部分は、大橋が『社会学辞典』に執筆した「社会的不適応」(social maladjustment)の項からの引用である(大橋, 1958)。ちなみに、大橋は、個人的適応を「ある変化した状況の要求に対応できるように、当該個人の態度や行動の再修正(reorientation)ないし再構成(re-structuring)を意味する」と説明している。そして、参考文献としてあげているのがバージェスの共著書であるから(Cavan et al., 1949)、大橋のいう社会的適応はバージェスのいうsocial adjustmentに倣ったものであることが推察される。

バージェスと大橋の personal adjustmentとsocial adjustmentの区別は、ハリスと橘のそれと明らかに異なっている。ハリスと橘の場合は適応主体は個人であって社会は適応対象であるが、バージェスと大橋の場合は、適応主体が社会で適応対象は社会変動である。そこでいう社会は、文脈から判断する限り包括的な全体社会としての国民社会を指している。適応概念の基本的観点である主体-客体関係で社会の適応をとらえようとすれば、その国＝適応主体が存続していくために適応しなければならない客体＝適応対象は、その国の自然環境や一国を取り巻く国外状況(の変化)である。

これまで見てきた適応概念からすれば、新しい状況とか状況の変化というのはあくまで客体に対して使われるのであって主体の変化に対してではなかった。ところがバージェスのいう社会の改造や大橋がいうところの社会変動というのは適応主体そのものが変化することであるから、いってみれば適応主体が適応主体の変化に適応することである。個人にたとえてみれば、例えば、「老化への適応」というときには、個人が自分の老化という変化に適応することである。しかし、バージェスや大橋が社会的適応という表現を用いて言おうとしていることは、大橋の文面にも見られるように、状況に対する個人の適応を左右する社会的条件に関することである。バージェスもその論文の別の箇所、社会や政府が

社会的条件を整備すれば高齢者の適応問題はもっと容易に解決されると述べている (Burgess, 1950)。要するに、焦点はあくまでも個人的適応なのである。かれらが社会的適応という表現を用いて言わんとするところは高齢者の適応問題を考える上で重要な観点であり、その点ではすでに述べた筆者の関心と符合する。しかし、そのことを論じるために個人的適応の対置概念として社会的適応という用語を用いる必然性は全くない。そこで指摘されている内容は、個人的適応を促進あるいは阻害する条件の問題であって、それらは、より一般的に社会福祉あるいは社会計画の課題として指摘するほうが明確であろう。

松村は、社会的適応を「個人の要求性向が社会的行為によって充足された状態、つまり要求性向と社会的行為との均衡状態」とみなしている(松村, 1980)。松村は、「要求性向」について説明を加えていないが、文脈からいって、かれのいう要求性向は、『行為の総合理論をめざして』(Parsons and Shils, 1951)および『社会体系論』(Parsons, 1951)の中で頻繁に用いられている need-dispositionsのことである。

need-dispositionsという用語はパーソンズの行為理論に固有の概念であるとして、社会学辞典(1958)では、それを「欲求性向」と訳して独立項目をたてており、「行為における動機づけの性向ないし素因を意味する」と解説している。『社会体系論』の日本語訳(佐藤, 1974)にも欲求性向に訳注がつけられ、社会学小辞典(1982)でも欲求性向を独立項目をたてて解説している。また、パーソンズの行為理論を検討している松本(1989)も、need-dispositionsの用法を集約するような形で欲求性向について触れている。

しかし、need-dispositionsという概念で指示する内容を最も簡明に伝えているのは、社会学小辞典(1982)の「ニーズ(needs)」の項で欲求性向について次のように言及している箇所である。「… 生物学的衝動は、身体内部の生理的平衡状態の変動に起因するという意味での内臓関連的な欲求と、後天的または経験的に形成されたという意味での獲得的欲求とに分けることができる。… 目標指向性と選択性をもった欲求を欲求性向と呼ぶ場合もある。欲求性向という場合は、欲求の獲得的性質に注目し、それが社会的・文化的影響に大きく規定される側面を重視している」。要するに、ごく簡略化して言えば、欲求性向とは、社会的・文化的に条件づけられた(あるいは社会的・文化的に形成された)欲求のことである(生理的欲求と対置される社会・文化的欲求そのもののことではない)。

ここで、付言しておけば、dispositionには、傾向や性質、気質、～したい感じ・気持ちという意味がある。dispositionをそのように理解すれば、need-dispositionsは、欲求に駆り立てる傾向というほどの意味であり、欲求性向と訳されたのであろう。この意味で欲求性向という用語を使う場合には、欲求性向の充足という表現は意味をなさないであろう。しかし、また、dispositionには、配列・配置という意味もある。dispositionをこの意味にとれば、need-dispositionsと複数になっていることから、諸欲求の統合された組合せ、配列・配置状態と解することができる。したがって、この場合には、社会的・文化的に条件づけられながら、しかも相互間連的に統合されている諸欲求の充足という意味で欲求性向の充足という表現を使うことができる。パーソンズは、『社会体系論』の中でも欲求と欲求性向を慎重に使い分け、欲求充足(gratification)と欲求性向の充足との区別に注意を促しているが、かれの need-dispositionsの用法をみると、次に摘記するように両方の意味で用いている。

「同調の欲求性向、離反の欲求性向」。「複数の欲求性向」。「パーソナリティーの欲求性向の16のタイプ」。「子供がすでに確立した欲求性向」。「正常な成人の水準の性愛的欲求性向の強力な力は、社会化過程におけるこの欲求性向の決定的な役割を証明している」。「感情、安全、または適合感の欲求性向」。「欲求性向の禁止または消却」。「自我自身の欲求性向体系の葛藤」。「相互行為過程から生じた、この欲求性向の変更は、パーソナリティー体系のその他の欲求性向に波及し、そのことは相互行為そのものの発展を修正するだろう」。「他者を世話する欲求性向、文化的形態を創造する欲求性向」。「欲求性向そのものを『行為に表わす』」。「(既得利害関心)は、基本的には、役割期待の確立した体系もたらず欲求充足を維持するインタレストである。その欲求充足は、単純な快樂主義的な意味での『衝動』の充足ではなく、欲求性向の欲求充足である点に注目したい。それは明らかに制度化されて期待と一致している、感情的に中立的なタイプの、しばしば道徳的タイプのインタレストを含んでいる」。「精神的な欲求性向の充足」。「表出的シンボルの本質は、問題の行為文脈で関連している“どんな”欲求性向“でも”それを即時的に充足することへの関心が優位している、ということにある」。

人間は様々な欲求をもっており、それら諸欲求を他者との相互行為の過程において習得された一定の仕方で欲求充足の期待をもって他者に志向し、行為することによって充足しようとするが、それら諸欲求は、また、他者との相互行為の過程で生み出されたものである。そして、個々の欲求は単独でバラバラに分散しているわけではなく、ある欲求は他の欲求と関連して個人の中で組織化されているが、また同時に相互行為の過程で諸欲求の構造に変更が生じ、そのことが相互行為そのものを修正することになる。

松村がいう社会的適応の社会的とは、そうした相互行為過程を指しているのであるが、かれは、そのことをさらに明確にするために、行為あるいは相互行為と互換的に用いられる社会的行為という用語を用いたものと考えられる。しかしながら、すでに明らかなように、欲求性向の充足は相互行為によってのみ可能であるから、「要求性向が社会的行為によって充足された状態」ということは、「要求性向が充足された状態」と簡略化して言っても意味は同じである。

ところで、他者との相互行為の過程において習得された一定の仕方で欲求充足の期待をもって他者に志向し、行為することによって充足しようとするということは、それぞれの個人行為者は、互いに他者に対する役割期待に基づいて、それぞれを他者とする相互行為の過程で相補的な役割を担いながら関係していることを意味する。したがって、欲求性向が充足されるためには、個人行為者がそうした相互依存関係網の一部になっていること、つまり、何らかの社会的役割を担っていることが必要である。

岡村・河合(1987)は、「… 一般に適応とは、(a)役割期待を確実に知覚し、これから逸脱しない、(b)各種の欲求を自我のもつ究極的な意図に沿って自己統制し、統一をもったパーソナリティーに統合するという二面からとらえられる」としている。(a)は、先に見たように、バージェスが「良好な個人的適応(successful personal adjustment)」とは何かということについて述べた後段部分すなわち「(その人が)社会の期待や要望にも答えていること」および Cunningham and Brookbank(1988)のadjustmentの概念規定の後段部分と同様の内容である。バージェスは、1960年の著書Aging in Western Societies(University of Chicago Press)の中で、「… 退職した男とその妻は、役割なき役割のなかに閉じこめられている。彼らは果たすべき重要な役割を持たない… 役割なき役割は、退職とともに高齢者に押しつけられ、多かれ少なかれ、彼はそれを受け入れ、あるいはあきらめてそれに服従してきたのである」と述べている(Atchley, 1976: 訳書: 99頁)。成人に期待される役割で最も重

要なものは職務遂行であるが、退職者には、もはやそうした社会的に重要な役割を遂行する期待は寄せられない。社会の裏面に撤退して役割なき役割を担うことが社会の期待や要望に応えることになる。アチュレーは、継続理論の立場からそうしたバージェスの論点を批判して次のように言う(Atchley, 1976: 訳書 100頁)。退職者は、「退職後も、それ以前と同じタイプの間人であることを周囲の者から期待されている。こうした行動の継続性への期待こそ、退職者に望まれる一連の期待のなかで中心的なものである。… さらに、退職者は、自分自身の生活をやりくりする責任をとるべきだという期待」に応えなければならない。

退職者あるいは高齢者が期待される役割は社会的・文化的に規定されるが、バージェスの主張の背景には 1950-60年代の西洋社会の社会規範認がある。アチュレーは、役割とは文化によって伝達された一般的規範であり、それによって社会的地位につながるのある権利義務が規定されているととらえ、その義務を果たすことが役割期待を遂行することであるという。そして、退職者という社会的地位に付随する義務すなわち退職者の役割は、職務遂行以外の多くの生活分野で、家族にも地域社会にも頼らずに自分で自分のことを処していくことであり、そのことは、バージェスが言うような役割なき役割ではないと批判している(Atchley, 1976: 訳書 99-104頁)。

日本における近年の「新しい高齢者像」に象徴されるように、高齢者の自立・自助が強調されている状況では、高齢者は、バージェスのいうような「役割なき役割」を遂行することは期待されていないといえる。Riley(1989) は、アメリカで1986年に70歳定年制を唱った法律が制定されたことを例にとって、今日では高齢者に対する役割期待が大きく変化しており、受動志向から能動志向へ、離脱志向から自己統制志向へとといったように心理学的老化の支配パターンも変化していると指摘している。

高齢者が役割期待に応じて役割を遂行するためには、高齢者自身が高齢者に期待されている役割を正しく認知・規定していなければならないが、家族や身近な人々、職場、地域社会、全体社会それぞれが高齢者に向ける役割期待は異なる。役割理論に基づいて適応概念を規定する場合には、高齢者の役割認知と役割規定の是非を客観的に判断し得る方法を用意する必要がある。

4. 結び

本稿では、高齢者の適応問題に関する研究を進めるための序説的議論として、適応概念について若干の考察を行なった。取り上げなければならない研究を多く残したが、高齢者の適応問題に関する研究の多くは、適応概念に関して共通した見解あるいは理解に基づいて進められてきたわけではなく、それぞれが操作的に定義して進めてきたことは理解されたであろう。個々の操作的定義については稿をあらためて検討するが、それらは、高齢者の適応度を測定するために便宜的に採用された概念規定である。

生物学的観点からは、個体維持と種族保存という二つの指標で環境に対する適応・不適応を判断できるが、人間の場合はそれに尽きるわけではない。実際の調査では、信頼性が高いとされている各種の心理検査やパーソナリティ・インベントリーが調査の一部として使われる場合もあるが、項目の多さや実施の困難さから、大規模で長期にわたる共同研

究以外には用いられないことがない。しかも、それらは理論的に構成された指標に基づいているというよりは経験的に構成された尺度を用いているために、それによって把握される高齢者の適応度は極めて限定的なものでしかないことが多い。高齢者の適応問題を考える際には、何を指標とし、どのような測定尺度を作成するかは、なお大きな課題として残されている。

文 献

- 青井和夫・和田修一編(1983).『中高年齢層の職業と生活』東京大学出版会
- Atchley,R.C.(1987). *Aging:ContinuityandChange,Belmont,California,Wadsworth.*
- Atchley,R.C.(1988). *SocialForcesandAging:AnIntroductionto SocialGerontology*(fifthedition), Wadsworth.
- Atchley,R.C.(1989). A Continuity TheoryofNormalAging, *The Gerontologist* No.29.
- Burgess,E.W.(1950). PersonalandSocialAdjustmentinOldAge.InMiltonDerbered., *The AgedandSociety*, IndustrialRelationsResearchAssociation(Reprint edition, 1980,NewYork,ArnoPress,pp.138-156).
- Cavan,R.S.,E.W.Burgess,R.J.Havighurst,andHerbertGoldhamer(1949). *PersonalAdjustmentinOldAge*,Chicago, ScienceResearch Associates.
- Cumming,E., L. Dean and D. Newell(1960), Disengagement,a Tentative Theoryof Aging, *Sociometry*,Vol.23,No.1.
- Cumming,E.andWilliamH.Henry(1961). *Growing Older:TheProcessofDisengagement*. Basic.
- Cumming,E.(1963). Further Thoughtson the Theoryof Disengagement, *InternationalSocialScience Journal*,No.15.
- CunninghamW.andJ.Brookbank(1988). *Gerontology:The Psychology,Biology,andSociologyofAging*,Harper&Row.
- 遠藤マツエ・小田利勝・大松 繁・多田敏子(1987).「徳島県における人口の高齢化と高齢化対策」『老年社会科学』9、213-226頁
- George,L.K.andI.C.Siegler(1982). StressandCopinginLaterLife. *EducationalHorizon*, 60, 147-154.
- Harris,D.K. (1988). *Dictionary of Gerontology*,NewYork,Greenwood.
- Havighurst,R.J.,B.L.NeugartenandSheldonS.Tobin(1968). Disengagement and Pattern ofAging.InB.L. Neugartened., *MiddleAgeandAging*,UniversityofChicagoPress.
- Henry,W.(1965). EngagementandDisengagement:TowardaTheoryofAdultDevelopment.In R.Kastenbaumed., *Contributions to the PsychologyofAging*, Springer PublishingCompany.
- Klauser,S.Z. (1971). *OnManinHisEnvironment*,SanFrancisco,Jossey-Bass.
- Kuhn,A.(1974). *The Logic ofSocialSystems*,SanFrancisco,Jossey-Bass.
- 前田大作(1972).「情報化と老年」『現代と社会的適応』日本社会心理学会編・年報社会心理学第13号、勁草書房
- 松村健生(1980).「定年と家族」青井和夫・庄司興吉編『家族と地域の社会学』東京大学出版会
- Merton,R.K. (1957). *SocialTheoryandSocialStructure:TowardtheCodificationofTheoryandResearch*,Glencoe, Illinois,TheFreePress(森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳『社会理論と社会構造』みすず書房、1961年)
- 大橋薫(1958).「社会的不適応」『社会学辞典』有斐閣、391頁
- 岡村清子・河合千恵子(1987).「高齢女性における配偶者喪失後の役割移行と適応」『老年社会科学』9、53-70頁
- Palmore,E.B.,E.W.Busse,G.L.Maddox,J.B.Nowlin,andI.C.Sieglereds.(1985). *NormalAging : Reports fromtheDukeLongitudinalStudies, 1975-1984*,Durham,North Carolina,DukeUniversityPress.
- Palmore,E.B.,W.P.Cleveland,Jr.,J.B.Nowlin,D.Ramm,andI.C.Siegler(1979). StressandAdaptationinLater Life, *JournalofGerontology*, 34, 841-851
- Parsons,T.(1937). *TheStructure ofSocialAction: A StudyinSocialTheorywithSpecialReferencetoaGroupofRecent European Writers*,NewYork,McGraw-Hill(稲上毅・厚東洋輔訳『社会的行為の構造1 総論』木鐸社、1976年)
- Parsons,T.andN.J.Smelser(1956). *EconomyandSociety*,London,Routledge&KeganPaul(富永健一訳『経済と社会』岩波書店、1958年)
- Parsons,T.(1977). *SocialSystemsandtheEvolutionofActionTheory*, New York,TheFreePress.
- 社会学小辞典<増補版>(1982).有斐閣
- 新版心理学事典(1981).平凡社

心理学事典(1957). 平凡社

第3章 高齢期の生活とライフスキル

はじめに

高齢期の課題をひとことで表現すれば、老後をいかに安寧に過ごすかということである。この課題は、“幸福な老い”や“うまく年をとる”と日本語で表現されることもあるサクセスフル・エイジング(successful aging)やウェル・エイジング(well aging)という概念のもとで、あるいは高齢期(老後生活)への適応問題として多くの研究が積み重ねられてきた(小田, 1990; 1991; 1993; 1995)。その過程で、サクセスフル・エイジングに関わる測定尺度がいくつも開発され、検討を加えられる一方、サクセスフル・エイジングの条件・要因の解明に力が注がれてきた。本稿では、そうした研究を踏まえて、新たにライフスキルの観点からサクセスフル・エイジングの実証研究へ向けた予備的作業として若干の概念的考察を試みることにする。ライフスキル(life skills)という用語は、社会老年学(social gerontology)や老年(人)心理学、もっと一般的にいえばエイジング研究(aging studies)の領域では国内外ともに馴染みが薄いが、高齢期あるいは高齢者のライフスキルに関する問題は、サクセスフル・エイジングに関するこれからの研究が取り組むべき重要な課題であると考えられる。

1. ライフスキル研究とライフスキルの概念

ライフスキルに関する研究が関心を集めるようになったのは、国内外ともに比較的最近のことである。そこで、以下では、ライフスキル研究やライフスキル教育の動向についてごく簡単に触れ、それとの関連でライフスキルの概念についてみておきたい。

三宅(1996)は、ERIC(Educational Resources Information Center)に収録されている研究プロジェクトの中で、ライフスキル(life skills)に関するものは1980年代半ばから散見されるようになったが、その数は1990年代に入ってから急増していると報告している。また、川畑(1996a)によれば、アメリカを中心として1980年代からライフスキル・トレーニング・プログラムの開発が進んできたという。野上は、文部省科学研究費補助金総合研究(A)の助成を受けて、1995年から「21世紀の科学技術社会におけるライフスキル」という全国規模の研究プロジェクトを主催し、わが国のライフスキル研究の新たな発展を試みた(野上, 1996a; 1996b)。

ところで、WHO精神保健部は、「ライフスキルとは、人とうまく付き合い、日常生活における苛立ち事や、ストレス等に対処できるスキルである。そのようなスキルは、心理・社会変化に対する適応能力を高めるのに非常に重要である」と説明している(川畑; 1996b)。そして、そうしたライフスキルとして、「コミュニケーションのスキル」、「意志決定のスキル」、「問題解決のスキル」、「批判的思考」、「対人関係のスキル」、「自己主張」、「喜怒哀楽の情動に対処するスキル」、「不安、ストレス・マネージメン

ト」をあげ、それらを活用することによって身体的・精神的健康を維持・促進し、社会問題たとえば「酒、煙草、薬物の乱用」、「不安、抑鬱」、「若者の妊娠、無防備な性行為」、「虐待」、「自殺」、「学校中退」の防止・予防にもなるとしている。

川畑(1996a)によれば、学校健康教育の領域では、1970年代後半からK Y B (Know Your Body)プログラムという児童・生徒を対象とした健康教育プログラムの研究・実践が進められてきたが、80～90年にかけて、ライフスキルの形成に主眼が置かれるようになった。そして、対人関係のスキル(inter- personal skills)としての「自己主張的コミュニケーション」、個人の内的スキル(intra- personal skills)としての「自尊心維持」、「意志決定」、「ストレス・マネージメント」、「目標設定」の5つのスキルを児童・生徒に身につけさせ、それを発揮できる能力を増進させることが今日の学校健康教育における主要課題になっている(Cross, 1996)。

健康教育が一貫して目標としてきたことは、人々が健康の維持・増進にふさわしい行動をとるようにさせることである。そして、その根拠にあるのは、健康に関する正しい知識や情報の提供が健康の維持・増進に望ましい方向に態度を変容させ、そのことが健康の維持・増進に向けて行動を変容させるという態度変容・行動変容モデルである。しかし、人間の行動はそう単純ではない。健康に関する正しい知識をもっていたとしても、必ずしも健康の維持・増進にとって望ましい態度が形成されるわけではないし、悪習を捨てて健康的な生活行動をとるようになるわけでもない。

こうした問題に関しては既に別稿で詳述したことがあるので(小田, 1978)、ここではこれ以上触れないが、正しい知識や情報 態度変容 行動変容という態度・行動変容モデルが意味がないということではない。人間は、正しい知識や情報がないままに誤った判断や行動をしていることが少なくないし、正しい知識や情報を得ることによってそれらが是正されることも多い。したがって、望ましい方向へ行動を変容させる基本的戦略は正しい知識や情報の提供であることは疑い得ないが、現実には、行動変容に至る一連の過程に様々な攪乱・阻害要素が介在してくるということである。5つのライフスキルを基本的構成要素とするK Y B 健康教育は、そうした攪乱・阻害要素を排除するためのスキルを育てる教育と見なすことができよう。

ライフスキル教育は、途上国の社会発展(Social Development)対策においても重要視されているが、その一例として、Human sciences Research Council(HSRC, 1996)の活動をあげることができる。HSRCは、南アフリカ社会の発展のために様々な領域に関する人間科学研究を推進するために設置された機関であり、ライフスキルに関する研究部門も置かれている。そこでは、ライフスキル教育(Life Skills Education)の目的を「生徒の生活の質(quality of life)を改善すること」におき、教育機関に対して新しい教育環境を創造するための援助事業を行っている。その内容は、退学者数を減少させ、出席率や学業の達成度を高め、薬物やアルコール中毒の発生を減少させ、地域により影響を与えることができるように教育と学習の質を改善する教育プログラムを実施することであり、そのことを通じて、生徒の勉学への意欲を高め、そこで学ぶことが良き将来に通じるようにすることである。

教育プログラムの中には、より低学年の子どもを対象にした成長のためのスキル(Skills for Growing)教育もある。このプログラムには、両親、教師、コミュニティのリーダーが参加し、大切な人生を市民として生きるために、「自己修養(self- discipline)」、「責任

(responsibility)」、「的確な判断(good judgement)」、「他人と仲良くする(getting along with others)こと」の4点を子どもたちに教えている。このプログラムの基本的なねらいは、家庭、学校、地域社会が一体となって、子どものより良い成長のためのサポート・システムを発展させることである。その前提になっている考え方は、子どもは多様な場面で多様な方法でライフスキルを学ぶということであり、そうしたサポート・システムにおいて基本的に重要な役割を果たすのは両親と家族である、ということである。

HSRCでは、ライフスキル教育を効果的に進めるために、学校にはカリキュラム・マニュアルやレッスン・マニュアルが用意され、生徒には活動用のワークブックが渡され、家庭には問題への対処と平和的解決の方法を記したパンフレットが配布されている。そして、学んだスキルを応用するためのプロジェクトも用意されている。HSRC(1996)によれば、最近の研究では、そうしたライフスキル教育によって、教室内外での破壊的行動や暴力行為が減少したことが報告されている。

青少年のライフスキル教育に関しては、民間団体等のプログラムがインターネット上に少なからず紹介されているが、そのいくつかを以下に摘記しておく。なお、括弧内は筆者の注記である)。

<http://homepages.tcp.co.uk/~aggh/SLuRP/ChrSkills.html> では、次のような項目をあげている。

- 1.Strength-----Howstrongyouare(強さ：どれくらい強いのか)
- 2.Agility-----Itrepresentshowquick anddextrousyouare(機敏さ：どれくらい素早いのか)
- 3.Perception--Itrepresentshowobservantyou are(知覚：どれくらい観察力があるのか)
- 4.Craft-----skills for making things,repairingandbeing goodwithyourhands.howcreativeyouare(技能：ものをつくったり、修理したりする技術や手先の器用さ。どれくらい創造的なのか)
- 5.Charisma---skills for socialinteractionsandmanipulations,andforpersuadingpeopletodoyourbidding.How sociable you are(カリスマ：付き合いや操作の技術、人を服従させる技術。どれくらい社会的か、交際上手か)
- 6.Intellect-----howcleveryouare(知性：どれくらい賢いのか)
- 7.Mysticism--how religiousyou are(神秘主義：どれくらい信仰心が厚いか)
- 8.Life-----howtough youare(人生：どれくらいタフ(不屈)か)

<http://www.infowest.com/sites/w/washcoed/bloomingtonh/tbc.html> では、TBC(Tools for Building Character)と銘打って、以下のような項目を取り上げている。

1. positiveattitude.weseethingsin a positiveway.welaughandareplayfulwithouthurtingothers(積極的態度：物事を肯定的に見る。他人を傷つけることなしに笑い、楽しむ)
2. self-control.we controlourselves and thinkbefore we actorreact(自己統制：自分自身をコントロールして、行う前に考える)
- 3.integrity.wearehonestandactaccording towhatweknowisright(統合：正直で正しいと考えることに従って行動する)
4. initiative. we do things thatwesee needtobedonewithoutbeingasked(主導権：頼まれなくても、そうすることが必要だと思うことをする)
5. flexibility-wecanchangeourplanswhen we needto(柔軟性：必要ならば計画を変更できる)
- 6.determination.we makeourbesteffortandkeepgoingevenwhenfacedwithdifficulties(決定：困難に直面したときでさえ、最善を尽くし、あきらめないで続ける)
- 7.organization.weplan,arrange, and do things inanorderlyway(組織化：計画し、調整し、普通のやり方で行う)
- 8.common sense.wethinkthings throughinsolving difficultsituationandeverydayproblems(常識：困難な状況と日常的問題の解決を通じて考える)

9. responsibility. we do what is expected of us (責任制：期待されていることをする)
10. patience. we wait calmly for things or other people (忍耐：静かに待つ)
11. friendship. we make and keep friends through trust and kindness (友情：信頼と親切を通じて友人をつくり、友人関係を続ける)
12. curiosity. we desire to learn and know about our world (興味：我々を取り巻く世界について学び、知りたい)
13. cooperation. we work with others to meet our goals (共同：我々の目的を達成するためにともに働く)
14. caring. the feelings of others are important to us (世話：他人の感情を考慮することは大事である)

<http://www.he.net/~image/nwm/motivate/011596.html> では、次のような項目があげられている。

1. integrity.: to act according to your sense of what's right and wrong (統合：正邪の感覚に従って行動する)
2. initiative: to do something because it needs to be done (主導性：必要だからする)
3. flexibility: to be willing to alter plans when necessary (柔軟性：必要ならば喜んで計画を変更する)
4. perseverance: to keep at it (忍耐：継続してやる)
5. organization: to plan, arrange, and implement in an orderly way; to keep things orderly and ready to use (組織化：いつもの通りに計画し、調整し、実行する)
6. sense of humor: to laugh and be playful without harming others (ユーモア感覚：他人を傷つけることなく笑い、楽しむ)
7. effort: to do your best (努力：最善を尽くす)
8. common sense: to use good judgement (常識：良い判断を用いる)
9. problem solving: to create solutions to difficult situations and everyday problems (問題解決：困難な状況や日常的問題の解決策を生み出す)
10. responsibility: to respond when appropriate; to be accountable for your actions (責任性：時宜に応じて対応し、自分の行動に責任を持つ)
11. patience: to wait calmly for someone or something (忍耐：人や物事の到来を静かに待つ)
12. friendship: to make and keep a friend through mutual trust and caring (友情：相互の信頼と心遣いで友人をつくり友人関係を持続する)
13. curiosity: a desire to investigate and understand your world (興味：世界を探求し、理解したい)
14. cooperation: to work together toward a common goal (共同：共通の目的に向かって働く)
15. caring: to feel and show concern for others (世話：他人のために感じ、関心を示す)
16. courage: the ability to persevere and withstand danger, difficulty, or fear (勇気：我慢する能力や危険や困難、恐怖にうち勝つ)

ライフスキル教育は、児童・生徒を対象にするだけでなく、成人を対象とした教育プログラムの中にも導入されている。たとえば、カナダにある Coast Isle Learning Centre (1996)の活動はその一例である。この機関は通常の学校ではなく、カナダのナナイモ(Nanaimo)と中央ヴァンクーバー島地域に住む成人に教育の機会を提供して学歴を向上させ、新しい技術を取得させるための機関である。そこでは、ライフスキル教育の目的を、そこで学んだ者が様々な生活領域において秀でることができるようにすることに置き、「対人関係を発展させるスキル」、「しっかりした自己イメージを発展させるスキル」、「働く場所が変わっても仕事が続けられるために必要な職業技術を発展させるスキル」の3つのスキルを教えている。

以上、ライフスキル研究とライフスキル教育の一端をみてきたが、そこでいうライフスキルは、物を作ったり機器を操作したりする技術や技能とは異なる心理社会的(psychosocial)な対処能力・手腕を指していることがわかる。しかし、日常語的というか、もう少し一般的に使われる場合は、技術・技能をも含めてライフスキルという言葉が使われている。

例えば、中学生に数学を実際の生活に応用することをコンピュータで学ばせるソフト・ウェアにはMathematics LifeSkillsという商品名がつけられている(Computer Age Education, Inc, 1996)。これは、実用数学や自立生活に必要な金銭管理のスキル、銀行を上手に利用するためのスキル、賢明な消費者になるためのスキルなど、例えば、自分の収入の計算方法、請求書の扱い方、クレジットカードの使い方、税金の計算方法、割引価格の計算方法などをシミュレーションで学ぶことができる学習教材として開発されたものである。この種の“ライフスキル商品”は少なくない(例えば、Life on the Net, 1996; Global Life Skills Inc, 1996; LIFECRAFT, 1996; The Life Skills CD, 1996; New LifeSkills Center, 1996)。それらは、上述のライフスキル研究にみられるような心理社会的能力に加えて、職業上および日常生活上の種々の技術を含めてライフスキルあるいはそれと類似した言葉を使っていることが多い。

実際の生活では、ちょっとした知識やこまごまとした技術の有無でさえ個人・家族の生活スタイルや課題解決能力を左右することがあろう。また、心理社会的な対処能力があったとしても、それを発揮して課題を解決するためには、それに必要な技術が必要になるし、その技術を用いれば心理社会的対処能力を一層よく発揮できることになる。そして、そうした技術が心理社会的対処能力をさらに高めることに通じることにもなる。このように考えると、ライフスキルは、技術的なライフスキルと心理社会的なライフスキルとに大別される2つの相互関連的な要素からなる生活能力としてとらえておくことができよう。

2. 高齢期への適応課題とライフスキル

(1) 高齢期の社会的適応

サクセスフル・エイジングは高齢期の生活への良好な適応過程・状態(successful adaptation to aging / late life adjustment)でもある。WHO精神保健部が説明するように、ライフスキルは心理・社会的変化に対する適応能力を高める上で重要とされるが、良好な適応状態とはどういう状態かといえ、かつてバージェス(Burgess, 1950)が論じたように、その人自身の必要や欲求を満足させると同時に社会の期待や要求にも応えていることであり、適応の失敗は、新しい状況に適応するように態度や行動を変化させることができない、あるいはしようしないことである。必要や欲求が充足されるということは満足感や幸福感を味わうことであり、社会の期待や要求に応えているということは、社会的役割や責任を果たし、社会的に統合されていることである。良好な適応とは、言い換えれば、満足感・幸福感という主観的基準と社会的役割や責任の遂行という客観的基準をともに満たすことである。こうした状態を一般に社会的に適応しているという。

社会的適応の失敗=社会的不適応とは、したがって、必要や欲求が充足されずに満足感・幸福感を維持できなかつたり、社会的に期待されている役割や責任を十全に遂行しない、あるいは放棄することであり、その集団(社会)の規範や行動様式から逸脱した行動を行うことである。不適応行動に関しては様々な観点からの多くの研究があり、児童・生徒の不適応行動の例としては既にいくつか触れたが、高齢者の不適応形態として、Archly(1988)は、孤立、アルコール中毒、薬物中毒、自殺をあげている。

高齢期一般の心理社会的適応課題に関しては、エリクソン(Erikson, 1959)のいう自我の

統合(ego integrity)をはじめ多くの議論があるが、今日の高齢者に求められている社会的適応課題は何であろうか。かつてバージェス(Burgess, 1960)は、高齢者の社会的役割に関して次のようなことを述べた。退職した男とその妻は、役割なき役割のなかに閉じこめられている。彼らは果たすべき重要な役割を持たない。役割なき役割は、退職とともに高齢者に押しつけられ、多かれ少なかれ、彼はそれを受け入れ、あるいはあきらめてそれに服従してきた。成人に期待される役割で最も重要なものは職業的役割の遂行であるが、退職者には、もはやそうした社会的に重要な役割を遂行する期待は寄せられない。社会の裏面に撤退して役割なき役割を担うことが社会の期待や要望に応えることになるのである。

バージェスのいう高齢者の“役割なき役割”説は、コーギル(Cowgill and Holmes, 1972; Cowgill, 1979)の“産業社会における高齢者の社会的地位の低下説”とともに現代社会における高齢者の置かれている立場を的確に説明する学説として知られているが、アチリーは、バージェスの論点を批判して次のように言う(Atchley, 1976)。退職者は、「退職後も、それ以前と同じタイプの人間であることを周囲の者から期待されている。こうした行動の継続性への期待こそ、退職者に望まれる一連の期待のなかで中心的なものである。さらに、退職者は自分自身の生活をやりくりする責任をとるべきだという期待」に応えなければならない。要するに、役割が失われたのではなくて、役割が大きく変わったということである。

退職者あるいは高齢者が期待される役割は、その時代あるいはその社会の社会的・文化的特質に規定される。バージェスの主張の背景には1950-60年代の西洋社会の社会規範認識がある。アチリーは、役割とは文化によって伝達された一般的規範であり、それによって社会的地位につながるの権利義務が規定されているととらえ、その義務を果たすことが役割期待を遂行することであるという。そして、退職者という社会的地位に付随する義務すなわち退職者の役割は、職業的役割の遂行以外の多くの生活分野で、家族にも地域社会にも頼らずに自分で自分のことを処していくことであり、そのことは、バージェスが言うような役割なき役割ではないというのである。

ライリー(Riley, 1989)は、アメリカで1986年に70歳定年制を唱った法律が制定されたことを例にとって、今日では高齢者に対する役割期待が大きく変化しており、受動志向から能動志向へ、離脱志向から自己統制志向へとといったように心理学的老化の支配パターンも変化していると指摘している。離脱志向とは、高齢者自身が社会(の他の成員)との様々な関係から離れていこうとすることであるが、そうした離脱は、バージェスの“役割なき役割”説がいうように、他方では社会からの要請でもある。

周知のように、高齢者と社会との間に生じるそうした相互離脱は高齢期において避けることのできない過程であり、それは、身体的、心理学的活動能力が低下する高齢期においては良好な適応過程である、というのが、離脱理論(disengagement theory)の説くところである。しかし、今日では、高齢者は、バージェスのいうような“役割なき役割”を担うことは期待されていない。身体的にも、経済的にも、心理学的にも、社会的にも活動的であり、自立・自助的であることが奨励されている時代である。そうした社会的要請に応えることが今日の高齢者に要請されている社会的適応課題であり、それを可能にするライフスキルを身につけることが求められているのである。そして、そうした離脱は、職業を軸とした義務的社会関係から解放され、より主意的関係の中で自己の欲求を充足する機会を提

供することになる。

(2) 適応理論とライフスキル

高齢者の社会的適応に関する理論として著名なものは、上述の離脱理論の他に活動理論 (activity theory) や分化的離脱理論 (differential disengagement theory)、継続性理論 (continuity theory) などがある (小田, 1991)。簡単に触れておくと、退職にともなう自己喪失感を回避して、退職後の生活に良好に適応しうるかどうかは、職業に変わる新しい自己同一性の源泉となるような代替的活動を見いだすことができるかどうかにかかっている、というのが活動理論の説くところである。分化的離脱理論は、離脱理論の修正版ともいべきもので、離脱の程度は、その人のそれまでの社会的役割と地位に応じて異なるというものである。退職に伴い、それまで遂行してきた幾つかの役割やそれまでの社会関係を整理・統合したり、特定の役割を強化することによって他の役割の比重を低下させたりするなどして役割や地位を再編成することが分化的離脱である。継続性理論の概略は、高齢者は、退職後もそれまで身につけてきた習慣や選好を可能な限り維持しようとする傾向があり、退職以前の生活と似通った老後生活を送りたがるというものである。

継続性理論から示唆されることは、青年時代、中年時代には皆それぞれが、それなりに個性的な生き方をしてきたのだから、高齢期になったからといって、皆が一斉に青年・中年時代の生き方から決別して高齢者全員に共通するような生き方ができるわけではない、ということである。老後生活は、それ以前の生活と切り放されて存在するわけではなく、高齢期になる前の生活の投影であるということである。したがって、在職中あるいは高齢期以前からの目標や趣味、活動、生活習慣を退職後あるいは高齢期においても変えないですれば、老後生活への適応も容易であろう。逆に、仕事優先あるいは仕事上の業績を上げること以外に目標をもっていなかった場合には、退職後の老後生活に適応するためには、目標の組み替えや新たな目標の設定、生活習慣の変更が余儀なくされることになる。

活動理論に従えば、それを自分の“仕事”と見なすことができるような代替的活動を見いだすのに必要な、そしてそれができるライフスキルが、継続性理論に従えば、退職(高齢期)以前の生活に似通った生活を送るためのライフスキルが、そして、目標の組み替えや新たな目標の設定、生活習慣の変更が必要とされる場合は、それを可能にするライフスキルが、高齢期への良好な適応を実現するためのライフスキルになるといえよう。

(3) 環境圧力への応答とライフスキル

良好な適応状態とは、ジョージ (George, 1980) の表現を借りてより一般的にいえば、環境からの要請に応えるという客観的基準と環境とのかかわりあいの中で満足感、幸福感を経験するという主観的基準とをともに満たしている状態である。環境からの要請とは、言い換えれば、環境が個人に加える圧力のことである。社会環境と住居や居住地の条件など物的・自然的環境 (physical environment) も含めた環境からの圧力と個人の能力に着目して高齢者の適応問題を論じたロートン (Lawton, 1989) は、環境圧への対応を環境従順型適応モデル (environmental docility model) と環境改変型適応モデル (environmental proactivity model) の二つのモデルで説明している。

環境従順型適応モデルにおける適応過程は次のようなものである。環境圧が徐々に上昇

あるいは下降する場合は刺激感が小さいから環境圧の変化に努力することなく適応することができ、不快感を覚えない。しかし、環境圧が能力を大幅に上回ったり、逆に下回ったりすればストレスを生じ、不適応行動と否定的感情をもたらすことになる。過剰圧は負担感を増大させ、自己の能力に疑問を抱いたり無力感を生じさせることになり、過小圧は剥奪感を引き起こして有用感や自尊心を失わせるからである。このモデルに従えば、最大の快適感(幸福感・満足感)はライフスキルが環境圧を若干上回っているときに得られる。達成感を味わうことができ、そのことによって自己を肯定的に評価することができるからである。このモデルにおいては、環境は所与のものとしてとらえ、それに適応する過程を問題にするから、環境圧の変化は、ライフスキルが低い人により大きな影響を与えることになる。

しかし、人間は、環境を所与のものとして、それに素直に従うだけではない。環境に働きかけて、それを改変するという能動的行為によって必要や欲求を満たそうとする。このとき、環境は、個人に圧力を加えるストレス源としてではなく、必要や欲求を充足するための資源の提供源となりうる。そして、環境圧の水準は、環境からの要請に対して当該個人が有する身体的、経済的、心理学的、社会的資源と機会によって規定される。これが環境改変型適応モデルの骨子である。身体的資源とは身体的活動能力であり、経済的資源とは収入や貯蓄であり、心理学的資源とは知的能力や自尊心、自己効力、ある種のパーソナリティなどであり、社会的資源とは、家族や親族、友人・知人との社会関係、各種の制度や政策である。そして、機会とは、圧力が生じる時期であり、かつまた諸資源を活用する時期やタイミングである。

このモデルに従えば、個人的資源の水準が低かったり機会を逃すと利用できる環境資源が少なくなり、個人のライフスキルが高くてタイミングが良ければ、必要や欲求の充足を図ろうとするときに利用できる環境資源の量が多くなる。ある環境の下において、それに対応することができたり、それを使いこなすことができる人とそうではない人とでは、環境は全く異質のものになる。客観的には同様の環境にみえても、そこにおける感情的・認知的・行動的な反応が人によって違うのは、そのためである。そして、ライフスキルが高いほど、満足感や幸福感を拡大するように、利用できる環境資源をうまく選んだり、増加させたり、気に入るように変えたりすることができるのである。

環境従順型適応モデルは、安全・機能維持・狭い経験といった保守性・受動性の側面から環境の圧力に対する高齢者の応答と満足感・幸福感を説明しようとするものである。このモデルにおける高齢者は、挑戦よりも安全を、変化よりも安定を求める。現有のライフスキル以内で処理できる課題以外には手を出さず、あえて挑戦的なことをしなければストレスは生じないから、それまでの幸福感・満足感の水準は維持され、不快感を覚えることもない。そして、環境圧が上昇したときには、それに対して能動的に対応することなく、自らの要求水準(aspiration level)を低下させることによって対処しようとする。そうしなければストレスが生じて不満感・不快感が高じるからである。

これに対して、環境改変型適応モデルは、挑戦・成長・広い経験といった革新性・能動性の側面から環境の圧力に対する高齢者の応答と満足感・幸福感を説明しようとするものである。このモデルにおける高齢者は、高いライフスキルをもって状況に挑戦し、幸福感・満足感を維持あるいは高めようとする。新奇性や情緒的豊かさを求め、新しく学ぶこと

によって更にライフスキルを高め、要求水準を維持あるいは上昇させながら欲求を充足しようとするのである。

いうまでもなく、高齢者の現実の適応過程は、環境従順型適応モデルと環境改変型適応モデルのいずれか一方で説明しつくされるものではないし、どちらのモデルで説明される適応過程のほうが望ましいか、という問題ではない。要求水準を引き下げるといっても限度があるし、要求水準を低下させないといっても、それが許されない場合もあろう。実際には、両方のモデルで説明されるような対応を状況に応じて講じているのである。そして、適応能力が高いということは、そのようなことができるライフスキルをもっているということになる。

3 . 高齢期における変化への適応方法とライフスキル

(1) 変化への適応方法

高齢期には、自分自身にも、置かれている状況や環境においても様々な変化が生じる。そして、その変化は一般に否定的な方向への変化であるが、多くの場合、突発的ではなくて徐々に進む変化であり、それらは予測可能な出来事である。したがって、そうした変化に対して多くの人はさほど深刻になることなく日常的な対応でことを処理しており、それなりの準備をしている。いうまでもなく、予期せぬ突然の変化や望まない出来事、重大な変化が生じた場合は、意識的な対応と必要な処理技術(coping skills)を動員して変化に対応しなければならない。

高齢期に生じる様々な変化に関してアチリー (Archly, 1988) は次のように述べている。「変化に適応するためには、第一に変化が生じたことを認めることである。そのことを認めないことは不適応反応であり、外的現実との内的調和を妨げ良好な適応を引き延ばすばかりではなく、現実に向かう能力に対する周囲の人々の尊敬を失い、最終的な適応をより困難にする。状況が変化していることを認識すれば、行動を新しい状況に適合するように変化させることによって適応することができる」。

老化に伴う変化への適応に関するこうした認識は古くからある。例えば、半世紀以上も前に、『一つの生活技術』というエッセイの中で「年をとる技術」を論じたモロウ (Maurois, 1939) は、「老年は自然な生理的過程であって、われわれはその不可避な展開を認容する」ことであり、老年の不幸に「打ち克つためには、それをまともに見る必要がある」と述べている。かれは、また、老年期を画する「蔭になった一線」を越えると「老年の不幸」が生じるが、「年をとる技術とは、かような不幸の数々と戦う技術である。そしてまた、かような不幸はどうあろうとも、一生の終わりを幸福な時期とする技術である」といい、「立派に年をとる方法」の一つは「老年を受け容れること」であり、「いちばん性のよくないのは、向こうから逃げていくものにへばりつくことである」と述べている。

いうまでもなく、老化を受け入れるといっても、もう年だからといって何事も年のせいにして全面撤退してしまうことではない。それは、老化に対する過馴化あるいは過適応であって、今日の高齢者に期待されることではないことは既に述べた。モロウは、「老年とは、白髪と顔の皺とかいうものよりもむしろ、もう立ち遅れだとか、勝負が済んだとか、

舞台がもう次の時代に移ったとかいう感情である。老年の真の不幸は、肉体の衰えではなくて、心が何物にも動かないことである。蔭になった一線を横切るに当って消え失せるものは、力よりはむしろ、行動の意欲である」といい、「何物にも動かないこの心に対して戦うことができる。また戦わねばならない」という。そして、「人間は文化と経験とによって、老年と戦う手段は知らなくとも、老年らしさとは戦う手段を知っている」として、装身具や化粧、服飾の効用をあげ、年寄りになりだしたのを阻むことはできないが、継続的な運動によって身体が老衰しないようにするのはかなりたやすいし、望ましいことであるといい、「七十歳の老人で、毎日のように、撃剣やテニス、水泳、拳闘をやる人は決して少なくない」と述べている。

化粧や毛染め、服飾、体型維持などは今日でも老人らしさを隠す方法としてふつうに行われていることであり、コロンビア大学出版の『50歳以降の生活百科』には顔や胸の美容整形手術によって容貌の衰えを隠す方法も紹介されている(Weiss and Subak- Sharpe, 1988)。また、今日では、運動・スポーツに親しんでいる高齢者は少なくない。モロウが生きたフランスは世界の中でも高齢化が早くから進んだ国であるが、半世紀以上も前に既に今日とよく似た状況がみられたということは、高齢期の適応課題の普遍的側面の一端を物語るものとも言えそうである。

ところで、アチリー(Archly, 1987; 1988)は、心理社会的適応の方法として、馴化(habituation)、折り合い(accommodation)、継続(continuity)、葛藤処理(conflict management)をあげ、次のように説明している。

馴化は、特別に注意を払うことなく学習することであり、無意識的レベルで起こるから、無数の変化を無視する方法でもある。老化に伴う変化を知らずしらずに受け入れて適応していく過程ともいえる。

折り合いとは、自分の行動を外的状況の要請に一致させようと決心し、変化させる内的過程である。この成否は、外的状況の正確な認識にかかっている。例えば、ある集団で従前の役割が果たせなくなった場合、そのことを自覚し、別の役割を果たすことによって集団の目的達成に寄与することができれば集団成員性を維持できる。

継続とは内的、外的圧力に対する反応である。内的継続は自己への固執であり、自分自身を弱い人間と見なしている人ほど、継続への内的動機が強い。外的継続とは、馴染んだ環境に住み続けることであり、生活スタイルや馴染みの人々との関係を維持しようとするのである。そして、また、それは、衣食住や交通といった日常的な必要に対処する能力を維持し、自分の役割を続けようとするのである。そして、継続への外的圧力は、多くの人々と関係を持っている人ほど大きい。

葛藤処理(conflict management)の具体的方法に関しては、利他主義(altruism)、ユーモア(humor)、昇華(sublimation)、予測(anticipation)、抑制(suppression)があげられている。

(2) 高齢期のライフスキルとライフスキル教育

サクセフル・エイジングの課題は、いつまでも若く年をとらないようにすることではない。うまく年をとることである。高齢期のライフスキルは、うまく年をとるためのスキルであり、よい老後を過ごすためのスキル(skills for good life in old age)である。それがどのようなものであるかを探るために、本稿では主として高齢期の適応に関するいくつかの

理論や学説についてみてきたが、高齢期に必要とされるライフスキルは、既に見た児童・生徒、成人向けのライフスキル教育やライフスキル商品で取りあげられていたライフスキルと大きく異なるものではない。ともに、社会の期待や要求に応えながらその人自身の必要や欲求を充足させ、逸脱的行動をすることなく社会的に統合されて生きてゆくためのスキルだからである。

しかし、あらためて指摘しておかなければならないことは、高齢期にまず第一に必要とされるライフスキルは、老化および老化に伴う変化と自分の置かれている状況を正しく知り、そのことを受け容れるスキルである。変化が生じたことを認めるということは、自己概念(self- concept)が修正を迫られたり動揺することであり、自尊心(self- esteem)に対する脅威に立ち向かうことでもある。自分が以前の自分ではなく、以前できたことが今はできなくなったことを正直に自分に言い聞かせることは容易なことではないが、以前とは違った生活の中で満足感・幸福感を味わうことができ、自尊心を維持できるように行動を変化させることが求められるのである。

誰でもが年をとる。そして、その程度は個人差が大きいとはいえ年齢を重ねるごとに身体的機能や容貌は確実に衰えていく。そのことを素直に受け入れて、自尊心を失うことなく、そして、悲観的にならずに老化に伴って生じる問題に楽観的な態度で対処しながら老後生活を送っていくことがサクセスフル・エイジングにつながるということである。

年をとったという感覚は、ある時期になると誰しもが覚えるものであるが、身体的変化は病気と混同されやすかったり、病気を伴うこともある。正常な老い(normal aging)の過程にあることを病気と思いこんで不安になったり、逆に、以前よりも活動能力が低下したことは老化のためであることを認めずに病気に原因を求めて老いを拒否し続けることは、老後生活によい結果をもたらさないことになる。変化や状況を正しく知ることは、それに対する的確な対処の方法を見つけだすことを可能にし、不安感や不適応行動の発生防止につながるであろう。例えば、高齢化社会に関する諸事実を正しく認識している人は、老後生活に対する不安感が低くて自信度が高く、総じて肯定的老後生活観をもっていることが明らかにされている(小田, 1966)。

ところで、以上のことに加えて、これまで述べてきたことの中から高齢期に必要とされるライフスキルを列挙すれば次の通りである。社会的期待や要求を知る役割認知のスキル、役割遂行のスキル、職業に代わって自分の仕事とみなすことができる代替的活動をみつけるスキル、生活習慣や選好を継続的に維持できるスキル、生活目標を組み替えたり新たに設定するスキル、環境資源を活用するスキル、環境を能動的に処理・改変するスキル、離脱のスキル、折り合いのスキル、葛藤処理のスキルなどである。葛藤処理のスキルに関しては、アチリーが例示したように、利他主義やユーモア、昇華、予測、抑制などを具体的な心理社会的スキルとしてあげることができるが、上で列挙したその他のスキルは、それ自体は一つの完結した固有のスキルというわけではない。それらは、それぞれの課題に対応させて表現したものであるから、それらスキルを支えるスキルあるいは下位スキルの統合体ともいうべきものである。

例えば、役割認知のスキルは、家族や社会の期待や要請を的確に判断し、自分のおかれている立場を明確に理解するスキルであるが、そのためには、家族と十分な意志疎通を図ることができるコミュニケーションのスキルや正確な社会的情報を入手することができる

スキルが必要となろう。そして、期待された役割を遂行するには、それを可能にする技術的スキルが必要になる。男性高齢者向けの料理教室が開催されて参加者が熱心に調理実習を行っているのは、高齢者夫婦のみの世帯や男性独居高齢者にとって、それが不可欠な技術的ライフスキルだからである。情報の入手に関しても、新聞やテレビに頼るだけではなく、図書館や公的機関の広報関係の窓口を利用したり、マルチ・メディア媒体を利用する技術的スキルがあれば、より広範で多様な判断材料を自分のものにできよう。

代替的活動をみつけるスキルや目標の組み替えのスキルに関していえば、本人が望む活動や目標を家族や関係する人々に了解してもらわなければならないときには、相手が納得し、協力してくれるように説得するスキルが必要になる。そして、その活動や目標 - それが入収入を伴うことであっても、趣味や娯楽であっても - を具体化するためには、それを可能にする技術的スキルが必要となろう。他のスキルについても同様のことが言える。そうした個別スキル間の関係構造や包摂関係、そして、そこにおける技術的スキルと心理社会的スキルの位置と関係等についての詳細な議論は他日あらためて行うことにしたい。

ところで、高齢期に必要なとされるライフスキルを高齢者はどのようにして身につけていくか、という問題がある。学校教育におけるライフスキル教育は、健康の維持・促進や青年時代の発達課題を解決するという当面の課題に対応するライフスキルであるとともに、生涯にわたって通用するライフスキルであることはいうまでもない。最近の中教審答申でいう「生きる力」の育成とは、本稿の主題からいえば、単に就学時あるいは卒業後へ向けた社会化としてではなくて、生涯にわたる社会的適応力を育てること、と言い換えることができよう。そして、エイジングを老化としてではなく、誕生から寿命が尽きるまでの一連の加齢過程であるとするならば、学校教育におけるライフスキル教育は、まさにサクセスフル・エイジングのためのライフスキルを身につけさせることであるといえる。

しかし、今日の高齢者および現在の中年層は、学校教育の中でライフスキル教育を受けた経験はない。家庭や地域、職場での経験を通じて身につけたライフスキルをもって課題に対処してきたのである。それが具体的にはどのようなものであり、本稿で取り上げた種々のライフスキルとどう違うかは今後あらためて議論しなければならないが、サクセスフル・エイジングにとって必要かつ有効であるとみなされるライフスキルは、高齢者がそれを自分のものとする機会を用意することが求められよう。企業で行われている退職準備プログラムはその一例であるが、今後は、高齢者向けのライフスキル教育の研究を通じてさらに充実した教育プログラムを作成していくことが必要となろう。

高齢者が抱える課題は、青少年のそれよりも個別性が強いといえる。そして、課題の変化が短期間に生ずることが多いことから、高齢者むけのライフスキル教育には何よりも即効性が求められる。将来に備えて、というわけにはいかないからである。加えて、それまで身につけてきたライフスキルに修正を迫ることや、新たなライフスキルを加えることは容易ではないであろう。これらが青少年向けのライフスキル教育と異なる点であり、高齢者向けのライフスキル教育を考える場合に留意しなければならないことである。

おわりに

ライフスキルは、とらえようによっては処世術や要領よく生きるための方便、生活の智

恵といえなくもない。たしかに、ライフスキルにはそうした要素が少なくない。しかし、ライフスキルは、単に環境を所与のものとして、それにひたすら順応するための世渡りの術ではない。批判的思考や自己主張、的確な判断がライフスキルとしてあげられていたように、また、環境変化をライフスキルの一つとして取り上げたように、ライフスキルは、個人にとっても社会にとっても、創造的で革新的な発展へ向けた工夫である。そうでなければ、ライフスキルは単なる精神訓話の言いかえにすぎなくなってしまうか、マートン(Merton, 1957)のいう儀礼主義、逃避主義といった適応様式を奨励・強化するだけ終わってしまうだろう。

いうまでもなく、サクセスフル・エイジングは高齢期におけるライフスキルの問題につきるわけではない。ライフスキルは、長い老化過程および老後生活に対する個人の適応力を高めるが、それが効果を発揮するためには、そうした個人的対応を社会的に支える条件が整備・充実される必要がある。高齢期に生じる様々な課題は、個人の努力や創意工夫だけで解決するのが難しいものも少なくない。ライフスキルの意義を強調するあまり、高齢期の不適応行動や課題の未処理をライフスキルの低さや個人の努力不足だけに帰する愚は慎まなければならないであろう。

本稿では、サクセスフル・エイジングに関する実証研究をライフスキルの観点から試みるための予備的作業として若干の概念的考察を行った。残した課題は多く、取り上げることができなかった先行研究は多い。ライフ・イベントとライフスキルの問題や介護問題とライフスキル、居住形態とライフスキルなど、高齢者が直面している具体的課題とライフスキルの問題などに関しても、稿をあらためて論ずることにしたい。

文 献

- Atchley, R.C. (1976). *Sociology of Retirement* (牧野拓司訳『退職の社会学』東洋経済新報社、1979年)。
Atchley, R.C. (1987). *Aging: Continuity and Change*, Belmont, California, Wadsworth.
Atchley, R.C. (1988). *Social Forces and Aging* (Fifth edition), Wadsworth.
Burgess, E.W. (1950). Personal and Social Adjustment in Old Age. In M. Derbered., *The Aged and Society*, Industrial Relations Research Association (reprinted edition, 1980, Arno Press).
Burgess, E.W. (1960). *Aging in Western societies*, University of Chicago Press.
Coast Isle Learning Center (1996). <http://island.net/~jpascoe/>
Computer Age Education, Inc. (1996). <http://sjvm.stjohns.edu/lenbc/software/soft/m/softm013.html>
Cowgill, D.O. and L.D. Holmes (1972). *Aging and Modernization*, Appleton-Century-Crofts.
Cowgill, D.O. (1979). Aging and Modernization: A Revision of the Theory. In J. Hendricks and C.D. Hendricks eds., *Dimension of Aging*, Winthrop.
Cross, Donna (1996). Skill Building in School Health Education: A Solid Foundation or House of Cards? 『学校保健研究』第38巻1号。
Erikson, E.H. (1959). *Identity and the Life Cycle*, International University Press (小此木啓吾訳編『自我同一性』誠信書房、1975年)。
George, L.K. (1980). *Role Transition in Later Life*, Brooks/Cole.
Global Life Skills Inc. (1996). <http://www.globallifeskills.com/>
HSRC (1996). <http://www.hsra.ac.za/>
川畑徹朗 (1996). 「21世紀の健康教育とライフスキル」『人間科学研究』3巻2号、34-40頁、神戸大学発達科学部人間科学研究センター。
Lawton, P.M. (1989). Behavior- Relevant Ecological Factors. In K.W. Schaie and C. Schooler eds., *Social Structure and Aging: Psychological Processes*, Lawrence Erlbaum Associates.
LIFECRAFT (1996). <http://www1.uas1.com/~craftman/plantoc.html>
Life on the Net (1996). <http://nspace.cts.com/>

- Maurois, André (1939). *Un Art de Vivre* (内藤濯 『私の生活技術』新潮社、1952年)。
- Merton, R.K. (1957). *Social Theory and Social Structure: Toward the Codification of Theory and Research*, The Free Press. (森東吾ほか訳 『社会理論と社会構造』みすず書房、1961年)
- 三宅征夫 (1996). 公開シンポジウムでの発言(『人間科学研究』3巻2号、58-59頁、神戸大学発達科学部人間科学研究センター)。
- New LifeSkills Center (1996). <http://www.commerce.net/directories/companies/mminority.business/cap1636.html>
- 野上智行 (1996a). 「人間にとって最適環境とは」『人間科学研究』3巻2号の巻頭言、神戸大学発達科学部人間科学研究センター。
- 野上智行 (1996b). 「開会の挨拶」『人間科学研究』3巻2号、1-3頁、神戸大学発達科学部人間科学研究センター。
- 小田利勝 (1978). 「地域健康教育」保健・医療社会学研究会編 『保健・医療社会学の展開』垣内出版。
- 小田利勝 (1990). 「うまく年をとる」『いのち輝く』第5号、徳島県高齢者総合相談センター。
- 小田利勝 (1991). 「高齢者の適応に関する概念的考察」『徳島大学社会科学研究』第4号。
- 小田利勝 (1992). 「高齢者の老年観の測定尺度と分析モデル」『徳島大学社会科学研究』第5号。
- 小田利勝 (1993). 「サクセスフル・エイジングに関する概念的考察」『徳島大学社会科学研究』第6号。
- 小田利勝 (1995). 「高齢化」井上實・矢島正見編著 『生活問題の社会学』学文社。
- 小田利勝 (1966). 「高齢化社会に関する知識水準と老後生活観」『徳島大学社会科学研究』第9号。
- Riley, M.H. (1989). Why This Book, K.W. Schaie and C. Schooler eds., *Social Structure and Aging: Psychological Process*, Lawrence Erlbaum Associates.
- The LifeSkills CD (1996). <http://www.discovery.com/EPG/CD-ROM/G2197.html>
- Weiss, Robert J and Genell J. Subak- Sharpe (1988). *The Columbia University School of Public Health: Complete Guide to Health and Well-Being After 50*, Times Books.
- WHO (1994). *Life Skills Education in Schools* (川畑徹朗・西岡伸紀・高石昌弘・石川哲也監訳 『WHO ライフスキル教育プログラム』大修館書店、1997)。

付記

本稿を著すに当たって、インターネット上に公開されているホームページから入手した資料もいくつか参照した。上記文献中の「<http://...>」表示は、それらの所在を示すURL (Uniform Resource Locator) であり、()内に記したのは参照した年次である。ホームページは頻りに改訂されることが多く、時にはURLの変更もある。したがって、本稿の文献リストに示された資料と全く同じものを全く同じURLから後に他の人が入手しうるとは限らない。インターネット上から入手できる資料は、一般的に、印刷公刊されるものより情報の鮮度や入手の容易さで優るといえるが、以上のような問題も残されている。参照資料として文献リスト等に掲載する方法等について今後検討しなければならない課題であると思われる。もっとも、同学あるいは後学の者への情報提供や読書案内としてではなくて知的所有権の尊重という立場から参照文献・資料等が明示される場合には、パーソナル・コミュニケーションから得た情報も印刷公刊されたものと同列に扱われるべきであるから、インターネット等のネットワーク上から入手した情報についても、その情報を入手した時点での出所が明記されるべきであり、また、それでよいともいえる。

第4章 サード・エイジの概念とサクセスフル・エイジング

はじめに

誕生から死に至る一生の過程 = ライフコース (life course: 人生行路) の中で、人間はその後の人生の方向や担うべき役割、生き方の転機となるさまざまなライフイベント (life event: 人生上の出来事) を幾度となく経験する。それらは、自ら選択あるいはすすんで獲得したものであることもあれば外から与えられたものであることもある。また、予期したものであることもあれば、偶然であったり不意に襲ってきたものであることもある。さらに、また、好ましいあるいは歓迎すべきものであることもあれば、嫌悪すべきあるいは不本意なものであることもある。退職 (retirement) も、そうした幾多のライフイベントの一つであるが、その性格を上で述べたことに照らしあわせるとどのようなものになるであろうか。

現代産業社会における退職の典型的な形態は定年退職 (mandatory retirement) である。それは、本人の意志・意図に関わらず、所属する組織の規則あるいはその国 (法治団体) の法律によって定められた年齢に達したときに強制的に退職させられるという意味で外から与えられるライフイベントである。そして、その年齢に達したときに退職することが自他ともあらかじめ了解されているという意味で予期的ライフイベントである。しかし、それが本人にとって好ましいあるいは歓迎すべきものであるか、嫌悪すべきあるいは不本意なものであるかは一概にはいえない。働く意欲や気力、能力もあるのに定年だから仕方がないと不本意ながら退職する人もいれば、定年を待ち望んでいて退職を肯定的に受け入れる人もいよう。中途退職は、定年退職に比べて、その性格は一層複雑である。本人の意志による場合もあれば人員整理や倒産という外的要因によって不本意ながら途中で退職せざるを得ない場合もあろう。また、当初から長く勤務するつもりはなく、ある時期が来たら退職することをあらかじめ決めていた場合もあろう⁽¹⁾。

いま、ここでは、退職形態や退職行動の詳細について議論することはしないが、実際の退職の形態は就業形態と切り離して考えることはできない。一般に、退職とりわけ定年退職は、いわゆる一生の仕事職業 (career job) あるいは長期に携わっていた仕事職業 (long-term job) から引退した後には再び職に就くことなく老後生活にはいることを指して使われることが多い。しかし、現実の就業・退職形態は多様である⁽²⁾。定年後も一度ならず数度にわたって再就職する者もいれば、青壮年期に複数回の転職を経験する者もいる。再就職にしる転職にしる、休職期間をおかずに継続的に就業する場合もあれば、退職と次の就業の間に長期にしる短期にしる休職期間をはさんで断続的に就業する場合もある。また、転職といっても、仕事 (職種) は以前と同様か否か、雇用労働から自営業へか、あるいはその逆か、雇用労働の場合には正規から臨時へか、あるいはその逆かといったように、多様な就業・退職形態が存在する。このように、現実の就業・退職形態が多様であること

はいま始まったこととはいえませんが、近年、就業・退職形態の多様性にあらためて関心が寄せられるようになってきており(Henretta, 1997)、退職概念の再検討が行われるようになってきた(Walker ed., 1996)。

サクセスフル・エイジング(successful aging)や老後生活に関するこれまでの研究の多くは、就業・退職形態についてはあまり注意を払ってこなかったといつてよい。老後生活とは退職後の生活であり、退職は老後生活の始期を告げるライフイベントであることを暗黙の了解事項としていたともいえる。老後生活への適応理論として代表的な活動理論や離脱理論は、まさにそうした文脈においてのみ理解される。退職研究で今日では古典ともいえるアチリー(Atchley, 1976)の『退職の社会学』も、そして、また、その理論と枠組みを用いて行われた最近の退職研究でも(Gall et al., 1997)、就業・退職形態についてはほとんど考慮されていない。いうまでもなく、これまでに就業・退職形態(の多様性)に関する研究が行われてこなかったというわけではなく、それらに関する研究は枚挙に暇がない。社会老年学(Social Gerontology)における退職研究やサクセスフル・エイジングの研究に就業・退職形態に関する研究の成果を生かしてこなかったということである。

しかし、最近、就業・退職形態の多様性をエイジング研究に反映させる試みが幾つか現れてきている(Walker ed., 1996)。その鍵概念となっているのがサード・エイジ(the third age)である。本稿は、副題に示すように、サクセスフル・エイジングの問題を高年齢期におけるライフスキル(life skills)の観点から実証的に究明するための予備的作業として、理論的課題と研究の枠組みを検討することを目的としている。高年齢期におけるライフスキルに関しては以前に論じたことがある(小田ほか, 1997)。その後、引き続いて社会老年学関係の内外の主要な学術雑誌や単行の研究書にあたってみたが、高年齢期のライフスキル、あるいは老後生活と関連させてライフスキルを論じたものは、唯一の例外(Chiva, 1996)を除いて見いだすことができなかった。サード・エイジに関しても同様であり、社会老年学の領域では、著名な、あるいは版を重ねている研究書や教科書(たとえば、Atchley, 1994; Achenbaum, 1995; Kart, 1997; 折茂, 1992; Binstock and George, 1990)においても触れられていない。

従来のサクセスフル・エイジングの研究課題は、サクセスフル・エイジングの測定尺度の開発と、その要因や条件を明らかにすることに重点が置かれてきた(小田, 1991; 1993; 1995)。そして、その対象は主に60歳あるいは65歳以上の高齢者であった。しかし、数多くのサクセスフル・エイジングに関する研究で明らかにされてきたことは、サクセスフル・エイジングの主要な要因・条件は健康で経済的に困窮することなく好きな活動ができること、というきわめて常識的なものであった。そのことが無意味なことであったというわけではないが、不思議なことではあるが、縦断的(longitudinal)研究においてさえ、そうした要因や条件がいかにして形成されたか、あるいは形成する方法や手段が何であったかについては十分に検討されてこなかった。

サクセスフル・エイジングの課題は、いつまでも若く年をとらないようにすることではない。うまく年をとることであり、充実した高齢期を送ることである。健康で経済的に困窮することがなく好きな活動ができるということは、高齢期に関わらずどの年齢段階にも当てはまる望ましい生活条件である。それらがサクセスフル・エイジングの要因であったり条件とされてきたのは、高齢期には、他の年齢層・年齢段階に比べて、それらが失われ

やすかったり、維持されにくいからである。逆に言えば、高齢期においてもそうした条件を維持あるいは発展することができる人は、良好な外的条件に加えて、そうすることができるライフスキルを持っている、あるいは持つことができた人であると考えることができる。高齢期のライフスキル(life skills in later life)は、うまく年をとるためのライフスキル(life skills for successful aging)であり、よい老後を過ごすためのライフスキル(skills for good life in later life)であるが(小田ほか, 1997)、それらは、定年退職後になってからの問題ではない。

就業・退職形態の多様性を考えると、サクセスフル・エイジングの課題、そして高齢期のライフスキルの課題は、これまでのように60歳あるいは65歳以上の退職後の高齢者の課題としてではなく、それ以前の年齢段階からの課題であることが理解されよう。ライフスキルの観点からサクセスフル・エイジングの研究を試みている筆者がサード・エイジの概念に着目したのはそのためである。本稿では、退職および就業・退職形態、そしてサード・エイジに関する論議を検討しながらサード・エイジにおけるライフスキルとサクセスフル・エイジングに関する若干の考察を試みることにしたい。

1 . 退職と高齢者の社会的役割

(1)成人の職業役割と高齢者の「役割なき役割」

職業生活を送ること、言い換えれば、働いて収入を得るということは、産業化された社会における成人一般に期待される主要な社会的役割である⁽³⁾。それは、社会の生産活動の一翼を直接担い、自分および家族の経済生活を支え、家族の中で、また職場において次世代の担い手を育成することによって社会に貢献することである。成人は、そうした役割の遂行を通じて自分の居場所と自分は何者であるかを確認できるとともに、他者も彼/彼女をそのような存在として了解している。活動理論において、職業が自己同一性(identity)の主要な源泉とされ、退職後には職業に代わる自己同一性の源泉を見いだすことが老後生活の主要課題とされるのもそのためである。

退職は、こうした社会的役割を個人から剥奪して自己同一性の源泉を喪失させ、職業を軸に取り結ばれていたさまざまな社会関係の網の目から個人を離脱させる。活動理論や離脱理論、あるいは継続理論や分化的離脱理論として知られる退職者の社会的適応に関する諸理論は、それが説明しようとするところは異なるとはいえ(小田, 1991; 1993)、職業や退職に関するそうした理解の下に組み立てられている。

職業遂行という社会的役割の喪失を意味する退職には、かつて、「役割なき役割(roleless- role)」と一見して形容矛盾のような表現が与えられたことがある。バージェス(Burgess, 1960)は、「極端に言えば、退職した男とその妻は、役割なき役割の中に閉じこめられている。彼らは果たすべき重要な機能を持たない……。役割なき役割は、退職とともに高齢者に押しつけられ、多かれ少なかれ、彼はそれを受け入れ、あるいはあきらめてそれに服従してきたのである」と当時のアメリカにおける退職者の姿を説明している。

「役割なき役割」でいう前半部の役割とは、成人に期待される主要な社会的役割としての職業役割である。したがって、「役割なき」というのは職業役割を遂行していない状態

のことである。そして、後半部でいう役割は、もはや主要な社会的役割を遂行することは期待されていないことを認知して、それにながった行動をすることである。その様相は、あたかも野球の試合で選手が交代するときのようである。

交代する選手のそれまでのポジション(守備位置や打順)は他の者に譲られ、かれはベンチにさがることになる。そのポジションに与えられた役割を期待通りに遂行した後のお役御免としての交代か、それとも期待に応えられなかったための交代かにかかわらず、あるいは交代が本人の希望か否かに関わらず、ひとたびベンチにさがった選手には、その試合においてはもはやプレーに直接関係する役割は何ら期待されることはない。そこでは、その時点でかれよりもそのポジションによりふさわしいと判断された選手と交代し、プレーに参加せずに続行されるプレーをベンチで見守ることが、その選手の役割になる。たとえ、交代させられた本人がプレーを続けたいと希望していたり、交代する選手よりも自分の方がその試合でチームに貢献できると考えていたとしてもである。

「役割なき役割」という形容矛盾のような表現が退職に与えられるのは、社会を地位-役割(status- role)の体系としてとらえているからである。そこでは、成員は、必ず何らかの地位 - たとえば、親、子、男、女、教師、学生、医師、患者、就業者など - を占め、その地位に応じた役割を遂行している、あるいは遂行することが求められる⁽⁴⁾。地位 - 役割の体系としての社会においては、何らの地位も役割も持たない個人は論理的には存在しない。退職者というのも一つの社会的地位であり、その地位に付随した何らかの役割がなければならない。

一般に、各個人は複数の社会的地位を有しており、それぞれの地位に対応した複数の役割を同時にか、あるいは別個に遂行しているし、またそうすることが求められる。このとき、どの地位に付随する役割が当該個人にとって、また所属する社会にとって最も重要とされるかが、役割遂行あるいは役割期待の優先順位を決めることになる。そして、それは、その社会の一般的規範によって規定されている。退職者は、成人というカテゴリに包含される地位であり、成人という地位を保持してはいるが、職業遂行という成人に期待される主要な社会的役割を担うことは期待されることがない。しかし、退職者というのがその社会における社会的地位の一つであるかぎり、それに付随した役割がないということは論理的に矛盾する。役割のない地位というのはありえないからである。「役割なき役割」という興味をひく表現が用いられたのも、役割がないということも一つの役割とみなさなければ、退職者は、その社会の一員とみなすことができなくなるからである。

「役割なき役割」論は、以上のように、地位 - 役割の体系として社会をとらえた場合の論理的な帰結であるが、そこには職業上の業績達成に高い価値をおく当時(1960年代)のアメリカ社会の一般的規範が色濃く反映されている。成人に期待される主要な社会的役割は、何よりもまず職業上の業績を達成することであり、そのために努力することである。マートン(Merton, 1957)がいうように、非難されるべきは、そうした文化的価値に即して努力をしようとしないうことである。こうした観点からいえば、退職者は、職業上の業績を達成しようにも、もはやそうした機会が奪われ、成人に期待される役割を果たそうと努力することすらできない立場に置かれることになる。

(2) 今日における高齢者の社会的役割

退職に関する以上のような伝統的(あるいは今日では既に古典的といってもよい)見方は今日では説得力を持たない。なぜならば、たとえ、バージェスがいうように「役割なき役割は、退職とともに高齢者に押しつけられ、多かれ少なかれ、彼はそれを受け入れ、あるいはあきらめてそれに服従してきた」とはいえ、そうしたことが許される社会的状況でなければ高齢者は「役割なき役割」を遂行することができないからである。高齢化が急速に進展している今日にあっては、高齢者の経済的扶養や介護に関わる財源問題および高齢者の生きがいや精神生活上の問題など社会は多くの課題を抱えている。今日の社会状況は、大量の非生産人口を余裕を持って扶養できるほどの経済発展が長期にわたって見込まれているわけではない。

こうした中で、高齢者に期待される役割は、社会に負担をかけないという意味での自立生活を送ることである。経済的には、生産活動への直接参加としての職業生活を継続することであり、そうでない場合には自己資金で生活を維持することである。そして、身体的あるいは精神的にも自立した生活ができるように努めることである。今日の退職者/高齢者は、もはや「役割なき役割」に押し込められてもいないし、そんなことに甘んじているわけにもいかないのである。このあたりのことについてはかつて触れたことがあるが(小田, 1990)、今日およびこれからの退職者や高齢者に期待される社会的役割は、具体的にはその社会(国)の高齢化政策にあらわれてくる。

たとえば、アメリカにおいては、1995年の「高齢化に関するホワイトハウス会議」で採択された21世紀へ向けた高齢化政策の実行戦略の一つに、高齢者の労働能力の活用があげられている(White House, 1996)。日本でも、高年齢者雇用開発協会が1996年度から実施している「総合的雇用環境整備推進事業(ネクスト65推進事業)」の中で高齢者雇用の促進が図られてきたが、来年度(平成10年4月)から60歳定年が義務化されるとともに、65歳までの継続雇用と65歳定年制へ向けた「65歳現役社会」が労働省の重点施策の柱の一つになっている(労働省, 1997)。また、そこでは、アクティブ・エイジングの観点に立った高齢者雇用対策の総合的な推進」施策として、「65歳現役社会の実現に向けた国民的コンセンサスの形成」とシルバー人材センター事業の発展・拡充を柱とする「多様な形態による雇用・就業の促進」がうたわれている。高齢者に対するそうした職業役割への期待は、「役割なき役割」になぞらえれば、「役割継続の役割(role-continuity role)」あるいは「役割復活の役割(role-revival role)」とでも表現できるかもしれない⁽⁵⁾。

2 . 退職制度と退職形態の多様性

(1)退職制度の変遷

高齢者処遇の習俗を食老俗、殺老俗、棄老俗、退隠俗と推移してきたと社会進化論的な仮説を提示した穂積陳重が、その著『隠居制度』の中で、退隠俗の出現を促した外因=客観的要因として生活資料の充実をあげたように、労働能力がなお残されているにもかかわらず労働からの引退を可能とする第一の条件は、そうした人々を扶養し得るだけの余剰生産物を産出し得るだけの生産能力をその社会が有していることである(小田, 1990)。人類

史の上からは、余剰生産物の産出を可能にしたのは生産技術が急速に向上した農耕社会以降のことであるが、一定年齢に達した労働者を定年退職という形態での強制的退職が社会制度として定着するのは、社会全般の生産活動能力がそれ以前とは比較にならないほどに上昇するようになった産業社会の成立以降とりわけ20世紀になってからのことであり、年金制度の導入がそれに伴っていた。

産業化が最も早くに進んだイギリスで年金制度が国の政策として導入されたのは1908年のことであるが、Walker(1996)によれば、20世紀前半までは、退職者は、年金受給資格があるからといって労働市場とは無縁の存在となったわけではなかった。とくに労働者階級の高齢者はそうであり、手軽な予備の労働力として扱われていた。好況期の労働力不足の時は、退職して年金受給者となることの正当性や権利が疑問視されて労働の継続や労働への復帰が求められ、不景気の際は、他の年齢層の労働者よりも容易かつ迅速に職を奪われ労働市場から追い払われるという不安定な立場に置かれていた。とくに、1930年代の大量失業時代にはそうした傾向が著しかった。ところが、1950年代になると状況が変わった。高齢者は、生産活動に従事することがなければ、社会の経済を脅かす‘passenger’とみなされるようになった⁽⁶⁾。

高齢化が進展して年金制度をはじめとする高齢者のための施策に多額の公的財源が費やされるようになったからである。しかし、1980年代以降とくに80年代半ばの不況を契機に早期退職が先進産業国に共通の傾向になり、高齢者に対する労働力としての期待は薄れることになった。日本でも「肩たたき」という表現で勧奨退職が勧められたが、早期退職に拍車をかけたのは、生産技術や経営戦略の絶え間ない更新であった。早期退職は、不況期に青壮年層の就業の機会を確保・拡大し、経営体の生産性と効率性の向上に直接的あるいは間接的に寄与することになったのである。

経済の国際化が進展するにしたがって、経営体は、競争力を維持・増強するために生産性と効率性を一層向上させなければならなくなった。「リストラ」(re-structuring:事業の再構築)が流行語になったように、経営体では大幅な人員削減や機構改革、事業部門の再編成が実行され、経営の「スリム化」が進められた。定年が近い者への早期退職勧奨だけでなく、壮年期の中間管理職層や青年層には希望退職が募られた。こうした中で、生産部門であれ事務部門であれ、半熟練・未熟練労働の比重は大きく低下するとともに、経験に基づいた伝統的な技術や方法は急速に旧弊化していった。その結果、経営体の規模に関わらず、高齢労働者の職場や就業機会は急速に失われていった。かといって、退職高齢者は、年金受給資格者として退職後の経済生活が保証されたわけではなかった。

(2) 高齢化の進展と就業・退職形態の多様化

高齢化の進展による社会的負担の上昇によって、高齢者には自立・自助が更に強く求められるようになり、高齢者の側においても、かつてよりも健康で身体的活動能力の高い高齢者が多くなったことから就業意欲の高まりがみられるようになった。しかし、高齢労働者を大量に雇用しなければ労働力不足を補うことができないというだけの経済環境にはなく、たとえ経済状況が好転したとしても、技術革新や経営刷新の促進を図ろうとする経営体にとっては、高齢労働力に期待するところは何もなかった。自立・自助が求められ、しかも就労意欲があったとしても、退職高齢者があらためて職について収入を得るという機

会はほとんどなくなったということである。

今日、経済状況が低迷した中で予測を上回る勢いで高齢化が進んでおり、年金財源は縮小し続け、高齢化対策にかかわる公的支出は増大している。そして、技術革新と早期退職を押し進めてきた経営体では、今度は若年労働力の確保難と経験を積んだ熟練労働者の減少という問題に直面するようになった。

こうした社会状況の変化は、日本の場合でいえば、前者に関しては、既に触れた「65歳現役社会」といった雇用延長政策を登場させることになった。また、つい最近のことであるが、経済企画庁の経済研究所は、高齢者の能力活用のために厚生年金制度と定年退職制度の見直しを提言した報告書をまとめた⁽⁷⁾。後者に関しては、松下電器産業が、生産現場の熟練社員に限って65歳定年制を採用する準備を進めていることが報道された⁽⁸⁾。また、日産自動車は、定年退職した技術者と嘱託契約を結んで系列ディーラーにコンサルタントとして派遣する制度を新設することが報じられている⁽⁹⁾。

しかし、以上のことは、高齢者の雇用の場が急速に拡大しているということではない。国際競争力の激化と低迷する経済の中で、経営体は、人件費削減を中心とするコスト削減を更に進め、一層の経営効率化を図らなければ生き残ることが難しい時代である。アメリカの大手コンピュータ会社IBMは、数千人規模の希望退職者を募集し、大規模なリストラに取り組み始めている⁽¹⁰⁾。IBMのリストラは、90年代初期の経営不振や事業再建のために行った人員削減とは性格を異にしている。大型計算機メーカーとして世界市場を席卷していたIBMは、コンピュータのダウンサイジング(小型化)に遅れをとり、パソコンメーカーにコンピュータ市場を奪われて経営危機に陥った。そこで、90年代初めに大規模な人員削減を行い、ピークの85年に40.6万人いた従業員を94年には22万人まで減少させた。その後、サービス部門の急成長やソフト会社の買収で収益を高めて再び雇用拡大に転じ、現在の従業員数は24.1万人である。要するに、企業業績が急回復している中での経営合理化策としてリストラが実施されている、ということである。

同様のリストラ策はNCRやDECといった大手コンピュータ会社でも進められているが⁽¹¹⁾、これらリストラ策のもう一つの特徴は、人員削減が個別企業内での事業部門全般にわたって実施されているわけではないということである。非成長部門や赤字部門が成長部門や黒字部門によってカバーされて経営体全体としての収益が確保されていればよしとするのではなく、事業部門ごとの生産性や効率性、損益が明確にされ、非成長部門や非効率的部門では大幅な合理化が進められる一方で、成長部門では新規採用をはじめ雇用拡大が進められている。好況期あるいは事業盛況期にはどの部門でも雇用を拡大し、不況期あるいは事業低迷期にはどの部門でも人員を削減するという個別経営体ぐるみの対応としてではなく、景気の好不況あるいは経営体全体としての損益評価にかかわらず、事業部門ごとに雇用戦略が立案・実行されることになるのである。こうしたリストラ策は、今後の経営戦略として多くの経営体が導入することになると思われる。このことは、高齢者の雇用に関しても大きな影響を与えることになろう。

退職年齢の引き上げや継続雇用、雇用延長は、社会負担を軽減しようとする政府や就業意欲を持った高齢者にとっては歓迎されようが、経営体の観点からすれば、たとえそうしたことが時代の要請であって経営体に求められる社会的貢献あるいは社会的責任であると

いっても、無条件で高齢者を受け入れることはできないであろう。経営体にとっては、高齢労働力を抱えることは、それが事業展開に否定的に作用することがないこと、しかも、何らかの利点があるということを確認あるいは納得できる根拠や理由、条件がなければ経営リスクが大きいからである。

松下電器や日産自動車の試みは、そうしたことに対する一つの解答を与えているといえる。両社ともに、経営戦略に即応した高齢労働力の新しい活用方法を見いだしたことになる。そして、そのことが、雇用延長や高齢者雇用の拡大という社会的要請に応えることになり、結果的に企業の社会的貢献・責任の一端を果たすことにもなる。そして、また、就業意欲のある定年退職者に新しい職場（職種）を開拓することにもつながる。しかし、企業のそうした雇用戦略は、言うまでもないことではあるが、経営戦略に即応した能力を有した高齢者だけを対象とするものであるから、全般的な高齢者雇用の拡大に即座に結びつくというわけではない。

高齢期の雇用機会が少ない一方で、老後の主要な収入源として期待される公的年金に対する信頼感も低下している。こうした中で、人々は、公的年金に加えて私的年金や貯蓄によって高齢期の経済を確保しようと努めている。こうした傾向は日本でもイギリスでも同様である。Walker(1966)は、イギリスにおけるそうした状況を、福祉国家が解体し、退職を19世紀的性格に逆戻りさせたと表現している。社会保障や各種の公的保険の制度は、その歴史的経緯から明らかなように、私的な慈善や博愛、恩寵主義的な福祉事業および個人的努力の限界が社会的に認識された後に、国家をその運営と責任の主体とする制度として成立し、定着してきたものである。自由競争を基本とする資本主義的経済体制の社会で、そうした制度に基づくサービスを受けることが国民の権利として主張され、認められているのは、人権観念からだけではなく、そうした制度が自由主義的市場経済の存続と発展を図る上での必須の要素として、その社会体制に組み込まれてきたからである。福祉国家とは、そうした制度が成熟した国家のことであり、イギリスがその代表とされてきた。しかし、退職後を公的年金で生活できずに、自助・自立の名のもとに個人的あるいは私的努力が強調されるのは、まさに社会保障制度の歴史に逆行するものであり、福祉国家は解体したと言わざるをえないことになる。

日本は福祉国家であった／あると国内外ともに広く認められたことはないから、日本の今日の状況を福祉国家の解体という言葉で表現することは適当ではないが、公的年金財源の危機が喧伝される中で個人や家族の自助・自立が強調され、人々は、公的年金に対する不安や信頼感の低下から私的年金や貯蓄によって退職後の経済生活を維持することに腐心しなければならなくなっている。

これは身近な一例であるが、年金支給年齢が将来的に65歳に引き上げられることに伴い、退職してから65歳までを受け取り期間とする「つなぎ年金」商品の案内が筆者のもとにも学部の事務を經由して届けられた⁽¹²⁾。この種の保険・金融商品は、金融自由化(ビッグバン)とあいまって国内外の各種保険会社や金融機関が目玉的新商品として多く販売することになるだろう。しかし、低金利時代で今後とも急速な経済成長が見込まれない今日、そうした商品購入のために毎月およびボーナス時にかなりの額を積み立てていっても、それが高利息を生むように有利に運用されることも、したがって、退職後に受け取る年金が十分に見返りの大きいものになることも期待することはできないであろう。実際、企業年金の多

くは、バブル崩壊後の低金利政策と保険会社の経営悪化で、それ以前に見積もられていた満期後の年金額が大幅に下方修正されているのである。

公的年金に大きな期待を寄せることができない中では、退職後の公的年金を期待して定年まで、あるいは公的年金受給資格を得るまで同一の勤務先や職場、職業に継続的に従事し、保険金を払い続ける意味は薄れることになる。こうした中で、これまでとは異なる就業形態や退職形態が現れていることが注目されてきている。Walker(1996)は、その一例として、ポートフォリオ就業(portfolio employment)⁽¹³⁾あげるとともに、1990年代の退職の特徴を1980年代の勧奨(encouraged)あるいは早期(early)退職と比較して不本意(discouraged)あるいは遅延(delayed)退職と表現している。

また、Henretta(1997)は、最近の退職研究を検討して、退職に関する研究の視点に変化が生じていることを指摘している。たとえば、就職して定年まで働いた後に退職するという従来型の就業・退職形態(この形態はcrisp pattern<すっきり型>と名付けられている)に加えて、退職や再就職を繰り返したり、部分退職(partial retirement)と呼ぶことができるような就業と退職の切れ目がない、あるいはその時期が重なり合っているとみることができるような不明瞭型(blurred pattern)の就業・退職形態が注目されるようになってきている(Mutchler et al., 1997)。

Henretta(1997)によれば、アメリカにおいては、高齢者の労働力は1950年代以降減少し続け、とくに70年代から80年代前半にその傾向が著しかったが、その背景には70年代初期における社会保障制度と企業年金の充実があった。したがって、多くの人にとって退職(して年金生活を送ること)は好ましい出来事であり、減額年金の受給資格年齢である62歳に達する前の人々も多く退職した。そのことに拍車をかけたのが企業年金であり、企業が用意した早期退職特別奨励金であった。しかし、今日でも高齢労働力人口(労働市場への参加)は確実に減少しているものの、最近では、高齢労働者の中には一度退職して再び就職している者の割合が上昇していることや(Hayward et al., 1994)、部分退職の形態も増加している(Elder and Pavalko, 1993)など、就業・退職形態もより多様になってきている。

学業を終えて就職し、同一の企業や職場あるいは職業に継続的に従事したのちに定年を迎えて退職し、年金で老後生活を送るとというのが産業社会における雇用労働者の伝統的な就業・退職形態である。そして、それが今日でも雇用労働者の一般的かつ典型的な就業・退職形態であることには変わりがない。とくに日本では、最初に就職した企業に定年まで在籍することや同一職業を退職まで継続することが好ましいこと・望ましいこととされてきた。一所(ひとところ)で、あるいは一つの職業を「勤め上げる」ことに高い価値がおかれてきたのである。したがって、勤務先の変更や転職は一般に好ましくならざることとみなされてきた。そうした行動に対しては、それが若年者であれば我慢が足りないとかだらしがないと批判され、ある程度の勤務年数や経験を経た者であれば何か不始末をおかしたのではないかと疑われ、中高年者であれば人員整理の対象になったかと、これまた否定的な評価が与えられてきた。給与体系や退職金制度も「勤め上げる」ことを前提に設定されてきたから、途中で勤務先を変えたり転職することは経済的に不利になるようになってきている。

しかし、最近では、日本でも人々の就業・退職形態は多様化している。アメリカでは、条件が有利な

企業に移ることは何ら不自然なことではないし、そうした履歴は本人が有能であることを

示すことであり、誇りにさえなることである、ということは、日本に早くから伝わっていた⁽¹⁴⁾。日本でヘッドハンティングと言葉や、それを仲介する企業がマスコミを通じて知れ渡ったのは大分以前のことであり、今日ではデュエダという言葉が転職の代用語として使われて転職希望者向けの企業紹介雑誌が出回っている。企業側でも、中堅社員や幹部社員の中途採用を積極的に行ったり、年俸制の導入や退職金制度の廃止など給与体系を大きく変更するところも出てきている。日本的といわれてきた終身雇用制度と、そのもとでの「すっきり型」の就業・退職行動を是とする風潮に明らかに変化が生じてきているということである。

そうした変化が日本における就業・退職形態を根本的に変えるものであるかどうかは今のところ明言できないが、少なからぬ人々の就業・退職形態が「すっきり型」ではなく、「不明瞭型」と名付けられるような形態にある今日、「すっきり型」が、なお典型的な就業・退職形態であるとはいっても、そだけを問題にしていたのでは、既に本稿の冒頭で述べたように、退職問題や中高年期、そして高齢期の生活の実際を的確に把握することはできないし、ひいては高齢化社会の課題を適切に検討することができなくなっていることは確かである。定年後にも経済的理由からだけではなく正規にしる臨時にしる、長期にしる短期にしる、また収入の多寡に関わらず何らかの形態で再就職したり、それを自らの仕事として生活時間の多くを割いている高齢者も少なくないのである⁽¹⁵⁾。

3. サード・エイジの概念とライフスキル

(1) 就業・退職形態の多様性とサード・エイジの概念

既に述べたように、退職(retirement)という概念は、一般に、正規雇用や長く続けていた仕事から引退あるいは労働市場から完全に撤退して再び有給労働をすることのない老後生活を送るようになることを指して使われてきた。したがって、退職といえば高齢期の出来事として見なされてきた。しかし、実際の就業・退職形態は多様であり、退職あるいは就業と年齢との関係はそれほど明確ではない。早期退職者が増加するにつれて、そうした退職と暦年齢(chronological age)との関連がますます不明確になり、退職後の生活を老後生活としてとらえることができなくなった。退職後の生活とか退職者といった場合、それが指示する内容は一意的なものではなく、かなり曖昧なものになってしまう。そうした曖昧不明確な退職概念に代えて、サード・エイジ(the third age)という言葉で、その過程に多様な就業・退職形態を含む時期をライフ・コースの一段階としてとらえるようとするのが検討されている(Walker, 1996)。

サード・エイジだけを日本語にそのまま置き換えれば「第三期」や「三番目の時期」、「第三時代」ということになろうが、それでは何か不自然であり、それによって指示している内容が判然としなくなってしまうそうである。それが指示するところは、一生の過程の第三期目(the third age of life)あるいは加齢過程の第三段階(the third stage of ageing)ということである。その意味では、「第三期年齢段階」と表記できそうである。そして、その期間にある人々をサード・エイジャー(third ager) - これも、「第三期年齢層」と表記できそうである - と呼んでいる。この用語はフランス語のtroisieme ageに起源を持ち、その意

味するところは、成熟や円熟・完成(maturity)の時期、そして新たな始まりの時期とされている(Third Age Media, Inc., 1997)。欧米では70年代から80年代にかけて一般化したといわれ(Walker, 1996)、今日では商業ベースでも使われている(Third Age Media, Inc., 1997)。そして、継続教育や生涯教育の機関としてサード・エイジ大学(University of the Third Age: U3A)が欧米各国に設立されている。

しかし、サード・エイジあるいはそれに類する言葉も、その意味するところも日本ではまだ普及しておらず、日本語の論文や著書においても今のところ目にするところがない。そこで本稿では、他に適当な訳語も思いつかないので、とりあえずというか、あえてというか、サード・エイジとカタカナ書きにしておく⁽¹⁶⁾。

サード・エイジという言葉を経験概念に高齢化問題を論じた代表的な研究者として知られているのが歴史社会学者のラスレット(Laslett, 1987; 1989)である。かれは、誕生から死までの人間の一生を、「依存・社会化・未熟・教育の時代」である第一期(the first age)、「自立・成熟・責任・稼得・貯蓄の時代」である第二期(the second age)、「完成(personal fulfillment)の時代」である第三期(the third age)、「依存・老衰・死の時代」である第四期(the fourth age)の4段階に区切ることを提案し、第三期に当たる「完成(personal fulfillment)の時代」を個人的にも社会的にも充実させることが現代産業社会の高齢化という人口構造の変化に付与される否定的なイメージを払拭して、より肯定的な高齢化のイメージを構築することに通じると考えたのである。

Walker(1996)は、サード・エイジの概念が登場し、流布するようになった理由として、ラスレットも含めて多くの論者が指摘していることを次のような6点にまとめている。多くの人々が健康で長生きできるようになったこと、退職者の生活水準が過去に比べて向上したこと、退職の平均年齢が低下し、現在では定年前に退職する人も少なくないこと、公的年金など退職後の生活に対する保障が十分ではないとすれば、退職後も収入を得るための種々の活動を続ける必要があるということが認識されるようになったこと、サード・エイジの生活様式(life style)が消費者運動家(consumerist)によって広められ、それに人々が関心を示すようになったこと、サード・エイジャーの間に、高齢者がサービスを受ける権利やエイジズムとの戦い、若い世代との利害対立の問題など共通の目的や言い分、関心が高まり、サード・エイジャー(third agers)としての自己意識(self-awareness)が成長したこと。

以上の各理由について若干敷衍しておく。は、平均寿命の伸びに伴って高齢期が延長したこと、多くの人にとって長命が例外的な他人事ではなく自分事になったために、老後生活をいかに過ごすかということに多くの人が高齢期以前から関心を待つようになったということである。ラスレットの4段階説は、そうした変化に対応させてサード・エイジの意義を論じたものといえる。は、退職者の生活水準が向上した結果、経済的不安が軽減されて老後生活の充実ということを考える余裕が生じるようになったということである。は、先に述べたように、就業・退職形態の多様性と関連して1970年代から80年代にかけて欧米で一般化するようになった理由である。この時期に早期退職が進み、退職すなわち老後生活の始期といったそれまでの一般的了解が現実と乖離するようになったからである。

は一見するとと矛盾するが、これも既に触れたように、高齢化の進展に伴って年金

受給資格年齢が引き上げられるなど、退職後すぐに年金が受給できないとすれば、定年後も年金生活を送る退職者 (retiree) としてではなく、何らかの形態で就業せざるをえないと多くの人々が考えるようになったということである。は、以上のような背景のもとで、消費者運動家がサード・エイジの有意義な過ごし方や豊かなサード・エイジということについて積極的に提言したり実例を紹介することによって、サード・エイジャーの間だけではなく広く人々にサード・エイジの生活様式に対する関心が浸透していったということである。この過程で、サードエイジ・大学 (University of the Third Age: U3A) の創設が相次ぎ、サード・エイジの生活様式が商業ベースにも乗るようになった。は、とも関連することであるが、退職者あるいは就業者としてではなく、多様な就業・退職形態にあるサード・エイジャーとして、現在あるいは高齢期の問題は自分たちに共通する問題であり、その問題にサード・エイジャーとして対応する必要があるという認識が深まったということである。

ラスレットの加齢過程 4 段階説は、暦年齢と直接対応させるものではないが、サード・エイジは 50 歳から 75 歳までの期間を指して使われることが多いといわれる (Walker, 1996)。いうまでもなく、この年齢設定は厳密なものではない。就学期を除けば、暦年齢と対応させて人々のライフコースあるいは加齢過程を明確に区切ることができなくなった、あるいは、そうすることがさして意味を持たなくなってきたから、大雑把とも思える 4 段階説が採用されるようになったのであり、そうすることによって今日におけるライフコースや加齢過程の問題がよりの確に捉えられると判断されたからである。しかし、また、サード・エイジは何歳くらいの時期を指すのかという関心や疑問が生じるのも当然のことである。サード・エイジが人生の頂点 (apogee of life) であるとか完成の時期であるといわれても、それがいつ頃のことか、あるいは、いつまでのことか、多くの人にとっては気にかかることであるにちがいない。そして、自分がいまその時期にいるのか、その時期にはまだ早いのか、もう遅いのか大きな関心になるであろう。サード・エイジを 50 歳から 75 歳までとしたのは、そうした関心や疑問に便宜的に与えた回答である。就業・退職形態の多様性と関連させれば、この年齢幅の下限は早期退職またはその準備の始期として、また、上限は有給労働の終期とみなしうる年齢ということができる。

(2) サード・エイジの生活課題とライフスキル

ところで、周知のように、エリクソンは人間の発達を 8 段階でとらえ、最終の 8 段階目を 50 歳以上としているが (Erikson, 1963)、サード・エイジの概念は、この最終段階を新たな出発の時期としてとらえることになる。そして、サード・エイジには、エリクソンが最終発達段階の中心的な心理社会的な発達課題 (developmental task) とした「統合 (integrity) 対絶望 (despair)」に加えて、様々な変化に適応していくために達成しなければならない多種多様な生活課題 (life tasks) がある。

サード・エイジにおいては、人々は、第二期における働いて収入を得ることや貯蓄すること、独立心や責任感を醸成して人間的成熟をめざす、といったことに対する社会的強制力は弱まる。それらは、このサード・エイジにおいては既に達成されていなければならない生活課題であるからであり、サード・エイジが人生の頂点とか完成の時期とされるのもそのためである。社会的強制力が弱まるということは、行動や思考、生活の様式がより自

己管理的(self- directed)であることが求められるということである。目標設定およびそれを実現する手段や方法の選択についても、より一層主体的になり(ならざるをえなくなり)、動員できる個人的諸資源が種々の活動の量や質、そして生活様式を左右するようになる。その結果、このサード・エイジにおいては、それ以前の時期に比べて各個人の生活様式の違いが顕著になる。

個人的資源の多寡や水準の相違は、それ以前の時期において既に所有していたか(与えられていたか)、あるいは獲得したか否かによるところが大きいといえるが、それ以上に重要なことは、サード・エイジにおいてそれらを効果的に活用できるか否か、そして、それらを更に洗練できるかどうかということであり、また、新たに獲得できるかかどうかということである。したがって、自ら設定した目標の実現や種々の生活課題を処理する上で必要な個人的資源としてのライフスキルを洗練したり開発することが、サクセスフル・エイジングへ向けたサード・エイジの大きな課題になるのである。

中年期において転職や失業を余儀なくされる傾向が強くなり、同一の職場に定年まで勤務することが必ずしも有利なことではなくなって、中途採用や転職が特別例外的なことではなくなってきた今日において、中年期は人生の大きな転換期としての、また、新しい出発の時期としての性格が強くなってきたといえる。職業的スキルに関していえば、それまで有していた技術や経験だけでは新たな職場を見いだすことも、以前と同水準の収入を得ることも難しいかもしれない。

Chiva(1996)によれば、サード・エイジにおける生活変化に直面する個人は、種々のライフスキルの組み合わせや合成物である能力(abilities)あるいは道具(tools)すなわち認識過程における思考能力、情緒過程における感情制御の能力、行動過程における活動能力によって状況に対応しようとする。それらは次のような心理社会的なライフスキルから構成される。評価(assessment)、変化の取り扱い(handling changes)、自己感謝や自己報酬(self- acknowledgement and self- reward)、自分自身への配慮(caring for oneself)、意志疎通(communication)、交渉(negotiation)、主張(assertiveness)、支持獲得(gaining support)、自己の哲学の応用(application of personal philosophy)。

いま、ここでは、それら個々の心理社会的ライフスキルについて細かく検討することはしないが、以上のような能力、そしてそれらの構成要素である個々のライフスキルは、サード・エイジにおいて経験する変化や新しい出来事に適切に対応し、充実したサード・エイジとサクセスフル・エイジングに必要とされるライフスキルである。そして、これらライフスキルは、とくに行動過程において重要になる。

人間の行動は単純ではないが、一般に、習慣化されている。集団(社会)が存続しうるのも、そして、自己の欲求が充足されるのも、各人の行動様式がかなりの程度パターン化されていて、持続的な社会関係が維持されているからである。そうした中で、人々は、その時々を経験を通じて、意識的あるいは計画的に学習することなくライフスキル資源を蓄えていく。そして、生じた変化や新しい状況に対しては、まず、手持ちのライフスキル資源を動員して対処しようとする。しかし、それで課題が処理できない場合には、既存の行動パターンを修正し、再学習あるいは新たに学習することを通じて必要とされるライフスキルを洗練・向上させたり新たに会得するなどしてライフスキル資源を開発・拡張することが必要になる。そうすることによって(のみ)、より新しい、より適切な、そしてより効

果的な行動様式を身につけることができることになる。

そうした過程は、どの年齢、どの段階、どの時点でも生じ、また、そうすることが可能である。しかし、そのことが可能かどうかは、その人の態度や信念、価値観に大きく依存する。とりわけサード・エイジにおいてそのことは強調されなければならない。誇張していえば、それまでの人生の過程で形成され、固定化した精神構造や価値意識、社会観・世界観が大きな修正を迫られることもあるからである。サード・エイジにおいて、新たに学んだり訓練することを、本人が、そして周囲が無理であるとか不可能である、あるいは今さら無駄なこと、などと否定的な態度をとり続けられれば、ライフスキル資源の開発や拡張は不可能であり、生じた変化や新たな状況に適切に適応することはできないであろう。

おわりに

就業・雇用形態の多様化が進み、高齢期が延長した今日にあっては、サード・エイジにおけるライフスキル資源を意識的、計画的に開発・拡張させることが多くの人にとって一層重要な課題になってきている。しかしながら、そのための機会や場、制度的整備はなお十分ではない。たしかに、市町村や都道府県の各部局あるいは各種団体や法人組織が主催する多種多様な講座や講演会、そして、また、大学などの教育機関が主催する公開講座とそれらへの参加者や受講者は年々増加している。しかし、受講する側も主催・担当する側も、サード・エイジにおけるライフスキルの教育や学習という意識はない。そうした機会や場が提供され、そこで多種多様な知識を学ぶことによって知的欲求を満たし、多くの人々と知り合い、仲間づくりができることは有意義なことではある。しかし、さらに望まれることは、そこが、サクセスフル・エイジングへ向けて、サード・エイジに必要とされる技術的、心理社会的ライフスキルを目的意識的、計画的に教育・学習する場になることである。そのためには、今後、現在およびこれからのサード・エイジャーに求められるライフスキルとその教育・学習の体系的プログラムに関して種々の学問領域が共同して研究にあたるのがエイジング研究の重要な課題となろう。

サード・エイジというライフコースにおける一時期は、成人に期待される職業的役割と今日における高齢者の社会的役割とが重複あるいは混在して推移する時期である。サード・エイジの概念には、そうした期間を活動的な加齢過程(active ageing)としてとらえようとする規範的色彩が認められるが、サード・エイジャーに期待される社会的役割や生活課題、そして、サード・エイジにおける、あるいはサード・エイジャーに必要とされるライフスキルは、その国の経済的、社会的、文化的条件に強く規定される。したがって、サード・エイジおよびサード・エイジャーに関する国際比較研究が今後の課題となろう。また、サード・エイジャーとして一括するには、性差をはじめその時期の人々の経済的、社会的条件の違いなど様々な面での個人差は大きい。この問題もサード・エイジ研究のこれからの大きな課題である。

本稿では、最近の就業・退職形態に関する研究と現実の動向に触れながら退職概念とサード・エイジの概念を検討し、ライフスキルとサクセスフル・エイジングの課題に関して若干の考察を試みた。残した課題は多い。本稿で何回か触れたサード・エイジ大学(例え

ば、Croydon, 1997; Harvard, 1997; Manchester, 1997; Kingston, 1997; CISA, 1997)やサード・エイジの教育研究機関として活発な活動を行っているイギリスの退職前教育研究機関⁽¹⁷⁾(PRA, 1992; 1994; 1996; 1997a; 1997b; 1997c)の役割や機能等についての議論もあらためて別の機会に行うことにしたい。

注

(1)ちなみに、ライフイベントを「意図的か外的か」、「予期的か突発的か」、「本意的か不本意的か」という3つの軸で分類すると以下の表のように8つの類型を抽出できる。このうち、意図的で突発的な退職形態(CおよびD)は、「この時期に突然退職することを思い立つようになるなんて自分でも考えもしなかった」というようなケースが当てはまるかもしれない。しかし、それが果たして完全に意図的なものであるのか、何らかの外的要因が契機になったのかを明確に区別することは難しい。とくにDの類型に当てはまるようなケースは実際にはありえないだろうから、現実の退職形態はCとDを除く6つの類型で考えればよいことになる。ただし、ここでの類型化は筆者の今後の退職問題に関わる研究のための試みであって、本稿の後の論述に直接関係するものではない。

内的要因 (意図的)				外的要因 (非意図的)			
予期的		突発的		予期的		突発的	
本意	不本意	本意	不本意	本意	不本意	本意	不本意
A	B	(C)	(D)	E	F	G	H

(2)平成8年の雇用動向調査によれば(労働省, 1997)、入職者数531万人(入職率13.8%) - この中にはパートタイム労働者23.4%を含む - のうち転職入職者数が307万人(転職入職率8%)と未就業入職者数(未就業入職率5.8%)を大きく上回っており、転職入職率は男及び男女計で2年連続上昇している。年齢別の転職入職率では20-24歳で12.2%、25-29歳で10.6%と若年層で高くなっているが、前年と比べると男では19歳以下をのぞく他の年齢層すべてで上昇している。ちなみに、転職入職者の賃金変動では、10%以上増加が約29%で、10%以上減少が23%、残りは10%未満の増減である。離職者は532万人(離職率13.8%)で、この中にはパートタイム労働者が22.9%を占めるが、離職の理由でもっとも多いのは「個人的理由」(70.1%)であり、次いで「契約期間の満了」(10.4%)、「経営上の都合」(6.9%)と続き、「定年」を理由とする離職(退職)は5.9%にすぎない。また、平成9年2月の労働力調査特別調査によれば(総務庁統計局, 1997)、65歳以上の男性労働者の22%がパート・アルバイトであり、その比率は10年前に比べて10ポイントを超えるほど大幅に上昇している。

(3)ここで「産業化された社会において」という限定を付けたのは、途上国では、今日でも、産業国では明らかに子どもとみなされる10代前半の年少者の中に働いて収入を得ている者が少なくないからであり、そのことを家族も社会も特別異例とはみなさないし、働くことができる年齢になれば、そうすることが普通とされているからである。ちなみに、バングラデシュでは、労働力人口の統計の下限年齢は5歳である。

(4)ここでは、地位が高い低いという場合の地位に限定されずに、他者との関係で決まる相対的な社会的地位を指す。その意味では価値的要素を想起させないpositionという中立的な<neutral>用語のほうが適切ではある)

(5)「役割継続の役割(role-continuity role)」および「役割復活の役割(role-revival role)」は本稿執筆の過程で思いついた筆者の造語である(英語表記も同様)。

(6)passengerは一般には乗客という意味で使われるが、ここでは、「足手まとい」とか「無能選手」という意味の俗語として使われている。日本でも「お客さん」が時として似たような意味で使われることもあるのは周知のところである。

(7)神戸新聞1997年10月15日付け朝刊9面参照。10月14日の記者発表によれば、その報告書は、現行制度は働く意欲や能力のある高齢者にも引退を促すしくみになっていると指摘し、高齢者の能力活用のための具体策として、「年金の報酬比例部分の積み立て方式化」や「定年制の廃止や定年年齢の引き上げ」

などをあげている。少子・高齢化が進む中で社会的活力の低下が懸念されていることから、「仕事のできる高齢者にも高齢化社会を支える側になってもらうことが必要である」という経済企画庁経済研究所客員主任研究官清家篤慶応大学教授の談話を掲載している。提言の根拠となったのは、労働省が行った高齢者の就業実態調査などをもとに厚生年金や共済年金の受給者と年金を受給せずに働いている高齢者のモデル賃金を比較した分析結果である。それによると、年金受給者が働いた場合に得られる賃金の方が現在働いている高齢者の賃金よりも高くなること、そして、職歴などで仕事の能力の高い人ほど年金受給や定年退職をしていることが明らかにされた。その理由は、現行の年金制度では、給付額が現役時代の給与水準によって規定されているからであるが、報告書は、そのために「仕事の能力が高い人ほど引退を促されやすくなっている」と分析している。この結論は常識的であるが、提言では、年金の基礎部分に加算される報酬比例部分を積み立てた分だけ加算する「積み立て方式」に変更するとともに定年制の廃止や定年年齢を65歳に引き上げることで就業意欲のある高齢者の活用が可能になるとしている。分析、結論、提言ともに検討の余地が少なくないが、新たな政策的対応として注目しておくべき内容ではある。

(8)神戸新聞1997年10月17日付け朝刊9面参照。報道によれば、10月16日に松下電器産業の森下洋一社長は、生産現場などにおいて若い社員に伝える熟練の技をもつ技能職社員に限定して65歳までの就業を可能にする事実上の定年延長に踏み切る準備が労使間の交渉で大詰めに来ており、早ければ年内にも合意する見通しであることを明らかにした。一般社員に関しては現行の60歳定年制が適用されるが、嘱託ではない形態でのそうした雇用延長は初めてのことであり、報道では、1998年春闘を前に、電気連合最大手の松下電器産業のこうした動きは同業他社にも影響を与えるとともに、今後、産業界でも注目を集めることになりそうだと解説している。厚生年金の支給開始年齢が男で2001年から順次引き上げられて2013年からは65歳に、女では2006年から順次引き上げられて2018年に65歳になることが既に決まっているが、松下電器産業では、2001年から定年年齢を引き上げる準備を進めてきており、今回の技能職社員の定年延長はその一環ということである。

(9)日本経済新聞1997年10月28日付け12版15面。報道によれば、日産は、自動車関連技術の高度化に伴い営業担当者だけでは十分なアフターサービスを提供できないと判断して、設計や車両実験部門、工場の現場責任者を経験した定年退職者を系列ディーラーにコンサルタントとして派遣し、専門知識を生かして顧客からの技術に関する問い合わせや品質面のクレームに対応するとともに営業担当者の教育研修指導に当たらせることになった。給与は日産が負担する。この制度が採用されるようになったのは、国内販売シェアの巻き返しに向けて顧客満足度(CS)の向上が大きな課題とされているからである。塙義一社長は、「若年労働者の減少を考えると、高齢者に経験を生かして働いてもらうことが日産の利益につながる」と述べたことが紹介されており、報道では、新しい制度で高齢者に活躍の場を与える狙いもあるとして、この制度が高齢化時代の新しい雇用形態としても注目されそうだと解説している。

(10)日本経済新聞1997年10月21日付け14版3面参照。

(11)同上参照。

(12)文部省共済福祉事業として財団法人教職員生涯福祉財団が発売している「アイリスプラン つなぎ年金コース」という拠出型企業年金保険である。「つなぎ年金でゆとりある退職後の生活設計を」という文句にしている。そして、「つなぎ年金は、60歳から65歳に達するまでの5年間にわたり、不足することとなる定額部分相当額を自助努力で補う制度です」と解説している。幾つかのタイプが用意されているが、月額約10万円を5年間(60歳から65歳まで)を受け取るタイプの場合、掛け金は、現在の年齢が上であるほど高いが、たとえば、現在50歳だとすると、毎月28,000円、ボーナス時100,000円である。払い込み掛け金の累計は5,360,000円となり、利息を含めた積立金総額は5,770,520円である。この見込額は、予定利率が年2.5%とされているが、「実際にお支払いする金額は変動(増減)することがあり、将来のお支払いをお約束するものではありません」と明記されている。

(13)ポートフォリオ就業とは、個人が幾つかの職種や形態で収入を得ている就業形態を指している。ただし、一時的なアルバイトやパートあるいはフリーターと違うところは、それを一般の就業と同様に本人の一生の仕事としていることである。いわば個人事業主として、たとえば、職種の異なる仕事や事業所に短期で勤務したり契約によって就業期間を決めて働くなどして全体として必要な収入を得る就業形態である。本業があって、その傍らに副業を行うというのではなく、いってみれば副業の集合体を本業とするような就業形態ということが出来る。そして、仕事をしない期間を再訓練や再教育、家族の世話に当てるなど、時間の利用にも自由度あるいは柔軟性が大きい就業形態であり、本来の意味での自由業ともいえる。ポートフォリオ就業は、常用雇用者のように一事業体の経営状態(戦略)によって解雇や一時帰休といった経営対策の影響を直接受けることがないが、希望するときに継続的に仕事に就ける(就業機会がある)保証はないという両面を常に抱えている。ポートフォリオ就業は、それら両者を比較したと

きに、後者の不利あるいは危険性が前者よりも大きいときに有利な就業形態となる。ただし、言うまでもなく、十分な収入を得るには、「売れる」(需要に応えるだけの)技術や技能など相当程度の能力を有していることが求められる。

(14)1980年代初期に1か月ばかりアメリカ東部の中流家庭に滞在していた折り、大手損害保険会社に勤務していたその主人は、筆者に自己紹介の資料として詳細な履歴書を示し、業務内容の異なる幾つもの会社を経験してきたこと、そこでどういう仕事の、どういうポストに従事してきたかを自慢げに話していたことが思い出される。

(15)平成8年の労働力調査によれば(総務庁統計局, 1997)、65歳以上の高齢者の労働力人口(就業者と完全失業者の合計)は455万人で、65歳以上人口に占める割合(労働力人口比率)は24.2%(男36.7%、女15.4%)であり、アメリカ(12.1%:男16.9%女8.6%)、カナダ(6.3%:男10.1%女3.3%)、イギリス(5.1%:男7.4%女3.5%)に比べて遥かに高い(アメリカの数値は1996年、カナダは1995年、イギリスは1993年)。産業別では、農林業が29.9%、サービス業が21.2%、卸・小売業、飲食店が19.4%、製造業が12.9%と、日本では高齢者の就業の場として農林業が今日なお大きな比重を占めている。

(16)最近、外来語のカタカナ表記に批判が多く、厚生省は行政用語として使われてきたカタカナ用語を不自然な日本語に置き換える作業を行ったことが報道された。筆者は、日本にない、あるいはなかった有形・無形のものを表記する場合、日本語に置き換えると不自然で意味不明になるようなものは、あえて日本語(多くの場合は漢字が使われる)に置き換えなくても原語の音に近い表現ができるカタカナで表記したほうがよいと考えている。このことは、日本語を駄目にするとか汚すことではなくて、カタカナを持つという日本語の有利性を積極的に活用することである。どの国でも、外来語を母国語に取り込んで母国語が豊かになっている。国際化が進展している今日では、その有形・無形のものを目指す場合、その発祥地の言葉を使う方が共通の理解を得やすい。奇をてらったり、おしゃれ感覚でむやみに外来語を使ったりカタカナ表記することは混乱を招くが、外国でもそのまま使われている日本語も少なくないことを考えれば、カタカナ表記の外来語はけしからんというのは日本人だけの感覚のような気もするし、何か戦前の外来語禁止政策や国粹主義的感情の残滓を見るようでもある。カタカナ表記は年寄りには不向きであるという論調や高齢者自身のカタカナ表記に対する批判も見たり聞いたりすることがあるが、戦前はカタカナ表記が多く見られ、当時の高齢者はカタカナ書きを多用していたことを思い起こせば、そうした論調や批判は的確ではないというべきであろう。

(17)筆者は、1997年10月下旬にこの機関を訪れ、所長(Director)のMary Davies博士はじめ本文で触れたJoanna Walker博士やAnthony Chiva博士らと会い、Pre-Retirement Associationの事業内容と研究課題等について詳細な情報を得ることができ、サード・エイジにおけるライフスキルの問題について議論を交わすことができた。そして、その折りに今後の情報交換と研究協力について合意を得た。また、同書への寄稿者であるPeter Jarvis博士(Professor of Continuity Education, University of Surrey)は、学術面での助言・指導に加えて、研究室や宿泊先の手配から関係機関・関係者への連絡や紹介等、滞在中に必要なすべての面で大変お世話になった。ここに記して以上の方々深く感謝する次第である。

文 献

Achenbaum, W. Andrew (1995), *Crossing Frontiers: Gerontology Emerges as a Science*, Cambridge University Press, New York, USA.

Atchley, Robert C. (1976), *The Sociology of Retirement*, Schenkman Publishing Company, Inc. (牧野拓司訳『退職の社会学』東洋経済新報社、1979年)。

Atchley, Robert C. (1994), *Social Forces and Aging* (Seventh Edition), Wadsworth Publishing, California, USA.

Binstock, Robert H. and Linda K. George eds. (1990), *Handbook of Aging and the Social Sciences* (Third Edition), Academic Press, Inc., California, USA.

CISA (1997), <http://www.cisa.asn.au/sample/ag880.htm>

Chiva, Anthony (1996), *Managing Change in Mid and Later Life*, in Joanna Walker ed., *Changing Concepts of Retirement*, Arena (Ashgate Publishing Limited), UK.

Croydon (1997), <http://home.vicnet.net.au/unita/frmain.htm>

Erickson, Erik H. (1950, reprinted 1963), *Childhood and Society*, New York, USA.

Gall, Terry L., David R. Evans and John Howard (1997), "Retirement Adjustment Process: Changes in the Well-being of Male Retirees Across Time", *Journal of Gerontology: Social Sciences*, Vol. 52B, No. 3.

Harvard (1997), <http://www.harvard-magazine.com/ma97/ner.ilr.html>

Henretta, John C. (1997), "Changing Perspectives on Retirement", *Journal of Gerontology: Social Sciences*, Vol. 52B, No. 1.

Kart, Cary S. (1997), *The Realities of Aging: An Introduction to Gerontology* (Fifth Edition), Allyn & Bacon,

- Massachusetts,USA.
- Kingston (1997), <http://www.kingston.gov.uk:81/LINKDATA/426PAGE.htm>
- Laslet,Peter(1987), TheEmergenceoftheThirdAge,AgingandSociety,No.7.
- Laslet,Peter(1989)AFreshMapofLife,GeorgeWeidenfieldandNicholson,London.
- Laslet,Peter(1989)AFreshMapofLife(2ndedition),MaCmillanPress,UK.
- Manchester(1997), <http://www.manchester-city-coll.ac.uk/magz/bout/artc/thirdage.thm>
- Merton, Robert K.(1957), Social Theoryand socialStructure, The Free Press(森 東吾ほか訳 『社会理論と社会構造』みすず書房、1961年)。
- 小田利勝(1990), 「高齢者の社会的地位と老年観」 『徳島大学社会科学研究』第3号。
- 小田利勝(1991), 「高齢者の適応に関する概念的一考察」 『徳島大学社会科学研究』第4号。
- 小田利勝(1993), 「サクセスフル・エイジングに関する概念的一考察」 『徳島大学社会科学研究』第6号。
- 小田利勝(1995), 「高齢化」井上・矢島編著 『生活問題の社会学』学文社。
- 小田利勝・野上智行・浅田匡・小石寛文(1997), 「サクセスフル・エイジングとライフスキルに関する一考察」 『神戸大学発達科学部研究紀要』第4巻第2号。
- 折茂 肇 編(1992), 『新老年学』東京大学出版会。
- Pre-RetirementAssociationofGreatBritainandNorthernIreland(1992), Workin Later Life,PRAOccasionalPapers No.6.
- Pre-RetirementAssociationofGreatBritainandNorthernIreland(1994), StrategiesforWork intheThirdAge.
- Pre-RetirementAssociationofGreatBritainandNorthernIreland(1996), AnnualReport,1996/1997.
- Pre-Retirement Association ofGreatBritainandNorthernIreland(1997a), Training and Professional Development 1997/8.
- Pre-RetirementAssociationofGreatBritainandNorthernIreland(1997b), PRANews,No.55.
- Pre-Retirement Association of Great Britain and Northern Ireland(1997c), Courses forMid-Life Pre-Retirement Planning,1998.
- 労働省(1997), 労働省発表資料 (<http://www.mol.go.jp/shiryo/970820/htm>).
- 総務庁統計局(1997), <http://www.stat.go.jp/06213.htm>
- ThirdAgeMedia,Inc.(1997), <http://www.thirdage.com/about/index.html>
- Walker,Joanna(1996), "Concepts of Retirement in HistoricalPerspective",in Joanna Walker ed., Changing Concepts of Retirement,Arena(AshgatePublishingLimited), UK.
- Walker, Joannaed.(1996), ChangingConceptsof Retirement,Arena(AshgatePublishingLimited), UK.
- WhiteHouse(1996), The Road to an AgingPolicy for the21stCentury(Executive Summary of the 1995 WhitehouseconferenceonAging), USA.

第5章 高齢期における自立生活とコンピテンス/ライフスキル

はじめに

超高齢化社会の到来を目前にした今日、高齢期における自立生活をめぐる課題が、「個人」および「社会」の双方にとってますます重要になっている。個人の側からいえば、高齢期の否定的側面 - 寝たきりや痴呆、介護の問題(小田, 1990; 1998)、年金危機論の下での老後の経済生活の問題(小田・石原, 1998; 石原・小田, 1999)、一人暮らし高齢者の割合の増大を背景にした孤独感の問題(小田, 1990)など - が以前にもまして論議される中で、いかにして身体的、経済的、精神的自立を維持し、どのようにしたら長い老後生活を充実感・満足感を味わいながら送ることができるかというサクセスフル・エイジングが重要な課題になっている(小田, 1995; 小田ほか, 1997)。

社会にとって個人の自立生活をめぐるそうした課題がなぜ重要であるかといえば、いうまでもなく、誰しものが自立した生活の中で幸福感を味わえるような満足のいく老後を送りたいと願い、そのことが社会的価値となっているからである。しかし、急速な高齢化が進行している今日にあって、社会が高齢期における自立生活の問題に高い関心を向けるのは、そうした規範的な理由からだけではない。高齢期の、あるいは高齢者の自立生活をめぐる論議の中には、この点に関する理解を欠いているものが少なくない。高齢者の生きがい論議に関しても同様のことがいえる。そこで、本章では、まず、なぜ社会が高齢期における自立生活の問題を重要とみなすかということについて簡単に触れておくことにする。

ところで、自立生活(independent living)とは、ごく一般的に言えば、他者からの援助や支配を受けることなく自らの力で生活することであるが、それを可能にするには、そのために必要な活動能力を保持していなくてはならない。そうした活動能力に関しては、日常的コンピテンス(Everyday Competence) - competenceは能力、知力、有用性などと訳されることもあるが、コンピテンスとそのままカタカナ書きされることも多いので、ここでもそうしておく - 、あるいはライフ・スキル(Life Skills)やリビング・スキル(Living Skills)などの概念の下で研究されてきている。そして、その測定のために、一般的にADL(Activities of Daily Living)と呼ばれる尺度や、DAFS(Direct Assessment of Functional Status), SAILS(Structured Assessment of Independent Living Skills), ALSAR(Assessment of Living Skills and Resources)など多くの測定尺度が考案され、利用されている。日本では、介護保険制度の導入に伴って、要介護高齢者の介護レベルを認定する作業が今年(1999年)の10月から始まるが、介護レベルの認定に関連して、この種の測定尺度の検討、開発がさらに進むことになると思われる。

そうした尺度は、個人ごとの介護やりハビリの計画を立案する際の基礎情報を得るために要介護者の生活活動能力を測定することを目的としているために、介護を受けることなく地域で生活している多くの高齢者には容易に遂行できる活動項目だけで構成されること

になる。逆に、後に触れるOTDL(Observed Tasks of Daily Living)のような健常な高齢者を対象とする測定尺度は臨床場面では利用できない。Lawton and Brody(1969)によるIADL (Instrumental Activities of Daily Living)およびそれに類する尺度は、そうした両極の尺度の中間的尺度とみなすこともできる。しかし、それらの尺度によって測定される活動能力は、日常生活に必須のものとはいえ、現実生活のごく限定された領域に関わるものであり、今日の社会における高齢期の自立生活に必要な活動能力を適切に測定しうるものとはいえない。

変動が著しく人々の価値観も多様化している今日の社会にあって、高齢者の生活欲求や関心も多様化している。したがって、そうした尺度は、介護を必要とするかしないかを振り分けるスクリーニングの道具としては有用であっても(例えば、Gill et al., 1995)、今日の高齢期における満足のいく自立生活、言い換えれば、サクセスフル・エイジングにかかわる諸種の活動能力を的確に判定する尺度とはなりえない。高齢者の日常生活活動能力を評価するために“黄金標準(gold standard)”として一般的に受け入れられている測定尺度は未だないと言われるように(Diehl, 1998)、適切な尺度の作成が求められている。そこで、本章の第二の目的として、生活活動能力と測定尺度に関するこれまでの研究を検討することを通じて新たな測定尺度の作成に向けた予備的作業を行うことにする。

1. 社会保障構造改革と高齢期における自立生活への社会的要請

(1) 赤字財政と経済低迷下での財政構造改革と社会保障構造改革

高齢化が進むにつれて国民医療費は急速に膨張しており(厚生省, 1999a)、年金をはじめ社会保障関係費は今後ともいっそう増大することが必至である。しかし、「バブル経済崩壊後の経済状況に対処するために累次にわたる経済対策を実施したことに伴い、悪化の一途をたどっている」日本の財政は、国と地方をあわせてGDP比で9.8%(48兆円。国鉄・国有林野に係わる債務の一般会計継承分を除く)という膨大な赤字を抱え、国と地方の債務残高はGDP比111%(約552兆円)にも達しており、主要先進国の中でも最悪の危機的状況にある(大蔵省, 1999)。最近(2001年)行われた自民党総裁選においても、債務残高が660兆円に拡大していることが議論になったが、長期間にわたる景気低迷が続いており、急速な経済の回復と高度成長も期待できないことから財政が一挙に改善される見込みもない。

財政制度審議会は、1998年12月に、「現下の経済情勢を踏まえ、政府は、財政構造改革を推進するという基本的な考え方は守りつつ、財政構造改革法を凍結し、当面、景気回復に全力を尽くす」ことを最大課題として「制度改革・歳出合理化の方策に関する報告」をまとめた(大蔵省, 1999)。景気回復を最優先課題として歳出合理化を図るということは、より投資的な歳出の比重を高め、そうではない歳出(非投資的歳出)を抑制・削減することである。そして、「制度改革・歳出合理化の方策」の最初にあげられている項目が「社会保障」であるように、最大の非投資的歳出とされているのが社会保障関係費であり、景気回復のための財政構造改革の重点は、この社会保障関係費の歳出を抑制・削減することに置かれている。

社会保障関係費が他の項目の歳出に比べてその時期の景気と財政事情に大きく左右されやすいこと、そして、これまでも経済低迷期には社会保障関係費が抑制・削減されてき

たことは周知のところであるが(小田, 1980)、近年の財政構造改革の方針に沿った社会保障制度の構造改革の骨子は、1996年11月に社会保障関係審議会会長会議が出した「社会保障構造改革の方向(中間まとめ)」(厚生省, 1999b)から知ることができる。

「社会保障構造改革の方向(中間まとめ)」では、「近年、少子・高齢化の進展、経済基調の変化、財政状況の深刻化等を背景に社会保障制度全体のあり方の見直しを求める声が強まっている」として、少子高齢社会における社会保障構造改革の基本的方向を、「国民経済との調和と社会保障への需要への対応」、「個人の自立を支援する利用者本位の仕組みの重視」、「公私の適切な役割分担と民間活力の導入の促進」の3点にまとめている。

一見して明らかなように、これら3点にまとめられた基本的方向とは、社会保障に係わる歳出の抑制・削減である。「国民経済との調和」とは社会保障関係費の歳出を抑制・削減することであり、その目的を達成する方法が「個人の自立を支援する利用者本位の仕組み」と「公私の適切な役割分担と民間活力の導入の促進」である。

(2) 社会保障制度の役割と高齢者の自立への要請

歳出を抑制・削減するといっても、社会保障制度を廃絶するような抑制・削減はできない。なぜならば、「社会保障の役割は、個人の力のみでは対処し得ない生活の安定を脅かすリスクに係わる国民の基礎的・基盤的需要(ニーズ)に対応することにより社会・経済の安定や発展に寄与するということ(安全網(セーフティネット)としての役割)にある」(大蔵省, 1999)からである。

言い換えれば、社会保障制度は、社会・経済の安定や発展のために欠かすことのできない要素として当該社会システムに組み込まれている、いわばショックアブソーバー(緩衝材)なのである(Polyani, 1957; 小田, 1980; Knox and Cullen, 1981; Knox et al., 1984)。上記の基本的方向は、赤字財政と低迷する経済の下で、そうした役割を担う社会保障制度を維持しつつ景気回復へ向けて投資的歳出を優先的に確保するために社会保障関係の歳出を抑制・削減する方策として打ち出されたものである。

「個人の自立を支援する」ということに関しては、「社会保障構造改革の方向(中間まとめ)」は、「高齢化の進展に伴い、社会的な比重を増す高齢者に健やかで社会的にも自立した人生を過ごしてもらえよう社会・経済の各分野における発想の転換が求められつつある」といい、「成熟した社会・経済においては、各人がそれぞれの生活態様に応じ、基本的には自らの生活を自らの責任で維持し、生活に必要なサービスについても自己の責任と負担において選択することとした上で、個人が自らの力のみでは生き生きと自立した生活を送ることが困難な状況に陥った場合には、社会連帯の精神に基づき、必要な支援を行っていくことが求められている」と述べている。

「求められている」という表現は、「社会保障制度全体のあり方の見直しを求める声が強まっている」という表現と同様に曖昧であって、誰によって求められているのか、あるいは求める声が誰のものであるのかを明確に伝えていないが、いうまでもなく、ここでは社会によって - より具体的には政策側によって - 求められているということであり、求める声は政策側の声である。要するに、赤字財政と低迷する経済の下で社会保障関係費の歳出抑制・削減と社会保障制度の維持とを両立させるためには、何よりもまず、高齢者が自立してもらわなければ困る、ということである。

全ての高齢者が、各人の力のみで生き生きと自立して生活し、援助が必要なときには自己の責任と負担においてサービスを選択することができれば、それにこしたことはない。誰でもが望むことであり、誰でもがそうありたいと願ってきたことである。それが可能であれば、公的財源からの歳出はゼロになるから、社会にとっても望ましいことに違いない。

しかし、そうしたことは実際には不可能であることが明らかになったことから社会保障制度が成立し、存続してきたのであり、社会保障制度の充実によって高齢者の生活水準が改善されてきたのである。とはいえ、自己責任や自助努力が繰り返し求められるほどには、これまで高齢者は社会保障制度の下で怠惰で依存的な生活をしてきたわけではないし、厚遇されてきたというわけでもない。

しかしながら、「社会保障構造改革の方向」や、「個人の自立を基盤とし国民連帯でこれを支えるという、自助、共助、公助の重層的な地域福祉システムの構築」を提言した「21世紀福祉ビジョン」(高齢社会福祉ビジョン懇談会。平成6年3月)のような代表的な審議会報告における高齢者自立・自助論は、言い回しは慎重ではあるが、本質的には高齢者怠惰論や高齢者へのサービス過剰論(甘やかし論)である。そのことを、いま、ここで問題にしようというわけではない。赤字財政と低迷する経済の下で社会保障構造改革を進めようとするれば、必然的にそうした認識に至ることになるということである。

(3) “発想の転換の転換”による社会保障構造改革

「社会保障構造改革の方向(中間まとめ)」では、「発想の転換」の結果、「困難な状況に陥った場合に」のみ「必要な支援を行っていく」と、支援はリスク回避(事前的対応)や生活水準の向上のためではなくて、あくまでも事後的対応(結果処理)を基本とすることが明言されている。そうした支援の仕方は、事後的支援からリスク回避的支援へ、そして、生活の質の向上へ向けた支援へと支援形態を充実させてきた社会保障制度の発展過程に明らかに逆行するものである。その意味では、「社会保障構造改革の方向(中間まとめ)」は、「発想の転換」によるものではなくて、正しくは“発想の転換の転換”の産物というべきであろう。そして、以下に述べるように、この“発想の転換の転換”も、また当然のなりゆきではある。

社会保障制度は、個人の自由(国家からの自由)と自立・自助、自己責任を基本原則とする近代市民社会の成熟過程で、その経済・社会システムが生み出す構造的矛盾を自助あるいは市民社会内部での私的な援助や相互扶助で処理しきれなくなった段階において、その経済・社会システムの崩壊防止を目的に国家の責任によって処理(公助)するための装置として成立、発展してきた(小田, 1980)。

先に触れた「制度改革・歳出合理化の方策に関する報告」では、「社会保障の役割は、…(安全網(セーフティネット)としての役割)にある」と表現しているが、その安全網は、個人の安全や救済を目的とするものではなく、そのことを通じて経済・社会システムの安定を確保するためにある。個人の安全確保や救済は直接の目的ではなく、あくまで経済・社会システムの安定・発展のための手段であるということである。

したがって、社会保障制度の本質的役割は、その経済・社会システムが崩壊するほど深刻化させない程度に、あるいは、存続・発展を阻害しない限りにおいて国家の責任として個人を援助することにある。そこで、財源的余力がある限りにおいて個人への支援は充実

し、そうではない場合には個人への支援をギリギリの線まで後退させようとするようになる。財政赤字と低迷する経済からの脱却へ向けた財政構造改革に沿って社会保障関係費の抑制・削減を軸とする社会保障構造改革を正当化しようとするれば、その根拠を社会保障制度のそうした本質的役割に求めるほかはない。これが、正しくは“発想の転換の転換”というべき「発想の転換」が唱えられる理由である。

(4) 自助・共助・公助と高齢者の自立支援

「個人の自立を基盤とし国民連帯でこれを支えるという、自助、共助、公助の重層的な地域福祉システムの構築」を提言した「21世紀福祉ビジョン」も、その意味では、とくに目新しいことを提言しているというわけではない。支援のあり方が議論されるとき、自助、共助、公助の共存ということが、あたかも新しい発想に基づいた支援のあり方を考える際の重要な枠組であるかのようにみなされることがある。しかし、それらの共存という考え方も別に新しい考え方というわけではない。

繰り返しになるが、社会保障制度は、それらの言葉を用いるとすれば、自助や共助だけでは経済・社会システムの構造的矛盾に対応し得ないことが - すなわち、そのシステムの安定を維持できないことが - 明らかになった段階で成立した公助の制度に他ならない。とはいえ、言うまでもないことではあるが、個人が自助、共助を求められなくなったというわけではない。

社会保障制度が成立したことは、経済・社会システムを支える下位システムとして自助、共助、公助の重層的システムがその段階で成立したことを意味する。敷衍すれば、自助、共助には限界があるが、公助の制度は、自助、共助を前提にしなければ、言い換えれば、それらなくしては成り立たない制度として成立し、存続してきたということである。

にもかかわらず、自助、共助、公助の重層的システムの構築を今日わざわざあらためて唱えるのは、そのシステムの下で(ということは、そのシステムを維持しながら)自助、共助の比重を高めて公助の比重を下げようとするためであり、そうするほかには社会保障関係の歳出を抑制・削減する正当的な方法および根拠を見出すことができないからである。「21世紀福祉ビジョン」でいう地域福祉システムの構築とは、そうした重層的システムを地域単位で構築しようというものであるが、形態的には旧来の地域福祉システムと実質的に何ら異なるところはない。それがなぜ新しい方策として提言されたかといえ、そうした重層的システムを国家単位から地域単位にすることによって国家の財政負担をより抑制・軽減しようとするからである。

社会保障の有責主体はあくまでも国家(中央政府)であるが、自助、共助、公助の重層的福祉システムを地域単位で構築するということは、公助に関する自治体(地方政府)の有責性の比重を高めることによって国家のそれを相対的に低下させようとすることでもある。このことは、住民の福祉にかかわる事項に関して自治体が国家から権限を委譲されることでもあるから、地域の個性にあわせて独自の施策を展開する可能性を高めることになる。

しかし、期待される公助の役割を十分に果たそうとしても、自治体にはそれを可能にする独自の経済的、物的、人的資源が乏しい。そこで、国の政策により自治体に施策の実行が課せられると、多くの場合、金ない、物ない、人いない、といった三無状態の中で事業を進めなくてはならなくなる(小田, 1986; 1998)。このような状況の下では、“地域の

個性や独自性に即した事業”が期待されたとしても、自治体が実際にできることは“諸資源の制約といった実情に合わせた事業”にならざるをえない。これでは、地域のニーズに対応した効果的な事業などはとうていできようがない。

そうした諸資源の制約の中で公助にかかわる事業を展開しようとするときに自治体ができる手段としては、需要を抑制すること、既存の各種地域集団を施策の諸資源として活用すること、施策の諸資源として活用しうる集団・組織を育成すること、といった三つのことが考えられよう。

需要を抑制する最も簡単な方法は、自治体が提供するサービスの受給資格(条件)を厳しくすることである。たとえば、サービス受給年齢の引き上げは、その一例である。サービス内容によっては、より効果的な需要抑制の方法を採用することになる。しかし、需要を抑制するとしても、公助の役割を放棄するかのような過度の需要抑制はできない。質的側面を別にして、需要の量だけを考えた場合、抑制することが許される需要量の上限は、その地域の顕在的・潜在的需要量の全体から現有の諸資源を用いて供給しうる最大限のサービス量を差し引いたものとなる。抑制された需要は、充足されない需要となって残ることになる。地域福祉システムにおける自助とは、そうした未充足需要を住民個々が自らの力で充足することに他ならない。

たとえば、何らかの高齢者向けサービスの受給年齢を従前の65歳から70歳に引き上げることは、65歳から69歳の年齢層の需要を抑制したことになる。すると、その年齢層の人々は、そのサービスを受けられなくなるから需要のすべてを自助によって充足しなければならなくなる。しかし、未充足需要のすべてが自助で充足できるわけではない。仮に、公助による未充足需要の70%を個人が自助で充足できるとしても、30%は未充足のままである。

しかし、もし、70歳以上の人々が需要の30%を自助によって充足することができれば、その分だけ供給するサービスに余剰が生じる。その余剰分を65-69歳の人々の未充足需要分に充てることにすれば、受給年齢を65歳から70歳に引き上げずにすむ。要するに、需要全体を抑制でき、しかもサービス対象範囲を縮小することなく公助の役割を果たすことができるということである。

「自立支援」とは、以上のように、自助によっては充足しきれずに残った需要だけを公助によって充足しようとする支援の仕方である。個人が自助による需要充足率が高くなればなるほど公助による需要充足率は低くなるから、供給するサービスにより多くの余剰が生じる。その余剰分は、サービス対象範囲を拡大することに用いることもできるが、そうしなければ一層の需要抑制をもたらす、公助の負担を大きく軽減することになる。自助が強調され、「個人の自立を支援する利用者本位の仕組みの重視」が唱われるのも、そのためである。

は、その地域に既に存在している集団たとえば町内会・自治会や婦人会、ボランティア・グループ、NPO/NGO、その他の任意団体などを自治体の資源不足を補うための補完資源として活用することであり、は、新たなボランティア・グループやNPO/NGOなどの育成を奨励し、それらを補完資源として活用することである。それら諸集団・諸組織は、公助にかかわる事業に欠かすことのできない資源として公助にかかわる事業計画にあらかじめ組み込まれる場合もあれば、公助事業および自助とは別の需要充足の形態すなわち共助

の拡充を図ることを目的に育成される場合もある。

本来は、行政機構とは離れた別個の存在として固有の組織原理と行動原理を有する地域集団やボランティア・グループの育成・活動を自治体が熱心に奨励し、それらの活動に期待を寄せるのは、公助事業における諸資源の不足を補うことと、公助によって充足しきれずに残る未充足需要をそれら民間資源による私的な需要充足に委ねようとするからである。

共助というのは、読んで字のごとく共に助け合うということであるから一般的には互助的關係を意味するが、自助、共助、公助という使われ方の中では、自助、公助以外の私的な需要充足の形態を総称する言葉として用いられている。したがって、共助には、親族や友人・知人、近隣など日常的に面識のある人々によるごく限られた範囲での支援から個人あるいはグループによるボランティア活動やNPO/NGOなどの組織による支援まで、あるいは、無償の支援から、自助といってもよいほどにサービスを受ける際に相当程度の出費を伴う有償の支援まで多様な形態がありうる。

「公私の適切な役割分担と民間活力の導入の促進」も共助の拡充策といえなくもない。その意味では、自助、公助に比べて共助というのは多義的で曖昧な概念であるといえるが、共助を自助、公助と並べることによって公助以外にも多様な自立生活の支援形態があることを人々に説く上では便利な用語ではある。

自助に加えて共助の比重が高まれば、当然のことながら公助の比重はさらに低下する。自助も共助も本来は行政施策とは関わりをもつことのない私的行為であるが、それを「個人の自立を支援する利用者本位の仕組み」の中に取り込んで制度化しようというのが「個人の自立を基盤とし国民連帯でこれを支えるという、自助、共助、公助の重層的な地域福祉システムの構築」ということである。

以上、現在進められている「社会保障造改革の方向」を参照しながら、社会が、なぜ、いま、高齢者の自立生活に関する問題に高い関心を寄せ、高齢者に自助や自己負担、自己責任を求め、「個人の自立を支援する利用者本位の仕組みの重視」を社会構造改革の柱にし、「自助、共助、公助の重層的な地域福祉システムの構築」が唱えられているのかということについて考察した。その「方向」が正しいか、あるいは適切な選択であるかは措くとして、ここで指摘しておかなければならないことは、高齢者の自立に関わる問題を考える際には、まず、高齢期における自立生活への社会的要請の背景と理由を的確に理解しておくことが重要であるということである。

ところで、高齢期における自立生活が以前にもまして求められているとはいえ、個人の側からいえば、それに応えようとする心構えや意気込みだけで自立生活が可能となるわけではない。そして、社会の側からいえば、キャンペーンや啓蒙活動を大々的に繰り広げたからといって期待通りの結果が得られるわけではない。

既に触れたように、自立生活を可能にするには、そのために必要な活動能力を保持していなくてはならない。そうでない場合は新たに身につけることが必要になるし、本人にその意志があったとしてもそれが難しかったり十分にできない場合には支援が必要になる。社会の側は、今日の社会における自立生活に必要な活動能力がどのようなものであり、それがどの程度に必要で、その育成や支援にはどのようなことが求められるかを把握しておかなければならないであろう。

そのためには、高齢期における自立生活に求められる活動能力を適切に測定することが

できる尺度が必要になる。以下では、生活活動能力に関する先行研究のいくつかをレビューすることを通じて、新たな測定尺度の開発へ向けた検討を試みることにする。

2. 高齢期の生活活動能力

(1) 日常的コンピテンス(everyday competence)

Willis(1991)は、日常的コンピテンス(everyday competence)とは、成人が自立生活を送るために必須とみなされる諸活動を十分に行うことができる能力(ability)または潜在的可能性(potential)のことをいうとして、その概念の特徴を次のように整理している。

ある課題を遂行するための個人の潜在能力(potential)や才能(capability)であって、個人が毎日の生活の中で定期的に行っている具体的な行動(behaviors)とは区別される。ふだんは、自立生活に必須と考えられる広範な一連の諸活動のうちのほんの一部しか行っていないとしても、必要なときにはそれらを遂行することができる能力のことである。

高齢者の日常生活活動能力を考える際には、以下のような複数の領域と複数の要素を考慮することが必要である。領域としては少なくとも次の7つの領域を含む。1)薬剤摂取、2)家計管理、3)買い物、4)食事の支度、5)交通、6)電話、7)家事。要素としては、個人的要素と文脈的(contextual)要素を含む。日常生活活動能力は、ある特定の文脈や場面で発揮される複合的・序列的な認知的活動(cognitive activities)である。したがって、個人的な身体的、精神的、情緒的能力だけでなく、その個人がおかれている社会的、物理的な文脈の中で、その能力が重要とされるか、あるいはどの程度の水準が求められているかが考慮されなければならない。

遺伝子型(genotypic)または潜在的な構成概念(latent construct)のレベルで生活活動能力が考えられるときには、その能力は高齢者一般に適用される普遍的な能力として判定されるが、表現型(phenotypic)のレベルでは、その能力は文化や文脈によって規定される。たとえば、食事の支度ができることは全ての社会で日常生活を送る上で必須の活動能力とみなされるが、食事の準備に関連する活動や課題は文化によって異なる。イギリスではお茶を入れることと、それをトレーで運ぶことが手段的生活活動能力(IADL)に含まれているが、ニュージーランドでは庭仕事(ガーデニング)ができるかどうか日常生活における活動能力の判定に用いられている。

Willis(1991)は図1のようなモデルを示し、エヴリディ・コンピテンスを4つの局面に分けて説明している。4つの局面とは、先行条件(antecedents)、構成要素(components)、メカニズム(mechanisms)、結果(outcomes)である。

先行条件には、個人的な要因(機能的健康、認知機能など)と社会文化的要因(加齢に対するステレオタイプ、社会福祉政策、保健政策など)の両者が含まれる。高齢者のエヴリディ・コンピテンスは、それら両者によって規定されるとしている。

構成要素は、コンピテンスの特定の領域(身体的、精神的、社会的、物質的)や、特定の課題・行動に関わるものである。構成要素はそれぞれ異なる重要性を持ち、その個人に固有の状況に応じて実際の行動に影響を与える。メカニズムは、現実の日常生活におけるコンピテンスの水準を

左右する要素を含む。具体的には、個人の属性や統制信念(control belief)、自己効力感(self efficacy)などである。そして、結果は、心理学的、身体的な満足感・幸福感である。

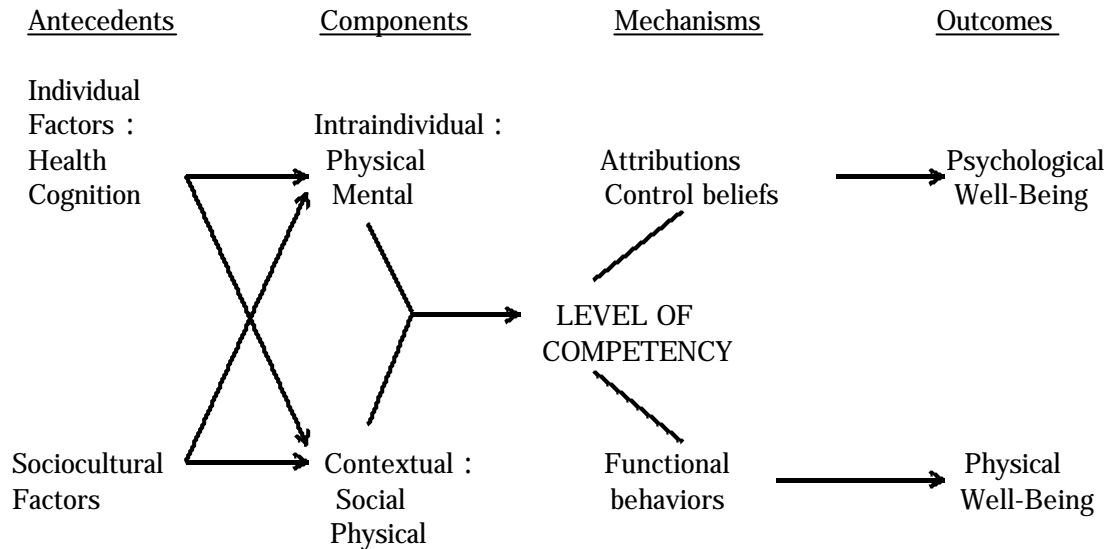


図1 . エブリディコンピテンスのモデル (Willis,1991)

上記の に見られるWills(1991)の日常的コンピテンス(everyday competence)の概念規定は、Diehl(1998)やBaltes et al.(1993)にも共通している。

Diehl(1998)は、それを、自分自身を世話し、自分に関係することを処理し、地域で自立して生活を送る上で必須と考えられるある種の課題を遂行することができる潜在的な能力であるとして、実際に行っている日常的行動そのものではなく、いつもはそうしたことをしていない、あるいは、そうした活動の一部分しかしていないとしても、それが必要なときに行うことができる能力と規定している。そして、個人の毎日の行動は、身体的、心理学的(認知的、情緒的)、社会的な要素あるいは領域を含んでおり、それらが複雑に作用し合いながら成り立っているとして、心理学的領域では、認知的問題解決能力や統制の信念、自己効力感や支配感、対処方法、感情統御などを、社会的領域では、社会的ネットワークから提供される援助の量とタイプを決める社会技術を含めて日常的コンピテンスをとらえている。

かれは、日常的コンピテンスという、これまではもっぱら個人の機能的健康(functional health)の観点からADLやIADLで評価されていたとして、これからは物理的、社会的環境との交流(transaction)が考慮されなければならないという。そして、Lawton and Brody(1969)のIADLをそうした試みの一つとしてあげているが、急速な技術変化、たとえば、現金自動預払機や留守番電話の普及など日常生活におけるコンピュータ化(computerization)が進んでいる今日にあって、これまでの日常的な問題解決のスキル(everyday problem-solving skills)では対処できない生活課題が多く生じてきていることを指摘し、高齢者もあらたな活動能力の獲得が迫られており、高齢者の日常的コンピテンスのレポーターは常に挑戦を受けているという。したがって、日常的コンピテンスを考える際には、個人的要因である身体的健康や認知機能だけではなく、社会文化的な要因として

のエージングに関するステレオタイプや社会福祉政策、健康政策にも留意する必要があることを強調している。

Baltes et al.(1993)は、日常的コンピテンスとは、日常生活を効果的に調整する能力であるという。そして、それは、自分の身の回りのことをするために必要とされるスキルから余暇活動に必要なスキルまで広範囲にわたる様々なスキルを編成し、必要なときにそれらを行使できる能力であると表現している。また、コンピテンス(competence)という用語は、1959年のWhiteの論文“ Motivation Reconsidered: The Concept of Competence ”以来、やる気(motivations)や能力(abilities)などさまざまな意味で用いられてきたが、それが指示する内容は以下のような3つの次元に分類することができるという。

第一はスキル(skill)の次元である。この次元でのコンピテンスは、社会的(social)、認知的(cognitive)、情緒的(emotional)、運動的(motor)な領域におけるスキルの範囲や水準のことを意味する。社会的スキル(social skills)や対処スキル(coping skills)の研究は、この次元におけるコンピテンスの研究である。

第二は、自分にできることや支配できる状況に関してその人が持っている個人的信念(personal belief)の次元である。この場合には、コンピテンスは、支配力(mastery)あるいは自己効力(self-efficacy)の程度で評定される。

第三は適応(adaptive-fit)の次元である。ここでは、コンピテンスは、個人のスキルと特定の環境からの要請(environmental demands)との間の適合性の観点から評定される。

この3つの次元を踏まえて、日常的コンピテンスは、日常生活を効果的に調整する能力であり、それは、自分の身の回りのことをするために必要とされるスキルから余暇活動に必要なスキルまで広範囲にわたる様々なスキルを編成し、必要なときにそれらを行使できる能力であると規定されている。かれらは、スキルの次元の日常的コンピテンスは、基礎的な活動能力(basic level of competence: BaCo)と拡張的活動能力(expanded level of competence: ExCo)の2つの要素で構成されるとして、それらを次のように説明している。

BaCoは、自分の身の回りの世話(personal care)に必要な活動能力であり、ADLで測定されるスキルと買い物ができることや商店までの歩いて行くことができるというIADLのうちのごく限られたスキルが含まれている。それは、生存のために、あるいは成人の自立生活に求められる習慣化、習熟化した活動に関連する能力であり、高齢者一般に求められる普遍的な能力である。言い換えれば、生きていくためには誰にとっても必要な活動である。したがって、心理学的、社会文化的、経済的要因による個人差は小さく、個人差は主として健康と関連する要因に由来する。

後にあらためて取り上げるが、ExCoは、自分の身の回りの世話のためのスキル以上のもので、余暇活動や社会的活動、IADLのすべての項目が含まれている。それは、個人的選好や動機に強く規定される能力であり、いわば単なる生存ではなくて目的的な生活を営むことができる能力である。したがって、ExCoは、その人の身体的活動能力そのものに左右されることは言うまでもないが、それ以上に、その人が保有する心理学的、社会文化的、経済的諸資源に強く影響を受ける。

『エイジング百科事典』のコンピテンスの項を執筆したWillis(1995)は、コンピテンスの概念を本節の冒頭であげた日常的コンピテンスの概念(Willis, 1991)と同様に説明した後、高齢期におけるコンピテンスに関する研究の特徴について次のような3点を指摘し

ている。

第一には、研究の焦点が、これまでのような心理学の実験室で行われてきた課題にではなく、高齢者が実際の日常生活で必要とされる活動を遂行するための能力(capacity)におかれている。そこでの問題関心は、高齢者の現実の日常生活を成り立たせる真に重要な活動は何か、ということである。

そのためには、日常生活における無数の活動のうち、何が重要あるいは決定的なものを判断する基準が必要になるが、多くの場合、それは、地域で自立して生活できる能力(capacity)とされている。そして、自立生活に必要な能力とは、人の世話にならずに身の回りのことができる能力(the ability to care for one's self)と、個人的な事柄を管理、処理できる能力(the ability to manage one's affairs)とみなされている。

機能的コンピテンス(functional competence)の研究では、前者はADLの、後者はIADLの研究で代表される。日常的認識力(everyday cognition)に関する研究では、薬剤の摂取や、金銭や医療にかかわる意志決定など日常生活においてとくに高い認識力を必要とする課題に焦点が当てられている。

第二には、コンピテンスの概念化や評価において認知的能力やスキルにとくに注意が払われていることである。後見人や財産管理人を必要とするか否かといった法的判断(legal judgement)においては、とくに能力欠如の原因を特定化することが求められるので、こうした傾向が顕著に見られる。

第三に、コンピテンスは、それ自体単独で個人に帰属するものではなく、個人のコンピテンスの水準は、個人の知識やスキルと環境からの要請との間の関係で決まるという共通認識があることである。したがって、物理的にも社会的にも高齢者を支える条件があれば、機能的欠損をもった高齢者でも十分に生活能力を発揮しうるし、逆に、機能的には十分な人でも、資源剥奪的環境(resource-deprived environment)の中では持っている能力を十分に発揮できずに自立生活が困難になることもある。

(2) ライフ・スキル/リビング・スキル

Baltesら(1993)のコンピテンスの分類に従えば、スキル次元での日常的コンピテンスを最も一般的に表現する用語としては、ライフ・スキル(life skills)あるいはリビング・スキル(living skills)をあげることができる。

ライフ・スキルという用語は、一般には青少年期の心理社会的能力を向上させる教育プログラムの中で使われている。その代表的な概念規定はWHO精神保健局によるもので(WHO, 1994)、「ライフスキルとは、日常生活で生じるさまざまな問題や要求に対して、建設的かつ効果的に対処するための能力である」。

この定義からいえば、ライフ・スキルとみなされるスキルには多くのものを考えることができるが(例えば、以下を参照。SLuRP, 1999; infowest, 1999; The Daily Motivator, 1999)、WHO精神保健局では、「青少年の健康を増進することをねらいとするスキル形成に基礎をおく教育では、中核となるいくつかのスキルがあることが示唆されている」として、「意志決定」、「問題解決」、「創造的思考」、「批判的思考」、「効果的コミュニケーション」、「対人関係スキル」、「自己意識」、「共感性」、「情動への対処」、「ストレスへの対処」をあげている。

高齢者の個別スキルに関する研究は上述のBaltesら(1993)の指摘にもあるように少ないが、高齢期のライフ・スキルの問題を真正面から取り上げた研究は多くはない。というよりは、エイジング研究においては、ライフ・スキルの概念はこれまでほとんど用いられることがなかった。この点については以前に議論したことがあるので(小田ほか, 1997)、ここでは、もう一つの用語であるリビング・スキルを取り上げることにする。

リビング・スキルは、ADLと同義に(Mahurin et al.,1991)、あるいはIADLと同義に(Williams et al., 1991)用いられることもあるが、ここでは、イギリスで発行され、グループ・ワークの手引き書として評価の高い*Living Skills II*(Wycherley et al., 1994。これは、1987年に発行された*Living Skills*の改訂版である)でいうリビング・スキルの意味しているところを見ておくことにする。なお、以下で『リビング・スキル』と括弧書きした場合は、この*Living Skills II*を指す。

『リビング・スキル』では、まず、「スキル」という言葉が、バイオリンを弾いたり語学が達人であったり、煉瓦積みが上手といったような「特技」を指して使われることが少なくないことを指摘した後に、『リビング・スキル』で扱うスキルは、より日常的な行為に関係する心理社会的スキルに限定し、料理やガーデニング、家庭管理といった実用的スキルも扱わないと断っている。そして、リビング・スキルとは、人生から最大限のものを引き出し、自分に降りかかる挑戦や困難に効果的に対応するために必要なスキル(skills)であるとしている。

『リビング・スキル』は、ライフ・イベントを処理するために重要なスキルを改善・向上させることを手助けするという目的を持ったグループ・ワークの手引き書であり、詳細なトレーニング・プログラムで構成されている。そして、そこで重要とされている課題は、「自分を大切にすること」(caring for yourself)、「自己主張」(asserting yourself)、「ストレス処理」(managing stress)、「合理的に考える」(thinking rationally)、「社会関係」(relationships)、「怒りや葛藤の処理」(managing anger and conflict)、「計画と組織化」(planning and organizing)、「問題解決」(solving problems)の8つである。

リビング・スキルとは、そうした課題に適切に対応し、それらを適切に処理するために必要とされる心理社会的なスキルということである。そして、そうした心理社会的なスキルの意義を根拠づける理論モデルとして次のような4つが採用されている。

Cox and Mackayのtransactional stress model - わたしたちは常に環境からさまざまな要求(demands)に応えることを求められている。それらの要求に対応する能力(capability)の程度は人によって異なる。この能力は、字を読むことや運転のように学習されたスキル、健康、知性といった個人の内部資源、その人の職業やサポート・システムのような外部資源によって規定される。環境からの要求とそれに対応する能力とが均衡していないときにストレスが生じる。

前者が後者を越えると、どのように処理してよいかわからなくなり、その逆に、後者が前者を十分に上回っているときには、退屈で刺激に乏しいと感じることになる。対応能力と環境からの要求とのバランスを判定する過程は評価(appraisal)と呼ばれる。そこでは、ストレスの原因を明確にし、自分が置かれている状況を処理することができるか、それを処理するための計画をたてることができるかが課題となる。そして、その正否がストレスの程度やパターンを決めることになる。評価の過程は、環境からの要求とそれに対応する

能力との間のサイクリカルな過程である。

認知モデル(cognitive model) - 個人的信念と、それが判断と予測を誤らせる筋道に着目する。信念は、行為を無駄にしたり情緒的な苦痛に導かないように、現実に対応して変化する。

成人の成長発達モデル(continuing growth and development process) - 成人期および成人期以降も、人間は成長、発達を続ける。成人期は成長、発達の一過程である。

交換理論 / 社会的相互作用モデル(exchange theory/social interaction model) - 社会関係は物的および非物的な財やサービスの交換の過程である。

各課題に対応するトレーニング・プログラムが以上のような理論モデルに則って作成されており、参加者はそれに基づいて小グループごとのワークショップでリビング・スキルを改善・向上させるためのトレーニングを行う。『リビング・スキル』は、成人を対象とした健康の促進、精神保健(mental health)、退職準備プログラムなど各種のグループ・ワークに用いられてきており、高齢期の自立生活に必要な心理社会的能力について検討する上で多くの有益な情報を提供している。とりわけ、上で述べた8つの課題のそれぞれについて20項目からなる「スキルに関する自己評価項目」(skills evaluation checklist)は、心理社会的な活動能力に関する測定尺度を検討する上で参考になるところが多い。

3 . 日常生活活動能力の測定尺度

高齢期における自立生活に必要な活動能力を問題にするときにまず明らかにしなければならないことは、今日の高齢者がどの程度の生活活動能力を保持しているかということである。そのためには、それを適切に測定しうる尺度を用意することが必要になる。これまでも多くの測定尺度が作成され、用いられてきたが、既に述べたように、高齢者の日常生活活動能力を評価するために“黄金標準(gold standard)”として一般的に受け入れられている測定尺度は未だ用意されてはいない。

そこで、以下では、これまで提案され、使われてきた代表的な測定尺度を取り上げて、新たな測定尺度の開発へ向けた若干の考察を試みることにする。

(1) ADLとIADL

ADL(Activities of Daily Living)は、ごく一般的にいえば、日常生活を送る上で必要な諸活動を指す用語といえるが、通常は日常生活を送っていく上で最低限度必要な身体的活動あるいは身体機能(functional health : ある活動を可能にする身体的状態=機能的健康度)を指して用いられており、日本では一般に「日常生活動作」と表現されている。その内容についてはとくに決められたものはないが、身体的自立を可能にする最低限度必要な身体的活動能力ということからすれば、自ずから活動内容が限定されてくる。

たとえば、OARS(Older Americans Resources and Services)のMFAQ(Multidimensional Functional Assessment Questionnaire)では、「食事をする」、「服を着る」、「身づくろいをする」、「歩く」、「ベッドに入る」、「ベッドから出る」、「入浴をする」といった7つの項目を身体的ADL(Physical ADL : PADL)とし、それぞれについて「介助なしでできる」、「いくらかの介助を必要とする」、「介助なしでは一人では全くできない」の3件法で活動能力を測

定している (Fillenbaum, 1985)。

痴呆老人の診断と処遇計画のために機能的活動能力 (functional ability) を測定する尺度である SAILS (Structured Assessment of Independent Living Skills) は、運動課題 (Motor Tasks) として「細かい運動のスキル」(Fine Motor skills)、「大まかな運動のスキル」(Gross Motor Skills)、「着衣スキル」(Dressing Skills)、「飲食スキル」(Eating Skills)、認知的課題 (Cognitive Tasks) として「言語表現」(Expressive Language)、「言語理解」(Receptive Language)、「時間と見当識」(Time and Orientation)、「金銭関係のスキル」(Money-Related Skills)、その他に「手段的活動」(Instrumental Activities)、「社会的相互作用」(Social Interaction) の 10 領域それぞれに 5 つの課題の計 50 課題から構成されており、各課題の達成度を 0～3 の 4 段階で評価する (Mahurin, 1991)。

以上のような尺度で測定される生活活動能力は、部屋または住宅というごく限られた生活空間における自分自身の身の回りの世話の可否にかかわるものである。これに対して、IADL は、より広い生活空間である地域における自立生活に必要な最低限度の日常的活動を想定している。

IADL の創始者とされる Lawton は、身体的活動能力より高次の活動能力を手段的活動能力とみなして以下に示すような 8 項目からなる IADL を作成した (Lawton and Brody, 1969)。この尺度は、丸数字の項目に該当したときには 1 点を与え、丸数字ではない項目に該当した場合は 0 点を与えて、その合計点で活動能力を判定するものである。

以上の諸項目は、それ以後に作成されてきた各種の IADL の基本項目になってきた。

A. 電話を使用するための能力

自分からすすんで電話をかける (電話番号を探して自分でダイヤルする等)。

数か所のよく知っている番号にかける。

電話には出るが、かけることはしない。

4. まったく電話を使わない。

B. 買い物

必要な買い物は全部自分です。

2. 小物の買い物は自分です。

3. 買い物に出かけるときは付き添いが必要。

4. 買い物は全くできない。

C. 食事の支度

自分で計画し、準備し、ちゃんとした食事を作って食卓にならべる。

2. 材料が提供されればちゃんとした食事を支度する。

3. 用意された食事を暖めたり食卓に並べたりするが、ちゃんとした食生活を保てない。

4. 食事を用意してもらい、給仕してもらおう必要がある。

D. 家事

ふだんは一人で行い、ときには手助けが必要 (大がかりな作業のときなど)。

皿を洗ったり寝具の用意などの軽い日常的作業は一人です。

軽い日常的作業はするが、適切な清潔さの水準を維持できない。

すべての家事に手助けを必要とする。

5. どのような家事もできない。

E. 洗濯

完全に一人で行える。

靴下やストッキングのゆすぎなど簡単な洗濯はできる。

3. すべて他人にしてもらわなければならない。

F. 移動の方法

一人で公共交通機関を利用するか、自分で自動車を運転する。

タクシーを使って一人で外出するが、公共交通機関は使わない。

手助けしてもらるか付き添ってもらえば公共交通機関を使って外出する。

4. 手助けが必要で、外出はタクシーか自家用車に限られる。

5. まったく外出しない。

G. 自分の薬に対する責任

正しい時間に正しい薬の量を摂取する責任を負える。

2. あらかじめ一回分を分けて用意してあれば自分の責任で摂取できる。

3. 自分の薬を自分で摂取できない。

H. 金銭管理の能力

金銭を自分で管理でき(予算を立てる、小切手をきる、家賃や請求料金の支払い、銀行へ行く)、自分の収入を確保し、常に収入について注意を払っている。

その日その日の買い物はできるが、預金したり大きな買い物には手助けが必要。

3. お金の扱いは一切できない。

たとえば、OARSのIADLは、「洗濯」を除く7項目から成っており、3件法で活動能力を測定するようになっているが、Fillenbaum(1985)は、各種のIADLを検討した後に、多次元的功能評価(multidimensional functional assessment)は重要だが、多くの高齢者は元気で十分な活動能力を持っているから、そうした評価方法は高齢者に負担をかけるだけであり、その意義を正当化するのは難しいとして、短くて有効で信頼のおける少数項目でIADLを評価することを提言した。

かれが用いた5つの項目と質問・回答形式は次のようなものである。

歩いてはいけない距離の場所に行くことができますか。

- 1) バスやタクシー、自動車で自分一人で行ける
- 2) 助けが必要

日用品や服を買いに行くことができますか。

- 1) 必要なものは全て自分一人で買い物ができる
- 2) 助けが必要

自分の食事を作ることができますか。

- 1) 自分一人で献立を考え、調理できる
- 2) 助けが必要

家の中のことが一人でできますか。

- 1) 床磨きができる
- 2) 助けが必要

自分のお金を管理できますか。

- 1) 自分一人で小切手を切れる、請求書の支払いができる
- 2) 助けが必要

Diehl et al.(1995)が紹介しているEPT(Everyday Problems Test)は、「食事の準備と栄養」、「薬の利用と健康行動」、「電話の利用」、「買い物」、「家計管理」、「家庭管理」、「交通」の7領域に関して84項目という多数の項目から成っている。Diehlらは、62人の高齢者を対象にEPTを実施するとともに、できる限り実際の日常生活に即していることと課題遂行が客

観的に得点化できるような観察可能な課題であること、という2つの基準に基づいて OTDL(Observed Tasks of Daily Living)という尺度を作成、利用して実験的手続きで日常的問題解決能力(everyday problem-solving competence)を測定している。

取り上げられた日常生活上の課題(tasks)は、「食事の準備」に関係するものが9つ、「薬剤摂取」に関係するものが13、「電話の利用」に関係するものが9つの計31項目である。これら3つの領域の課題が選定されたのは、それらがこれまでの多くの研究によって高齢期の自立生活における最も重要な課題であることが明らかにされているということと、一度に多くの課題をとりあげることができないという実験上の理由からである。

それら3領域の課題は、電子レンジを使ってケーキを焼くための一連の作業、架空の人物に対して3種類の薬を指示通りに投薬する一連作業、9頁にわたる電話料金の請求明細書の中から長距離電話の請求分を日付順に拾い出す作業である。

ADLとIADLを統合した尺度を用いた研究では、以下の16の項目があげられている(Spector and Fleishman, 1998)。ADL項目は、「入浴」、「服の着脱」、「家の中を自由に動き回る」、「物を移動させる」、「トイレに行く」、「失禁の有無」、「食事」の7項目であり、IADL項目は、「食事の支度」、「家事」、「洗濯」、「買い物」、「金銭の管理」、「薬剤摂取」、「電話」、「歩いていける距離の場所に出かける」の8項目である。かれらは、約3,000人を対象とする調査から得られたデータの分析に基づいて、この統合尺度が一次元尺度であるとともに、ADLとIADLとの間には明確な階層関係がないことを明らかにしている。

(2) より高次の生活活動能力の測定項目

ADLやIADLの尺度は、自立生活に必要な最低あるいは最小限度の諸活動に焦点を当てて活動能力を測定しようとするものであるから、いってみれば、そのことをしなくても自立して生きていくことができると判断される活動は取り上げられない。しかし、自立的に「生活する」ということは、単に他者の援助なしに「生存する」ということではない。

人間は、マズローを引き合いに出すまでもなく、最低次の生理的欲求から最高次の自己実現の欲求へと階層構造をなしているさまざまな欲求をもち、それら諸欲求の充足に向けて行動する。自立的に生活するということは、そうした欲求充足行動が他人の手を借りずにできるということである。

もとより、ADLやIADLの尺度は、人間の欲求という面を無視している、というわけではない。それらの尺度は、人間の多様な欲求のうち、自立生活にかかわる相対的に低次の欲求の充足能力を測定することを目的とした尺度であるということである。

そのために、そうした観点から作成されるADLやIADLの尺度は、例えば、スウェーデンでは、銀行に預金したり預金を引き出す場合に多くの人が郵便局を通じて行うので IADL項目の「金銭管理」に「郵便局に行く」ことも含めているように、その国の事情が考慮されたりすることもあるが(Femia et al., 1997)、さまざまな検討や工夫が加えられたとしても、取り上げられる活動項目は似たり寄ったりのものにならざるを得ない。

そうであるならば、対象者の負担にならないようなごく少数の項目で構成される測定尺度が望ましいことになる。上で見たFillenbaumの5項目2件法によるIADL尺度や実験用尺度としてのOTDLの意義は、そうしたところにあるといえる。

より高次の欲求に対応した活動能力の測定を目的とする尺度としては、たとえば、「老

研式活動能力指標」と名付けられている測定尺度がある(古谷野, 1992)。この尺度は、「バス・電車での外出」、「日用品の買い物」、「食事の支度」、「請求書の支払い」、「預貯金の出し入れ」、「年金の書類が書ける」、「新聞を読む」、「本や雑誌を読む」、「健康情報に関心をもつ」、「友人の家を訪問する」、「家族等の相談にのる」、「病人を見舞う」、「若い人に話しかける」の13項目からなっている。

最初の4項目は他のIADL尺度の諸項目と同様に高齢期に必要な最低限度の手段的活動に関するものであるが、それらに加えて、知的活動およびLawton and Brody(1969)が最も高度で複雑な活動能力とした社会的役割の遂行にかかわる項目を含んでいる。測定に当たっては、それぞれの項目に関して、「できる」、「できない」の2件法で回答を求め、「できる」に1点を与える。そして、その合計点で回答者の活動能力が評価される。

既に触れたBaltesら(1993)のExCoの測定には、過去1年間に家庭以外で行った社会活動と、前日に家庭内あるいは家庭外で行った活動に費やした総時間数(分)といった2つの指標が用いられている。前者の指標を構成する項目は、「スポーツ」、「外食」、「ダンス」、「日帰り旅行」、「宿泊旅行」、「文化的イベントへの参加」、「文化活動」、「趣味」、「政治活動」、「教育」、「ボランティア活動」、「ゲーム」の12項目である。それぞれの項目には頻度に応じて0~9の得点が与えられ、それらの合計点がこの指標による社会活動能力の水準を示ことになる。

後者に関しては、「買い物と移動を除いたIADL」、「役所とのやりとり」、「余暇活動」、「社会活動」、「健康行動」、「他人を援助」、「労働」の7項目が取り上げられ、それらに費やした総時間数がこの指標による活動能力の水準を示すことになる。そして、ExCoの水準は、前者の得点と後者の総時間数の総計で示される。

高齢者の日常的な諸活動を網羅的に取り込んだものとしてはBaltesら(1990)の研究をあげることができる。彼らは、“加齢過程は人と環境との相互作用の過程として記述されることが多いが、活動のタイプや場所、仲間といった外部要素の観点から高齢者の日常生活を記述した信頼できるデータがない”という問題関心から、自立生活を送っている49人の高齢者を対象に、毎月一週間、どんな活動を、いつ、どこで、だれと、どれくらいの時間を使って行ったかを6か月間にわたって記録した。その結果、26,220の活動項目が得られた。それらは、以下のように、大分類では義務的活動と余暇活動の2つのカテゴリに、中分類ではADLとIADLをはじめとする11のカテゴリに、小分類では37のカテゴリに類別された。

・義務的活動 (obligational activities)

ADLとIADL

- 1)自分の世話、 2)飲食、 3)その他のADL、 4)買い物、 5)軽い家事、 6)重い家事、 7)針仕事、 8)その他のIADL、 9)法的事柄、 10)郵便関係、 12)その他

医療関係

- 13)自分で投薬、 14)他人が投薬

交通

- 15)公共交通機関の利用、 16)その他

休息

- 17)昼寝、 18)その他

・余暇活動

身体的活動

19) 散歩、 20) 庭仕事、 21) 小旅行、 22) スポーツ、 23) 文化活動

精神的活動

24) 継続教育、 25) 創造的活動、 26) 読書、 27) 書き物、 28) ゲーム

視聴

29) ラジオ、 30) テレビ

社交

31) 対面的会話、 32) 電話での会話、 33) 訪問

ボランティア活動

34) 家族員を援助、 35) 他人を援助

宗教的活動

36) 宗教活動

その他の余暇活動

37) その他の余暇活動

以上の諸活動のうち、もっとも頻度が高くて高齢者に典型的な活動は義務的活動であり、使われている時間は一日のうちの半分以下で、たいていは午前中に行われていた。そして、午後と夜は余暇活動に当てられていた。諸活動の場所に関していえば、家庭が最も多く、次いで公共の場であった。この研究では、取り上げられた諸活動は、生活活動能力の水準を測定するための項目としてではなく、高齢者の日常的な活動パターンを見出し、それと機能的健康度(functional health)や自己統制(personal control)との関係を明らかにするための素材として用いられている。

見出された活動パターンは、「認知志向」(精神活動に多くの時間を使い、マス・メディアの視聴時間が短い)、「身体活動・メディア志向」(余暇活動が身体的活動中心で、同時にマス・メディアの視聴時間が長い)、「ADL・IADL志向」(他の活動にあまり時間を使わずに義務的活動のために多くの時間を使っている)の3つである。そして、「身体活動・メディア志向」は機能的健康度と自己統制の水準が最も高く、「ADL・IADL志向」は、その反対に、それらの水準が最も低かった。

高齢者のみを対象としたものではないが、20～78歳までの成人男女126人を被験者として、知能(intelligence)の構成要素としての実用的(practical)および社会的(social)コンピテンスを評価するために行われた研究では(Cornelius and Caspi, 1987)、「消費者としての立場」、「複雑な情報の処理にかかわること」、「家庭生活にかかわること」、「家族関係」、「友人関係」、「職場での人間関係」という6つの課題領域からなる日常生活問題解決検査票(Everyday Problem Solving Inventory)が新たに作成され、用いられている。

その検査票には、以下に記すように、それぞれの領域ごとに日常生活において人々が経験するであろう問題状況と、その解決のために人々がとると考えられる4つの行動が提示されている。回答者は、仮にそうした状況が生じたときに、自分ならどの行動をとるかを、A～Dのそれぞれについて、「絶対そうしない」、「多分そうしない」、「そうするかもしれないし、そうしないかもしれない」、「多分そうする」、「絶対そうする」の5件法で回答する。

「消費者」 修理をしてほしい箇所があるのだが、家主は費用がかかりすぎるといって修理してくれない。

- A. 自分で修理することを試みる
- B. 家主の考えを理解しようと努め、必要な修理かどうかをもう一度考える。
- C. 自分と家主との間に立って両者の言い分を聞いて調停してくれる人を見つける。
- D. その問題を考えないようにする。

「情報」 記入するのに手間のかかった書類が、説明書を読み間違えて記入していたために送り返されてきた。

- A. 正確に記入するための情報をもっと集める。
- B. 何が間違っていたかを自分一人で理解しようと努める。
- C. 正しい記入の仕方を誰かに聞く。
- D. 明快な説明書を作っていない会社が悪いと非難する。

「家庭」 夜、会合やコンサートに出席するために外出したいが、安全かどうか確信がない。

- A. 安全を確保するために用心をする。
- B. 出席することが重要かどうかもう一度考える。
- C. 一緒に行ってくれよう誰かに頼む。
- D. 心配するのをやめる。

「家族」 両親あるいは子どもが、あなたの習癖を批判した。

- A. 行動をあらためようとする。
- B. その批判が正当なものかどうかを現実的に評価してみる。
- C. 習癖は変えないが、両親あるいは子どもが身近にいるときには、それをしないようにする。
- D. 批判を無視する。

「友人」 友人たちがもっと頻繁に自分を訪ねてきてほしい。

- A. 友人たちを家に招待する。
- B. 友人たちが自分を訪ねてこようとはしないのはなぜかを理解しようと努める。
- C. その状況を受け入れて何もしない。
- D. そのことを気にかけないようにして、他のことに目を向ける。

「職場」 自分が望んでいた職務への移動あるいは昇進が見送られたことを知った。

- A. そうなった理由を見つけようとする。
- B. その状況の肯定的な側面を見るようにする。
- C. 決定を受け入れ、そのことについてはそれ以上考えない。
- D. その決定が不公平だと友人や他の人に愚痴をこぼす。

提示された4つの問題解決行動は、それぞれ次のような4つのタイプの行動に対応している。

- A. 「問題に焦点を当てた行為」(problem-focused action)： その問題と影響を直接処理する自己主導的で公然とした行動。状況を変えるための直接行動や関連する情報や助言を求める。

- B. 「認知的問題分析」(cognitive problem analysis) : その状況を的確に判断したり、もっとよく理解するために、あるいは、論理的分析を通じて問題解決を図るために、また、異なった観点から状況を再解釈するために精神的intrapsychicあるいは認知的cognitiveな努力をする。
- C. 「受動的・依存的行動」(passive-dependent behavior) : その状況から身を引いたり、逃避する。状況を変えるために自ら進んで何かすることをしない。その問題を解決するために他の人に依存したり他人任せにする。
- D. 「逃避的思考と否認」(avoidant thinking and denial) : 状況そのものや個人の責任を認めようとせず別のことに関心を向け、感情を抑制することを通じて状況への感情的反応を制御する。

例示された問題領域ごとの4つのタイプの問題解決行動は、それぞれAのタイプがその問題解決に最も効果的で、以下、順に効果度が下がることが評価者間の分析を通じて事前に確認されている。しかし、例示された以外の課題ではそのことが当てはまらない(A以外のタイプの問題解決行動が効果的である)ことも指摘されている。したがって、この種の形式で高齢者の日常生活活動能力を測定するときには、どのような課題を例示するかが問題になるが、日常的な生活課題に対して、高齢者は、どのような対応をしているか、あるいはしようとしているか、そして、なぜ、そうした行動をとるのか、といったことを生活活動能力と関連させて分析する際には、このような問題解決行動の類型的把握が必要となろう。Willis et al.(1992)は、多くの尺度を用いて高齢者の日常的課題対応能力の長期的変化を研究しているが、そこにおけるPCIもそうした目的を持った検査票である。かれらが用いている尺度は次の通りである。

知能尺度(流動的知能、結晶的知能、記憶、知覚の早さ)、 日常能力尺度(印刷素材を含む総合的な日常的課題への能力を評価するもので、さまざまな図表や書式 - 体重表、薬瓶のラベル、保証書などの技術的文書、編集者への投書など65項目からなるTest of Basic Skills)、 知的統制信念尺度(PIC検査票-Personality-in-Intellectual-Aging Contexts Inventory : 高齢者の認知機能に関する信念や属性を測定するために開発されたもので、日常生活におけるさまざまな場面での対応能力を把握する諸項目から成り立っており、以下の6つの尺度を含んでいる - 3つのローカス・オブ・コントロール尺度<Locus of Control Scales : internal, chance, powerful others>、不安尺度<知的能力が要求される課題への感情的反応を評価>、モラル・スケール<morale scale : 加齢に伴う知的能力の変化を自覚する程度を調べる>、知的自己効力<Intellectualself-efficacy>)。

高齢者の知能(Intelligence)や知恵(Wisdom)に関する研究は早くから行われてきたが、高齢期における日常生活活動能力の問題を考える上で、今日、その重要性は一層高まってきている(Baltes, 1993; Hayslip et al. , 1995)。Baltes and Baltes(1990)とBaltes(1993)は、機能的に衰退していく高齢期においても活動能力が維持されるのは(維持されるとすれば)、そこに補償(compensation)を伴った選択的最適化(selective optimization)というメカニズムが働くからだとする高齢期における知恵のモデルを提起している。その詳細は省くが、このモデルは、高齢者の現実の自立生活をとらえる上できわめて示唆に富むものであり、日常生活活動能力を測定する際にも、また、自立生活を支援する方策を検討する際にも有用な道具になりうると思われる。

4 . 日常生活活動能力の測定上の留意点と課題

高齢期における日常生活活動能力の測定尺度と測定方法のいくつかをみてきたが、ここで、生活活動能力を実際に測定する際の留意点と課題について触れておくことにする。

既にみたように、コンピテンス(competence)の概念で指示する内容は、具体的な活動ではなく、必要なときにはそれらを遂行することができる潜在能力とされている。したがって、コンピテンスの概念に基づいて測定しようとするものは「していること」ではなくて「できること」であるから、Willis(1995)も言うように、対象者に対して提示される質問の形式は、普段その活動を「していますか」ではなく、その活動が「できますか」ということになる。この質問形式の違いの問題は、しかしながら、当然のこのようである、そう簡単にすませることができない問題を含んでいる。

ごく一般的にいえば、「できること」を聞くということは、実際には「していないこと」に対しても「できますか」と聞くことである。しかし、必要なときにはそれを遂行することが「できる」、あるいは、やろうと思えば「できる」と本人あるいは周囲のものが思っている、そのときになって果たして思い(期待)通りにできるかどうかは本当のところはわからない。それをする必要が生じなければ、あるいは必要と思うことがなければ具体的な行動となって現れることはないから、「できる」か「できない」かわからず終いになってしまう。

人間は、何かしようとする意志や欲求があっても、最終的には、それを行うために「エネルギーの動員」すなわち実際にその行動に向けて身体的にも精神的にもエネルギーの消費がなければ行為は成り立たない。「やろうと思えばできる」ことや「必要なときにはできる」ことと、実際に「していること」や「したこと」とは全く別のことなのである。

「していること」は、それが義務的なものであっても自発的なものであっても、その人にとっては必要に基づいた活動である。したがって、「していること」は、「できること」が必要なきに顕在化したものと見ることもできる。しかし、「できること」は実際に行動となって現れない限り、すなわち観察することができなければ「できること」として客観的には判断できない。

しかし、直接観察できるものだけで活動能力を評価しようとするれば、ADLやIADL、OTDLの尺度のように取り上げる活動は限られてくる。もとより、臨床的目的で高齢期の自立生活に必要な最低限度の活動能力を測定するというのであればそれがかまわない。しかしながら、そうした限られた活動の能力を測定するだけで高齢期における現実の日常生活活動能力を的確に判断しうるかという問題が生じる。

ところが、先に挙げたBaltes et al.(1990)の余暇活動の項目やBaltes et al.(1993)のExCoの項目のように、実際に「していること」に着目しようとする、きわめて多種多様な活動内容を取り上げなければならなくなる。すると、それらを「している」か、「していない」かを聞くことは、高齢者の活動能力を測定するためというよりも、単に高齢者の活動内容や関心・興味の違いを明らかにすることになってしまう。それは、それで意味あることではあるが、そうした多様な活動内容を取り入れて高齢者の活動能力の水準を測定しようとするならば、次には、個々の活動に関して、その活動水準を測定することが求められよう。「していること」は同じように見えても、その達成度に違いがあると考えられるからである。

しかし、また、それとは反対に、上で見た4つのタイプの問題解決行動のように、ある

いは、ウェーバーの行為概念に従えば(Weber, 1922)、外見上は「何もしていない」あるいは「できない」ように見えることでも、それが意識的に「しない」あるいは「しようしない」ことの結果であれば、言い換えれば、そのことを「しない」ことがその人にとって意味ある行動だとすれば、そのことがその人には「できない」と判断するわけにはいかないことになる。

「できない」から「したことがない」あるいは「しない」というのは了解できても、「したことがない」あるいは「しない」から「できない」とは限らない。「している」ことだけを取り上げたのでは、その人の潜在能力をとらえることはできない、ということである。

日常生活活動能力を測定する際には、以上のような問題が常につきまとうことに留意しておかなければならない。しかし、また、潜在能力そのものを直接測定することは事実上不可能であるから、それを測定可能なものとして操作的に定義しなければならない。

これまで見てきた尺度の多くは、そうした操作的概念のもとで、実際には「していること」を聞いて「できること」を測定しているのであるが、今日およびこれからの高齢者が自立生活を送っていく上で求められる活動能力とはどのようなもので、それを測定するにはどのような活動を尺度の構成項目に取り上げるかが重要な課題になる。

Diehl(1998)も指摘していたように、あらゆる生活領域で電子化、コンピュータ化が進んでいる時代である。日本では、日常生活への外国語の流入はますます勢いを増している。良質の住宅地を求めて郊外の大規模住宅団地に移り住んだ人たちにとって、自家用車なしの生活は考えられないが、徒歩圏内に商店や医療施設などが無い郊外住宅地は、高齢期における自家用車の必需性をさらに高めている。過疎化・高齢化が進み、公共交通手段もない郡部に住む高齢者にとっても事情は同じである。

今日およびこれからの高齢者は、自立生活を送るには、否応なしにそうした環境に適応していかなざるを得ない。その逆に、そうした環境は、かつてよりも、より多様な欲求を充足できる可能性を高齢者に提供していることでもある。

また、年金制度の改正や介護保険制度の創設、低金利政策などに伴って、高齢期における収入の確保がいま以上に難しくなるとともに支出は確実に増加することが予想されることから、現在およびこれからの高齢者には、かつて以上に経済的自立にかかわる活動能力が求められることになる。

高齢期における日常生活活動能力を測定するための尺度は、見てきたように、これまでも多くのものが作成、使用されてきたが、以上のようなことを考慮に入れて作成された適切な測定尺度は未だ開発されていないといってよい。ADLやIADLに類する測定尺度に加えて、いま必要としている測定尺度は、サクセスフル・エイジングやプロダクティブ・エイジング、エフェクティブ・エイジングにかかわる活動能力を測定する尺度である。

例えば、Guralnik et al.(1994)は比較的早くにそうした問題関心から健常な高齢者を対象とする活動能力の研究を試みたが、そこで測定されているのは体力検査による身体的運動能力であり、日常生活活動能力ではない。

おわりに

本稿では、高齢期における自立生活がこれまで以上に求められている社会的背景につい

て整理し、そうした下での日常生活活動能力の問題に関して若干の考察を試みた。高齢期における自立生活の問題は、個人にとっても社会にとっても、疑いもなく現在および将来の重要な課題である。高齢化問題が喧伝される中で、人々は身体的にも、経済的にも、精神的にも自立した老後生活を送りたいと願っており、低迷する経済の下で超高齢化社会の到来を迎えようとしている社会は、その存続・発展のために高齢者に強く自立生活を求めている。

こうした中で、個人の側でも社会の側でも活発に自立論議が展開されているが、介護にかかわる問題を除くと、そうした論議の内容のほとんどは、個人の側においては「期待」と「心がまえ」であり、社会の側においては「強制」と「啓蒙」である。自立・自助、共助といい、自立支援というが、高齢者の現実の日常生活活動能力を適切に評価した上で議論されることはほとんどない。本稿で専ら高齢者の日常生活活動能力の測定尺度について検討してきたのはそのためである。

既存の主要な測定尺度とそれらの特徴および高齢期の日常生活活動能力に関する基本的な論議は整理しえたものと考えるが、見逃している優れた尺度も多いと思われるし、取り上げなければならない研究で残したものも多い。たとえば、日常生活活動能力があっても、それが低下することへの不安(Lachman et al., 1998)や自立生活を困難にしている別の要因(Mack et al., 1997)も、高齢期における自立生活の問題を考える上で重要な課題である。

文 献

- Baltes, Paul B. (1993). *The Aging Mind*, *The Gerontologist*, Vol. 33, No. 5, 580-594.
- Baltes, Paul B. and Margaret M. Baltes eds. (1990). *Successful Aging: Perspectives from Behavioral Sciences*, Cambridge University Press.
- Baltes, Margaret M., Hans-Werner Wahland Ulrich Schmid-Furstoss (1990). *The Daily Life of Elderly Germans: Activity Patterns, Personal Control, and Functional Health*, *Journal of Gerontology: Psychological Sciences*, Vol. 45, No. 4, 173-179.
- Baltes, Margaret M., Ulrich Mayr, Markus Borchelt, Ineke Maas and Hans-Ulrich Wilms (1993). *Everyday Competence in Old and Very Old Age: An Inter-disciplinary Perspective*, *Ageing and Society*, No. 13, 657-680, Cambridge University Press, UK.
- Cornelius, Steven W. and Avshalom Caspi (1987). *Everyday Problem Solving in Adulthood and Old Age*, *Psychology and Aging*, Vol. 2, No. 2, 144-153.
- Diehl, Manfred (1998). *Everyday Competence in Later Life: Current Status and Future Directions*, *The Gerontologist*, Vol. 38, No. 4, 422-433.
- Diehl, Manfred, Sherry L. Willis and K. Warner Schaie (1995). *Everyday Problem Solving in Older Adults: Observational Assessment and Cognitive Correlates*, *Psychology and Aging*, Vol. 10, No. 3, 478-491.
- Femia, Elia, Steven Zarit and Boo Johanson (1997). *Predicting Change in Activities of Daily Living: A Longitudinal Study of the Oldest Old in Sweden*, *Journal of Gerontology: Psychological Sciences*, Vol. 52B, No. 6, P294-P302.
- Fillenbaum, Gerda G. (1985). *Screening the Elderly: A Brief Instrumental Activities of Daily Living Measure*, *Journal of the American Geriatrics Society*, Vol. 33, No. 10, 698-706.
- Gill, Thomas M., Emily D. Richardson and Mary E. Tinetti (1995). *Evaluating the Risk of Dependence in Activities of Daily Living Among Community-Living Older Adults With Mild to Moderate Cognitive Impairment*, *Journal of Gerontology: Medical Sciences*, Vol. 50A, No. 5, M235-M241.
- Guralnik, J. M., T. E. Seeman, M. E. Tinetti, M. C. Nevitt and L. F. Berkman (1994). *Validation and Use of Performance Measures of Functioning in a Non-Disabled Older Population: MacArthur Studies of Successful Aging*, *Aging Clin. Exp. Res.*, No. 6, 410-419.
- Hayslip, Bert, Jr., Robyn M. Maloy and Rita Kohl (1995). *Long-term Efficacy of Fluid Ability Interventions With Older Adults*, *Journal of Gerontology: Psychological Sciences*, Vol. 50B, No. 3, P141-P149.
- infowest (1999). <http://www.infowest.com/sites/w/washcoed/bloomingtonh/tbc.html>

- 石原誠二・小田利勝(1999)。「公的年金制度改革案における『5つの選択肢』の検討と『もう一つの選択肢』」『神戸大学発達科学部研究紀要』第6巻第2号。
- 厚生省(1999a)．国民医療費(<http://www.mhw.go.jp/toukei/k-iryohi/>)
- 厚生省(1999b)．社会保障関係審議会会長会議「社会保障構造改革の方向(中間まとめ)」(<http://www.mhw.go.jp/shingi/s1119-3.html>)
- Knox,P.L.andJ.Cullen(1981)．TownPlanningandtheInternalSurvivalMechanismsofUrbanisedCapitalism, *Area*, 13, 183-188.
- Knox,Paul.,JamesBohlandandLarryShumsky(1984)．UrbanDevelopmentandtheGeographyofPersonal Services: The ExampleofMedicalCareintheUnitedStates.InKirby,Andrew,PaulKnoxandStevenPinch eds., *PublicService ProvisionandUrbanDevelopment*,CroomHelm,London.
- 古谷野亘(1992)．「生活機能の自立性 - その測定と分布 - 」『第65回日本社会学会大会報告要旨』403-4頁。
- Lawton,M.PowellandElaineM.Brody(1969)．Assessmentof Older People: Self-MaintainingandInstrumental ActivitiesofDailyLiving, *TheGerontologist*, 9, 179-85.
- Mack,Ruthanna,AlanSalmoni,GloriaViverais-Dressler,ElainePorter,RashmiGarg(1997). PerceivedRisks to Independent Living:TheViews ofOlder,Community-DwellingAdults, *TheGerontologist*,Vol.37,No.6, 729-736.
- Mahurin,RoderickK.,BarbaraH.DeBettigniesandFrancis J. Pirozzolo(1991). StructuredAssessmentof Independent LivingSkills:PreliminaryReportofaPerformanceMeasureofFunctionalAbilities inDementia, *JournalofGerontology:PsychologicalSciences*,Vol.46,No.2,58-66.
- 小田利勝(1980)．「健康権と福祉権」『保健・医療と福祉の統合をめざして』保健・医療社会学研究会編、垣内出版。
- 小田利勝(1986)．「保健医療行政の現実と課題」北海道都市学会年報『北海道都市』23号。
- 小田利勝(1990)．「高齢化と家族生活」飯田哲也・遠藤晃編著『家族政策と地域政策』多賀出版。
- 小田利勝(1995)．「高齢化」井上實・矢島正見編著『生活問題の社会学』学文社。
- 小田利勝(1998)．「高齢化社会とシルバー産業 - 公的介護保険とシルバーサービス産業の展開」『神戸大学発達科学部研究紀要』第6巻第1号。
- 小田利勝・野上智行・浅田匡・小石寛文(1997)．「サクセスフル・エイジングとライフスキルに関する一考察」『神戸大学発達科学部研究紀要』第4巻第2号。
- 小田利勝・石原誠二(1998)．「公的年金制度の改正と自助努力による老後生活資金の確保をめぐる - 日本人の貯蓄行動と資産処理行動との関連で - 」『人間科学研究』5巻2号、神戸大学発達科学部人間科学研究センター。
- 大蔵省(1999)．財政制度審議会「制度改革・歳出合理化の方策に関する報告」(<http://www.mof.go.jp/singikai/zaisin/tosin/hku1.htm>)
- Polyani,K.(1957)．*TheGreatTransformation*, Houghton Mifflin,Boston.
- SLuRP(1999)．<http://homepages.tcp.co.uk/~aggh/SLuRP/ChrSkills.html>
- Spector,WilliamandJohnFleishman(1998). Combining ActivitiesofDailyLivingWithInstrumentalActivitiesof DailyLivingtoMeasureFunctionalDisability, *JournalofGerontology:SocialSciences*,Vo.53B,No.1,S46-S57.
- TheDailyMotivator(1999)．<http://www.he.net/~image/nwm/motivate/011596.html>
- Weber,Max(1922)．*Soziologische Grundbegriffe*(清水幾太郎訳『社会学の根本概念』岩波書店、1972)。
- WHO(1994)．*Life Skills EducationinSchools*(川畑徹朗・西岡伸紀・高石昌弘・石川哲也監訳『WHOライフスキル教育プログラム』大修館書店、1997)。
- Williams,JaneH.,TheresaJ.K.Drinka,JanR.Greenberg,KeanFarrell-Hottan,ReenieEuhardyandMartha Schram(1991)．Development and TestingoftheAssessmentof LivingSkillsandResources(ALSAR) inElderly Community-Dwelling Veterans, *The Gerontologist*,Vol.31,No.1,84-90.
- Willis,SherryL.,(1991)．CognitionandEverydayCompetence.InK.W.Schaieed., *AnnualReviewof Gerontology andGeriatrics*,Vol.11,80-109,Springer,NewYork,USA.
- Willis,SherryL.,GinaM.Jay,ManfredDiehl,MichaelMarsiske(1992)．LongitudinalChangeandPrediction of EverydayTaskCompetencein the Elderly, *Research on Aging*,Vol.14,No.1,68-91.
- Willis,SherryL.(1995)．Competence.InGeorgeL.Maddoxetal.eds., *TheEncyclopediaofAging* (2ndedition), 207-208,Springer.
- Wycherley,Bob,ClareCrellinandTonyChiva(1994)．*LivingSkillsII*, Outset Publishing,EastSussex,UK.

第6章 サクセスフル・エイジングのもう一つの観点 - ジェロトランセンデンス理論の考察 -

はじめに

周知のように、社会老年学の領域において、高齢期における適応あるいはサクセスフル・エイジングをめぐる問題を議論する際にこれまでに頻繁に言及されてきた代表的な理論(学説)は、1950年代から70年代にかけてアメリカにおいて提起・検討・修正されてきた活動理論や離脱理論、分化的離脱理論、継続性理論である(小田, 1991; 1993; 1995)。これら諸理論・学説は、いずれも、退職後の社会的適応や生活満足の問題を退職前の職業を軸にした生活との対照で組み立てられており、その根底にあるのは、産業社会において成人に期待される役割に関する次のような文化的価値・一般的社会規範である(小田, 1998)。産業社会における成人という地位に期待される主要な役割は、何よりもまず職業上の業績を達成することであり、そのために努力することである。職業を軸にした社会関係の中で自らの欲求を充足させ、自分および家族の経済生活を支え、家族や職場で次世代の担い手を育成することによって社会に貢献することである。成人は、そうした役割の遂行を通じて社会の中での自分の居場所と自分とは何者であるかを確認しているのである。

退職は、成人に期待されるそうした社会的役割を個人から剥奪して自己同一性(アイデンティティ)の源泉を喪失させ、職業を軸に取り結んでいたさまざまな社会関係の網の目から個人を引き離す。退職者には、もはや成人の主要な社会的役割の遂行は期待されなくなり、代わりに「役割なき役割」が与えられることになる。そうした中で、社会との関わりをいかに維持し、自己同一性を確保し、満足感・幸福感を味わうことができる老後生活を送ることができるかが高齢期の社会的適応あるいはサクセスフル・エイジングの課題とされてきたのである。

しかし、この10数年の間に、そうした伝統的な(あるいは今日では既に古典的といってもよいかもしれない)理論に加えて、高齢期あるいは中高年期の生活(様式、スタイル)に対する新しい観点や理論が幾つか提起されてきている。ライフスキルやリビング・スキル、コンピテンスの概念を洗練して高齢者あるいは高齢期における自立生活や新たな役割の遂行の問題を問い直すとする試みや(小田, 2000)、人間の発達過程に関する従来の段階区分と大きく異なるサード・エイジ(Third Age)という段階区分で中高年期を完成あるいは第二次成長(the second growth)の時期としてとらえる試みも提唱されている(Laslett, 1987; 1996; Walker, 1996; 小田, 1998; Sadler, 2000)。本稿で取り上げるジェロトランセンデンス(Gerotranscendence)理論も、そうしたものの一つである。

ジェロトランセンデンス理論の主唱者はスウェーデン・ウプサラ大学教授の社会学者ラス・トーンスタム(Lars Tornstam)である。かれは、離脱理論を新たにメタ理論的に捉えなおし、トランセンデンス(transcendence)という観点から高齢期における生活満足の問題にアプローチしている。「ジェロトランセンデンス」は、ギリシャ語で老人を意味するgeronと英語の

transcendence(超越、卓越、優越)を結びつけた合成語である。したがって、gerotranscendenceを日本語に置き換えると、「老いの超越」あるいは「超老」とでもいえようか。その骨子は、高齢期における生活満足の問題を高齢期以前の物質主義的で合理的な観点から宇宙的かつ超越的な観点へのメタ・パースペクティブな変化として捉えようとするところにある(Tornstam, 1997)。しかし、この理論に関しては、いまのところ日本ではほとんど知られておらず、国際的にもマイナーな理論であり、評価も定まっていない発展途上の理論である。しかし、また、この理論は、これまでの社会老年学における諸理論とくに活動理論と離脱理論では説明できない、あるいはそれら理論では否定的に評価されがちな高齢期の生き方や生活スタイルに対して別のとらえ方があることを教えており、今日およびこれからの社会老年学研究に裨益することが大であると考えられる。そこで、本稿では、トーンスタムが提唱するジェロトランセンデンス理論の内容を可能な限り詳細に検討し、サクセフル・エイジングに関する新たな理論としての有効性について考察することとする。そして、この理論が、世代間の関係とくに高齢者と若い世代が接触するケアや看護の現場における世代関係や文化、階層を越えて高齢期の生活に普遍的に適用しうる理論であるのかといった点についても触れることにする。

1. ジェロトランセンデンスの例示

トーンスタムは(Tornstam, 1997)、「加齢の瞑想的次元」(The Contemplative dimension of Aging)と副題のつけられた論文の中で、ジェロトランセンデンスの具体例を報告している。その具体例は、世界観と自己態度(worldview and self-attitudes)の発達変容を検証するために行われた52歳から97歳までのスウェーデン人男女50人に対する自由回答形式のインタビューから得られたものである。ジェロトランセンデンスに到達したとみなされるエヴァ(Eva)とそうならなかったとみなされるグレタ(Greta)のインタビュー記録が紹介されている。

(1) エヴァ ジェロトランセンデンスへの到達

エヴァは元看護婦で69歳である。家庭は貧しくはなかったが、幼年時代には厳しくしつけられた。結婚し、3人の子供をもうけたが、数年前に離婚した。それに伴い深い精神的危機を経験している。離婚について聞かれたエヴァは、「精神的な危機を求める人はいないと思います。でも、そのことを通して何かを学ぶのだと思います」と答えている。

人生に対する態度が変化したかどうかと質問されたエヴァは、以下のように答えている。「最初は、コントロールできない流れに乗って、川に運ばれているような感覚がいつもしていました。川岸に行こうとしてもどうにもなりません。楽しいことにも、そうでないことにも流されてしまいます。でも、いまは、私自身が川であるように感じます。楽しいこともそうでないことも含んだ流れの一部であるように」。

時間の認識も変化したとエヴァは言う。彼女は、時間を過去から未来への直線的な流れとしてではなく、季節のように循環的なものとして認識している。それは、「人間は、いつも過去と未来に生きている」という認識である。過去、現在、未来の境界を越えたエヴァは、祖先とも強く結ばれることになる。「なぜなら、私も、私の祖先が生きた時代の時間の中で生きているから」

と答えるエヴァは、祖先との関係の中に「永遠の生命」を見出したのである。

このような時間、空間の次元を超えて、それ自身のうちに秩序と調和をもつという意味での宇宙的 (cosmic) な認識を得たエヴァは、「私は物事を私自身に留めておきたい。私の内的宇宙、私の完全性がほしい。できるだけ秘密を保持することで、そうした完全性が維持されると私は考えます」という。

エヴァは、昔は「外側から自分自身をみるができなかった」といい、自分に自己陶醉していたという。「(昔は) 本当にナルシストでした。少女のころ、浜辺で横たわりながら、自分の肌に触れたり、キスしたりしたことを思い出します。今では多くのことが変わりました。顔に皺がより、肌も汚くなりました。お腹もたるんでいます。でも、そんなことは少しも気になりません。ぜんぜん意味のないことだからです」。加齢とともに自我が発達し、その発達をエヴァは楽しんでいる。

他者との関係に関して、エヴァは、「知り合いの年上の女性のところへ行って、座り込んでおしゃべりすることがとても楽しい。パーティや人の集まりに行くことよりも多くのことが得られます。大勢の人と過ごすことには、多くの信頼とごまかしが必要です。(昔は) とにかく歩き回り、分別のある魅力を身につけ、うまく行動するミドルクラスの女性が私でした。でも今は違います」という。

加齢とともに賢い決断を下したり、他の誰かに良いアドバイスをすることが容易になったかという質問に対して、エヴァは、「無口になることと賢い決断を下すことの両方が容易になりました。でも、今では簡単にわかることが一つあります。それは、良いアドバイスをすることと控えるということです」と答えている。エヴァは、物事の善悪を決めること、他者に関係することは簡単ではないと考えている。

最後に、生活の喜びの源泉が変化したかという質問に次のように答えている。「若いころは、映画館や食事や旅行に行くことが喜びでした。少しでも興奮するようなことが起きることを望んでいました。今の私の最上の時間は、キッチンのポーチに座り、そこにいるときに、ツバメが矢のように頭上を飛ぶ時です。それは、私がイラクサの畑に行き、スープのためにそれを摘む、春の一日です」。

(2) グレタ - 発達の中断

グレタは元学校教師で72歳である。穏やかで経済的な不安のない中産階級という環境の中で育ったが、13歳で母を無くした。そして、数年前には夫を亡くした。息子が2人いる。娘も1人いたが、15歳で亡くなった。

エヴァと同様に人生で困難な問題を経験してきたが、それらの問題を建設的なものへと移行することができないでいる。退職後の生活について、「老人になれば、活動的で冒険があると思っていましたが、そうはなりませんでした。そうした期待を私は簡単に諦めてしまったことに自分自身でも驚きました。すぐに、わたしは先のない老人としての生活を始めました。仕事がないことがとても残念です。働くことの満足感を失ってしまいました」と答えるグレタは、中年期の理想と現実の定義に固くしがみついたままのようである。そして、彼女は次のような結論に到達する。「私は自分をみつめて失望ばかりしています。私は不運なことに、何ごとにもかなり無関心な状態になっています。他人や物事に対する関心を失ってしまったのではないかと恐れています」。「私は(以前は) とても大きな社会関係の中で生きていました。しかし、それも…。い

まは、何にも関心がもてません。暇と無関心がいまの私です」。グレタの中年期の理想からすれば、老人には価値が全く無いことになる。グレタは人生に満足していない。

(3) エヴァとグレタの事例からの考察

エヴァとグレタは、外見上は、社会関係が縮小して引きこもりがちな生活をしている高齢者として、われわれにはどちらも同じように映るかもしれない。また、そのような生活に満足できる人が、そうでないかというのは、単に性格の違いだけのようにも見える。しかし、ウェーバーの行為概念に従って、「外見上は『何もしていない』あるいは『できない』ように見えることでも、それが意識的に『しない』あるいは『しようとししない』ことの結果であれば、言い換えれば、そのことを『しない』ことがその人にとって意味ある行動だとすれば」(小田, 1999)、エヴァとグレタの生き方に対する見方は大きく異なってくる。

ジェロトランセンデンス理論では、エヴァとグレタとを比較したとき、エヴァは、絶望と対峙したうえで、エリクソン(Erikson)のいう自我の統合(ego-integrity)に到達したと捉える。エヴァは、自我の統合と絶望のバランスをとるだけでなく、それら乗り越えて新たな境地に達したということである。それは、心身の二元性をも超越した選択的な発達をとげたと解釈することでもある。

2. ジェロトランセンデンス理論の生成過程

ジェロトランセンデンス理論は、その理論としての出発点を離脱理論においている。そして、離脱理論を再定式化(reformulation)することを、その理論構築の目的としている。そこで、ジェロトランセンデンス理論が生成される出発点では、離脱理論はどのように理解されたのか、そして、どのような過程を経て再定式化されるに至ったのかを、ジェロトランセンデンスに関するトーンスタムの最初の論文「ジェロトランセンデンス - 離脱理論のメタ理論的再定式化」(Tornstam, 1989)を取り上げて見ていくことにする。

(1) 離脱理論からの出発

ジェロトランセンデンス理論がその理論的出発点として位置付けるカミングらによる離脱理論は、加齢によって個人は社会から離脱する傾向を有するとともに社会も高齢者を拒否してゆくという傾向があり、その過程は不可避免的な過程であることを述べたものである(Cumming et al., 1960; Cumming and Henry, 1961; Cumming, 1963; Henry, 1965)。また、離脱理論は、そのような過程が、個人の満足感と内面的な調和に作用するとした。そのうえで、こうした過程は文化を問わず普遍的なものであることを主張したのである。離脱理論は、発表された当初から多くの議論を巻き起こした。

離脱理論は主要な3つの仮説から成り立っている。全ての社会は、一方的に、あるいは何らかの方法で高齢者を社会の傍らに押し出す。他方、個人は、自分自身を社会から離脱させる。この個人の離脱は、社会的離脱と心理的離脱に区分される。社会的離脱とは、社会的な役割への参加と社会的役割のなかで過ごす時間の減少という社会相互作用の縮小現象であり、心理的離脱とは、共同体や他者への関心や感情的な関わり合い縮小し、内向してゆくことである。社会的か心理的かを問わず、高い程度 of 生活満足感と充足感を個人が経験しつづける。離脱の自然な過

程が脅かされるようなことや何らかの理由で刺激を受けることがあれば、満足感は減少する。

離脱理論は、それまでに広く認められていた「活動理論」が唱えた充足と満足は社会的活動によって導かれるという説に異議を唱えることとなった。離脱理論のこの消極的なニュアンスは、ヒューマニスティックな立場からは否定的に受けとめられることになった。

その後、多くの老年学者が離脱理論の3つの仮説をめぐって研究をすすめた。彼らは、第三の仮説である老年の生活の満足の理由を活動か離脱かに求めた。ハヴェンス(Havens)らは、高齢期の生活満足に重要なのは活動でも離脱でもなく、継続であるとした。また、ザスマン(Zusman)らの新しいモデルでは、「社会崩壊現象」の概念 - 個人の社会環境と自己認識との相互作用が崩壊する過程 - が紹介され、離脱パターンがいかに崩壊するが示された。

離脱理論は、このようにして社会老年学者から擁護されざる理論となった。このような経緯を踏まえながら、ジェロトランセンデンス理論の生成の出発点となる離脱理論に対するトーンスタムの関心を支えたのは個人的な経験であった。たとえば、トーンスタムのかつて共同研究者であったポーランドの老年学者である故ピオトロースキー(Piotrowski)は、離脱理論の批判の誤謬を指摘すると同時に離脱理論の有効性を主張していた。ピオトロースキーは1979年の国際老年学会において「(離脱理論の理論的有効性の)証拠は私自身の中に現れている」と自己の見解を主張した。

また、主観的、経験主義的な各種のレポートは離脱理論と同様の理論的観点を有することを示唆していると捉えていた。高齢者を社会活動や活動療法などに適応させようとする高齢者と接する現場のスタッフは、自分たちの行動が何か間違っているのではないかという感情にとらわれるという事実を認めていたのである。トーンスタム自身が行った孤独に関する調査(Tornstam, 1988)においても、役割の喪失や他の損失にもかかわらず、孤独に関する意識が年齢が高くなるほど減少し、孤独の癒しとしての他者との相互作用は年齢にしたがって減少したという結果を得ていた。このような所見がジェロトランセンデンス理論の出発点としての離脱理論の再認識へと向かわせたのである。

(2) 反「離脱理論」とジェロトランセンデンス理論

トーンスタムは、離脱理論を再認識する過程から、反「離脱理論」の理論を捉えなおすことで、それが同じ理論的枠組みの中にあることを確認した。つまり、それらが実証主義に基づいており、個人を内的・外的な力によって動かされている対象とみなし、その行動に関心を寄せているとしたのである。このような観点からジェロトランセンデンス理論では、メタ理論的な理論転換の仕組みを提唱することになったのである。つまり、解釈におけるパラダイムの転換を主張したのである。

そのような異なった視点から離脱理論を見つめる老年学者の研究として、離脱のパターンを現象学的に叙述したガットマン(Gutman)の研究がある。かれは、主題統覚検査(TAT)を用いて、アメリカ人、ナバホ・インディアン、低地および高地マヤインディアン、シリアのドゥルーズ族を比較調査した。その結果、かれは、全ての社会に共通するパターンすなわち若者には競争や攻撃という特性をより多く反映して「アクティブ・マスタリ」(active mastery)が、老人には連帯や理解という特性をより多く反映して「パッシブ・マスタリ」(passive mastery)と「マジカル・マスタリ」(magical mastery)があることを発見した。そして、ガットマンは、その傾向は文化に左右されない普遍的なものであって、年をとったからといって離脱へ向かう動きではないと結論づ

けたのである。トーンスタムは、ガットマンの見解に関して、個人の行動が新しい状況をマスターするための機能的な手段となるという点について伝統的な見方にとどまっていると批判し、離脱理論の新しい理解に到達するためには、さらなるメタ理論的パラダイムを必要とするとした。

(3) 東洋的枠組みからエリクソンの発達モデルへ

離脱理論の新しい理解を求め、実証主義的な思考法からの解放を試みるために、トーンスタムは、新たな理論的枠組みを西洋哲学から東洋における禅に求めた。禅の世界観が、境界の広がりや拡散、宇宙的な認識の中に生きることであると理解すると、西洋人の生活は物質的なものに強迫された世界となるが、逆に禅者の瞑想生活は西洋からみれば離脱と決めつけられてしまう。しかし、「主体と客体の取り扱われた世界」に暮らす禅者のような考え方は従来の老年学には見られないものの、西洋哲学とまったく無縁なものではないことをトーンスタムはユングの集合的無意識のなかに見出している。

祖先の経験が子孫に反映、受け継がれ、われわれの心の中に積み上げられているという意味において、「集合的無意識」は、個人、世代、場所の境界がない超世代的、超空間的な構造を有していることになる。そして、ユング派の研究者の中には、瞑想を通して集合的無意識が得られるとするものもあり、東洋と西洋の哲学の関連を見出すことができると、彼は考えたのである。

禅者が生きている世界は、西洋的な意味での離脱とは異なる世界である。それは、個人、世代、場所にそれぞれ厳然たる境界をおく西洋社会における思考法からは認識できない世界すなわち「超越」の世界である。年をとることを禅者のような段階に至る過程とみなせば、それは西洋社会において定義づけられた離脱の過程としてではなく、メタ世界というより高次の段階へ向かう過程すなわち超越の過程とみなすことができる。これが、トーンスタムのいうジェロトランセンデンスである。そして、カミングらが離脱理論の普遍性を主張したように、トーンスタムは、ジェロトランセンデンスは、加齢に本質的で、しかも文化に拘束されない普遍的な過程であると考えたのである。

トーンスタムにしたがえば、ジェロトランセンデンスは、生きている限り継続する過程である。したがって、それは、人生の途上で遭遇するさまざまな危機(life crisis)によって阻害されもし、促進されもする。年をとれば、だれでもが自動的にジェロトランセンデンスの高い段階に到達するのではない。難治性の病に冒され、死と向きあったとき、たとえ彼/彼女が若かったとしても新しい世界観が構築されるように、ジェロトランセンデンスの過程には多くの異なった段階があるということである。そして、その究極の到達点が新しい宇宙的な観点なのである。

最上の段階に至る人生過程(life process)としてジェロトランセンデンスを構想したトーンスタムがエリクソンの発達モデルに目を向けることになったのは当然のことであった。周知のように、エリクソンのモデルは、加齢に伴う発達過程は7つの段階を経て、最終第8段階の「自我の統合」に到達するというものである。そして、この段階で、個人は、その良し悪しにかかわらずそれまでの人生を受け入れ、満足感を得るというのである。

しかし、エリクソンのいう第8段階とジェロトランセンデンスの段階には相違点が存在する、とトーンスタムは指摘する。先にあげたガットマンの調査で、高次のジェロトランセンデンスに達したと見られる個人は、過去を振り返って満足しているわけではない。エリクソンによれば、第8段階に達しない場合に経験することは死の恐怖と絶望であるが、そうならず「自我の統合」を果たすことができるのは、そこに「英知」が働くからである。トーンスタムはここに注目

し、エリクソンが第8段階の特色を「英知」に求めたのは、ジェロトランセンデンスの意味を理解するためのパラダイムを得られなかったからだと考えたのである。

エリクソンの妻であり、同時に彼の共同研究者であったジョアン・エリクソン (Joan M. Erikson) が語った言葉をトーンスタムは紹介している。「私自身が91歳になったとき、英知や統合といった言葉が歳とともに私が経験していることを決して何も表現していないということに気づき始めた。そこで、大胆にも私は第8段階を改定することにした…第9、第10の段階を包含して、それらをジェロトランセンデンスとして扱うことを試みたのである」(Tornstam, 1999a; Erikson, 1997)。

(4) ジェロトランセンデンスとおとぎ話からみた超越

トーンスタムは、離脱理論を出発点とし、離脱理論への数多くの批判を検討した後に東洋的な枠組みを通して再び西洋哲学の流れに戻ることになった。そして、そうした経緯の末に、彼は、加齢過程を物質的で合理的な枠組みではなくて、宇宙的で超越的な枠組みでとらえることの意義を確信することになったのである。

トーンスタムがいうジェロトランセンデンスを構成する具体的内容を整理すれば次のようになる。

「万物の魂との宇宙的な親交の感覚の増大」(万物を流れるエネルギーの一部として経験することができる)。

「時間、場所、対象に対する認識の再定義」(時間の認識が、過去から現在、そして未来へという不可逆的な直線的流れとしてではなく、時間的境界の意味が薄れて渾然一体としたものとして認識されるようになる。したがって、時間の流れる速さに対する認識も変わる。対象の認識の変化は、あなたと私、私たちと彼ら、といった境界の消去を意味する。すべてが一つになるという考えが優勢になり、自己中心性が消失する。その結果、閉じられた自己から宇宙的な自己へと自己認識が変化する。自己を特別に重要なものとみなさなくなり、宇宙のエネルギーの一部とみなすようになる。その結果、個人的な部分は重要でなくなる)。

「生死の認識の再定義と死の恐怖の減少」と「過去と未来の世代に対する親近感の増大」(生死も個人的なものではなくなり、生命のすべてのエネルギーの流れが重要となる。死に対する恐怖心が減少し、同時に、過去、現在、未来の世代との親近感が広がる。こうした点については、エリクソンも第8段階に到達した人たちの典型例として述べている)。

「表面的な社会相互関係の減少」と「物に対する興味の減少」(表面的な社会関係や物品への関心が減少する。こうした変化を経験した個人には、社会との関わり合いに取り付かれた多くの若者を哀れみをもって見ることになる)。

「瞑想的時間の増加」(万物の魂との親交と自分自身を通して流れる宇宙のエネルギーを経験すると、もっとも重要なものに時間が使われることになる)。

このような個人の認識上の変化は、当然のことながら、単なる社会的引きこもりを意味しない。しかし、離脱理論がそうであったように、西洋社会ではこのジェロトランセンデンスに適合する役割が高齢者に与えられていないため、引きこもりとみなされてしまうのである。

トーンスタムは、以上のような内容に関する研究をチネン(Chinen, 1989)が老人の超越に関するおとぎ話を通して行っていることを紹介している。チネンは、おとぎ話は宗教的、社会的、心理的超越の統合過程と老年の発達に関する重要なガイドラインであるとしている。西洋起源のお

とぎ話を中心に分析しながら、スラブ諸国のものも含み、2,500あまりのおとぎ話を検討したところ、年老いた主人公が登場するおとぎ話が西洋には少ないことを発見する。つまり、圧倒的に若い主人公が登場するのである。しかし、東洋やスラブ諸国のおとぎ話には、ジェロトランセンデンスを支持するようなおとぎ話が数多くある。このような結果から、トーンスタムは、西洋社会の若さを重視する見方はジェロトランセンデンスという加齢過程を阻害しているかのように見えると述べている。

(5) 西洋文化と老年期の発達

トーンスタムによれば、ジェロトランセンデンスと一致する老人の世界観は、西洋文化では、風変わり、非社交的、精神的混乱とみなされてしまい、ジェロトランセンデンスに適合した見方や場所、役割は存在しないが、シリアのドゥルーズ派のような世界では、宗教的儀式がジェロトランセンデンスに対して社会的な役割の場を提供している。西洋文化では、社会活動と自己の強さ、世界に対する現実主義的な見方、対応が重視される。このような社会の道徳的判断、一般的な社会規範からは、離脱ということに対して罪悪感が形作られる。そのために、ジェロトランセンデンスが阻害されることになる。また、高齢者介護の現場のスタッフや近親者がジェロトランセンデンスの自然なプロセスを阻害することにもなる。つまり、このような人々は、「内省への移行」を引きこもりとして否定的に評価し、「我々の理解し得ない引きこもり」から高齢者を引きずり出し、再活性化しようとする。このようにしてジェロトランセンデンスの発達が妨害され、罪悪感に見舞われた後、高齢者は、以前の世界観に後退し、社会的崩壊現象を経験することになる。

トーンスタムは、ジェロトランセンデンスが加齢に伴う自然な発達の過程であることをベック(Peck)が間接的に証明しているという。ベックは、数千人のビジネスマンを対象に、中年と老年期の間の発達の危機に焦点を当てて、彼らがいかに加齢を取り扱うかを研究した。トーンスタムは、それを次のように要約している。

「自我の分化、または仕事への没頭」 - 以前の仕事に自信がもてなくなる過程で、自分の生活に新しく順応しようとする。自己再認識の過程で仕事ではなくほかの多くのことに重点が移っていく。反対に、以前の職業から離れられない人もいる。自我の分化は、発達過程の危機に対する自然でよい形の解決である。

「身体的超越、または身体への没頭」 - 老人の中には、健康を生活の最大の問題と考え、些細な病気でも気にとめ、徐々に自分の身体にとらわれていく人がいる。反対に、自分の体のことをよく理解し、心配せずに身体を超越するかのように見える人がいる。身体的超越は、多くの人が潜在的に持っている自然な発達である。

「自我の超越と自我への没頭」 - 高齢になったという認識と死の必然性は、寛大で利他的に生きるように高齢者の自我を再編成させ、死を受容させる。しかし、さまざまな理由で、多くの高齢者はそのような段階に到達できない。その結果、自我への没頭と死の恐怖を発展させる、と述べたのはエリクソンであるが、ベックが見出したのは、西洋社会では、当然そうあるべきだとされる価値の様式と価値観がジェロトランセンデンスを阻害しているということである。

3. ジェロトランセンデンス理論研究の概要

ジェロトランセンデンス理論は、高齢期の生活に関する他の理論、たとえば活動理論やエリクソンの発達理論と大きく異なるわけではないとトーンスタムは述べている。つまり、異なるように見え、表面上矛盾を抱える理論が同時に有効なのだという。同様に、ジェロトランセンデンスと社会的崩壊現象はどちらも真実であるという。また、相互作用論が主張するところも否定してはいない。しかし、それらの理論では高次のジェロトランセンデンスに達した人たちをとらえることができないと指摘する。その意味では、ジェロトランセンデンス理論が主張するところは、これまでの経験的、実証的老年学に対する大きな挑戦であるといえる。

外見上は同じように見えても、その人がジェロトランセンデンスの過程にあるのか、それとも、これまでの意味での離脱の過程にあるのかをいかに識別するかが問題である。その識別に関しては既に簡単に触れたが、ここで、あらためて詳細に検討するために、トーンスタムがいうジェロトランセンデンスの3つの次元とかれの実証研究(Tornstam, 1994)を取り上げることにする。

(1) ジェロトランセンデンスの3つの次元とその到達段階

「理論的および経験的探求」と題された1994年の論文において、トーンスタムは、ジェロトランセンデンスへと移行する個人に認められる連続的な変化について触れている。その変化は、52歳から97歳までのスウェーデン人へのインタビューと74歳から100歳までのデンマーク人912人の量的な研究から見出されたものである。その後、彼は、ジェロトランセンデンス理論について語る場合に、そうした変化をジェロトランセンデンスの徴候や次元として記述するようになった(Tornstam, 1996a)。それらを整理すると次のようになる。

ジェロトランセンデンスの3つの次元

(a) 宇宙的水準

- ・ 時間・場所：時間と場所の定義の変化が進展する。たとえば、過去と現在の境界の超越が起こる。
- ・ 前の世代との関係：前の世代への愛情が増し、世代的連続性を自覚するようになる。
- ・ 生と死：死に対する恐怖が消え、生と死について新しい認識が生まれる。
- ・ 生命の神秘：生命の神秘性という次元を受け入れる。
- ・ 喜び：盛大な行事からささやかな経験まで、小さな宇宙の中に大宇宙を経験する喜びが現れる。

(b) 自己

- ・ 自己との対決：自己の隠された局面 - 良いものも悪いものも - が発見される。
- ・ 自己中心性の減少：自己中心的な世界からの撤退が生じる。
- ・ 肉体の超越の進展：肉体への配慮は続けられるが、それにとらわれなくなる。
- ・ 自己の超越：利己主義から利他主義へ移行する。
- ・ 内面の子どもの再発見：子ども時代に戻り、変身することを体験する。
- ・ 自我の統合：人生のジグソーパズルの一片が人生全体を形作ることを理解する。

(c) 社会と個人の関係

- ・ 関係の重要性と意味の変化：表面的な関係に対する関心が減り、選択的になり、一人を望むことが多くなる。
- ・ 役割：自己と定められた役割の違いを認識する。時には役割を放棄しようとする。人生における役割の必要性を楽に理解するようになる。

- ・無垢の解放：解放された無垢が成熟を高める。チネンによれば、解放された無垢は、子どものような自発性と成熟した実用主義によって構成される(Chinen, 1989)。
- ・現代的禁欲主義：財産の重さの理解と禁欲主義からの自由。
- ・日常の知恵：善悪の区別や判断の保留。アドバイスを与えることの難しさの認識。善悪二元論の超越。

ジェロトランセンデンスの到達段階

高い段階のジェロトランセンデンスにある人には次のような特徴が見られる。

- ・低い段階の個人に比べて社会的活動の自己管理度が高い。
- ・より高い生活の満足感を得ている。
- ・社会活動により高い満足感を示している。
- ・社会活動への依存度が低い。
- ・より活動的で複雑なコーピング・パターンが見られる。
- ・生活満足感に関して消極的で継続的な変化を伴う個人は、ジェロトランセンデンスを発達させる可能性が高い。
- ・ライフ・クライシスはジェロトランセンデンスの発展を促進する。
- ・ジェロトランセンデンスの徴候を示す個人を疾患や抑うつ、抗精神薬使用の犠牲者として説明してはいけない。

(2) トーンスタムの行ったジェロトランセンデンスの実証研究

分析の枠組み

ジェロトランセンデンス理論に関する本格的な調査研究の成果は、1994年に発表された上記の論文 (Tornstam, 1994)に紹介されている。それまでは、いわば試案であり、未検証の仮説であったジェロトランセンデンス理論がはじめて明確に実証されたと報告している。

これまでの述べてきたことからもうかがえるように、トーンスタムのいうジェロトランセンデンス理論には、ともすると哲学的思弁と受け取られるような内容が多く含まれている。したがって、それを経験的研究として進めるには困難な点が多いであろうという印象を抱かせる。トーンスタム自身も、そうしたことを考慮して、定量的分析を行う際の課題として次のようなことをあげている。

「認識」

ジェロトランセンデンス理論でいうさまざまな変化を高年齢者が実際に理解すること。

「分類」

高いジェロトランセンデンスを示す個人や低いジェロトランセンデンスを示す個人というように、さまざまな段階を示すジェロトランセンデンスをどのように明確に見きわめるか。

「ジェロトランセンデンスと社会活動」

ジェロトランセンデンスと離脱理論の違いに焦点を当てて、ジェロトランセンデンスは社会的引きこもりとは異なることを明らかにする。

「ジェロトランセンデンスとコーピング・パターン」

ジェロトランセンデンスの高い段階にある個人がいかに人生の問題に対処しているのかを明らかにする。より成熟した発達の段階としてのジェロトランセンデンスには、より高次のコーピング・パターンや同時にいくつかの異なったコーピング・パターンが伴っていると考えられる。

「ジェロトランセンデンスと生活満足感」

ジェロトランセンデンスの発達は、生活満足感を増加させる正常な発達過程である。逆に、ジェロトランセンデンスに達しない個人の生活満足度は低いことが予想される。

「精神疾患や抗精神薬の使用との混同の可能性としてのジェロトランセンデンス」

ジェロトランセンデンス理論の批判として抑うつや精神疾患が同様の「症候」を示すこととの関係や反応があげられる。また、抗精神薬の使用も同様の「症候」を示すと批判されるだろう。ジェロトランセンデンスとそのような症候との相関関係を否定し、ジェロトランセンデンスの発達が正常で建設的な発達であり、抗精神薬の必要性を減少させるという仮説を検証する。

方法

1986年と1990年に行われたデンマーク人の男女912人を対象にした縦断調査（郵送調査）をもとに、1990年にジェロトランセンデンスに関する質問調査を行っている。回答者の年齢は74歳から100歳までであり、平均年齢は72歳である。男女比は女性64%、男性36%であり、この男女比は、デンマークにおける74歳以上の男女比と同等である。また年齢分布も母集団に近似していた。

主要評価の質問項目

ジェロトランセンデンスの到達段階を調べるために、「いまのあなたは、50歳のころと比べて、人生や生活についての見かたが異なっていると思いますか」という質問を提示し、以下にあげるような10項目に関して、「はい(自分自身思い当たることがある)」と「いいえ(自分には思い当たらない)」の2件法で回答を求めている。10項目の質問は主成分分析によって次のように「宇宙的超越」(Cosmic-Transcendence)と「自我の超越」(Ego-Transcendence)の2つの主成分が抽出された。

(Cosmic) 宇宙的超越

1. 50歳のときにくらべて、生と死の境があまり目立たないように感じるようになった。
2. 永遠に続く生命にくらべて、個人の生命はいかにささやかなものかということに、深く共感する。
3. 50歳のときと比べて、今日では普遍的なものと、すばらしい相互関係を感じる。
4. 実際には離れたところにいる人でも、しばしば近くにいるのだと思うような経験をするところがある。
5. 過去と現在の距離が消えていると感じる。
6. 祖先と新しい世代の両方にとっても親密感を覚える。

(Ego) 自我の超越

1. 以前ほど、自分のことをまじめだとは思わなくなった。
2. 50歳の時に比べて、物の重要性が減った(物への執着心が弱くなった)。
3. 表面的な人づきあいにあまり関心がなくなった。
4. 50歳の時に比べて、内面的な世界(たとえば物思いにふけったり)に幸福を感じている。

社会活動の評価

以下の5点について評価している。高齢者の主導権に着目したため、子と孫との活動は除外されている。

1. 他の人をたずねて、その人の家を訪問する。
2. 他の人が、あなたの家を訪問する。
3. 子、孫以外の親戚とのつきあい。

4. 他の友人とのつきあい。

5. 室外での余暇活動。

生活満足度

現在の生活の全体についての満足度を単独に5段階で自己評価する。

高齢期の憂鬱症評価 (Old-age Depression Scale)

孤独感、時間の経過の遅さ、無視されていると感じる、余計者であると感じる、老いを感じる。

以上の5項目について、同意から非同意を3件法で評価している。この尺度の信頼性係数(クロンバックの)は0.77であった。

心理的緊張・過労の評価

現在の症状をつぎのリストから選び、数える。「理由のない疲労感」、「不眠症」、「神経質」、「不安」、「抑うつ」。

対処行動類型(Coping Pattern Typology)

問題や心配事に出会ったときに、どのように対処するかを以下のような4つの項目に関して同意、非同意の2件法で評価する。

- ・忘れようとしてとめるか、何もなかったようにふるまう。
- ・心配事を追い払うように、何か他のことをする。
- ・親しい人と問題の解決方法について話し合う。
- ・問題解決のために完全に集中する。

因子分析によって、以上の4項目から2つの次元すなわち項目1と項目2で構成される防御的対処の次元と項目3と4項目で構成される攻撃的対処の次元である。これら2つの次元に基づいて次のような4つのコーピング・パターンが構成された。「Low Copers(低い対処)」(防御と攻撃のどちらも平均以下)、「Multi Copers(多元的対処)」(どちらも平均以上)、「Deffensive Copers(防御的対処)」(防御的対処がまさっており、攻撃的対処は平均以下)、「Offensive Copers(攻撃的対処)」(攻撃的対処が高く、防御的対処は平均以下)。

結果

1994年の結果をもとに、新しい概念としてのジェロトランセンデンス理論が離脱理論や社会的崩壊現象と相違する点が次のように得られたとしている (Tornstam, 1996)。

1)最も基本的なこととして、離脱理論がいわゆる内向を意味しているのみであるのに対し、ジェロトランセンデンス理論は、高齢期の現実に関して新しい定義を与えている。

2)離脱理論が社会的引きこもりと結びついているのに対し、ジェロトランセンデンスは、データによると社会活動と明確に相関関係があることが示された。同時に、思索のための孤独も高い程度で必要とされていた。とくに、ジェロトランセンデンスと明確に相関のある社会活動は、個人に主導権が与えられた活動であった。

3)高い段階のジェロトランセンデンスにある個人のコーピング・パターンは、離脱理論が示したパターンとは相関関係が認められなかった。ジェロトランセンデンスが社会的崩壊現象の観点を形成するという仮説も支持されなかった。高い段階のジェロトランセンデンスにある個人のコーピング・パターンは、受動的で防御的なパターンではなくて、より活動的で複合的なパターンを特徴としていた。

4)高い段階のジェロトランセンデンスは、生活の満足感と社会活動の満足感の両方ともが高い段階にあった。同時に、社会活動が生活満足の本質的な要素としては弱いことも明らかにされ

た。

4 . ジェロトランセンデンス理論からの展開と可能性

1989年にジェロトランセンデンス理論を発表したトーンスタムは、1994年以降の論文では、ジェロトランセンデンス理論そのものを深化させ、経験的なデータに基づいた研究結果を発表してきている。また、それらと並行して、ジェロトランセンデンス理論を洗練する論文を発表している(Tornstam , 1997b ; 1997c ; 1999b)。

以下では、高齢者と介護従事者の関係をジェロトランセンデンス理論からとらえなおした場合に、その関係がどのように変化するかという視点からジェロトランセンデンス理論の有効性を検証した2つの論文を取り上げることとする(Tornstam , 1996b , 2000)。

(1) 「高齢者介護のための補足的枠組みとしてのジェロトランセンデンス理論の紹介 - 介護スタッフへの教化」

この論文が目的としているところは、高齢者介護のあたらしい理論的枠組みとしてのジェロトランセンデンス理論を現場のスタッフに教化することで得られる変化を明らかにすることである。対象はスウェーデンの小さな市にあるナーシングホームで働く90人の看護婦と助手である。

高齢者の理解と介護についてかれらと議論し、この議論の中でジェロトランセンデンスを紹介した後、6ヶ月後にかれらがジェロトランセンデンス理論にどのような影響を受けたかを郵送法で調査した。その結果、スタッフの半数が介護対象者に対する新しい理解に至ったことがわかった。また、特殊な介護対象者に対する介護の態度が変化したと回答したスタッフが3分の1あった。そして、ジェロトランセンデンス理論は、仕事における不全感に対する罪悪感を軽減することとなっていることが明らかにされた。

(2) 「ナーシング・スタッフによるジェロトランセンデンスの解釈」

高齢者と接する現場で働くスタッフが、高齢者のジェロトランセンデンス的な行動に気づいたとき、かれらはその行動をどのように解釈するだろうか。こうした問題設定から、ジェロトランセンデンスの特徴的な行動のいくつかを介護従事者に提示し、それらに対する彼らの解釈を調べた。その結果、ジェロトランセンデンス的な行動についての解釈の共通点は、病理中心の理論または、活動中心の理論におけるパースペクティブで構成されていた。

病理中心の理論による解釈では、ジェロトランセンデンス的な行動は、たとえば痴呆の徴候として理解されていた。また、活動中心の理論から見れば、ジェロトランセンデンス的な行動は無気力がもたらす否定的な結果とみなされていた。結論としては、ジェロトランセンデンスという建設的な発達のパースペクティブが失われなければならないためには、高齢者とスタッフとの関係に関する新しい枠組みにスタッフが近づく方法を明らかにする必要があるとしている。

(3) 労働とジェロトランセンデンス

以上に見たトーンスタムのジェロトランセンデンス理論の展開は、高齢者の生活満足度とその様相の実証に限定されるのではなく、高齢者と接する役割を持つ介護者、看護の現場におけるスタッフの老年観の検証にも広げることが可能であると思われる。介護、看護の現場の「重荷」観

は、えてしてその現場のスタッフの職業意識と老年観が交錯したところに起きる問題ではないだろうか。

高齢者ケアの現場は、人間の生の終わりに関与する生命にかかわる労働（「愛の労働」ともいう）（上野，1998）の場所である。高齢者がいかに心身に障害を得ようとも、介護の現場では高齢者の人格の尊重、基本的人権の尊重が言われたきた。そして、対等な人間関係あるいは敬老精神が美德とされてきた。しかし、いままで自明のようであり、実際はそれを理念として常に謳わねばならない状況があったとすると、このジェロトランセンデンス理論は、高齢者の人格を高齢期の人間的発達に視点を移すことで、それらの美德を理論的に支持し、人間の可能性への介入という視点から介護従事者の役割を問い直すことができるのではないかという課題も包含しているといえる。

また、高齢者にとってこれまでの親しい人間関係にしか見出せない社会関係だけではなく、あたらしい人間関係が育ち、あたらしい社会関係を生み出す可能性が、高齢期においても存在するのかどうかは、ジェロトランセンデンス理論を理解したうえで、高齢者と介護従事者の意図的な関係のなかに見出せるかもしれない。日本語で言うと「縁」（人と人、または人と物事とを結び付ける、不思議な力。）の可能性といえるだろう。もしそのような太い関係が生まれるならば、高齢者の生活の安定を支えるとともに、プロフェッショナルとしての福祉従事者、介護、看護職の役割を支えるコミュニティにおける対等な人間関係の構築の過程を見出すことができるであろう。

具体的には、行事や催し物を通して得られる「思い出」の創造を幼年、青年、壮年期のように準備しようとするよりも、高齢期には日常的な「思い出」の創出の機会とその関係が、高齢者に新たな太い関係をもたらすかもしれない。また、そのささやかな日常の創造の連続がジェロトランセンデンスに進もうとする高齢者の生活にマッチするとも考えられよう。

むすび

以上、サクセスフル・エイジングのもう一つの理論としてジェロトランセンデンス理論を幾分詳細に見てきた。社会老年学における従来の諸理論あるいは素朴で通俗的な生きがい論や新しい高齢者像論に少しでも疑問を感じている者にとって、また、そうした諸理論や論議からはとらえられない高齢期の生き方や生活スタイルを説明する理論的根拠として、ジェロトランセンデンス理論の意義は大きいと考える。しかしながら、なお検討しなければならない課題も少なくない。それらについて触れることで本稿のむすびとしたい。

まず、第一に、文化を越えた普遍性を唱えるジェロトランセンデンス理論が示す3つの次元が日本人に適合するだろうかということである。これまでデンマークやスウェーデンを中心にデータがとられてきたことから、ジェロトランセンデンス理論の生成にひとつの示唆を与えた東洋やその他諸外国における実証的研究が必要である（スウェーデンに住むスーフィ族やトルコ、イランでの調査は計画されている。Tornstam, 1997b）。とくに宇宙的次元は、明確に記述されうる程度に存在するのだろうか。

第二には、ジェロトランセンデンス理論を思弁的色彩の強い、あるいは特異な学説として終わらせることなく、現実を説明する科学的理論として発展させていくための課題として、ジェロト

ランセンデンスをどのような操作概念で経験的研究に乗せていくかということである。それによって、ジェロトランセンデンスの次元も大きく変わってくる。トーンスタムが用いたジェロトランセンデンスの評価項目10項目と、それら項目から抽出された「宇宙的超越」と「自我の超越」の2次元でジェロトランセンデンスの到達段階を判定することには、正直なところ不満が残る。

第三に、方法的な課題であるが、ジェロトランセンデンス理論の検証で行われたレクチャーを先行させた上でのインタビュー調査ではなく、主観的幸福感から溯り、自己、社会関係の次元の超越を満たす対象者に宇宙的次元の超越を確認することで、あらためてジェロトランセンデンス理論を披露し、共感の度合いを測るという方法が考えられる。その上で、ジェロトランセンデンス理論のいう宇宙的次元の存在の有無を確認することで、ジェロトランセンデンス理論のいう発達が個人の中に見出せるか否かを検証することが考えられてよいであろう。

第四に、高齢期において、継続を望む生き方、新たな活動を臨む生き方等、さまざまな生き方があるということである。そうだとすれば、高齢者にとっては、さまざまな理論で語られる幸福感が併存しうることになる。普遍性をうたうジェロトランセンデンス理論の幸福が最上の幸福なのだろうか、ということである。壮年期から前期高齢期、後期高齢期にかけての縦断的研究は、誕生して10数年に過ぎないジェロトランセンデンス理論の研究では発表されていないが、今後、個人の中でおこる変化は、発達なのかさまざまなパースペクティブへの移行なのかという観点からの実証が必要である。具体的には、特にターミナル・ケアの周辺において起こりうる過程と発達理論、ジェロトランセンデンス理論との近似性、あるいは相違点などの検証が人生航路の完結の探求として意義深いものとなるであろう。

最後に、既にみたように、ジェロトランセンデンス理論の展開の可能性は現場にも存在する。しかし、人間の生き方として発達の観点からみると、ミクロとマクロの双方向の関係が新しい老年観、ひいては人間観のパースペクティブをもたらすのではないだろうか。つまり、社会全体の仕組みがジェロトランセンデンス理論を組み入れて変化する可能性があるということである。そのような取り組みの小宇宙での試みが、ケア、看護、世代を扱った論文にみられる。

トーンスタムがジェロトランセンデンスにおける禁欲的主義で引用したブラウ(Blau, 1964)は次のように述べている。「個人の願望や欲求が少なければ少ないほど、それだけ他者に依存してそれを満たす必要はなくなる。…宗教的および政治的理念の推進力は、大部分が物質的願望の充足を比較的重要でないものにする価値、そして、物質的利益を供与できる人への依存を弱める価値を吹き込まれた信奉者から出てくる。物質的欲求を減少させることによって、革命的イデオロギーは独自の強さと権力への抵抗の源泉になる」。

老後問題が近代産業社会の価値の総体を問い直すことを突きつけており(上野, 1994)、それが産業社会の構造的矛盾がもたらしている人々に対するいわれのないしっぺ返しであるとするれば(小田, 1995)、ジェロトランセンデンスした生活そのものが今日およびこれからの社会に多大な影響力を及ぼす可能性も出てくるとも考えられる。ジェロトランセンデンス理論は、高齢期の個人の成熟のみにとどまらず、人類そのものの発展にあたらしいパースペクティブもたらす可能性をわれわれに提供しているのではないだろうか。

文 献

Blau, Peter M. (1964). *Exchange and Power in Social Life*, John Wiley (間場寿一ほか訳『交換と権力』新曜社、1974年)。

- Chinen, A.B. (1989). *In the Ever After: Fairy Tales and the Second Half of Life*. Wilmette, IL, Chiron Publications.
- Cumming, E., L. Dean and D. Newell (1960), Disengagement, a Tentative Theory of Aging, *Sociometry*, Vol.23, No.1.
- Cumming, E. and William H. Henry (1961). *Growing Older: The Process of Disengagement*. Basic.
- Cumming, E. (1963). Further Thought on the Theory of Disengagement, *International Social Science Journal*, No.15.
- Erikson, J.M. (1997). *The Life Cycle Completed* (Extended Version), New York: W.W. Norton & Company.
- Henry, W. (1965). Engagement and Disengagement: Toward a Theory of Adult Development. In R. Kastenbaum (ed.), *Contributions to the Psychology of Aging*, Springer Publishing Company.
- Laslett, Peter (1987). The Emergence of the Third Age, *Aging and Society*, No.7.
- Laslett, Peter (1996). *The Fresh Map of Life* (second edition), Macmillan Press, UK.
- 小田利勝 (1991). 「高齢者の適応に関する概念的考察」 『徳島大学社会科学研究』 第4号。
- 小田利勝 (1993). 「サクセスフルエイジングに関する概念的考察」 『徳島大学社会科学研究』 第6号。
- 小田利勝 (1995). 「高齢化」井上・矢島編著 『生活問題の社会学』学文社。
- 小田利勝 (1998). 「退職に関する新たな視点とサード・エイジの生活課題」 『神戸大学発達科学部研究紀要』 5巻2号。
- 小田利勝 (1999). 「高齢期における自立生活と日常生活活動能力をめぐって」 『神戸大学発達科学部研究紀要』 7巻1号。
- 小田利勝 (2000). 「高齢者の老年規範意識の構造」 『神戸大学発達科学部研究紀要』 8巻1号。
- Sadler, William (2000). *The Third Age: 6 Principles of Growth and Renewal After Forty*, Perseus Books, Massachusetts, USA.
- Tornstam, L. (1989). Gero-transcendence: A Meta-theoretical Reformulation of the Disengagement Theory. *Aging: Clinical and Experimental Research* (Milano), 1(1), 55-63.
- Tornstam, L. (1994). Gero-transcendence: A Theoretical and Empirical Exploration. In L. E. Thomas and S. A. Eisenhandler (Eds.), *Aging and the Religious Dimension*. Westport, CT: Auburn.
- Tornstam, L. (1996a). Gero-transcendence: A Theory About Maturing into Old Age. *Journal of Identity*, 1, 1, 37-50.
- Tornstam, L. (1996b). Caring for the Elderly: Introducing the Theory of Gero-transcendence as a Supplementary Frame of Reference for Caring for the Elderly. *Scandinavian Journal of Caring Sciences*, 10, 144-150.
- Tornstam, L. (1997a). Gero-transcendence: The Contemplative Dimension of Aging. *Journal of Aging Studies*, 11, 2, 143-154.
- Tornstam, L. (1997b). Gero-transcendence in a Broad Cross Sectional Perspective, *Journal of Aging and Identity*, 2, 1, 17-36.
- Tornstam, L. (1997c). Life Crisis and Gero-transcendence, *Journal of Aging and Identity*, 2, 117-131.
- Tornstam, L. (1999a). Late-Life Transcendence: A New Developmental Perspective on Aging. In L. E. Thomas and S. A. Eisenhandler (Eds.), *Religion, Belief, and Spirituality in Late Life*. New York, Springer.
- Tornstam, L. (1999b). Gero-transcendence and the Function of Reminiscence, *Journal of Aging and Identity*, 4, 155-166.
- Tornstam, L., & Tornqvist M. (2000). Nursing Staff's Interpretations of "Gero-transcendence" in the Elderly, *Journal of Aging and Identity*, 5, 1, 15-29.
- 上野千鶴子 (1998). 「出生率低下：誰の問題か？」 『人口問題研究』 54-1, 41-62頁。
- 上野千鶴子 (1994). 「生きられた経験としての老後」 『近代家族の成立と終焉』 岩波書店。
- Walker, Joanna (1996). *Changing Concepts of Retirement*, Arena, UK.

附記 本稿は、中嶋康之・小田利勝「サクセスフル・エイジングのもう一つの観点 - ジェロトランスセンス理論の考察 - 」(『神戸大学発達科学部研究紀要』8巻2号, 303-317, 2001)の再録である。

第7章 高齢者の日常生活行動

1. 問題の所在と研究の目的

この十数年来、いわゆる「新しい高齢者像」や高齢者像の転換に関する論議が盛んである。その社会的な背景については既に別稿で論じたが(小田, 1999; 2000)、そうした論議の下で、旧来の高齢者あるいは高齢期の生き方とは異なっている(とみなされる)新しいタイプの高齢者や高齢期の生活スタイルへの関心が急速に高まった。そして、それらの実例を“発見”、“発掘”、紹介することが一種の流行の観を呈するほどになった。テレビや新聞、雑誌、ラジオ、単行本、各種の広報誌など種々のメディアに掲載されたそれらの紹介記事は枚挙に暇がないほどである。

しかし、そうしたスポットライトが当てられる元気で活動的な「新しい高齢者」と、その反対の極にいる介護を必要とする高齢者に関する情報、そして、中央省庁や都道府県、市町村、各種団体等において繰り返し調査が行われている高齢期の経済生活や趣味・レクリエーション活動、各種の集団への参加状況など高齢者政策に直結する情報に比べて、高齢者の日常的な生活行動に関する情報は意外と少ない。

そうした状況は、かつてBaltesら(1990)が、「高齢者の日常生活を記述した信頼できるデータがない」と指摘したドイツにおける状況とも似ている。というよりも、元気で活動的な高齢者の行動や生活スタイルと、要介護高齢者が抱える問題が注目され、多くの高齢者の日常的な生活行動に関する情報が圧倒的に少ないという状況は、高齢化が進行している国に共通する傾向であるといえる。

元気で活動的な高齢者や要介護高齢者が注目され、そうした高齢者に関する情報が多くなるのは、そうした高齢者が高齢化社会における課題の焦点を形成する“目立つ存在”だからである。しかし、高齢者一般の日常的な生活行動に関する情報の不足は、今後の高齢化対策にとっても様々な影響を与えることになる。

両極端な内容の情報は、高齢者に対する人々のイメージや観念(高齢者観)、老いや老いることに対する観念(老年観)に偏った影響を与えることになり、事実誤認に根ざす高齢者や老いに対する偏見(エイジズム)を強化することにもなるからである。そればかりではなく、高齢化問題や高齢者問題に対する人々の態度や判断に、そして、また、そうした問題に対する諸施策の評価にも影響を与えることになるからである。

本稿では、以上のような問題関心の下に、今日の高齢者の実像を明らかにするための一助として、従来あまり触れられることもなかったような生活行動をも取り上げて、高齢者の日常生活に関する情報の欠落部分の一部を埋めることにしたい。

2. 研究の方法

(1) 調査項目

一口に高齢者の日常的な生活行動といっても、その全貌を一挙に明らかにすることは難しい。実際の生活は、種々雑多な行動から成り立っているからである。例えば、Baltesら(1990)は、自立生活を送っている49人の高齢者に対して、毎月一週間、どんな活動を、いつ、どこで、だれと、どれくらいの時間を使って行ったかを6か月間にわたって記録することを依頼し、その結果、26,220もの活動項目が得られたという。

彼女らは、それらをまず義務的活動と余暇的活動に大きく二分したのちに、それぞれをさらに4つと7つの中分類に類別し、最終的には37のカテゴリに類別している。義務的活動の中分類は、ADL(Activities of Daily Living)とIADL(Instrumental Activities of Daily Living)、医療関係、交通、休息であり、余暇的活動の中分類は、身体的活動、精神的活動、視聴、社交、ボランティア活動、宗教的活動、その他の余暇活動である。

こうした類型に基づいて、Baltesらは、もっとも頻度が高くて高齢者に典型的な活動は義務的活動であること、それらはたいてい午前中に行われていること、それに当てられる時間は一日のうちの半分以下であること、午後と夜は余暇活動に当てられていること、諸活動の場所は家庭が最も多く、次いで公共の場であることを見出している。そして、それら諸活動を「認知志向」(精神活動に多くの時間を使い、マス・メディアの視聴時間が短い)、「身体活動・メディア志向」(余暇活動が身体的活動中心で、同時にマス・メディアの視聴時間が長い)、「ADL・IADL志向」(他の活動にあまり時間を使わずに義務的活動のために多くの時間を使っている)の3つのパターンに類別している。

また、彼女らは(Baltes et al.,1993)、日常的な生活活動能力(everyday competence)を基礎的な活動能力(BaCo : Basic level of Competence)と拡張的な活動能力(ExCo : Expanded level of Competence)の2つの要素で構成されているとして、前者をADLなど自分の身の回りの世話ができることや商店まで買い物に歩いていくことができるような活動能力とし、後者に関しては、「スポーツ」、「外食」、「ダンス」、「日帰り旅行」、「宿泊旅行」、「文化的イベントへの参加」、「文化活動」、「趣味」、「政治活動」、「教育」、「ボランティア活動」、「ゲーム」、「役所とのやりとり」、「余暇活動」、「社会活動」、「健康行動」、「他人を援助」、「労働」をあげている。

本章で取り上げる113の生活行動項目は、Baltesら(1990)のいう義務的活動と余暇的活動に大別すれば、その多くは余暇的活動の下位カテゴリに含まれる活動であり(ただし、ここでいう余暇的活動とは、いわゆる趣味やレクリエーション、レジャー活動のことだけではなく、それらも含んだ非義務的活動のことを指す)、Baltesら(1993)のいう拡張的活動である(図1~図4参照)。

それらの中には、たとえば、「浪曲をきく」とか「ふだん和服を着る」といった一昔前の日本の高齢者によく見られた行動や、高齢者の中で静かなブームになっているといわれている「社交ダンス」や「外国旅行」、あるいは普及著しい「ワープロやパソコン」、「電子メールやインターネット」の利用といった最近の社会的動向を反映した行動項目も含めている。その他の項目は、祖父母に固有の行動である孫との関係に関わる行動を除くと、いずれも高齢者に限らず成人一般に当てはまる項目である。

以上のような113項目に対して、「よくする(行く)」、「時々(たまに)する(行

く)」、「ほとんど(めったに)しない(行かない)」、「全然したことがない(行ったことがない)」の4つの回答肢を用意し、そのうちのどれか一つを選択するよう求めた。

(2) 調査の方法と回答者の属性

本章で扱うデータは、神戸市在住の65歳以上の男女5,000人を対象とする郵送調査から得られたものの一部である。対象者の抽出方法は次の通りである。

まず、1999年1月31日現在の神戸市における65歳以上人口236,874人の区別分布に基づいて5,000票を全9区に比例配分した。次に、各区から8つの投票区を乱数を用いて無作為に抽出し、各投票区の選挙人名簿を用いて、あらかじめ乱数を用いて決めておいた最初の抽出番号にしたがって等間隔系統抽出を行った。

調査の期間は1999年6月から10月までであり、その間に未返送分については督促状を送った。最終的に回収されたのは2,732票であり、回収率は54.6%である。

回収票における区別の1999年1月31日現在の神戸市の65歳以上人口の区別割合は以下の通りである(括弧の前につけた数字は回収数である。括弧内の左側の数値は回収票における割合で、右側の数値が65歳以上の実人口における割合である)。

東灘区337人(12.3% : 11.5%)、灘区239人(8.7% : 9.0%)、兵庫区218人(8.0% : 9.9%)、長田区296人(10.8% : 9.5%)、須磨区330人(12.1% : 11.5%)、垂水区416人(15.2% : 16.0%)、北区387人(14.2% : 13.4%)、中央区219人(8.0% : 8.2%)、西区290人(10.6% : 11.0%)。

回答者の基本的属性は次の通りである(性別と年齢に関しては、括弧内の左側の数値が回収票における割合で、右側が神戸市全市における割合)。

性別 - 男1,200人(43.9% : 41.4%)、女1,509人(55.2% : 58.6%)、不明23人(0.9%)。

年齢 - 不明の50人を除くと平均73.6歳(標準偏差6.3歳)、最高99歳。5歳階級別では、65-69歳1,069人(39.9% : 35.3%)、70-74歳617人(18.9% : 27.2%)、75-79歳506人(18.9% : 17.7%)、80歳以上490人(18.3% : 19.8%)。

世帯形態 - 単身414人(15.7%)、夫婦のみ1,113人(40.7%)、核家族383人(14.0%)、既婚子と同居526人(19.3%)、親と同居51人(1.9%)、その他149人(5.5%)、不明96人(3.5%)。

就労状況 - 常勤の社員・職員として勤務137人(5.0%)、自営業主または家族従業者251人(9.2%)、アルバイト・パート171人(6.3%)、無職1,997人(93.6%)、不明176人(6.4%)。

各区別の割合や男女別割合、年齢5歳階級別割合からいって、回収票は概ね神戸市全市の65歳以上人口を代表するサンプルとみなすことができよう。ただし、この調査は郵送で行われ、基本的には自記式であるために、その代表性は、自分で調査票の質問を読み、自分で回答を記入できる高齢者であるという限定つきではある。

3. 結果

(1) 各項目の頻度分布

取り上げた113項目それぞれについて、「よくする(行く)」と「時々する(行く)」の選択率の合計を大きい順に並べて図示したのが、図1～図4である。これらの図では、「よくする(行く)」を「よくする」といったように調査票の回答肢の表現を簡略化してある。

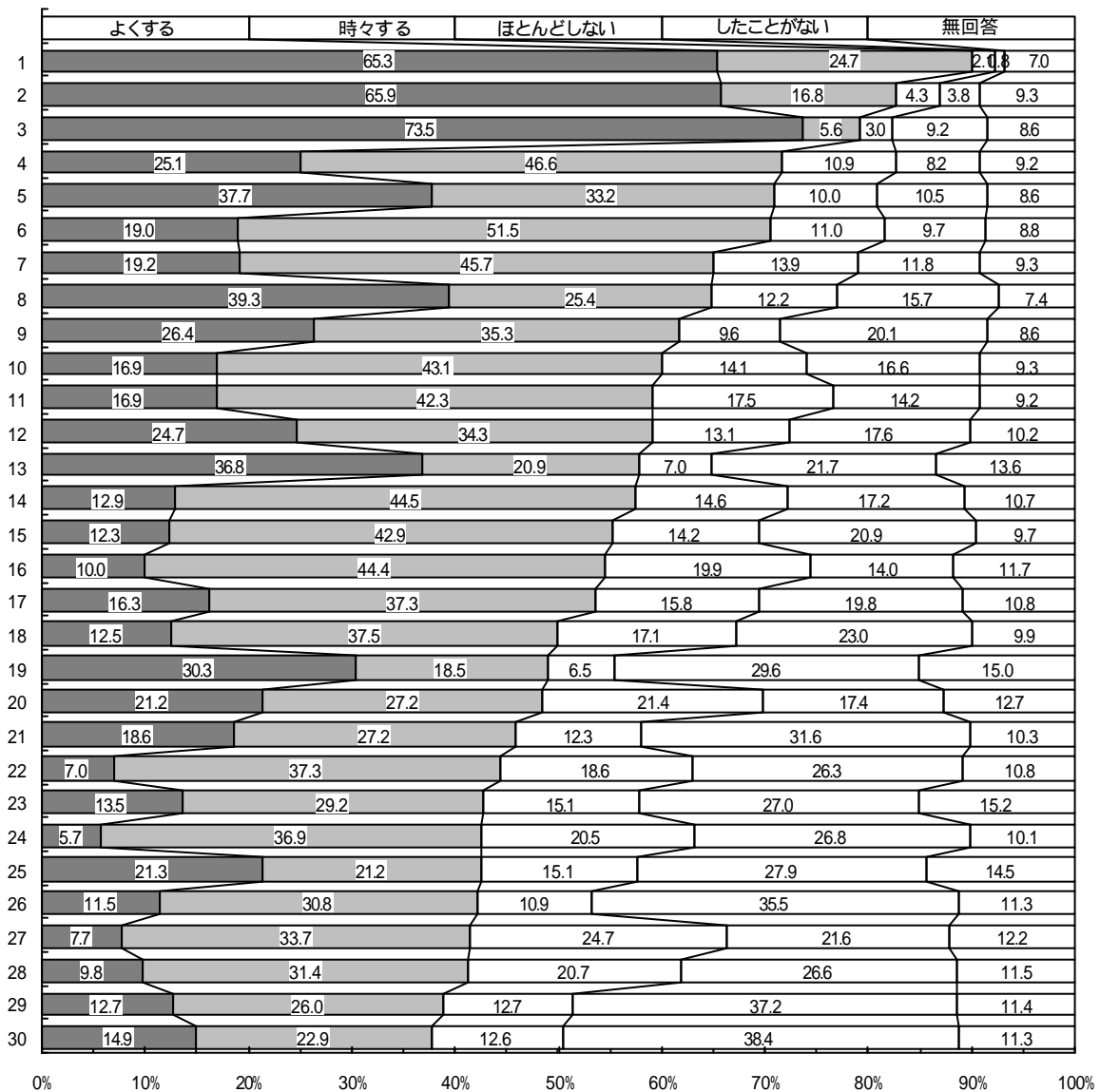


図1. 高齢者の生活行動 - その1

- | | |
|-----------------------|-------------------------|
| 1. テレビをみる | 16. 子どもや親戚を訪問する |
| 2. 新聞を読む | 17. 新製品の広告やカタログをみる |
| 3. パジャマを着て寝る | 18. デパート歩きやウィンドウショッピング |
| 4. 子どもや親戚に電話する | 19. 孫へのクリスマス・プレゼント |
| 5. 散歩をする | 20. ラジオをきく |
| 6. 食堂や料理店、レストランで食事をする | 21. 一般のビタミン剤を飲む |
| 7. 友人・知人に電話する | 22. 冷凍食品を買う |
| 8. 庭いじりや植木・花の世話、畑仕事など | 23. 自分の孫の世話をしたり孫と遊ぶ |
| 9. 歌謡曲や演歌をきく | 24. 弁当やできあいの食品(そうざい)を買う |
| 10. 喫茶店に入(はい)る | 25. 子どもへの誕生日のプレゼント |
| 11. 友人・知人と会っておしゃべりをする | 26. カメラで写真をとる |
| 12. 軽い体操をする | 27. 友人・知人を訪問する |
| 13. 孫への誕生日のプレゼント | 28. 一般に市販されている週刊誌を読む |
| 14. 日帰り旅行をする | 29. 漢方薬を飲む |
| 15. 泊まりがけの国内旅行をする | 30. 栄養補助食品・健康食品を飲む |

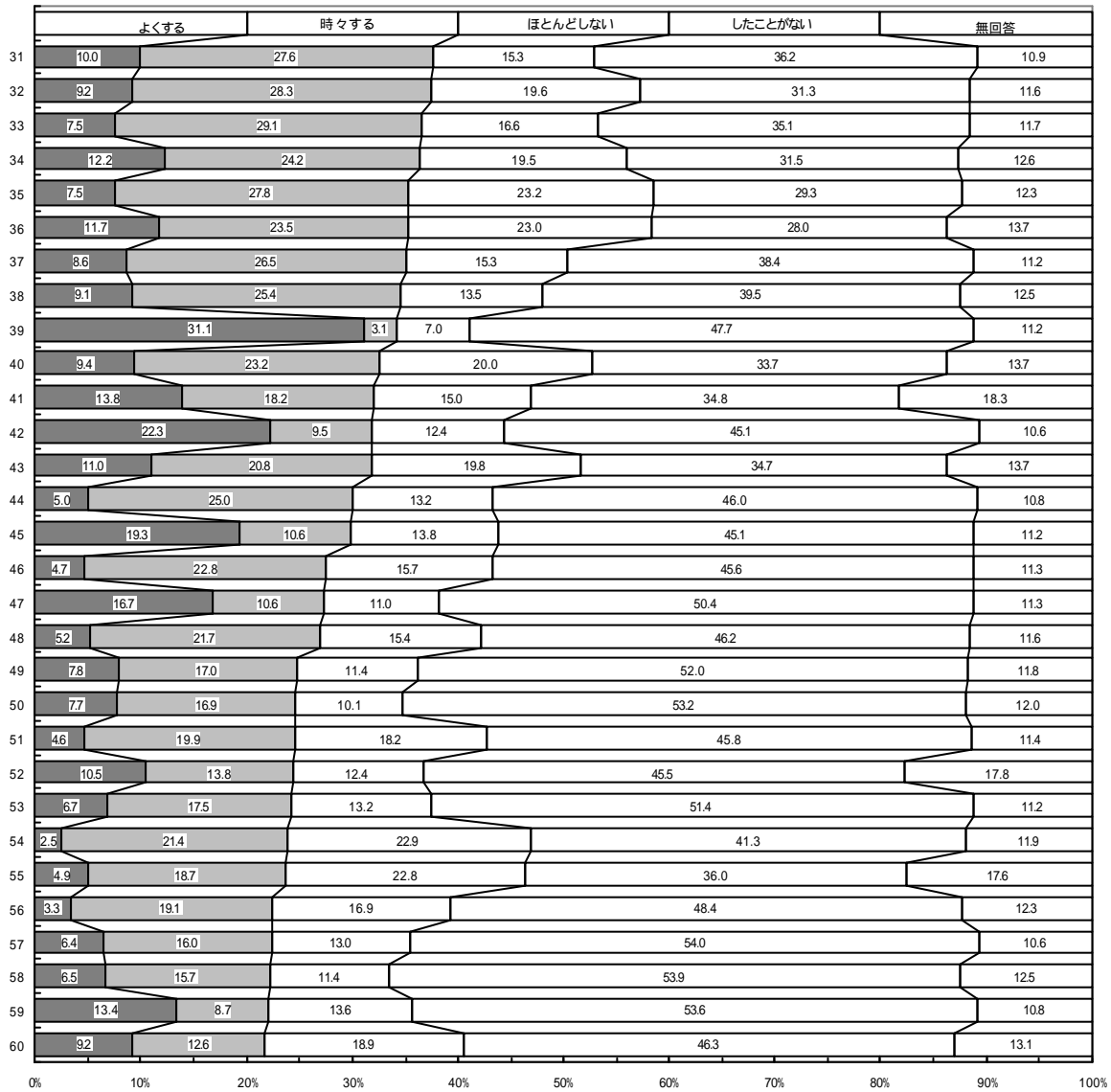


図2．高齢者の生活行動 - その2

- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| 31．家の簡単な補修や大工仕事をする | 46．通信販売(カタログ販売)で商品を買う |
| 32．コンビニエンスストアを利用する | 47．自転車に乗る |
| 33．美術館や博物館に行く | 48．ドリンク剤を飲む |
| 34．単行本の小説を読む | 49．クレジットカードを使う |
| 35．一般に市販されている月刊の雑誌を読む | 50．洋裁や和裁をする |
| 36．レコードやテープなどをきく | 51．ハイキングやピクニックに行く |
| 37．外国映画をみる | 52．子どもへのクリスマス・プレゼント |
| 38．クラシック音楽をきく | 53．浪曲をきく |
| 39．ベッドで寝る | 54．演劇や芝居を見に行く |
| 40．小説以外の単行本を読む | 55．自分の子どもと遊ぶ |
| 41．配偶者に誕生日のプレゼントをする | 56．講演会を聞きに行く |
| 42．家計簿や金銭出納簿をつける | 57．カラオケで歌う |
| 43．特定分野の雑誌や機関誌、刊行物を読む | 58．編み物をする |
| 44．宝くじを買う | 59．犬や猫、小鳥、金魚などペットの世話 |
| 45．日記をつける | 60．ビデオでテレビ番組を録画する |

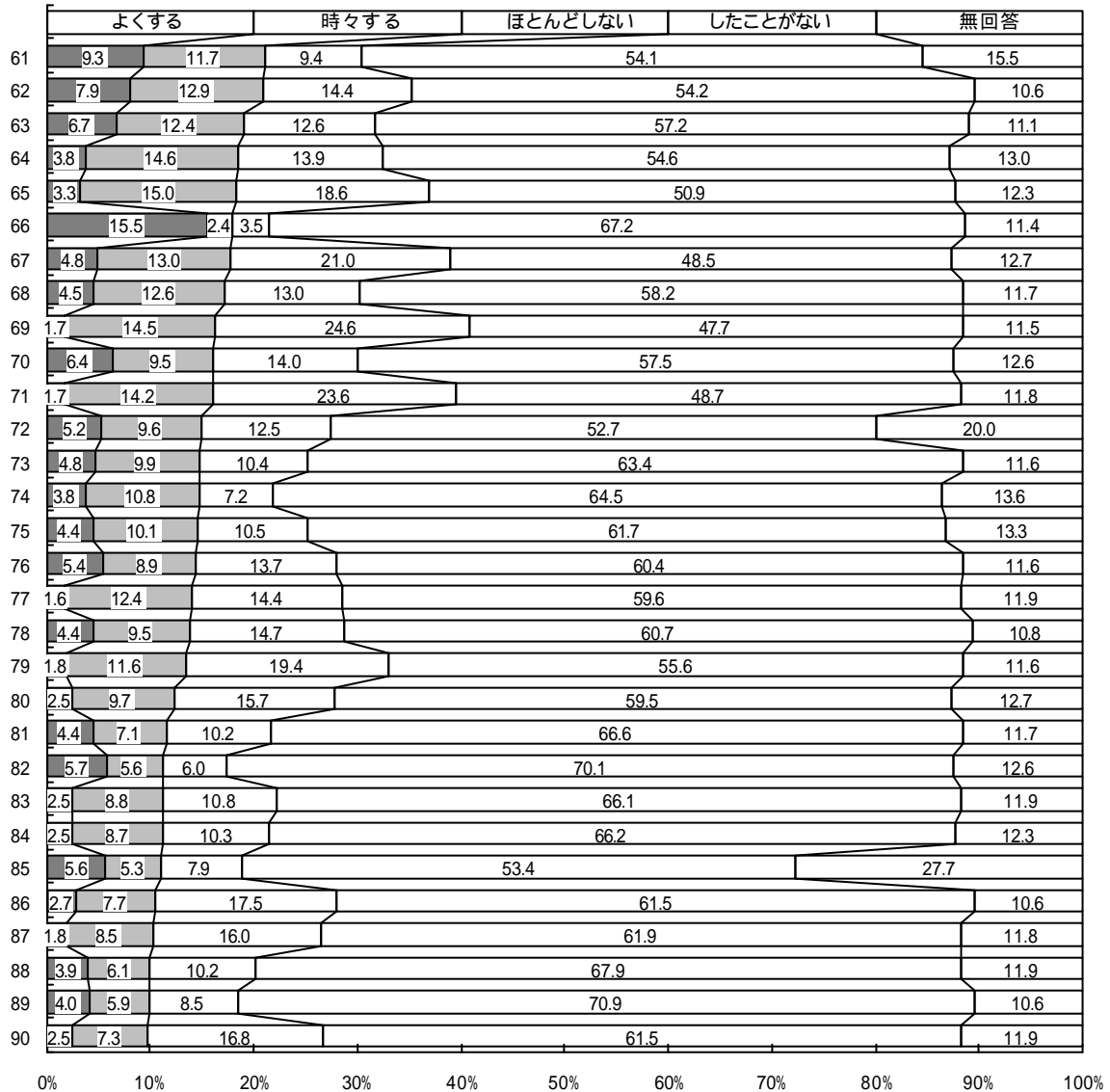


図3．高齢者の生活行動 - その3

- | | |
|------------------------|-----------------------|
| 61．バレンタイン/ホワイトデーのプレゼント | 76．ボランティア・社会奉仕活動をする |
| 62．婦人会、町内会、老人クラブなどで活動 | 77．スナックや飲み屋などに行く |
| 63．書道をする | 78．俳句や短歌、川柳などをつくる |
| 64．ジャズやポップスをきく | 79．野球やサッカーの試合を見に行く |
| 65．音楽会や演奏会に行く | 80．大学や県・市町村主催の公開講座の受講 |
| 66．自動車を運転する | 81．合唱や民謡、謡などをする |
| 67．図書館へ行く | 82．ワープロやパソコンを使う |
| 68．外国旅行をする | 83．株の売買をする |
| 69．歌謡ショー、落語・漫才などの演芸に行く | 84．ダイエット（減量）や減食をする |
| 70．カルチャーセンターや文化教室に通う | 85．親への誕生日のプレゼント |
| 71．映画館へ行って映画をみる | 86．魚つりをする |
| 72．配偶者へのクリスマス・プレゼント | 87．若者と一緒に遊んだり活動をする |
| 73．碁や将棋をする | 88．絵をかく（油絵や水彩画など） |
| 74．ビデオ・カメラで撮影する | 89．宗教的行為や宗教活動をする |
| 75．華道や茶道をする | 90．ふだん、和服を着る |

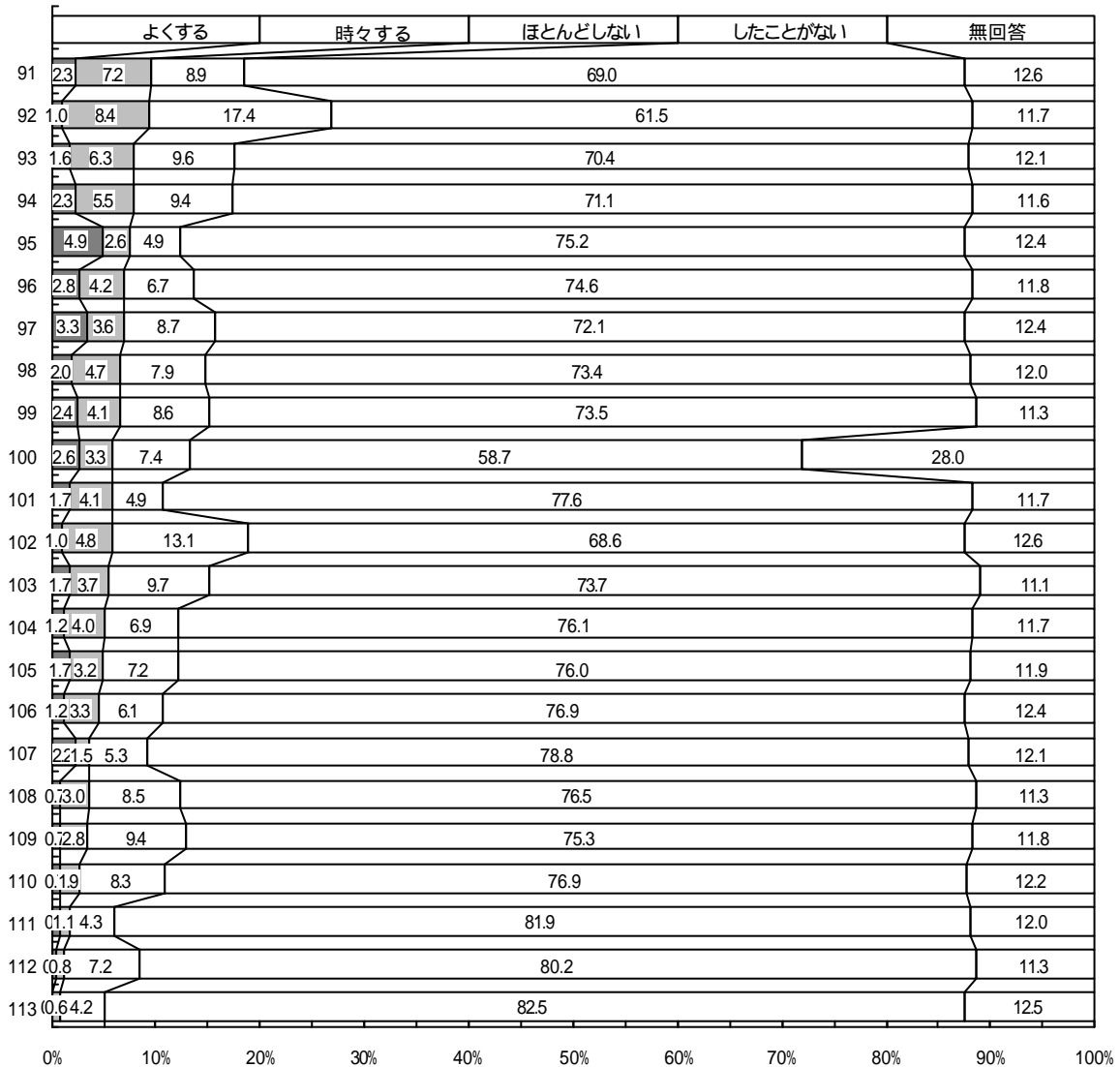


図4 . 高齢者の生活行動 - その4

- | | |
|----------------------------|------------------------|
| 91 . 人形作りやフラワー・アートをする | 106 . テレビゲームをする |
| 92 . ハンバーガー・ショップにはいる | 107 . ゲートボールをする |
| 93 . 麻雀をする | 108 . 政治的活動をする |
| 94 . 水泳をする | 109 . 随筆や小説を書く |
| 95 . オートバイやバイクを運転する | 110 . 陶芸をする |
| 96 . ゴルフをする | 111 . 電子メールやインターネットを利用 |
| 97 . ヨガや大極拳、気功、エアロビクスなどをする | 112 . テニスをする |
| 98 . マラソンやジョギングをする | 113 . 演劇や人形劇をする |
| 99 . 踊りやフォークダンスをする | |
| 100 . 親へのクリスマス・プレゼント | |
| 101 . 競輪や競艇、競馬などのギャンブルをする | |
| 102 . レンタル・ビデオをみる | |
| 103 . 社交ダンスをする | |
| 104 . パチンコやパチスロをする | |
| 105 . ピアノやギター、尺八など楽器を演奏する | |

また、図中に表示した各回答肢の選択率はサンプリング誤差を含んだ点推定の数値である。参考までに、本稿における信頼度95%の区間推定値を10%きざみで示せば以下の通りである。

10%(8.9%-11.1%)	20%(18.5%-21.5%)	30%(28.3%-31.7%)	40%(38.2%-41.8%)
50%(48.1%-51.2%)	60%(58.2%-61.8%)	70%(68.3%-71.7%)	80%(78.5%-81.5%)
90%(88.9%-91.1%)			

サンプリング誤差は、母集団の規模に対してサンプルの規模が小さいほど大きくなり、また、サンプルにおける比率(本稿の場合は選択率)が50%のときに最大となる。したがって、サンプル調査においては、得られた比率が50%前後の時には結果の解釈にとくに注意が必要である。

たとえば、そのことを支持する人の割合が多数(過半数)を占めるか否かを問題にする、あるいはそうしたことに関心を向ける場合に、サンプル調査によって得られた比率が50%を少しばかり上回った(下回った)からとって、母集団において、それを支持する人が多数(過半数)を占める(占めない)と即断できないということである。しかも、信頼度を95%よりも大きく設定すれば、それだけ区間推定値の幅も大きくなるから(たとえば、信頼度を99.7%とすると、本稿での50%の区間推定値は47.1%~52.9%となる)、サンプル調査によって得られた比率に基づいて母集団における比率を推定する場合には、区間推定値の下限を考慮するか上限を考慮するかで結果の解釈に大きな違いが生じることになる。

本稿の場合、項目18の「よくする」と「時々する」の合計はちょうど50%である。したがって、この結果は、高齢者の48.1%~51.2%(あるいは47.1%~52.9%)が「デパート歩きやウィンドウショッピング」を「よく」か「時々」していることを示していることになる。

要するに、高齢者のほぼ半数がそうしたことを「よく」か「時々」していると推定できるが、区間推定値の下限に注目すれば、そうした高齢者は半数以上を占めると断定することはできないということである。

逆に、項目19および項目20は、「よくする」割合と「時々する」割合の合計はそれぞれ48.8%と48.4%と50%を切っているが、それぞれの区間推定値を95%(99.7%)の信頼度で算出すると、それぞれ46.9%~50.7%(45.9%~51.7%)と46.5~50.3%(45.5%~51.3%)であるから、区間推定値の上限に注目すれば、これら2項目に関しては「よく」か「時々」する高齢者は半数に満たない、とは必ずしもいえないことになり、項目18と同様に高齢者のほぼ半数あるいは半数以上がそうしたことを「よく」か「時々」していると判断することもできる。

以上のことを念頭におきながら区間推定値の上限を考慮して図1をみると、「よくする」にしる「時々する」にしる、高齢者のほぼ半数に近い、あるいは半数以上がしている(と推定される)項目は、図1の上位20項目である。それらの中でも選択率がとくに大きい項目は、「テレビをみる」(90.0%)、「新聞を読む」(82.7%)、「パジャマを着て寝る」(79.1%)の3つである。これらは、高齢者に限らずどの年齢層にも共通する一般的な日常的行動といえるが、和装の寝衣を用いる高齢者はいまでは少数派であることがわかる。

それらに続く上位10までの項目を順にあげると、「子どもや親戚に電話する」(71.7%)、「散歩をする」(70.9%)、「食堂や料理店、レストランで食事をする」(70.5%)、「友人・知人に電話する」(64.9%)、「庭いじりや植木・花の世話、畑仕事などをする」(64.7%)、「歌謡曲や演歌をきく」(61.7%)、「喫茶店に入る」(60.0%)である。

電話で親族や友人とコミュニケーションを交わし、散歩や庭いじりを楽しみ、時にはレストランや喫茶店で飲食をし、歌謡曲や演歌を楽しむというのが高齢者の多くに一般的にみられる行動であることがわかる。

11位以下20位までの項目を順に列挙すると、「友人・知人と会っておしゃべりをする」(59.2%)、「軽い体操をする」(59.0%)、「孫への誕生日のプレゼント」(57.7%)、「日帰り旅行をする」(57.4%)、「泊まりがけの国内旅行をする」(55.2%)、「子どもや親戚を訪問する」(54.4%)、「新製品の広告やカタログをみる」(53.6%)、「デパート歩きやウィンドウショッピングをする」(50.0%)、「孫へのクリスマス・プレゼント」(48.8%)、「ラジオをきく」(48.4%)である。

テレビの視聴に比べてラジオの聴取率が低いのは年齢に関わらず今日的な傾向を反映しているといえそうであるが、以上の上位20位までの結果から想像されるのは、親族や友人との関係を維持しながら、活発とはいえなくても健康的で無理のない活動をしながらかつて穏やかな高齢期を過ごしている高齢者の姿である。

上位20項目の中でも「よくする」割合が大きいものは、それらが、より日常的、反復的行動であることを物語っている。「散歩」や「庭いじり」、「孫への誕生日プレゼント」、「孫へのクリスマスプレゼント」などがそうした行動である。

21位以下の項目は、そうしたことを「ほとんどしない」あるいは「全然したことがない」高齢者が多数を占める行動であるが、30位までの項目は、「よく」にしる「時々」にしる、高齢者の4割が日常的に行っている行動である。

それらは、「ビタミン剤」(45.8%)や「漢方薬」(38.7%)、「栄養補助食品・健康食品」(37.8%)の摂取、「冷凍食品」(44.3%)や「弁当やできあいの総菜」の購入(42.6%)、「孫の世話」(42.7%)や「子どもへの誕生日プレゼント」(42.5%)であり、余暇的行動としては「カメラで写真を撮る」(42.3%)ことや「友人・知人の訪問」(41.4%)、「週刊誌の購読」(41.2%)である。

図2の31位～45位までの項目は、そうしたことをしている高齢者が概ね30%台の項目である。それらのうちで、習慣的行動は、「コンビニの利用」(37.5%)や「ベッドで寝る」(34.2%)、「家計簿や金銭出納簿をつける」(31.8%)、「日記をつける」(29.9%)ことであり、余暇的な行動は、「美術館や博物館に行く」(36.6%)こと、「単行本の小説」(36.4%)や「小説以外の単行本」(32.6%)、「月刊雑誌」(35.3%)、「特定分野の雑誌や機関誌、刊行物」(31.8%)を読むことである。この他の項目では、「家の簡単な補修や大工仕事」(37.6%)、「宝くじを買う」(30.0%)、「配偶者への誕生日プレゼント」(32.0%)である。

46位以下63位までの項目は、高齢者の約20%が行っている行動である。それらの中には、「通信販売」(27.5%)の利用や「クレジットカードの利用」(24.8%)、「ビデオでテレビ番組を録画する」(21.8%)、「バレンタインデーやホワイトデーのプレゼント」(21.0%)など最近の社会的動向を反映した行動が含まれている。

「浪曲をきく」(24.2%)ことはかつては多くの高齢者の楽しみの一つであったが、今日では多くの高齢者の趣味とはいえなくなっていることがうかがわれる。その代わりに、といてよいかどうか、「カラオケで歌う」(22.4%)高齢者が同程度の割合を占めている。

「洋裁や和裁」(24.6%)、「編み物」(22.2%)は主に女性に関係する行動といえるから、女性に限っていえば、そうしたことをしている高齢者の割合はここで示されている数値よ

りも当然大きくなる。

「自転車に乗る」(27.3%)ことは居住地の地形に左右されるが、神戸市全体では高齢者の30%近くがふだん自転車を利用していることがわかる。

文化的行動では「演劇や芝居」(23.9%)、「講演会」(22.4%)、「書道」(19.1%)が、身体的活動では「ハイキングやピクニック」(24.5%)が、子どもとの関係では「クリスマスプレゼント」(24.3%)や「一緒に遊ぶ」(23.6%)ことが20%台であり、「ペットの世話」(22.1%)や「婦人会、町内会、老人クラブなどでの活動」(20.8%)も20%台である。

64位から88位までは、「よくする」と「時々する」の割合の合計が10%台の項目である。その多くは余暇的活動であるが、それらの中でも「ジャズやポップスをきく」(18.4%)割合が比較的大きいことが目を引く。

高齢者の「自動車の運転」(17.9%)については種々の論議があるが、この調査からは、「よくする」割合が15.5%とそれほど大きくない。神戸市全体で日常的に自動車を運転している高齢者はおおよそ32,000～42,000人と推計される(信頼度99.7%で計算)。

「音楽会や演奏会」(18.3%)、「図書館」(17.8%)、「外国旅行」(17.1%)、「歌謡ショーや落語・漫才などの演芸」(16.2%)、「カルチャーセンターや文化教室」(15.9%)、「映画館で映画をみる」(15.9%)、「野球やサッカーの観戦」(13.4%)、「公開講座の受講」(12.2%)、「魚釣り」(10.4%)などの外出型余暇活動や「ビデオ撮影」(14.6%)、「華道・茶道」(14.5%)、「俳句や短歌、川柳」(13.9%)、「合唱や民謡、謡」(11.5%)、「絵を描く」(10.0%)といった創作的活動のほか、「配偶者へのクリスマスプレゼント」(14.8%)、「碁や将棋」(14.7%)、「ボランティア・社会奉仕活動」(14.3%)、「スナックや飲み屋に行く」(14.0%)、「株の売買」(11.3%)、「ワープロやパソコンを使う」(11.3%)、「ダイエットや減食」(11.2%)、「親への誕生日プレゼント」(10.9%)、「若者と一緒に遊んだり活動する」(10.3%)の割合も10%台である。

89位以下は10%未満の項目である。「宗教的活動」(9.9%)をする高齢者や「ふだん和服を着る」(9.8%)高齢者は今日では少数派であることが示されている。

「水泳」(7.8%)や「ゴルフ」(7.0%)、「ヨガや太極拳、気功、エアロビクス」(6.9%)、「マラソンやジョギング」(6.7%)、「踊りやフォークダンス」(6.5%)、「社交ダンス」(5.4%)、「ゲートボール」(3.7%)、「テニス」(1.2%)といった運動・スポーツ・身体活動を行っている高齢者も全体から見ればごくわずかである。

「競輪や競艇、競馬」(5.8%)や「パチンコ」(5.2%)などのギャンブルや「麻雀」(7.9%)、「テレビゲーム」(4.5%)をする高齢者も少ない。

「ハンバーガーショップ」(9.4%)に入ったり「レンタルビデオ」(5.8%)をみる高齢者や「政治活動」(3.7%)をしている高齢者もやはり少数派である。

「パソコンやワープロ」を利用している高齢者は約1割であったが、「電子メールやインターネット」(1.8%)の利用者は、まだごくわずかであることがわかる。

以上、種々の生活行動について、それをどの程度の割合の高齢者が行っているかをみてきた。取り上げた113項目のうち、高齢者の半数以上が行っているものは20項目にとどまったが、それ以外の項目については、そうしたことを「する」高齢者の割合が大きいとみるか小さいとみるかは問題の設定のしかたや関心の置き方、比較する対象によって判断が異なる。いま、ここでは、それらに関しては触れないが、神戸市在住の高齢者の生活行動

に関する情報の一端を提供し得たものとする。

(2) 生活行動の類型化

取り上げた113項目を集約、類型化することを目的に、113項目すべてに回答した完全回答票1,122票(男576、女510)を用いて、「よくする」に4点、「時々する」に3点、「ほとんどしない」に2点、「全然したことがない」に1点を与えて因子分析を行った。

固有値1.0以上の因子が30個抽出されたが、30番目の因子は、それに所属する各項目の因子負荷量がきわめて小さいので省くことにし、29個の因子に関して直交回転後の共通性と因子負荷量を示したのが表1である。

各因子の寄与率はいずれも小さく、累積寄与率も48.8%にとどまるが、113項目の生活行動が比較的明瞭に分類されている。なお、因子負荷量が0.3未満の場合は、その項目が所属する因子の負荷量平方和(説明力)に及ぼす影響が無視できる程度に小さいものとなるので、一般には、その項目の負荷量を表示せず、因子を解釈する際にもその項目を考慮しない。しかし、ここでは、因子負荷行列を簡略表示しているため、因子への所属がわかるようにすべての項目と負荷量を表示しておく。

なお、今回は、取り上げた113項目を因子分析を用いて類型化する際に、それぞれの類型が相互に関連しない類型となるようにするために、軸の回転に際しては直交回転を採用した。したがって、以下に述べる各因子は互いに無相関であり、類似しているように見える類型も、調査結果からいえば(データに忠実であれば)互いに関連がない類型として抽出されたものである。

第1因子は配偶者や子どもへのプレゼント、バレンタインデー/ホワイトデーのプレゼントで構成されているから「近親者への贈与行動」を内容とする因子と解釈できる。

第2因子に所属する項目は、一見して女性の、しかも室内での動きの少ない行動であることがわかる。そして、それらはいずれも手先の技術を必要とする行動であるところに共通性を認めることができる。

華道や茶道は、和洋裁や編み物とは異質なもののように見えるが、その行動様式・形態を構成する要素として手先の技術が重要な位置を占めていることには変わりがない。そこで、この第2因子を「手芸・手技」の因子とする。和裁や洋裁、華道、茶道などは一般に手芸には含めないため、手芸よりも広い意味で使われる手技という用語を併置することにした。

第3因子は主に音楽、それも西洋音楽の鑑賞と解釈できるが、外国映画をみることもこの因子に所属している。したがって、「洋楽・洋画鑑賞」と名づけておく。外国映画を洋画と限定的に表現することは適切ではないかもしれないが、ここでは、一般には西洋を発祥・発展の地とする文化であるクラシック音楽やジャズやポップスと同一の因子に所属しているということから洋画とみなしている。

第4因子は多様な項目で構成されており、それらの共通性を一目で見出すことが難しい。しかし、いずれの行動も器用さを必要とし、しかも活動的という印象を与えよう。こうした行動は、日常生活における高い活動性をあらわすものと解釈できそうである。

言い換えると、先に触れたBaltesら(1993)のいう拡張的活動能力を高い水準で発揮しうることを示唆する代表的な行動とみなしうるのではないかと考えられる。

表1. 生活行動項目の因子分析（回転後の因子行列）

（その1）

	共通性	因子	負荷量
配偶者へのクリスマス・プレゼント	0.669	1	0.731
子どもへのクリスマス・プレゼント	0.660	(2.92)	0.723
子どもへの誕生日のプレゼント	0.711		0.661
配偶者に誕生日のプレゼントをする	0.576		0.635
バレンタインデー/ホワイトデーのプレゼント	0.367		0.454
洋裁や和裁をする	0.707	2	0.770
編み物をする	0.729	(2.61)	0.769
人形作りやフラワー・アートをする	0.461		0.555
華道や茶道をする	0.521		0.533
クラシック音楽をきく	0.694	3	0.736
ジャズやポップスをきく	0.614	(2.56)	0.672
外国映画をみる	0.503		0.442
音楽会や演奏会に行く	0.601		0.430
レコードやテープなどをきく	0.509		0.429
ラジオをきく	0.190		0.240
家の簡単な補修や大工仕事をする	0.455	4	0.580
カメラで写真を撮る	0.531	(2.44)	0.441
自動車を運転する	0.364		0.437
魚つりをする	0.424		0.437
オートバイやバイクを運転する	0.321		0.431
自転車に乗る	0.335		0.417
ビデオ・カメラで撮影する	0.354		0.325
庭いじりや植木・花の世話、畑仕事などをする	0.351		0.316
ハイキングやピクニックに行く	0.496		0.283
犬や猫、小鳥、金魚などのペットの世話をする	0.185		0.197
麻雀をする	0.420	5	0.534
パチンコやパチスロをする	0.326	(2.33)	0.501
競輪や競艇、競馬などのギャンブルをする	0.284		0.495
碁や将棋をする	0.418		0.471
テレビゲームをする	0.346		0.392
野球やサッカーの試合を見に行く	0.450		0.340
スナックや飲み屋などに行く	0.408		0.300
宝くじを買う	0.272		0.285
小説以外の単行本を読む	0.787	6	0.790
単行本の小説を読む	0.769	(2.45)	0.777
図書館へ行く	0.499		0.393
美術館や博物館に行く	0.687		0.371
特定分野の雑誌や機関誌、刊行物を読む	0.433		0.323
随筆や小説を書く	0.485	7	0.591
俳句や短歌、川柳などをつくる	0.450	(2.92)	0.537
絵をかく（油絵や水彩画など）	0.344		0.502
書道をする	0.376		0.372
陶芸をする	0.306		0.361
演劇や人形劇をする	0.384		0.352
ピアノやギター、尺八など楽器を演奏する	0.285		0.245
友人・知人と会っておしゃべりをする	0.725	8	0.729
友人・知人に電話する	0.748	(2.19)	0.720
友人・知人を訪問する	0.727		0.700

（次ページへ続く）

(その2)

	共通性	因子	負荷量
孫への誕生日のプレゼント	0.891	9	0.885
孫へのクリスマス・プレゼント	0.757	(2.14)	0.769
自分の孫の世話をしたり孫と遊ぶ	0.658		0.653
一般のビタミン剤を飲む	0.534	1 0	0.679
栄養補助食品・健康食品を飲む	0.477	(2.08)	0.637
ドリンク剤を飲む	0.437		0.601
漢方薬を飲む	0.420		0.586
ダイエット(減量)や減食をする	0.185		0.214
演劇や芝居を見に行く	0.798	1 1	0.762
歌謡ショーや落語・漫才などの演芸を見に行く	0.672	(1.98)	0.618
映画館へ行って映画をみる	0.576		0.487
弁当やできあいの食品(そうざい)を買う	0.597	1 2	0.729
冷凍食品を買う	0.508	(1.83)	0.606
コンビニ(コンビニエンスストア)を利用する	0.366		0.510
ハンバーガー・ショップにはいる	0.365		0.319
デパート歩きやウィンドウショッピングをする	0.514		0.280
講演会を聞きに行く	0.761	1 3	0.672
大学や県・市町村主催の公開講座を受講する	0.664	(1.83)	0.662
カルチャーセンターや文化教室に通(かよ)う	0.540		0.498
日帰り旅行をする	0.759	1 4	0.668
泊まりがけの国内旅行をする	0.684	(1.80)	0.659
外国旅行をする	0.459		0.375
ボランティア・社会奉仕活動をする	0.728	1 5	0.731
婦人会、町内会、老人クラブなどで活動する	0.595	(1.78)	0.670
若者と一緒に遊んだり活動をする	0.493		0.417
ゲートボールをする	0.246		0.308
ふだん、和服を着る	0.158		0.154
散歩をする	0.590	1 6	0.693
軽い体操をする	0.594	(1.53)	0.647
パジャマを着て寝る	0.122		0.161
ワープロやパソコンを使う	0.522	1 7	0.587
電子メールやインターネットを利用する	0.408	(1.42)	0.561
ゴルフをする	0.282		0.221
子どもや親戚を訪問する	0.734	1 8	0.701
子どもや親戚に電話する	0.694	(1.38)	0.627
自分の子どもと遊ぶ	0.465		0.450
カラオケで歌う	0.541	1 9	0.528
歌謡曲や演歌をきく	0.444	(1.36)	0.494
合唱や民謡、謡などをする	0.399		0.361
浪曲をきく	0.336		0.334
社交ダンスをする	0.575	2 0	0.666
踊りやフォークダンスをする	0.555	(1.35)	0.575
テニスをする	0.300		0.275
一般に市販されている週刊誌を読む	0.678	2 1	0.710
一般に市販されている月刊の雑誌を読む	0.689	(1.34)	0.648
親へのクリスマス・プレゼント	0.723	2 2	0.745
親への誕生日のプレゼント	0.625	(1.17)	0.650
政治的活動をする	0.415	2 3	0.536
宗教的行為や宗教活動をする	0.275	(1.00)	0.471

(次ページへ続く)

(その3)

	共通性	因子	負荷量
日記をつける	0.448	2 4	0.511
家計簿や金銭出納簿をつける	0.414	(0.90)	0.493
ヨガや大極拳、気功、エアロビクスなどをする	0.442	2 5	0.432
水泳をする	0.384	(0.85)	0.420
マラソンやジョギングをする	0.335		0.305
喫茶店に入(はい)る	0.568	2 6	0.544
食堂や料理店、レストランで食事をする	0.670	(0.84)	0.466
ベッドで寝る	0.115	2 7	0.310
株の売買をする	0.204	(0.80)	0.196
新製品の広告やカタログをみる	0.463	2 8	0.301
通信販売(カタログ販売)で商品を買う	0.389	(0.74)	0.275
クレジット・カードを使う	0.415		0.265
新聞を読む	0.332		0.231
テレビをみる	0.129		0.182
レンタル・ビデオをみる	0.304	2 9	0.409
ビデオでテレビ番組を録画する	0.478	(0.73)	0.404

注：因子の抽出は最尤法、回転はバリマックス法、共通性は回転後の数値。

()内は回転後の各因子の寄与率。負荷量の欄の-は負荷量の絶対値が0.3未満。

Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度=0.917。

敷衍すれば、こうした行動をする人は、他の生活行動においてもまめで創意工夫を發揮しているものと思われる。器用という用語は、「物事の役に立つ才能のあることや賢いこと、手先がよくきき、技芸に巧みなこと、細かい仕事をうまく処理すること」(広辞苑)という意味で使われるから、こなれた表現ではないが、この第4因子を「器用行動」(skillful behavior)の因子としておく。ちなみに、この第4因子を共分散構造分析で検証したところ高い適合性が得られた(図5)。

Chi-Sq.=82.539(18df), p=0.000
RMR=0.036, GFI=0.981, AGFI=0.962, NFI=0.944
RMSEA=0.057

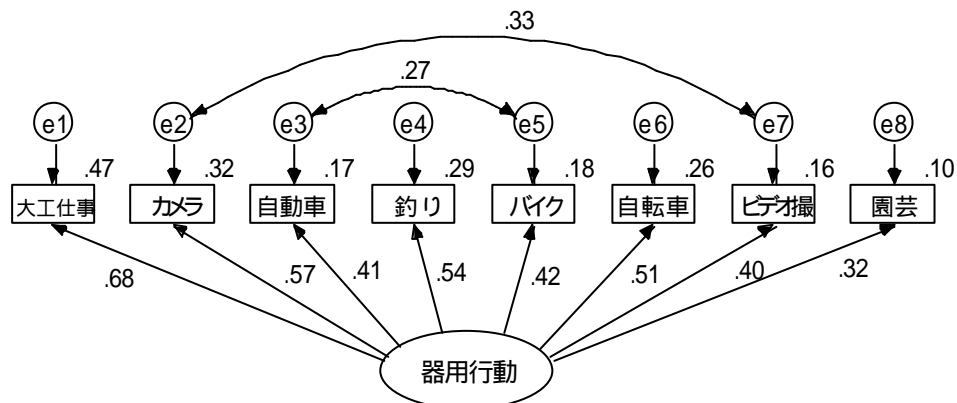


図5.器用行動の検証的因子分析(標準解)

カイ2乗値からいえばこのモデルは棄却されるが、これはサンプルの規模が1,000を超

すほど大きいためである。したがって、ここではカイ 2 乗値をモデルの適合度指標として採用しない。そのかわりに、RMR(残差平方平均平方根)、GFI(Goodness-of-Fit Index)、AGFI(調整済みGFI)、NFI(規準化適合度指標)、RMSEA(平均 2 乗誤差平方根)から適合度を判定している。RMRとRMSEAは0に近いほど、他の指標は1に近いほどモデルとデータの適合度が高いことを意味する。一般に、RMRは0.05未満、RMSEAは0.08未満であれば、そして、他の指標は0.9以上であれば適合度が良好と判断される。

図中の直線の矢印についた数値は標準化係数(推定値)であり、ここでは因子負荷量のことである。四角で囲まれた生活行動項目の右肩に記した数値は重相関係数の平方で、器用行動という共通因子によって説明される割合を表している。いずれの係数も大きな値ではない。

しかし、こうしたことはモデルの有効性を否定するものではない。共通因子だけで、あるいは共通因子で大部分が説明できるような現象は現実には希だからである。このモデルでいえば、それぞれの生活行動は共通因子以外の要因(独自因子)に大きく左右されているということである。

ところで、器用行動という共通因子に含まれる生活行動項目の中では、カメラ撮影とビデオ撮影、自動車の運転とバイクの運転といった行動は、それぞれ似かよった行動であり、そこには何か共通する要素があると考えるのがふつうである。このモデルが、独自因子間の相関を考慮しているのは、そのためである。両端に矢印がついた曲線に付加された相関係数をみると、それぞれの独自因子間に正の相関が認められ、常識的判断を裏付けている。なお、このモデルにおける推定値(非標準化係数)はいずれも0.1%水準で有意である。

ところで、第5因子は「ゲーム(勝負事)」、第6因子は「読書」、第7因子は「創作」、第8因子は「交友」、第9因子は祖父母としての行動(「祖親性行動」)をあらわす因子と解釈できる。

第10因子は、医師が処方した治療薬の服用ではなく一種の健康行動とみなすことができるから、服薬行動と区別する意味で「常用剤服用」と名づけることにする。

第11因子は「観劇」行動と表現できる。第12因子は食行動に関わる項目で構成されている。それらに共通しているところは、調理や食事の支度に簡単で便利な方法を講じることである。そこで、この第12因子を「簡便的食行動」と名づけることにする。

第13因子は「学習」行動、第14因子は「旅行」の因子と解釈できる。

第15因子にはボランティア活動や町内会活動とともに若者と一緒に遊んだり行動することやゲートボールといった多少異質な項目が含まれている。しかし、共通するところは幅広い人間関係に関わる場所にあるといえる。そこで、この第15因子を「社会活動」の因子とみなすことにする。

第16因子は散歩や軽い体操で構成されているので「軽い運動」と名づける。

第17因子はパソコンやインターネットといった最新の情報技術に関わる行動であるから「IT行動」としておく。

第18因子は子どもや親戚との関係の項目であるから「親族交際」をあらわす因子である。

第19因子は歌や音楽に関係する項目であるが、第3因子の西洋音楽とは異なって、歌謡曲や演歌、浪曲など、日本に固有の流行歌や芸能を楽しむところに共通性を見出すことができる。そこで、「広義には日本音楽全体の称」(広辞苑)を指す言葉である邦楽を用い

て「邦楽喜楽」行動とする。

第20因子を構成する項目はダンスや踊りであるから「舞踊」、第21因子は「雑誌購読」、第22因子は「親への贈与」行動、第23因子は「政治・宗教活動」、第24因子は「生活記録」とそれぞれ名づけられる。

第25因子は身体運動の項目で占められている。しかし、それらは、テニスやゴルフのような競技性の高いスポーツとは異なり、それを楽しむために、時間をかけて特定の技術を習得する必要のない運動である。しかし、また、第16因子のような「軽い運動」よりは運動量が大きい運動である。その意味では「軽い運動」と競技性の高いスポーツとの中間に位置する「中程度の運動」の因子と解釈できる。

第26因子は「外食」をあらわす因子である。

第27、第28の2つの因子は、それらを構成する項目の因子負荷量がいずれも小さいので省く。

第29因子は「ビデオ鑑賞」の因子である。

以上、取り上げた113項目に関する因子分析の結果、高齢者の生活行動は27の類型に集約された。いうまでもなく、それらは高齢者の生活行動のすべてを網羅するものではなく、ごく一部にすぎない。それでも30もの因子が抽出され、27の類型に類別されたということは、現実の生活行動が実に多様で、類似した行動のように見えても、それらは相当程度異質な行動として展開されていることを物語るものといえよう。

また、逆に、因子4(器用行動)に所属する行動のように、それぞれは一見関連がないような行動でも、その人、その家族の固有の日常生活を成り立たせている行動として相互に密接な関連をもっていることが明らかにされた。

(3) 生活行動類型の要因分析

ところで、そうした行動をするかしないか、あるいはどの程度の頻度であるかを規定している要因は様々なものが考えられるが、本稿では、性、年齢、世帯形態および性と年齢の交互作用の観点から検討することとする。その場合、個々の生活行動について逐一検討することも興味あるところであるが、ここでは上で述べた各因子の因子得点に関する分散分析によって検討することとする。

ここでの分散分析の目的は、その因子(生活行動類型)に関してカテゴリ間の得点(たとえば男性の得点と女性の得点)に有意な差があるかどうか、言い換えれば、その得点に性や年齢、世帯形態の違いが影響(効果)を及ぼしているか否かを確認することである。

因子得点は平均0、分散1に標準化されているので、その因子があらわす生活行動類型に関する回答者個人の相対的な行動傾向を容易にとらえることができる。因子得点が正值であれば、その人はそうした行動を回答者全体の平均以上にしていることになり、負値であればその逆である。

同様にして、あるカテゴリの平均値が他のカテゴリの平均値よりも大きければ(小さければ)、そのカテゴリに所属する人は、他のカテゴリに所属する人よりも、そうした行動をより頻繁にしている(していない)ことになる。別の言い方をすれば、そのカテゴリには、そうした行動をする人が他のカテゴリよりも多い(少ない)ということになる。

標準化されている因子得点は小さい数値であるために、それをそのまま用いると表示さ

れる平均値の数値も小数点以下の小さな数値になって読みにくい。そこで、表示の便宜上、因子得点を100倍して計算することにする。また、あわせて、因子得点を被説明変数、性、年齢、世帯形態を説明変数とする線形モデルの有効性についても検討したが、その結果については表示するにとどめておく。なお、以下で触れる図表は章末に一括して掲載することとする。

(1) 「近親者への贈与行動」

表2に見るように、この行動類型に関しては性と年齢、世帯形態のすべてが5%水準で有意な影響を与えている。しかし、性と年齢の交互作用は有意ではない。性別では、女性が、年齢では若いほど、そして、世帯類型では当然のことながら単身世帯に少なく夫婦のみの世帯が核家族世帯に多く、とくに夫婦のみの世帯で生活している高齢者がこうした行動をよくしていることがわかる(表3)。

なお、表3のC.V.(Coefficient of Variation: 変動係数)は得点のばらつきの大きさをあらわす数値である。この絶対値が大きいほどばらつきが大きいことを示し、これによって得点のばらつき具合をカテゴリ間で比較することができる。

表2でいえば、因子1(近親者への贈与行動)において、因子得点のばらつきが一番大きいカテゴリは70-74歳で、逆にばらつきが一番小さいのは単身世帯である。ばらつきが一番小さくて平均値も一番小さい単身世帯の高齢者は、そのほとんどがこうした行動をしないということが、これによってわかる。

これに対して、平均値が小さくてばらつきの大きい70-74歳の高齢者に関していえば、そうしたことをよくする高齢者が少なくない一方で、全くしない高齢者も少なくないことがわかる。

(2) 「手芸・手技」

性と年齢、そして、性と年齢の交互作用が有意である(表4)。男女差が明瞭である。この行動類型は女性特有のものであり、年齢が若いほどこうしたことをよくしているが明らかである(表5)。

(3) 「洋楽鑑賞」

年齢と世帯形態が有意であり、性は有意ではない(表6)。洋楽鑑賞をする高齢者は、年齢では若いほど、そして、世帯形態では単身世帯や夫婦のみの世帯、核家族世帯、親と同居している世帯に多く、既婚子と同居している世帯やその他の世帯に少ない(表7)。とくに親と同居している世帯と核家族世帯の高齢者でこうしたことをよくしていることが示されている。これには年齢の影響があらわれているものと考えられる(本稿では、世帯形態と性や年齢との交互作用を考慮していない)。

(4) 「器用行動」

性と年齢、そして、性と年齢の交互作用が有意である(表8)。性別では男性に、年齢では若いほどこうしたことをする高齢者が多い(表9)。第2因子の行動類型とちょうど逆の傾向がみられる。この行動類型は男性に顕著なものであり、若いほどそうしたことをよくしていることがわかる。

(5) 「ゲーム/勝負事」

この行動類型も、性と年齢、そして、性と年齢の交互作用が有意である(表10)。しかも、第4因子(器用行動)と同様に顕著な行動類型である。若いほど、とくに60代の男性ほどそ

うしたことをよくしているが、70代においては後半になっても平均値が低下することがない。ゲーム/勝負事をする高齢者は、年齢が高くなってもそうしたことを継続している様子がうかがわれる。ゲーム/勝負事というのは継続性の高い行動であるといえそうである。

(6) 「読書」

性だけが有意である(表12)。その差は大きくはないが、男性のほうがよくしている(表13)。

(7) 「創作」

年齢と世帯形態、性と年齢の交互作用が有意である(表14)。年齢では70代以降に特徴的な行動であるが、とくに70代の後半男性に顕著な行動であることがわかる(表15)。世帯形態では単身世帯や既婚子との同居世帯よりも夫婦のみの世帯や核家族世帯、親との同居世帯が促進的に作用している(表16)。

(8) 「交友」

性と世帯形態が有意である(表17)。男性よりも女性が、単身世帯や親との同居世帯の高齢者が交友行動を積極的に行っていることがわかる(表18)。

(9) 「祖親性行動」

年齢と世帯形態が有意である(表19)。年齢では60代から70代までの違いがなく、80歳以上になるとそうしたことをしなくなる様子が示されている(表20)。80歳以上になると孫の年齢も高くなることから、誕生日やクリスマスに贈り物をするという関係が途絶えることを示しているものと思われる。

世帯形態では夫婦のみの世帯と既婚子との同居世帯の高齢者が、単身世帯や核家族世帯の高齢者よりもそうしたことをよくしている傾向がみられる(表20)。

(10) 「常用剤服用」

この行動類型に関しては性、年齢、世帯形態による差はいずれも有意ではない(表21)。健康度や健康観、所得などによる違いが考えられるが、その点に関しては別の機会に報告したい。

(11) 「観劇」

性と年齢の交互作用だけが有意である(表22)。男性であれば70代後半以降の高齢者が、女性であれば逆に70代前半以前の高齢者に顕著な行動となっている(表23)。

(12) 「簡便的食行動」

年齢と世帯形態が有意である(表24)。年齢では70代までが、世帯形態では単身世帯や核家族世帯の高齢者がそうした行動をよくしている(表25)。とくに単身世帯に顕著な行動類型であることが明瞭であるが、変動係数(C.V.)の数値から、夫婦のみの世帯の高齢者には、そうしたことをよくする高齢者も少なくなければ全くしない高齢者も少なくなることがわかる。

(13) 「学習」

年齢と世帯形態が有意である(表26)。年齢では70代前半以前が、世帯形態では夫婦のみの世帯や核家族世帯の高齢者が単身世帯の高齢者よりも学習行動をよくしていることがわかる(表27)。ただし、変動係数の大きさから、単身世帯の高齢者には、そうしたことをよくする高齢者も少なくない一方で、他方では全くしない高齢者も少なくないことがわかる。

(14) 「旅行」

年齢と世帯形態が有意である(表28)。年齢が上がるにつれて旅行をする高齢者が徐々に増加することと、80歳以上で旅行をする高齢者は少ないことが示されている。世帯形態では夫婦のみの世帯や親と同居の世帯の高齢者が旅行をする傾向が高く、単身世帯や核家族世帯の高齢者で旅行をする人は少ないことがわかる。

(15) 「社会活動」

年齢と、性と年齢の交互作用が有意である(表30)。年齢では70代前半の高齢者に地域活動をしている高齢者が多いことと、60代後半の高齢者には、社会活動を熱心に行っている人も多ければ全くしていない人も多いことがわかる。そして、高齢者で社会活動をしている人の多くは、主に70代前半までの女性であることがわかる。

(16) 「軽い運動」

性と、性と年齢の交互作用が有意である(表32)。軽い運動をしているのは男性に多く、しかも70代以降の高齢者の方が60代の高齢者よりそうした運動をしている。女性では逆に60代をすぎると軽い運動をしなくなる傾向がある(表33)。

(17) 「IT行動」

性と年齢が有意である(表34)。ワープロやパソコン、電子メールやインターネットを利用している高齢者は少ないが、利用している高齢者の多くは、性別でいえば男性、年齢では60代であり、女性や70歳以降の人には少ない(表35)。

(18) 「親族交際」

性と世帯形態、性と年齢の交互作用が有意である(表36)。親族交際をよくしているのは性別では女性、中でも60代と70代後半以降の女性に多く、世帯形態では夫婦のみの世帯と核家族世帯、親と同居の世帯の高齢者であり、それらに比べて単身世帯の高齢者にはそうした行動をする人が少ない。

(19) 「邦楽喜楽」

年齢、世帯形態、性と年齢の交互作用が有意である(表38)。年齢では若いほどカラオケで歌ったり歌謡曲や演歌をきき、また、合唱や民謡、謡などをし、浪曲をきいているが、中でも男性の60代にそうした人が多い。世帯形態では単身世帯や既婚子との同居世帯、親との同居世帯、その他の世帯にそうした高齢者が多く、夫婦のみの世帯と核家族世帯の高齢者には少ないことがわかる(表39)。

(20) 「舞踏」

年齢と世帯形態が有意である(表40)。社交ダンスや踊り、フォークダンスをしている高齢者は、年齢では60代に、世帯形態では夫婦のみや親と同居している世帯に多い(表41)。

(21) 「雑誌購読」

性と年齢の交互作用だけが有意である(表42)。週刊誌や月刊誌を読んでいる高齢者は、男性の60代と80歳以上、女性の70代前半に多い(表43)。

(22) 「親への贈与」

年齢と世帯形態が有意である(表44)。この行動は、基本的には親が存命か否かに左右されるから、年齢では60代に、世帯形態では親と同居している高齢者に顕著な行動であることは当然の結果である(表45)。

(23) 「政治・宗教活動」

年齢と世帯形態が有意である(表46)。年齢では70代後半以降、世帯形態では、単身世帯

や夫婦のみの世帯で少なく、核家族世帯や同居世帯、その他の世帯で多い(表47)。

(24)「生活記録」

年齢と世帯形態、性と年齢の交互作用が有意である(表48)。年齢だけでみれば70代後半の高齢者に日記を書いたり家計簿をつけるといった記録行動をする高齢者が多いが、性との関連では、男性では70代以降、女性では70代以前にそうしたことをする高齢者が多い(表49)。世帯形態では単身世帯や核家族世帯に多い。

(25)「中程度の運動」

性と年齢が有意である(表50)。ヨガや太極拳、気功、エアロビクス、水泳、マラソンやジョギングなど中程度の運動をしている高齢者は女性に多く、年齢では60代と70代後半に多い(表51)。

(26)「外食」

年齢と、性と年齢の交互作用が有意であるが、世帯形態は有意ではない(表52)。外食をする高齢者は年齢では60代に多いが、性との関連では、男性の60代、女性の70代前半に多い(表53)。

(27)「ビデオ鑑賞」

性と年齢が有意である(表54)。性別では男性、年齢では70代前半の高齢者にビデオ鑑賞をしている高齢者が多い。

以上、27の生活行動類型ごとに要因を見てきたが、それらの結果のうち、性と年齢の観点から生活行動の類型を一覧にしたのが図6である。図の最上欄と最下欄は、それぞれ男性と女性に特徴的な行動である。帯状に描かれているのは、性・年齢の交互作用が認められた行動で、その性別のその年齢層は高齢者全体の平均よりもそうした行動をしている(その年齢層に属している人は、そうした行動をしている人が相対的に多い)ことを示している。ただし、この図には年齢だけに限ってみた場合の違いは表示していない(その詳細は本文および平均値の各表を参照)。

4. 要約と結論

本稿では、大規模なサンプル調査から得られた113の生活行動項目に関するデータを分析し、今日の高齢者の実像の一端を明らかにした。

頻繁にしろ時々にしる、高齢者の50%以上が行っていることは、テレビをみたり新聞を読むこと、寝るときには和装の寝衣ではなくパジャマを着ること、電話で子どもや親族、友人とコミュニケーションを交わすこと、散歩や庭いじり、植木や花の世話をすること、レストランや喫茶店で飲食すること、友人・知人と会っておしゃべりすること、子どもや親戚を訪問すること、旅行すること、新製品の広告やカタログを見たりデパート歩きやウィンドウショッピングをすること、歌謡曲や演歌を楽しむこと、孫に誕生日やクリスマスのプレゼントをすることである。

この結果から想像されるのは、子どもや親族、友人との関係を保ちながら、活発とはいえないまでも無理のない活動を続けながら健康的で穏やかな高齢期を過ごしている高齢者の姿である。そして、それが、一般的、平均的な高齢者の実像といえるであろう。

今日では、ふだん和服を着ている高齢者は例外的であり、浪曲を楽しむ高齢者も少数派であることが確認された。また、外国旅行をしている割合が図書館を利用している割合と同程度の2割近いというのも、かつての高齢者に比べれば遙かに高い割合であろう。こうしたことからすれば、かつての高齢者の生活行動と今日の高齢者のそれとは明らかに異なっているといえる。

しかし、それも漠然とした印象にすぎない。かつての高齢者と比較しうる適切なデータがないからである。

同様のことは他の生活行動にも当てはまる。ましてや、バレンタインデー/ホワイトデーのプレゼントやハンバーガーショップに入ること、コンビニの利用や公開講座の受講、ワープロやパソコン、インターネットの利用など、今日的な社会的動向を反映した行動に関しては当然のことながらかつての高齢者と比較するすべもない。

また、それらが青壮年層と比較してどうかといった議論も、ここではできない。本稿で明らかにしえたことは、取り上げた113の生活活動項目に関して、それらが高齢者のどれくらいの割合が行っているかという事実だけである。しかし、そのことによって、今日の高齢者の実像に関して議論する際に必要とされている適切な情報の一端を提供しえたのではないかと考える。

113の生活活動項目は、因子分析によって相互に関連がない27の行動類型に類別され、現実の生活行動が実に多様で、多くの異質な行動から成り立っていることが明らかにされた。また、その逆に、それぞれは一見関連がないようにみえる行動でも、その人、その家族の固有の日常生活を成り立たせている行動として相互に密接な関連をもっていることが明らかにされた。

それぞれの生活行動を規定している要因は様々であろうが、本稿では、因子得点を用いて各類型の要因を性、年齢、世帯形態に関して探った。

その結果、器用行動、ゲーム/勝負事、読書、軽い運動、IT行動、ビデオ鑑賞は女性よりも男性に多くみられる生活行動であり、近親者への贈与、手芸・手技、交友、親族交際、中程度の運動はその逆に、男性よりも女性に多くみられる生活行動であることが明らかになった。

また、たとえば、創作活動をしている高齢者は男性で70代後半以降に多く、社会活動をしている高齢者は、男性の場合は70代以降に多いが女性の場合は70代前半以前に多いことなど、性と年齢の交互作用が見出された生活行動も少なくない。

世帯形態が規定している生活行動も多い。たとえば、単身世帯の高齢者には、他の世帯形態の高齢者に比べて交友や簡便的食行動、邦楽喜楽、生活記録といった行動がより多くみられ、創作や学習、旅行、舞踊、政治・宗教活動に関しては、その逆であることが明らかになった。

現実に展開されている高齢者の生活行動は、個人の、そして家族や所属集団の欲求や必要を、そして、その時代、その社会の高齢者に対する期待や要請を反映している。本稿では113項目の生活行動を取り上げたが、現実の複雑多様な生活行動を的確に把握するには、更に検討して必要にして十分な生活活動項目を用意しなければならない。これが、残された課題の第一にあげなければならないことである。第二には、生活行動の要因分析に関して、経済的、身体的、精神的な諸要因を導入することである。第三には、生活時間を考慮

することである。第二、第三に関わるデータは、本稿が依拠した調査において得られているので、別の機会に報告する予定である。

文 献

- Baltes, Margaret M., Hans-Werner Wahland Ulrich Schmid-Furstoss (1990). The Daily Life of Elderly Germans: Activity Patterns, Personal Control, and Functional Health, *Journal of Gerontology: Psychological Sciences*, Vol. 45, No. 4, 173-179.
- Baltes, Margaret, Ulrich Mayr, Markus Borchelt, Ineke Maas and Hans-Ulrich Wilms (1993). Everyday Competence in Old and Very Old Age: An Inter-disciplinary Perspective, *Ageing and Society*, No. 13, 657-680, Cambridge University Press, UK.
- 小田利勝 (1999). 「高齢期における自立生活と日常生活活動能力をめぐって」『神戸大学発達科学部研究紀要』7-2。
- 小田利勝 (2000). 「高齢者の老年規範意識の構造」『神戸大学発達科学部研究紀要』8-1。

表 2 . 因子 1 の分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	確率
修正モデル	621326	12	51777	6.773	0.000
切片 (平均)	42436	1	42436	5.551	0.019
性	38897	1	38897	5.088	0.024
年齢	89115	3	29705	3.886	0.009
世帯形態	388243	5	77648	10.158	0.000
性 × 年齢	57239	3	19079	2.496	0.058
誤差	8202489	1073	7644		
総和	8824032	1086			
修正総和	8823816	1085			

$R^2 = .070$ (調整済 $R^2 = .060$)

表3-1. 因子1のカテゴリ別平均値(性・年齢・世帯)

性別	年齢	世帯形態	Mean	C.V.	N	性別	年齢	世帯形態	Mean	C.V.	N
男	65-69	单身	-52.1	-0.6	15	女	65-69	单身	-27.9	-2.7	35
		夫婦のみ	7.4	14.2	106			夫婦のみ	37.1	2.9	96
		核家族	-0.2	-530.7	45			核家族	54.8	1.7	28
		既婚子と同居	-15.4	-5.5	24			既婚子と同居	8.0	11.9	22
		親と同居	-18.7	-3.5	17			親と同居	74.6	0.8	4
		その他世帯	-87.1	-0.2	5			その他世帯	48.9	2.3	5
		総和	-5.3	-17.6	212			総和	25.5	4.0	190
	70-74	单身	-41.1	-1.8	14		70-74	单身	-57.5	-0.9	24
		夫婦のみ	-3.1	-28.7	113			夫婦のみ	45.6	2.2	46
		核家族	6.4	13.2	34			核家族	19.4	5.2	23
		既婚子と同居	28.1	4.2	24			既婚子と同居	-21.4	-4.1	28
		親と同居	-101.3		1			親と同居			
		その他世帯	9.8	11.0	4			その他世帯	-7.7	-10.0	5
	総和	-0.5	-182.2	190	総和		4.2	23.3	126		
	75-79	单身	-66.8	-0.6	4		75-79	单身	-47.2	-0.9	26
		夫婦のみ	11.9	7.8	66			夫婦のみ	7.5	11.8	30
		核家族	-10.7	-5.2	12			核家族	-21.2	-3.3	5
		既婚子と同居	-6.2	-14.5	24			既婚子と同居	14.3	6.8	28
		親と同居	-19.6	-3.8	2			親と同居			
		その他世帯	46.6		1			その他世帯	-45.2	-0.5	11
		総和	2.3	38.7	109			総和	-12.1	-6.6	100
80-	单身	-10.2	-4.9	5	80-	单身	-58.4	-0.6	14		
	夫婦のみ	-9.1	-7.4	32		夫婦のみ	6.5	12.7	9		
	核家族	-42.6	-0.7	8		核家族	-35.4	-1.3	16		
	既婚子と同居	-33.4	-1.5	16		既婚子と同居	-27.6	-1.7	43		
	親と同居	-16.9		1		親と同居					
	その他世帯	12.6	5.7	3		その他世帯	3.9	25.2	12		
	総和	-18.4	-3.2	65		総和	-26.2	-2.3	94		
総和	单身	-44.1	-1.2	38	総和	单身	-44.5	-1.3	99		
	夫婦のみ	2.9	32.1	317		夫婦のみ	32.8	3.1	181		
	核家族	-2.6	-31.3	99		核家族	18.2	5.1	72		
	既婚子と同居	-4.3	-21.7	88		既婚子と同居	-10.0	-8.1	121		
	親と同居	-22.7	-2.8	21		親と同居	74.6	0.8	4		
	その他世帯	-24.0	-3.4	13		その他世帯	-7.4	-11.3	33		
	総和	-3.8	-23.5	576		総和	3.3	27.6	510		

C.V.は変動係数(標準偏差/平均)、Nは標本数(人)

表 3 - 2 . 因子 1 のカテゴリ別平均値
(総和・年齢・世帯)

性別	年齢	世帯形態	Mean	C.V.	N
総和	65-69	单身	-35.2	-1.9	50
		夫婦のみ	21.5	5.0	202
		核家族	20.9	4.6	73
		既婚子と同居	-4.2	-21.3	46
		親と同居	-1.0	-76.0	21
		その他世帯	-19.1	-5.5	10
		総和	9.2	10.7	402
70-74	70-74	单身	-51.4	-1.2	38
		夫婦のみ	11.0	8.6	159
		核家族	11.6	7.8	57
		既婚子と同居	1.5	72.0	52
		親と同居	-101.3		1
		その他世帯	0.1	1001.6	9
		総和	1.4	69.3	316
75-79	75-79	单身	-49.8	-0.9	30
		夫婦のみ	10.5	8.7	96
		核家族	-13.7	-4.2	17
		既婚子と同居	4.8	19.6	52
		親と同居	-19.6	-3.8	2
		その他世帯	-37.5	-0.9	12
		総和	-4.6	-18.3	209
80-	80-	单身	-45.7	-0.9	19
		夫婦のみ	-5.7	-12.3	41
		核家族	-37.8	-1.1	24
		既婚子と同居	-29.1	-1.6	59
		親と同居	-16.9		1
		その他世帯	5.7	16.3	15
		総和	-23.0	-2.6	159
総和	総和	单身	-44.4	-1.3	137
		夫婦のみ	13.8	7.1	498
		核家族	6.1	14.2	171
		既婚子と同居	-7.6	-11.3	209
		親と同居	-7.1	-10.0	25
		その他世帯	-12.1	-6.8	46
		総和	-0.4	-202.5	1086

表 4 . 因子 2 (手芸・手技) の分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	確率
修正モデル	3206279	12	267190	52.368	0.000
切片	1218	1	1218	0.239	0.625
性	2201067	1	2201067	431.401	0.000
年齢	111724	3	37241	7.299	0.000
世帯形態	49845	5	9969	1.954	0.083
性 × 年齢	94813	3	31604	6.194	0.000
誤差	5474596	1073	5102		
総和	8680975	1086			
修正総和	8680875	1085			

$R^2 = .369$ (調整済 $R^2 = .362$)

表 5 . 因子 2 のカテゴリ別平均値

性別	年齢	Mean	C.V.	N
男	65-69	-47	-1	212
	70-74	-51	-1	190
	75-79	-49	-1	109
	80-	-52	-1	65
	総和	-49	-1	576
女	65-69	71	1	190
	70-74	70	2	126
	75-79	36	3	100
	80-	22	4	94
	総和	55	2	510
総和	65-69	9	10	402
	70-74	-3	-33	316
	75-79	-8	-10	209
	80-	-8	-9	159
	総和	-0	-295	1086

表 6 . 因子 3 (洋楽鑑賞) の分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	確率
修正モデル	585157	12	48763	6.778	0.000
切片	283	1	283	0.039	0.843
性	21715	1	21715	3.018	0.083
年齢	231533	3	77177	10.727	0.000
世帯形態	145416	5	29083	4.042	0.001
性 × 年齢	36867	3	12289	1.708	0.164
誤差	7719976	1073	7194		
総和	8305134	1086			
修正総和	8305133	1085			

R2乗 = .070 (調整済R2乗 = .060)

表 7 . 因子 3 のカテゴリ別平均値

		Mean	C.V.	N
年齢	65-69	22	91	402
	70-74	-4	86	316
	75-79	-18	86	209
	80-	-25	69	159
世帯形態	単身	2	43	137
	夫婦のみ	6	89	498
	核家族	11	91	171
	既婚子と同居	-29	72	209
	親と同居	54	90	25
	その他世帯	-12	92	46

表 8 . 因子 4 (器用行動) の分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	確率
修正モデル	2320293	12	193358	41.003	0.000
切片	44315	1	44315	9.397	0.002
性	1204123	1	1204123	255.343	0.000
年齢	253987	3	84662	17.953	0.000
世帯形態	49407	5	9881	2.095	0.064
性 × 年齢	45437	3	15146	3.212	0.022
誤差	5059946	1073	4716		
総和	7381304	1086			
修正総和	7380239	1085			

R2乗 = .314 (調整済R2乗 = .307)

表 9 . 因子 4 のカテゴリ別平均値

性	年齢	Mean	C.V.	N
男	65-69	62	1	212
	70-74	35	2	190
	75-79	24	4	109
	80-	-4	-21	65
	総和	39	2	576
女	65-69	-31	-2	190
	70-74	-51	-1	126
	75-79	-55	-1	100
	80-	-59	-1	94
	総和	-46	-1	510
総和	65-69	18	5	402
	70-74	1	103	316
	75-79	-13	-6	209
	80-	-36	-2	159
	総和	-1	-83	1086

表10. 因子5 (ゲーム/勝負事) の分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	確率
修正モデル	1255512	12	104626	17.53	0.000
切片	33164	1	33164	5.557	0.019
性	775611	1	775611	129.956	0.000
年齢	72036	3	24012	4.023	0.007
世帯形態	31578	5	6316	1.058	0.382
性 × 年齢	52463	3	17488	2.93	0.033
誤差	6403964	1073	5968		
総和	7659729	1086			
修正総和	7659476	1085			

R² 乗 = .164 (調整済R² 乗 = .155)

表11. 因子5のカテゴリ別平均値

性	年齢	Mean	C.V.	N
男	65-69	43	2	212
	70-74	25	3	190
	75-79	29	3	109
	80-	-1	-103	65
	総和	30	3	576
女	65-69	-34	-2	190
	70-74	-33	-1	126
	75-79	-38	-1	100
	80-	-34	-1	94
	総和	-35	-1	510
総和	65-69	7	14	402
	70-74	2	41	316
	75-79	-3	-29	209
	80-	-21	-3	159

表12. 因子6 (読書) の分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	確率
修正モデル	235489	12	19624	2.464	0.004
切片	2027	1	2027	0.255	0.614
性	47659	1	47659	5.983	0.015
年齢	61786	3	20595	2.586	0.052
世帯形態	40904	5	8181	1.027	0.400
性 × 年齢	18821	3	6274	0.788	0.501
誤差	8546974	1073	7965		
総和	8782502	1086			
修正総和	8782463	1085			

R² = .027 (調整済R² = .016)

表13. 因子6の性別平均値

	Mean	C.V.	N
男	9	10	576
女	-10	-9	510

表14. 因子7 (創作行動) の分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	確率
修正モデル	281370	12	23448	3.523	0.000
切片	9106	1	9106	1.368	0.242
性	5059	1	5059	0.760	0.383
年齢	108564	3	36188	5.438	0.001
世帯形態	117105	5	23421	3.519	0.004
性 × 年齢	75883	3	25294	3.801	0.010
誤差	7141006	1073	6655		
総和	7422454	1086			
修正総和	7422376	1085			

R² 乗 = .038 (調整済R² 乗 = .027)

表15. 因子7の性・年齢別平均値

性	年齢	Mean	C.V.	N
男	65-69	-13	-6	212
	70-74	-4	-20	190
	75-79	29	3	109
	80-	22	4	65
	総和	2	45	576
女	65-69	-2	-54	190
	70-74	2	48	126
	75-79	-7	-9	100
	80-	1	103	94
	総和	-2	-51	510
総和	65-69	-8	-12	402
	70-74	-2	-46	316
	75-79	12	7	209
	80-	9	8	159

表16. 因子7の世帯形態別平均値

	Mean	C.V.	N
世帯形態			
単身	-5	-14	137
夫婦のみ	4	22	498
核家族	9	10	171
既婚子と同居	-9	-7	209
親と同居	23	4	25
その他世帯	-26	-2	46

表17．因子8（交友行動）の分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	確率
修正モデル	374398	12	31200	3.997	0.000
切片	2980	1	2980	0.382	0.537
性	131279	1	131279	16.818	0.000
年齢	24104	3	8035	1.029	0.379
世帯形態	148739	5	29748	3.811	0.002
性×年齢	20494	3	6831	0.875	0.453
誤差	8375463	1073	7806		
総和	8750048	1086			
修正総和	8749861	1085			

$$R^2 = .043 (\text{調整済}R^2 = .032)$$

表18．因子8カテゴリ別平均値

	Mean	C.V.	N
性 男	-12	-7	576
性 女	12	8	510
世帯形態 単身	27	4	137
世帯形態 夫婦のみ	-1	-161	498
世帯形態 核家族	-5	-17	171
世帯形態 既婚子と同居	-14	-7	209
世帯形態 親と同居	27	3	25
世帯形態 その他世帯	-18	-5	46

表19．因子9（祖親性行動）の分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	確率
修正モデル	624424	12	52035	6.213	0.000
切片	35364	1	35364	4.222	0.040
性	1320	1	1320	0.158	0.691
年齢	116941	3	38980	4.654	0.003
世帯形態	472284	5	94457	11.278	0.000
性×年齢	49680	3	16560	1.977	0.116
誤差	8986632	1073	8375		
総和	9611200	1086			
修正総和	9611056	1085			

$$R^2 = .065 (\text{調整済}R^2 = .055)$$

表20．因子9カテゴリ別平均値

	Mean	C.V.	N
年齢	65-69	4	27 402
	70-74	3	28 316
	75-79	2	36 209
	80-	-22	-4 159
世帯形態	単身	-33	-3 137
	夫婦のみ	11	8 498
	核家族	-30	-3 171
	既婚子と同居	20	5 209
	親と同居	-16	-7 25
その他世帯	3	35 46	

表21．因子10（常用剤服用）の分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	確率
修正モデル	140626	12	11719	1.578	0.092
切片	4	1	4	0.001	0.982
性	25976	1	25976	3.497	0.062
年齢	14825	3	4942	0.665	0.573
世帯形態	35586	5	7117	0.958	0.442
性×年齢	28488	3	9496	1.278	0.280
誤差	7970136	1073	7428		
総和	8110892	1086			
修正総和	8110762	1085			

$$R^2 = .017 (\text{調整済}R^2 = .006)$$

表22．因子11（観劇）の分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	確率
修正モデル	152464	12	12705	1.603	0.085
切片	7	1	7	0.001	0.976
性	3652	1	3652	0.461	0.497
年齢	10838	3	3613	0.456	0.713
世帯形態	33602	5	6720	0.848	0.516
性×年齢	111544	3	37181	4.692	0.003
誤差	8503310	1073	7925		
総和	8655804	1086			
修正総和	8655774	1085			

$R^2 = .018$ (調整済 $R^2 = .007$)

表23．因子11の分散分析

性	年齢	Mean	C.V.	N
男	65-69	-8	-10	212
	70-74	-6	-14	190
	75-79	10	9	109
	80-	5	17	65
女	65-69	13	7	190
	70-74	11	9	126
	75-79	-15	-6	100
	80-	-12	-6	94

表24．因子12（簡便的食行動）の分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	確率
修正モデル	380533	12	31711	4.660	0.000
切片	6932	1	6932	1.019	0.313
性	4682	1	4682	0.688	0.407
年齢	120959	3	40320	5.925	0.001
世帯形態	189890	5	37978	5.581	0.000
性×年齢	3367	3	1122	0.165	0.920
誤差	7301485	1073	6805		
総和	7682081	1086			
修正総和	7682018	1085			

$R^2 = .050$ (調整済 $R^2 = .039$)

表25．因子12のカテゴリ別平均値

	Mean	C.V.	N	
年齢	65-69	5	17	402
	70-74	6	14	316
	75-79	2	43	209
	80-	-29	-3	159
世帯形態	単身	33	3	137
	夫婦のみ	0	-266	498
	核家族	2	39	171
	既婚子と同居	-19	-5	209
	親と同居	-10	-9	25
その他世帯	-17	-5	46	

表26．因子13（学習行動）の分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	確率
修正モデル	256746	12	21396	2.950	0.000
切片	65040	1	65040	8.967	0.003
性	4	1	4	0.001	0.981
年齢	72285	3	24095	3.322	0.019
世帯形態	94295	5	18859	2.600	0.024
性×年齢	42092	3	14031	1.934	0.122
誤差	7783087	1073	7254		
総和	8039861	1086			
修正総和	8039834	1085			

R^2 乗 = .032 (調整済 R^2 乗 = .021)

表27．因子13のカテゴリ別平均値

	Mean	C.V.	N	
年齢	65-69	5	17	402
	70-74	9	11	316
	75-79	-9	-10	209
	80-	-18	-3	159
世帯形態	単身	-1	-66	137
	夫婦のみ	7	12	498
	核家族	8	11	171
	既婚子と同居	-11	-7	209
	親と同居	-42	-2	25
その他世帯	-27	-2	46	

表28．因子14（旅行）の分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	確率
修正モデル	262245	12	21854	3.041	0.000
切片	12278	1	12278	1.709	0.191
性	1217	1	1217	0.169	0.681
年齢	103254	3	34418	4.790	0.003
世帯形態	119001	5	23800	3.312	0.006
性×年齢	1985	3	662	0.092	0.964
誤差	7710197	1073	7186		
総和	7973047	1086			
修正総和	7972442	1085			

R^2 乗 = .033 (調整済 R^2 乗 = .022)

表29．因子14のカテゴリ別平均値

	Mean	C.V.	N	
年齢	65-69	3	34	402
	70-74	7	13	316
	75-79	8	11	209
	80-	-25	-3	159
世帯形態	単身	-13	-7	137
	夫婦のみ	13	7	498
	核家族	-16	-5	171
	既婚子と同居	-4	-21	209
	親と同居	5	13	25
その他世帯	-5	-16	46	

表30. 因子15 (社会活動) の分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	確率
修正モデル	180828	12	15069	2.055	0.017
切片	106	1	106	0.014	0.904
性	609	1	609	0.083	0.773
年齢	69151	3	23050	3.144	0.024
世帯形態	39321	5	7864	1.073	0.374
性 × 年齢	80755	3	26918	3.672	0.012
誤差	7866848	1073	7332		
総和	8047693	1086			
修正総和	8047676	1085			

R2乗 = .022 (調整済R2乗 = .012)

表32. 因子16 (軽い運動) の分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	確率
修正モデル	187244	12	15604	2.285	0.007
切片	1975	1	1975	0.289	0.591
性	87795	1	87795	12.855	0.000
年齢	11454	3	3818	0.559	0.642
世帯形態	20409	5	4082	0.598	0.702
性 × 年齢	75058	3	25019	3.663	0.012
誤差	7328084	1073	6830		
総和	7515460	1086			
修正総和	7515328	1085			

R2乗 = .025 (調整済みR2乗 = .014)

表34. 因子17 (IT行動) の分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	確率
修正モデル	227900	12	18992	2.895	0.001
切片	82	1	82	0.012	0.911
性	31466	1	31466	4.796	0.029
年齢	89575	3	29858	4.551	0.004
世帯形態	27888	5	5578	0.850	0.514
性 × 年齢	11065	3	3688	0.562	0.640
誤差	7039591	1073	6561		
総和	7267813	1086			
修正総和	7267491	1085			

R2乗 = .031 (調整済R2乗 = .021)

表36. 因子18 (親族交際) の分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	確率
修正モデル	294375	12	24531	3.481	0.000
切片	8892	1	8892	1.262	0.262
性	138021	1	138021	19.583	0.000
年齢	52511	3	17504	2.483	0.059
世帯形態	109461	5	21892	3.106	0.009
性 × 年齢	64650	3	21550	3.058	0.028
誤差	7562658	1073	7048		
総和	7857320	1086			
修正総和	7857033	1085			

R2乗 = .037 (調整済みR2乗 = .027)

表31. 因子15のカテゴリ別平均値

性	年齢	Mean	C.V.	N
総和	65-69	0	-302	402
	70-74	9	10	316
	75-79	-13	-6	209
	80-	-2	-27	159
男	65-69	-13	-6	212
	70-74	12	8	190
	75-79	-8	-10	109
	80-	2	45	65
女	65-69	14	8	190
	70-74	6	16	126
	75-79	-18	-4	100
	80-	-5	-12	94

表33. 因子16のカテゴリ別平均値

性	年齢	Mean	C.V.	N
男	65-69	-5	-18	212
	70-74	14	5	190
	75-79	15	5	109
	80-	17	5	65
	総和	8	11	576
女	65-69	1	98	190
	70-74	-3	-24	126
	75-79	-15	-5	100
	80-	-24	-4	94
	総和	-8	-11	510

表35. 因子17のカテゴリ別平均値

		Mean	C.V.	N
性	男	8	11	576
	女	-8	-8	510
年齢	65-69	13	7	402
	70-74	-2	-39	316
	75-79	-7	-10	209
	80-	-17	-3	159

表37. 因子18のカテゴリ別平均値

		Mean	C.V.	N
男	65-69	-1	-163	212
	70-74	-4	-21	190
	75-79	-23	-3	109
	80-	-13	-6	65
	総和	-7	-11	576
女	65-69	17	5	190
	70-74	-9	-11	126
	75-79	5	18	100
	80-	22	4	94
	総和	9	10	510
世帯形態	単身	-14	-7	137
	夫婦のみ	7	12	498
	核家族	1	128	171
	既婚子と同居	-4	-20	209
	親と同居	1	73	25
	その他世帯	-5	-18	46

表38. 因子19 (邦楽喜楽) の分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	確率
修正モデル	318929	12	26577	4.234	0.000
切片	188	1	188	0.030	0.863
性	1015	1	1015	0.162	0.688
年齢	164899	3	54966	8.756	0.000
世帯形態	119349	5	23870	3.802	0.002
性 × 年齢	62547	3	20849	3.321	0.019
誤差	6735936	1073	6278		
総和	7055015	1086			
修正総和	7054865	1085			

R2乗 = .045 (調整済R2乗 = .035)

表39. 因子19のカテゴリ別平均値

		Mean	C.V.	N
男	65-69	22	3	212
	70-74	-7	-12	190
	75-79	-20	-4	109
	80-	-20	-4	65
	総和	0	-240	576
女	65-69	3	34	190
	70-74	8	10	126
	75-79	1	90	100
	80-	-11	-6	94
	総和	1	72	510
世帯形態	単身	3	28	137
	夫婦のみ	-3	-32	498
	核家族	-13	-5	171
	既婚子と同居	11	7	209
	親と同居	12	9	25
その他世帯	21	4	46	

表40. 因子20 (舞踊) の分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	確率
修正モデル	247997	12	20666	3.172	
切片	603	1	603	0.092	
性	5764	1	5764	0.885	
年齢	89405	3	29802	4.574	
世帯形態	101921	5	20384	3.129	
性 × 年齢	10982	3	3661	0.562	
誤差	6990482	1073	6515		
総和	7238869	1086			
修正総和	7238478	1085			

R2乗 = .034 (調整済R2乗 = .023)

表41. 因子20のカテゴリ別平均値

		Mean	C.V.	N
年齢	65-69	13	7	402
	70-74	-3	-25	316
	75-79	-14	-5	209
	80-	-12	-4	159
世帯形態	単身	-2	-45	137
	夫婦のみ	4	25	498
	核家族	-3	-26	171
	既婚子と同居	-11	-6	209
	親と同居	59	2	25
その他世帯	-22	-2	46	

表42. 因子21 (雑誌購読) の分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	確率
修正モデル	162579	12	13548	1.952	0.025
切片	1415	1	1415	0.204	0.652
性	16602	1	16602	2.392	0.122
年齢	12489	3	4163	0.600	0.615
世帯形態	50750	5	10150	1.462	0.199
性 × 年齢	87721	3	29240	4.213	0.006
誤差	7447139	1073	6940		
総和	7609769	1086			
修正総和	7609717	1085			

R2乗 = .021 (調整済R2乗 = .010)

表43. 因子21のカテゴリ別平均値

性	年齢	Mean	C.V.	N
男	65-69	8	10	212
	70-74	-2	-54	190
	75-79	-7	-12	109
	80-	16	5	65
女	65-69	-4	-21	190
	70-74	10	8	126
	75-79	-1	-88	100
	80-	-25	-3	94

表44. 因子22 (親への贈与) の分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	確率
修正モデル	354086	12	29507	4.201	0.000
切片	9942	1	9942	1.415	0.234
性	70	1	70	0.010	0.921
年齢	182287	3	60762	8.651	0.000
世帯形態	92928	5	18586	2.646	0.022
性 × 年齢	43628	3	14543	2.070	0.102
誤差	7536817	1073	7024		
総和	7890916	1086			
修正総和	7890903	1085			

R2乗 = .045 (調整済R2乗 = .034)

表45. 因子22のカテゴリ別平均値

		Mean	C.V.	N
年齢	65-69	18	6	402
	70-74	-6	-12	316
	75-79	-19	-3	209
	80-	-8	-8	159
世帯形態	単身	-10	-6	137
	夫婦のみ	1	77	498
	核家族	1	57	171
	既婚子と同居	-5	-16	209
	親と同居	65	2	25
	その他世帯	-4	-18	46

表46. 因子23 (政治・宗教活動) の分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	確率
修正モデル	163859	12	13655	2.336	0.006
切片	29688	1	29688	5.079	0.024
性	16994	1	16994	2.907	0.088
年齢	48565	3	16188	2.770	0.041
世帯形態	76283	5	15257	2.610	0.023
性 × 年齢	11199	3	3733	0.639	0.590
誤差	6271501	1073	5845		
総和	6435367	1086			
修正総和	6435360	1085			

R2乗 = .025 (調整済R2乗 = .015)

表47. 因子23のカテゴリ別平均値

		Mean	C.V.	N
年齢	65-69	-4	-19	402
	70-74	-7	-11	316
	75-79	8	10	209
	80-	13	5	159
世帯形態	単身	-11	-7	137
	夫婦のみ	-6	-13	498
	核家族	6	13	171
	既婚子と同居	9	8	209
	親と同居	14	8	25
	その他世帯	25	3	46

表48. 因子24 (生活記録) の分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	確率
修正モデル	326597	12	27216	4.887	0.000
切片	2592	1	2592	0.465	0.495
性	653	1	653	0.117	0.732
年齢	80498	3	26833	4.818	0.002
世帯形態	112702	5	22540	4.047	0.001
性 × 年齢	103007	3	34336	6.165	0.000
誤差	5975988	1073	5569		
総和	6302640	1086			
修正総和	6302585	1085			

R2乗 = .052 (調整済R2乗 = .041)

表49. 因子24のカテゴリ別平均値

		Mean	C.V.	N
男	年齢			
	65-69	-15	-5	212
	70-74	-10	-6	190
	75-79	13	5	109
	80-	20	4	65
	総和	-4	-17	576
女	65-69	5	17	190
	70-74	12	7	126
	75-79	20	4	100
	80-	-20	-3	94
		総和	5	16
世帯形態	単身	23	4	137
	夫婦のみ	-1	-103	498
	核家族	5	14	171
	既婚子と同居	-11	-6	209
	親と同居	-11	-7	25
	その他世帯	-17	-4	46

表50. 因子25 (中程度の運動) の分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	確率
修正モデル	164864	12	13739	2.535	0.003
切片	20351	1	20351	3.755	0.053
性	36556	1	36556	6.745	0.010
年齢	49982	3	16661	3.074	0.027
世帯形態	44846	5	8969	1.655	0.143
性 × 年齢	21212	3	7071	1.305	0.272
誤差	5815778	1073	5420		
総和	5981300	1086			
修正総和	5980641	1085			

R2乗 = .028 (調整済R2乗 = .017)

表51. 因子25のカテゴリ別平均値

		Mean	C.V.	N
性	男	-6	-12	576
	女	9	9	510
年齢	65-69	7	11	402
	70-74	-5	-14	316
	75-79	1	46	209
	80-	-5	-10	159

表52. 因子26 (外食) の分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	確率
修正モデル	244434	12	20370	3.565	0.000
切片	2434	1	2434	0.426	0.514
性	16696	1	16696	2.922	0.088
年齢	123057	3	41019	7.179	0.000
世帯形態	38556	5	7711	1.350	0.241
性 × 年齢	51823	3	17274	3.023	0.029
誤差	6130726	1073	5714		
総和	6375161	1086			
修正総和	6375160	1085			

R2乗 = .038 (調整済R2乗 = .028)

表53. 因子26のカテゴリ別平均値

性	年齢	Mean	C.V.	N
総和	65-69	12	6	402
	70-74	-2	-40	316
	75-79	-1	-66	209
	80-	-25	-3	159
男	65-69	9	8	212
	70-74	-6	-12	190
	75-79	3	27	109
	80-	-6	-15	65
女	65-69	15	5	190
	70-74	4	20	126
	75-79	-5	-15	100
	80-	-38	-2	94

表54. 因子29 (ビデオ鑑賞) の分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	確率
修正モデル	117048	12	9754	1.824	0.040
切片	7646	1	7646	1.430	0.232
性	21154	1	21154	3.956	0.047
年齢	60401	3	20134	3.765	0.010
世帯形態	2618	5	524	0.098	0.992
性 × 年齢	12454	3	4151	0.776	0.507
誤差	5737592	1073	5347		
総和	5854652	1086			
修正総和	5854640	1085			

R2乗 = .020 (調整済R2乗 = .009)

表55. 因子29のカテゴリ別平均値

		Mean	C.V.	N
性	男	6	13	576
	女	-7	-10	510
年齢	65-69	6	14	402
	70-74	4	17	316
	75-79	-6	-11	209
	80-	-16	-3	159

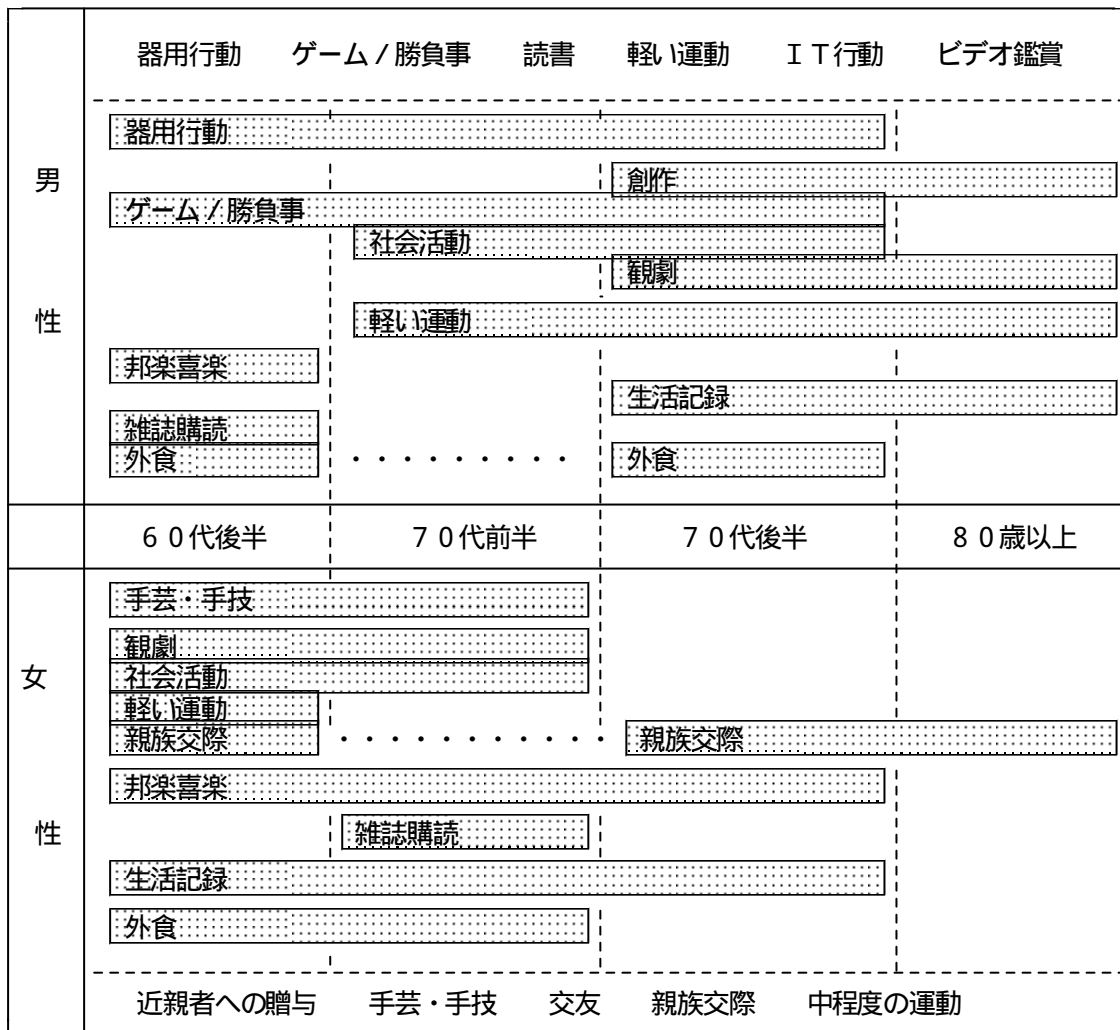


図6. 性・年齢に特徴的な生活行動

第8章 高齢者の老年規範意識

1. 問題の所在と研究の目的

高齢者や高齢期の生活を肯定的なイメージで描こうとする傾向が近年ますます強くなってきている。たとえば、総務庁は、高齢社会における新しい生き方を「エイジレス・ライフ」（年齢にとらわれず自らの責任と能力において自由で生き生きとした生活を送ること）と呼び、そうした生活事例の実践者に「エイジレス章」を授与するなど国民の意識啓発事業を行っている。エイジレス・ライフの具体的類型として例示されているのは、「過去に培った知識や経験を生かして、それを高齢期の生活に還元して活躍している」、「中高年から一念発起して、物事を成しとげた」、「壮年期において達成した地位や対面などにとらわれることなく、高齢期を新しい価値観でいきいきと生活している」、「自らの努力、修練等により、優れた体力・気力等を維持して活躍している」などである。

平成9年3月に公表された厚生省の「心豊かで活力ある長寿社会づくりに関する懇談会」の報告書『21世紀、高齢者が社会を変える』は、その副題を「新しい高齢者像の確立をめざして」としている。そこでは、1980年代半ば以降から高齢化施策に関する政府関係の各種文書に頻繁に登場するようになった「期待される高齢者像」に関する論議をさらに補強するかのように、「画一的な高齢者観や固定的なイメージを改め」、「高齢者のパワーを活かして」、「様々な形で社会的に活躍していくこと」が「特別なことではなく、高齢者のごく普通の姿であることが求められるようになる」と述べられている。こうした「新しい高齢者像」は、今日では高齢化問題に関する各種の官庁報告や都道府県、市町村の高齢化施策文書で繰り返し提唱されている。

「新しい高齢者像」の論議は、高齢者への役割期待が大きく変化してきていることを物語っている。かつての高齢者は、“役割なき役割(roleless-role)の中に閉じこめられて果たすべき重要な機能を持たない。役割なき役割は退職とともに高齢者に押しつけられ、多かれ少なかれ、彼らはそれを受け入れ、あるいはあきらめてそれに服従してきた” (Burgess, 1960)とみなされていた。しかし、「新しい高齢者像」に関する近年の論議から明らかのように、今日およびこれからの高齢者は「役割なき役割」に閉じこめられてもいないし、そのことを甘受しなければならない立場にも置かれていない。「役割なき役割」論に対応させれば、今日では、「人々は退職あるいは高齢期を迎えても果たすべき数々の重要な役割を与えられており、それを積極的に受け入れて、それを自らの努力と責任において遂行することが求められているのである”。もはや、「役割なき役割」に甘んずることは許されず、かつてないほどに多大な役割が高齢者に期待される（負わされる）ようになったということである。

「新しい高齢者像」に合致する高齢者は、経済的にも身体的にも精神的にも自立していて国家財政に負担をかけることなく、活動的で社会的な貢献を果たすことができる高齢者

である。高齢者に期待されるそうした役割は、成人一般に期待される役割とほとんど変わらない。「心豊かで活力ある長寿社会」における「期待される高齢者」は、高齢になっても成人一般に期待される役割を遂行できる人々である。その意味では、「活力ある長寿社会」は、高齢者に対して特定の役割を期待する社会ではなく、むしろ、高齢者の役割を希薄化あるいは曖昧にする社会であるともいえる。

これまでは、寿命の延長は高齢期の延長としてとらえられ、成人一般に期待される役割を果たし終えた後の高齢期の生活をいかに過ごすかが課題とされてきた。高齢期の社会的適応に関する代表的な理論(学説)とされる離脱理論や活動理論もそのことが前提になっており、高齢期の生きがいをめぐる論議もそうである。しかし、いまや、高齢期の始期を、あるいは成人期の終期を先延ばしして、高齢者の役割としてではなく、成人としての役割をいかに長期にわたって遂行するかが課題とされるようになったということである。俗な表現を使えば、老いることが許されなくなったということであり、老いが役割免除の理由にならなくなってきたともいえる。そのことを典型的に示しているのが、高齢期における職業役割への期待である。

人口高齢化が進む先進産業諸国は、共通して、高齢者の労働能力活用施策を高齢化政策の重要な柱としている。たとえば、アメリカでは、1995年の「高齢化に関するホワイト・ハウス会議」で採択された21世紀へ向けた高齢化政策の実行戦略の一つに、高齢者の労働能力の活用をあげている(White House, 1996)。日本においても、平成10年4月からの60歳定年制の義務化に対応して、労働省は「アクティブ・エイジングの観点に立った高齢者雇用対策の総合的な推進」施策をすすめており、「65歳現役社会」をスローガンに65歳までの継続雇用と65歳定年制の実現を唱っている。日本において高齢者に対する職業役割への期待が増大しているのは、膨大な赤字を抱える国家財政と低成長経済の下で高齢者福祉に関わる社会保障関係費を十分に確保できないという政策的な判断に加えて、高齢化の進展に伴う生産年齢人口の減少に伴う労働力人口の不足そのものが、移民労働を考慮しないことを前提にした場合、高齢者に職業役割の遂行を期待せざるをえない状況を生みだしているからでもある。

高齢者に対する役割期待の変化は、高齢期における年齢規範(age norm) - それをここでは老年規範と呼んでおく - を大きく揺るがしていることを意味する。年齢規範とは、「各年齢層の人々にとって当を得た行動や技能を構成するものは何かということ」(Chudacoff, 1989)に関する規準であり、「その年齢にふさわしい行動の指針」(Hendricks and Hendricks, 1986)である。「年相応」であるとか「その年になって」、「その年で」、「いい年をして」といった言葉が発せられるときの根拠になっているのが、この年齢規範である。年齢規範からはずれた態度や行動をとる者は、賛否いずれの評価を受けるにしても、「ふつうの者」とは違った特異な存在としてみなされる。

老年規範は、態度や行動に関して、高齢期/高齢者にふさわしいとか望ましい、そうあるべきであると一般に人々がみなす際の評価規準である。人々は、高齢者にその規準に沿った態度や行動を期待し、その規準で高齢者の態度や行動の是非を判断する。そして、高齢者は、高齢者に向けられるそうした役割期待を内面化し、期待された役割を遂行することになる。老年規範から逸脱した態度や行動をとる高齢者は「高齢者らしくない高齢者」ということになるが、上で述べたような「新しい高齢者像」の論議に象徴される高齢者へ

の役割期待の高まりは、高齢期になっても「高齢者らしくない高齢者」であることを人々に求めていることでもある。

こうした社会的要請は、高齢者あるいは向労期の人々にも歓迎すべきことでもあろう。できればいつまでも老いを感じることなく活動的であり、社会的に活躍したいと願わない者はいないと考えられるからである。実際、元気で活躍している高齢者は少なくないし、そうした高齢者は確実に増加している。そして、いまの高齢者は元気だという印象を多くの人々に与えていることも確かであろう。今日、老年規範は明らかに変わりつつあるといえるかもしれない。しかしながら、多大な役割を期待されるようになった高齢者自身の老年規範意識に関してはほとんど明らかにされていないといってよい。そこで、本稿では、神戸市の65歳以上の男女を対象とする郵送調査から得られた回答結果の分析を通じて、高齢期にある人々の老年規範意識の一端を明らかにしてみたい。

2. 分析の枠組みと方法

(1) 産業社会における世代間関係

「役割なき役割」論は、退職後の高齢期には社会の裏面に隠退して“余生を送る”ことが産業社会における高齢者の一般的な姿であることを象徴的に表現したものである。産業社会は、常に更新し続ける知識と技術が生み出す高度の生産力に支えられた社会である(小田, 1995)。その社会の担い手は、経験知や経験則が優先する伝統的社会とは異なり、新しい知識と技術を学校教育によって身につけた若い世代である。こうした社会では、Cowgil(1979)が近代化に伴う高齢者の地位の低下を定式化したように、高齢者はそれまで占めていた地位を若い世代に譲り渡して社会の裏面に隠退することになる。産業社会に固有の定年制度と年金制度は、そうした世代の交代をスムーズに進めるための社会的装置である。特定の年齢になると本人の意思とは関わりなく退職する制度である定年制度の社会的機能は、世代間の競合によって生じる問題を回避しながら定期的に新しい知識と技術の担い手を社会に補充することである。年金制度の社会的機能は、高齢期には働かなくても収入が確保され、経済的に困窮することがないことを保障し、そのことを通じて社会の裏面に隠退することを人々に納得・受諾させることである。

高齢者と社会(の他の成員)とが相互に関係を希薄化させていくことは不可避的な過程であることを説く離脱理論や、職業役割に変わる自己同一性の源泉となる代替的活動の獲得が高齢期の主観的幸福感(生活満足感)を高めるとする活動理論など高齢期における種々の適応理論(小田, 1991; 1993)は、産業社会においては高齢期における隠退が必然的なものであることを暗黙の了解事項にしてきた。したがって、そこでの基本的な関心事は、定年制度と年金制度の下で、高齢者はいかにして“余生を楽しむか”、というところにあった。ところが、高齢化の急速な進行と財政危機の下で展開されている「新しい高齢者像」の論議の中で描かれる高齢者に求められていることは、社会の裏面に隠退して“余生を楽しむ”ことではなく、社会の表面で“活躍”することである。このことは、産業社会における世代間関係の特質と明らかに相容れないことである。さまざまな領域で世代間の競合を引き起こし、スムーズな世代交代を難しくすることにつながるからである。

いうまでもなく、以上に述べたことは、現実の産業社会を描写したものではなく、高齢

者の老年規範意識の分析枠組みを構成するために、産業社会における世代間関係を理念的に考察したものである。以下では、社会の裏面に隠退するということと社会の表面で活躍するということを操作的に定義し、それらをどのような質問内容に置き換えたかを述べることとする。なお、提示した項目は後掲の図1に記してあるとおりであるが、それらに対して、「次にあげる意見について、あなた自身はどう思いますか」と尋ね、「まったく、そう思う」、「すこし、そう思う」、「あまり、そうは思わない」、「ぜんぜん、そうは思わない」という回答肢を用意し、どれか一つを選択することを求めた。

(2) 社会の裏面に隠退ということ

世代の交代

社会の裏面に隠退ということとは、ごく一般的にいえば、既に述べたように、それまで占めていた地位を若い世代に譲り渡して世代交代することであるが、その具体的な行為を日常的用語で表現すれば「後進に道を譲る」ということになる。そこで、その逆の具体例としてあげたのが、「実業界や政界での長老支配の傾向」である。これらは、高齢期になっても指導的地位にとどまることの是非に関することである。そして、それは、指導的地位にふさわしい能力が高齢者にあるか否かに関わってくる。そこで、以上の質問に加えて、「高齢者は現在の若者を実質的に指導できる能力を備えているか否か」についての判断を求めた。

余生を楽しむ

社会の裏面に隠退することのもう一つの側面は余生を楽しむことである。それは、それまでの職業をはじめとする諸々の義務的・拘束的な社会関係から解放されて自由に生きることであり、「自分の好きなことを優先して暮らす」ことである。それは、また、何か特別なことをすることなく、「これといって何もせずに暮らすこと」でもある。以上の是非を尋ねるとともに、余生の楽しみの一つとして、おしゃれや身だしなみを取り上げた。

扶養される

余生を楽しむには、それを支える条件が必要となる。自分の蓄えなどで生活できる場合を除けば、私的あるいは公的(社会的)な扶養を受けることなしには余生を楽しむことはできない。前者に関しては「子どもへの依存の是非」を、後者に関しては「若者への負担が増大しても老人福祉対策を充実すべきか否か」を取り上げた。また、余生を楽しむといっても、自らの資力で生活するにしろ扶養されるにしろ、高齢期においては就業期に比べて定期収入が低下することと、扶養される立場におかれるとすれば贅沢することは難しい。そこで、「高齢者は贅沢すべきではないか否か」について回答を求めた。

活動の縮小

隠退は、それまでしていた活動の規模や範囲を縮小することでもある。ここでは、その具体例として高齢者の自動車運転を取り上げた。高齢運転者の増加とともに、高齢者の交通事故や免許証返上への関心が高まっているが、自動車運転が高齢期における活動の規模や範囲を大きく左右していることは疑い得ない。そこで、高齢者には「運転免許を交付すべきか否か」について尋ねた。

(3) 社会の表面で活躍ということ

働いて収入を得る

定年年齢の延長や再雇用、再就職など高齢期における職業役割の継続は、それが将来的には高齢人口に労働力人口としての役割を期待せざるを得ない状況を背景にしているとはいえ、職業役割における世代間の競合を引き起こす。こうした場合の規範意識は、産業社会の中心的な担い手である若い世代の就業を優先するために「高齢者の就業機会が制限されても仕方がないとすべきか否か」という観点からとらえることができる。一方、産業社会であり続ける以上、常に新たな知識と技術を身につけることがない限り、高齢者が果たす職業役割は周近的なものとならざるを得ないから、十分な報酬は期待できない。したがって、「高齢者は働いて収入を得ようとするならば条件が悪くても我慢しなければならないか否か」について尋ねた。

社会に役に立つ

高齢者に期待される社会的貢献がどのようなものであるかは議論が多いところであるが、ここでは、漠然としてはいるが、好きなことだけをして余生を楽しむということと異なった表現となるように、高齢者は「もっと社会に役立つようなことをすべきだ」ということの是非について尋ねた。社会の表面で活躍することが高齢者に求められるとすれば、高齢者にとっては、自分たちの意見が反映されることが重要となろう。そこで、ここでは、「現在の社会では高齢者の意見が正しく反映されているか否か」について尋ねた。

世代間交流

社会の表面で活躍するということは、異世代(若い世代)との交流が活発になることでもある。ここでは、高齢期において世代間交流を進めるべきか否かを直接問うことをしないで、「若い世代と交流することと高齢者どうしていることのどちらが幸せか」を尋ねた。

特別扱いされない

高齢者に社会の表面で活躍することを期待するということは、高齢者を特定の世代として特別扱いせず、成人一般と同様にみなすということでもある。このことに関して、ここでは、「高齢者だからといって特別扱いされる理由はないか否か」について尋ねた。

(4) 調査の方法とデータ

本稿で扱うデータは、神戸市在住の65歳以上の男女5,000人を対象とする郵送調査から得られたものの一部である。対象者の抽出方法や回答者の属性に関しては、第7章で述べた通りである。

3. 結果

(1) 頻度分布

図1は、取り上げた16項目の質問への回答の頻度を「まったく、そう思う」と強く同意した割合の順にならべたものである。以下の()の注記は、回答を性、年齢、学歴のそれぞれの分割表に整理して独立性の検定(カイ2乗検定)を行った結果、5%水準で独立(無関連)ではない場合に、他のカテゴリに比べて関連が強いと想定される属性であり、注記されていない場合は無関連であることを示している。

高齢者のほぼ4分の1が強く同意しているのは、「高齢者は、できるだけ早く後進に道を譲るべきだ」(男、70歳以上、高学歴)、「高齢者は子どもに頼ってはならない」(男、

80歳未満)、「老後は、人から何か言われたとしても、自分の好きなことを優先して暮らすべきだ」、「高齢者だからといって特別扱いされる理由はない」(男)の4項目である。なかでも、「できるだけ早く後進に道を譲るべきだ」、「子どもに頼ってはならない」、「特別扱いされる理由はない」の3項目は、同意率(「全く、そう思う」と「少し、そう思う」の合計)が約70%に達している。早く後進に道を譲って、高齢期は自分の好きなことを優先して暮らすべきだとする老年規範意識を抱いている高齢者が大多数を占めていることがわかる。そして、高齢者の多くは、子どもには頼るべきではないと家族扶養の否定に通じる規範意識をもっていること、高齢者であるという理由だけで特別扱いされるべきではないと考えており、性、年齢、学歴にかかわらず多くの高齢者に共通している規範意識は、高齢期には自分の好きなことを優先して暮らすべきだというものである。

以上の4項目に次いで同意率の高い項目は、「高齢者は、実業界や政治の分野で力を持ちすぎている」(男、70-80歳、高学歴)、「高齢者には運転免許を交付すべきではない」(女、70歳以上、低学歴)、「若者の就業の場を奪うことになるから、高齢者の就業機会が制限されてもしかたがない」(70歳以上、低学歴)の3項目である。これらの結果から、「早く後進に道を譲るべきだ」という規範意識と同様に、少なからぬ高齢者が今日でも高齢期における隠退あるいは離脱が不可避的であるとことを認識していること、そして、実業界や政界で高齢者が力をふるう状況を好ましいことではないとみなしていることがうかがわれる。

その他の項目では強く同意する割合は小さくなるが、「まったく、そう思う」と「すこし、そう思う」を合わせた割合が50%を超える項目は、「西欧の高齢者に比べて、日本の高齢者は、おしゃれや身だしなみに気をつけていない」(男、高学歴)、「高齢者は、もっと社会に役立つようなことをすべきだ」(男、70-80歳)、「今の世の中、高齢者の意見が正しく反映されていない」(75-80歳)の3項目である。最近では、高齢者の服装や美容への関心が以前にもまして高まってきているようであるが、西欧社会の高齢者に比べると、まだまだとみている高齢者が多いことがわかる。多くの高齢者は、高齢者がもっと社会的貢献を果たすべきだと考えているが、他方では、現在の社会状況は高齢者の意見が反映されていないとみなしている。「まったく」と「すこし」を合わせた同意率が50%を割る項目は、「年をとったら、毎日これといって何もせずに暮らしたとしても悪いことではない」(75歳以上、低学歴)、「税金などで若者の負担が増えても、老人福祉対策をもっと充実すべきだ」(75歳以上、低学歴)、「高齢者は、若い人に混じって何かするよりは、高齢者どうしでいる方が幸せだ」(女、70歳以上、低学歴)、「高齢者は、働いてお金を得ようと思うなら悪い条件でも我慢して仕事をしなければならない」(男、70歳以上)、「高齢者はぜいたくをしてはならない」(男、70歳以上)、「高齢者には今の若者を本当に指導できる能力はない」(75歳以上、低学歴)の6項目である。なかでも、「悪条件でも我慢して働く」ことと「ぜいたくをしてはならない」の2項目に関しては、同意する割合が3割程度と他の項目に比べて極端に小さく、しかも「ぜんぜん、そうは思わない」と強く否定する割合が20%前後と他の項目に比べて極端に大きくなっている。豊かな高齢期の生活とはほど遠い耐乏的な規範意識をもっている高齢者は少ないということである。

半数を下回るとはいえ、活動的な高齢期の生活とは正反対の生活をよしとする高齢者も

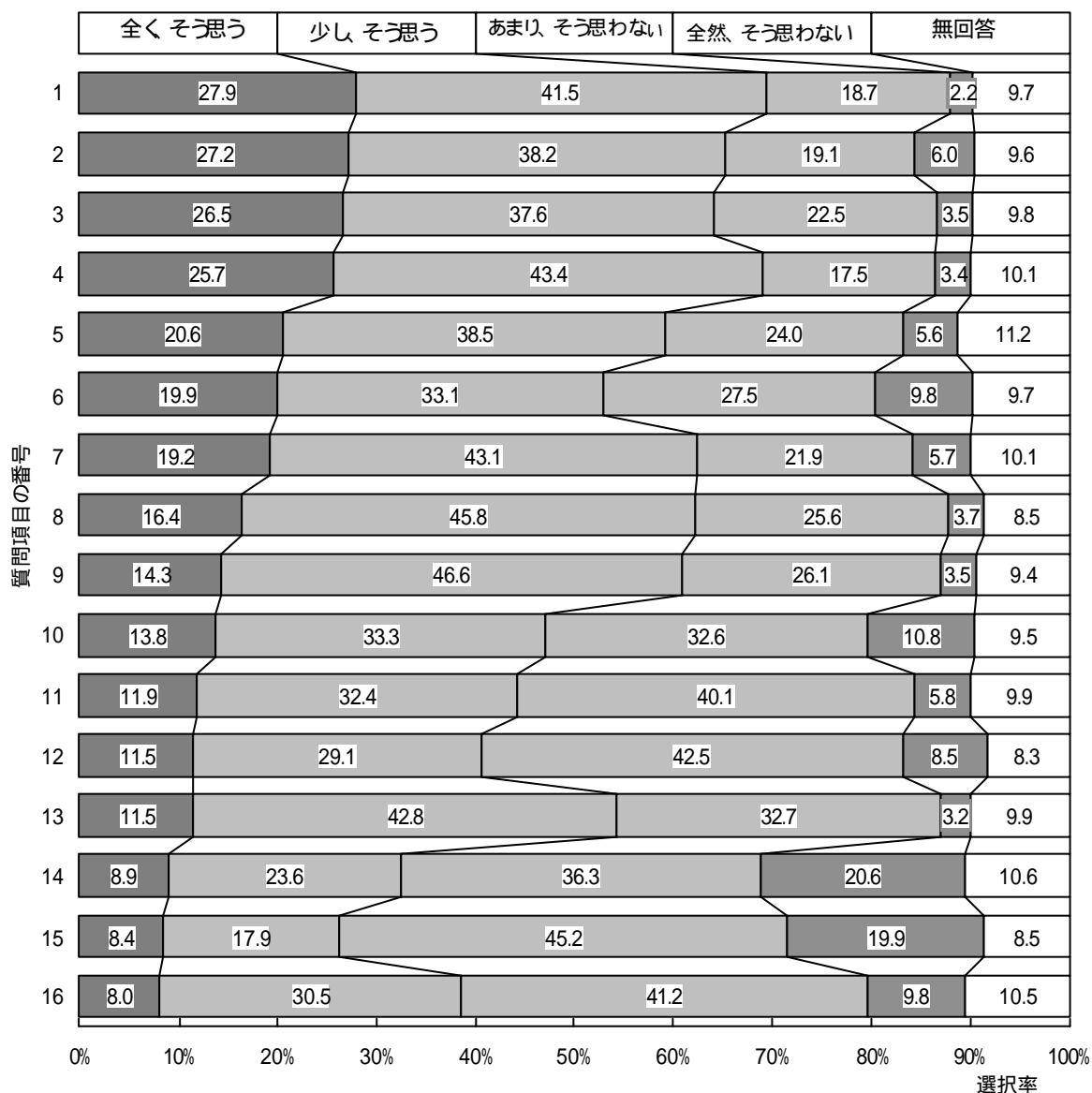


図1. 老年規範に関わる質問に対する回答の頻度分布(回答者 2,732人)

質問項目

1. 高齢者は、できるだけ早く後進に道を譲るべきだ
2. 高齢者は子どもに頼ってはならない
3. 老後は、人から何か言われたとしても、自分の好きなことを優先して暮らすべきだ
4. 高齢者だからといって特別扱いされる理由はない
5. 高齢者は、実業界や政治の分野で力を持ちすぎている
6. 高齢者には運転免許を交付すべきではない
7. 若者の就業の場を奪うことになるから、高齢者の就業機会が制限されてもしかたがない
8. 西欧の高齢者に比べて、日本の高齢者は、おしゃれや身だしなみに気がついていない
9. 高齢者は、もっと社会に役立つようなことをすべきだ
10. 年をとったら、毎日これといって何もせずに暮らしたとしても悪いことではない
11. 税金などで若者の負担が増えても、老人福祉対策をもっと充実すべきだ
12. 高齢者は、若い人に混じって何かするよりは、高齢者どうしでいる方が幸せだ
13. 今の世の中、高齢者の意見が正しく反映されていない
14. 高齢者は、働いてお金を得ようと思うなら悪い条件でも我慢して仕事をしなければならない
15. 高齢者はぜいたくをしてはならない
16. 高齢者には今の若者を本当に指導できる能力はない

少なくない。また、高齢世代の扶養と勤労世代への負担の問題がこれからの日本社会の重要な課題とされているが、高齢者の4割は勤労世代の負担が増えても老人福祉対策の充実を図るべきであるとしている。また、高齢者どうしているよりも若い世代との交流を是とする高齢者が多く、実業界や政界で高齢者が力をふるう状況に批判的である一方で、若者に対する高齢者の指導力を高く買っている高齢者も少なくない。

以上、取り上げた16項目の質問への回答結果から高齢者の老年規範意識の一端を明らかにした。今日の高齢者の老年規範意識は、一言で言えば、必ずしも「新しい高齢者像」に対応しているとはいえずそうもないが、次に、それらの結果を用いて高齢者の老年規範意識の構造について検討することとする。

(2) 老年規範意識の因子分析

取り上げた16項目のそれぞれの選択肢「全く、そう思う」に1点、「少し、そう思う」に2点、「あまり、そう思わない」に3点、「全然、そう思わない」に4点を与えて因子分析を行った。因子の抽出方法や軸の回転方法を変えて幾度となく因子分析を行った結果、「西欧の高齢者に比べて、日本の高齢者は、おしゃれや身だしなみに気をつけていない」という項目8は、抽出方法によっては共通性が極端に小さくなることからこれを除外し、残り15項目を用いてあらためて因子分析を繰り返した。

それらの結果のうち、抽出された因子への各項目の所属が比較的簡潔であったものを示したのが表1である(結果的には主成分分析であり、以下でいう因子は主成分のことである)。15項目で4因子と多くの因子が抽出され、しかもそれら4因子での説明力(寄与率の合計=説明された分散の合計)が50%弱というのは因子分析の結果としては十分とはいえないが、まずは、この結果から高齢者の老年規範意識の特性を探ってみたい。

表1. 老年規範意識の因子分析

質問項目	N=2,190		回転後の負荷量				共通性
	平均	S.D.					
1. 早く後進に道を譲るべきだ	1.94	0.78	0.717				0.559
5. 実業界や政界で力を持ちすぎている	2.15	0.85	0.687				0.497
4. 特別扱いされる理由はない	1.99	0.79	0.603				0.397
6. 運転免許を交付すべきではない	2.32	0.93	0.532	0.417			0.479
12. 高齢者どうしている方が幸せだ	2.56	0.82		0.674			0.517
16. 若者を本当に指導できる能力はない	2.60	0.79		0.626			0.476
15. ぜいたくしてはならない	2.85	0.86		0.537		0.456	0.507
7. 就業機会が制限されてもしかたがない	2.17	0.82	0.417	0.480			0.441
11. 老人福祉対策をもっと充実すべきだ	2.45	0.79			0.756		0.591
13. 高齢者の意見が正しく反映されてない	2.31	0.73			0.692		0.534
10. 何もせずに暮らしても悪くはない	2.47	0.89			0.620		0.474
3. 自分の好きなことを優先して暮らすべき	2.05	0.83	0.382		0.442		0.352
9. もっと社会に役立つことをすべき	2.21	0.74				0.756	0.621
14. 悪条件でも我慢して仕事をすべき	2.78	0.91		0.324		0.627	0.499
2. 子どもに頼ってはならない	2.04	0.88	0.360			0.534	0.427
	固有値		3.271	1.580	1.328	1.161	
	寄与率(%)		15.0	11.8	11.5	10.6	

S.D. は標準偏差の略、N は標本数。

因子の抽出は主成分分析法、回転はバリマックス法。因子負荷量が0.3以下は非表示。

「運転免許を交付すべきではない」や「ぜいたくをしてはならない」、「就業機会が制限されてもしかたがない」、「自分の好きなことを優先して暮らすべきだ」、「子どもに頼ってはならない」といった項目は、大きく違わない負荷量を持ちながら複数の因子に所属しており、全体的にいて、分析に用いた15項目の因子所属はそれほど明瞭ではない。強いて言えば、第 因子を構成する項目は、「特別扱い」を除くと他はいずれも社会の裏面への隠退に関わるものであり、第 因子も、「高齢者の意見が正しく反映されていない」を除くと、社会の裏面への隠退に関わる項目によって構成されている。

しかし、第 因子と第 因子は、裏面への隠退に関わる項目と表面での活躍に関わる項目とがほぼ半数ずつ混在している。当初設定した「社会の裏面への隠退」に関わる項目と「社会の表面での活躍」に関わる項目とが各因子に明瞭に振り分けられていないということである。しかし、以上の結果には幾つかの興味深い点が見出される。

「特別扱いされる理由はない」という項目は、社会の表面での活躍に関わる項目として設定したが、高齢者自身の回答結果は、それが社会の裏面への隠退と強く結びついていることを示している。高齢者が社会の表面で活躍することは、高齢者自身は、それを特別扱いとして否定的にとらえていると理解することができそうである。

「高齢者の意見が正しく反映されていない」ということも同様に、「老人福祉対策の充実」や「何もせずに暮らしても悪いことではない」、「自分の好きなことを優先して暮らすべきだ」という社会の裏面への隠退に関わる項目との結びつきが強い。高齢期には社会に役立つことなど社会の表面で活発に活動することよりも、充実した老人福祉対策の下で社会の裏面に隠退して気ままに余生を楽しむべきであると考えているのに、現実はそのような高齢者の意向と逆の傾向にあると高齢者は考えているようである。

表 2 . 標本相関行列

	V1	V2	V3	V4	V5	V6	V7	V9	V10	V11	V12	V13	V14	V15	V16
V1	1														
V2	.236	1													
V3	.236	.183	1												
V4	.266	.242	.251	1											
V5	.503	.223	.180	.230	1										
V6	.310	.133	.141	.269	.194	1									
V7	.303	.219	.202	.224	.174	.308	1								
V9	.171	.270	.084	.190	.147	.052*	.082	1							
V10	.086	.024	.199	.024	.024	.049	.141	-.091	1						
V11	.085	.031	.208	-.036	.034	.057*	.085	.049*	.275	1					
V12	.126	.080	.144	.041	.053*	.160	.205	.039	.180	.189	1				
V13	.177	.092	.192	.118	.198	.133	.142	.112	.243	.335	.150	1			
V14	.114	.245	.106	.109	.117	.085	.191	.246	.055*	.055*	.149	.065	1		
V15	.145	.161	.070	.091	.058	.114	.175	.182	.076	.114	.265	.083	.271	1	
V16	.253	.243	.160	.142	.227	.256	.250	.068	.137	.091	.294	.099	.204	.233	1
M	1.94	2.04	2.05	1.99	2.15	2.32	2.17	2.21	2.47	2.45	2.56	2.31	2.78	2.85	2.60
S.D.	.777	.878	.835	.788	.845	.928	.825	.745	.886	.794	.816	.729	.908	.856	.786
N	2184	2184	2184	2184	2184	2184	2184	2184	2184	2184	2184	2184	2184	2184	2184

Mは平均、S.D.は標準偏差、Nは標本数。下線部は $p>0.05$ 、*は $p<0.05$ 、その他は $p<0.001$ 。

ちなみに、「全く、そう思う」から「全然、そう思わない」までの4件法での回答結果をそのまま用いた順位相関係数(ケンドールのタウbおよびスピアマンのロー)および先に述べたような得点化した値を用いた積率相関係数(表2)をみても、それら以外の項目で「高齢者の意見が正しく反映されていない」と相関が高いのは、「早く後進に道を譲るべきだ」(0.158~0.177, $p<0.001$)、「実業界や政界で力を持ちすぎている」(0.157~0.198, $p<0.001$)といった社会の裏面への隠退に関わる項目であり、それらに比べると「もっと社会に役立つことをすべきだ」(0.103~0.113, $p<0.001$)との相関は低い。

「もっと社会に役立つことをすべきだ」との関連が強い項目は「悪条件でも我慢して仕事をすべき」と「子どもに頼ってはならない」であることは表1からもわかるが、順位相関係数および積率相関係数をみると、それらに次いで相関が高いのは「特別扱いされる理由はない」(0.179~0.198, $p<0.001$)であり、「何もせずに暮らしても悪くはない」(-0.076~-0.091, $p<0.001$)が、係数そのものはごく小さいものでしかないが有意に逆相関であるほかは、「高齢者はぜいたくをしてはならない」(0.127~0.182, $p<0.001$)と「早く後進に道を譲るべきだ」(0.167~0.185, $p<0.001$)との相関が高い。これらの結果をみるかぎり、高齢者の多くが考える社会への貢献とは、積極的に高齢者のパワーを生かして社会の表面で活躍するといったイメージとはほど遠いように思われる。むしろ、それは、じっと我慢して子どもや社会に迷惑をかけることのないように辛抱を重ねるといったイメージである。

以上の結果にしたがうと、第1因子と第2因子はともに「隠退」規範意識を、第3因子は「余生」規範意識を、第4因子は「辛抱」規範意識を表す潜在因子であると解釈することができよう。

(3) 老年規範意識モデルの検証

4因子モデル

因子分析の結果を老年規範意識の4因子モデルとしてAmos4(Arbuckle and Wothke, 1999)を用いた共分散構造分析で検証したのが図2である(分析に使用したデータは表2の相関行列である)。

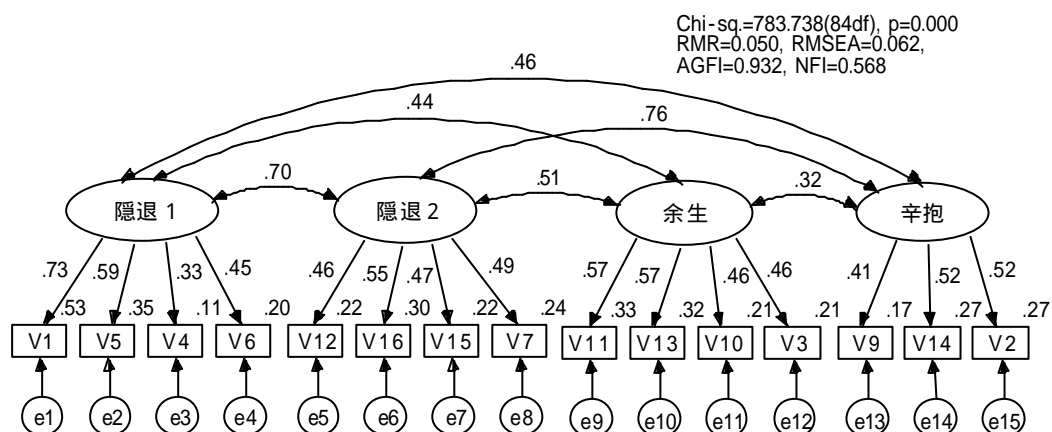


図2.老年規範意識の4因子モデルA

図中の楕円で囲まれた潜在変数の「隠退1」は表1の第1因子に、「隠退2」は第2因子に、「余生」は第3因子に、「辛抱」は第4因子に対応している。四角で囲まれた観測

変数の変数名V1～V16は、前掲の図1および表1の質問項目番号に対応している。ただし、表1と同様に質問項目8(V8)は分析から除外している(したがって、表2においてもV8は除外されている)。図中の数値(小数)はパラメータ推定値で、直線の矢印に添えられた数値は標準化係数、両端に矢印のある曲線に添えられた数値は相関係数、四角で囲まれた観測変数に添えられた数値は重相関係数の平方である。

共分散構造分析は、モデルの良否をモデル(推定された共分散構造)と観測データ(標本分散行列)との乖離(適合)の程度(乖離度/適合度)で判定する統計解析の方法である。この目的に添ってモデルの適合度を判定する指標が数多く提案あるいは開発されてきたが、本稿では、カイ2乗値による検定(以後、カイ2乗検定と呼ぶ)、残差平方平均平方根(RMR: Root Mean Square Residual)、平均二乗誤差平方根(RMSEA: Root Mean Square Error of Approximation)、自由度調整済みのGFI(AGFI: Adjusted Goodness-of-Fit Index)、規準化適合度指標(NFI: NormalFitIndex)を採用する。

カイ2乗検定では、有意水準を表すp値が0.05や0.1を越えて、その値が大きいほどモデルが標本データに近い、すなわち適合度が高いことになる。RMRやRMSEAはモデルにおける推定値と観測データとの残差や誤差の指標であるから、ゼロに近いほどモデルの適合度は高いことになる。一般に、RMRでは0.05以下、RMSEAでは0.08以下であればモデルを受容してもよいと判断される。逆にAGFIやNFIは1に近いほど適合度が高いことを表し、一般に0.9以上であればモデルは受容される。なお、NFIは、他の指標がパラメータ数が最大限のモデルである飽和モデル(観測データと完全一致)との比較で適合度を判定するのと異なり、当該モデルが観測変数相互の相関をゼロと仮定する独立モデルと飽和モデルとの間のどのあたりに位置するかで適合度を判定する指標である。

適合度検定に関する以上のような一般的了解に基づいて解析結果をみると、図2の中に示すカイ2乗検定の結果からは、このモデルは棄却されることになる。しかし、大標本を用いた分析においては、カイ2乗検定の結果にしたがうと多くの場合にこうした事態(モデルが棄却されてしまうこと)が生じることが指摘されている(Arbuckle and Wothke, 1999; 狩野, 1997)。そこで、標本数が1,000を越える場合には、カイ2乗検定ではなく、GFIやRMSEAを適合度の指標にすることも提案されている(狩野, 1997)。本稿で扱う標本数は2,184と大標本であるから、その提案にしたがってRMRやRMSEA, AGFIの値をみると、このモデルを受容してもよいということになる。なお、カイ2乗検定による適合度を高めるための方法は幾つかあり、それらを試みてはいるが、その結果に関しては今回は割愛する。

ところで、図2における潜在変数間の関係をみると、「隠退1」と「隠退2」、「隠退1」および「隠退2」と「余生」との相関が強く、「余生」と「辛抱」との相関が弱いのは常識的にも理解しやすい。しかし、「隠退1」は「余生」と「辛抱」の両方とも同程度の相関が認められ、「隠退2」は「辛抱」との相関が極めて強い。このことは、「隠退1」と「隠退2」は、同じように「隠退」を内容とする規範意識とみなすことができるとはいえ、両者には何らかの違いがあることを示している(「隠退」、「余生」、「辛抱」を潜在変数とする3因子モデルの検証も試みたが、4因子モデルに比べて適合度は悪い)。そこで、「辛抱」を従属変数として潜在変数間に因果関係を想定してこのことの確認を試みたのが図3である(ただし、この因果モデル自体は「辛抱」を従属変数とする何らかの

論理的な根拠に基づいているわけではなく、あくまでも「隠退1」と「隠退2」との違いを探るための便宜的なモデルである)。

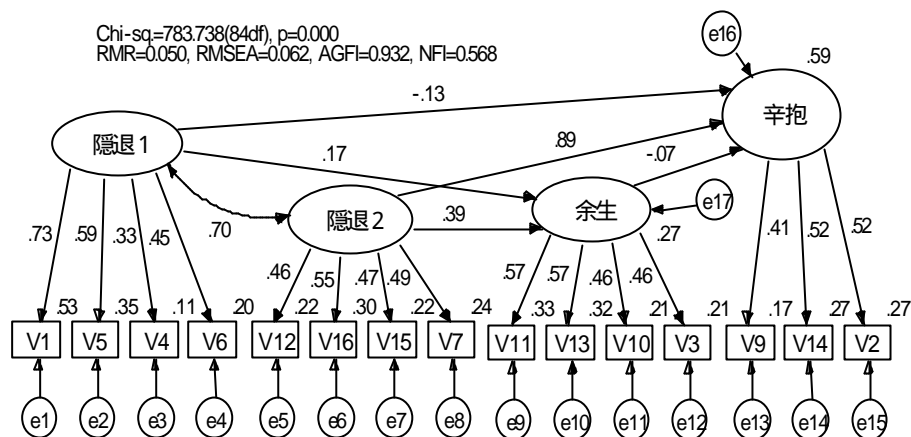


図3 . 老年規範意識相互の関係

「隠退2」から「辛抱」への標準化パス係数(直接的効果)が正値で、しかも大きな値を示している。これに対して、「隠退1」から「辛抱」への係数(直接的効果)と「余生」から「辛抱」への係数(直接的効果)は負値である。この結果から、「隠退1」と「隠退2」の違いは「辛抱」との関係の違いによるものであることがわかる。「隠退1」と「隠退2」は、同じ「隠退」規範意識であっても、その性格は大いに異なるものであることが明らかである。「隠退1」および「隠退2」の(「余生」を介して「辛抱」に影響を与える)間接的効果の標準化係数は、それぞれ-0.011と-0.026と小さいものにすぎない。こうしたことから、図2における「余生」と「辛抱」との間にみられた正の相関は、「隠退2」と「辛抱」との関係の強さが反映されたものであることがわかる。「隠退2」の規範意識は、高齢期には「隠退」して「余生」を送るべきであるが、それは単に気ままに老後を楽しむべきだということではなくて、同時に「辛抱」という規範意識を伴ったものであること、あるいは、「隠退2」の規範意識は「辛抱」規範意識に近いものであることが理解される。しかし、また、そのことは、図2および図3からも明らかなように、「余生」規範意識を否定するものではないことはいうまでもない。高齢者の老年規範意識は、「隠退」規範、「余生」規範、「辛抱」規範が複雑に混在しているというべきであろう。そこで、以下では、それぞれの規範意識モデルを別個に検証することとする。

隠退規範意識の2因子モデル

Chi-sq.=316.327(19df), p=0.000
RMR=0.041, AGFI=0.933, NFI=0.864, RMSEA=0.085

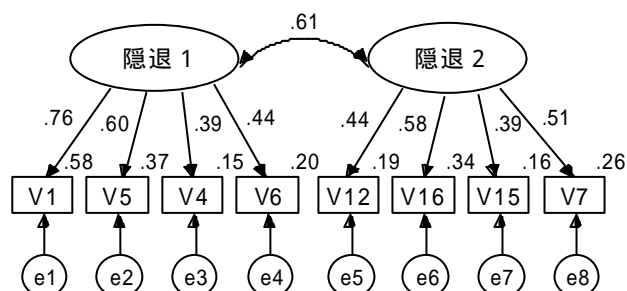


図4 . 隠退規範意識の2因子モデル

図4は、「隠退」規範意識を「隠退1」と「隠退2」の2因子モデルで検証したものである。カイ2乗検定では棄却されるが、その他の適合度指標では比較的良好な当てはまりを示している。高齢者の「隠退」規範意識は、この2因子モデルでとらえることができると考えてよいであろう。

隠退規範意識の1因子モデル

「隠退1」と「隠退2」とを分けて、それぞれを1因子モデルとして検証したのが図5と図6である。いずれも適合度は悪くはないが、「隠退2」の適合度はかなり良好である。図7は、繰り返し試みた因子分析の結果のうち、質問項目8の「おしゃれや身だしなみ」と質問項目12の「高齢者どうしている方が幸せ」の2項目を除いたときに抽出された因子をもとにして構成した「隠退」規範モデルである。カイ2乗検定の結果およびその他の指標からみても、このモデルの適合度は極めて高い。

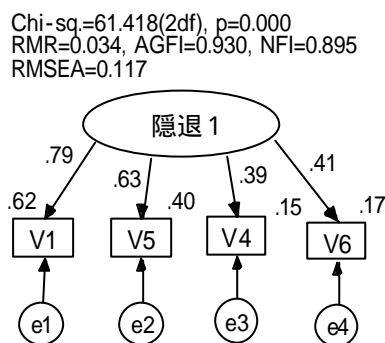


図5 . 隠退1の1因子モデル

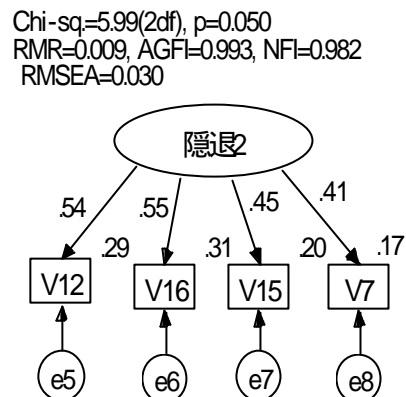


図6 . 隠退2の1因子モデル

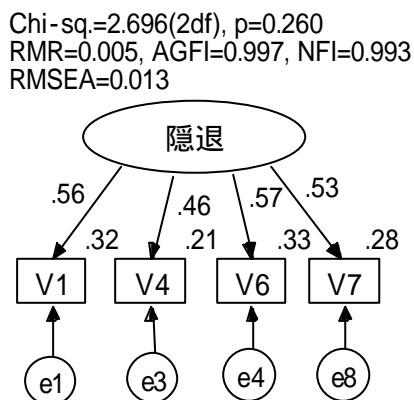


図7 . 隠退規範意識の1因子モデル

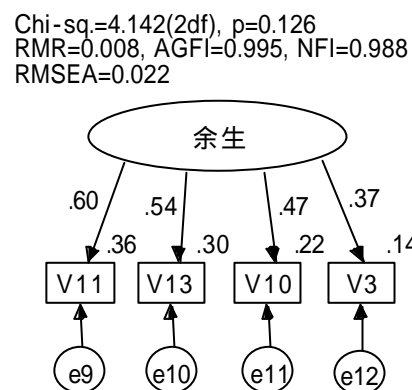


図8 . 余生規範意識の1因子モデル

余生規範意識の1因子モデル

この余生規範意識モデル(図8)はカイ2乗検定でも良好な適合を示しており、他の適合度指標においても十二分な結果がみられる。

辛抱規範意識の1因子モデル

4因子モデルでは「辛抱」は3つの観測変数で構成されていたが、この1因子モデル(図9)においては、上で述べた「隠退」規範モデルと同様に質問項目の8と12を除いた因子分析の結果に基づいて、4因子モデルにおいては「隠退2」の観測変数の一つであったV15(「高齢者はぜいたくをしてはならない」)を加えて観測変数を4つにした。カイ2乗検定の結果からは不十分であるが、他の指標からみて、このモデルの適合度は高いといえてよい。

Chi-sq.=19.050(2df), p=0.000
RMR=0.018, AGFI=0.978, NFI=0.943
RMSEA=0.062

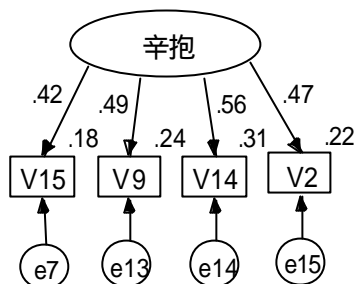


図9 . 辛抱規範意識の1因子モデル

4 . 結 論

新たな高齢者像の論議にみられるように、今日およびこれからの高齢者には多大な役割が期待されており、老年規範も大きく変わりつつある。しかしながら、期待論と啓蒙活動の盛況さに比べて、多大な役割を期待されるようになった高齢者自身の老年規範意識に関する研究はほとんど試みられていない。そこで本稿では、老年規範を社会の裏面への隠退と社会の表面での活躍という二つに類別し、それらに対応する質問項目を設定し、神戸市に在住する65歳以上の男女5,000人を無作為に抽出して実施した大量調査のデータを用いて高齢者の老年規範意識について考察した。

高齢者の大多数は、早く後進に道を譲って、高齢期は自分の好きなことを優先して暮らすべきだとする老年規範意識を抱いており、子どもに依存することや高齢者であるという理由で特別扱いされることに対して否定的である。そして、高齢者が実業界や政界で力をふるう状況を好ましいことではないとみなしており、高齢者には運転免許交付すべきではないと考えている高齢者も多い。また、若者の就業の場を奪うことになるから高齢者の就業機会が制限されてもしかたがないという意見に対しても同意する割合が大きいことなど、高齢者の多くは、今日でも高齢期における隠退あるいは離脱が不可避的であるとことを認識していることが明らかになった。

しかし、その一方では、高齢者はもっと社会に役立つようなことをすべきだとする高齢者も多数を占めており、毎日これといって何もせずに暮らしたとしても悪いことではないという意見や、若者に対する高齢者の指導能力を否定する意見、若い人に混じって何かするよりは高齢者どうしての方が幸せだという意見、税金などで若者の負担が増えても老人福祉対策をもっと充実すべきだという意見に対しては同意しない高齢者は多い。しかし、

また、そうした意見に同意する高齢者も少なくはない。社会の表面での活躍という役割期待が大多数の高齢者に認知されているわけではないということである。

とくに非同意率の高かったのは、「悪条件でも我慢して働く」とことと「ぜいたくをしてはならない」といった項目である。豊かな高齢期の生活とはほど遠い耐乏的な規範意識を持っている高齢者は少ないということである。

以上の結果を基に探索的因子分析を行ったところ、「隠退1」、「隠退2」、「余生」、「辛抱」の4つの潜在因子が抽出された。それを共分散構造分析で検証した結果、それらを因子とする4因子モデルおよびそれぞれの潜在因子ごとの2因子または1因子モデルともに適合度は良好であった。4因子モデルによる分析から明らかになったことは、今日の高齢者の老年規範意識は、「隠退」規範、「余生」規範、「辛抱」規範が相互に関連しながら混在しているということである。敷衍すれば、伝統的な老年規範意識と新たに生まれつつある老年規範意識とが一人の高齢者の中で、また、高齢者間に混在しているということでもある。

残した課題は多い。作成した老年規範意識モデルを男女別や前期高齢者と後期高齢者別に検証することや、取り上げた項目間の因果関係を組み込んだモデルで高齢者の老年規範意識をより詳細に分析すること、老年観と老年規範意識との関係を明らかにすること、老年規範意識の測定尺度を作成することなどである。それらに関しては別の機会に報告することにしたい。

文献

- Arbuckle, J.L. and W. Wothke (1999). *Amos 4.0 User's Guide*, Small Waters Corporation, Chicago, USA.
- Burgess, E.W. (1960). *Aging in Western Societies*, University of Chicago Press, Chicago, USA.
- Chudacoff (1989). *How Old Are You?: Age Consciousness in American Culture*, Princeton University Press (工藤・藤田訳『年齢意識の社会学』法政大学出版局、1994年)
- Cowgil, D.O. (1979). Aging and Modernization: A Revision of the Theory, in Hendricks, J. and C.D. Hendricks eds., *Dimensions of Aging* Winthrop, Cambridge, Massachusetts, USA.
- Hendricks, J. and C.D. Hendricks (1986). *Aging in Mass Society: Myth & Realities* (third edition), Little, Brown and Company, Boston, USA.
- 狩野裕 (1997). 『グラフィカル多変量解析』現代数学社。
- 小田利勝 (1995). 「高齢化」井上・矢島編著『生活問題の社会学』学文社。
- 小田利勝 (1991). 「高齢者の適応に関する概念的一考察」徳島大学社会科学研究所、4号。
- 小田利勝 (1993). 「サクセスフル・エイジングに関する概念的一考察」徳島大学社会科学研究所、6号。
- White House (1996). *The Road to an Aging Policy for the 21st Century*, USA.

第9章 高齢者のテレビ視聴行動

1. 問題の所在と研究の目的

テレビを見ることはもはやあらためて注目するまでもないほどに日本人の日常的、習慣的行動として定着している。かつて筆者らが1990年に行った徳島県中央地区在住の成人男女5千人を対象とする「余暇と学習に関する調査」の結果では、回答者の90%が平日、休日を問わずに自由時間にテレビを見ていた(小田・近藤, 1992)。また、1999年に筆者が行った神戸市在住の65歳以上の男女5千人を対象とする調査においても、諸多の生活行動の中でもテレビを見ることは高齢者の90%以上に共通するもっと一般的な生活行動であることが確認されている(小田, 2000)。

1976年以降10歳以上の国民を対象として(1996年には約27万人)5年に一度実施されている総務庁の「社会生活基本調査」の報告書では、日本人の生活時間が1次活動(睡眠、身の回りの用事、食事)、2次活動(通勤・通学、仕事、学業、家事、介護・看護、育児、買い物)、3次活動(通勤・通学を除く移動、テレビ・ラジオ・新聞・雑誌、休養・くつろぎ、学業以外の学習・研究、趣味・娯楽、スポーツ、社会活動、交際・つきあい、受診・受療、その他)に分類されて報告されている(総務庁, 2000)。その報告からはテレビ視聴時間だけを取り出すことはできないが、「テレビ・ラジオ・新聞・雑誌」といったマスメディア志向行動に費やす時間は、有業者男子(女子)の場合、1986年では2時間8分(1時間46分)、1991年では2時間12分(1時間50分)、1996年では2時間19分(1時間59分)である。無業者男子(女子)では、各年、3時間21分(2時間45分)、3時間33分(2時間50分)、3時間55分(3時間5分)である。無業者の方が有業者よりも、女性よりも男性の方がどの調査年次においても1時間あるいはそれ以上マスメディア志向行動の時間が長い、職の有無あるいは性別に関わりなく、マスメディア志向行動の時間は近年に至るにつれて増加していることがわかる。

最新年(1996年)の「社会生活基本調査」によれば、3次活動の時間は、男性の場合は20代後半から、女性の場合は20代前半から、そして男女ともに50代後半までが5時間台と最も少なく、60代前半になると再び増加して6時間台となり、以後、高齢になるほど急激に増加している。60代後半では男(女)8時間12分(6時間50分)、70代前半では9時間3分(7時間24分)、70代後半では9時間20分(8時間8分)、80代前半では9時間38分(8時間55分)、85歳以上では9時間34分(9時間18分)である。3次活動の中でもっとも長い時間が費やされているのは、いずれの年齢層でも「テレビ・ラジオ・新聞・雑誌」といったマスメディア志向行動であるが、とくに高齢期になるとその時間が長くなっている。60代後半で男(女)3時間48分(3時間6分)、70代前半で4時間22分(3時間29分)、70代後半で4時間33分(3時間50分)、80代前半で4時間40分(4時間2分)、85歳以上で4時間35分(4時間20分)と増加している。性別の違いが明瞭であり、男性高齢者の方が女性高齢者よ

りもマスメディア志向行動の時間が長い、それが高齢者の3次活動の総時間に占める割合は男女ともにどの年齢層でも50%近くになっている。

以上のように、余暇活動はじめ諸種の生活行動が多様化していると思われる今日においても、マスメディア志向行動は、それに費やされる時間およびそれが3次活動の総時間に占める割合からいっても、なお日本人のもっとも一般的な日常生活行動になっており、しかも、その時間は近年に至るにつれて延びている。とくに高齢者の場合は、3次活動のほぼ半分がマスメディア志向行動の時間で占められているが、その大部分はテレビの視聴に当てられていると考えられる。

高齢者がテレビを視聴する時間を規定している要因は幾つか考えられるが、上で見た「社会生活基本調査」の結果からは、男性高齢者の方が女性高齢者よりもテレビ視聴時間が長いということと、より高齢になるほど視聴時間が長くなっていることが想像される。そして、3次活動の中でも、動的な活動をしている高齢者に対して、そうではない高齢者の視聴時間が長いことが窺われる。

「社会生活基本調査」は、「男女、年齢、主な行動の種類、一緒にいた人別の総平均時間(週全体)」も報告している。それによれば、65歳以上の高齢者の場合、男性高齢者では一人にいるとき(平均1時間24分)よりも家族と一緒にいるとき(平均2時間54分)の方がマスメディア志向行動の時間が長く、女性高齢者の場合は70代前半までは男性高齢者と同様に家族と一緒にいるときの方が視聴時間が長い、70代後半には一人にいるときと家族と一緒にいるときと同じ時間になり(1時間52分)、80歳以上になると逆に一人にいるとき(平均2時間9分)の方が家族と一緒にいるとき(平均1時間55分)よりもマスメディア志向行動の時間が長くなっている。

新聞や雑誌を1時間以上にわたって家族と一緒に読むことというのは考えにくいので、この結果は、テレビの視聴時間は、一人で見ているときよりも家族と一緒に見ているときの方が長いことを示していると考えられる。敷衍すれば、テレビ視聴行動は、一人行動としてよりも、家族との集団行動としてとらえることができそうである。いうまでもなく、このことは、家族と同居ないしは頻繁に接触している高齢者に関して言えることであり、家族と一緒に過ごす時間が長い高齢者の場合はテレビも家族と一緒に見ていることが多いであろう、ということである。したがって、一人暮らしの高齢者あるいは家族との接触が少ない高齢者には当てはまらない。世帯形態別に見るとそのことは一層明らかになる。

表1は、65歳以上の男女の「テレビ・ラジオ・新聞・雑誌」といったマスメディア志向行動に費やす時間を「社会生活基本調査」(1996年)の「65歳以上の男女、世帯の家族類型、子の有無・居住地、行動の種類別総平均時間(週全体)」から抜粋し、整理したものである。男女ともに「単身世帯」で、しかも「子はいない」高齢者のマスメディア志向行動の時間が顕著に長い(男性で4時間38分、女性で4時間1分)。子どものいない単身世帯の高齢者は、他の高齢者よりも多くの時間をテレビの視聴に当てていることが窺われる。しかしながら、子どもと同居している高齢者あるいは別居子のいる高齢者でも「子はいない単身世帯の高齢者」とそれほど変わらない時間をテレビの視聴に当てている様子も窺われる。高齢者のテレビ視聴時間を規定している要因はそれほど単純ではなさそうである。

ドイツの高齢者の日常的活動に関して調査したBaltesらは(1990)、「認知志向」(精神活動に多くの時間を使い、マスメディアの視聴時間が短い)、「身体活動・メディア志向」

(余暇活動が身体活動中心で、同時にマスメディアの視聴時間が長い)、「ADL・IADL志向」(他の活動にあまり時間を使わずに義務的活動のために多くの時間を使っている)といった3つの活動パターンを見出している。そして、それらのパターンのうち、「身体活動・メディア志向」は機能的健康度(functional health)と自己統制(personal control)の水準が最も高く、その反対に「ADL・IADL志向」はそれらの水準が最も低かったことを報告している。しかし、この結果は日本の高齢者には当てはまりそうもない。

表1 . 65歳以上のマスメディア志向行動時間

	総数	男	女
総数	3.50	4.13	3.34
子はいない	3.53	4.22	3.36
子がいる	3.50	4.12	3.34
同居	3.52	4.11	3.41
同一敷地内	3.33	3.56	3.14
近所	3.41	4.08	3.18
同一市(区)町村	3.57	4.25	3.33
他の地域	3.45	4.12	3.20
うち単身世帯	3.52	4.06	3.48
子はいない	4.10	4.38	4.01
子がいる	3.47	3.56	3.44
うち同一敷地内	3.46	4.05	3.44
近所	3.39	3.42	3.40
同一市(区)町村	3.48	3.40	3.49
他の地域	3.47	4.08	3.41

数値は(時間分)。
「社会生活基本調査」(1996年)報告より作成。

表2と表3は、「社会生活基本調査」(1996年)の結果表「-1. 曜日、男女、年齢、行動の種類別総平均時間(週全体)」を用いて算出した3次活動の行動の種類間の相関係数である。

65歳以上の人々と64歳以下の人々とは行動の種類間の相関関係はかなり異なっているが、「テレビ・ラジオ・新聞・雑誌」に関しては、年齢に関わりなく「受診・療養」と正の高い相関が認められる。日本人のマスメディア志向行動は、機能的健康度の低さが促進要因になっていることがわかる。65歳以上の男女については、「受診・療養」に加えて「休養・くつろぎ」が正の高い相関を示しているほかは、他の行動とはいずれも負の高い相関を示している。日本の高齢者のマスメディア志向行動が、身体的および精神的な活発な活動と裏腹の関係にあることを物語っている。

高齢者のテレビ視聴時間は、これまで見てきたマスメディア志向行動時間に関する検討から、性や年齢、世帯形態、健康度によって規定されていることが推察される。しかし、それだけでは高齢者のテレビ視聴時間を規定している要因を明らかにしたことはない。

テレビを見ることが、性、年齢に関わらず先進産業国に共通するごく一般的な日常的、習慣的行動であるためか、たとえば、著名な老年学事典(Maddox ed., 1995; 折茂編, 1999)にも見いだせないように、社会老年学研究の中では高齢者のテレビ視聴行動には関心が向けられておらず、その詳細は明確にされていない。しかし、テレビの視聴は、高齢期の生活行動の中で現に大きな比重を占めており、これからますます高齢期の生活と密接に関わり合うことになると思われることから、高齢者のテレビ視聴行動は、高齢者あるいは高齢化社会の研究課題として見逃すことができないテーマであると考えられる。そこで、本稿では、高齢者のテレビ視聴行動に関する研究の一端として、テレビ視聴時間を規定している諸要因と高齢者の番組選好の解明を試みることにする。

表2. 65歳以上の5歳階級別3次活動時間の項目間相関係数

	移動(通勤・通学を除く)	テレビ・ラジオ・新聞・雑誌	休養くつろぎ	学習・研究(学業以外)	趣味娯楽	スポーツ	社会的活動	交際つきあい	受診療養	その他
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1	1.000									
2	-0.844	1.000								
3	-0.961 **	0.919 *	1.000							
4	0.855	-0.949 **	-0.918 *	1.000						
5	0.989 **	-0.828	-0.974 **	0.831	1.000					
6	0.922 **	-0.800	-0.966 **	0.807	0.967 **	1.000				
7	0.908 *	-0.893 *	-0.971 **	0.956 *	0.920 *	0.933 *	1.000			
8	0.972 **	-0.832	-0.975 **	0.890 *	0.980 **	0.961 **	0.969 **	1.000		
9	-0.981 **	0.932 *	0.983 **	-0.917 *	-0.969 **	-0.916 *	-0.935 **	-0.957 *	1.000	
10	0.522	-0.116	-0.402	0.368	0.507	0.459	0.492	0.595	-0.387	1.000

注：1996年「社会生活基本調査」結果の「曜日、男女、年齢、行動の種類別総平均時間(週全体)」の表に基づいて算出

表3. 10歳～64歳の5歳階級別3次活動時間の項目間相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1	1.000									
2	-0.336	1.000								
3	-0.555	0.103	1.000							
4	-0.506	-0.220	0.922 **	1.000						
5	-0.148	0.322	0.738 **	0.616 *	1.000					
6	-0.686 *	-0.115	0.829 **	0.926 **	0.524	1.000				
7	-0.168	0.406	-0.550	-0.695 **	-0.626 *	-0.486	1.000			
8	0.703 *	-0.162	0.044	0.018	0.507	-0.255	-0.600	1.000		
9	-0.219	0.926 **	-0.175	-0.462	0.045	-0.319	0.547	-0.260	1.000	
10	-0.406	0.799 **	-0.054	-0.361	-0.079	-0.286	0.691 *	-0.356	0.785 *	1.000

注：1996年「社会生活基本調査」結果の「曜日、男女、年齢、行動の種類別総平均時間(週全体)」の表に基づいて算出

2. 分析の方法

(1) 分析の枠組

既に述べたように、「社会生活基本調査」の「テレビ・ラジオ・新聞・雑誌」といったマスメディア志向行動に当てられる時間の検討から、高齢者のテレビ視聴時間を規定していると考えられる諸要因の中に、性や年齢、世帯形態、健康度が含まれていることが推察された。しかし、テレビを見るという行動の特徴から考えると、高齢者のテレビ視聴時間を左右している要因には、さらに多くのものを考えることができる。

人がテレビを見る目的や理由は多様であろうが、特定の目的のためにテレビを活用する場合を除いて、テレビを見るという行動の特質をあげれば、身体的にも精神的にもさほどのエネルギーを消費することなく、しかも比較的低い経済的コストで様々な欲求を他者との関係を取り結ぶことなく一人で充足することができるもっとも手軽な行動である、というところであろう。映像と音声の両方でさまざまな社会情報を入手でき、映画や音楽、芸能、スポーツなどを楽しむこともできれば、各種の講座番組や教養番組で学習・勉学もできる。しかし、テレビ視聴行動のより本質的な特質は、これといった目的や理由なしに、休息時に、あるいは他の行動をしながら見流し、聞き流しをしたり、また、寂しさを紛らすためにテレビをつけておくということも可能であるところに求めることができよう。

こうしたことは、テレビ視聴行動というものが、その行動に駆り立てる特定の動機や関心、興味を、そして、また、そのことを継続するための強い意志や意欲、努力、忍耐を必要としない行動であり、その行動によって他の行動が制約されるという意味での排他性が他の行動に比べると弱いことを物語っている。したがって、そうした特質をもつテレビ視聴行動から得られる満足感(欲求充足感)も当然のことながら大きくはない。テレビ視聴行動のこうした特質から、そのときにしている行動が本人にとってあまり重要なものではなかったり集中力を必要としない行動である場合や、他にすることがない場合、あるいは、本来の欲求を充足するための行動が制約ないし限定されているような状況の下で、他の行動と同時遂行が可能な行動として、あるいは、ある特定の行動と行動との間の間隙を埋めるもっとも手軽な行動としてテレビを見ることが選択されることになる。

以上に述べたようなテレビ視聴行動の一般的特質を考慮すると、高齢期におけるテレビ視聴時間に関して次のような仮説を設定することができよう。「身体的・精神的な活動能力や経済力が低いとテレビ視聴時間は長くなる」。「自由時間が多ければ(多いと感じていれば)視聴時間は長くなる」。「本来の欲求が充足されていなくて生活満足感が低いと視聴時間は長くなる」。「テレビを見ること以外の他の行動が制約ないし限定されていると視聴時間は長くなる」。「社会関係の量や頻度が少ないと視聴時間は長くなる」。

(2) 変数

身体的活動能力はADL等で測定することが考えられるが、ここでは健康満足感および後に触れる日常活動老化度で判定する。精神的活動能力の変数としては後述の心理社会的老化度を用いる。経済力の変数としては、家計水準を表す年間所得と1か月の家計費を用いる。自由時間の変数には、ふだんの日に自由に過ごす時間(分)を用いる。生活満足感に関連する変数としては、生活全般に対する満足感、老後生活観、幸福感尺度であるアフエクト・バランス尺度を用いる。テレビを見ること以外の他の行動が制約ないし限定されていることの判定には、自由時間を使って自分のしたいことをしようと思ってもできない理由として、自由時間が少ないこと、健康や体力が十分ではないこと、経済的余裕がないこと、精神的ゆとりがないこと、気力がないこと、仲間がいないこと、機会がないこと、周囲の目が気になること、したいことがないこと、といった9つの変数を用いる。社会関係の量や頻度に関しては、便宜上、世帯形態と上で述べた仲間がいないことを取り上げた。以上の変数に加えて、性や年齢、学歴(就学年数)、職の有無といった一般的な人口学的・社会的属性を変数としてテレビ視聴時間を規定している要因を探りながら上述の仮説を検証することとする。

高齢者はどのような番組を好んで見ているかという番組選好に関しては、提示した24種類の番組を主成分分析によって類型化し、その主成分得点を番組選好度指数とする。そして、それと視聴時間の関係を見ることとする。

後に示すように、所得と生活費は、調査票では階級区分した選択肢を用意して回答を求めたのでカテゴリ変数であるが、各階級の間中値を用いて数値変数に置き換えて分析に用いる。自由時間や生活満足感、健康満足感に関しては、それぞれ1項目の質問に対して4～5の選択肢を提示して回答を求めた。老後生活観尺度と、アフエクト・バランス尺度、主観的老化度尺度は、先行する諸研究を基に筆者がこれまでに作成、使用してきたもので

あり(小田, 1992)、以下に示すような項目で構成されている。括弧内の α はクロンバックの信頼性係数(内部一貫性)で、今回の調査によって得られた数値である。なお、アフェクト・バランス尺度は、ポジティブ・アフェクトとネガティブ・アフェクトが互いに独立(無相関)であることが知られている。今回の調査結果からは、両者間に有意な相関が認められた。しかし、それは極めて低い相関である。また、肯定的老後生活観と否定的老後生活観とは相互に逆相関の関係が認められ、日常活動老化度と心理社会的老化度とは高い順相関が認められた。このあたりの詳細に関しては第 4 章であらためて触れることにする。

老後生活観尺度の項目(各項目に 3 ~ 1 を配点する 3 件法)

肯定的老後生活観 ($\alpha = 0.889$)

1. 今が、自分の人生でいちばん幸せな時だ
2. 若い時とくらべて、今やっていることは、おもしろい
4. 今の生活に満足している
5. 今は余生を楽しんでいるという感じをもっている
6. 年をとることは若いときに考えていたよりはよいものだ
7. 自分の人生をふりかえてみて、まあ満足といえる
8. 求めていたことを、だいたい手に入れることができた
9. やりたいと思ったことは、たいてい果たすことができた

否定的老後生活観の項目 ($\alpha = 0.740$)

1. すること、なすことが変わりばえせず、退屈だ
2. 私は年をとったと感ずるし、少し疲れている
3. 同年輩の人たちに比べて、ずいぶん馬鹿なことをしてきた
4. 今の生活に不幸せなことがある
5. 悲しいことがたくさんある
6. 不安(心配)に思うことがたくさんある
7. 年はとりたくないものだ
8. 何ごととも年相応(としそうおう)が一番だ
9. 老後の生活ってこんなものだろう

アフェクト・バランス尺度の項目(各項目に 4 ~ 1 を配点する 4 件法)

ポジティブ・アフェクト ($\alpha = 0.843$)

1. 何かを成し遂げたうれしさを感じた
2. 物事が自分の思い通りになった気分
3. 人から尊敬・大事にされている気分
4. 自分がしたことがほめられて自慢の気分
5. 何かに熱中・夢中・興奮した気分
6. 気力が充実して力がわいてきた気分

ネガティブ・アフェクト ($\alpha = 0.837$)

1. イライラして落ち着かない気分
2. 退屈でしかたがない気分
3. 憂鬱(ゆううつ)な気分
4. 一人ぼっちでさびしいという気分
5. 誰かに批判・非難されて落ち込んだ気分
6. 何かするのが億劫(おっくう)な気分
7. 自分は不幸だという気分
8. 何となく疲れた気分

主観的老化度尺度の項目(各項目に3～1を配点する3件法)

日常活動老化度(=0.814)

1. 風呂に入るのが億劫(おっくう)になった
2. 掃除や片づけがめんどろになった
3. おしゃれや身だしなみに気をくばるのが面倒になった
4. トイレに行くのがめんどろになった
5. 布団の上げ下げやベッドの整頓が面倒になった
6. 他人とつきあうのが面倒になった
7. 以前よりも、わがままになった
8. 人と話しをするのがめんどろになった

心理社会的老化度(=0.811)

1. 以前なら感じなかったことがわずらわしくなった
2. 自分自身の感情の動きに敏感になった
3. 一度計画したことを変更することがなかなかできなくなった
4. 騒々しいと以前よりもイライラするようになった
5. 仕事や家事など手早くしなければと神経質になった
6. 愚痴(ぐち)っぽくなった
7. 昔のことをよくしゃべるようになった
8. 新しいことを覚えるのが億劫になった
9. 物を捨てるのがもったいなくて、ついしまいこむようになった
10. 最近あった出来事でも忘れっぽくなった
11. 年をとって前よりも役に立たなくなった

(3) データ

本稿で扱うデータは、神戸市在住の65歳以上の男女5,000人を対象とする郵送調査から得られたものの一部である。対象者の抽出方法や回答者の属性は第7章で述べた通りである。

3. 結果

(1) 高齢者のテレビ視聴時間

図1は、ふだん1日のうち何時間くらいテレビを見ているかを11個の選択肢を提示して尋ねた質問に対する回答の頻度分布である。図中の括弧内の数値は95%の信頼区間の上限と下限の範囲を示したもので、例えば、「8時間以上」の6.2%という点推定値は、区間推定値では5.28%(=6.2-0.92)から7.14%(=6.2+0.92)の範囲の数値であるということである。

「全く見ない」を含めて「1時間以内」という人はわずかである。高齢者の90%以上がテレビを一日2時間以上見ており、6時間を超える人も約20%を占めている。その中には8時間以上見ている人もいる。最も多いのは「3時間以内」であり、全体の約20%を占めている。次いで「4時間以内」と「5時間以内」がそれぞれ17%程度である。約半数は4時間以上見ていることになる。

この頻度分布の各選択肢は概ね1時間ごとの連続する階級区分になっているので、以後は、「全く見ない」は0分に、30分以内は30分に、1時間以内は60分に、というようにそれぞれの選択肢を分単位の数値に置き換え(8時間以上は9時間とする)、それを視聴時間とする。これをもとに平均視聴時間を算出すると248.3分(4時間8分)であり、「全く見

ない」という人を除くと251.6分(4時間11分)である(後掲の表4)。

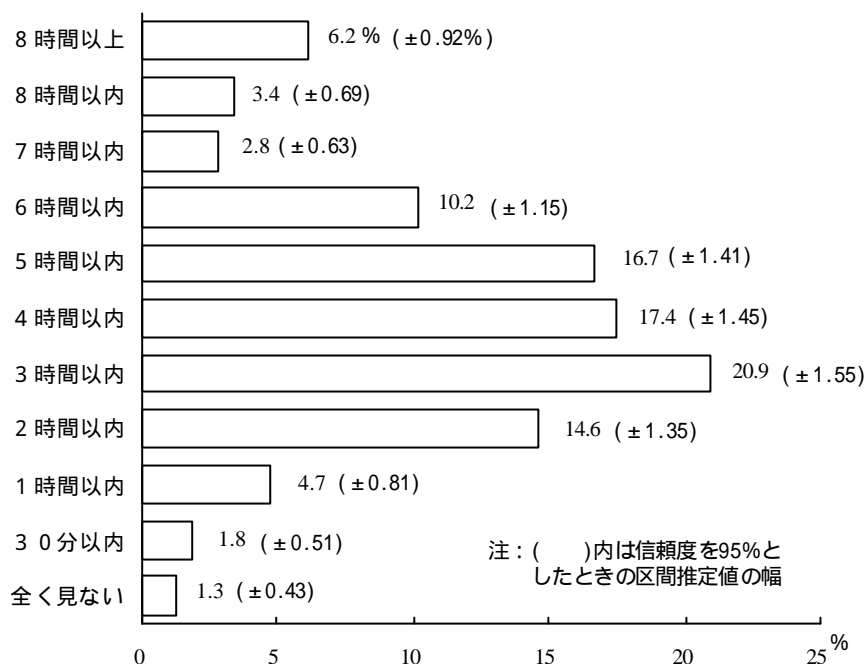


図1 . テレビ視聴時間の頻度分布(2,615人)

(2) カテゴリ変数からみた高齢者のテレビ視聴時間

人口学的・社会的属性別に平均時間を見たのが、図2と図3である。

性別では女性の方が視聴時間が長く、年齢別では80歳未満までは年齢が上がるほど視聴時間が増加し、80歳以上になると減少している。この結果は、先に見た社会生活基本調査の - 女性の方が、そして年齢が高くなるほどマスメディア志向行動の時間が長くなるという - 結果とは異なっている。おそらく、社会生活基本調査ではテレビ・ラジオ・新聞・雑誌を一括しているために、テレビ以外のマスメディア志向行動の影響が、この調査の結果との違いに反映されているものと思われる。

世帯形態別では単身世帯の高齢者の視聴時間が顕著に長く、学歴別では学歴が高くなるほど視聴時間が減少している。職の有無別では、有職者は無職者に比べて1時間ほど視聴時間が短い。家計水準別では、世帯の年間所得による違いが明瞭である。400万円未満の世帯と400万円から1,200万円未満の世帯、1,200万円以上の世帯の3つのグループに分かれており、所得が高くなるほど視聴時間が減少している。

高齢者のテレビ視聴時間は、そうした人口学的・社会的属性によって異なるだけでなく、生活意識によっても異なっている(図4)。自由時間が多くあると感じている人ほど視聴時間が長く、自分の健康状態や生活全般に対する不満足感が強い人ほど視聴時間が長い。

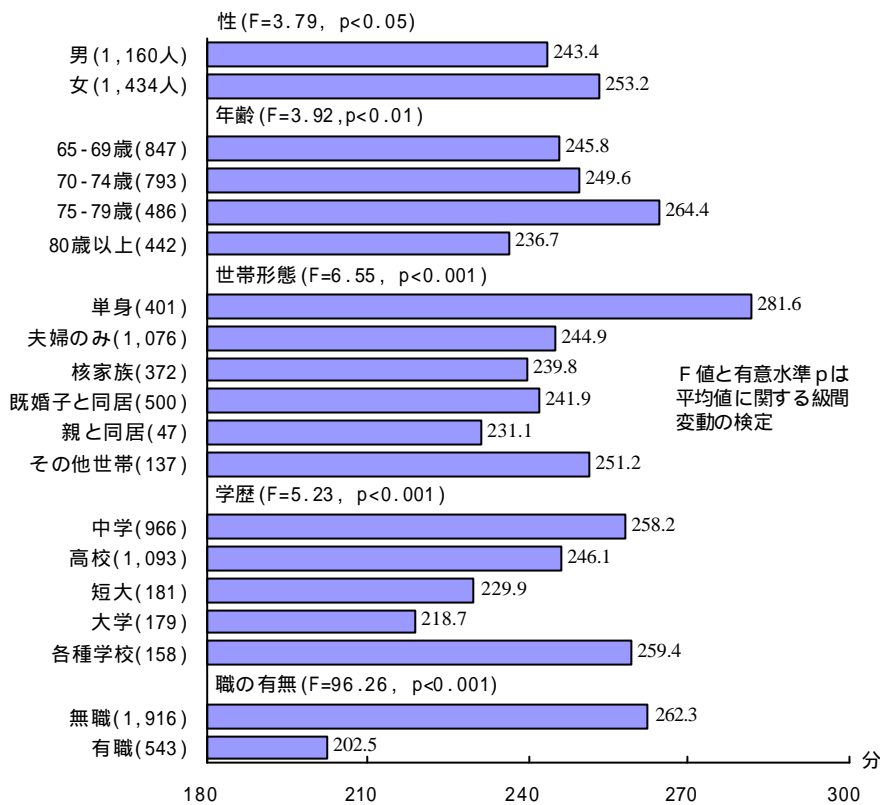


図 2 . 視聴時間の属性別平均値

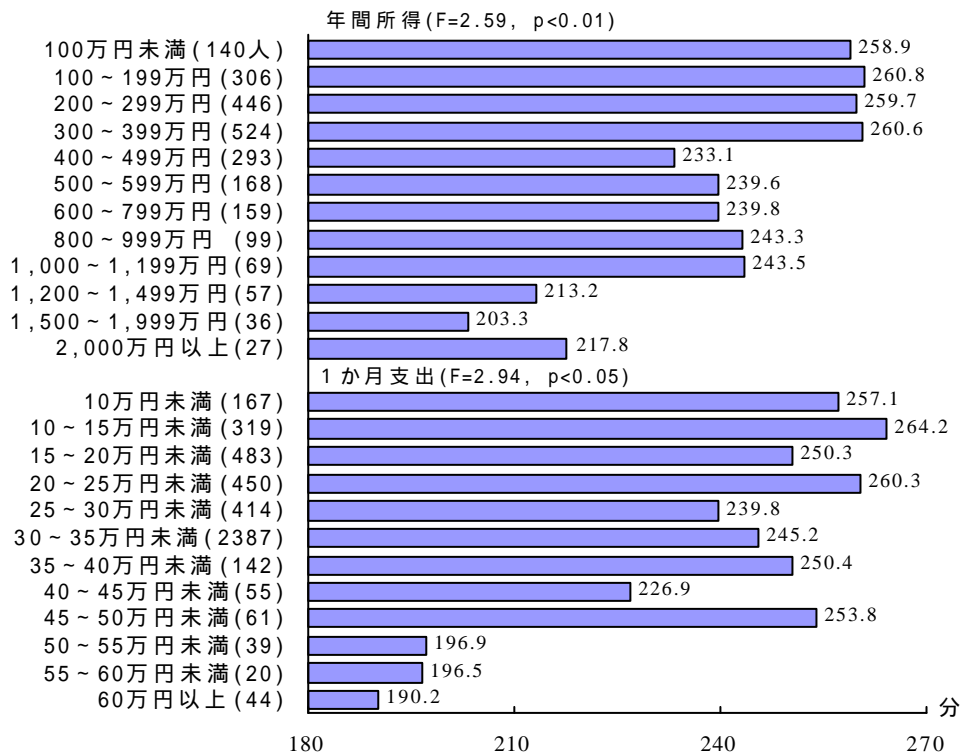


図 3 . テレビ視聴時間の家計水準別平均値

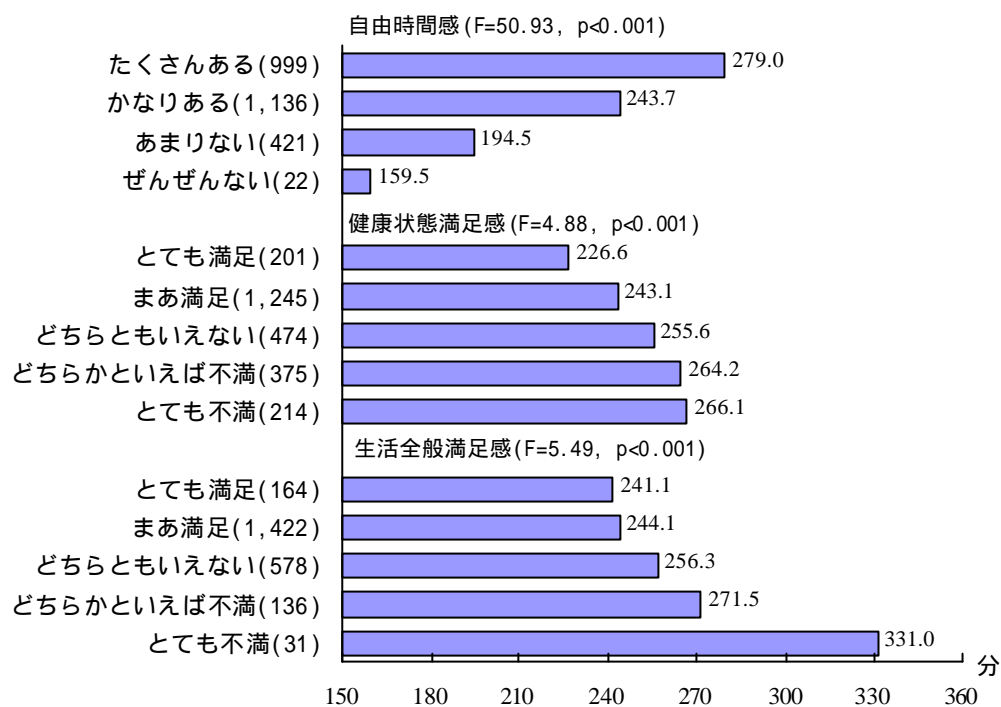


図4 . テレビ視聴時間の生活意識別平均値

(3) 数値変数から見た高齢者のテレビ視聴時間

表4は、数値変数とテレビ視聴時間との相関係数である。相関係数の数値自体は大きくはないが、多くの変数がテレビ視聴時間と有意な相関を示している。

ここでの「年齢」は、図2でみた5歳階級区分のカテゴリ変数としてではなく、回答者の年齢をそのまま用いている。「年齢」が有意な相関を示していないのは、80歳以上の視聴率の低さが、80歳未満までにみられるように年齢が上がれば視聴時間が増加するという関係を攪乱したために、全体として年齢と視聴率の関係が線形関係ではなくなったからである。ちなみに、80歳以上の回答者を除く2,126人に関しては、相関係数が0.58で有意確率は0.009である。

「学歴」に関しては5区分とは別に質問した小学校以来の通算就学年数を用いている。この年数には、通信制の学校での就学年数を含んでいるが、ラジオやテレビの教育講座あるいは大学等の公開講座での学習年数は含んでいない。負の有意な相関が示されていることから、就学年数が長ほどテレビ視聴時間は短いということになる。

「年間世帯所得」と「1か月支出」に関しては、階級区分された選択肢の金額の中間値を用いた。たとえば、300～399万円が選択されている場合は350万円とした。ただし、所得に関しては上限と下限は選択肢の金額をそのまま用い、支出に関しては、下限は選択肢の金額をそのまま用いたが、上限は、各選択肢の中間値が3万円刻みになることから63万円とした。所得、支出ともに視聴時間と負の有意な相関がみられる。家計水準が高いほど視聴時間が短いということになる。

取り上げた変数の中では「自由時間」が正の高い相関を示していることが目立つ。この

自由時間は、普段の日に睡眠、食事の準備・料理、買い物、食事、食事の片づけ、掃除、風呂の準備、入浴にどれくらいの時間を使っているかを分単位での記入を求めた質問と並べて尋ねた「自由に過ごす時間」である。自由に過ごす時間が長いほどテレビの視聴時間が長いということである。

表4．数値変数とテレビ視聴時間との相関係数

	平均 値	標準 偏差	N (人)	相関 係数	有意 確率	N (人)
テレビ視聴時間(分)	248.3	127.8	2,615	1.000	-	2,615
年齢(歳)	73.6	6.3	2,682	-0.025	0.203	2,568
就学年数(年)	10.4	2.8	2,575	-0.088	0.000	2,472
自由時間(分)	390.2	223.9	2,036	0.253	0.000	1,982
年間世帯所得(万円)	450.1	359.9	2,404	-0.089	0.000	2,324
1か月支出(万円)	25.0	11.4	2,515	-0.089	0.000	2,432
自由時間無い†	0.098	0.3	2,732	-0.158	0.000	2,615
健康・体力不十分†	0.266	0.4	2,732	0.049	0.012	2,615
経済余裕無い†	0.116	0.3	2,732	0.065	0.001	2,615
精神的ゆとり無い†	0.055	0.2	2,732	-0.027	0.171	2,615
気力無い†	0.113	0.3	2,732	0.096	0.000	2,615
仲間いない†	0.081	0.3	2,732	0.067	0.001	2,615
機会無い†	0.056	0.2	2,732	0.006	0.748	2,615
周囲の目が気になる†	0.008	0.1	2,732	-0.014	0.480	2,615
したいことがない†	0.043	0.2	2,732	0.039	0.047	2,615
ポジティブ・アフェクト	13.1	4.5	2,144	-0.089	0.000	2,090
ネガティブ・アフェクト	15.0	5.3	2,202	0.077	0.000	2,148
肯定的老後生活観	15.6	5.1	2,582	-0.027	0.177	2,517
否定的老後生活観	15.0	4.0	2,589	0.098	0.000	2,521
日常活動老化度	11.5	3.7	2,585	0.069	0.001	2,520
心理社会的老化度	18.8	5.6	2,619	0.031	0.120	2,553

†：自由時間を使って何かしたいことしようと思ってもできない理由で、該当する場合を1、該当しない場合を0とする2値変数。

「自由時間を使って何かしたいと思ってもできない理由」の中では、「自由時間がない」という理由がテレビ視聴時間と有意な負の高い相関を示している。「経済的ゆとりがない」、「気力がない」、「仲間がいない」、「したいことがない」といった理由もテレビ視聴時間を促進する要因になっている。この結果は、先に述べたテレビを見るという行動の特徴をよく反映しているといえる。

「アフェクト・バランス」に関しては、ポジティブ・アフェクトもネガティブ・アフェクトもともにテレビ視聴時間と有意な相関を示しているが、ポジティブ・アフェクトは負

の相関を、ネガティブ・アフェクトは正の相関を示している。アフェクト・バランス尺度は幸福感の測定尺度であるから、幸福感の高い人は、そうではない人よりもテレビ視聴時間は短く、幸福感の低い人は、そうではない人よりもテレビ視聴時間が長いということになる。

「老後生活観」に関しては「否定的老後生活観」がテレビ視聴時間と正の有意な相関を示しているが、「肯定的老後生活観」とテレビ視聴時間との関係は有意ではない。老後生活観が否定的な人ほどテレビ視聴時間が長いということになる。

「主観的老化度」に関しては、「日常活動老化度」がテレビ視聴時間と有意な正の相関関係にある。「日常活動老化度」の高い人ほどテレビの視聴時間が長いということになる。

表5は、後の重回帰分析のためにカテゴリ変数をダミー変数に変換してテレビ視聴時間との相関関係を見たものである。

表5 . ダミー変数の視聴時間との相関係数

	平均 値	標準 偏差	N (人)	相関 係数	有意 確率	N (人)
テレビ視聴時間(分)	248.3	127.8	2,615	1.000	-	2,615
性別(男=1, 女=0)	0.4	0.5	2,709	-0.038	0.052	2,594
職の有無(有=1, 無=0)	0.2	0.4	2,556	-0.194	0.000	2,459
単身世帯	0.2	0.4	2,636	0.110	0.000	2,533
夫婦のみ	0.4	0.5	2,636	-0.031	0.121	2,533
核家族世帯	0.1	0.4	2,636	-0.032	0.112	2,533
既婚子と同居	0.2	0.4	2,636	-0.029	0.140	2,533
親と同居	0.0	0.1	2,636	-0.020	0.318	2,533
自由時間たくさんある	0.4	0.5	2,677	0.189	0.000	2,578
自由時間かなりある	0.4	0.5	2,677	-0.034	0.081	2,578
自由時間あまりない	0.2	0.4	2,677	-0.187	0.000	2,578
健康とても満足	0.1	0.3	2,591	-0.053	0.008	2,509
健康まあ満足	0.5	0.5	2,591	-0.048	0.016	2,509
健康不満	0.1	0.4	2,591	0.049	0.014	2,509
健康とても不満	0.1	0.3	2,591	0.040	0.043	2,509
生活とても満足	0.1	0.3	2,400	-0.019	0.371	2,331
生活まあ満足	0.6	0.5	2,400	-0.055	0.008	2,331
生活不満	0.1	0.2	2,400	0.043	0.039	2,331
生活とても不満	0.0	0.1	2,400	0.074	0.000	2,331

カテゴリ数が3つ以上のカテゴリ変数をダミー変数に変換する際に取り除かれたカテゴリは、世帯形態に関しては「その他の世帯」、自由時間意識に関しては「自由時間は全くない」、健康満足感と生活満足感に関しては「どちらともいえない」である。

有意確率(危険水準)10%未満($p < 0.1$)に着目すると、テレビ視聴時間に促進的に作用す

る要因は、単身世帯であること、自由時間がたくさんあると感じていること、自分の健康に不満感を持っていること、生活全般に不満を感じていることであり、阻害的に作用している要因は、男であること、有職であること、自由時間がかなりある、あるいはあまりないと感じていること、自分の健康に満足していること、生活全般に満足していることである。この結果は、当然のことながら、先にカテゴリ変数でみた場合と同じであるが、相関係数の大きさに着目すると、促進要因の中では単身世帯であることと自由時間がたくさんあると感じていることの2つが、阻害要因の中では有職であることと自由時間があまりないと感じていることの2つがテレビの視聴時間と相対的に強い関係があることがわかる。

以上、テレビ視聴時間に影響を与えていると思われる諸要因を個別に見てきたが、それらの結果は、ある特定の個別要因とテレビ視聴時間との間に別の要因が介在していないことを前提にしている。したがって、他の要因が介在している場合には、そうした個々の相関は、それ自体は事実ではあるが、いわば見かけの相関である。

そこで、以下では、これまで触れてきた諸要因を全て用いて重回帰分析を行い、あらためてテレビ視聴時間に影響を与えている要因を検討することにする。その場合、既に述べたように、カテゴリ変数に関しては、(カテゴリ数 - 1)個のダミー変数を用いる。

(4) テレビ視聴時間の重回帰分析

表6は、3つのモデルそれぞれに関して、投入するFの確率を0.05以下、除去するFの確率を0.1以上として変数増減のステップワイズ法(stepwise forward regression)による重回帰分析を行ったときの最終ステップの結果である。

モデル1は人口学的・社会的属性と自由時間で高齢者のテレビ視聴時間を説明するモデルであり、モデル2は態度・意識変数だけで説明するモデルである。そして、モデル3は、その両方で高齢者のテレビ視聴時間を説明するモデルである。

モデル1による分析からは、高齢者のテレビ視聴時間は、「年齢」があがるほど、そして、「就学年数」が長いほど短くなり、「単身世帯」であることや「自由時間」が多いほど長くなるのがわかる。そして、このモデルでの他の要因はテレビ視聴時間に有意な影響を与えていない。

モデル2では、たくさんにしるかなりにしる「自由時間があると感じている」人ほど、「生活全般に対して不満感がある」人ほど、何かしようと思ってもできない理由を「気力がないから」と考えている人ほど、そして、「老後生活観が否定的」である人ほどテレビ視聴時間が長く、「ポジティブ・アフェクトが高い」(幸福感を強く感じている)人ほど、「心理社会的老化度を強く意識している」人ほどテレビ視聴時間が短くなるのがわかる。

心理社会的老化度は、単独でみた場合はテレビ視聴時間に有意な影響を与えていなかった(明確な正負の関係が認められなかった)要因である。心理社会的老化度が高いとテレビの視聴時間が短くなるというのは解釈が難しい。心理社会的老化度が高くなると、テレビも見たくない、あるいはテレビを見ることにも関心・興味がない、テレビを見ても面白く感じないということの反映とも考えられるが、いずれにしても、この結果は仮説の一端を反証するものといえる。

なお、このモデルでは、主観的健康感やその他の態度・意識変数は有意な影響を与えていない。

表6．テレビ視聴時間の重回帰分析（ステップワイズ法による最終解）

	平均値	標準偏差	N	モデル 1				モデル 2				モデル 3				
				B		有意確率	偏相関係数	B	有意確率	偏相関係数	B	有意確率	偏相関係数			
テレビ視聴時間（分）	252.381	123.049	1,323													
性別（男）	0.509	0.500	1,323													
年齢（歳）	72.364	5.624	1,323	-1.543	-0.071	0.009	-.072									
職の有無（有職）	0.243	0.429	1,323	-43.046	-0.150	0.000	-.142									
就学年数（年）	10.864	2.825	1,323	-4.149	-0.095	0.000	-.099									
単身	0.132	0.338	1,323	40.130	0.110	0.000	.116									
夫婦のみ	0.468	0.499	1,323													
核家族世帯	0.169	0.375	1,323													
既婚者と同居	0.166	0.372	1,323													
親と同居	0.026	0.158	1,323													
年間世帯所得（万円）	487.113	370.062	1,323													
1か月支出（万円）	26.676	11.063	1,323													
自由時間（分）	400.994	223.979	1,323	0.114	0.208	0.000	.200					0.080	0.145	0.000	.122	
自由時間たくさんある	0.387	0.487	1,323					90.946	0.360	0.000	.259	56.075	0.222	0.000	.137	
自由時間かなりある	0.442	0.497	1,323					45.368	0.183	0.000	.136	27.264	0.110	0.005	.078	
自由時間あまりない	0.166	0.372	1,323													
健康とても満足	0.078	0.268	1,323													
健康まあ満足	0.503	0.500	1,323													
健康不満	0.157	0.364	1,323													
健康とても不満	0.079	0.270	1,323													
生活とても満足	0.059	0.236	1,323													
生活まあ満足	0.668	0.471	1,323													
生活不満	0.051	0.219	1,323					33.183	0.059	0.028	.061	34.890	0.062	0.018	.065	
生活とても不満	0.011	0.102	1,323													
自由時間無い†	0.109	0.312	1,323													
健康・体力不十分†	0.252	0.434	1,323													
経済余裕無い†	0.120	0.325	1,323													
精神的ゆとり無い†	0.063	0.243	1,323													
気力無い†	0.112	0.315	1,323					24.224	0.062	0.024	.062	24.428	0.063	0.021	.064	
仲間いない†	0.089	0.285	1,323													
機会無い†	0.070	0.254	1,323													
周囲の目が気になる†	0.008	0.091	1,323													
したいことがない†	0.042	0.201	1,323													
ポジティブ・アフェクト	13.172	4.411	1,323					-2.051	-0.074	0.006	-.076	-1.934	-0.069	0.008	-.073	
ネガティブ・アフェクト	14.767	5.179	1,323													
肯定的老後生活観	16.441	4.555	1,323													
否定的老後生活観	15.377	3.126	1,323					6.174	0.157	0.000	.130	5.521	0.140	0.000	.120	
日常活動老化度	11.777	3.310	1,323													
心理社会的老化度	19.502	4.528	1,323					-2.855	-0.105	0.001	-.088	-2.394	-0.088	0.006	-.075	
常数 (constant)				368.478		0.000		180.487		0.000		362.573		0.000		
重相関係数 (R)					0.330				0.329				0.400			
調整済み R 2乗					0.106				0.104				0.152			
赤池情報基準量 (AIC)					12593				12598				12530			
Mallows の予測基準量					6.871				1.028				0.492			
分散分析				平方和	自由度	平均平方	F値	平方和	自由度	平均平方	F値	平方和	自由度	平均平方	F値	
回帰				21808	5	43614	32.2	21676	7	3097	22.8	32086	13	2468	19.2	
残差				178358	1317	135		178490	1315	136		168080	1309	128		
全体				200166	1322			200166	1322			200166	1322			

注：Bは非標準化係数、 は標準化係数。平方和および平均平方は実際の値の100分の1で表示。分散分析のF値の有意水準はいずれも p<0.001
† は表4の注に同じ。

モデル3では、モデル1とモデル2で抽出された要因が全て含まれ、モデル1では有意な係数ではなかった性別（男）が新たに付け加わっている（男であることがテレビ視聴時間を短くしている）。その結果、13個の要因から構成されるモデルとなった。このモデル3が、モデル1および2よりも改善されたモデルであることは、表6の重相関係数や情報基準量、予測基準量の変化に示されている（AICおよびMallowsの予測基準量は数値が小さいほど観測データとの適合度が高いことを示す）。

しかし、それだけ多くの要因が取り込まれても、重相関係数および残差平方和の大きさからいって、このモデルの精度は高くない。したがって、残念ながらこのモデルで高齢者

のテレビ視聴時間を正しく予測することはできない。しかし、また、このことは、高齢者のテレビ視聴時間を左右している要因が想像されるよりは複雑多様であることを示唆するものである。そして、以上の分析は、そうした要因の一端を明らかにしえたと考える。

(5) テレビ視聴時間と高齢者が好んでみている番組

ところで、先に見た高齢者のテレビ視聴時間と好んでみている番組との関係はどのようなものであろうか。常識的に考えられることは、テレビ視聴時間が長い人は、映画や長時間ドラマ、ニュース・ショーのような一番組の放映時間が長い番組を好んでみているか、あるいはテレビを見ること自体が目的で番組内容に関わりなく様々な番組を長時間にわたって見続けているかのいずれかであろう。前者の場合であれば、テレビ視聴時間と番組との間に何らかの関係が認められるであろうし、後者の場合であれば両者の間には何らの関係も認められないことになるが、そうした関係を明らかにする際に問題になることは、テレビ番組をどのように分類するかということである。

周知のように、日本では、今日、多くのチャンネルで多種多様な番組を提供している。そして、受信形態(地上波、衛星波)や契約形態(通常、CATV)なども一様ではない。したがって、そうしたことも含めて考えれば、実際に放映されているテレビ番組を適切に類型化することは、そう容易なことではない。しかし、ここでの目的はテレビ番組を類型化すること自体が目的ではないので、ごく一般的な表現を用いて番組内容を24種類に分類し、それらについて、「好んで、よく見る」、「時々(たまに)見る」、「ほとんど(めったに)見ない」、「見たことがない」の4件法で回答を求めるという簡便な方法で高齢者がどのような番組を見ているかを探ることにした。その結果を「好んで、よく見る」と「時々(たまに)見る」の合計選択率の大きい順に並べたのが図5である。

「よく見る」割合が50%を超える番組は、「ニュース」、「報道特集」、「日本の連続ドラマ」の3つである。これらは、「時々見る」の割合を加えるとほぼ80%あるいはそれ以上に達する。これらに次いで、「よく」あるいは「時々」見る割合が大きい番組は、「ニュース解説」、「特定のキャスターによる夜のニュース番組」、「健康や医療、栄養に関する番組」、「スポーツの実況番組」、「歌謡曲・流行歌の番組」である。いずれも70%を超えている。

これに対して、「よく見る」の割合が10%に満たない番組は、「外国語講座」、「語学以外の講座番組」、「科学・技術番組」、「外国の連続ドラマ」、「クラシック音楽の番組」の5つである。この5つは、「時々見る」の割合を合わせても50%に満たない。

以上の結果は、テレビ番組に関する高齢者に特徴的な選好傾向なのか年齢に関わりない一般的な傾向なのか、あるいはそれぞれの番組数や放映時間の反映なのかは、いまここでは判断できない。しかしながら、高齢者の大多数が好んで見る番組がニュース番組や健康・医療・栄養に関する番組であり、講座関係の番組や科学・技術番組を好んでよく見る高齢者はごくわずかであることが明らかにされた。

ところで、取り上げた24種類の番組を個々に検討することも興味あるところであるが、ここではそれらをより少数の類型に集約するために、上で述べた選択肢それぞれに4～1点を与えて主成分分析を行った。その結果、5つの主成分が抽出された。表7は、バリマックス法で直交回転した後の主成分行列である。24種類の番組それぞれは各主成分に比較

的明瞭に分属していることが見て取れる。

表7. 高齢者が好んでみるテレビ番組の主成分分析

	平均値	標準 偏差	N (人)	共通性	主成分				
報道特集	3.35	0.85	1,929	0.707	0.800				
ニュース解説	3.13	0.92	1,929	0.679	0.777				
ニュース	3.78	0.57	1,929	0.535	0.694				
特定のキャスターによる夜のニュース番組	3.11	0.99	1,929	0.524	0.672				
政治座談会	2.57	1.07	1,929	0.511	0.596		0.337		
スポーツの実況番組	3.03	1.05	1,929	0.530	0.581				#####
バラエティ番組	2.59	0.96	1,929	0.697		0.832			
落語や漫才の番組	2.71	0.97	1,929	0.572		0.731			
ワイドショー番組	2.46	1.00	1,929	0.501		0.649			
歌謡曲・流行歌の番組	2.88	1.01	1,929	0.445		0.646			
クイズ番組	2.68	0.99	1,929	0.395		0.531			
日本の連続ドラマ	3.19	1.00	1,929	0.377		0.407		0.378	
語学以外の講座番組	1.39	0.72	1,929	0.690			0.819		
外国語講座	1.26	0.60	1,929	0.606			0.770		
科学・技術	1.65	0.92	1,929	0.545			0.685		
海外事情(外国紹介)の番組	2.29	1.10	1,929	0.554	0.419		0.518		
クラシック音楽の番組	2.03	0.99	1,929	0.413			0.414		0.366
外国の映画	2.10	1.05	1,929	0.728				0.775	
日本の映画	2.29	1.00	1,929	0.651				0.768	
外国の連続ドラマ	1.80	0.93	1,929	0.547				0.695	
日本の長時間ドラマ	2.77	1.03	1,929	0.586		0.346		0.660	
健康・医療・栄養に関する番組	2.92	0.96	1,929	0.641					0.690
料理番組	2.59	1.04	1,929	0.578		0.353			0.663
一般教養番組	2.47	0.98	1,929	0.665	0.358		0.387		0.618
				固有値	3.56	3.00	2.67	2.51	1.93
				寄与率	14.85	12.51	11.11	10.47	8.06
				累積寄与率	14.85	27.36	38.47	48.94	57.00

注：共通性は主成分抽出後の数値。負荷量はバリマックス回転後の数値。
絶対値0.3未満の負荷量は記載していない。

各主成分は、それらを構成する番組内容からみて、それぞれ「社会情報番組」、「娯楽番組」、「学習教養番組」、「映画番組」、「実用番組」を表す主成分とみなすことができる。

各主成分の寄与率(取り上げた変数の数÷固有値)に見るように、とくに大きな固有値を示す主成分はなく、5つの主成分それぞれが全体の情報量(すべての変数の分散の合計)のそれぞれ10%前後ずつを説明していることがわかる。累積寄与率が示すように、5つの主成分全体で元の情報の約60%が説明されている。言い換えると、約40%の情報量が失われることになるので全体の説明力からいえば必ずしも満足のいくものではないが、次のような方法により24種類の番組を5つの番組類型に縮約して高齢者のテレビ視聴時間と高齢者が好んでみているテレビ番組との関係を分析できる利点は大きい。

主成分分析は、変数値(回答結果)に応じて各主成分ごとの正確な得点(主成分得点)を各回答者に与える。したがって、ある主成分の得点が高ければ、その人はその主成分が表す種類の番組を好んで見ていることになる。主成分得点は平均0、分散1に標準化されているから、主成分得点の正負の記号でその人が回答者全体の中で、その種の番組をよく見ているか否かを容易に知ることができる。また、軸を直交回転した場合には、各主成分得点

は互いに無相関であるから、その主成分で表される番組の視聴傾向を他の主成分で表される番組の視聴傾向の影響を考慮することなく把握することができる。もし、主成分得点の正負の記号に着目して5種類の番組に関して高齢者の視聴傾向を類型化しようと思えば、5種類の正負の組み合わせとして2の5乗すなわち32の類型を得ることができるが、ここでは各主成分得点とテレビ視聴時間との相関係数を算出することによって両者の関係を見ることにする。得られる相関係数が有意でなければテレビ視聴時間と番組選好度とは関連がないことになり、有意であれば両者の間には何らかの関係が存在することになる。

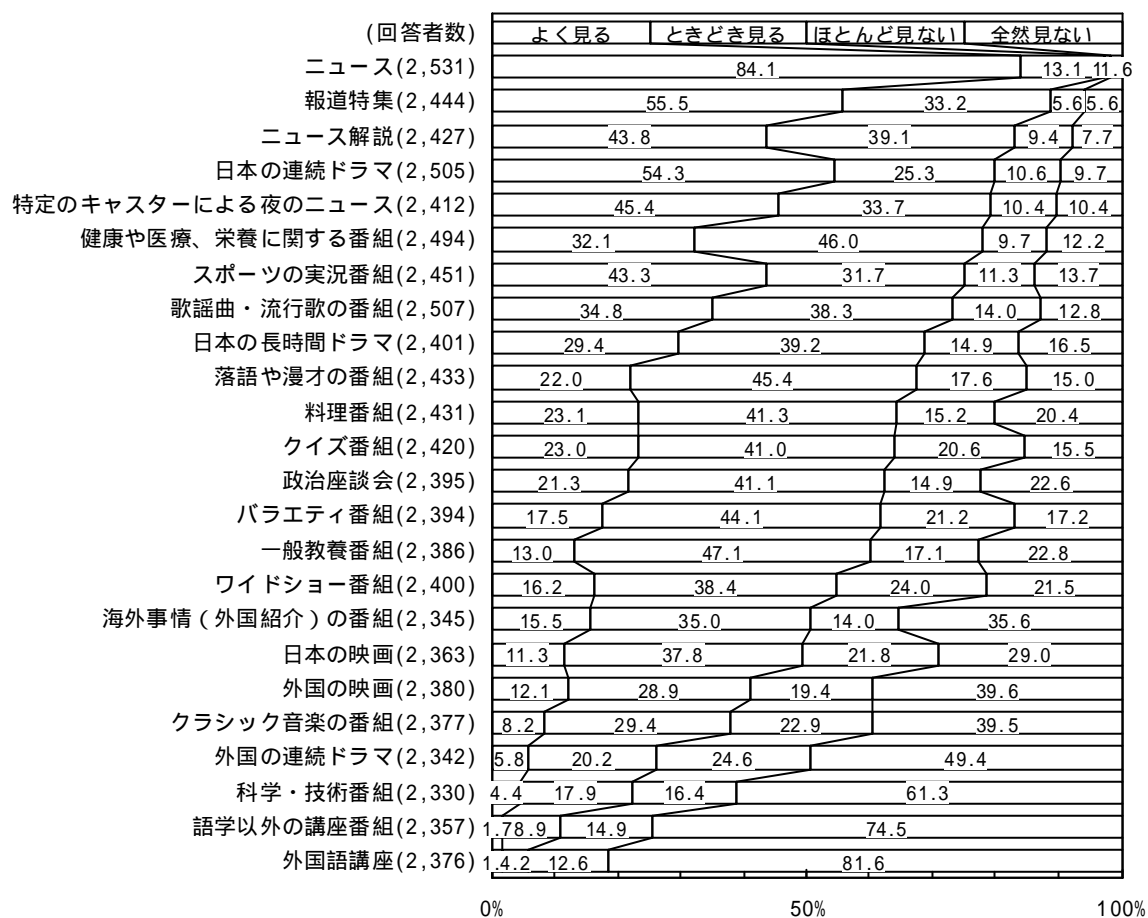


図5 . 高齢者が好んでみるテレビ番組

表8に明らかなように、いずれの主成分得点もテレビ視聴時間と有意な相関を示している。相関係数自体は大きいものではないが、高齢者のテレビ視聴時間と番組選好とは明らかに関連が認められるということである(正確には、関連がないとはいえない)。テレビ視聴時間と相対的に高い正の相関にある主成分得点に着目すると、テレビを長時間見ている高齢者が好んでみている番組は「娯楽番組」と「映画番組」であることがわかる。これに対して、「学習教養番組」とは負の有意な相関が示されているから、この種の番組を好んで見ている高齢者のテレビ視聴時間は、「娯楽番組」や「映画番組」を好んでみている高齢者のそれに比べて相対的に短いことがわかる。

表 8 . テレビ視聴時間と主成分得点との相関係数

	相関係数	有意確率 (両側)	N
第 主成分(社会情報番組)得点	0.087	0.000	1,868
第 主成分(娯楽番組)得点	0.260	0.000	1,868
第 主成分(学習教養番組)得点	-0.102	0.000	1,868
第 主成分(映画番組)得点	0.213	0.000	1,868
第 主成分(実用番組)得点	0.053	0.022	1,868

(6) 番組選好の要因

どのような番組を好んで見ているかは、まさに好みの問題であるので、それ以上の理由(要因)を問うことはできないともいえるが、ここでは、テレビ視聴時間の要因を分析したときと同様の変数を用いて、各主成分得点を従属変数とする重回帰分析によって番組選好の要因を探ってみた(表 9)。それぞれ重相関係数および残差平方和の大きさからいって説明モデルとしては十分とはいえないが、人口学的・社会的属性および態度・意識変数によって番組選好に明らかな違いが認められる。以下では、正確性を欠くことになるが、記述を簡略化するために、標準化(偏回帰)係数の正負の記号に着目して便宜的に促進要因と阻害要因と表現することにする。したがって、たとえば、年齢や就学年数、あるいは所得など、要因(独立)変数の標準化係数が正值であることによって、その数値が上がれば、その番組を表す主成分得点が増える場合には促進要因とみなし、その逆に、要因変数の標準化係数が負値であることによって、その数値が下がれば、その番組を表す主成分得点が増える場合には阻害要因と記述する。なお、既に述べた性別のようなダミー変数に関しては、そうであることが促進あるいは阻害要因になっているとみなすことになる。

「社会情報番組」を好んでみることを促進する要因は、「男性」、「就学年数」、「核家族世帯」、「生活全般に満足」、老後生活観に関しては肯定的にせよ否定的にせよ、その度合いが高いことである。肯定的老後生活観と否定的老後生活観は、既に述べたように相互に独立した(無相関)尺度であるから、そのいずれもが促進要因になっているということは、肯定的にせよ否定的にせよ、自らの老後生活に比較的明確な評価を下している、言い換えれば高い関心を持っていることが「社会情報番組」の選好度を高めていると考えられる。阻害的に作用しているのは、「年齢」、「既婚者と同居」、「生活全般にとっても不満」、何かしようと思ってもできない理由として「したいことがない」、そして、「日常活動老化度」である。「社会情報番組」を選好する高齢者は、男性で年齢が相対的に若く、高学歴で生活満足感が高く、老後生活に対する関心度が高く老後生活意識を強く意識していない高齢者ということになる。偏相関係数の大きさから、この種の番組はとくに男性が好んでみる番組であることがわかる。

「娯楽番組」の促進要因は、何かしようと思ってもできない理由として「仲間がいない」こと、「心理社会老化度」であり、阻害要因は、「男性」、「就学年数」、「単身者」、「1か月支出」、「日常活動老化度」である。「娯楽番組」を選好する高齢者は、性別に関わりなく、仲間が少なく心理社会的老化度が高い高齢者であり、逆に、男性、高

学歴、単身者、高い家計水準、高い日常活動老化度の高齢者は「娯楽番組」を選好する割合が低いということになる。

表9. 好んでみるテレビ番組の重回帰分析（ステップワイズ法による最終解の標準化係数）

	社会情報番組			娯楽番組			学習教養番組			映画番組			実用番組		
	有意確率	偏相関係数		有意確率	偏相関係数		有意確率	偏相関係数		有意確率	偏相関係数		有意確率	偏相関係数	
性別（男）	.260	.000	.275	-.142	.000	-.140	.116	.000	.119				-.487	.000	-.474
年齢（歳）	-.106	.000	-.112							-.157	.000	-.152			
職の有無（有職）				-.141	.000	-.136	.299	.000	.299	-.073	.021	-.069	-.101	.000	-.106
就学年数（年）	.082	.003	.088	-.075	.014	-.073	.079	.005	.084				.139	.000	.157
単身															
夫婦のみ															
核家族世帯	.094	.000	.104												
既婚者と同居	-.102	.000	-.109												
親と同居															
年間世帯所得（万円）													-.090	.000	-.105
1か月支出（万円）				-.117	.000	-.112				.075	.012	.075			
自由時間（分）													-.067	.019	-.070
自由時間たくさんある															
自由時間かなりある															
自由時間あまりない															
健康とても満足							.063	.023	.067						
健康まあ満足													.064	.017	.071
健康不満															
健康とても不満															
生活とても満足															
生活まあ満足	.076	.006	.082												
生活不満															
生活とても不満	-.059	.027	-.066												
自由時間無い+							.064	.019	.070	-.088	.004	-.086			
健康・体力不十分+													.078	.006	.081
経済余裕無い+										.080	.007	.080			
精神的ゆとり無い+													.053	.038	.062
気力無い+															
仲間いない+				.092	.001	.095									
機会無い+															
周囲の目が気になる+															
したいことがない+	-.140	.000	-.154												
ポジティブ・アフェクト							.091	.001	.098	.074	.013	.074	.090	.000	.105
ネガティブ・アフェクト															
肯定的老後生活観	.111	.000	.115												
否定的老後生活観	.124	.000	.118												
日常活動老化度	-.180	.000	-.167	-.142	.000	-.110							-.135	.000	-.147
心理社会的老化度				.104	.007	.081	-.103	.000	-.110						
重相関係数（R）		.482			.307			.408			.218			.559	
調整済みR ² 乗		.225			.089			.162			.043			.307	
赤池情報基準量(AIC)		-363			-.190			-.132			-.114			-.408	
Mallowsの予測基準量		15.9			0.02			6.4			3.6			11.0	
分散分析	平方和	自由度	平均平方	平方和	自由度	平均平方	平方和	自由度	平均平方	平方和	自由度	平均平方	平方和	自由度	平均平方
回帰	244.7	11	22.2	98.7	7	14.1	199.5	7	28.5	50.7	6	8.5	354.2	10	35.4
残差	807.2	1123	0.7	947.1	1127	0.84	996.3	1127	0.9	1014.3	1128	0.9	777.4	1124	0.7
全体	1052	1134		1046	1134		1195.8	1134		1065	1134		1132	1134	
F値	30.9			16.8			32.2			9.4			51.2		

注：+は表4の注に同じ。分散分析のF値は、いずれもP<0.001

「学習教養番組」の促進要因は、「男」、「就学年数」、「単身者」、「健康とても満足」、何かしようと思ってもできない理由として「自由時間がない」こと、「ポジティブ・アフェクト」であり、阻害要因は、「心理社会的老化度」である。男性、高学歴、単身者、自分の健康に満足している、幸福感の高い高齢者が好んで「学習教養番組」を見ており、心理社会的老化度が高い高齢者は、その種の番組の選好度が低いということになる。偏相関係数に見るように、促進要因の中ではとくに「就学年数」の影響力が大きい。

「映画番組」の促進要因は、「1か月支出」、何かしようと思ってもできない理由として「経済的ゆとりがない」、「ポジティブ・アフェクト」であり、阻害要因は、「年齢」、

「有職」であること、「自由時間がない」ことである。しかし、重相関係数および回帰の平方和が他の4つのモデルに比べて極端に小さく、このモデルは「映画番組」の選好を説明するには極めて精度が低いモデルであるために、以上の結果だけを報告しておく。

「実用番組」の促進要因は、「就学年数」、「健康まあ満足」、何かしようと思ってもできない理由として「健康・体力が不十分」と「経済的ゆとりがない」、「ポジティブ・アフェクト」であり、阻害要因は、「男」、「有職」、「年間所得」、「自由時間」、「日常活動老化度」である。この種の番組は女性が好んでみる番組であることが偏相関係数の大きさからうかがえるが、その理由は、この主成分を構成する番組の一つに料理番組があるからである。そして、興味あることは、健康に満足していることと、健康や体力が不十分であると意識していることとの両方が「実用番組」の促進要因になっていることである。これは、この主成分に健康・医療・栄養に関する番組が含まれているためであるが、自分の健康に満足している場合も自分の健康や体力が不十分であると意識している場合も、ともに健康に関心あることがこの種の番組の選好度を高くしているということであろう。

4. 要約と結論

大多数の高齢者は1日2時間以上テレビを見ている。平均すると約4時間であるが、約半数は4時間以上テレビを見ており、6時間以上見ている高齢者も約20%に達する。高齢者は、自由時間のかなりの部分をテレビの視聴に当てていることが、あらためて確認された。そして、高齢者のそうしたテレビ視聴時間は、自由時間の多寡や性、年齢、経済階層、学歴、職の有無、世帯形態といった人口学的・社会的属性だけではなく、健康感や生活満足感、幸福感、老後生活観など態度や生活意識によっても大きく異なっていることが明らかにされた。

重回帰モデルを用いた分析の結果からは、高齢者のテレビ視聴時間は、「単身者」であることや「自由時間」が多いほど、また、自由時間が多くあると感じているほど、そして、「生活全般に対して不満感がある」人ほど、何かしようと思ってもできない理由を「気力がないから」と考えている人ほど、「老後生活観が否定的」である人ほどテレビ視聴時間が長く、その逆に、「男性」であることや「年齢」があがるほど、そして、「就学年数」が長くなるほど、また、「ポジティブ・アフェクト」が高くなるほど(幸福感を強く感じているほど)、「心理社会的老化度」が高くなるほど短くなることが見いだされた。

以上の結果は、高齢期におけるテレビ視聴時間は、「身体的・精神的な活動能力や経済力が低いと長くなる」、「自由時間が多ければ(多いと感じていれば)は長くなる」、「本来の欲求が充足されておらず生活満足感が低いと長くなる」、「テレビを見ること以外の他の行動が制約ないし限定されていると長くなる」、「社会関係の量や頻度が少ないと長くなる」といった諸仮説を支持するものといえよう。ただし、既に述べたが、心理社会的老化度がテレビ視聴時間に阻害的に作用していることに関しては、それが仮説を反証するあらたな事実発見であるのか、それとも別の解釈が可能なのかはあらためて検討してみたい。

テレビ視聴時間は、番組選好度とも密接な関連をもっている。テレビ視聴時間が長い高

高齢者が好んで見ている番組は「娯楽番組」や「映画番組」であり(「娯楽番組」や「映画番組」を好んで見ている高齢者の視聴時間は長い)、テレビ視聴時間が短い高齢者が好んで見ている番組は「社会情報番組」である(「社会情報番組」を好んで見ている高齢者の視聴時間は短い)ということである。

テレビ視聴時間と同様に番組選好度にも生活形態や生活意識が反映されている。「社会情報番組」の選好度は、男性であること、年齢が若いほど、学歴が高いほど、生活満足感が高いほど高くなり、老化度が高くなるほど番組選好度は低下する。「娯楽番組」の選好度は、何かを一緒にする仲間が少ないことや心理社会的老化度によって促進され、逆に、男性であることや単身者であること、学歴が高くなるほど、家計水準が高いほど、日常活動老化度が高いほど「娯楽番組」の選好度は低下する。

「学習教養番組」は、男性、高学歴、単身者、自分の健康に満足している、幸福感の高い高齢者に選好されており、心理社会的老化度が高い高齢者は、その種の番組の選好度が低い。

「実用番組」は、取り上げた番組内容を反映して、女性や健康に関心が高い高齢者に選好されている。

本稿で試みた分析によって、高齢者のテレビ視聴行動の主要な部分が解明されたとともに、テレビ視聴行動を通じて、高齢期における生活の一端が明らかにされたと考える。生活全般に対する不満や気力の衰えを感じていること、老後生活観がより否定的なほどテレビ視聴時間が長くなり、幸福感が高いほど視聴時間が短くなるという結果は、分析の枠組みのところで述べたテレビ視聴行動の特質およびそうした特質に沿って設定された諸仮説が誤りではなかったことを実証するものであるが、そのことは同時に、高齢者の、あるいは高齢期におけるテレビ視聴行動に関する新たな研究課題が掘り起こされたともいえる。

高齢者の約半数は1日4時間以上テレビを見ることに当てている。もちろん、1日4時間といっても、その時間連続してテレビを見ているとはかぎらない。むしろ、午前、午後、夜のそれぞれに何分あるいは何時間か見た時間の合計であるのがふつうであろう。本稿では、その詳細は不明である。そのことについては、現在、あらためて調査しているところであるが、いずれにしても、自由時間の相当部分がテレビの視聴に当てられていることは確かである。

最新年(1996年)の社会生活基本調査によれば、65歳以上の高齢者の3次活動時間は8～9時間であるから、少なくともそのうちの半分がテレビの視聴に当てられていることになる。しかも、生活全般に対する不満感や否定的な老後生活観を抱いているほど視聴時間が長いということは、どのように理解したらよいであろうか。さまざまな解釈が可能であろうが、常識的な解釈は、何もすることがなくて家の中に引きこもってテレビばかり見ている高齢者の生活満足感や幸福感が低いのは当然であろう、あるいは、何かする気力が無くて老後生活を否定的に考えている高齢者はテレビを見るほかにはすることがないから視聴時間が長くなるのは当たり前だ、といったところであろうか。こうした解釈は、テレビ(番組)は高齢者の生活満足感や幸福感を高める効果はほとんどなく、高齢者もテレビ(番組)から得られる大きな満足感を得ようと思ってテレビを見ているわけではない、ということが前提になっている。しかし、逆に、そうした高齢者は、テレビを見ることに代わる行動を選択せずに、あるいは選択し得ないままに、テレビを長時間見ることによって不満

感や否定的老後生活観を幾分かは解消しているという解釈も可能であろう。テレビがなければ、テレビ視聴時間の長い高齢者は、その時間をどのように過ごすことになるだろうか。

かつてテレビ(受像機)は高価な耐久消費財であった。テレビ所有者宅に近隣の人々がテレビ番組を見せってもらうために出かけ、電灯が消された中で映画館よろしくそれらを鑑賞した。町内の広場や空き地に設置された街頭テレビの前には、鍵をもった町内会長が来るのを多くの老若男女が首を長くして待っていた。それから半世紀近くになる今日、テレビの世帯普及率は優に100%を超え、子どもでさえ個人用のテレビをもっていることが珍しくない時代になった。移動中の車の中ではもちろんのこと、携帯用の受像機は場所を問わずにテレビを見ることを可能にしている。

テレビを見ない人は例外的な物珍しい存在であり、テレビのない生活は考えられないというのが誰しもがもっている実感であろう。それほどにテレビは日本人の日常生活に深く浸透している。テレビの功罪についてはこれまでも種々議論されてきたが、その当否は別にして、多種多様な情報や娯楽の多くがテレビを通じて入手でき、テレビが自由時間を過ごす際のもっとも手軽な手段になっていることは疑いえない。放送形態や受信形態、受像機、番組の数や種類などハード、ソフトのあらゆる面で一層の革新が進んでいる。そのことが国民のテレビ視聴行動にどのような影響を与えるかはにわかに判断しがたいが、テレビ離れが進むということは考えにくい。そして、そうしたテレビの革新が、高齢期において身体的・精神的な活動能力や経済力が低下した場合でも、テレビが(提供する各種の番組は)、豊にとはいわないまでも高齢期の生活にながしかの効用を及ぼすことを期待してもよいかもしれない。そういう意味でも、高齢者のテレビ視聴行動に関する研究は、サクセスフル・エイジングに関する重要な研究課題の一つになると思われる。

残した課題は多い。作成した重回帰モデルの説明力は大きいものではない。したがって、高齢者のテレビ視聴時間を規定している要因の特定と、それらが高齢者のテレビ視聴時間にどのように作用しているかといった大まかな傾向を説明するモデルとしては不足がないものと考えるが、残念ながらこのモデルでは要因からテレビ視聴時間を正しく予測することはできない。高齢者のテレビ視聴時間を規定している要因は、想像されるよりも複雑多様であるということである。また、番組選好度の分析に当たっては、より詳細・適切な番組類型を用意することが必要であろう。こうした点に関する検討は、別の機会に試みることにしたい。

文 献

Baltes, Margaret M., Hans-Werner Wahland Ulrich Schmid-Furstoss (1990) . The Daily life of Elderly Germans: Activity Patterns, Personal Control, and Functional Health, *Journal of Gerontology: Psychological Sciences*, Vol.45, No.4.

Maddox (1995) . The Encyclopedia of Aging (second edition), Springer Publishing Company, New York.

小田利勝 (1992) . 高齢者の老年観の測定尺度と分析モデル」『徳島大学社会科学研究』第5号。

小田利勝 (2000) . 「高齢者の生活行動 - 神戸の高齢者を対象として - 」『人間科学研究』8巻1号、神戸大学発達科学部人間科学研究センター。

小田利勝・近藤善浩 (1992) . 「自由時間と余暇活動」『生涯学習需要と大学開放 - 生涯教育需要調査(徳島県央地区)報告書』徳島大学大学開放実践センター。

折茂 肇 (1999) . 『新老年学(第2版)』、東京大学出版会

総務庁 (2000) . <http://www.stat.go.jp/data/shakai/1.htm#05e1-1>

第10章 セカンド・マジョリティ・グループとしての 高齢者の社会観

はじめに

予想を上回るスピードで進行する人口高齢化は、高齢者を支援や扶養あるいは介護の対象としてだけでなく、あるいは、そうした対象から、政治、経済、文化、社会のすべての領域において、かつてとは比較にならないほどの影響力を及ぼす可能性を秘めた存在として浮かび上がらせることになる。

国立社会保障・人口問題研究所の将来推計人口(平成9年1月推計)に従えば、老年人口(65歳以上人口)は、高齢化が今後さらに進んだとしても、50年先の2050年においてさえ、年齢3区分別(0-14歳、15-64歳、65歳以上)人口構造におけるマジョリティ・グループになることはない。しかし、すでに1997年に老年人口は年少人口(0-14歳)を絶対的にも相対的にも上回ってマイノリティ・グループからセカンド・マジョリティ・グループになった。そして、今後はさらにその割合を増大させていくと予測されている。その結果、老年従属人口指数(15-64歳人口に対する比率)も、1999年の24.4%から2025年には46.0%に増大し、2050年には59.1%になると推計されている。

老年従属人口指数は、一般に、非生産年齢人口である老年人口を支える(扶養する)15-64歳の生産年齢人口の負担の度合いを指し示す数値とされてきた。しかし、将来もずっとマジョリティ・グループであり続ける15-64歳人口とセカンド・マジョリティ・グループになった老年人口との絶対的および相対的規模の差は、逆転することはないにしても、確実に縮小していく。このことは、老年人口が、マジョリティである15-64歳人口に従属する、あるいは扶養される人口としてマジョリティの負担をますます増大させるということだけでなく、意志決定におけるマジョリティのパートナーとしての地位・役割を獲得することになる、あるいは、マジョリティは、セカンド・マジョリティとしての老年人口をパートナーとせざるをえなくなることをも意味する。

政治の領域に関連して、有権者の中に占める老年人口の割合を考えてみよう。前述の将来推計人口を用いて20歳以上人口の中で65歳以上人口が占める割合を算出すると、1999年には21.1%であったが、2025年には33.4%となり、2050年には39.3%にまで増大する(ちなみに、1930年には、その割合は8.9%にすぎなかった)。選挙権が与えられる年齢が将来も現行の20歳以上であるとすれば、高齢者の投票行動や選挙活動が政治に与える影響は、高齢化の進行とともにますます大きくなる、あるいは無視し得なくなるということである。

従属人口として一括されてきた老年人口は、高齢化が進行する以前は、いわばサイレント・マイノリティであった。しかし、高齢化の進行とともにセカンド・マジョリティとして社会のあらゆる領域における意志決定過程に強い影響力を発揮することが可能な規模に「成長した」。よく知られているように、アメリカなどでは、すでに各種の高齢者団体が

政治や経済、宗教などさまざまな領域で活発な活動を展開しており、強力な圧力団体として政策決定に影響を及ぼしている。日本においては、まだそうした動きは顕著ではないが、セカンド・マジョリティとなった老年人口が、今後、サイレント・セカンド・マジョリティでいるのか、それともノイジー・セカンド・マジョリティとして影響力を発揮するようになるかが、高齢者の生活や生き方、ひいては高齢社会日本の将来を少なからず左右することになるといっても過言ではないであろう。そして、老年人口がそのいずれの方向に向かうかは、今日の高齢者が、日本社会やそこでの生活、生き方についてどのように考えているかにかかっているといってもよいであろう。本稿で高齢者の社会観について考察しようとするのは、そのためである。社会観という用語は幾分曖昧な使われ方をするが、本稿では、それを社会および社会生活に対する見方や考え方、意見、態度、評価、価値観等を包括する用語として用いることにする。

高齢者のそうした社会観に関連する関心は比較的早くからあり、高齢者の態度に関する研究や高齢化問題の政治経済学的研究などさまざまな領域、側面から研究されてきた(Rose, 1965 ; Fengler and Wood, 1972 ; N. E. Cutler, 1977)。それら研究に共通する主要な関心は、一貫してリベラル - 保守の次元で高齢者の社会的態度を分析することに向けられてきた(S. J. Culter, 1987)。そして、高齢者は若い世代の人間よりも保守的であり、人は年齢が上がるにつれて保守的傾向になるという一般的な見解が事実と反することや社会的、政治的な価値観に関する世代間の相違とみられていたものが、その人が置かれている、あるいはその中で過ごしてきた文化や時代といった社会的(環境)条件の違いの反映であることを明らかにしてきた(Binstock and Day, 1996)。

今日では、高齢者だからといって何ごとにも保守的あるいは権威主義的であるとか伝統や慣習を重んじるといった素朴な高齢者観は退潮していると思われるが、そうしたことも含めて、本稿では、神戸市の65歳以上の男女を対象とする郵送調査から得られた結果の一部を用いて、最近の日本における高齢者の社会観の一端と、その構造を明らかにしたい。

1. 研究の枠組みと方法

(1) 現在の老年人口

老年人口という年齢集団それ自体は、65歳以上(2001年現在で1936<昭和11>年以前の生まれ)という広い年齢の幅をもった単なる統計的集団にすぎない。しかし、そこに所属する個人は、同時期に出生し、同時代を生きてきたという意味で共通の歴史的体験をもつ。

日本では、そのことが必ずしもその時代とその時代に生きた人々の生活の特徴づけているわけではないが、年号によって時代やコーホート(同時出生集団)を区分することがある。それにしたがえば、現在(2001<平成13>年)の日本の老年人口を構成するコーホートの分布は、明治生まれが3%、大正生まれが37%、昭和生まれが60%である。「明治は遠くになりけり」と言われたのは明治維新以後百年を経た1968年のことであるが、それから既に30数年が過ぎ、明治生まれの人々は老年人口の3%、全人口の0.7%を占めるにすぎなくなった。「明治は遙か遠くになりけり」であり、今日の高齢人口の大半は昭和生まれで占められるようになった。年齢でいえば、65歳から75歳までの人々である。

昭和年代は激しい変化の時代であったが、昭和元年生まれの人たちは、まさにその激動

の時代を生き抜いてきた世代である。不景気の世の中で幼少時を送り、戦時体制の中で十代の青春期を過ごし、敗戦とともに成人を迎えた。そして、制度や価値観が大きく変化し続けた時期に結婚し、子育てに励んだ。

三十代から四十代前半は日本の高度経済成長を支えて働いた。テレビ、冷蔵庫、洗濯機の三種の神器からカラーテレビ、クーラー、カーの3Cへという国民の生活水準の上昇を体験したが、四十代後半には石油ショックによる狂乱物価に悩まされた。日本が世界の経済大国として自他ともに認めるようになり、豊かさを味わいながらも「おしん」に昔を偲びつつ高齢化社会の到来を耳にしたのが五十代である。そして、六十歳になった時には、年金法の改正や「実年」という名称をもって中高年の呼び名に変える提案がなされるなど、高齢化の進展をいやおうなく意識させられることになった。

人生八十年代が告げられ、新しい高齢者像の論議の中で、さてこれからの老後生活をどう充実して過ごしていこうかと模索しながら六十代前半を過ごし、昭和の終わりと平成の幕開けを迎えた。そして、バブル経済とその崩壊の過程で六十代後半を過ごし、阪神大震災(1995年)に見舞われたときに古希を祝い、ミレニアムという聞き慣れない言葉と新世紀を祝う声を聞きながら75歳を迎えた。

時代の激しい変化に適応しながら生き抜いてきた人たちは、もちろん昭和元年生まれの高齢者だけではない。明治生まれ、大正生まれの高齢者もそうであるが、その時々々に時代の大きな変化に対応した生き方を求められ、それに応えてきた。そして、今日、本格的な高齢社会を迎えようとしている日本で、セカンド・マジョリティとなった高齢者は、もはや‘役割なき役割’の担い手ではなく、かつてないほどに多くのことが求められるようになったのである(小田, 1999)。同時に、その過程で高齢期の新しい生き方が模索されるようになった(小田, 1991; 1998; 2001; 中島・小田, 2001)。老年規範が大きく変わろうとしているということであり、高齢者自身の老年規範意識も揺らいでいる(小田, 2000)。そうした中で、今日の高齢者はどのような社会観をもっているであろうか。

(2) 分析の枠組と調査項目

一口に社会観といっても、その中身は多様である。その下位カテゴリには、たとえば、政治観や経済観、家族観や地域社会観、国家観、教育観など多様なものが考えられる。さらに、そこで生活している社会あるいは自らの社会生活に対する見方や考え方は、その人がそのときに置かれている社会的条件や、その人の人生観とも密接に結びついていよう。したがって、高齢者の社会観を明らかにしようとする場合、どのような観点からどのような事柄を取り上げるかが重要な課題となる。

高齢者の社会観に関するこれまでの先行研究は、既に述べたように、リベラル - 保守の次元での分析に主要な関心を向けてきた。そうした次元での分析は、政治や経済、家族等々の領域別に社会観を分析することではなく、それら領域を貫いて、あるいはそれら領域に関わりなく高齢者の社会観を分析することを目的としている。本稿においても、同様に、下位カテゴリごとに社会観を分析することをせず、以下に述べるような観点から高齢者の社会観と、その構造を明らかにすることとする。

高齢者の社会観を分析する際に、リベラル - 保守の次元に関心が向けられているのは、これも、既に述べたように、一般的に、高齢者は若い世代の人間よりも保守的であり、人

は年齢が上がるにつれて保守的傾向になると考えられているからである。保守的あるいは保守主義というのは、新しいものや変化を好まず、あるいは嫌悪し、以前のままの状態＝現状を維持することを目的とし、伝統・歴史・慣習・社会組織を固守しようとする態度である。そうした態度は、権威に対しては自己卑下や盲信、盲目的服従、弱いものに対しては強権的態度や行動といった権威主義となって現れる。本稿では、それを、リベラル - 保守にかえて伝統的権威主義・保守主義の次元とする

今日的課題である高齢期の自立生活と扶養をめぐる問題(小田, 1999)や高齢者に特徴的とみなされることが多い伝統志向や権威志向に関わる項目、そして、かつてマートン(Merton, 1957)が設定した5つの適応様式に関連する項目およびタンスツール(Tunstall, 1965)が高齢者の孤独研究で用いたストロール(1956)のアノミー尺度を参考にしながら、後述のような48項目を設定した。

周知のように、マートンは、アメリカ社会で一般に支持されている目標(文化的価値) - 出世や金儲けなどの物質的成功 - と、それを達成する手段 - 自己修練や努力、勤勉さ - に対する承認と拒否の組み合わせから、アメリカ社会への適応様式を「同調」、「革新」、「儀礼主義」、「逃避主義」、「反抗」といった5つに類型化した。その内容に関しては既に述べたが(第2章参照)1993)、再度簡単に触れておく。

「同調」は、成功につながるか否かにかかわらず一般に支持されている目標と手段をともに受け入れることである。大多数の人の適応様式である。

「革新」は、制度的規範から離れて目標を達成することを指す。社会的に是認されている目標を受け入れるが、その目標を追求するためなら、不当・違法な手段でも使う。大望を遂げることに高い価値を置くアメリカ社会においては、それが逸脱行動であっても目標を遂げれば成功という悪徳を促す。そうした社会では、真価や努力ではなく、運やチャンスが強調される。真価や努力に対して報酬が与えられない状況の下では、抜け目なくて積極的に行動する者が得をすることになるから、そうした革新的実践が普及する。

「儀礼」は、活動に駆り立てた大望を実現不可能なものに見なして放棄あるいは切り下げているが、社会的に容認された基準に同調することである。規則を守ることが大望実現のためではなく、強迫観念のように自己目的化しており、あきらめと型にはまった活動が特徴である。儀礼主義者は、たとえ出世の見込みがなく、また報酬がほとんど得られなくても、退屈な仕事に専心するような人である。外的行動は文化的には望ましくなくても制度上は黙認される。社会的地位が当人の業績によって強く左右される社会で多くみられる適応様式である。大望を抱くと欲求不満や危険が生じ、志望を引き下げれば満足と安全が得られるから、文化的目標をめざす競争に必ずつきまとう危険や欲求不満から逃避しようとするためには、文化的目標を放棄して安全な慣例や制度的規範にますます固執することになる。

「逃避」は宿命論的消極主義である。正当な手段では常に目標に近づき得ず、また内心の禁止によって不当な手段を採用し得ないから、葛藤を回避するために目標と手段を放棄する。文化的目標に価値を認めず制度的手続きも顧みない。社会からの報酬が得られなくても欲求不満をほとんど持たない社会的無関心(アパシー)の適応様式であり、社会的な孤立を招くことにもなる。

「反抗」は、既存の価値観と規範的手段をともに拒否し、新しい目標や新しい手段を制

度化して、他の社会成員にも共有せしめようとする過渡的な反応である。それは、現存の社会的文化的構造を変革しようとする努力をさし、既存の社会的文化的構造の範囲内で適応しようとするのではない。したがって、それは、価値変革を志向し、欲求不満の原因を社会構造に求める結果、保守主義的神話と対立することになる。

マートンが類型化した5つの適応様式は、当時のアメリカ社会において、社会的に是認されている価値や目標とそれらを達成するための限られた手段との間に生じる緊張や葛藤に対して起こりうる人々の反応(適応様式)に関する理念型あるいは索出的モデルであるが、その時代のアメリカ社会に限定されることなく、広く現代産業社会における人々の社会および社会生活に対する見方や考え方、意見、態度、評価、価値観を探る上で有効なモデルと考えられる。

しかし、そのモデルはあくまでも記述モデルであり、マートン自身はもとより、そうした適応様式を測定する項目あるいは測定尺度を用意していたわけではない。そして、その後の研究者がマートンの類型に基づいて測定尺度を開発した例を筆者は寡聞にして知らない。そこで、本稿では、それら類型に対応させて高齢者の社会観を探るために、後に記すような測定項目を作成した。

タンストールが用いたストロールのアノミー尺度は、アノミーに関する次のような概念規定に基づいている(以下の引用は訳書『老いと孤独』から)。

- ・ コミュニティ中でのリーダーは個々の人とは切り離された存在であつて、個人のもっているニードには無関心であるとする考え方
- ・ 社会的秩序は本質的に不確定なもので、予想できないものであるとする受けとめ方すなわち秩序否定的な考え方
- ・ 自分や自分に似た人間が自分たちのすでに到達した人生の目標から後退しつつあるとする将来の人生の目標の放棄の考え方
- ・ 極端な形では、人生それ自体が無意味であるとする考え方に映し出されるような、社会規範および社会的価値の内在化の放棄ないしは喪失
- ・ 社会的存立の基礎である隣りあった直接的な人間関係の枠組みがもはや助けにもならないし、将来をさし示すものではなくなったとする見方

そうした概念規定に対応させて作成された次のような意見項目が回答者に提示され、同意に1点、非同意に0点を与えて、その合計点でアノミー度が測定されている。

- ・ お役所は普通の人にはあまり関心をもたないので、お役所に手続を書いても役に立たない
- ・ 現代は、ほんとうに自分のために生きるべき時代で、明日は明日の風がふく
- ・ 誰が何と言おうとも一般の人の生活はだんだん悪くなっていて、よくなってはいない
- ・ 未来を見通した形で子供を世の中に送り出すといったそんなに好都合には物事は運ばない
- ・ この時代、誰かにたいして責任を負って生きていると考えている人はいない

以上のようなマートンの適応様式とタンストールが用いたアノミー尺度を参考に作成した項目と、先に述べたように、今日的課題である高齢期の自立生活と扶養をめぐる問題、伝統志向や権威志向、政治的・社会的アパシーに関わる項目、そして、身近な生活空間である地域に関する項目の合わせて以下に示す11分類48項目の社会観測定項目を設定した。

なお、文化的目標とその実現のための制度的手段とをともに承認するという「同調」に関しては、それを現在の社会状況を肯定的に評価していること(現状の肯定的評価)と操作的に定義しなおし、それを高齢者の立場からの表現になるようにな文言にした。

「同調」もしくは「現状の肯定的評価)」に関する項目

- ・子どもにとって今の世の中で成長することは幸せだ
- ・昔に比べて今の時代は高齢者にとって生活しやすい
- ・外国に比べて、日本では高齢者が大事にされている
- ・なんだかんだと言っても、今の日本はよい社会だ

「革新」に関する項目

- ・法律や規則、約束ごとを破っても、自分の望みを達成したほうが勝ちだ
- ・出世や成功した人たちは、多かれ少なかれあくどいことをしてきたに違いない
- ・現代を生き抜くためには、他人のことなど、かまっていられない

「儀礼」に関する項目

- ・自分の考えにあわない点があっても、皆の意見に合わせて穏便にことを運びたい
- ・高望みをして失敗するよりは、与えられたものに満足することが幸せにつながる
- ・自分と同じくらいの年代の人がしていることと同じことをしていれば、まず、安心である

「逃避」に関する項目

- ・競争に追い立てられるよりは気ままに生きる方が幸せ
- ・世の中、自分の思うようにならないのだから、あきらめたほうが賢い
- ・世の中の動きは自分の生活にはあまり関係がない

「反抗」に関する項目

- ・社会の色々な問題は少しくらいの手直では解決しない
- ・今の政治家は本気になって社会問題を解決する気ない
- ・今の世の中、高齢者の意見が正しく反映されていない
- ・今の日本には魅力を感じない

「アノミー」に関する項目

- ・一般庶民のことを真剣に考えている役人は少ない
- ・政治家や知識人が立派なことを言っても、本当に国民のことを考えているとは思えない
- ・今の世の中は人のことなど考えていたら損ばかりする
- ・今日が楽しければよく、明日は明日の風が吹く
- ・今の世の中何が正しく何が間違ってるのかわからない
- ・豊かな社会と言うが人々の生活は良くなっていない
- ・親しい間柄といっても、いざとなったら信頼できない
- ・他人のために苦勞するのは実にバカらしいことだ

「私的扶養」に関する項目

- ・なんだかんだと言っても、成人した子どもには、年をとった親の世話をする義務がある
- ・一般的に言って、高齢者が結婚した子供と同居した場合あまりうまくいかない
- ・家族が大切にしてくれれば、ほかに何もなくても高齢者は幸せだ

「社会的扶養」に関する項目

- ・職業を持っている女性が親の世話をしなければならなくなった場合には、仕事をやめるよりも、お金をはらって誰かに世話をしてもらったほうがよい
- ・高齢者にとって、子供に援助を頼むよりは、公の援助を求める方が気が楽だ
- ・ホームヘルパーとか食事の配達などの福祉サービスが十分に行われていれば、子供の援助がなくても高齢者は不自由なくやっていける
- ・税金などで若者の負担が増えても、老人福祉対策をもっと充実すべきだ

「伝統的権威主義・保守主義」に関する項目

- ・権威ある人にはつねに敬意をはらわなくてはいけない
- ・青少年に何よりも必要なのは親の厳しいしつけだ
- ・今の世の中は義理人情がすたれて暮らしにくくなった
- ・今の時代でも、やはり家柄や家格は大切にすべきである
- ・目上の人には、自分をおさえても従うべきである
- ・昔からあるしきたりや習慣は今日でも大切にすべきである
- ・何かを決めるときは従来やり方に従っておくのが無難だ
- ・専門家や指導者の言うことに従っていれば間違いはない

「アパシー」に関する項目

- ・社会活動は熱心な人にまかせておけばよい
- ・私たちが少々がんばったところで政治はよくなる
- ・政治がどうなろうと自分の生活には関係ないことだ

「地域生活」に関する項目

- ・いま住んでいるところが気に入っている
- ・いま住んでいるところに愛着がある
- ・今住んでいる地域ではよそ者という言葉が生きている
- ・近所の人たちと付き合いにはわずらわしいことが多い
- ・都会に比べて、いなかに住む老人は幸せだ

(3) 調査の方法とデータ

本稿で扱うデータは、神戸市在住の65歳以上の男女5,000人を対象とする郵送調査から得られたものの一部である。対象者の抽出方法や回答者の属性は第7章で述べた通りである。

2. 結果

(1) 回答の頻度分布

ここでは、まず、上述した社会観のカテゴリに関わりなく、取り上げた48項目の質問に対する回答を「全くそう思う」と「少しそう思う」の選択率の大きい順に並べて示しておく(図1～図3)。

上位5項目は、「全く」にしる「少し」にしる、回答者の約8割が「そう思う」と同意し、しかも、「全くそう思う」と強く同意した割合が約4割を占める項目であり、「そうは思わない」と同意しない割合が概ね1割あるいはそれ以下である。したがって、こうした見解は、高齢者の大多数に共通する見解であるとみなすことができる。それを要約すれば、今日の「青少年に何よりも必要なことは親の厳しいしつけ」であり、現代社会は「少しくらいの手直しでは解決し得ない深刻な社会問題を抱えている」にもかかわらず、「政治家や知識人は口では立派なことを言っている、本当に国民のことを考え、本気になって社会問題を解決しようとしているとは思えない」し、「役人の多くも一般庶民のことなんか真剣に考えていない」、といったところであろうか。

現代の日本が抱える社会問題に対する関心の深さがうかがわれるとともに、政治家や知識人、役人に対する批判的意識あるいは不信感を抱いている高齢者が多いことがわかる。

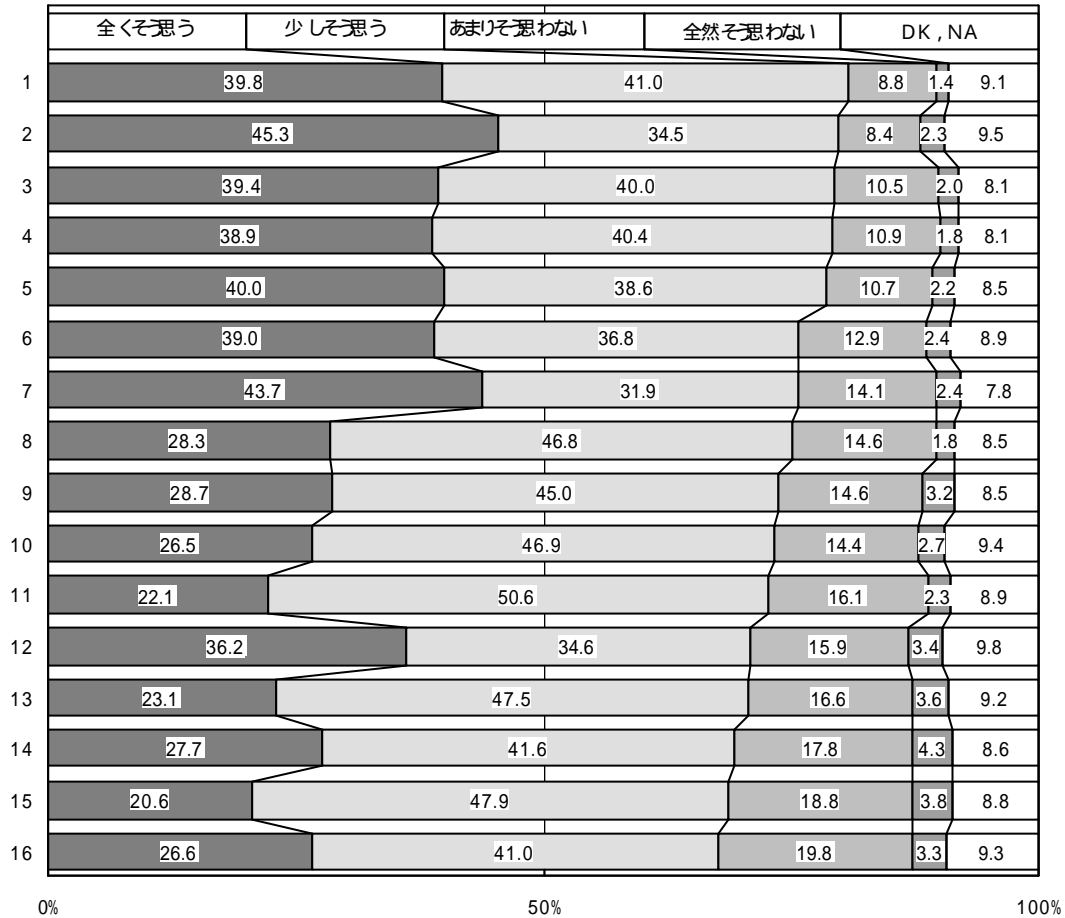


図1 . 社会観の頻度分布(その1)

(図中の項目番号の説明)

- 1 . 青少年に何よりも必要なのは親の厳しいしつけだ
- 2 . 社会の色々な問題は少くらの手直では解決しない
- 3 . 政治家や知識人が立派なことを言っても、本当に国民のことを考えているとは思えない
- 4 . 一般庶民のことを真剣に考えている役人は少ない
- 5 . 今の政治家は本気になって社会問題を解決する気ない
- 6 . いま住んでいるところが気に入っている
- 7 . 家族が大切にしてくれれば、ほかに何もなくても高齢者は幸せだ
- 8 . 今の世の中は義理人情がすたれて暮らしにくくなった
- 9 . なんだかんだと言っても、今の日本はよい社会だ
- 10 . 高望みをして失敗するよりは、与えられたものに満足することが幸せにつながる
- 11 . 昔からあるしきたりや習慣は今日でも大切にすべきである
- 12 . いま住んでいるところに愛着がある
- 13 . 競争に追い立てられるよりは気ままに生きる方が幸せ
- 14 . 高齢者にとって、子供に援助を頼むよりは、公の援助を求める方が気が楽だ
- 15 . 一般的に言って、高齢者が結婚した子供と同居した場合あまりうまくいかない
- 16 . 豊かな社会と言うが人々の生活は良くなっていない

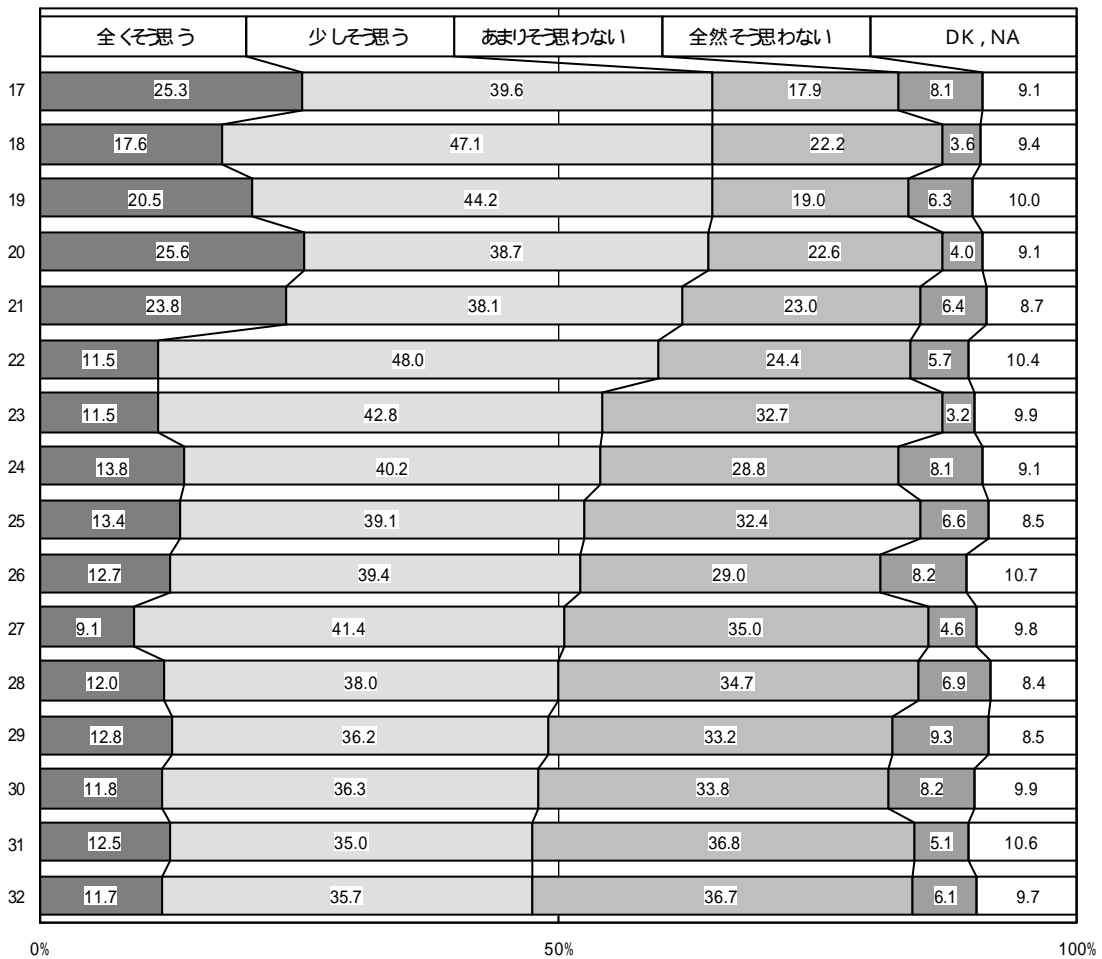


図2 . 社会観の頻度分布(その2)

- 17 . 私たちが少々がんばったところで政治はよくなる
- 18 . 親しい間柄といっても、いざとなったら信頼できない
- 19 . 今の世の中何が正しく何が間違ってるのかわからない
- 20 . ホームヘルパーとか食事の配達などの福祉サービスが十分に行われていれば、子供の援助がなくても高齢者は不自由なくやっていける
- 21 . 昔に比べて今の時代は高齢者にとって生活しやすい
- 22 . 自分の考えにあわない点があっても、皆の意見に合わせて音便（おんびん）にことを運びたい
- 23 . 今の世の中、高齢者の意見が正しく反映されていない
- 24 . 出世や成功した人たちは、多かれ少なかれあくどいことをしてきたに違いない
- 25 . なんだかんだと言っても、成人した子どもには、年をとった親の世話をする義務がある
- 26 . 職業を持っている女性が親の世話をしなければならなくなった場合には、仕事をやめるよりも、お金をはらって誰かに世話をしてもらったほうがよい
- 27 . 何かを決めるときは従来のやり方に従っておくのが無難だ
- 28 . 自分と同じくらいの年代の人がしていることと同じことをしていれば、まず、安心である
- 29 . 世の中、自分の思うようにならないのだから、あきらめたほうが賢い
- 30 . 今の日本には魅力を感じない
- 31 . 都会に比べて、いなかに住む老人は幸せだ
- 32 . 今の世の中は人のことなど考えていたら損ばかりする

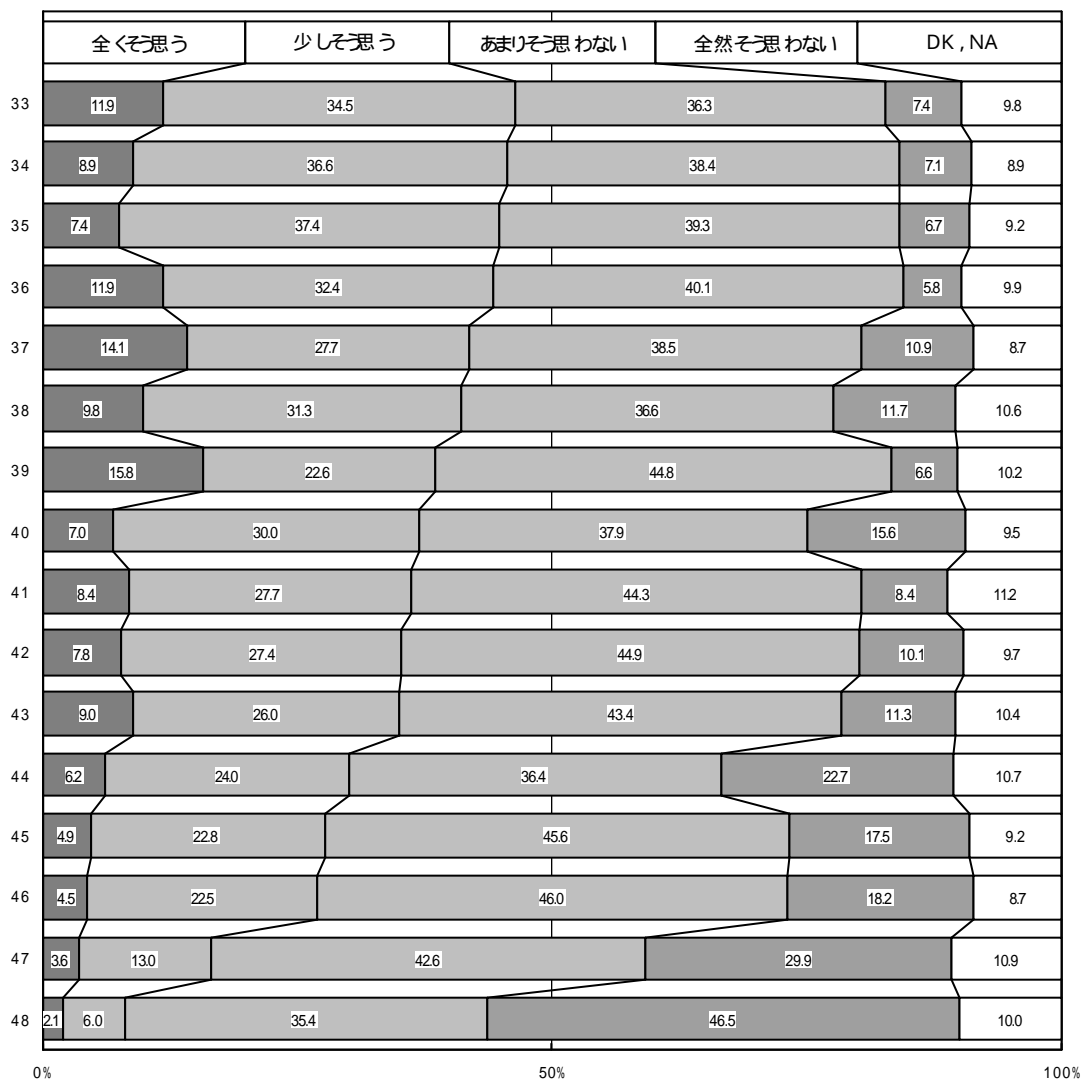


図3 . 社会観の頻度分布(その3)

- 33 . 社会活動は熱心な人にまかせておけばよい
- 34 . 専門家や指導者の言うことに従っていれば間違いない
- 35 . 目上の人には、自分をおさえても従うべきである
- 36 . 税金などで若者の負担が増えても、老人福祉対策をもっと充実すべきだ
- 37 . 今の時代でも、やはり家柄や家格は大切にすべきである
- 38 . 今日が楽しければよく、明日は明日の風が吹く
- 39 . 子どもにとって今の世の中で成長することは幸せだ
- 40 . 世の中の動きは自分の生活にはあまり関係がない
- 41 . 外国に比べて、日本では高齢者が大事にされている
- 42 . 他人のために苦労するのは実にバカらしいことだ
- 43 . 権威ある人にはつねに敬意をはらわなくてはいけない
- 44 . 政治がどうなろうと自分の生活には関係ないことだ
- 45 . 近所の人たちと付き合いにはわずらわしいことが多い
- 46 . 現代を生き抜くためには、他人のことなど、かまっていられない
- 47 . 今住んでいる地域ではよそ者という言葉が生きている
- 48 . 法律や規則、約束ごとを破っても、自分の望みを達成したほうが勝ちだ

「青少年に何よりも必要なことは親の厳しいしつけだ」というのは、いつの時代でも上の世代が下の世代に対して向ける訓戒的意見とみなせば、今日の高齢者の大多数がそうした意見に同意していることは別段不思議なことでも特異なことでもないといえるだろうが、政治家や役人に対する批判的見解あるいは不信感ともいえるような意見に対して高齢者の大多数が同意していることは注目されることである。

ところで、各項目の回答を性別、年齢別、学歴別、世帯形態別にみたときにカイ2乗検定で有意差が認められたものを摘記すると次の通りである。なお、括弧内は有意水準で、それぞれの属性別検定結果であり、以下の記述は、例えば、「女性($p<0.05$)」と記されている場合は、性別のカイ2乗検定の結果が5%水準で有意であり、断り書きがない限り、その意見に対して女性に同意する人が多いことを示している。また、年齢に関しては、上述の5歳階級別年齢層における前半(65-69歳および70-74歳)を低年齢層、後半(75-79歳、80歳以上)を高年齢層と呼んでおく。

「青少年に何よりも必要なことは、親の厳しいしつけだ」は単身世帯の高齢者に同意しない人が多い($p<0.05$)。「社会の色々な問題は、少しくらいの手直では解決しない」は女性($p<0.05$)と低学歴層($p<0.05$)に同意する人が多い。「政治家や知識人が立派なことを言っても、本当に国民のことを考えているとは思えない」は低年齢層($p<0.05$)と低学歴層($p<0.01$)に同意する人が多い。「一般庶民のことを真剣に考えている役人は少ない」は、女性($p<0.05$)と低学歴層($p<0.05$)に同意する人が多い。「今の政治家は本気になって社会問題を解決する気ない」は低年齢層($p<0.05$)に同意する人が多い。

6位から8位までは、「全くそう思う」と「少しそう思う」を合計した割合がほぼ75%を占める項目である。それらは、「いま住んでいるところが気に入っている」(女性 $p<0.001$ 、高年齢層 $p<0.001$ 、低学歴層 $p<0.05$ 、既婚子との同居世帯 $p<0.001$)、「家族が大切にしてくれれば、ほかに何もなくても高齢者は幸せだ」(女性 $p<0.01$ 、高年齢層 $p<0.001$ 、低学歴層 $p<0.001$ 、既婚子との同居世帯 $p<0.05$)、「今の世の中は義理人情がすたれて暮らしにくくなった」(低学歴層 $p<0.01$ 、単身世帯 $p<0.001$)の3項目である。「全く」と「少し」の選択率に大きな違いがあり、「家族が大切にしてくれれば、ほかに何もなくても高齢者は幸せだ」は「全くそう思う」割合が4割を超えているのに対して、「今の世の中は義理人情がすたれて暮らしにくくなった」は3割弱であるが、総じて言えることは、「高齢者にとって家族が大切にしてくれることが何よりも幸せなこと」であり、「いま住んでいるところが気に入っている」ものの、「いまの世の中は義理人情がすたれて暮らしにくくなった」と多くの高齢者が考えている、ということである。

9位から16位までは、回答者の約7割が同意した項目である。それらは、「なんだかんだと言っても、いまの日本はよい社会だ」(属性別の有意差なし)、「高望みをして失敗するよりは、与えられたものに満足することが幸せにつながる」(女性 $p<0.01$ 、低学歴層 $p<0.001$ 、既婚子との同居世帯 $p<0.001$)、「昔からあるしきたりや習慣は今日でも大切にすべきである」(高年齢層 $p<0.05$ 、低学歴層 $p<0.01$)、「いま住んでいるところに愛着がある」(女性 $p<0.01$ 、高年齢層 $p<0.001$ 、低学歴層 $p<0.05$ 、既婚子との同居世帯 $p<0.001$)、「競争に追い立てられるよりは気ままに生きる方が幸せ」(高年齢層 $p<0.01$ 、低学歴層 $p<0.001$)、「高齢者にとって、子どもに援助を頼むよりは、公の援助を求める方が気が楽だ」(低年齢層 $p<0.001$ 、低学歴層 $p<0.001$)、「一般的に言って、結婚した子どもと同居した場合あま

りうまくいかない」(高学歴層 $p<0.05$ 、単身世帯および夫婦のみの世帯 $p<0.001$)、「豊かな社会と言うが人々の生活は良くなっていない」(女性 $p<0.05$ 、低学歴層 $p<0.001$)である。

17位から22位までは約6割が同意した項目である。高齢者が「少々がんばったところで政治はよくなる」(女性 $p<0.001$ 、低学歴層 $p<0.001$)、といい、「今の世の中何が正しくて何が間違っているのかわからない」(女性 $p<0.001$ 、低学歴層 $p<0.001$)し、「親しい間柄といってもいざとなったら信頼できない」(低学歴層 $p<0.001$)が、「昔に比べて今の時代は高齢者にとって生活しやすい」(高年齢層 $p<0.05$)という。そして、「ホームヘルパーとか食事の配達などの福祉サービスが十分に行われていれば、子どもの援助がなくても高齢者は不自由なくやっていける」(低年齢層 $p<0.05$ 、低学歴層 $p<0.01$ 、単身世帯および夫婦のみの世帯 $p<0.001$)といい、「生きていく上では「自分の考えにあわない点があっても皆の意見に合わせて穏便にことを運びたい」(女性 $p<0.001$ 、高年齢層 $p<0.01$ 、低学歴層 $p<0.001$ 、既婚子との同居世帯 $p<0.05$)と考えている。

23位から34位までは、ほぼ半数の高齢者が同意した項目である。それらを順に並べれば次の通りである。

「今の世の中、高齢者の意見が正しく反映されていない」(高年齢層 $p<0.01$)、「出世や成功した人たちは多かれ少なかれあくどいことをしてきたに違いない」(低学歴層 $p<0.05$)、「なんだかんだと言っても、成人した子どもは親の世話をする義務がある」(高年齢層 $p<0.001$ 、低学歴層 $p<0.001$ 、既婚子との同居世帯 $p<0.01$)、「職業をもっている女性が親の世話をしなければならなくなった場合には、仕事をやめるよりも、お金を払って誰かに世話をしてもらったほうがよい」(高学歴層 $p<0.001$ 、単身世帯 $p<0.01$)、「何かを決めるときには従来のやり方に従っておけば無難だ」(女性 $p<0.05$ 、高年齢層 $p<0.001$)、「自分と同じくらいの年代の人がしていることと同じことをしていれば、まず、安心である」(女性 $p<0.001$ 、高年齢層 $p<0.001$ 、低学歴層 $p<0.001$ 、既婚子との同居世帯 $p<0.001$)、「世の中、自分の思うとおりにならないのだから、あきらめた方が賢い」(女性 $p<0.001$ 、高年齢層 $p<0.001$ 、低学歴層 $p<0.001$)、「今の日本には魅力を感じない」(属性別の有意差なし)、「都会に比べて、田舎に住む老人は幸せだ」(低学歴層 $p<0.01$)、低学歴層 $p<0.001$)、「今の世の中は人のことなど考えていたら損ばかりする」(低学歴層 $p<0.001$)、「社会活動は熱心な人にまかせておけばよい」(女性 $p<0.001$ 、高年齢層 $p<0.001$ 、低学歴層 $p<0.001$)、「専門家や指導者のいうことに従っていれば間違いはない」(女性 $p<0.05$ 、高年齢層 $p<0.001$ 、低学歴層 $p<0.001$)。

35位以下は同意しない割合が同意する割合を上回った項目である。とくに、「法律や規則、約束事を破っても自分の望みを達成した方が勝ちだ」(男性が強く否定 $p<0.05$ 、高学歴層が強く否定 $p<0.01$)という意見と「いま住んでいる地域ではよそ者という言葉が生きている」(女性 $p<0.05$ 、高年齢層 $p<0.05$ 、低学歴層 $p<0.05$ 、単身世帯および既婚子との同居世帯 $p<0.05$)という意見に同意する高齢者の割合は10~15%と他の項目に比べて極端に小さくなっている。

「現代を生き抜くためには他人のことなどがまっていられない」(低学歴層 $p<0.001$)および「他人のために苦勞することはばからしいことだ」(低学歴層 $p<0.001$)という意見に同意する高齢者も少ない。多くの高齢者は無規範的あるいは利己主義的な態度や行動には否定的であることがわかる。

「政治がどうなろうと自分の生活には関係ない」(女性 $p<0.001$ 、高年齢層 $p<0.001$ 、低学歴層 $p<0.001$)や「世の中の動きは自分の生活に関係がない」(女性 $p<0.001$ 、高年齢層 $p<0.001$ 、低学歴層 $p<0.001$)、「今日が楽しければよく、明日は明日の風が吹く」(女性 $p<0.001$ 、低学歴層 $p<0.001$ 、単身世帯 $p<0.05$)という意見への同意率も小さい。高齢者の中で、政治的・社会的無関心層は少数派であることがわかる。

また、「権威ある人には常に敬意を払わなくてはならない」(高年齢層 $p<0.001$ 、低学歴層 $p<0.01$ 、既婚子との同居世帯 $p<0.001$)、「今の時代でも、やはり家柄や家格は大切にすべきだ」(女性 $p<0.01$ 、高年齢層 $p<0.001$ 、低学歴層 $p<0.001$ 、既婚子との同居世帯 $p<0.05$)、「目上の人には、自分を抑えても従うべきである」(男性は強く同意する人と強く同意しない人の両極に分かれる $p<0.01$ 、高年齢層 $p<0.01$ 、低学歴層 $p<0.01$ 、既婚子との同居世帯 $p<0.05$)という意見に同意する高齢者も少数派である。この結果は、既に述べたように、高齢者の多くは決して保守的ではない、というこれまでの多くの研究を裏打ちするものといえそうである。

「近所の人たちとの付き合いにはわずらわしいことが多い」(属性別の有意差なし)という高齢者も少ない。また、「外国に比べて日本では高齢者が大事にされている」(高年齢層 $p<0.01$ 、低学歴層 $p<0.001$)、「子どもにとって今の世の中で成長することは幸せだ」(男性 $p<0.01$ 、高年齢層 $p<0.01$ 、低学歴層 $p<0.01$)という高齢者も少なく、「税金などで若者の負担が増えても、老人福祉対策をもっと充実すべきだ」(高年齢層 $p<0.001$ 、低学歴層 $p<0.05$)と考えている高齢者は少ない。

(2) 共分散構造分析による社会観の初期モデルの検討

上述の回答結果に基づいて、当初設定した項目の分類を検討するために、48項目すべてにもれなく回答した完全回答票1,850票を用いて、「全くそう思う」に4点、「少しそう思う」に3点、「あまりそう思わない」に2点、「全くそう思わない」に1点を与えて各項目を数値変数化し、それら諸変数の分散共分散行列を用いて各類型を共分散構造分析による確証的因子分析で検証することとする。なお、当初の分類における項目で構成される1因子モデルをここでは初期モデルと呼ぶことにする。

共分散構造分析は、モデルの良否をモデル(推定された共分散構造)と観測データ(標本分散行列)との乖離(適合)の程度(乖離度/適合度)で判定する統計解析の方法である(狩野, 1997; Arbuckle and Wothke, 1999)。この目的に添ってモデルの適合度を判定する指標が数多く提案、開発されてきたが、本稿では、カイ2乗値による検定(以後、カイ2乗検定と呼ぶ)、残差平方平均平方根(RMR: Root Mean Square Residual)、平均二乗誤差平方根(RMSEA: Root Mean Square Error of Approximation)、GFIおよび自由度調整済みGFI(AGFI: Adjusted Goodness-of-Fit Index)、規準化適合度指標(NFI: Normal Fit Index)を採用する。

カイ2乗検定では、有意水準を表す p 値が0.05や0.1を越えて、その値が大きいほどモデルが標本データに近い、すなわち適合度が高いことになる。そして、GFIやNFIは1に近いほど適合度が高いことを表し、一般に0.9以上であればモデルは受容される(狩野, 1997)。なお、NFIは、他の指標がパラメータ数が最大限のモデルである飽和モデル(観測データと完全一致)との比較で適合度を判定するのと異なり、当該モデルが観測変数相互の相関をゼロと仮定する独立モデルと飽和モデルとの間のどのあたりに位置するかで適合度を判定する指標である。これに対して、RMRやRMSEAはモデルにおける推定値と観測

データとの残差や誤差の指標であるから、その値がゼロに近いほどモデルの適合度は高いことになる。一般に、RMRでは0.05以下、RMSEAでは0.08以下であればモデルを受容してよいと判断する(狩野, 1997; Arbuckle and Wothke, 1999)。

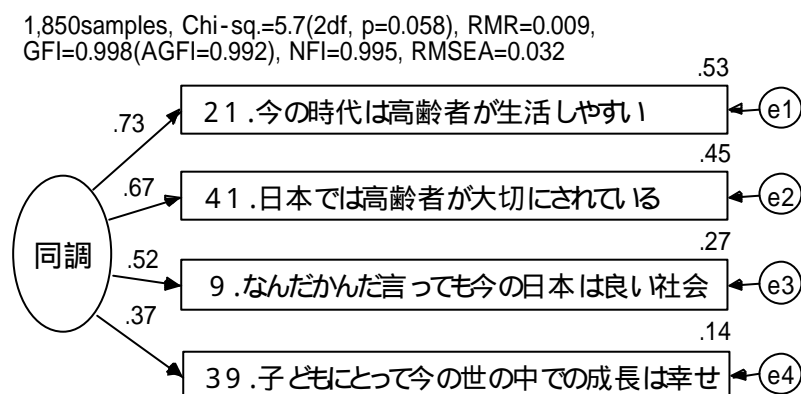
後掲の各図の中における数値(小数)はパラメータ推定値で、本稿では全て標準化された数値(標準化係数)を記すことにする。楕円あるいは丸で囲まれた変数は観測されない潜在変数で、因子分析では前者が共通因子、後者が独自因子と呼ばれているものである。

共通因子から四角で囲まれた観測変数へ向かう矢印付きの直線に添えられた数値は回帰係数で、因子分析では因子負荷量と呼ばれているものである。両端に矢印のある曲線は潜在変数間の相関関係を示し、その曲線に添えられた数値は相関係数である。

四角で囲まれた観測変数に添えられた数値は重相関係数の平方で、例えば、後掲の図4における「今の時代は高齢者が生活しやすい」という変数に添えられた0.53(53%)は、その変数の分散の53%が潜在変数「同調」(における分散)によって説明され、説明しきれない残りの47%(残差)は他の諸々の要因(独自因子)に依存することを示している。

「同調」の初期モデル

「同調の」の初期モデルは、既に記したように、4項目から構成される1因子モデルとして設定されている。それを図示したのが図4である。



注: 項目の番号は図1~3と同じ(以下の図においても同様)

図4. 「同調」モデル($R^2 = 0.6549$)

上で述べた適合度検定に関する一般的了解に基づいて解析結果(標準解)をみると、図4に示すカイ2乗検定の結果からは、このモデルは棄却されることになる。しかし、大標本を用いた分析においては、カイ2乗検定の結果に従うと多くの場合にこうした事態(モデルが棄却されてしまうこと)が生じることが知られている(狩野, 1997; Arbuckle and Wothke, 1999)。そこで、標本数が1,000を越える場合には、カイ2乗検定ではなく、GFIやRMSEAを適合度の指標にすることも提案されている(狩野, 1997)。本稿で扱う標本数は1,850と大標本であるから、その提案にしたがってRMRやRMSEA, AGFIの値をみると、このモデルの適合度は極めて高いことがわかる。

3項目から構成される初期モデル

共分散構造分析による確証的因子分析では、項目数が3つの1因子モデルは飽和モデル

となってモデルの適合度を検討することができない。当初に設定した社会観の分類では、「革新」、「儀礼」、「逃避」、「私的扶養」、「アパシー」が3項目からなる類型である(図5～図9)。したがって、これら初期モデルに関しては、そのモデルにおける因子負荷量と重相関係数の平方を示しておく。

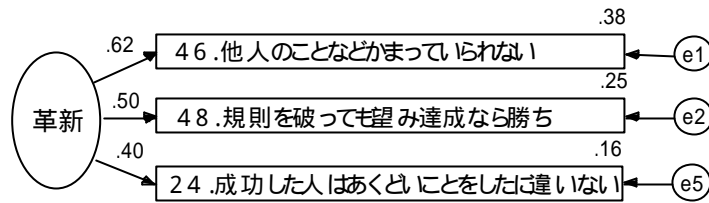


図5. 「革新」の初期モデル

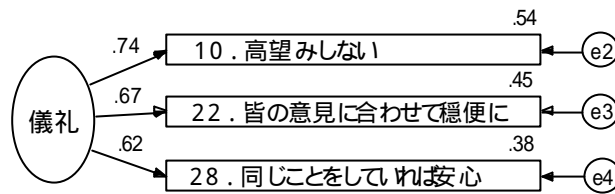


図6. 「儀礼」の初期モデル

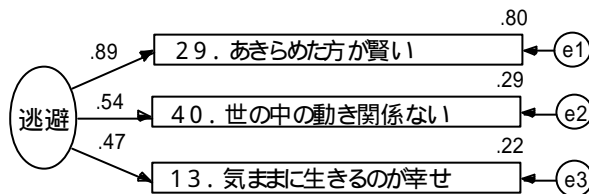


図7. 「逃避」の初期モデル

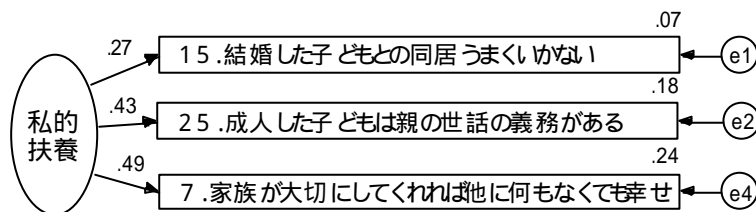


図8. 「私的扶養」の初期モデル

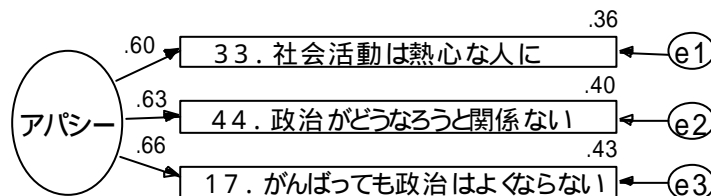


図9. 「アパシー」の初期モデル

「反抗」の初期モデル

4項目で構成した「反抗」の初期モデルは(図10)、カイ2乗値を除く他の適合度判定諸指標が示すように、適合度の高いモデルである。しかし、項目番号23の項目は、重相関係

数の平方の値が示すように、「反抗」モデルを構成する項目としての信頼性は極めて低いことがわかる。

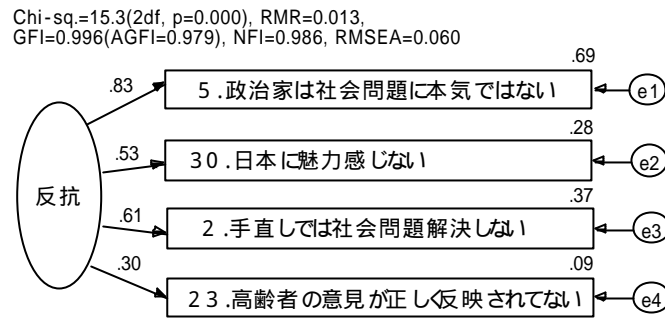


図10. 「反抗」の初期モデル

「アノミー」の初期モデル

この初期モデルでは、適合度の判定指標のうち、RMRだけがかるうじて受容できる値を示しているほかは、他はいずれもこのモデルは受容しがたいことを示している(図11)。

Chi-sq.=1136.5(20df, p=0.000), RMR=0.050,
GFI=0.850(AGFI=0.729), NFI=0.762, RMSEA=0.174

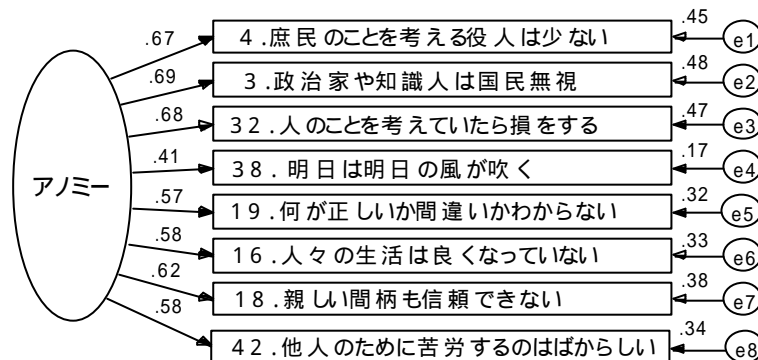


図11. 「アノミー」の初期モデル

このモデルでは、残差(独自因子)相互を無相関としているが、残差間で相関係数が最大となるe1とe2の間の相関(係数0.63)を認めてモデルの制約を多少緩めた場合には、カイ2乗値が375.9(自由度19、p=0.000)、RMRが0.035、GFIが0.951(AGFI=0.906)、NFIが0.921となって適合度は改善されるが、それでもRMSEAは0.101と一般的基準とされる0.08を上回る。残差e1とe2との間に比較的高い相関が見られるということは、政治や行政に携わるものやオピニオンリーダーへの批判的見解の背景には相互に関連する諸要因が存在することを示唆している。しかし、そのことが、このモデルの適合度を高めるために制約を緩める積極的な理由になるというわけではない。そこで、この「アノミー」の初期モデルは不適切であるということになる。

「社会的扶養」の初期モデル

カイ2乗値および他の適合度判定指標においても、このモデルが適合度の高い良好なモデルであることが示されている(図12)。しかし、項目番号36の項目に関しては、重相関係数の平方の値が極めて小さく、このモデルを構成する項目としては検討の余地が残されている。

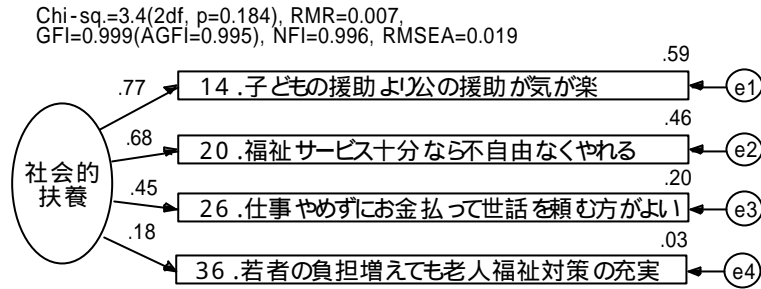


図12. 「社会的扶養」の初期モデル

「伝統的権威主義・保守主義観」の初期モデル

この初期モデルは、RMRの値は良好であるが、RMSEAの値がかなり大きい(図13)。また、GFIは概ね良好であるが、AGFIとNFIから見ると適合度は十分とはいえない。また、項目1と項目8の重相関係数の平方の値もごく小さく、これら項目の信頼性は低いといわなければならない。したがって、この初期モデルは受容しがたい。

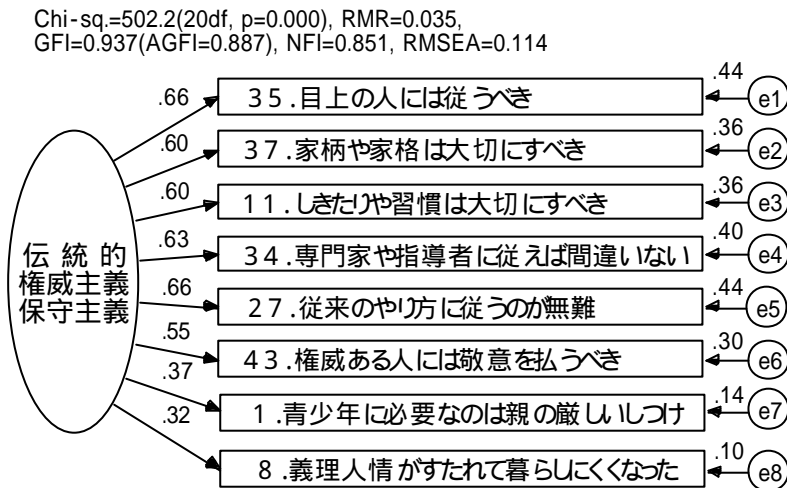


図13. 「伝統的権威主義・保守主義観」の初期モデル

「地域生活観」の初期モデル

この初期モデルには、地域に対する明らかに正反対の見解を内容とする項目を含めているので、1因子モデルとするのは適切ではないが、結果を表示すれば図14の通りである。

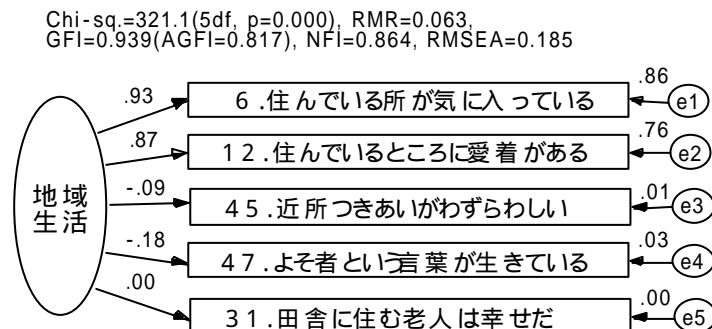


図14. 「地域生活観」の初期モデル

潜在変数(共通因子)「地域生活」は、肯定的地域生活観を表していることが明瞭である。しかし、否定的項目45および47と項目31は負荷量がほぼ零に近く、(したがって)観測変数の重相関係数の平方の値もほぼ零であり、この初期モデルは受容されない。

(3) モデルの改善 - 主成分分析によるモデルの検討

初期モデルのうちで、適合度判定から受容することができたモデルは「同調」モデルだけであった。そこで、高齢者の社会観に関するモデルを再検討するために、前述の数値変数化したデータを用いて主成分分析を行った。

固有値1.0以上の主成分が11個抽出された。各主成分の寄与率(全変数の分散の合計に対してその主成分によって説明される分散のパーセント)はいずれも小さく、累積寄与率も55%にとどまるが、各項目は比較的明瞭に類別されている(表1)。

10項目から構成されている第1主成分が何を指しているか一言では表現しにくいだが、当初設定した分類に従えば、「逃避」(表1の中の第1主成分に所属する項目のうちで最上位に記載されている負荷量0.70の項目と5番目の負荷量0.58および6番目の同0.57の項目)や「儀礼」(2～4番目の項目)、「政治的・社会的アパシー」を内容とする項目(7～9番目の項目)、そして、ストロールのアノミー尺度の項目にあげられていた1項目(負荷量0.47の「明日は明日の風が吹く」)が含まれている。

7項目から構成されている第2主成分は、「アノミー」の項目(1～2番目および6～7番目の項目)と「反抗」の項目(3～5番目)から成っている。

第3主成分には当初設定した「伝統的権威主義・保守主義」の8項目のうちの6項目が含まれており、一見して「伝統的権威主義・保守主義」を表す主成分であることがわかる。

第4主成分は、当初設定した「革新」の項目(1、2および5番目の項目)とアノミーの項目(3、4番目)から成っている。

第5主成分は、当初設定した「同調」に関する項目で構成されており、現在の日本社会に対する「現状肯定」を表す主成分と解釈できる。

第6主成分は、同居に否定的な見解の項目(4番目にある負荷量0.40の当初設定した「私的扶養」の項目)と「社会的扶養」の3項目から成っていることから、「社会的扶養」を表す主成分と解釈できる。

第7主成分は「地域生活」に対する肯定的評価を表す主成分で、その逆の内容の主成分が第10主成分である。

第8主成分は、「伝統的権威主義・保守主義」の項目(1、2番目の項目)とアノミー項目(3番目)からなっているが、この項目群からいえば、今日の間人間関係に対する批判あるいは否定的な人間関係観を表す主成分と解釈することができよう。

第9主成分は、当初設定した「社会的扶養」の項目(1番目の負荷量0.63の項目)と「反抗」(3番目の負荷量0.56の項目)、「私的扶養」の項目(残りの2項目)から構成されている。この項目群が指していることは、高齢者は扶養あるいは支援の対象として大事にされるべきであるという認識(高齢者尊重認識)と解釈することができよう。

第11主成分に所属する項目の負荷量はいずれも小さく、より大きな負荷量で他の主成分に所属するものばかりであるので、検討から除外する。

表1 . バリマックス回転後の主成分行列 (その1)

項 目	主 成 分										
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
世の中、自分の思うようにならないのだから、あきらめたほうが賢い	0.70										
高望みをして失敗するよりは、与えられたものに満足することが幸せにつながる	0.65										
自分の考えにあわない点があっても、皆の意見に合わせて、穏便にことを運びたい	0.65										
自分と同じくらいの年代の人がしていることと同じことをしていれば、まず、安心である	0.59		0.32								
世の中の動きは自分の生活にはあまり関係がない	0.58			0.40							
競争に追い立てられるよりは、気ままに生きる方が幸せ	0.57										
社会活動は、熱心な人にまかせておけばよい	0.53		0.32								
政治がどうなるかと自分の生活には関係ないことだ	0.52			0.48							
私たちが少々がんばったところで、政治はよくなるらない	0.52										
今日が楽しければよく、明日は明日の風が吹く	0.47			0.31							0.31
政治家や知識人が立派なことを言っても、本当に国民のことを考えているとは思えない		0.84									
一般庶民のことを真剣に考えている役人は少ない		0.82									
今の政治家は本気になって社会問題を解決する気ない		0.81									
今の日本には魅力を感じない		0.64									
社会の色々な問題は、少しくらいの手直では解決しない		0.61									

(次表に続く)

表1 . バリマックス回転後の主成分行列 (その2)

(前表からの続き)

項 目	主 成 分											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	
豊かな社会と言うが、人々の生活は良くなっていない		0.54										0.38
今の世の中、何が正しく何が間違ってるのかわからない	0.34	0.38										0.36
目上の人には、自分をおさえても従うべきである			0.73									
今の時代でも、やはり家柄や家格は大切にすべきである			0.67									
昔からあるしきたりや習慣は、今日でも大切にすべきである			0.65									
専門家や指導者の言うことに従っていれば間違いない	0.33		0.63									
何かを決めるときは、従来のやり方に従っておくのが無難だ	0.36		0.61									
権威ある人には、つねに敬意をはらわなくてはいけない			0.58									
現代を生き抜くためには、他人のことなど、かまっていられない				0.64								
法律や規則、約束ごとを破っても、自分の望みを達成したほうが勝ちだ				0.58								
他人のために苦勞するのは、実にバカらしいことだ				0.57								
今の世の中は、人のことなど考えていたら損ばかりする		0.42		0.48								
出世や成功した人たちは、多かれ少なかれあくどいことをしてきたに違いない		0.34		0.40								
昔に比べて今の時代は高齢者にとって生活しやすい					0.75							

(次表に続く)

表1 . バリマックス回転後の主成分行列 (その3)

(前表からの続き)

項 目	主 成 分											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	
外国に比べて、日本では高齢者が大事にされている					0.73							
なんだかんだと言っても、今の日本はよい社会だ					0.61							
子どもにとって、今の世の中で成長することは幸せだ					0.51							
都会に比べて、いなかに住む老人は幸せだ												
高齢者にとって、子どもに援助を頼むよりは、公の援助を求める方が気が楽だ						0.77						
ホームヘルパーとか食事の配達などの福祉サービスが十分に行われていれば、子供の援助がなくても、高齢者は不自由なくやっていける						0.74						
職業を持っている女性が親の世話をしなければならなくなった場合には、仕事をやめるよりも、お金をはらって誰かに世話をしてもらったほうがよい						0.66						
一般的に言って、高齢者が結婚した子どもと同居した場合、あまりうまくいかない						0.40						-0.37
いま住んでいるところが気に入っている							0.93					
いま住んでいるところに愛着がある							0.92					
今の世の中は、義理人情がすたれて暮らしにくくなった								0.68				
青少年に何よりも必要なのは親の厳しいしつけだ								0.67				
親しい間柄といっても、いざとなったら信頼できない		0.35		0.36				0.38				

(次表に続く)

表1 . バリマックス回転後の主成分行列 (その4)

(前表からの続き)

項 目	主 成 分											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	
税金などで若者の負担が増えても、老人福祉対策をもっと充実すべきだ									0.63			
なんだかんだと言っても、成人した子どもには、年をとった親の世話をする義務がある									0.56			
今の世の中、高齢者の意見が正しく反映されていない									0.56			
家族が大切にしてくれれば、ほかに何もなくても高齢者は幸せだ									0.33			
近所の人たちと付き合いにはわずらわしいことが多い										0.79		
今住んでいる地域では、よそ者という言葉が生きている										0.75		
寄与率 (%)	8.8	8.7	6.8	5.5	4.6	4.3	3.9	3.7	3.3	3.2	2.3	
累積寄与率 (%)		17.5	24.3	29.8	34.4	38.6	42.5	46.2	49.5	52.7	55.0	

注：完全回答1,850票に関する分析

以上のように、「逃避」、「儀礼」、「アパシー」の項目が、また、「アノミー」と「反抗」の項目が、「アノミー」と「革新」の項目が、それぞれ同一主成分に所属していることなど、当初設定した社会観測定項目の分類と若干異なる結果になった。そこで、まず、10個の主成分に基づいて構成される主成分モデルを共分散構造分析によって検討し、次に、それらの結果を踏まえてモデルの改善を図ることとする。

(4) 第1主成分モデル

図13に示す1因子モデルの適合度はそれほど悪いものではないが、このモデルが示す内容は判然としない。既に述べたように、このモデルには、初期モデルを構成する諸項目 - 「逃避」(項目29、40、13)、「儀礼」(項目10、22、28)、「アパシー」(項目33、44、17)、「アノミー」(項目38) - が含まれている。そこで、それらを考慮して第1主成分モデルを3因子モデルにしたのが図14である。

図13の1因子モデルに比べて、図14の3因子モデルの適合度はそれほど改善されているわけではないが、第1主成分を「逃避」、「儀礼」、「アパシー」の3次元構造でとらえた方が適切であることが示されている。そして、初期モデルとして設定した「逃避」、「儀礼」、「アパシー」といった適応様式は相互に関連性が高いこと、項目38は、初期モ

デルでは「アノミー」を構成する項目であったが、因子負荷量および重相関係数の平方の値とともに「アノミー」の初期モデルよりも大きく、「アパシー」の項目とする方が適切であることがわかる。

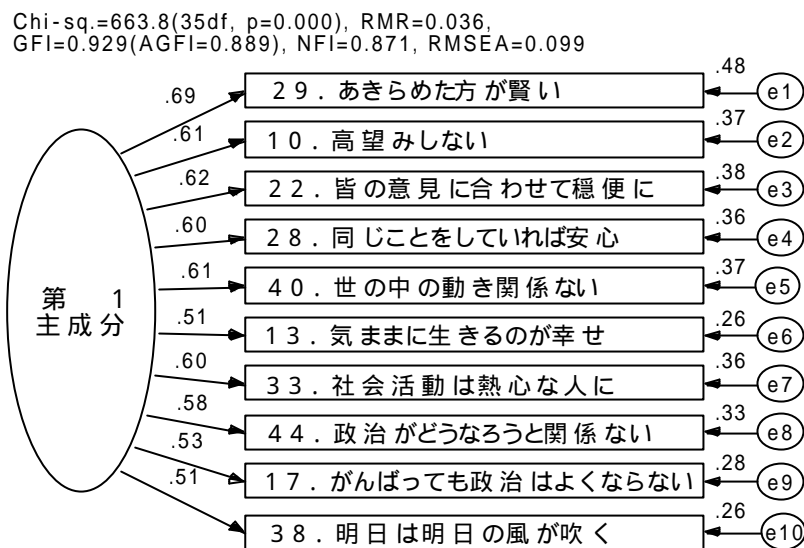


図13. 第1主成分モデル

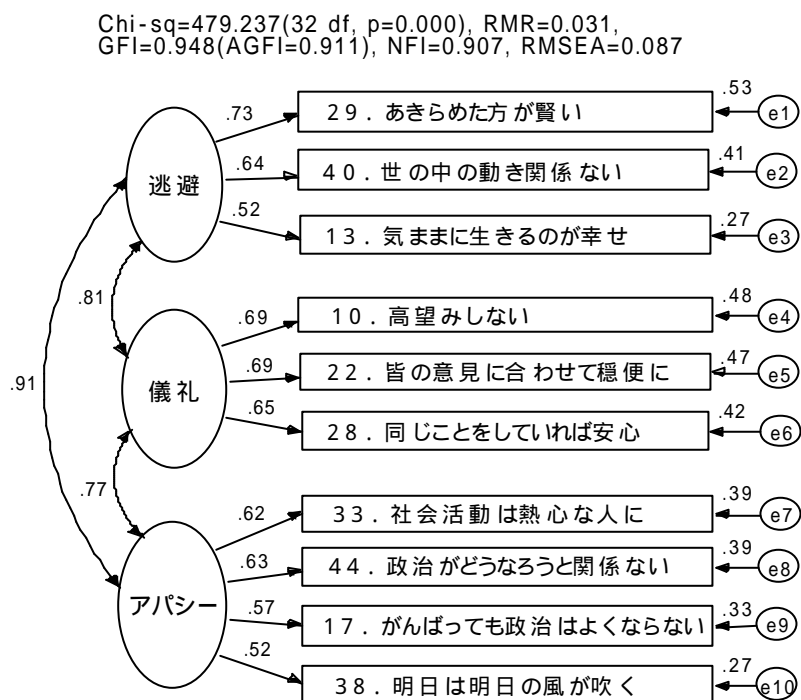


図14. 「第1主成分モデル」の3因子モデル

(5) 第2主成分モデル

1因子の第2主成分モデルは、初期モデル「アノミー」(項目3, 4, 16, 19)と「反抗」(5, 30, 2)の項目で構成されている(図15)。カイ2乗値は別にして、RMSEAを除く他の指標では比較的良好な適合度を示している。

Chi-sq.=329.461(14 df, p=0.000), RMR=0.031,
GFI=0.950(AGFI=0.900), NFI=0.931, RMSEA=0.110

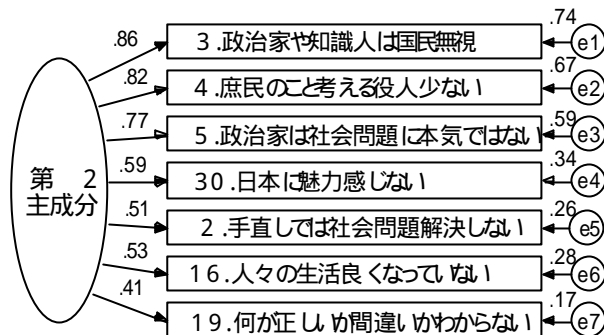


図15. 第2主成分の1因子モデル

この第2主成分モデルは、社会に対する不信感ないしは厭世観を表しているといえるが、初期モデルにおける「アノミー」と「反抗」を構成するそれぞれの項目を類別して2因子モデルに再編成したのが図16である。

Chi-sq.=292.310(13 df, p=0.000), RMR=0.032,
GFI=0.954(AGFI=0.902), NFI=0.939, RMSEA=0.108

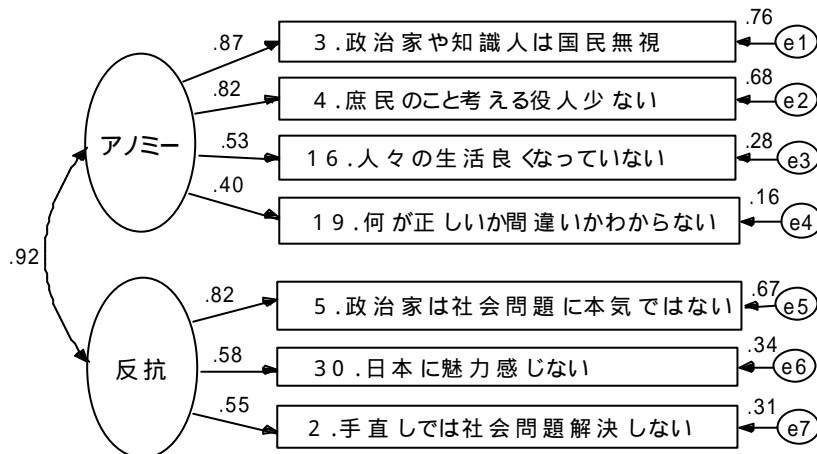


図16. 第2主成分の2因子モデル

適合度はほんのわずが改善されたにすぎず、RMSEAは許容範囲を若干上回ったままであるが、1因子の第2主成分モデルよりは、この2因子モデルの方が高齢者の社会観を明らかにする上で、はるかにわかりやすいモデルであるといえよう。

(6) 第3主成分モデル

第3主成分モデルは、「伝統的権威主義・保守主義」的社會観の初期モデルにおける8つの項目のうち6項目から構成されている(図17)。初期モデルから除外された項目は、「今の世の中は義理人情がすたれて暮らしにくくなった」と「青少年に何よりも必要なのは、親の厳しいしつけだ」である。この1因子モデルの適合度は概ね良好と判断されるが、RMSEAの値が一般的基準を超えている。

Chi-sq.=196.3(9df, p=0.000), RMR=0.025,
GFI=0.966(AGFI=0.921), NFI=0.928, RMSEA=0.106

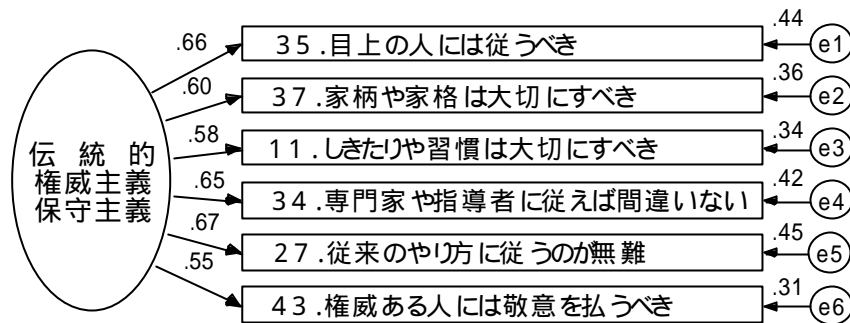


図17. 第3主成分モデルの1因子モデル

第3主成分に所属しなかった2つの項目を含めて「伝統的権威主義・保守主義」の初期モデルを2因子モデルにしたのが図18である。カイ2乗値を除いて、1因子モデルよりもRMRとRMSEAの値が小さくなり、適合度が少しばかり改善されている。

初期モデルに含まれていた2項目は、「伝統的権威主義・保守主義」の項目としてではなく、「否定的人間関係観」にふさわしい項目であったことになる。このことは、これら項目が、表1に見るように、「親しい間柄といっても、いざとなったら信頼できない」という項目とともに第8主成分を構成していることから理解される。

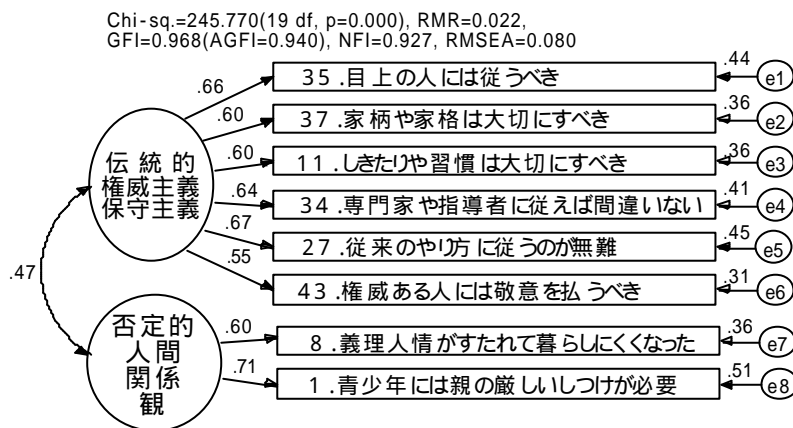


図18. 「伝統的権威主義・保守主義」の初期モデルの2因子モデル

そこで、第3主成分と第8主成分をそれぞれ1因子とする2因子モデルに編成し直したのが図19である。適合度指標に見るように、この2因子モデルの適合度は良好である。

しかしながら、「伝統的権威主義・保守主義的社会観」と「否定的人間関係観」を包含するこの2因子モデルが指示する内容を的確に表現することは難しい。

Chi-sq.=309.2(26df, p=0.000), RMR=0.024,
GFI=0.965(AGFI=0.939), NFI=0.914, RMSEA=0.077

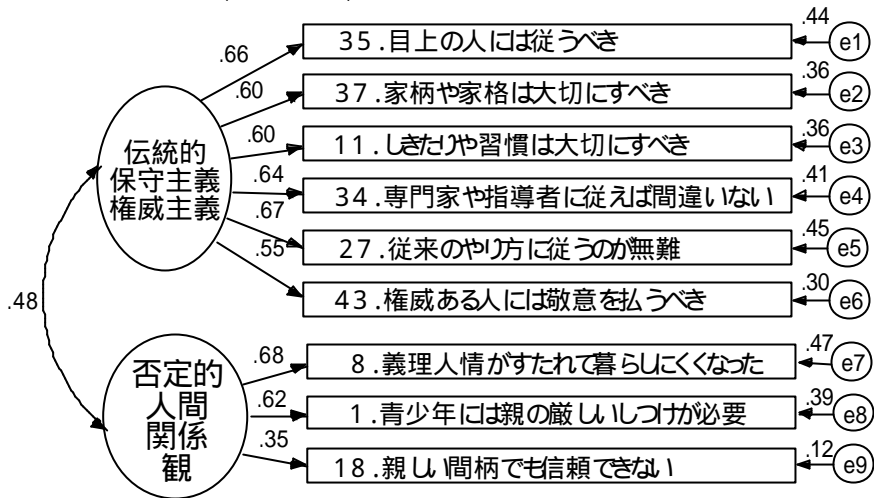


図19. 第3主成分と第8主成分による2因子モデル

(7) 第4主成分モデル

第4主成分は、初期モデルにおける「革新」の3項目(項目番号46、48、24)すべてと、「アノミー」の8項目のうち2項目(42、32)によって構成されている(表1)。それら5項目で構成される1因子モデルが図20である。カイ2乗値を除く他の適合度判定諸指標は、このモデルの適合度が極めて高いことを示している。

Chi-sq.=63.3(5df, p=0.000), RMR=0.019,
GFI=0.987(AGFI=0.960), NFI=0.960, RMSEA=0.079

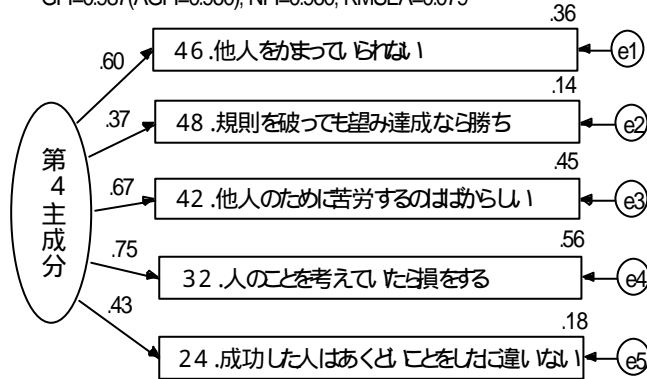


図20. 第4主成分モデルの1因子モデル

この1因子モデルを、初期モデルの項目ごとに振り分けて2因子モデルに再構成したのが図21である。各負荷量および適合度指標の数値がどれも、わずかではあるが改善されており、第4主成分モデルを2因子構造の「革新」モデルとする方がより適切であるといえる。

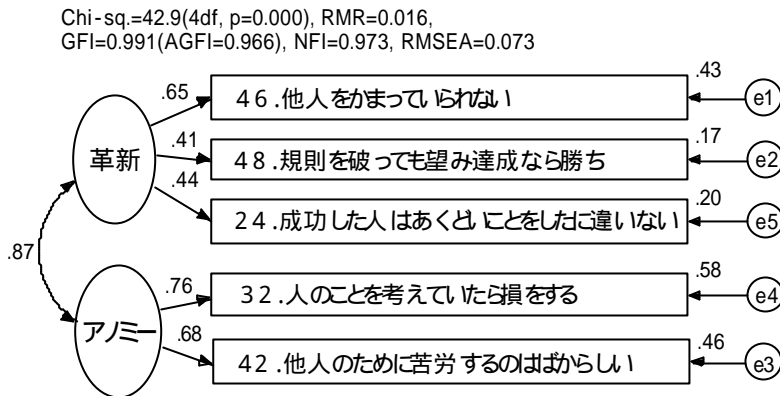


図21 . 第4主成分モデルの2因子モデル

(8) 第5主成分モデル

第5主成分を構成する4項目は、初期モデルの項目と同一である。したがって、第5主成分モデルは、図4に示した初期モデルと同じである。

(9) 第6主成分モデル

第6主成分モデルは、「社会的扶養」の初期モデルの4項目のうちの1項目「税金などで若者の負担が増えても、老人福祉対策をもっと充実すべきだ」(項目36)に代わって、「私的扶養」の初期モデルの3項目のうちの1項目「一般的に言って、高齢者が結婚した子どもと同居した場合あまりうまくいかない」(項目15)が加わった4項目から構成されている(図22)。

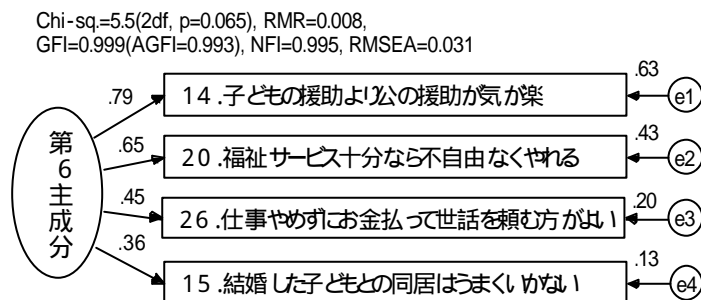


図21 . 第6主成分モデルの1因子モデル

この1因子モデルの適合度が極めて良好であることは、取りあげた全ての適合度判定指標が示している。「社会的扶養」に関する初期モデルの適合度も良好であったが、初期モデルにおける項目36よりも、この第6主成分モデルにおける項目15の方が重相関係数の平方の値が大きく、項目の信頼性が相対的に高いといえる。したがって、初期モデルに換えて、この第6主成分モデルを「社会的扶養志向」モデルとする方が適切であるということになる。

(10) 第9主成分モデル

共分散構造分析では、2項目から成る1因子モデルは、推定されるパラメータの数(4)

が標本積率の数(3)を超えてしまい、自由度(3 - 4)が負値(-1)となってモデルが識別されなくなる。また、3項目から成る1因子モデルでは、推定されるパラメータの数(6)と標本積率の数(6)が同数になって自由度(6 - 6)がゼロの飽和モデルになるから、既に触れたように適合度の判定ができなくなる(適合度を判定する必要がなくなる)。それぞれ、2項目、3項目、2項目から成っている第7、第8、第10主成分に基づく3つの主成分モデルが、これらに当たる。

第8主成分に関しては第3主成分モデルについて検討したときに取り上げたが、第7と第10主成分に関しては後に取り上げることにして、先に第9主成分モデルについて検討する。

第9主成分は、既に述べたが、初期モデルにおける「社会的扶養」の1項目(項目36)と「反抗」の1項目(項目23)、「私的扶養」の2項目(項目25と7)の4項目から構成されており、家族も社会も高齢者を大切に扶養すべきであるという認識を表す主成分と解釈することができよう。この4項目による1因子モデルはの適合度は概ね良好であると判断されるが、NFIとRMSEAが既に述べた一般的な基準値を満たしていない。

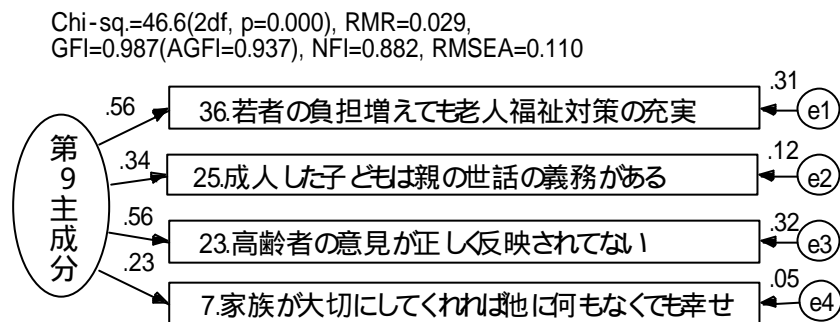


図22 . 第9主成分モデルの1因子モデル

4つの項目を見直すと、家族に関すること(項目25と7)と社会に関すること(項目36と23)の2グループに分けることができそうである。そこで、第9主成分モデルを「老人福祉」観と「家族意識(観)」を潜在変数とする2因子モデルに再構成したのが図23である。各因子の負荷量が1因子モデルよりも若干ではあるが大きくなり(したがって、重相関係数の平方値も大きくなって項目の信頼性が上昇し)、適合度も大きく改善されている。この2因子モデルは、高齢者が期待する高齢化社会観を表しているといえそうである。

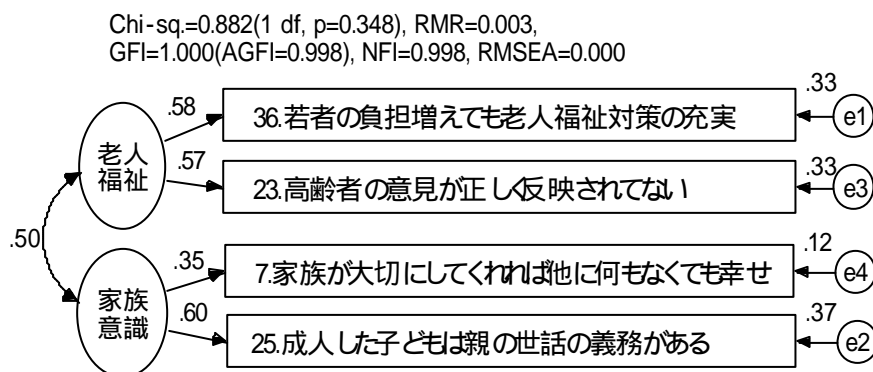


図23 . 第9主成分モデルの2因子モデル

(11) 第7主成分および第10主成分

この2つの主成分は、それぞれ単独では因子モデルを構成できないことを述べたが、その両者ともに地域生活あるいは地域社会に関することであるので、その両者を統合して地域社会観の1因子モデルとしたのが図24であり、各主成分をそれぞれ「肯定的地域社会観」と「否定的地域社会観」という潜在変数にして2因子モデルにしたのが図25である。

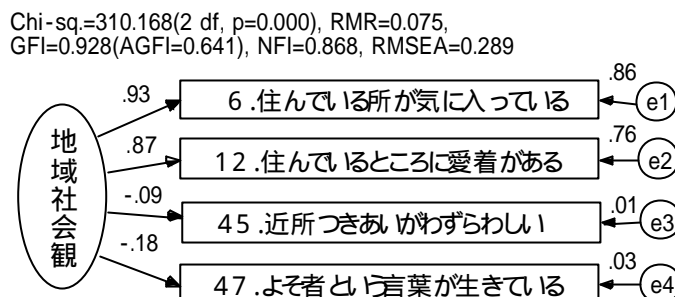


図24 . 第7・第10主成分から構成された地域社会観の1因子モデル

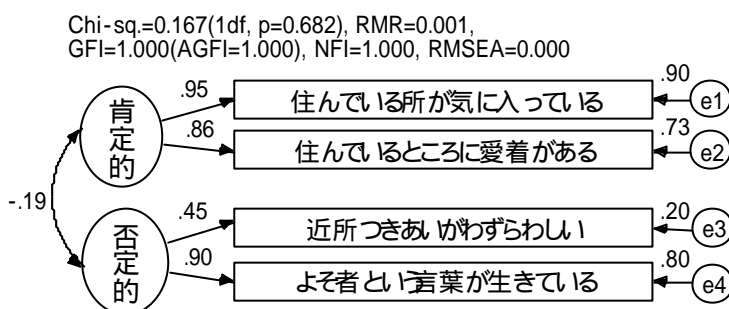


図25 . 第7・第10主成分から構成された地域社会観の2因子モデル

潜在変数間にはそれほど大きな逆相関はみられないが、この2因子モデルは高齢者の地域社会観を簡潔に説明しているといえる。

(12) 社会観の測定尺度の検討

高齢者の社会観の構造に関して検討してきたが、それらを構成する項目の合成得点を社会観の測定尺度とした場合の信頼性(内部一貫性)を検討するためにクロンバックの α を算出した。その結果を以下に記す。カッコ内の数値は標準化である。また、ある項目が削除された場合に元の項目群よりも α が大きくなる場合には、削除項目と削除された場合の α を記してある。なお、各項目の前につけたV471等の記号は各項目を識別するための便宜的な変数名である。

同調

- V471 子どもにとって今の世の中で成長することは幸せだ
 - V472 昔に比べて今の時代は高齢者にとって生活しやすい
 - V473 外国に比べて、日本では高齢者が大事にされている
 - V475 なんだかんだと言っても、今の日本はよい社会だ
- $\alpha = .6549$ (.6563) V471を除く3項目の場合の $\alpha = .6688$

革新 1

- V476 法律や規則、約束ごとを破っても、自分の望みを達成したほうが勝ちだ
- V477 出世や成功した人たちは、多かれ少なかれあくどいことをしてきたに違いない
- V478 現代を生き抜くためには、他人のことなど、かまっていられない
= .4975(.5023)

革新 2 (第 4 主成分)

- V476 法律や規則、約束ごとを破っても、自分の望みを達成したほうが勝ちだ
- V477 出世や成功した人たちは、多かれ少なかれあくどいことをしてきたに違いない
- V478 現代を生き抜くためには、他人のことなど、かまっていられない
- V507 今の世の中は人のことなど考えていたら損ばかりする
- V512 他人のために苦労するのは実にバカらしいことだ
= .6976(.6970)

儀礼

- V496 自分の考えにあわない点があっても、皆の意見に合わせて穏便にことを運びたい
- V497 高望みをして失敗するよりは、与えられたものに満足することが幸せにつながる
- V498 自分と同じくらいの年代の人がしていることと同じことをしていれば、まず、安心である
= .7136(.7145)

逃避

- V499 競争に追い立てられるよりは気ままに生きる方が幸せ
- V500 世の中、自分の思うようにならないのだから、あきらめたほうが賢い
- V501 世の中の動きは自分の生活にはあまり関係がない
= .6520(.6500)

反抗 1

- V470 今の世の中、高齢者の意見が正しく反映されていない
- V502 社会の色々な問題は少しくらいの手直では解決しない
- V503 今の政治家は本気になって社会問題を解決する気ない
- V504 今の日本には魅力を感じない
= .6487(.6474) V470を除く 3 項目の場合の = .6773

反抗 2

- V502 社会の色々な問題は少しくらいの手直では解決しない
- V503 今の政治家は本気になって社会問題を解決する気ない
- V504 今の日本には魅力を感じない
= .6773(.6806)

アパシー 1

- V493 社会活動は熱心な人にまかせておけばよい
- V494 私たちが少々がんばったところで政治はよくなる
- V495 政治がどうなろうと自分の生活には関係ないことだ
= .6614(.6618)

アパシー 2

- V493 社会活動は熱心な人にまかせておけばよい
V494 私たちが少々がんばったところで政治はよくなる
V495 政治がどうなろうと自分の生活には関係ないことだ
V508 今日が楽しければよく、明日は明日の風が吹く
= .6709(.6708)

逃避 + 儀礼 + アパシー 2 の 3 因子モデル (第 1 主成分)

- V499 競争に追い立てられるよりは気ままに生きる方が幸せ
V500 世の中、自分の思うようにならないのだから、あきらめたほうが賢い
V501 世の中の動きは自分の生活にはあまり関係がない
V496 自分の考えにあわない点があっても、皆の意見に合わせて穏便にことを運びたい
V497 高望みをして失敗するよりは、与えられたものに満足することが幸せにつながる
V498 自分と同じくらいの年代の人がしていることと同じことをしていれば、まず、安心である
V493 社会活動は熱心な人にまかせておけばよい
V494 私たちが少々がんばったところで政治はよくなる
V495 政治がどうなろうと自分の生活には関係ないことだ
V508 今日が楽しければよく、明日は明日の風が吹く
= .8379(.8388)

アノミー 1

- V505 一般庶民のことを真剣に考えている役人は少ない
V506 政治家や知識人が立派なことを言っても、本当に国民のことを考えているとは思えない
V507 今の世の中は人のことなど考えていたら損ばかりする
V508 今日が楽しければよく、明日は明日の風が吹く
V509 今の世の中何が正しく何が間違ってるのかわからない
V510 豊かな社会と言うが人々の生活は良くなっていない
V511 親しい間柄といっても、いざとなったら信頼できない
V512 他人のために苦勞するのは実にバカらしいことだ
=.8165(.8185) V508を除く 7 項目の場合の =.8169

アノミー 2

- V505 一般庶民のことを真剣に考えている役人は少ない
V506 政治家や知識人が立派なことを言っても、本当に国民のことを考えているとは思えない
V509 今の世の中何が正しく何が間違ってるのかわからない
V510 豊かな社会と言うが人々の生活は良くなっていない
=.7459(.7526) V509を除く 3 項目の場合の =.7701

アノミー 3

- V507 今の世の中は人のことなど考えていたら損ばかりする
V512 他人のために苦勞するのは実にバカらしいことだ
=.6842(.6842)

第 2 主成分 (社会に対する不信感または厭世観 = アノミー 2 + 反抗 2)

- V502 社会の色々な問題は少しくらいの手直では解決しない

- V503 今の政治家は本気になって社会問題を解決する気ない
 V504 今の日本には魅力を感じない
 V505 一般庶民のことを真剣に考えている役人は少ない
 V506 政治家や知識人が立派なことを言っても、本当に国民のことを考えているとは思えない
 V509 今の世の中何が正しく何が間違ってるのかわからない
 V510 豊かな社会と言うが人々の生活は良くなっていない
 = .8308(.8344) V509を除く6項目の場合の = .8341

否定的人間観 1

- V486 青少年に何よりも必要なのは親の厳しいしつけだ
 V487 今の世の中は義理人情がすたれて暮らしにくくなった
 = .5992(.5993)

否定的人間観 2

- V486 青少年に何よりも必要なのは親の厳しいしつけだ
 V487 今の世の中は義理人情がすたれて暮らしにくくなった
 V511 親しい間柄といっても、いざとなったら信頼できない
 = .5460(.5499) V511を除く2項目の場合の = .5992

権威主義 1 (第3主成分)

- V485 権威ある人にはつねに敬意をはらわなくてはいけない
 V488 今の時代でも、やはり家柄や家格は大切にすべきである
 V489 目上の人には、自分をおさえても従うべきである
 V490 昔からあるしきたりや習慣は今日でも大切にすべきである
 V491 何かを決めるときは従来やり方に従っておくのが無難だ
 V492 専門家や指導者の言うことに従っていれば間違いない
 = .7862(.7891)

権威主義 2 (権威主義 1 + 否定的人間関係観 1)

- V485 権威ある人にはつねに敬意をはらわなくてはいけない
 V486 青少年に何よりも必要なのは親の厳しいしつけだ
 V487 今の世の中は義理人情がすたれて暮らしにくくなった
 V488 今の時代でも、やはり家柄や家格は大切にすべきである
 V489 目上の人には、自分をおさえても従うべきである
 V490 昔からあるしきたりや習慣は今日でも大切にすべきである
 V491 何かを決めるときは従来やり方に従っておくのが無難だ
 V492 専門家や指導者の言うことに従っていれば間違いない
 = .7777(.7780) V487を除く7項目の場合の = .7790

権威主義 3 (権威主義 1 + 否定的人間関係観 2)

- V485 権威ある人にはつねに敬意をはらわなくてはいけない
 V486 青少年に何よりも必要なのは親の厳しいしつけだ
 V487 今の世の中は義理人情がすたれて暮らしにくくなった
 V488 今の時代でも、やはり家柄や家格は大切にすべきである
 V489 目上の人には、自分をおさえても従うべきである
 V490 昔からあるしきたりや習慣は今日でも大切にすべきである
 V491 何かを決めるときは従来やり方に従っておくのが無難だ

V492 専門家や指導者の言うことに従っていれば間違いない
V511 親しい間柄といっても、いざとなったら信頼できない
= .7671(.7679) V511を除く8項目の場合の = .7777

私的扶養

V479 なんだかんだと言っても、成人した子どもには、年をとった親の世話をする義務がある
V480 一般的に言って、高齢者が結婚した子供と同居した場合あまりうまくいかない
V481 家族が大切にしてくれれば、ほかに何もなくても高齢者は幸せだ
= .3538(.3523)

社会的扶養志向 1

V468 税金などで若者の負担が増えても、老人福祉対策をもっと充実すべきだ
V482 職業を持っている女性が親の世話をしなければならなくなった場合には、仕事をやめるよりも、お金をはらって誰かに世話をしてもらったほうがよい
V483 高齢者にとって、子供に援助を頼むよりは、公の援助を求める方が気が楽だ
V484 ホームヘルパーとか食事の配達などの福祉サービスが十分に行われていれば、子供の援助がなくても高齢者は不自由なくやっていける
= .5729(.5675) V468を除く3項目の場合の = .6569

社会的扶養志向 2 (第6主成分)

V480 一般的に言って、高齢者が結婚した子供と同居した場合あまりうまくいかない
V482 職業を持っている女性が親の世話をしなければならなくなった場合には、仕事をやめるよりも、お金をはらって誰かに世話をしてもらったほうがよい
V483 高齢者にとって、子供に援助を頼むよりは、公の援助を求める方が気が楽だ
V484 ホームヘルパーとか食事の配達などの福祉サービスが十分に行われていれば、子供の援助がなくても高齢者は不自由なくやっていける
= .6435(.6406) V480を除く3項目の場合の = .6569

敬老観 (第9主成分)

V468 税金などで若者の負担が増えても、老人福祉対策をもっと充実すべきだ
V470 今の世の中、高齢者の意見が正しく反映されていない
V479 なんだかんだと言っても、成人した子どもには、年をとった親の世話をする義務がある
V481 家族が大切にしてくれれば、ほかに何もなくても高齢者は幸せだ
= .4654(.4690)

老人福祉

V468 税金などで若者の負担が増えても、老人福祉対策をもっと充実すべきだ
V470 今の世の中、高齢者の意見が正しく反映されていない
= .4960(.4971)

家族意識

V479 なんだかんだと言っても、成人した子どもには、年をとった親の世話をする義務がある
V481 家族が大切にしてくれれば、ほかに何もなくても高齢者は幸せだ
= .3470(.3470)

肯定的地域観

V513 いま住んでいるところが気に入っている

V514 いま住んでいるところに愛着がある

= .8940(.8953)

否定的地域観

V515 今住んでいる地域ではよそ者という言葉が生きている

V516 近所の人たちと付き合いにはわずらわしいことが多い

= .5724(.5724)

クロンバックの α は0から1の範囲をとり、それが1に近いほど、その尺度の信頼性が高いとみなされる。この α は、尺度を構成する各項目(の得点)間の関連性および各項目の得点と合計点との関連性の高さから尺度の信頼性を判定する係数であるところから内部一貫性に着目した信頼性係数として知られている。測定対象に関するある項目で高い得点をとれば、他の項目でも高い得点をとるはずであり、その結果、合計得点も当然のことながら高くなるはずである。もし、各項目の得点間や各項目の得点と合計点との間に何の関連もなければ、それぞれの項目は、それぞれ別の対象を測定していることになり、それらの得点の合計が何を測定した結果なのか特定できなくなる。これが α 係数で信頼性を判定する論拠である。

たとえば、果物(一般)の好き嫌いを判定するときに、みかんとスイカ、バナナそれぞれの好き嫌いの程度を得点化し、その合計点で果物の選好度を判定することを考えてみよう。みかんやリンゴ、柿は好きだけれどスイカやイチゴ、梨は嫌いで、バナナや葡萄、メロンは好きでも嫌いでもない、といったように、一口に果物といっても、その種類は多く、人によってそれらの好き嫌いは千差万別であろう。したがって、みかんとスイカ、バナナで果物の選好度を判定するのは適切ではないかもしれない。みかんが好きならスイカやバナナも当然好き、あるいはその逆に、みかんが嫌いならスイカやバナナも当然嫌いとは言えないし、みかんが好きなら果物は当然好き、あるいはその逆に、みかんが嫌いなら果物は当然嫌いということも、また、当然のことながら言えない。この場合、各種の果物に対する人々の好悪に関する因子分析や多次元尺度法、クラスター分析などの結果に基づいて各種の果物を事前に類型化しておくことも一つの方法である。そうした分析の結果、各種の果物は幾つかの類型に分類されよう。たとえば、みかんとスイカ、バナナが一つの類型を構成することになったとすれば、みかんとスイカ、バナナの好悪にはそれぞれ関連性があると判断することができる。

しかし、みかんとスイカ、バナナが一つの類型を構成することになったからといって、それら3つで構成される尺度の α 係数が高い値をとるとは限らない。因子分析のように、同一の因子に所属する項目であっても、それは、取り上げた他の諸項目と比較した場合に、それら項目が他の因子とではなく、その因子と相対的に高い相関関係を有していることを意味しているのであって、各項目(の得点)間の相関それ自体が高いことを意味しているわけでもなければ、各項目の得点と合計得点との相関が高いことを意味しているわけでもないからである。したがって、 α 係数の観点から言えば、みかんとスイカ、バナナが一つの類型を構成することになったからといって、この3つによって構成される果物類型の選好

度を、それぞれの好悪度得点の合計点で判定してよいことにはならない。

しかし、また、別稿で詳述したように(小田, 1995)、その対象を測定する有効な尺度がなかった場合には、たとえ係数の値が十分ではないとしても、その尺度を用いるしかないし、何の尺度も用意せずに対象に向かうよりは、ずっとましである。一般的にクロンバックの α の値が0.7以上であれば信頼性の高い尺度とみなされるが、その値がどれくらいでなければならないかという明確な基準があるわけではない。 α の値を高くしようとすれば、相関の高いものだけを集めればよい。しかし、そうしようとすれば、よく似たような項目ばかりになり、複数の項目で尺度を構成する意味も薄れてしまう。

以上のように、 α 係数は、その尺度の内部一貫性の程度を判断する一つの材料であって、その尺度の有効性そのものを判定する絶対的な基準を与えるものではない。本稿で、各尺度の α 係数の値を全て提示したのはそのためである。

おわりに

本稿では、神戸市在住の65歳以上の男女を対象として実施した大規模標本調査の結果に基づいて、日本人口の年齢構造におけるセカンド・マジョリティ・グループとしての高齢者の社会観と、その構造を明らかにすることを試みた。取り上げた測定項目は、「伝統的保守主義・権威主義」、「アパシー」、「アノミー」、「私的扶養」、「社会的扶養」、「地域生活」、R・マートンが適応様式としてあげた「同調」、「革新」、「儀礼」、「逃避」、「反抗」の5類型の計11分類48項目である。

個別項目の回答結果から先行研究との関係に触れれば、全体的には、高齢者の多くは決して保守的ではない、というこれまでの多くの研究を裏打ちすることになった。しかし、「伝統的保守主義・権威主義」的社会観を構成する6項目のうち、「昔からあるしきたりや習慣は今日でも大切にすべきである」という意見に対しては「全くそう思う」と強く同意する高齢者が22.1%、「そう思う」が50.6%と全体の約70%が同意している。そして、「伝統的保守主義・権威主義」的社会観を構成する6項目すべてにおいて、年齢が高いほど、そうした意見に同意する割合が大きくなっており、多くの項目において低学歴層あるいは既婚子との同居世帯層に、そうした意見に同意する高齢者が相対的に多くなっている。

政治的、社会的無関心が現代社会の課題として論じられることが多いが、今回の調査結果に基づいていえば、高齢者にはそうした無関心層は少なく、むしろ、その反対に、社会問題に対するに厳しい認識と政治家や専門的知識人、役人に対する不信感をもっている高齢者が多いことが明らかになった。しかし、他方では、「私たちが少々がんばったところで政治はよくなる」という高齢者は多く、「高望みせずに」、「気ままに生きることが幸せ」と考えている高齢者も多い。

回答を得点化して主成分分析を行った結果、10個の主成分が抽出された。各主成分に所属する項目と当初設定した分類に所属する項目とは異なることになったので、主成分分析の結果を参考にしながら、あらためて共分散構造分析による検証的因子分析を試み、モデルの適合性を検討した。そして、そのモデルをもとに測定尺度を作成し、尺度の信頼性の検討を行った。その結果、以下のような高齢者の社会観測定尺度が作成された。なお、括

弧内の数値はクロンバックの係数の値である。

同調(.6549)、革新1(.4975)、革新2(.6976)、儀礼(.7136)、逃避(.6520)、反抗1(.6487)、反抗2(.6773)、アパシー1(.6614)、アパシー2(.6709)、逃避+儀礼+アパシー2の3因子モデル(.8379)、アノミー1(.8165)、アノミー2(.7459)、アノミー3(.6842.)、社会に対する不信感または厭世観 = アノミー2 + 反抗2(.8308)、否定的人間観1(.5992)、否定的人間観2(.5460)、権威主義1(.7862)、権威主義2(.7777)、権威主義3(.7671)、私的扶養(.3538)、社会的扶養志向1(.5729)、社会的扶養志向2(.6435)、敬老観(.4654)、老人福祉(.4960)、家族意識(.3470)、肯定的地域観(.8940)、否定的地域観(.5724)。

以上、本稿では、セカンド・マジョリティ・グループとしての高齢者の社会観の一端と、その構造を明らかにしえたと考えるが、社会観の個人差については項目ごとの結果を述べた際にごく簡単にしか触れることができなかつた。また、社会観と老後生活観や幸福感、老年観などとの関係についても触れることができなかつた。それらについての詳細は、別の機会にあらためて報告することとしたい。

文 献

- Binstock and Day (1996). *Aging and Politics*, in R. H. Binstock and Linda K. George eds., *Handbook of Aging and Social Sciences* (fourth edition), Academic Press.
- Cutler, N. E. (1977). Demographic, Social-Psychological, and Political Factors in the Politics of Aging: A Foundation for Research in "Political Gerontology", *American Political Science Review*, 71.
- Cutler, S. J. (1987). Attitudes, in G. Maddox et al. eds., *The Encyclopedia of Aging*, Springer (『エイジング大事典』早稲田大学出版部、1990年)。
- Fengler, A. P. and V. Wood (1972). The Generation Gap: An Analysis of Attitudes on Contemporary Issues, *Gerontologist*, 12.
- Merton, R. K. (1957). *Social Theory and Social Structure: Toward the Codification of Theory and Research*, The Free Press (森東吾ほか訳『社会理論と社会構造』みすず書房、1961年)。
- 中嶋康之・小田利勝 (2001). 「サクセスフル・エイジングのもう一つの観点 - ジェロトランセンデンス理論の考察 - 」『神戸大学発達科学部研究紀要』8巻2号。
- 小田利勝 (1991a). 「高齢者の適応に関する概念的考察」『徳島大学社会科学研究』4号。
- 小田利勝 (1991b). 「老後を自由に生きる」『いのち輝く』8号、徳島県高齢者総合相談センター。
- 小田利勝 (1992). 「高齢化社会における日本家族の伝統性と革新性 - 高齢者の家族扶養に焦点を当てて - 」日本大学総合科学研究所編『現代日本文化と家族』日本大学総合科学研究所。
- 小田利勝 (1993). 「サクセスフル・エイジングに関する概念的考察」『徳島大学社会科学研究』第6号。
- 小田利勝 (1995). 「高齢化社会クイズの目的と性格 - 」『徳島大学社会科学研究』第8号。
- 小田利勝 (1998). 「退職に関する新たな視点とサード・エイジの生活課題」『神戸大学発達科学部研究紀要』5巻2号。
- 小田利勝 (1999). 「高齢期における自立生活と日常生活活動能力をめぐって」『神戸大学発達科学部研究紀要』7巻1号。
- 小田利勝 (2000). 「高齢者の老年規範意識の構造」『神戸大学発達科学部研究紀要』8巻1号。
- 小田利勝 (2001). 「いま、なぜサードエイジか」『人間科学研究』8巻2号、神戸大学発達科学部人間科学研究センター
- Rose, A. M. (1965). Group Consciousness among the Aged, in A. M. Rose and W. A. Peterson eds., *Older People and Their Social World*, F. A. Davis.
- Strole, Leo (1956). Social Integration and Certain Corollaries, *American Sociological Review*, December.
- Tunstall, Jeremy (1965). *Old and Alone: A Sociological Study of Old People*, Routledge & Kegan Paul (光信隆夫訳『老いと孤独 - 老年者の社会学的研究』垣内出版、1978年)。

第11章 高齢者の日常的コンピテンス／ライフスキルの構造

1．問題の所在と本稿の目的

既に述べたように、日常的コンピテンス(everyday competence)とは、自立生活を送るために日常生活を効果的に調整し、日常生活に必須な諸活動を行うことができる能力(ability)または潜在的可能性(potential)のことである。高齢期における日常的コンピテンスやライフスキル／リビングスキルに関する概念的、理論的論議は近年になってかなり盛んになってきてはいるが、すでに触れたが、Diehl(1998)がいみじくも指摘しているように、高齢者のコンピテンス／ライフスキルを評価するめに‘gold standard’として一般的に受け入れられている測定項目や測定尺度は未だないといってよく、適切な尺度の作成が求められている。そこで、本稿では、そうした試みの一端として、高齢期における日常的コンピテンスやライフスキル／リビングスキルの構造分析に基づいて測定尺度を開発し、それら尺度を用いてコンピテンス／ライフスキルが高齢期における生活満足感／幸福感や老化度に及ぼす影響を明らかにしてみたい。

2．測定項目とデータ

(1) 測定項目

日常的コンピテンスやライフスキルに関わる項目には、既に見てきたように数多くのものがあげられている。それらの幾つかについても既に詳細に検討したが、本稿では、一般にADLあるいはIADLに関わる項目に関しては取り上げず、Baltesのいう3つの次元や『リビングスキル』でいう心理社会的スキル(注を参照)に関わる項目として作成した117項目を取り上げることにする(注)。

それら各項目に関して、「次のような事柄は、あなた自身に、どれくらい当てはまりますか」と尋ね、「自分にピッタリ当てはまる」、「自分にだいたい当てはまる」、「自分にはあまり当てはまらない」、「自分には全然当てはまらない」の4つの選択肢を用意し、どれか一つを選ぶように依頼した。

(2) データ

本稿で扱うデータは、神戸市在住の65歳以上の男女5,000人を対象とする郵送調査から得られたものの一部である。対象者の抽出方法や回答者の属性は既に述べた通りである。

3．結果

(1) 頻度分布

測定項目として取り上げた117項目に関する2,732票の回答の頻度分布を図1～図8に示す。これら図は、「自分にピッタリ当てはまる」の選択率と「自分にだいたい当てはまる」の選択率の合計が大きい順に並べ直したものである。

上位12位までは、その選択率がほぼ70%ないしは70%を超えており、これらは高齢者に共通する日常的なスキル/コンピテンスに関わる項目であるといえる。それを順にあげると、「他の人の喜びや悲しみをいっしょに分かち合える」、「物事を現実的に考える（ないものねだりをしない）」、「人に優（やさ）しい」、「何かするとき、もっと良い別のやり方はないかと考える」、「私は自分の周囲の人たちとうまくいっている」、「他人や仕事に対して、まじめで真心がこもっている」、「問題が起きたとき、なぜそうなったをじっくり考える」、「頼りになる家族をもっている」、「何をするにも早めに計画を立てるようにしている」、「何をするにも、たいていは自分で決めている」、「頼りになる子どもを持っている」、「何かするとき、準備や段取り（だんどり）をしっかりとやる」である。

中でも、「問題が起きたとき、なぜそうなったかを考える」や「たよりになる家族をもっている」、「何をするにも早めに計画を立てるようにしている」、「何をするにも、たいていは自分で決めている」、「たよりになる子どもを持っている」、「何かをするとき、準備や段取りをしっかりとやる」といった項目に関しては、20～26%の高齢者が「自分にピッタリ当てはまる」と答えている。

逆に、大多数の高齢者が、「自分にはあまり当てはまらない」あるいは「自分には全然当てはまらない」と答えた項目は、「必要なものを手に入れるためには他人を傷つけることもある」、「外国語ができる」、「ポルノ雑誌や成人向き映画に興味がある」、「社会的地位が高い方だ」、「家にいても落ちつかず、誰かを訪ねてみたくなる」、「どっちかというと下品な方だ」、「なかなかの美人（男前）である」、「人からよく誤解される」、「人の意見にまどわされて、後悔することが多い」、「ちょっとしたイタズラやお茶目なことをするのが楽しい」、「歯が丈夫である」、「字が上手である」の12項目である。

とくに「必要なものを手に入れるためには他人を傷つけることもある」、「ポルノ雑誌や成人向き映画に興味がある」、「外国語ができる」の3項目に関しては、「自分には全然当てはまらない」と答えた高齢者が50～60%を占めている。

個々の項目に関する以上の結果を詳細に検討することも興味あるところであるが、次に、それら117項目を整理・集約するために回答を得点化して主成分分析を行い、その結果を参考に高齢者のコンピテンス/ライフスキルの構造を共分散構造分析によって明らかにし、高齢者のコンピテンス/ライフスキルの測定尺度の開発へ向けた予備的考察を行うこととする。

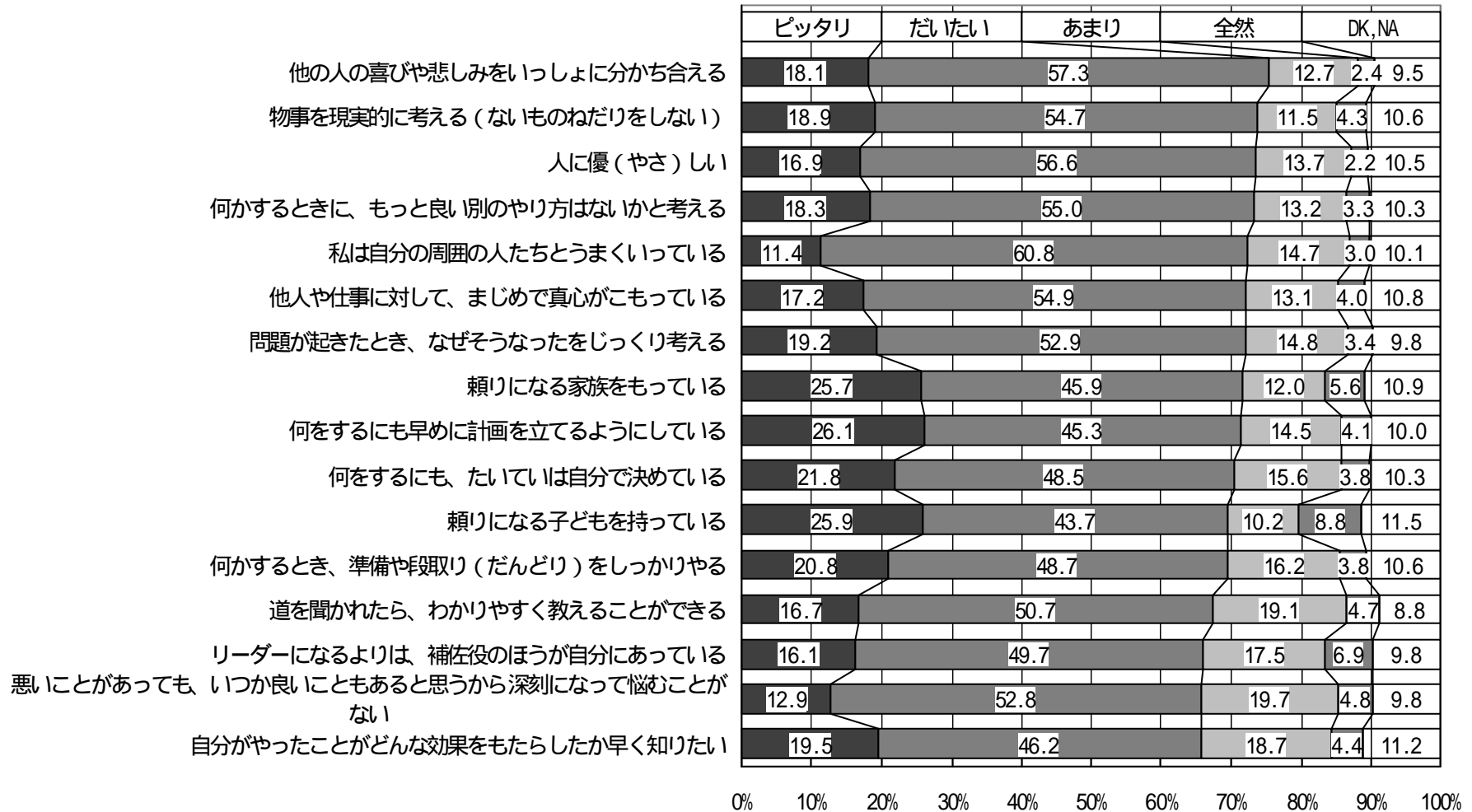


図1 . 頻度分布 - その1

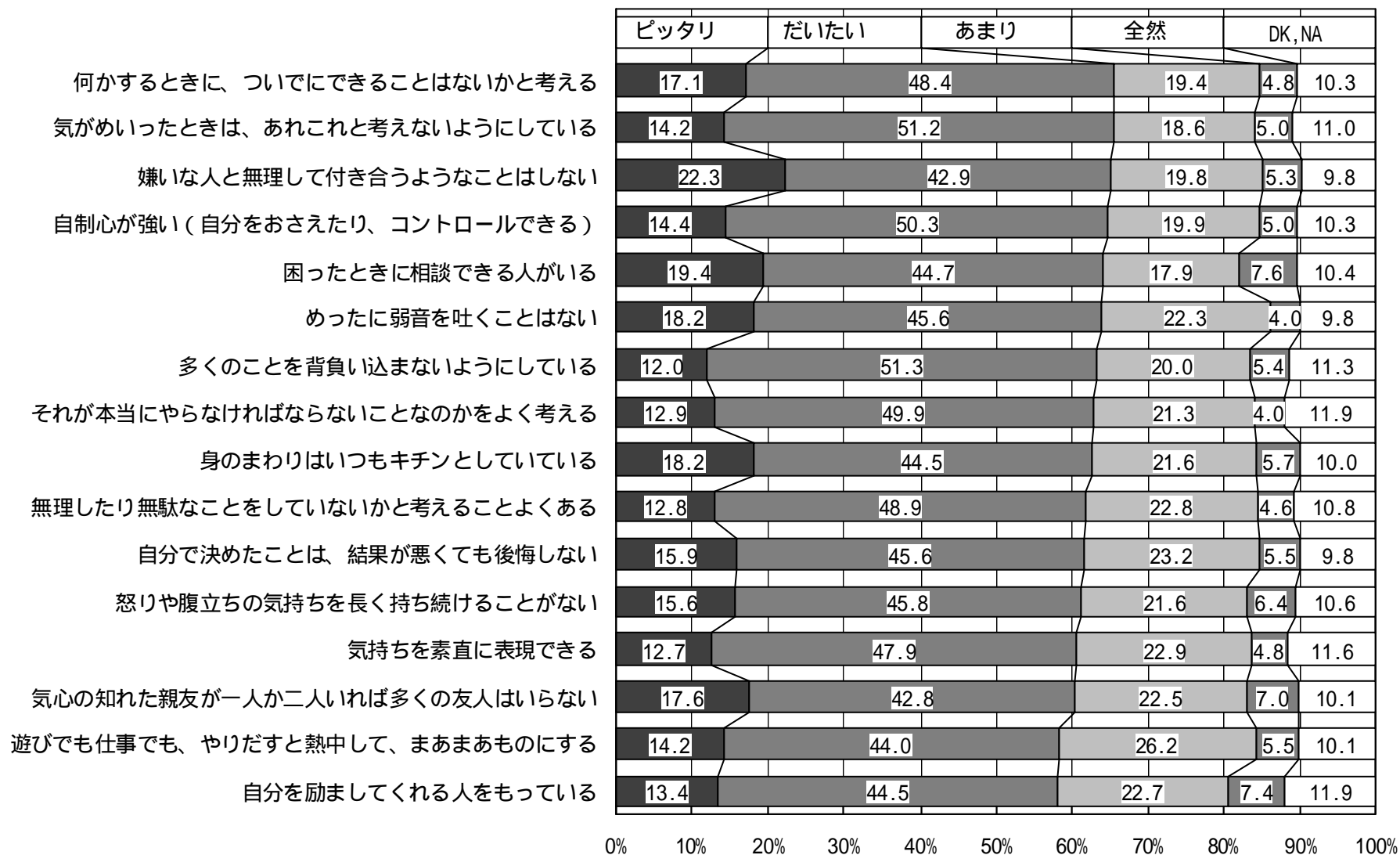


図2 . 頻度分布 - その2

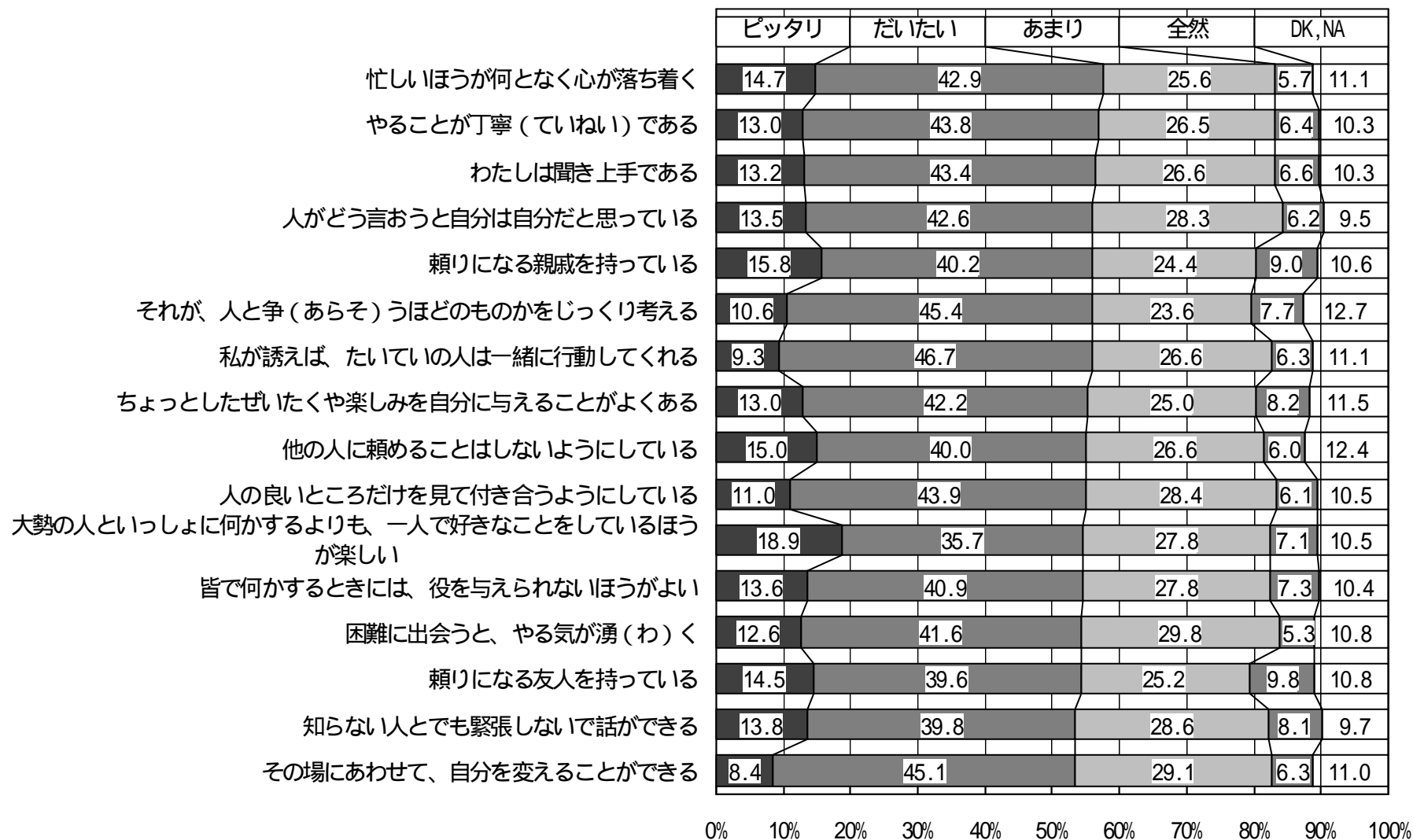


図3 . 頻度分布 - その3

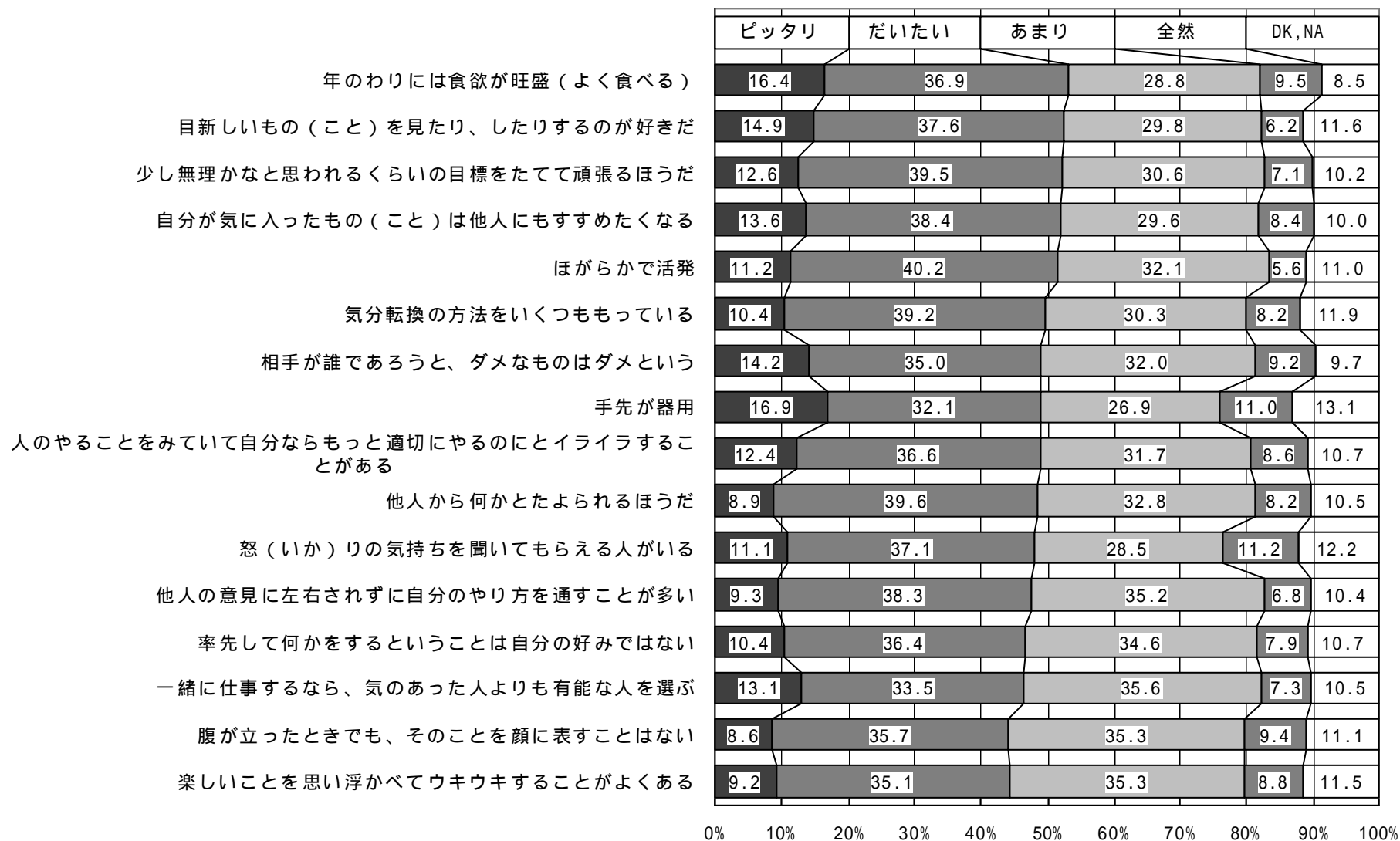


図4 . 頻度分布 - その4

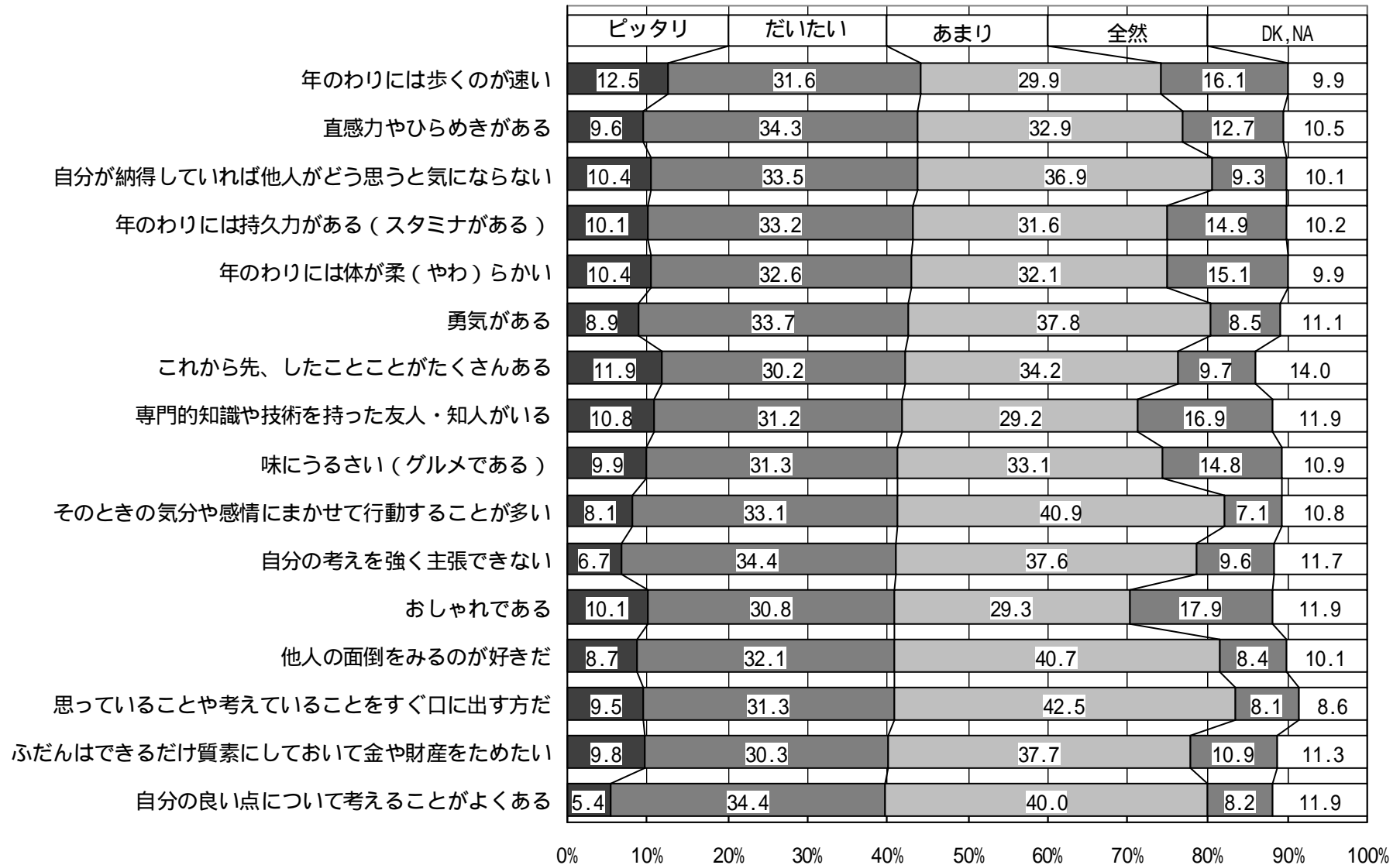


図5．頻度分布 - その5



図6 . 頻度分布 - その6

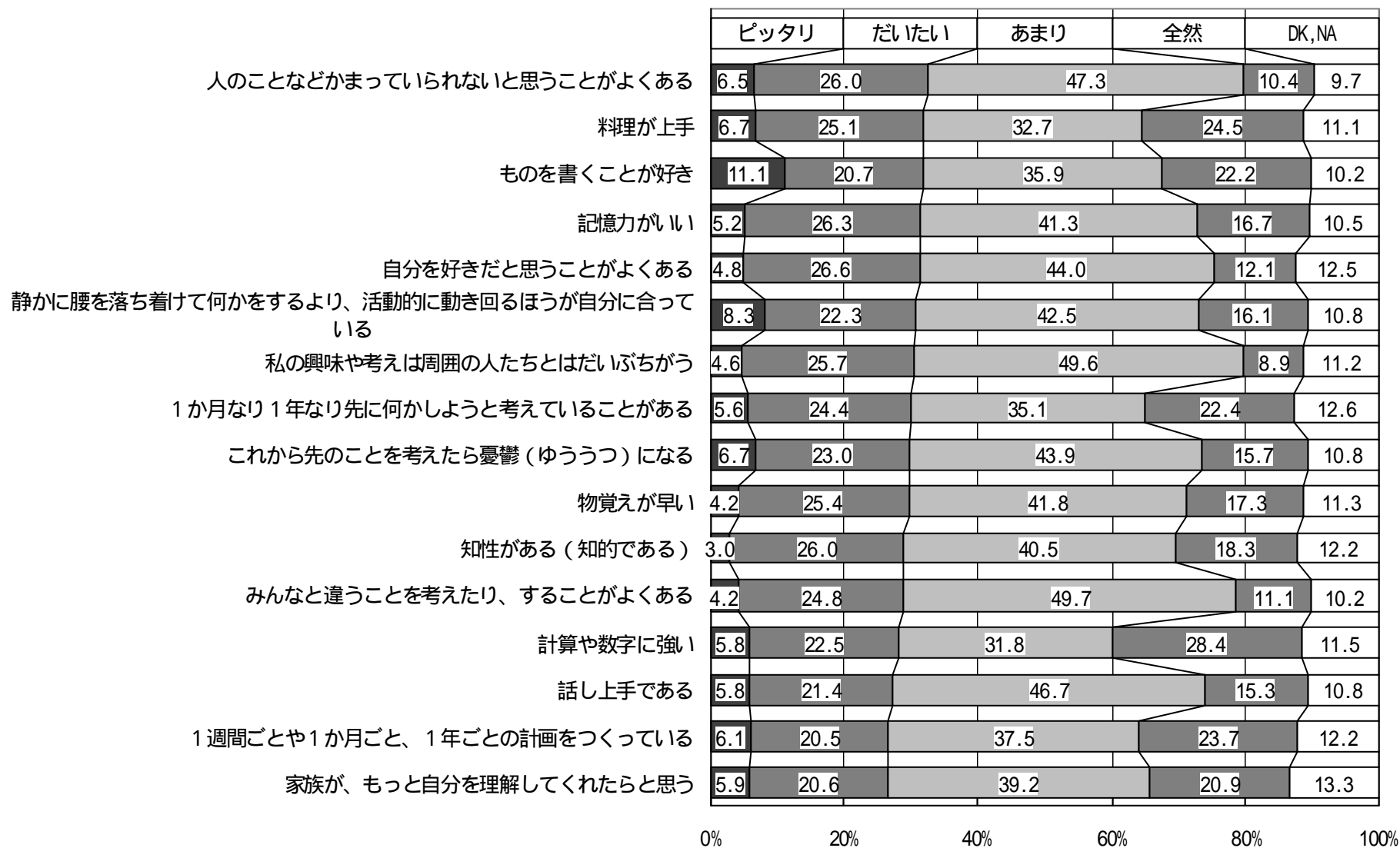


図7．頻度分布 - その7

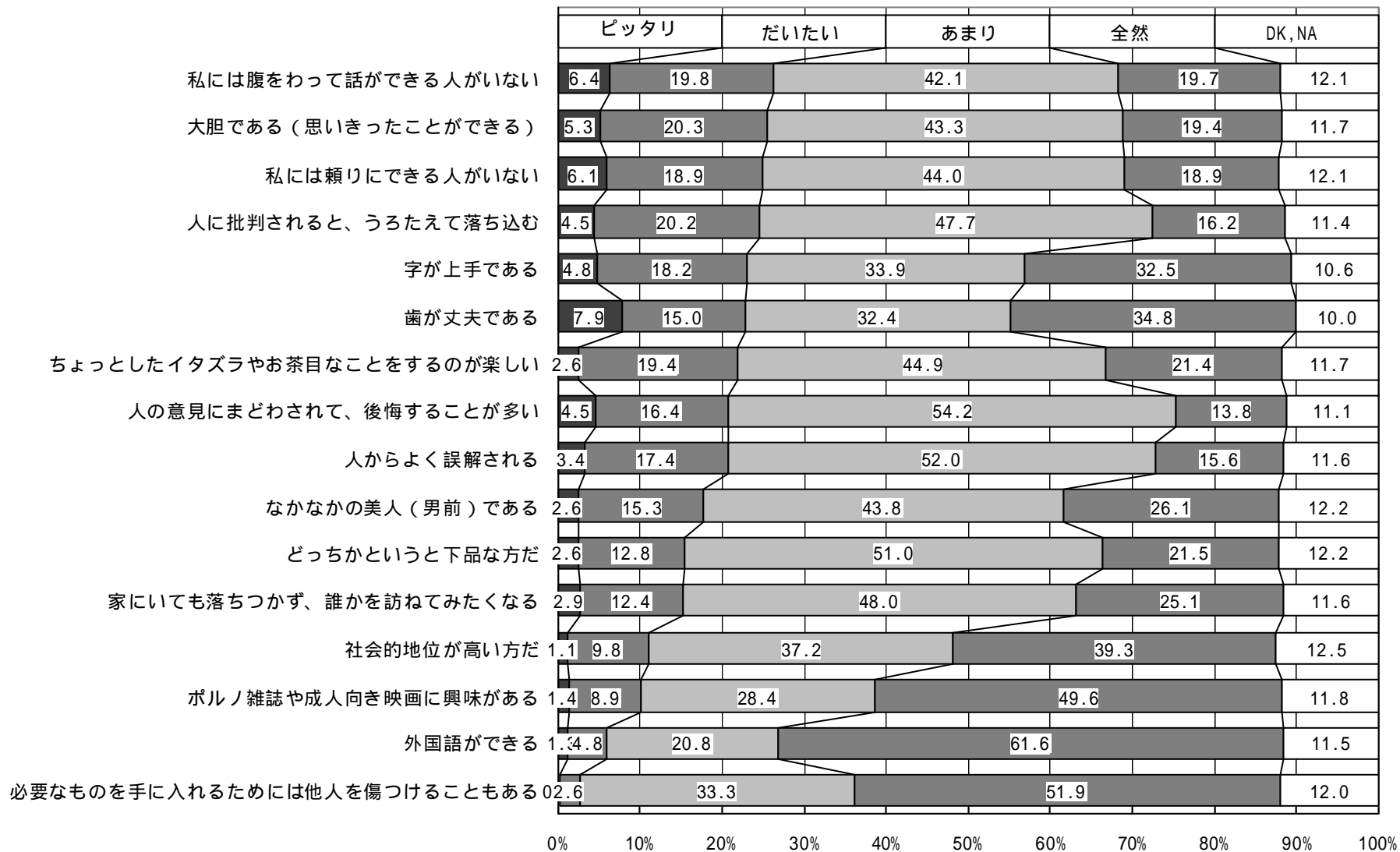


図 8 . 頻度分布 - その 8

(2) 高齢者のコンピテンス/ライフスキルの構造

「自分にピッタリ当てはまる」に4点、「自分にだいたい当てはまる」に3点、「自分にはあまり当てはまらない」に2点、「自分には全然当てはまらない」に1点を与えて主成分分析を行った結果、固有値が1以上の主成分が30個抽出された(表1、表2)。累積寄与率は61.1%である。

表1 . 固有値と寄与率

主成分	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
固有値	6.35	5.54	4.00	3.43	3.42	3.39	3.26	3.22	3.17	2.87
寄与率(%)	5.0	4.3	3.1	2.7	2.7	2.6	2.6	2.5	2.5	2.2
累積寄与(%)	5.0	9.3	12.4	15.1	17.8	20.4	23.0	25.5	28.0	30.2
主成分	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
固有値	2.85	2.80	2.48	2.45	2.35	2.32	2.30	2.11	2.04	1.97
寄与率(%)	2.2	2.2	1.9	1.9	1.8	1.8	1.8	1.6	1.6	1.5
累積寄与(%)	32.4	34.6	36.6	38.5	40.3	42.1	43.9	45.6	47.2	48.7
主成分	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
固有値	1.81	1.77	1.70	1.68	1.63	1.55	1.50	1.45	1.39	1.37
寄与率(%)	1.4	1.4	1.3	1.3	1.3	1.2	1.2	1.1	1.1	1.1
累積寄与(%)	50.1	51.5	52.8	54.1	55.4	56.6	57.8	58.9	60.0	61.1

第1主成分には14個の項目が所属している。それらは、「何かするとき、もっと良い別のやり方はないかと考える」や「何かするとき、ついでにできることはないかと考える」、「問題が起きたとき、なぜそうなったかをじっくり考える」、「無理したり無駄なことをしていないかと考えることができる」といった「合理的思考」としてまとめることができる4項目と、「アスピレーション」としてまとめることができる10項目からなっている。そのことをAmos4を用いた共分散構造分析で検証したのが図9である。

各種の適合度指標からみても、この2因子モデルの適合度は良好である。なお、GFIの括弧内は調整済みの値であり、RMSEAの括弧内は下限値と上限値である。このモデルは、残差間の相関を認めた制約の緩いモデルであるが、残差間の相関を認めない場合の各種適合度指標の値もChi-square=674.9(76df, p=0.000), GFI=0.932(0.905), NFI=0.898, RMR=0.027, RMSEA=0.076(0.071, 0.081)と比較的良好である。そして、それらは、第1主成分に所属する14項目すべてを含む1因子モデルの適合度指標Chi-square=1,127.7(77df, p=0.000), GFI=0.883(0.840), NFI=0.829, RMR=0.033, RMSEA=0.100(0.095, 0.105)と比べると、はるかに良好である。

なお、「アスピレーション」10項目による適合度指標は次の通りである。Chi-square=501.2(35df, p=0.000), GFI=0.928(0.887), NFI=0.866, RMR=0.032, RMSEA=0.099(0.092, 0.107)。

表2 . バリマックス回転後の主成分行列

主成分		平均値	S D	共通性	負荷量
1	何かするときに、もっと良い別のやり方はないかと考える	2.952	.689	.664	.690
	何かするときに、ついでにできることはないかと考える	2.817	.755	.591	.665
	問題が起きたとき、なぜそうなったをじっくり考える	2.941	.701	.644	.639
	困難に出会うと、やる気が湧(わ)く	2.671	.750	.662	.624
	自分の力をためすようなことをやるのが好きだ	2.386	.781	.613	.591
	無理したり無駄なことをしていないかと考えることよくある	2.741	.713	.598	.587
	忙しいほうが何となく心が落ち着く	2.705	.770	.591	.553
	めったに弱音を吐くことはない	2.827	.771	.633	.537
	人のやることをみている自分ならもっと適切にやるのにとイライラすることがある	2.585	.819	.544	.526
	目新しいもの(こと)を見たり、したりするのが好きだ	2.651	.794	.561	.508
	自分がやったことがどんな効果をもたらしたか早く知りたい	2.879	.752	.554	.473
	少し無理かなと思われるくらいの目標をたてて頑張るほうだ	2.600	.781	.567	.438
	一緒に仕事するなら、気のあった人よりも有能な人を選ぶ	2.532	.810	.516	.381
	遊びでも仕事でも、やりだすと熱中して、まあまあものにする	2.727	.755	.534	.347
2	物覚えが早い	2.201	.775	.785	.815
	記憶力がいい	2.223	.783	.763	.798
	知性がある(知的である)	2.209	.768	.732	.748
	直感力やひらめきがある	2.467	.838	.628	.609
	なかなかの美人(男前)である	1.988	.729	.614	.592
	計算や数字に強い	2.139	.904	.568	.575
	社会的地位が高い方だ	1.712	.712	.590	.434
3	他人から何かとたよられるほうだ	2.522	.747	.723	.727
	他人の面倒をみるのが好きだ	2.421	.744	.655	.686
	周囲の人が私に何を期待しているか、よくわかっている	2.330	.752	.616	.607
	私が誘えば、たいていの人は一緒に行動してくれる	2.656	.728	.579	.521
	自分が気に入ったもの(こと)は他人にもすすめてくなる	2.612	.796	.534	.448
	私は自分の周囲の人たちとうまくいっている	2.858	.614	.626	.382
4	静かに腰を落ち着けて何かをするより、活動的に動き回るほうが自分に合っている	2.222	.813	.499	.326
	年のわりには持久力がある(スタミナがある)	2.408	.850	.734	.770
	年のわりには歩くのが速い	2.436	.895	.672	.702
	病気になるにくい頑丈(がんじょう)な体をもっている	2.286	.846	.565	.694
	年のわりには体が柔(やわ)らかい	2.393	.864	.623	.666
5	年のわりには食欲が旺盛(よく食べる)	2.621	.847	.584	.565
	歯が丈夫である	1.970	.924	.392	.423
	人がどう言おうと自分は自分だと思っている	2.686	.774	.728	.822
	自分が納得していれば他人がどう思うと気にならない	2.522	.781	.682	.804
6	他人の意見に左右されずに自分のやり方を通すことが多い	2.554	.749	.669	.757
	自分で決めたことは、結果が悪くても後悔しない	2.789	.769	.534	.573
	人のことなどがまわっていられないと思うことがよくある	2.318	.725	.494	.411
	何をすることも早めに計画を立てるようにしている	2.988	.775	.673	.689
7	何かするときに、準備や段取り(だんどり)をしっかりやる	2.948	.743	.670	.595
	他の人に頼めることはしないようにしている	2.674	.787	.515	.587
	それが本当にやらなければならないことなのかをよく考える	2.774	.715	.598	.541
	身のまわりはいつもキチンとしている	2.773	.789	.566	.501
	何をすることも、たいていは自分で決めている	2.922	.755	.488	.422
8	私には腹をわって話ができる人がいない	2.147	.813	.753	.826
	私にはたよりにできる人がいない	2.134	.791	.706	.790
	何かあったとき、私を誘ってくれる人は少ない	2.354	.733	.595	.630
	家族が、もっと自分を理解してくれたらと思う	2.119	.803	.480	.511
9	物事を現実的に考える(ないものねだりをしない)	2.989	.678	.680	.713
	自制心が強い(自分をおさえたり、コントロールできる)	2.799	.734	.670	.680
	その場にあわせて、自分を変えることができる	2.621	.703	.549	.546
	やることが丁寧(ていねい)である	2.707	.770	.615	.363
10	腹が立ったときでも、そのことを顔に表すことはない	2.423	.768	.480	.349
	頼りになる子どもを持っている	2.903	.885	.707	.812
	頼りになる家族をもっている	2.977	.806	.754	.791
	頼りになる親戚を持っている	2.659	.813	.636	.649
	困ったときに相談できる人がいる	2.792	.809	.725	.597
10	頼りになる友人を持っている	2.618	.830	.662	.484
	1か月なり1年なり先に何かしようと考えていることがある	2.165	.833	.718	.743
	1週間ごとや1か月ごと、1年ごとの計画をつくっている	2.106	.833	.731	.742
	これから先、したことごとがたくさんある	2.505	.836	.535	.395
自分で決めた人生の目標を追い続けている	2.285	.777	.527	.342	
専門的知識や技術を持った友人・知人がいる	2.407	.901	.569	.304	

(次頁に続く)

(前頁よりの続き)

主成分		平均値	S D	共通性	主成分
11	気がめいったときは、あれこれと考えないようにしている	2.827	.722	.585	.709
	多くのことを背負い込まないようにしている	2.772	.709	.574	.585
	悪いことがあっても、いつか良いこともあると思うから深刻になって悩むことがない	2.796	.700	.551	.550
	気分転換の方法をいくつももっている	2.583	.785	.586	.465
	楽しいことを思い浮かべてウキウキすることがよくある	2.485	.783	.617	.417
	自分を励ましてくれる人をもっている	2.678	.778	.611	.412
12	人に優(やさ)しい	2.943	.650	.670	.605
	他の人の喜びや悲しみをいっしょに分かち合える	2.942	.656	.647	.551
	気持ちを素直に表現できる	2.745	.714	.623	.540
	ほがらかで活発	2.623	.747	.690	.514
	他人や仕事に対して、まじめで真心がこもっている	2.940	.698	.642	.467
	勇気がある	2.484	.765	.657	.419
13	自分が判断を下す前に、人に意見を求めることが多い	2.360	.732	.578	.656
	人に批判されると、うろたえて落ち込む	2.123	.719	.636	.653
	自分の考えを強く主張できない	2.403	.735	.549	.581
	人の意見にまどわされて、後悔することが多い	2.103	.686	.613	.574
14	知らない人とも緊張しないで話ができる	2.656	.805	.655	.673
	道を聞かれたら、わかりやすく教えることができる	2.849	.746	.651	.577
	話し上手である	2.240	.757	.692	.564
	大胆である(思いきったことができる)	2.163	.791	.601	.381
15	ちょっとしたイタズラやお茶目なことをするのが楽しい	2.054	.740	.648	.735
	ふざけたり冗談をいって人を笑わせることが多い	2.299	.796	.637	.591
	どっちかというと下品な方だ	1.976	.672	.604	.563
	ポルノ雑誌や成人向き映画に興味がある	1.607	.732	.626	.505
	必要なものを手に入れるためには他人を傷つけることもある	1.494	.567	.541	.339
16	自分を好きだと思うことがよくある	2.284	.724	.739	.750
	自分の良い点について考えることがよくある	2.381	.707	.712	.714
	ちょっとしたぜいたくや楽しみを自分に与えることがよくある	2.670	.799	.610	.480
17	味にうるさい(グルメである)	2.402	.856	.671	.727
	料理が上手	2.122	.888	.668	.669
	おしゃれである	2.352	.899	.613	.536
18	そのときの気分や感情にまかせて行動することが多い	2.430	.737	.566	.526
	若者とは話が通じないから自分から進んで話をしようとは思わない	2.374	.764	.528	.516
	嫌いな人と無理して付き合うようなことはしない	2.889	.793	.571	.462
	人からよく誤解される	2.093	.682	.581	.450
	他人に気を使ってばかりいられないと思うことがよくある	2.290	.738	.513	.365
19	それが、人と争(あそ)うほどのものをじっくり考える	2.631	.772	.652	.624
	怒(いか)りの気持ちを聞いてもらえる人がいる	2.514	.825	.678	.623
	怒りや腹立ちの気持ちを長く持ち続けることがない	2.784	.776	.659	.442
	どんなことやどんな人が私を怒(おこ)らせるかわかっている	2.328	.797	.526	.413
20	家にいても落ちつかず、誰かを訪ねてみたくなる	1.895	.704	.578	.656
	何かしたり、どこかへ出かける時に、誰かを誘うことが多い	2.311	.787	.579	.611
21	皆で何かするときには、役を与えられないほうがよい	2.668	.789	.629	.702
	リーダーになるよりは、補佐役のほうが自分にあっている	2.823	.785	.611	.699
	なにごとによらず、一生懸命というのはきらいで、気ままにのんびりやる主義だ	2.229	.816	.533	
22	気心の知れた親友が一人か二人いれば多くの友人はいらない	2.746	.793	.575	.671
	大勢の人といっしょに何かするよりも、一人で好きなことをしているほうが楽しい	2.714	.844	.609	.639
23	相手が誰であろうと、ダメなものはダメという	2.601	.845	.576	.557
	相手が納得するまで説得しようと努力する	2.353	.760	.583	.542
24	地図があれば、初めてのところでも迷わず行ける	2.274	.993	.560	.470
	外国語ができる	1.427	.675	.472	.401
25	わたしは聞き上手である	2.681	.779	.602	.509
	人との関係がうまくいくように自分を仕向けるのが上手である	2.386	.762	.598	.506
	人の良いところだけを見て付き合うようにしている	2.624	.741	.552	.401
26	みんなと違うことを考えたり、することがよくある	2.256	.714	.612	.624
	私の興味や考えは周囲の人たちとはだいぶちがう	2.294	.676	.577	.471
	思っていることや考えていることをすぐ口に出す方だ	2.491	.780	.607	.426
27	この10年くらい、自分自身、人間が変わった	2.251	.788	.523	.608
28	字が上手である	1.997	.863	.634	.537
	ものを書くことが好き	2.239	.922	.586	.460
	手先が器用	2.610	.922	.581	.394
29	ふだんはできるだけ質素にしておいて金や財産をためたい	2.400	.794	.533	.569
	これから先のことを考えたら憂鬱(ゆううつ)になる	2.214	.770	.594	.376
30	率先して何かをするということは自分の好みではない	2.522	.778	.648	.708

注：サンプル数は1,365。負荷量0.3未満は非表示。太線は、第1～第30主成分のそれぞれに所属する項目群の区切

第2主成分は、「物覚えが早い」や「記憶力がいい」、「知性がある（知的である）」、「直感力やひらめきがある」、「計算や数字に強い」といった知力や賢明さ - 「スマート (smart)」 - と一括できる項目と、「なかなかの美人（男前）である」という自分の「容姿に対する肯定的評価（自信）」と「社会的地位が高い方だ」の7項目で構成されている。「社会的地位」に対する自己評価の高さと「スマート」が同一主成分に所属することは、ある程度納得できるが、「容姿に対する自信」が、「スマート」の諸項目と同じ主成分に所属することは興味あるところである。

Chi-square=472.284(75 df)p=.000, GFI=.952(.933),
NFI=.928, RMR=.023, RMSEA=.062(.057, .068)

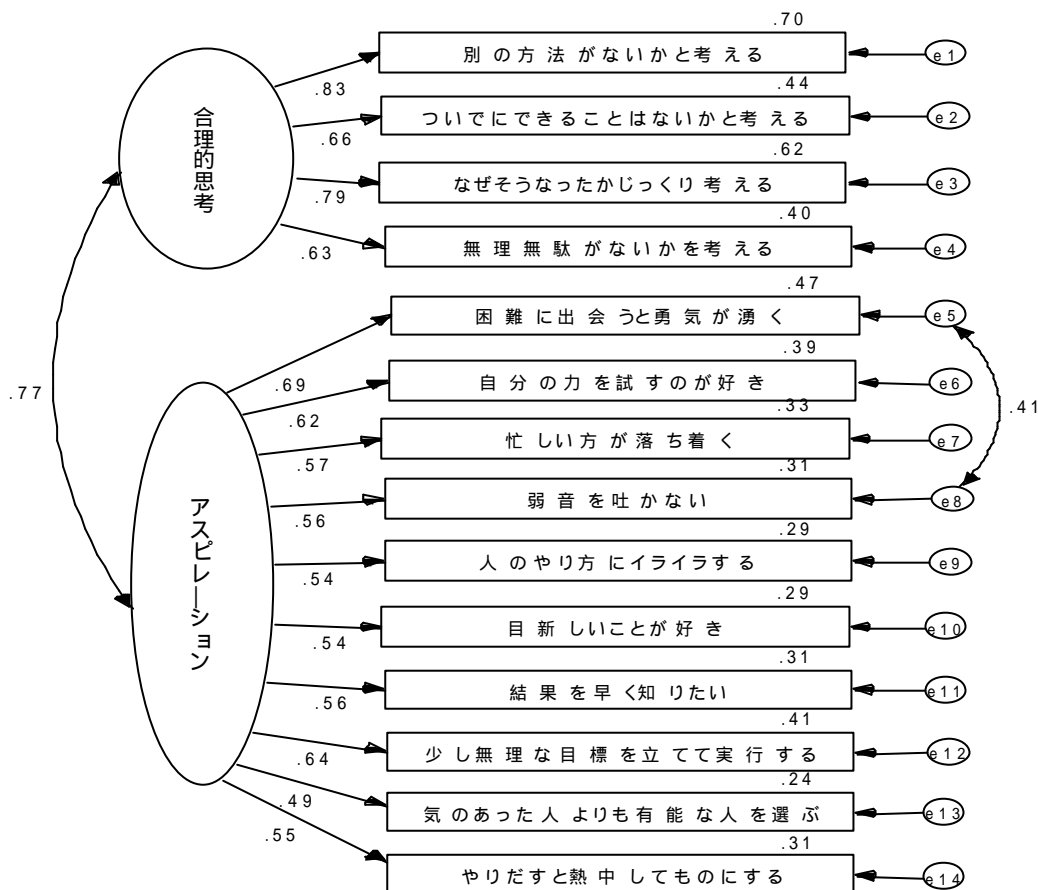


図9 . 第1主成分の2因子モデル

「なかなかの美人（男前）である」は、「スマート」の諸項目の中でも、とくに「知性がある（知的である）」との相関が高い（標本での相関係数は0.577）。

第2主成分に所属する7項目で構成する1因子モデルの適合度は、Chi-square=414.6 (14df, p=0.000), GFI=0.911(0.823), NFI=0.901, RMR=0.034, RMSEA=0.145(0.133, 0.157)であるが、「スマート」を内容とする諸項目とそれ以外の2項目で2因子モデルに構成しなおすと適合度は大きく改善された（図10）。

この2因子モデルにおいても、Amos4の修正指数が示すところでは、「なかなかの美人（男前）である」と「知性がある（知的である）」それぞれの残差間（e3とe6）の修正指

数が他に比べて極端に大きい。したがって、それら残差間に相関を認めることにした。なお、1因子モデルで、e3とe6の相関を認めた場合の適合度は以下の通りである。Chi-square=202.5(13df, p=0.000), GFI=0.956(0.906), NFI=0.951, RMR=0.028, RMSEA=0.103(0.091, 0.116)。

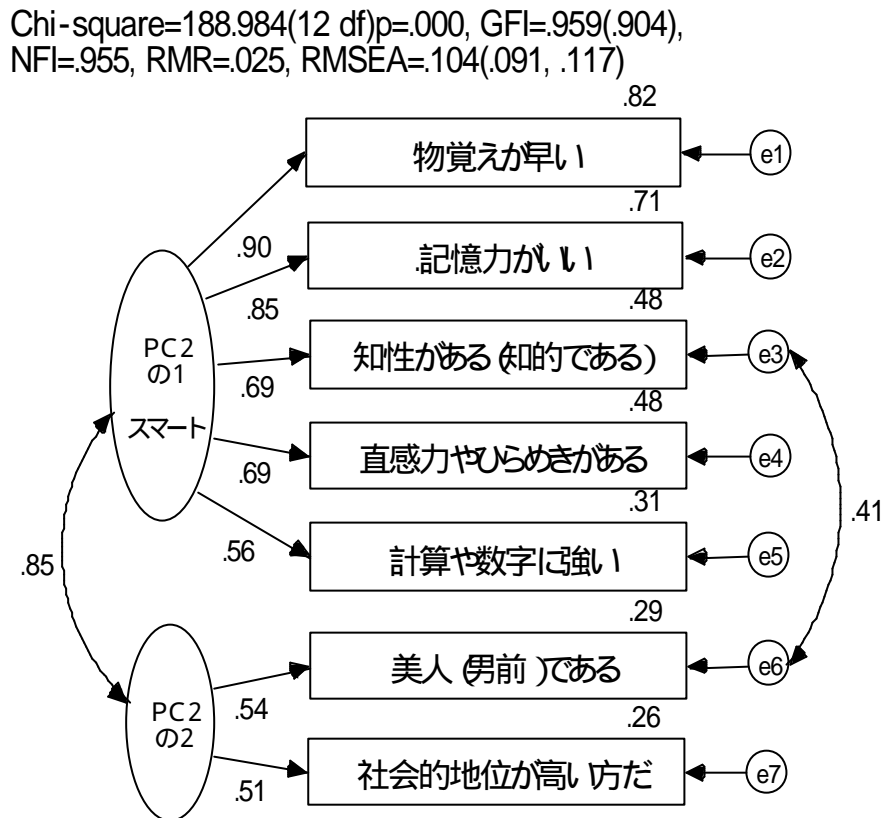


図10. 第2主成分の2因子モデル

ところで、第24主成分を構成する「地図があれば、初めてのところでも迷わず行ける」と「外国語ができる」、第28主成分の「字が上手である」、「ものを書くことが好き」、「手先が器用」も知的活動能力に関連する項目であるとみなすことができそうである。

しかし、これら諸項目は、それぞれ数項目ずつ別の主成分に所属することになったことから、「スマート」に所属する項目とは異質なものであることがわかる。そこで、これら3つの主成分を用いて、知的活動能力に関する2因子モデル、3因子モデル、4因子モデルを構築してみた(図11~図13)。

図11の2因子モデルの適合度は、RMSEAと調整済みのGFIの値は十分とは言えないが、他の指標においては良好である。そして、このモデルは、「スマート」と第24主成分(PC24)とが比較的高い相関関係にあることを示している。

図12の3因子モデルの適合度は、2因子モデルと比較すると、調整済みのGFIとRMSEAは若干改善され、他の指標では適合度がほんのわずかに低下しているにすぎない。したがって、この3因子モデルも良好なモデルといってよいであろう。このモデルにおいても、3因子それぞれは比較的高い相関関係にあることが示されている。

Chi-square=247.965(13 df)p=.000, GFI=.948(.887),
 NFI=.935, RMR=.037, RMSEA=.115(.103, .128)

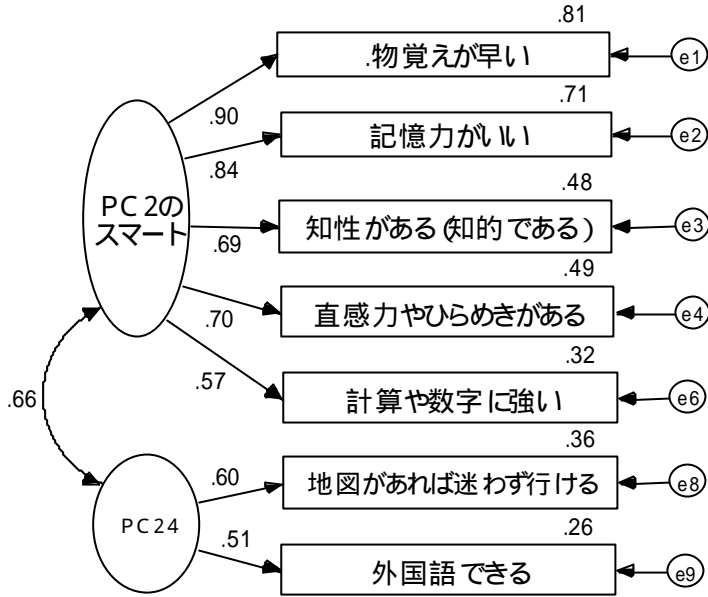


図11 . 知的活動能力の2因子モデル

Chi-square=449.549(32 df)p=.000, GFI=.935(.889),
 NFI=.912, RMR=.041, RMSEA=.098(.090, .106)

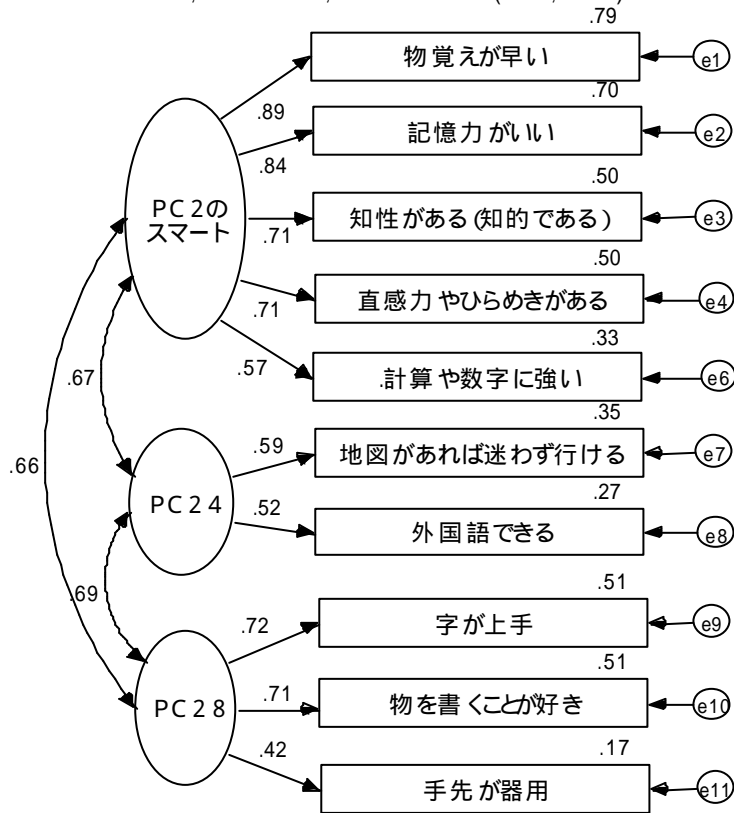


図12 . 知的活動能力の3因子モデル

Chi-square=629.129(47 df)p=.000, GFI=.922(.870),
NFI=.898, RMR=.038, RMSEA=.095(.089, .102)

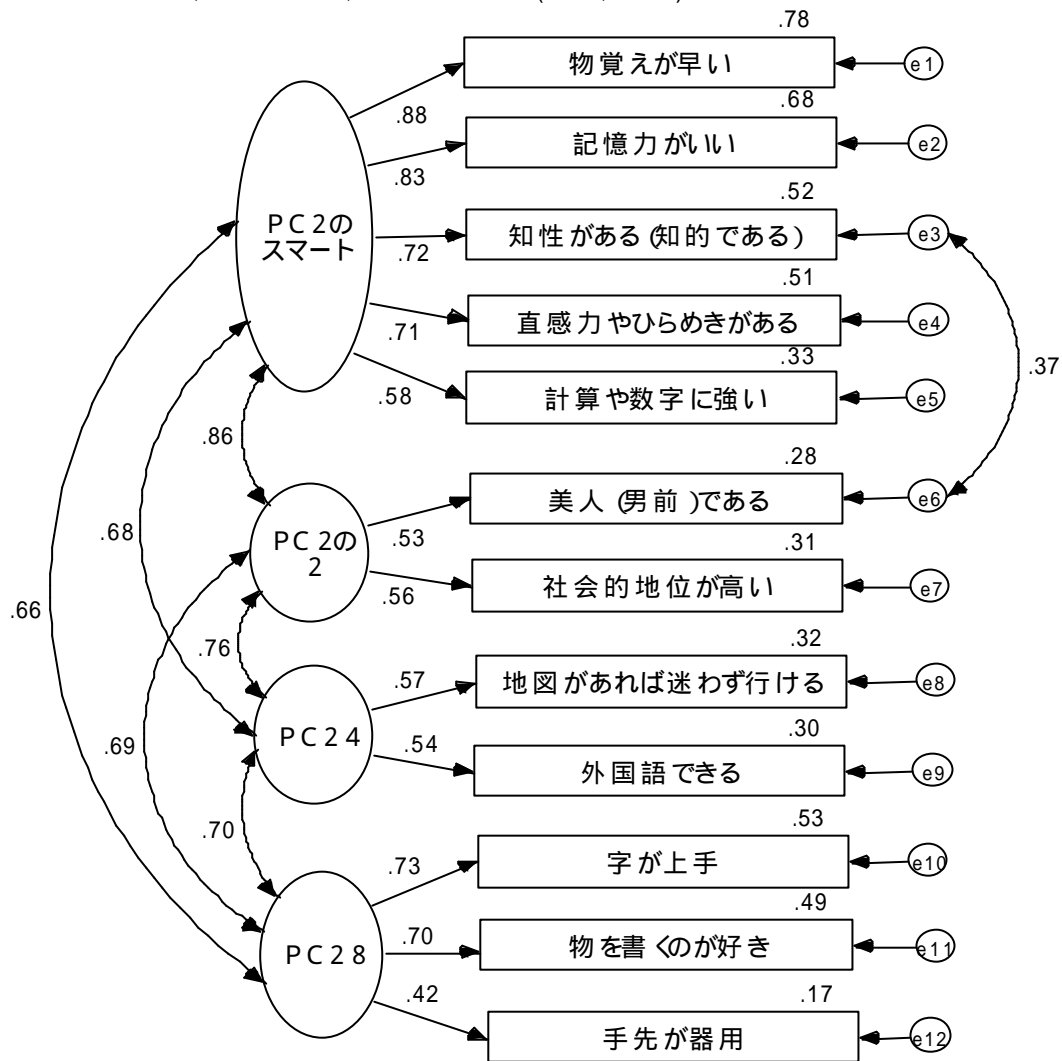


図13 . 知的活動能力の4因子モデル

図13の4因子モデルでは、2因子モデルや3因子モデルに比べると指標によっては適合度がかかり低下している。しかし、RMRは依然として一般的な基準0.05を下回っていて、このモデルの適合度は悪くないことを示している。

2因子モデル、3因子モデル、4因子モデルともに、それぞれの因子間に比較的高い相関がみられる。したがって、以上の検討から、高齢者の知的活動能力に関しては、これらいずれのモデルによっても議論することが可能であるが、高齢者の知的活動能力をもっとも幅広くとらえようとするならば、4因子モデルを採用してもよいであろう。

ただし、書くことに関わる能力を表すとみなすことができる潜在因子「PC 2 8」は別にして、図13の「PC 2の2」や「PC 2 4」が示すものが何であるかを一言で表現することは難しい。あえて解釈すれば、知的活動能力が高い(低い)と自己を評価する人は、容姿や社会的地位に関しても、自分を「美人(男前)」である(ではない)とか自分は「社会的地位が高い」(高くない)と肯定的(否定的)評価を下す傾向にあるということ

であろうか。それでも、容姿と社会的地位に対する自己評価を関連づける潜在因子が何であるのかを明確に表現することは難しい。また、「地図があれば、初めてのところでも迷わず行ける」と「外国語ができる」と共に共通する潜在因子を的確に表現することは難しい。これも、あえて解釈すれば、「非日常的状況への対応力」あるいは「道具（用具）を使いこなす能力」といえるかもしれない。いずれにしても、以上のことは、高齢期におけるコンピテンスに関わる一つの「発見」であると考えられる。

第3主成分は、社会関係とくに「積極的で親密な対人関係」に関わる主成分とみなすことができる。この主成分を因子とした1因子モデルの適合度は、次のように極めて良好である。Chi-square=143.0(14df, p=0.000), GFI=0.971(0.942), NFI=0.950, RMR=0.019, RMSEA=0.082(0.070, 0.095)。

第20主成分および第25主成分も社会関係に関わる主成分とみなすことができるが、「積極的で親密で対人関係」という点からいえば、第20主成分がそれに当たる。第25主成分は、積極的な親密性というよりは、消極的・受動的な態度で妥協や譲歩することによって対人関係が悪くならないように心がける行動を表す諸項目から構成されているので、この主成分には「折り合い」という名称を与えることができよう。

以上の3主成分を因子として3因子モデルを構成したのが図14である。各指標の値が示すように、この3因子モデルの適合度は良好である。3因子間の関係では、「積極的親密性」と「親和」との間よりも、「積極的親密性」と「折り合い」との間の方が相関が大きく、相対的に強い高く、それに比べると「親和」と「折り合い」との関係は低くなっている。この結果は、第25主成分は、「親和」というよりは、「寂しがり」と名づけた方が良さそうである。そして、第3主成分を「親和性維持能力」と呼び変えた方が適切かもしれない。いずれにしても、この3因子モデルは、良好な対人関係を保持する能力に関わるモデルとして有効であると考えられる。

第4主成分は、一見して「身体的活動能力」あるいは「体力」を表す主成分であることがわかる。この1因子モデルの適合度は、各指標値が次に示すように、きわめて良好である。Chi-square=131.1(9df, p=0.000), GFI=0.968(0.926), NFI=0.941, RMR=0.032, RMSEA=0.100(0.085, 0.115)。

第5主成分は、「自己主張」や「信念」を表す主成分と理解できる。この1因子モデルの適合度指標は、Chi-square=58.4(5df, p=0.000), GFI=0.984(0.952), NFI=0.971, RMR=0.017, RMSEA=0.088(0.069, 0.110)で、極めて良好なモデルである。自己主張や信念ということでは、第18主成分、第22主成分、第23主成分と第26主成分も第5主成分と同様の内容を表す主成分と見ることできる。そこで、それらを因子とする5因子モデルを構成してみた(図15)。

各因子間の相関をみると、第5主成分と第26主成分、第18主成分と第22主成分、第18主成分と第26主成分のそれぞれが比較的高い相関を示しているが、他の因子間の相関は小さい。とくに、第22主成分と第23主成分との間の相関は極めて小さい。そこで、この結果をもとに、それら5つの主成分を2因子モデルに組み替えたのが図16～図18である。

図16に示した「信念の2因子モデル」の適合度は極めて良好である。図18の「自己主張の2因子モデル」は、NFIだけが0.798と一般的な基準とされる0.9を大きく下回っているが、他の指標では、この2因子モデルの適合度が高いことを示している。

Chi-square=444.918(51 df)p=.000, GFI=.946(.917),
 NFI=.902, RMR=.027, RMSEA=.075(.069, .082)

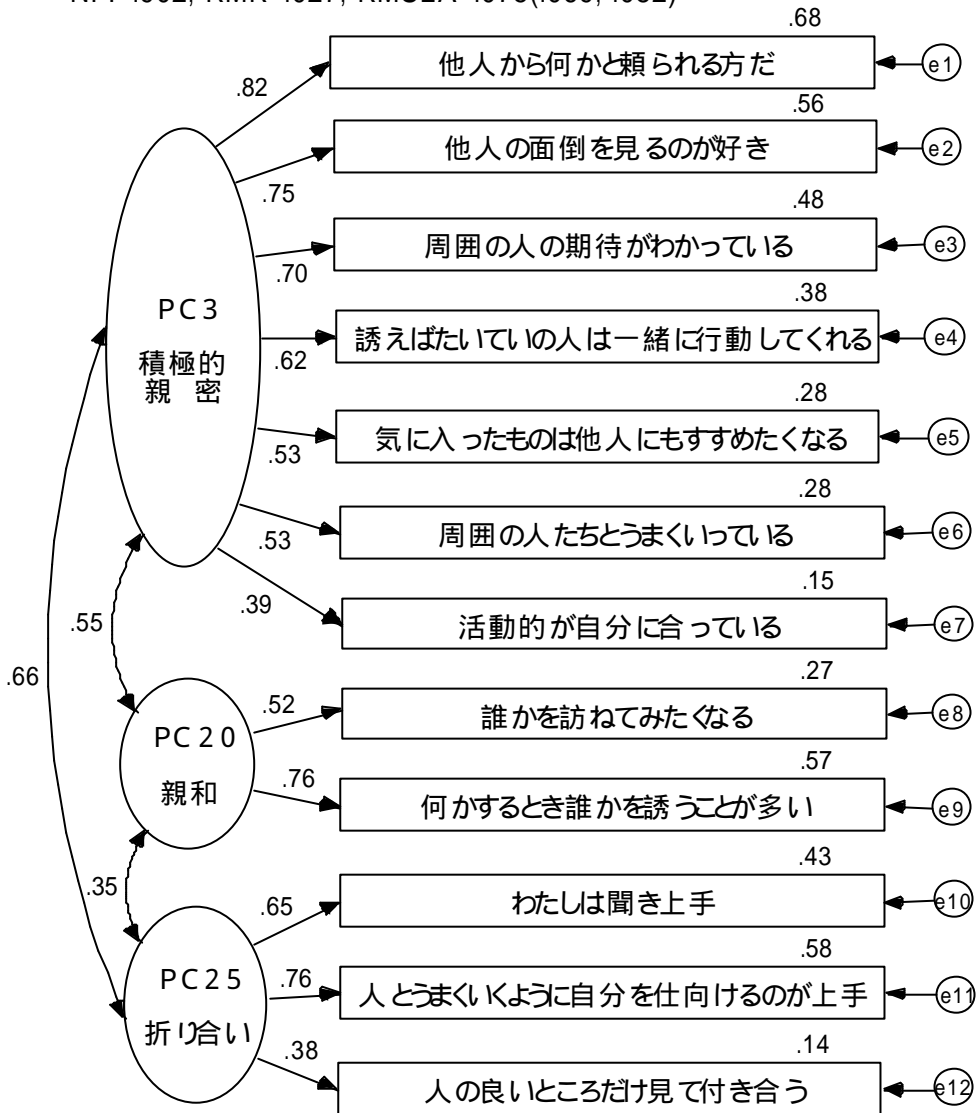


図14 . 対人関係の3因子モデル

第18主成分は、一見すると自分勝手な行動様式を表しているが、見方を変えれば、良好な対人関係などということは考慮せずに、いわば「我が道を行く」(マイペース)ような生き方を表しているとも言える。そのことは、この主成分が、「気心の知れた友人が一人か二人いれば多くの友人はいらない」と「大勢の人と一緒に何かするよりも、一人で好きなことをしている方が楽しい」の2項目で構成される第22主成分と比較的高い相関にあることからいえよう。同様に、第26主成分も、他者との関係を考慮することなく、また、周囲に流されることなく、自己の信念に忠実な態度・行動のタイプを表しているといえる。そこで、あらためて3因子モデルを構成したのが図19である。

Chi-square=807.329(109 df)p=.000, GFI=.933(.906),
 NFI=.828, RMR=.035, RMSEA=.069(.064, .073)

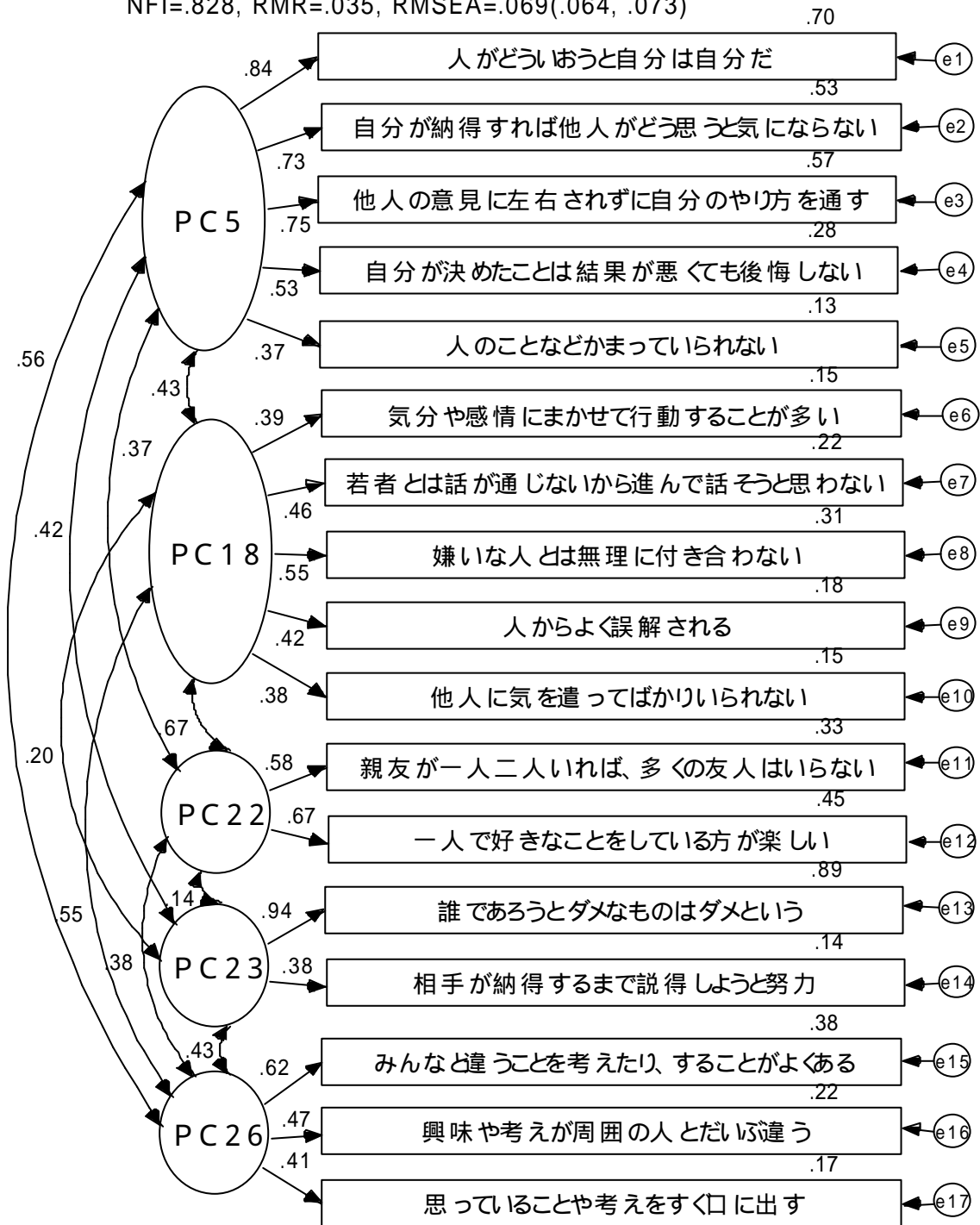


図15 . 自己主張の 5 因子モデル

Chi-square=128.785(19 df)p=.000, GFI=.977(.957),
 NFI=.949, RMR=.021, RMSEA=.065(.055, .076)

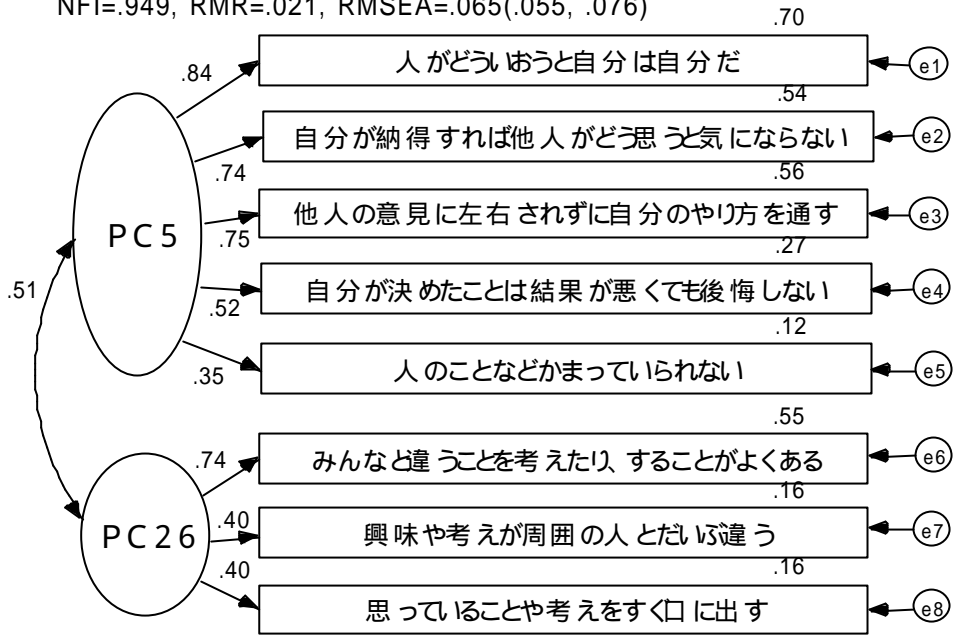


図16 . 信念の2因子モデル

Chi-square=57.526(13 df)p=.000, GFI=.988(.974),
 NFI=.937, RMR=.019, RMSEA=.050(.037, .064)

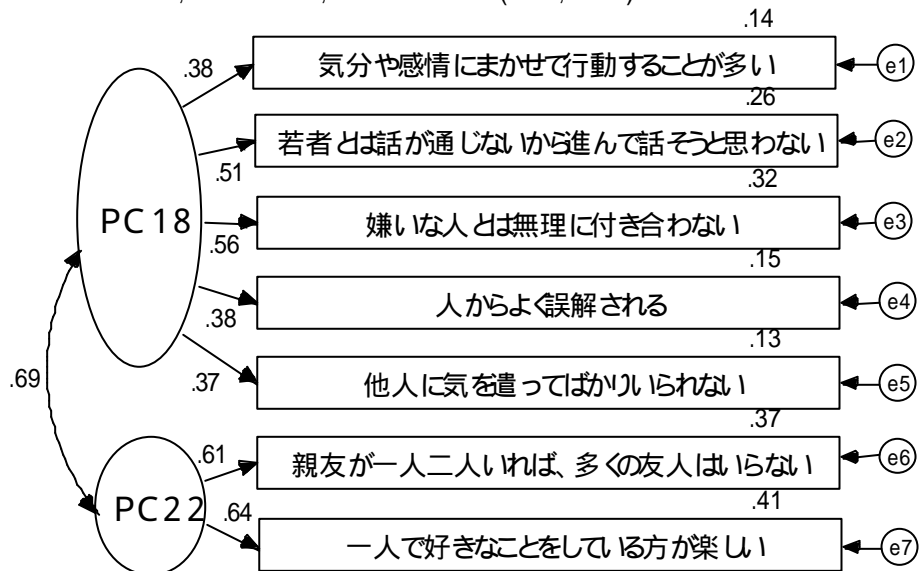


図17 . 超越の2因子モデル

Chi-square=202.074(19 df)p=.000, GFI=.964(.931),
NFI=.798, RMR=.030, RMSEA=.084(.074, .095)

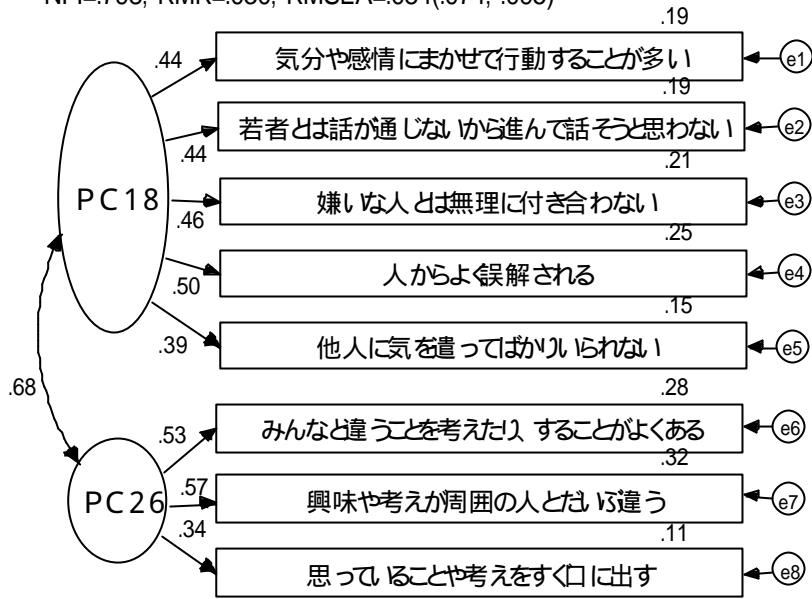


図18. 我が道を行くの2因子モデル

Chi-square=279.046(32 df)p=.000, GFI=.960(.931),
NFI=.816, RMR=.030, RMSEA=.075(.067, .083)

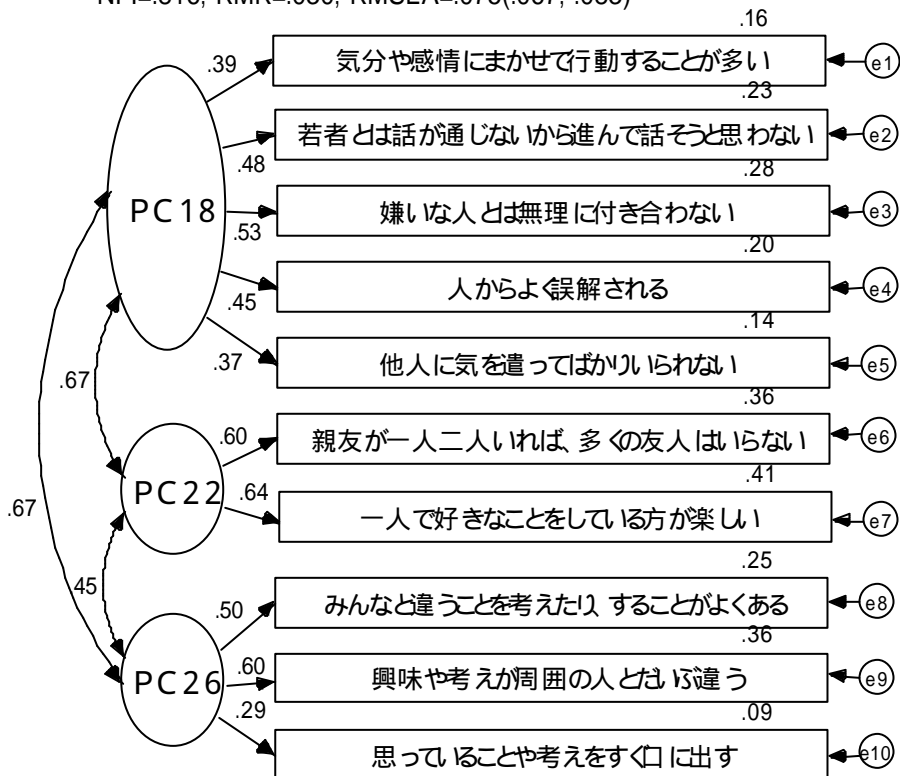


図19. 我が道を行くの3因子モデル(1)

NFIの値が0.816と不満が残るが、他の指標は、この3因子モデルの適合度が良好であることを示している。ただし、第26主成分(PC26)の「思っていることや考えをすぐ口に出す」の係数(負荷量)が0.29と小さいので、これを削除すると(図20)、各種の適合度指標の値は大きく改善された。この項目が削除されたことにより、この3因子モデルが、他者に対して信念に基づいて自己を主張するというよりは、より、自己に忠実なマイペース型の態度・行動のモデルであることが明確になったといえる。

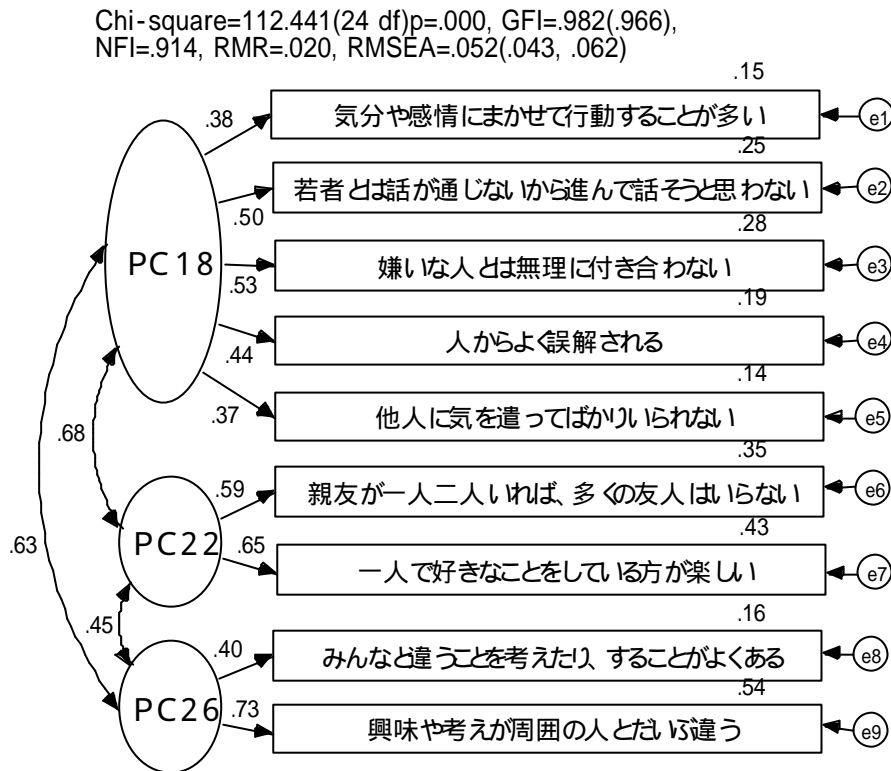


図20 . 我が道を行くの3因子モデル(2)

第6主成分は、「計画性」の主成分と解釈できる。この1因子モデルの適合度指標の値は、Chi-square=27.9(9df, p=0.001), GFI=0.993(0.984), NFI=0.985, RMR=0.014, RMSEA=0.039(0.023, 0.056)で、極めて良好なモデルである。

第7主成分は「孤独」の主成分と解釈できる。この1因子モデルの適合度指標の値は、Chi-square=9.2(2df, p=0.010), GFI=0.997(0.984), NFI=0.994, RMR=0.010, RMSEA=0.051(0.021, 0.087)で、極めて良好なモデルである。

第8主成分は「自己統制」の主成分と解釈できる。この1因子モデルの適合度指標の値は、Chi-square=30.9(5df, p=0.000), GFI=0.991(0.974), NFI=0.981, RMR=0.110, RMSEA=0.062(0.042, 0.083)で、極めて良好なモデルである。

第9主成分は、「人的資源」と表現できよう。この1因子モデルの適合度は、Chi-square=541.8(5df, p=0.000), GFI=0.863(0.589), NFI=0.784, RMR=0.066, RMSEA=0.281(0.261, 0.301)と、かなり悪い。修正指標を見ると、e1とe2の相関を認めた場合に適合度は

大きく改善されることが示されており、それに従うと図21のようにな1因子モデルとなり、高い適合度のモデルになった。高齢者にとって、「頼りになる家族」というのは、「頼りになる子ども」であるということにもなる。そこで、「子ども」と「家族」をひとくくりにして2因子モデルを構成したのが図22である。

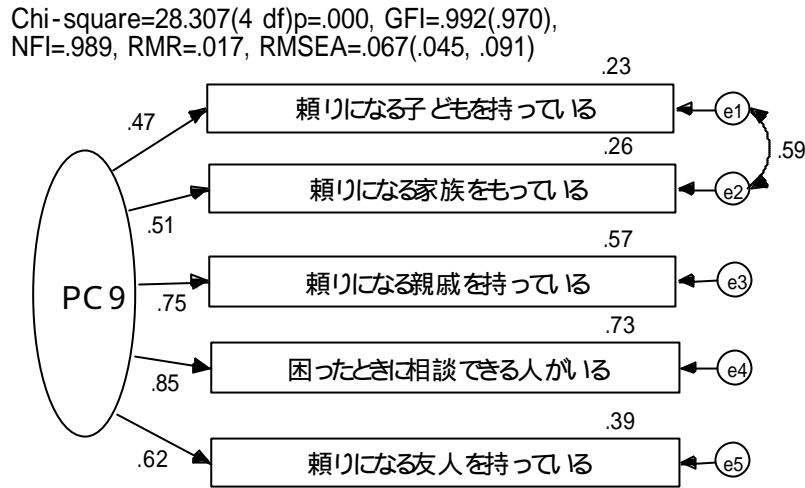


図21 . 「人的資源」の1因子モデル

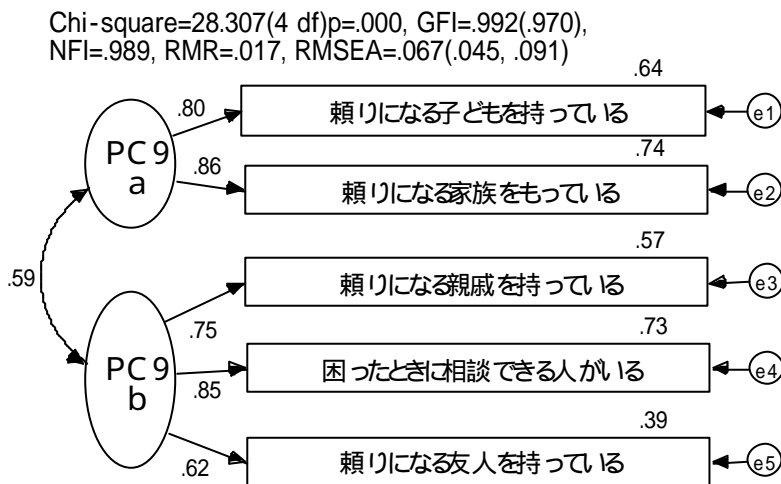


図22 . 「人的資源」の2因子モデル

適合度指標の値に変化はないが、PC9aの負荷量が大きくなって、この因子の内容が明瞭になり、モデル全体が簡潔明確になった。

第10主成分は「目標設定」を表す主成分と解釈できる。この1因子モデルは、Chi-square=86.6(5df, p=0.000), GFI=0.973(0.920), NFI=0.952, RMR=0.035, RMSEA=0.109(0.090, 0.130)と適合度は良好である。これを2因子モデルに再構成したのが図23である。適合度が大幅に改善されており、この2因子モデルの方が「目標設定」のモデルとして適切であることがわかる。ただし、「専門的知識や技術を持った友人・知人がいる」という

一見して異質な項目がこのモデルの構成要素になっていることには違和感を覚えるであろう。この項目は、むしろ「人的資源」に属する項目とみなしうるからである。しかし、この項目を「人的資源」に入れると、「人的資源」のモデルの適合度は大きく低下した。したがって、このモデルに従えば、「目標設定」をしている（していない）人の社会関係網には、「専門的知識や技術を持った友人・知人がいる」（いない）という傾向がある、ということになる。「目標設定」というのは高度の知的活動ということもできるから、そうしたコンピテンスを備えている人には、「専門的知識や技術を持った友人・知人がいる」ということであろうか。

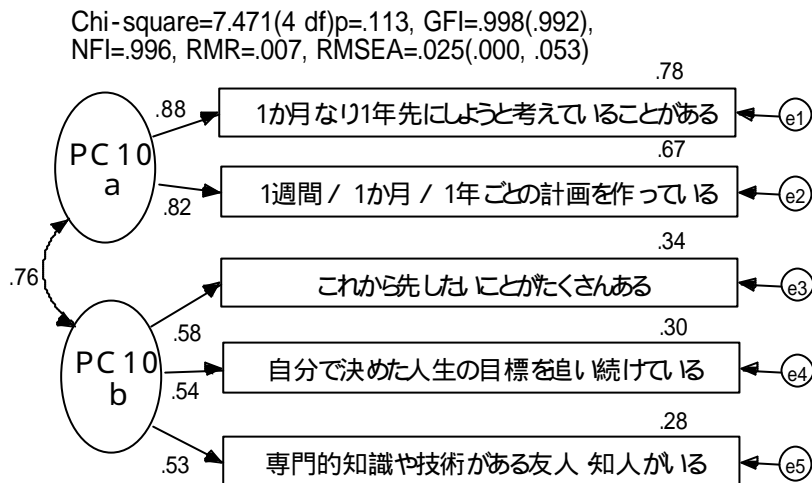


図23. 「目標設定」の2因子モデル

第11主成分は、「ストレス処理」を表す主成分と解釈できる。この1因子モデルは、Chi-square=92.7(9df, p=0.000), GFI=0.978(0.949), NFI=0.938, RMR=0.021, RMSEA=0.083(0.068, 0.098)と適合度はきわめて良好である。

第12主成分が意味するところは、「誠実」あるいは「融和」と表現できるであろう。この1因子モデルの各適合度指標の値は、Chi-square=281.8(9df, p=0.000), GFI=0.929(0.834), NFI=0.906, RMR=0.028, RMSEA=0.149(0.134, 0.164)である。RMSEAの値が大きい他は、他の指標は、このモデルの適合度が概ね良好であることを示している。しかし、「勇気がある」という項目は、他の項目とは異質な感じを受ける。そこで、この項目を除外して1因子モデルを再構成してみたが、適合度は、Chi-square=147.5(5df, p=0.000), GFI=0.956(0.867), NFI=0.933, RMR=0.025, RMSEA=0.145(0.125, 0.165)と、それほど大きく改善されたわけではない。したがって、モデルにしたがって解釈するとすれば、自分を誠実あるいは人に優しく朗らかであると思っている人は、勇気があるとも思っていることになる。

第13主成分は、「依存」あるいは「自信のなさ」を表す主成分と解釈できる。この1因子モデルの各適合度指標の値は、Chi-square=37.8(2df, p=0.000), GFI=0.987(0.933), NFI=0.957, RMR=0.020, RMSEA=0.115(0.084, 0.148)である。RMSEAの値が若干大きいですが、他の指標は、このモデルの適合度が良好であることを示している。

第14主成分は、率直あるいはざっくばらんであることを指していると解釈できるので、

「フランク」と表現できよう。この1因子モデルの各適合度指標の値は、Chi-square=2.4 (2df, p=0.306), GFI=0.999 (0.996), NFI=0.998, RMR=0.004, RMSEA=0.012 (0.000, 0.056) であり、このモデルが適合度の極めて高い良好なモデルであることを示している。この第14主成分は、上で見た第12主成分と類似しているように思われる。そこで、それらを2因子モデルとして構成したのが図24である。両主成分の間には高い相関があることがわかる。この2因子モデルは、良好な対人関係に関わるコンピテンス/スキルのモデルとみなすことができる。このモデルでは、修正指標にしたがって残差間の相関を認めしたが、残差間を無相関とした場合の適合度指標の値は次の通りである。Chi-square=596.0 (34df, p=0.000), GFI=0.910 (0.855), NFI=0.556, RMR=0.030, RMSEA=0.110 (0.102, 0.118)。

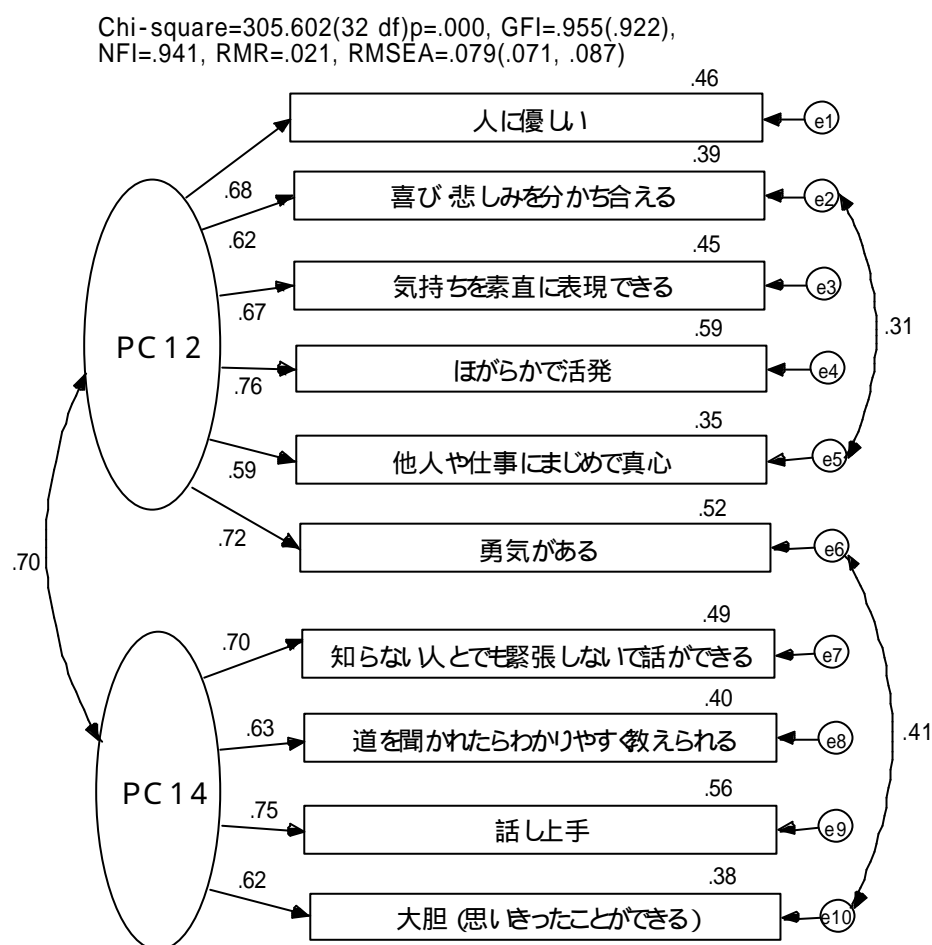


図24. 「融和」と「フランク」の2因子モデル

第15主成分に所属する諸項目に共通するものを一言で表現するとすれば、「お茶目」や「茶目っ気」あるいは「ノーティ(naughty)」となろう。naughtyという言葉は、研究社新英和中辞典によれば、「子供(のふるまい)がいたずら(好き)な、わんぱくな、言うことをきかない」という意味や口語では「きわどい、みだらな、わいせつな」という意味で使われる。ノーティ・ボーイ(naughty boy)といえは腕白小僧のことであるが、日本語の腕白小僧あるいは腕白坊主という言葉と同様に、ノーティ・ボーイという言葉も、その子

どもを強く非難したり叱責するためにではなく、そうした行動を一般的には好ましいことではないとしながらも、むしろ親密さや好意を伴って子どものそうした行動を是認するときに使われる。高齢者に対して「ノーティ」とは適切ではないかもしれないが、この主成分を表現するには適切な用語であるといつてよいであろう。各適合度指標の値は、Chi-square=132.9(5df, p=0.000), GFI=0.958(0.875), NFI=0.852, RMR=0.031, RMSEA=0.137(0.117, 0.158)である。NFIやRMSEAの値が十分ではないが、GFIとRMAの値は、このモデルの適合度が概ね良好であることを示している。

ところで、この主成分に含まれる「必要なものを手に入れるためには他人を傷つけることもある」という項目は、一見して他の諸項目とは異質である。この項目は、主成分分析では、回転後の負荷量が0.339であったが、この1因子モデルでは0.28と、より小さくなっており、主成分との関係が無視できるほど小さいものであることが示されている。そこで、この項目を除いて1因子モデルを構成すると、Chi-square=34.4(2df, p=0.000), GFI=0.987(0.937), NFI=0.952, RMR=0.022, RMSEA=0.109(0.079, 0.142)となって、適合度が大きく改善された。

第16主成分は、「自分を大切にする」スキルを指していると解釈できる。3項目からなる1因子モデルは飽和モデルとなって適合度が算出できないから、このモデルの良否は判定できない。

「自分を大切にする」と関連する項目では、第11主成分「ストレス処理」の中の「楽しいことを思い浮かべてウキウキすることがよくある」と「気分転換の方法を幾つも持っている」があげられる。前者を含めて4項目で1因子モデルを構成したのが図25であり、それに後者を含めて5項目で1因子モデルを構成したのが図26である。

各種の適合度指標からみると、図25のモデル(2)の方がわずかに適合度が高い。しかし、両モデルともにRMSEAの値が一般的な基準値とされる0.8をかなり上回っているので、これらモデルの適合度は十分とはいえない。

Chi-square=49.352(2 df)p=.000, GFI=.982(.912),
NFI=.965, RMR=.023, RMSEA=.132(.101, .165)

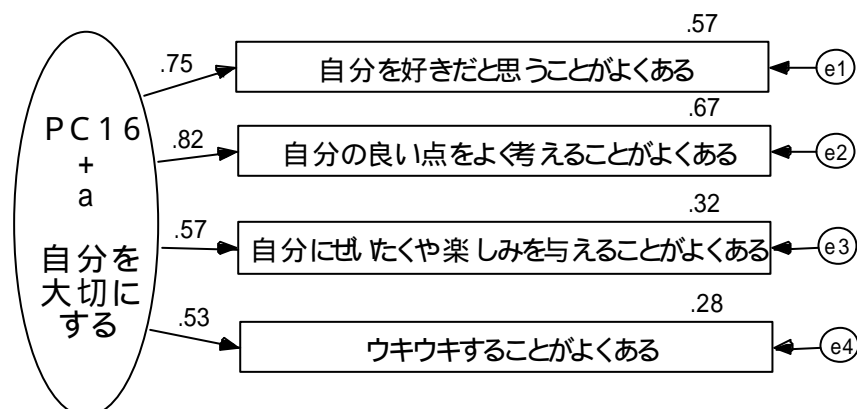


図25. 「自分を大切にする」の1因子モデル(1)

Chi-square=150.962(5 df)p=.000, GFI=.953(.859),
 NFI=.917, RMR=.033, RMSEA=.146(.127, .167)

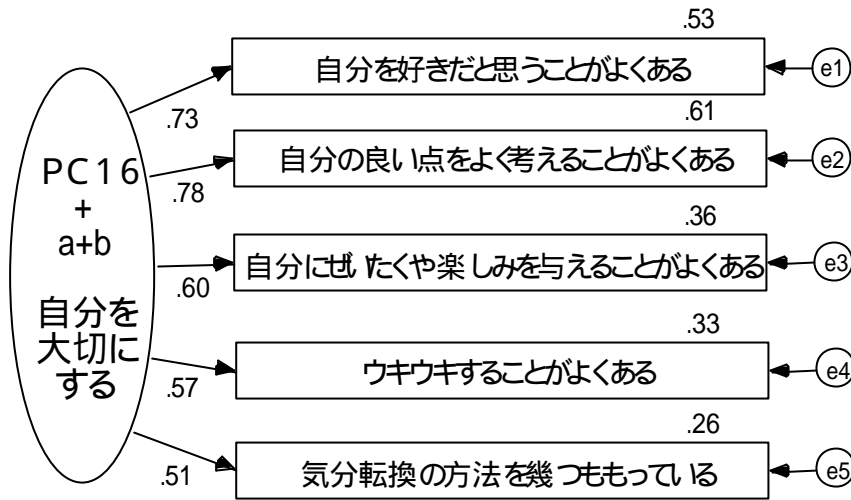


図26. 「自分を大切にすること」の1因子モデル(2)

Chi-square=292.997(26 df)p=.000, GFI=.953(.919),
 NFI=.904, RMR=.033, RMSEA=.087(.078, .096)

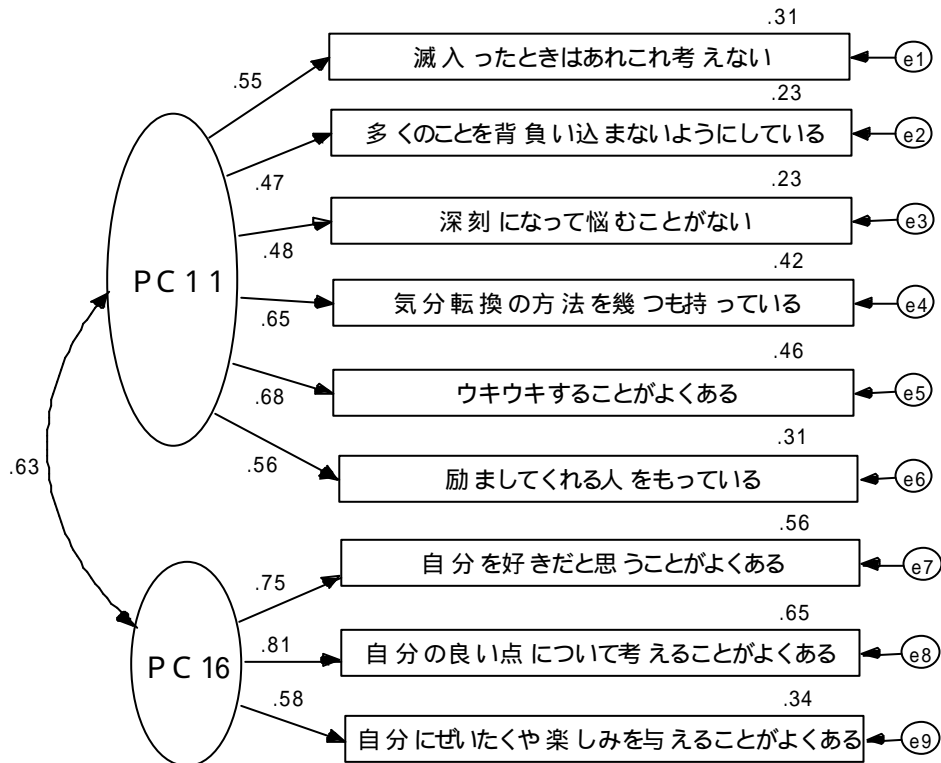


図27. 「ストレス処理」と「自分を大切にすること」の2因子モデル

ところで、「自分を大切にすること」(第16主成分)ことと関連すると思われる項目が「スト

レス処理」(第11主成分)の項目に含まれていたことから、この2つの潜在変数は相互に関連性が高いことがうかがわれる。そこで、この両者を用いて2因子モデルを構成したのが図27である。適合度はおおむね良好であり、2つの因子間には比較的高い相関が認められる。「ストレス処理」が上手な人は、「自分を大切にする」能力も高いということが言えそうである。

第17主成分は、多少古い表現ではあるが、「ハイカラ」といってよいような主成分である。あるいは、もっと簡単に「おしゃれ」と言い換えてもよいかもしれない。この主成分に属する項目は3つであるので、これら項目で構成される1因子モデルの適合度を判定することはできない。

第19主成分が指示するものは、「怒りの処理」と表現できる。この主成分に所属する4項目で構成される1因子モデルの適合度はきわめて良好である(図28)。

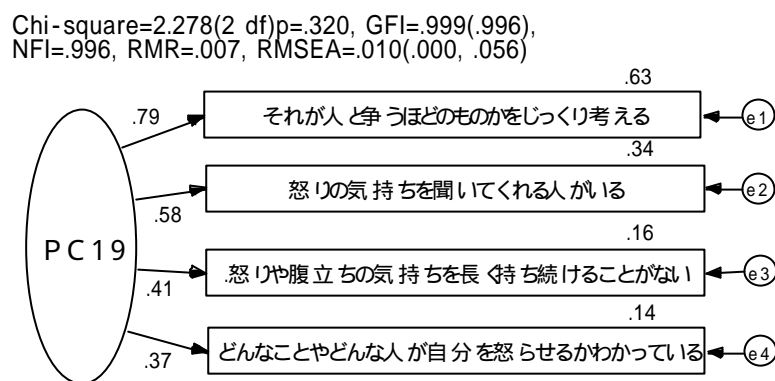


図28. 「怒りの処理」の1因子モデル(1)

ところで、「自己統制」を表す第8主成分に属する「腹が立ったときでも、そのことを顔に表すことはない」も「怒りの処理」と関連する項目とみることができる。そこで、この項目を追加して1因子モデルを構成したのが図29である。

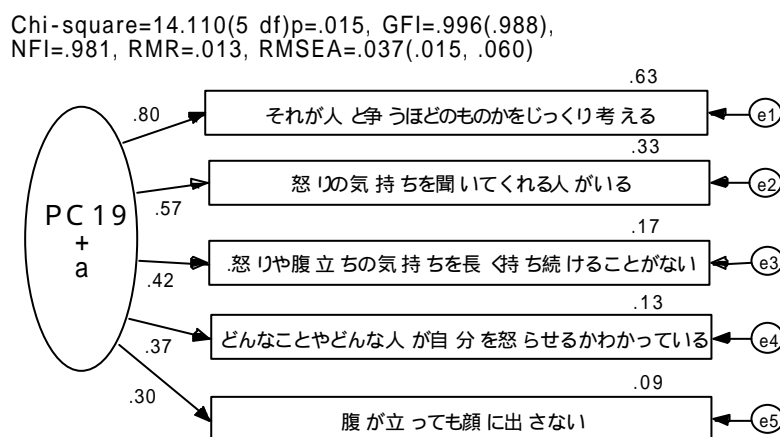


図29. 「怒りの処理」の1因子モデル(2)

「腹が立ったときでも、そのことを顔に表すことはない」の係数(因子負荷量)が小さ

いが、このモデルの適合度もきわめて良好である。しかし、図28の1因子モデルに比べると適合度が低下している。したがって、「腹が立ったときでも、そのことを顔に表すことはない」は、「怒りの処理」に関わる項目としてよりも、やはり「自己統制」に関わる項目と見なした方がよさそうである。

「怒りの処理」は「自己統制」とは異なる主成分として抽出されたが、「怒りの処理」は一種の「自己統制」ということもできる。そこで、この両者を用いて2因子モデルを構成してみた(図30、図31)。

Chi-square=159.863(26 df)p=.000, GFI=.975(.957),
NFI=.938, RMR=.025, RMSEA=.061(.052, .071)

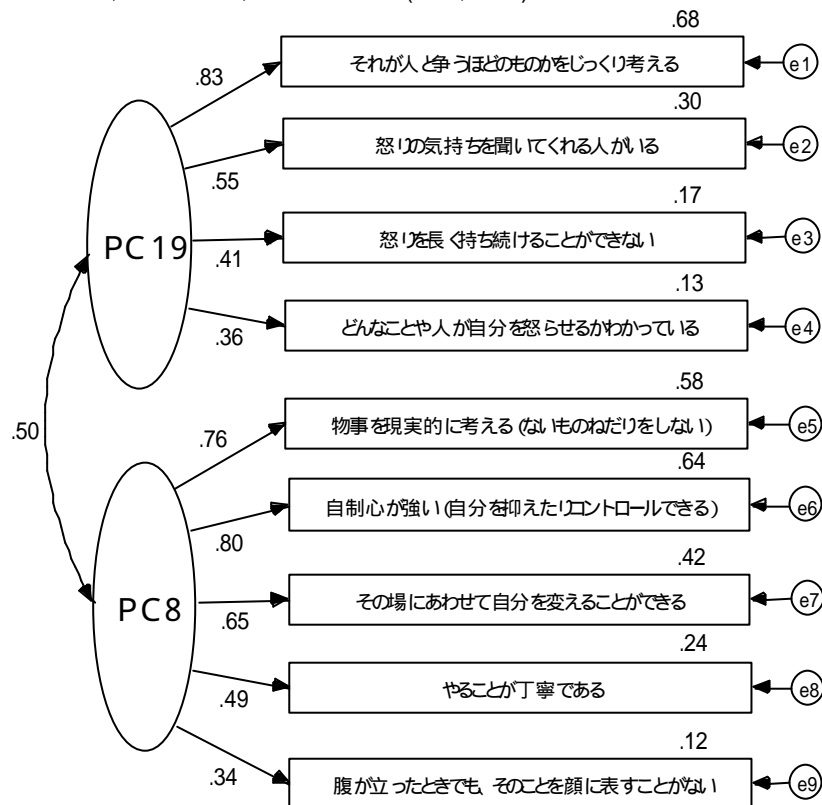


図30. 「怒りの処理」(PC19)と「自己統制」PC(8)による
2因子モデル(1)

図31の2因子モデル(2)は、図30の2因子モデル(1)に比べて適合度が若干劣るが、これら2因子モデルの適合度はきわめて良好であり、「怒りの処理」(PC19)と「自己統制」(PC8)という2つの因子は比較的高い正の相関関係にある。しかし、この両者を構成する項目で1因子モデルを構成した場合には、いくつかの係数が0.3を下回り、適合度も大きく低下する。したがって、「怒りの処理」というスキルと「自己統制」というスキルは別個のスキルではあるが、相互に関連するスキルであるということがわかる。敷衍すれば、「怒りの処理」が上手な人は「自己統制」も上手、あるいは「自己統制」が上手である人は「怒りの処理」も上手であるということになる。

Chi-square=182.449(26 df)p=.000, GFI=.970(.949),
 NFI=.930, RMR=.027, RMSEA=.066(.058, .076)

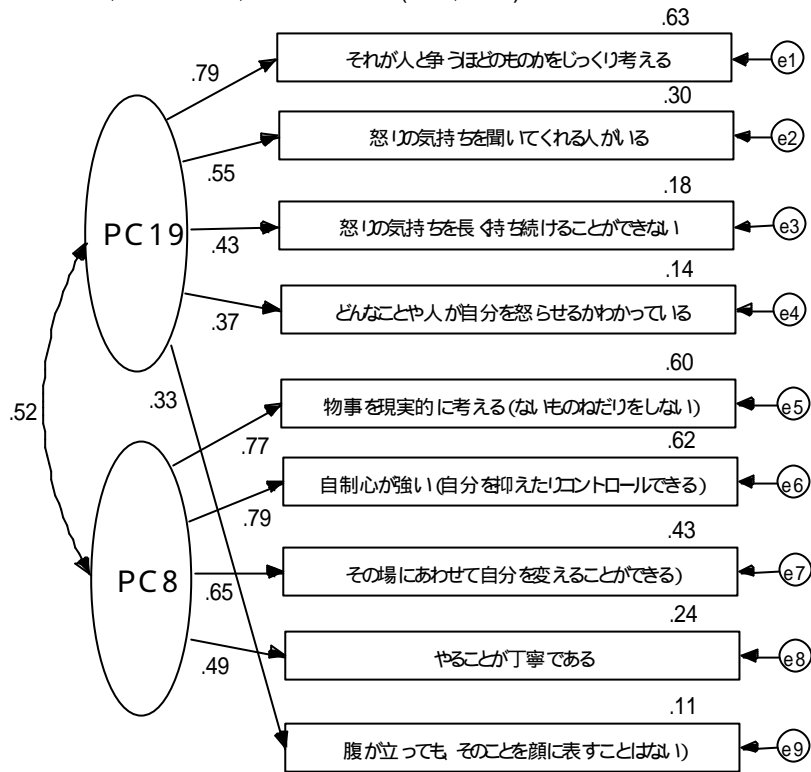


図31. 「怒りの処理」(PC19)と「自己統制」(PC8)による
 2因子モデル(2)

第21主成分に所属する項目は2項目だけであるが、この主成分が指しているものは、集団(行動)における「フォロワー」としての適性と解釈できよう。

Chi-square=19.365(2 df)p=.000, GFI=.993(.964),
 NFI=.958, RMR=.020, RMSEA=.080(.050, .114)

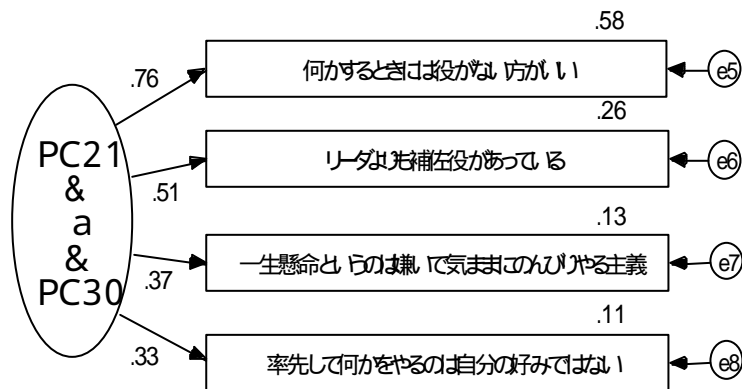


図32. 「マイペース型フォロワー」の1因子モデル

この適性は、「率先して何かをやるということは自分の好みではない」という1項目が

ら構成されている第30主成分と固有の主成分には属することがなかった「何事によらず一生懸命というのは嫌いで気ままにのんびりやる主義である」という項目 - それら2項目は「マイペース」型の行動類型と解釈できる - との関連を考えることができる。そこで、以上の4項目を用いて1因子モデルを構成してみたところ、きわめて高い適合度が得られた(図32)。このモデルが指し示す内容は、自分自身を「マイペース型のフォロワー」として自覚し、無理せず、マイペースで老後生活を過ごしているライフスタイルである。

第27主成分は、「この10年くらい、自分自身、人間が変わった」という1項目だけで構成されている。この項目が他の諸項目とはかなり異質な項目であったということになるが、第18主成分に所属する5項目に加えて1因子モデルを構成すると、適合度の高い良好なモデルとなった。先に述べたように、第18主成分は、一見すると自分勝手な行動様式を表しているが、見方を変えれば、良好な対人関係などということは考慮せずに、いわば「我が道を行く」(マイペース)ような生き方を表す主成分と解釈することもできる。この解釈に従えば、「この10年くらい、自分自身、人間が変わった」ということは、社会関係からの離脱の程度が進んだ、あるいは「超越」の程度が高まったことを意味しているのかもしれない。

Chi-square=44.954(9 df)p=.000, GFI=.989(.974),
NFI=.917, RMR=.018, RMSEA=.054(.039, .070)

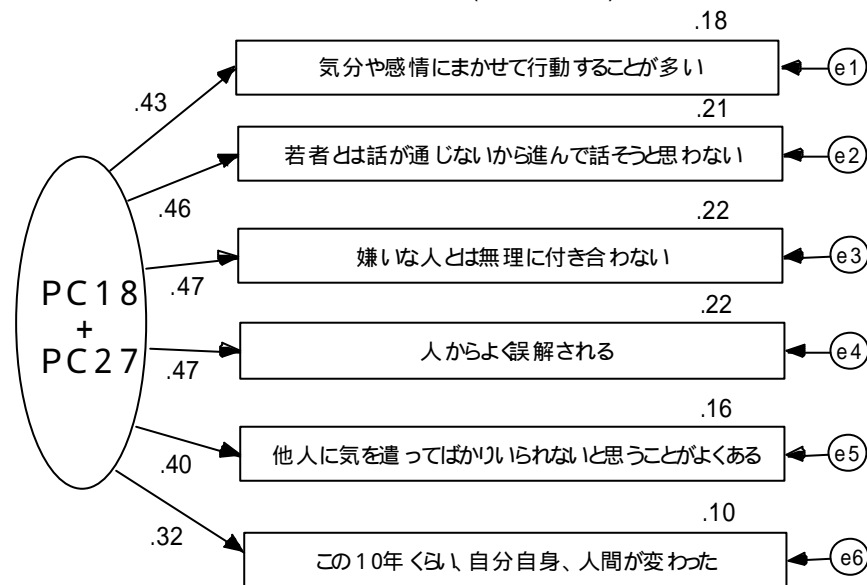


図33. 第18主成分と第27主成分による1因子モデル

第29主成分は、老後における経済的不安を表す主成分と解釈できる。この主成分は、他の主成分とはかなり異質であるために、他の主成分あるいは項目と結びつけて因子モデルを構成することは難しいが、「これから先のことを考えたら憂鬱になる」という項目だけを第7主成分の「孤独」に組み込んで1因子モデルを構成すると、適合度の高いモデルを得ることができた(図34)。

Chi-square=52.405(5 df)p=.000, GFI=.984(.953),
NFI=.971, RMR=.024, RMSEA=.083(.064, .105)

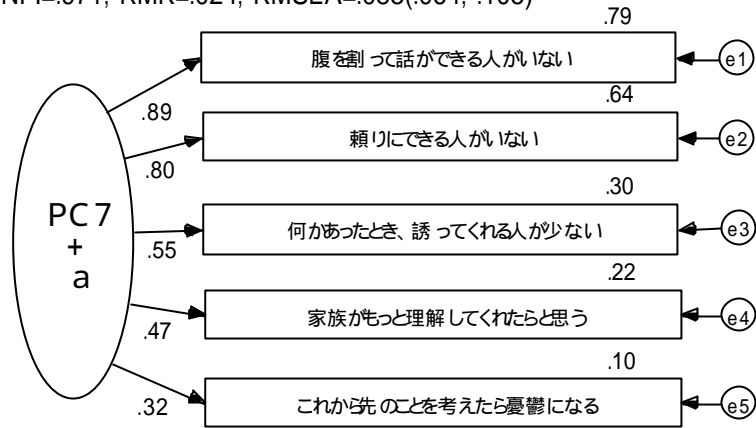


図34 . 第7主成分に第29主成分の1項目を追加した1因子モデル

3 . 測定尺度の信頼性

主成分分析と共分散構造分析によって見いだされた主成分/潜在因子は、そのすべてが「高齢者の日常的コンピテンス/ライフスキル」を表しているとはいえない。中には、単に自己概念あるいはパーソナリティを表していると思なした方がよいものも含まれている。その検討は後に譲ることにして、ここでは、得られた主成分/潜在因子を測定指標とした場合に、それら主成分/潜在因子に含まれる諸項目で構成される測定尺度の信頼性を検討するためにクロンバックの α 値を算出した。尺度の信頼性は、クロンバックの α 値によってのみ判定されるわけではないから、それが一般的な基準を満たしているからといって良好な尺度であると断言できないし、逆に一般的な基準を満たしていないからといって、その尺度が全く無効であるというわけでもない。そうしたことを念頭において、クロンバックの α 値を以下に記すことにする。なお、既に述べたように、各項目の選択肢「自分にピッタリ当てはまる」、「自分にだいたい当てはまる」、「自分にはあまり当てはまらない」、「自分には全然当てはまらない」に、それぞれ4、3、2、1点を与え、その合計点を尺度の測定値とする。

第1主成分 合理的積極性 $\alpha = .8796$ (Standardized item $\alpha = .8812$)

1. 遊びでも仕事でも、やりだすと熱中して、まあまあものにする
2. 少し無理かなと思われるくらいの目標をたてて頑張るほうだ
3. 自分がやったことがどんな効果をもたらしたか早く知りたい
4. 一緒に仕事するなら、気のあった人よりも有能な人を選ぶ人
5. 忙しいほうが何となく心が落ち着く
6. 人のやることをみていて自分ならもっと適切にやるのにとイライラすることがある
7. めったに弱音を吐くことはない
8. 困難に出会うと、やる気が湧(わ)く
9. 無理したり無駄なことをしていないかと考えることよくある
10. 何かするとき、もっと良い別のやり方はないかと考える
11. 問題が起きたとき、なぜそうなったをじっくり考える

12. 何かするときに、ついでにできることはないかと考える
13. 自分の力をためすようなことをやるのが好きだ
14. 目新しいもの(こと)を見たり、したりするのが好きだ

合理的思考 = .8142 (.8161)

1. 無理したり無駄なことをしていないかと考えることよくある
2. 何かするときに、もっと良い別のやり方はないかと考える
3. 問題が起きたとき、なぜそうなったをじっくり考える
4. 何かするときに、ついでにできることはないかと考える

アスピレーション = .8346 (.8354)

1. 遊びでも仕事でも、やりだすと熱中して、まあまあものにする
2. 少し無理かなと思われるくらいの目標をたてて頑張るほうだ
3. 自分がやったことがどんな効果をもたらしたか早く知りたい
4. 一緒に仕事するなら、気のあった人よりも有能な人を選ぶ
5. 忙しいほうが何となく心が落ち着く
6. 人のやることをみていて自分ならもっと適切にやるのにとイライラすることがある
7. めったに弱音を吐くことはない
8. 困難に出会うと、やる気が湧(わ)く
9. 自分の力をためすようなことをやるのが好きだ
10. 目新しいもの(こと)を見たり、したりするのが好きだ

第2主成分 スマート1 = .8518 (.8530)

1. なかなかの美人(男前)である
2. 知性がある(知的である)
3. 物覚えが早い
4. 記憶力がいい
5. 直感力やひらめきがある
6. 計算や数字に強い
7. 社会的地位が高い方だ

スマート2 = .8520 (.8567)

1. 知性がある(知的である)
2. 物覚えが早い
3. 記憶力がいい
4. 直感力やひらめきがある
5. 計算や数字に強い

ナルシズム = .5174 (.5175)

1. なかなかの美人(男前)である
2. 社会的地位が高い方だ

スマート3 = .8303 (.8353)

1. 知性がある(知的である)
2. 物覚えが早い
3. 記憶力がいい
4. 直感力やひらめきがある

5. 計算や数字に強い
6. 外国語ができる
7. 地図があれば、初めてのところでも迷わず行ける

スマート 4 = .4459 (.4716)

1. 外国語ができる
2. 地図があれば、初めてのところでも迷わず行ける

スマート 5 = .8468 (.8516)

1. 知性がある (知的である)
2. 物覚えが早い
3. 記憶力がいい
4. 直感力やひらめきがある
5. 計算や数字に強い
6. 外国語ができる
7. 地図があれば、初めてのところでも迷わず行ける
8. 手先が器用
9. ものを書くことが好き
10. 字が上手である

手先の器用さ = .6245 (.6271)

1. 手先が器用
2. ものを書くことが好き
3. 字が上手である

ナルシズム・スマート・器用 = .8613 (.8654)

1. なかなかの美人(男前)である
2. 知性がある (知的である)
3. 物覚えが早い
4. 記憶力がいい
5. 直感力やひらめきがある
6. 計算や数字に強い
7. 社会的地位が高い方だ
8. 外国語ができる
9. 地図があれば、初めてのところでも迷わず行ける
10. 手先が器用
11. ものを書くことが好き
12. 字が上手である

第 3 主成分 積極的親密性 = .8056 (.8082)

1. 静かに腰を落ち着けて何かをするより、活動的に動き回るほうが自分に合っている
2. 自分が気に入ったもの(こと)は他人にもすすめたくなる
3. 他人の面倒をみるのが好きだ
4. 他人から何かと頼られるほうだ
5. 周囲の人が私に何を期待しているか、よくわかっている
6. 私は自分の周囲の人たちとうまくいっている
7. 私が誘えば、たいていの人と一緒に行動してくれる

融和的社会関係 1 = .8271 (.8287)

1. 静かに腰を落ち着けて何かをするより、活動的に動き回るほうが自分に合っている
2. 自分が気に入ったもの(こと)は他人にもすすめたくなる
3. 他人の面倒をみるのが好きだ
4. 他人から何かと頼られるほうだ
5. 周囲の人が私に何を期待しているか、よくわかっている
6. 私は自分の周囲の人たちとうまくいっている
7. 私が誘えば、たいていの人と一緒に行動してくれる
8. 何かしたり、どこかへ出かける時に、誰かを誘うことが多い
9. 家にいても落ちつかず、誰かを訪ねてみたくなる
10. 人との関係がうまくいくように自分を仕向けるのが上手である
11. わたしは聞き上手である
12. 人の良いところだけを見て付き合うようにしている

融和的社会関係 2 = .8110 (.8119)

1. 静かに腰を落ち着けて何かをするより、活動的に動き回るほうが自分に合っている
2. 自分が気に入ったもの(こと)は他人にもすすめたくなる
3. 他人の面倒をみるのが好きだ
4. 他人から何かと頼られるほうだ
5. 周囲の人が私に何を期待しているか、よくわかっている
6. 私は自分の周囲の人たちとうまくいっている
7. 私が誘えば、たいていの人と一緒に行動してくれる
8. 何かしたり、どこかへ出かける時に、誰かを誘うことが多い
9. 家にいても落ちつかず、誰かを訪ねてみたくなる

親和性 = .5625 (.5650)

1. 何かしたり、どこかへ出かける時に、誰かを誘うことが多い
2. 家にいても落ちつかず、誰かを訪ねてみたくなる

折り合い 1 = .6122 (.6100)

1. 人との関係がうまくいくように自分を仕向けるのが上手である
2. わたしは聞き上手である
3. 人の良いところだけを見て付き合うようにしている

折り合い 2 = .6741 (.6761)

1. 人との関係がうまくいくように自分を仕向けるのが上手である
2. わたしは聞き上手である
3. 人の良いところだけを見て付き合うようにしている
4. 私は自分の周囲の人たちとうまくいっている

第 4 主成分 体力 = .7726 (.7749)

1. 病気になりにくい頑丈(がんじょう)な体をもっている
2. 歯が丈夫である
3. 年のわりには体が柔(やわ)らかい
4. 年のわりには歩くのが速い
5. 年のわりには持久力がある(スタミナがある)
6. 年のわりには食欲が旺盛(よく食べる)

第5主成分 信念 = .7700 (.7676)

1. 人のことなどがまっていられないと思うことがよくある
2. 自分が納得していれば他人がどう思うと気にならない
3. 人がどう言おうと自分は自分だと思っている
4. 他人の意見に左右されずに自分のやり方を通すことが多い
5. 自分で決めたことは、結果が悪くても後悔しない

第18主成分 自分に忠実(率直) = .5551 (.5547)

1. そのときの気分や感情にまかせて行動することが多い
2. 若者とは話が通じないから自分から進んで話をしようとは思わない
3. 人からよく誤解される
4. 嫌いな人と無理して付き合うようなことはしない
5. 他人に気を使ってばかりいられないと思うことがよくある

第22主成分 孤高 = .5572 (.5580)

1. 大勢の人といっしょに何かするよりも、一人で好きなことをしているほうが楽しい
2. 気心の知れた親友が一人か二人いれば多くの友人はいらない

第23主成分 譲歩しない(妥協しない)、強引 = .5250 (.5272)

1. 相手が納得するまで説得しようと努力する
2. 相手が誰であろうと、ダメなものはダメという

第26主成分 個性が強い = .4715 (.4733)

1. 思っていることや考えていることをすぐ口に出す方だ
2. みんなと違うことを考えたり、することがよくある
3. 私の興味や考えは周囲の人たちとはだいぶちがう

自己主張1 = .7763 (.7768)

1. 人のことなどがまっていられないと思うことがよくある
2. 自分が納得していれば他人がどう思うと気にならない
3. 人がどう言おうと自分は自分だと思っている
4. 他人の意見に左右されずに自分のやり方を通すことが多い
5. 自分で決めたことは、結果が悪くても後悔しない
6. そのときの気分や感情にまかせて行動することが多い
7. 若者とは話が通じないから自分から進んで話をしようとは思わない
8. 人からよく誤解される
9. 嫌いな人と無理して付き合うようなことはしない
10. 他人に気を使ってばかりいられないと思うことがよくある
11. 大勢の人といっしょに何かするよりも、一人で好きなことをしているほうが楽しい
12. 気心の知れた親友が一人か二人いれば多くの友人はいらない
13. 相手が納得するまで説得しようと努力する
14. 相手が誰であろうと、ダメなものはダメという
15. 思っていることや考えていることをすぐ口に出す方だ
16. みんなと違うことを考えたり、することがよくある
17. 私の興味や考えは周囲の人たちとはだいぶちがう

自己主張 2 = .7481 (.7458)

1. 人のことなどがまっぴらに思われることがよくある
2. 自分が納得していれば他人がどう思うと気にならない
3. 人がどう言おうと自分は自分だと思っている
4. 他人の意見に左右されずに自分のやり方を通すことが多い
5. 自分で決めたことは、結果が悪くても後悔しない
6. 思っていることや考えていることをすぐ口に出す方だ
7. みんなと違うことを考えたり、することがよくある
8. 私の興味や考えは周囲の人たちとはだいぶちがう

自分に忠実 (率直) 2 = .6371 (.6348)

1. そのときの気分や感情にまかせて行動することが多い
2. 若者とは話が通じないから自分から進んで話をしようとは思わない
3. 人からよく誤解される
4. 嫌いな人と無理して付き合うようなことはしない
5. 他人に気を使ってばかりいられないと思うことがよくある
6. 大勢の人といっしょに何かするよりも、一人で好きなことをしているほうが楽しい
7. 気心の知れた親友が一人か二人いれば多くの友人はいらない

自分に忠実 (率直) 3 = .6169 (.6213)

1. そのときの気分や感情にまかせて行動することが多い
2. 若者とは話が通じないから自分から進んで話をしようとは思わない
3. 人からよく誤解される
4. 嫌いな人と無理して付き合うようなことはしない
5. 他人に気を使ってばかりいられないと思うことがよくある
6. 思っていることや考えていることをすぐ口に出す方だ
7. みんなと違うことを考えたり、することがよくある
8. 私の興味や考えは周囲の人たちとはだいぶちがう

自分に忠実 (率直) 4 = .6698 (.6719)

1. そのときの気分や感情にまかせて行動することが多い
2. 若者とは話が通じないから自分から進んで話をしようとは思わない
3. 人からよく誤解される
4. 嫌いな人と無理して付き合うようなことはしない
5. 他人に気を使ってばかりいられないと思うことがよくある
6. 大勢の人といっしょに何かするよりも、一人で好きなことをしているほうが楽しい
7. 気心の知れた親友が一人か二人いれば多くの友人はいらない
6. 思っていることや考えていることをすぐ口に出す方だ
7. みんなと違うことを考えたり、することがよくある
8. 私の興味や考えは周囲の人たちとはだいぶちがう

自分に忠実 (率直) 5 = .6750 (.6748)

1. そのときの気分や感情にまかせて行動することが多い
2. 若者とは話が通じないから自分から進んで話をしようとは思わない
3. 人からよく誤解される
4. 嫌いな人と無理して付き合うようなことはしない
5. 他人に気を使ってばかりいられないと思うことがよくある
6. 大勢の人といっしょに何かするよりも、一人で好きなことをしているほうが楽しい
7. 気心の知れた親友が一人か二人いれば多くの友人はいらない

8. みんなと違うことを考えたり、することがよくある
9. 私の興味や考えは周囲の人たちとはだいぶちがう

第 6 主成分 計画性 = .7863 (.7881)

1. 何かするとき、準備や段取り（だんどり）をしっかりやる
2. 何をするにも早めに計画を立てるようにしている
3. 他の人に頼めることはしないようにしている
4. それが本当にやらなければならないことなのかをよく考える
5. 身のまわりはいつもキチンとしていている
6. 何をするにも、たいていは自分で決めている

第 7 主成分 孤立 = .7636 (.7627)

1. 何かあったとき、私を誘ってくれる人は少ない
2. 私にはたよりにできる人がいない
3. 私には腹をわって話ができる人がいない
4. 家族が、もっと自分を理解してくれたらと思う

第 8 主成分 状況対応 = .7295 (.7356)

1. 腹が立ったときでも、そのことを顔に表すことはない
2. やることが丁寧（ていねい）である
3. 自制心が強い（自分をおさえたり、コントロールできる）
4. 物事を現実的に考える（ないものねだりをしない）
5. その場にあわせて、自分を変えることができる

第 9 主成分 支援資源 = .8081 (.8090)

1. 頼りになる家族をもっている
2. 頼りになる子どもをもっている
3. 頼りになる友人をもっている
4. 頼りになる親戚をもっている
5. 困ったときに相談できる人がいる

家族資源 = .8152 (.8172)

1. 頼りになる家族をもっている
2. 頼りになる子どもをもっている

家族外資源 = .7779 (.7787)

3. 頼りになる友人をもっている
4. 頼りになる親戚をもっている
5. 困ったときに相談できる人がいる

第 10 主成分 目標設定 1 = .7496 (.7509)

1. 1 週間ごとや 1 か月ごと、1 年ごとの計画をつくっている
2. 1 か月なり 1 年なり先に何かしようと考えていることがある
3. これから先、したことごとがたくさんある
4. 自分で決めた人生の目標を追い続けている
5. 専門的知識や技術を持った友人・知人がいる

目標設定 2 =.7408 (.7412)

1. 1週間ごとや1か月ごと、1年ごとの計画をつくっている
2. 1か月なり1年なり先に何かしようと考えていることがある
3. これから先、したことがたくさんある
4. 自分で決めた人生の目標を追い続けている

計画づくり =.8389 (.8389)

1. 1週間ごとや1か月ごと、1年ごとの計画をつくっている
2. 1か月なり1年なり先に何かしようと考えていることがある

目標設定 3 =.5642 (.5657)

1. これから先、したことがたくさんある
2. 自分で決めた人生の目標を追い続けている
3. 専門的知識や技術を持った友人・知人がいる

第11主成分 ストレス処理 =.7436 (.7431)

1. 気分転換の方法をいくつも持っている
2. 気がめいたときは、あれこれと考えないようにしている
3. 自分を励ましてくれる人を持っている
4. 楽しいことを思い浮かべてウキウキすることがよくある
5. 多くのことを背負い込まないようにしている
6. 悪いことがあっても、いつか良いこともあると思うから深刻になって悩むことがない

第12主成分 明朗快活 1 =.8410 (.8421)

1. 他人や仕事に対して、まじめで真心がこもっている
2. 他の人の喜びや悲しみをいっしょに分かち合える
3. 気持ちを素直に表現できる
4. 人に優(やさ)しい
5. ほがらかで活発
6. 勇気がある

明朗快活 2 =.8655 (.8664)

1. 他人や仕事に対して、まじめで真心がこもっている
2. 他の人の喜びや悲しみをいっしょに分かち合える
3. 気持ちを素直に表現できる
4. 人に優(やさ)しい
5. ほがらかで活発
6. 勇気がある
7. 知らない人とでも緊張しないで話ができる
8. 道を聞かれたら、わかりやすく教えることができる
9. 話し上手である
10. 大胆である(思いきったことができる)

第13主成分 依存性 =.6755 (.6764)

1. 自分が判断を下す前に、人に意見を求めることが多い
2. 自分の考えを強く主張できない
3. 人に批判されると、うろたえて落ち込む

4. 人の意見にまどわされて、後悔することが多い

第14主成分 フランク =.7733 (.7736)

1. 知らない人とでも緊張しないで話ができる
2. 道を聞かれたら、わかりやすく教えることができる
3. 話し上手である
4. 大胆である(思いきったことができる)

第15主成分 ノーティ1 =.6250 (.6238)

1. ふざけたり冗談をいって人を笑わせることが多い
2. どっちかというと下品な方だ
3. ちょっとしたイタズラやお茶目なことをするのが楽しい
4. ポルノ雑誌や成人向き映画に興味がある
5. 必要なものを手に入れるためには他人を傷つけることもある

ノーティ2 =.6081 (.6065)

1. ふざけたり冗談をいって人を笑わせることが多い
2. どっちかというと下品な方だ
3. ちょっとしたイタズラやお茶目なことをするのが楽しい
4. ポルノ雑誌や成人向き映画に興味がある

第16主成分 自分を大切にする1 =.7381 (.7438)

1. ちょっとしたげいたくや楽しみを自分に与えることがよくある
2. 自分の良い点について考えることがよくある
3. 自分を好きだと思えることがよくある

自分を大切にする2 =.7580 (.7619)

1. ちょっとしたげいたくや楽しみを自分に与えることがよくある
2. 自分の良い点について考えることがよくある
3. 自分を好きだと思えることがよくある
4. 楽しいことを思い浮かべてウキウキすることがよくある

自分を大切にする3 =.7773 (.7798)

1. ちょっとしたげいたくや楽しみを自分に与えることがよくある
2. 自分の良い点について考えることがよくある
3. 自分を好きだと思えることがよくある
4. 楽しいことを思い浮かべてウキウキすることがよくある
5. 気分転換の方法をいくつももっている

ストレス処理2 =.7999 (.7986)

1. 気分転換の方法をいくつももっている
2. 気がめいたときは、あれこれと考えないようにしている
3. 自分を励ましてくれる人をもっている
4. 楽しいことを思い浮かべてウキウキすることがよくある
5. 多くのことを背負い込まないようにしている
6. 悪いことがあっても、いつか良いこともあると思うから深刻になって悩むことがない

7. ちょっとしたぜいたくや楽しみを自分に与えることがよくある
8. 自分の良い点について考えることがよくある
9. 自分を好きだと思えることがよくある

第17主成分 おしゃれ = .6886 (.6900)

1. 料理が上手
2. 味にうるさい (グルメである)
3. おしゃれである

第19主成分 怒りの処理 1 = .6051 (.6056)

1. どんなことやどんな人が私を怒 (おこ) らせるかわかっている
2. 怒 (いか) りの気持ちを聞いてもらえる人がいる
3. それが、人と争 (あらそ) うほどのものをじっくり考える
4. 怒りや腹立ちの気持ちを長く持ち続けることがない

怒りの処理 2 = .6031 (.6029)

1. どんなことやどんな人が私を怒 (おこ) らせるかわかっている
2. 怒 (いか) りの気持ちを聞いてもらえる人がいる
3. それが、人と争 (あらそ) うほどのものをじっくり考える
4. 怒りや腹立ちの気持ちを長く持ち続けることがない
5. 腹が立ったときでも、そのことを顔に表すことはない

自己統制 2

= .7391 (.7453)

1. どんなことやどんな人が私を怒 (おこ) らせるかわかっている
2. 怒 (いか) りの気持ちを聞いてもらえる人がいる
3. それが、人と争 (あらそ) うほどのものをじっくり考える
4. 怒りや腹立ちの気持ちを長く持ち続けることがない
5. 腹が立ったときでも、そのことを顔に表すことはない
6. やることが丁寧 (ていねい) である
7. 自制心が強い (自分をおさえたり、コントロールできる)
8. 物事を現実的に考える (ないものねだりをしない)
9. その場にあわせて、自分を変えることができる

第21主成分 フォロワー = .5692 (.5693)

1. リーダーになるよりは、補佐役のほうが自分にあっている
2. 皆で何かするときには、役を与えられないほうがよい

マイペース = .5548 (.5552)

1. リーダーになるよりは、補佐役のほうが自分にあっている
2. 皆で何かするときには、役を与えられないほうがよい
3. なにごとによらず、一生懸命というのはきらいで、気ままにのんびりやる主義だ
4. 率先して何かをするということは自分の好みではない

自分に忠実 (率直) 6 = .5674 (.5699)

1. そのときの気分や感情にまかせて行動することが多い

2. 若者とは話が通じないから自分から進んで話をしようとは思わない
3. 人からよく誤解される
4. 嫌いな人と無理して付き合うようなことはしない
5. 他人に気を使ってばかりいられないと思うことがよくある
6. この10年くらい、自分自身、人間が変わった

第29主成分 不安 = .2125 (.2126)

1. これから先のことを考えたら憂鬱(ゆううつ)になる
2. ふだんはできるだけ質素にしておいて金や財産をためたい

孤独不安 = .7462 (.7447)

1. 何かあったとき、私を誘ってくれる人は少ない
2. 私にはたよりにできる人がいない
3. 私には腹をわって話ができる人がいない
4. 家族が、もっと自分を理解してくれたらと思う
5. これから先のことを考えたら憂鬱(ゆううつ)になる

一般的には、クロンバックの値は0.7を越えれば、その尺度の信頼性(内部一貫性)が高いと見なされている。しかし、既に述べたように、その値が絶対的基準になっているというわけではなく、どの程度の値でなければならぬという絶対的な基準は特にない。したがって、値は大きければ大きいほど良いことになるが、それが低いからといって、その尺度の有効性そのものが低い、あるいは、その尺度は無効であるというわけではない。とはいえ、値があまりにも小さい場合には、その尺度を構成する諸項目は相互にほとんど関係が無い、言い換えれば、それら諸項目が指し示す内容が相互に大きく異なっていることになる。したがって、それら諸項目の合成得点で測定される対象が何であるかわからなくなってしまう。以上のことから、本稿では、測定尺度として採用する際の値の基準0.5とし、それ未満の場合には、それを測定尺度として採用しないことにする。この基準に従えば、上記の諸尺度のうち、「スマート4」(=0.4459)、第26主成分「個性」(0.4715)、第29主成分「不安」(0.2125)の3つは採用されないことになる。このうち、第29主成分「不安」は、コンピテンスを測定する尺度とはいえないし、第26主成分「個性」は、主成分としては独立して抽出されたが、尺度の信頼性の面からいえば、それ独自で一つの尺度を構成するよりは、「自己主張」や「信念」、「我が道を行く」といった尺度を構成する要素として用いた方が適切であるともいえる。

注

『リビング・スキル』では、8つの課題のそれぞれについて20項目からなる「スキルに関する自己評価項目」(skills evaluation checklist)を掲載している。測定尺度を検討する上で参考になるところが多かったので、以下に紹介しておく。ただし、それら項目をそのまま採用したわけではない。ただし、日本語は筆者の試訳である。なお、各項目に関する自己評価の方法は、「自分にぴったり当てはまる」(very like me)、「当てはまる」(like me)、「当てはまらない」(unlike me)、「自分には全く当てはまらない」(veryunlikeme)のうちのどれか一つを選択する4件法である。

caring for yourself (自分を大切にすること)

1. 自分に必要なものは他の人に必要なものと同じように大事だと考えている
2. 人に世話をしてもらうのが好きだ

3. 自分を価値ある重要な人間として扱う
4. 自分に外出やプレゼント、その他の楽しみを与えることがある
5. しばしば自分の良い点について考える
6. 将来そうになりたい人物を知っている(自分がそうであったらよいと思える人物を知っている)
7. 時には、自分勝手になることも必要だと感じる
8. 他人が望んでいることに従って自分の人生を生きる気はない
9. 自分の内面では一人の大人だと感じている
10. 自分が好きだ
11. わたしの間人間関係においては他の人と全く同様に大切だと感じている
12. 自分に重要なことをするのに必要な時間を自分に与えることができる
13. 自分のやり方が好きだ
14. 自分の行動には全責任をとる
15. 自分が必要なものを手に入れるためには他人を傷つけることも必要だと考えるときがある
16. 自分にはほかの皆と同じように権利を持っている
17. 自分の身体については肯定的に思っている
18. 一人でも幸福でいられる
19. 他人の問題を解決する責任を自分に負わせることはない
20. 健康や経済、人間関係、容姿などの点でいつも気をつけている

asserting yourself(自己主張)

1. 自分は他の人と同等だ
2. 自分がどう思っているかをすぐ口に出す
3. 誰かが私の好きなことをするとき、かれらにそうだという
4. 大人として、自分に責任があると思う
5. 他人の問題を解決するために責任をとることはしまい
6. 私の人生は皆を楽しませるためにあるのではない
7. 失敗は常に学ぶためにあると思う
8. 知らない権利があることを知っている
9. 他人がそうであるという理由で何かに関心を持たなければならないということはない
10. 他人にそのことを正当化することなしに私の気持ちを変える資格があると思う
11. 他人と付き合う時には、彼らを利用しようとは思わないし利用されようとも思わない
12. 私自身の考えをもっており、それらを他の人と分かち合いたい
13. 必ずしも他人が納得しないときでも、自分の見解をわからせようとする
14. 何かが変わらなければと強く思うとき、他の人が反対しても強行する
15. 他人が理屈に合わない要求をしたときは、ダメという
16. うまくやったとき、そのことでほめられることを喜ぶ
17. 私がやったことに対して誰かが正当に批判したとき、それから学ぶようにする
18. 人が私を見下すのは許せない
19. 人をほめるのが好きだ
20. 私にとっては他の人と働くことと、物事をよくするために自分の才能を用いることは重要だ

managing stress(ストレス処理)

1. 自分は、ストレスの処理はうまいと感じる
2. 私の人生は解決を必要とする問題の連続だ
3. 自分に対する要求が緊張を引き起こしていることを知っている。
4. 人生が私に課す要請をうまく処理できると感じている
5. 何らかの状況が私にストレスを与えている理由を理解できる
6. どんなことがどんなことが私にストレスを感じさせているかわかっている
7. 自分がストレス状態にあるときのサインをよくわかっている
8. ストレスを解消する私の方法は、状況処理するために計画を持つことである
9. ストレスを解消する方法が私の関係をどのように左右するかわかっている
10. ストレスや緊張を解消するいろいろな方法をもっている
11. 私は感じているストレスの大きさを状況を注意深く考えることによって低減することができる
12. 人生があまりに多くのことを私に求めるとき、それらを減少させるようにする

13. 処理できない何かに直面した時、将来それをうまく処理するのに何が私の手助けになるかを考える
14. 私の周りにサポートの良いネットワークを作り上げるようにしている
15. 問題があるときに、わたしはいつも行動を起こす前にほかに解決策がないかを注意深く検討する
16. 姑息な（奇をてらった・手の込んだ）解決策はさけるのが賢明だと時々感じる
17. たいていは自分を励ますように自分に語りかけることによって心穏やかにしておくことができる
18. たとえ困難な状況を変えることができなくても、それと共に生きることが出来る
19. いつも、ストレスを解消するために、休養したり瞑想したり運動するようにしている
20. 緊張やストレスを解消する積極的な方法に想像力を駆使している

thinking rationally（合理的に考える）

1. 気が動転したときには、その背景にどんな心配事（考え）があるかを常に考えを巡らす
2. 何かに失敗したときに、その困難を乗り越えてそこから何かを学ぶことができる
3. 他人に認められることは嬉しいが、それなしでもやっていける
4. 人が悪いこと、あるいは不正なことをしたときでも、そのことでそんなに動転しない
5. ことが私にとってうまくいかないとき、好ましくはないが、それを我慢することができる
6. たいていは落ち込んだ気分をたまたま私に生じた何かに関連させることができる（原因がわかる）
7. 私の世界観が私の考え方にどう影響しているか理解できる
8. 人間として変化し、成長できると信じている
9. 人生において時には他の人を傷つけることになることもあると思っている
10. 私が信じている幾つかのことは私に問題を引き起こすことをよくわかっている
11. 本気になれば、考え方を変えることができる
12. 自分が完全でなければならぬ理由などない
13. 誰がなんと思うと私は価値ある人間である
14. ほしいものが手に入らないからといって、そんなに落ち込んだりはしない
15. 罪意識は不必要な感情だ
16. もし必要ならば、他の人が人生において重要だと見なすことの多くが無くてもやっていける
17. 私に何が起ころうとも耐える（我慢する）ことができる
18. 人生で生じる多くの災難は、多くの人が物事を見る見方で簡単に対処できると思っている
19. 私は失敗はするが決して人生の失敗者にはならない
20. 私自身を他の人と同等と見なすことが唯一の道理にあったことだ

relationships（社会関係）

1. 私は人との関係をうまくいくようにコントロールするのが上手である
2. 人の意見を素直に聞くことができる
3. 関係が深くなれば、私事をさらけだす覚悟をしなければならない
4. 良い聞き手になるようにしている
5. 相手との間の何かについてはなす前に、いつも何を伝えたいか考えを整理するようにしている
6. 物事が私にとって公平ではないと感じるとき、そのことを他の人と議論するよう努めている
7. 私のいうことに耳を傾けないならば、そのことをかれらに伝える
8. 私の親密な関係においては、得るものと提供するものとは多かれ少なかれバランスがとれている
9. 私の関係の多くにおいては、私の必要を自覚しているし、私のほしいものを主張する
10. 他の人と関係を維持するとき、その人たちは私たちがすることや、それをどのようにするかということについて同等の発言権を持っていると思っている
11. 私の人との関係は競争的ではない。両者とも勝ったり負けたりである。
12. 関係から引っこみたいし、両者に何が期待されているかをよく考えたい
13. ある人が全権を握っているときには関係は大変に悪く感じる
14. ある人が、あなたが求めているもの全てを提供することを期待することは道理に合わないことなので、多様な人と知り合うことは大切だと思っている
15. 時には、他の人に関する考えは全く非現実的で、関係を損なうことがある
16. 親密な関係において、要求の変化をすぐ気がつき、新たなやり方を相談する用意がある
17. 他の人が私を利用することができる場所に自分を置くようなことはしない
18. 自分を世話できなければ他人を適切に世話できないと感じる
19. 誰かを世話する立場になったときには相手の立場に立って考えようとするので彼らの必要を理解できる

20. 世話する関係においては、互いに尊敬しあうことを期待している

managing anger and conflict (怒りと葛藤の処理)

1. 誰かがわたしに腹を立てているとき、たとえそれが直接現れていなくても気安く口に出せる
2. 抑えたやり方で怒りを示すことは困難ではない
3. いつも面と向かって怒り、それを隠せない
4. わたしは怒りの感情と共生している
5. 長い目で見れば怒りの上に座っていることは良いことではない
6. わたしの怒りは、そのままにすれば自分で手に負えなくなるという心配はない
7. 時には怒ることは、状況を改善する唯一の方法であると思う
8. 時には怒ることができることは重要なことだと思う
9. 怒りを表わすときにはコントロールしていると思っている
10. 人に聞かせるためには怒らなければならないときもある
11. 怒りを感じるのは、わたしが踏みつけられているというサインである
12. 後であらゆる衝突を見るようにしているので、それらをうまく扱うことを学ぶことができる
13. 関わるのが賢いことかどうかを決めるために起きそうな衝突を注意深く検討する
14. 葛藤に襲われたときそれを取り除くためにどんな方法を探るか知っている
15. 衝突する前に、それから自分が達成しようとしたことが何かを頭の中で確かめる
16. 冷静さを失わせるような全ての原因を見つめることによって困難な遭遇に準備する
17. 休養したり困難な状況を通して自分に語りかけることによって怒りをコントロールできる
18. どのような状況や人物がわたしを怒らせやすいかわかっている
19. わたしの怒りの感情の背景にいつもある考えや信念を理解している
20. わたしは物事を胸に納めておかない (怒りを胸に納めておかない)

planning and organizing (計画と組織化)

1. 人生に関する限りわたしはたいい運転席にいる
2. 達成するのに時間がかかることをやっているとき、それを各段階ごとに行うことを目標にする
3. わたしの人生で成し遂げたいことが何かに関して良い考えがある
4. やることがたくさんあるとき、何が最も重要で最初にやることを決めていく
5. 人生におけるゴールをもっているのなら、それに到達する具体的な方法を生み出すのに困難はない
6. わたしの時間は、自分が本当にしたいことに費やされていることに満足している
7. 大きな課題の間にさえ利用できる時間はほんの少ししかない
8. 重要ではないことに時間を費やすことはない
9. 使える時間で処理できる以上のことをあえてしようとはしない
10. 他人はわたしにとって重要だが彼らがわたしの時間を無駄に費やしていないか確かめる
11. 事前に計画を立てるようにしているので危機をさけることができる
12. 何か重大なことが生じたとき、それを処理することができる時間を作るために計画する
13. やらなければならない何かをやりたくないときにたいいなぜかを考える
14. 他の人に頼めることはしないようにしている
15. 失敗に対して自分を罰するよりも成功に対して自分に報酬を与える方を好む
16. 遠いゴールに向かって働き続けるためには報酬をどのように用いるかを知っている
17. 得るものが失うものより大きいことを確信するまでは、そのことに傾注することはない
18. 主要なゴールに自分を近づける何かをするとき、必ず何らかの方法で自分に報酬を与える
19. もし成功したら自分自身をほめてやる
20. わたしの成功に報いるために人々をわたしに近づけさせ、わたしが進み続けるようにする

この計画化と組織化に関しては、次のような評価項目も用意されており、「そういうことは全くない」(almost never)には0点、「そういうことはめったにない」(rarely)に1点、「たまにはそうする」(some of the time)に2点、「たいいはそうする」(often)に3点、「ほとんどいつもそうする」(almost always)に4点を与え、1~10点の人に対しては、「あなたは明らかにこのコースを受けることが必要」と伝え、20~30点の人に対しては、「あなたは、危機を避けるスキルをもっているが、このコースを受ければ、そのスキルを一層改善することができるでしょう」とコメントし、30~40点の人には、「大変すばらしい。しかし、完全な人などいませんから、さらに多くを学ぶことがよいでしょう」とアドバイスしている。

- (1) いつも事前に計画を立てるので、ことが起きても用意できている。何かをするときには早めに計画を立てるほうだ。
- (2) 問題を早くつかむために定期的に計画を点検している。実行に移す前に何回も計画を点検する
- (3) 主要な出来事を予測して、それへの十分な時間を配分している。大事なことのために、いつも十分に時間をとってある
- (4) 何か計画しているとき、悪い結果が生じることを予想して、それを防ぐためにできることをする
- (5) 計画を出発させるときに起きそうな問題を考え、最悪の事態を処理することができるか確かめる
- (6) 毎日の、週の、長期の計画において、生じる危険を処理する時間を配分している
- (7) 常に危機状況を想定して、それらを防ぐために何ができるかを考えている
- (8) 困難な事態になるようなことが生じたならば、利用できる援助を事前に確かめる
- (9) 仕事があるならば、それを成し遂げるためにわたしが必要とするあらゆることをもっているかを早くに確かめる
- (10) 不確実な問題に配分するために必要と思われることよりも、計画(a project)に多くの時間を割り当てるようにしている

第12章 高齢者の日常的コンピテンス/ライフスキルと サクセスフル・エイジング

はじめに

既に詳述したように、日常的コンピテンス (everyday competence) とは、自立生活を送るために日常生活を効果的に調整し、日常生活に必須な諸活動を行うことができる能力または潜在的可能性のことである。それは、言い換えれば、個人の日常的な生活諸欲求を充足する能力にほかならない。日常的な生活欲求が充足されている状態は、一般に、生活満足とか幸福といわれる。したがって、日常的コンピテンスの水準が高ければ、生活満足感あるいは幸福度も高いことになる。そこで、次に、日常的コンピテンス/ライフスキルとサクセスフル・エイジングとの関連を分析する。

1. 幸福感と主観的老化度の測定尺度とデータ

(1) 幸福感の測定尺度

本稿で用いる幸福感尺度は、第9章で述べた「老後生活観尺度」と「アフェクト・バランス尺度」である。それらは、LSI-A (Life Satisfaction Index A: Neugarten et al., 1961) や PGS (Philadelphia Geriatric Center Morale Scale: Lawton, 1975)、Affect Balance Scale (情緒均衡尺度: Bradburn, 1969)などを参考にしながら筆者が作成したものである。「肯定的老後生活観尺度」と「否定的老後生活観尺度」では、作成当初は、それぞれ6項目と5項目で構成していたが(小田, 1992)、現在はともに9項目から構成している。「アフェクト・バランス尺度」は、「ポジティブ・アフェクト尺度」と「ネガティブ・アフェクト尺度」である。Bradburn (1969)のアフェクト・バランス尺度は、ポジティブ・アフェクト(肯定的感情)とネガティブ・アフェクト(否定的感情)の項目がそれぞれ5項目ずつの10項目で構成されているが、筆者が作成した尺度は、それぞれ6項目と8項目の14項目で構成されている。

(2) 主観的老化度の測定尺度

本稿では、以上のような幸福感尺度に加えて、「主観的老化度尺度」をサクセスフル・エイジングの測定尺度の一つとして用いることにする。この「主観的老化度尺度」は、キャバン (Cavan, 1949)の精神的老化度指標を参考に筆者が作成したものであるが、キャバンのそれと異なるところは、第9章でも述べたが、「日常活動老化度」と「心理社会的老化度」の2つの次元尺度で構成されていることである(小田, 1992)。

終生変わることなく心身共に青年期のようにエネルギーに満ちた人生を送ることができれば、これに優る幸福はないであろうが、残念ながら、中年期を過ぎれば、程度の差はあ

れ、五感の衰えや心身の活動能力の低下を誰しもが避けることはできない。サクセスフル・エイジングとは、高齢になっても衰えることなく若さを保ち続けることではなく、上手く年をとることである（小田，1993；1997）。それは、「老化」と呼ばれる加齢に伴う様々な変化を自覚的に受け入れて、高齢期の生活にうまく適応していくことである。「老化」を受け入れるということは、そうした変化に対して、それは加齢に伴う自然な過程であると納得して否定的な感情を強く抱かないということである。「日常活動老化度」は、自らの日常的な活動の変化に対する否定的な感情の程度であり、「心理社会的老化度」は、心理社会面における変化に対する否定的感情の程度である。そうした主観的老化度は、コンピテンスの水準が高ければ低いと考えられる。

老化度尺度の項目は以下の通りである。なお、年齢と主観的老化度との相関係数は、「日常活動老化度」では0.213($p<0.001$)、「心理社会的老化度」では0.149($p<0.001$)である。年齢と主観的老化度は順相関の関係にあり、年齢が上がるにつれて主観的老化度が高くなるのがわかる。しかし、係数自体は大きいものではなく、主観的老化度に対する年齢の影響はかなり小さいものでしかないこともわかる。

（3）老後生活観尺度、アフェクト・バランス尺度、老化度尺度の相関関係

Bradburn（1969）のアフェクト・バランスの考え方は、ポジティブ・アフェクトとネガティブ・アフェクトとは独立であると仮定されている。ポジティブ・アフェクトが強いからといってネガティブ・アフェクトが弱い、あるいはポジティブ・アフェクトが弱いからといってネガティブ・アフェクトが強いというわけではない、ということである。分析的には、ポジティブ・アフェクト得点とネガティブ・アフェクト得点とは無相関であるということである。

表1. 幸福感尺度および老化度尺度相互の相関係数

		肯定的 老後生活観	否定的 老後生活観	ポジティブ・ アフェクト	ネガティブ・ アフェクト	日常活動 老化度	心理社会的 老化度
肯定的老後生活観	相関係数	1.000	-0.297	0.458	-0.298	-0.258	-0.183
	有意確率		0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
	N	2460	2417	2099	2157	2415	2407
否定的老後生活観	相関係数		1.000	-0.113	0.541	0.451	0.571
	有意確率			0.000	0.000	0.000	0.000
	N		2455	2102	2160	2421	2420
ポジティブ・アフェク	相関係数			1.000	0.068	-0.199	-0.047
	有意確率				0.002	0.000	0.030
	N			2144	2051	2101	2093
ネガティブ・アフェク	相関係数				1.000	0.446	0.528
	有意確率					0.000	0.000
	N				2202	2155	2149
日常活動老化度	相関係数					1.000	0.626
	有意確率						0.000
	N					2469	2431
心理社会的老化度	相関係数						1.000
	有意確率						
	N						2456

本稿で扱うデータに関していえば、表1に見るように、ポジティブ・アフェクト得点とネガティブ・アフェクト得点の相関係数は0.068と正の相関で、1%水準で有意である。ポジティブ・アフェクトが強いとネガティブ・アフェクトも強いということになるが、その関係は、相関係数の値自体の小ささからいって無視できるほどであり、実質的には無相関とみなしてもよいくらいである。とはいえ、両者が明らかに順相関の関係にあるという結果は釈然としないともいえる。アフェクト・バランスの考え方では、ポジティブ・アフェクトがネガティブ・アフェクトを上回り、その程度が大きいほど幸福感が高いと判断するが、両者が順相関の関係にあるという今回の結果は、肯定的感情を強く持つ人（持たない人）は、否定的感情も強く持つ（持たない）ということを示していると解釈した方がよさそうである。ちなみに、ポジティブ・アフェクトのネガティブ・アフェクトに対する比をとると（ここでのアフェクト・バランス尺度はポジティブ・アフェクト尺度とネガティブ・アフェクト尺度の項目数が異なるので、各尺度による得点を項目数で割った平均得点を用いて比率を算出した）、1以上すなわちポジティブ・アフェクトがネガティブ・アフェクトを上回る回答者が全体の60%を占めている。

肯定的老後生活観と否定的老後生活観に関しては両者に有意な逆相関が認められる。しかし、その関係はそれほど強いものではない。老化度に関しては、日常活動老化度と心理社会的老化度との間には比較的強い相関関係が認められるが、相互に代替しうるほどの関係ではない。肯定的老後生活観とポジティブ・アフェクト、否定的老後生活観とネガティブ・アフェクトもそれぞれ比較的強い相関関係があるが、老後生活観とアフェクトバランスを相互代替的に用いることができるほどには強い関係があるわけではない。

ポジティブ・アフェクトと日常活動老化度とは逆相関の、ネガティブ・アフェクトと日常活動老化度および心理社会的老化度とは高い順相関の、否定的老後生活観と日常活動老化度および心理社会的老化度とは高い順相関の関係にある。否定的老後生活観およびネガティブ・アフェクトは、日常活動老化度よりも心理社会的老化度との関連が強い。老化度を幸福感の規定因と見なした場合には、日常的な行動との関連で意識する老化よりも、心理社会的な老化意識の方が、高齢期の生活に対する否定的態度や感情を、より促進していることがうかがわれる。ちなみに、否定的老後生活観を従属変数として2つの老化度を独立変数とする回帰分析の結果は、日常活動老化度の標準化係数は0.152（偏相関係数0.143、 $t = 7.1$ 、 $p < 0.001$ ）、心理社会的老化度のそれは0.476（偏相関係数0.413、 $t = 22.2$ 、 $p < 0.001$ ）で、 $R = 0.584$ であり、ネガティブ・アフェクトを従属変数とした場合のそれらは、それぞれ0.187（偏相関係数0.164、 $t = 7.8$ 、 $p < 0.001$ ）、0.407（偏相関係数0.347、 $t = 17.1$ ）で、 $R = 0.547$ ）である。

いうまでもないことであるが、生活満足感や幸福感はコンピテンス/ライフスキルだけで規定されるわけではないから、幸福感が高いからといって日常的コンピテンスの水準が高いとは限らない。その意味では、日常的コンピテンスは、生活満足感や幸福感の十分条件ではあっても必要条件ではないということになる。そのことを前提に、次には、作成した諸尺度で測定されるコンピテンス/ライフ・スキルの水準と高齢期における幸福感および老化度との関係を考察することとする。

表2は、欠損値を含むケースを除いた諸変数の基本統計量を示したものである。性別は、

男性を1, 女性を0とするダミー変数であり、平均値は男性の割合になる。ここでは、回答者の40%が男性であることが示されている。

表2. 諸尺度の基本統計量

	最小	最大	平均	標準偏差	歪度	尖度	度数
年齢(歳)	65	99	73.6	6.3	0.84	0.18	2682
性別(男=1, 女=0)	0	1	0.4	0.5	0.23	-1.95	2709
年間世帯所得(万円)	100	2000	450.1	359.9	2.16	5.22	2404
肯定的老後生活観	9	27	16.2	4.6	0.42	-0.59	2460
否定的老後生活観	9	27	15.6	3.2	0.52	0.36	2455
ポジティブ・アフェクト	6	24	13.1	4.5	0.18	-0.76	2144
ネガティブ・アフェクト	8	32	15.0	5.3	0.70	-0.09	2202
日常活動老化度	8	24	11.9	3.3	1.11	1.05	2469
心理社会的老化度	11	33	19.7	4.5	0.38	-0.25	2456
合理的積極性	14	56	37.8	7.0	-0.41	0.92	2470
合理的思考	4	16	11.4	2.4	-0.52	0.87	2480
アスピレーション	10	40	26.4	5.2	-0.23	0.48	2468
スマート1	7	28	14.5	4.1	0.12	-0.20	2428
スマート2	6	20	11.4	2.9	0.35	-0.02	2255
スマート3	7	28	14.5	4.1	0.16	-0.07	2441
スマート4	2	8	3.6	1.3	0.57	-0.05	2444
スマート5	14	40	22.3	4.7	0.48	0.16	2199
ナルシズム	2	8	3.6	1.2	0.42	-0.17	2408
手先の器用さ	3	12	6.7	2.1	0.26	-0.34	2461
ナルシズム・スマート・器用	11	46	24.7	6.4	0.09	-0.14	2450
積極的親密性	7	28	17.5	3.9	-0.10	0.52	2473
融和的社会関係	12	48	29.3	5.8	-0.26	0.86	2473
親和性	2	8	4.2	1.3	0.23	0.06	2457
折り合い	3	12	7.6	1.9	-0.19	0.17	2491
体力	6	24	14.0	3.8	0.05	-0.16	2486
信念	5	20	12.7	3.0	0.03	0.07	2487
自分に忠実1	5	20	11.9	2.4	-0.11	0.71	2462
自分に忠実2	7	28	17.3	3.3	-0.22	0.73	2473
自分に忠実3	8	32	18.8	3.3	-0.10	0.99	2467
自分に忠実4	10	40	24.2	4.1	-0.18	0.99	2473
自分に忠実5	9	36	21.8	3.9	-0.18	0.88	2469
自分に忠実6	6	24	14.1	2.7	-0.13	0.69	2469
孤高	2	8	5.4	1.5	-0.15	-0.34	2495
譲歩しない(妥協しない)	2	8	4.9	1.4	0.05	-0.25	2492
個性が強い	3	12	6.9	1.6	0.19	0.33	2491
自己主張1	17	68	41.6	6.9	-0.30	1.03	2488
自己主張2	8	32	19.5	3.9	-0.03	0.43	2492
計画性	6	24	17.0	3.5	-0.49	0.91	2475
孤立	4	16	8.6	2.5	0.33	-0.04	2435
自己統制1	5	20	13.4	2.7	-0.43	0.77	2464
自己統制2	9	36	23.3	4.6	-0.61	0.83	2479
怒りの処理1	4	16	10.2	2.3	-0.49	0.61	2432
怒りの処理2	5	20	12.6	2.7	-0.45	0.70	2437
支援資源	5	20	13.9	3.4	-0.22	-0.11	2477
家族資源	2	8	5.9	1.7	-0.52	-0.28	2482
家族外資源	3	12	8.1	2.2	-0.32	-0.19	2479
目標設定1	5	20	11.2	3.1	0.16	-0.18	2426
目標設定2	4	16	8.9	2.6	0.22	-0.18	2424
目標設定3	3	12	7.0	2.0	0.03	-0.27	2459
計画づくり	2	8	4.2	1.6	0.32	-0.47	2411
ストレス処理1	6	24	16.0	3.2	-0.43	0.93	2456
ストレス処理2	9	36	23.3	4.5	-0.36	0.97	2443
明朗快活1	6	24	16.6	3.5	-0.38	0.80	2476
明朗快活2	10	40	26.2	5.3	-0.18	0.60	2474
依存性	4	16	9.0	2.2	0.12	0.50	2438
フランク	4	16	9.7	2.5	0.07	0.11	2486
ノーティ1	5	20	9.3	2.3	0.28	0.20	2412
ノーティ2	4	16	7.8	2.1	0.35	0.37	2421
自分を大切にする1	3	12	7.3	1.9	-0.02	0.12	2439
自分を大切にする2	4	16	9.7	2.5	-0.05	0.23	2439
自分を大切にする3	5	20	12.3	2.9	-0.04	0.27	2427
おしゃれ	3	12	6.8	2.2	0.12	-0.45	2456
フォロワー	2	8	5.5	1.4	-0.36	0.14	2480
マイペース	4	16	10.2	2.3	-0.27	0.43	2485

歪度および尖度は、データの分布状態を図(ヒストグラム)で表示する代わりに記したものである。正規分布の場合は歪度は0であり、一般的に、歪度が1以上であると、そのデータの分布は正規分布とは有意な差があることを示す。尖度は、データの分布のスソの広がりぐあいを示し、正規分布の尖度は0である。尖度が正值であれば正規分布よりもスソが長い分布となっていることを、負値であればスソが短い分布となっていることを表す。表1に見るように、「年間世帯所得」と「日常活動老化度」の歪度は1を越えているので正規分布とは有意な差があるが、他の変数は正規分布からそうかけ離れていないことがわかる。所得の分布は、一般に正規分布にはならず、最頻値が左に寄った右スソの長い分布になる。表1の「年間世帯所得」もそのことを示してい

る。ちなみに、「年間世帯所得」と「日常活動老化度」を対数変換すると、歪度はそれぞれ0.25、0.52となって正規分布に近づくが、本稿では、それらに対しても対数変換しない値で分析する。

3. 幸福感、老化度とコンピテンス/ライフ・スキルとの相関関係

表3～表8は、作成したコンピテンスの諸尺度によって測定された各コンピテンス/ライフ・スキルの得点と、老後生活観、アフェクト・バランス、老化度の得点との積率相関係数を係数の大きい順に並べたものである。

(1) 肯定的老後生活観とコンピテンス/ライフスキル

肯定的老後生活観とコンピテンスの関係について見てみると(表3)、表の下段近くに並ぶ「フォロワー」から「自分に忠実(率直)」は5%水準で有意ではないことと、「依存性」と「孤立」の2項目が負の関係にあるほかは、他はいずれも0.1%水準で有意な正の相関関係を示している。それぞれのコンピテンスが高いほど老後生活観は肯定的であることがわかる。相関係数自体の大きさは0.374から0.057と大きくはないが、その中でも、「自分を大切にする」や「ストレス処理」、「支援資源」、「明朗快活」、「体力」、「目標設定」、「融和的社会関係」、「ナルシズム・スマート・器用」、「フランク」、「積極的親密性」、「折り合い」、「アスピレーション」、「自己統制」、「合理的積極性」、「おしゃれ」、「計画性」、「手先の器用さ」、「計画づくり」といったコンピテンスが肯定的老後生活観と相対的に強い正の相関関係にある。

(2) 否定的老後生活観とコンピテンス/ライフ・スキル

否定的老後生活観との関係では(表4)、肯定的老後生活観と有意な負の相関関係にあった「依存性」と「孤立」が相対的に高い正の相関を示していることに加えて、「自分に忠実(率直)」や「自己主張」、「孤高」、「マイペース」、「信念」、「個性」、「フォロワー」、「親和性」が否定的老後生活観と正の相関関係にある。このうち、「自分に忠実」と「孤高」、「マイペース」は肯定的老後生活観とは有意な相関関係が認められなかったが、他はいずれも肯定的老後生活観と正の相関関係にあったものである。ただし、その関係は、否定的老後生活観との関係に比べると遙かに弱いものでしかなかった。したがって、これらの結果をみるかぎり、先に述べた自己志向仮説は支持されそうもない。

「計画性」や「合理的思考」、「ノーティ」、「折り合い」、「合理的積極性」、「融和的社会関係」、「自己統制2」、「譲歩しない」、「アスピレーション」は、否定的老後生活観と正負いずれにおいても有意な相関関係が認められない。

肯定的老後生活観と高い相関関係にあったコンピテンスの中で、「体力」、「ナルシズム・スマート・器用」、「スマート」、「ナルシズム」、「フランク」、「明朗快活」、「支援資源」(家族、家族外)、「目標設定」、「手先の器用さ」、「おしゃれ」、「計画作り」、「自分を大切にする」、「ストレス処理」、「積極的親密性」は、否定的老後生活観と有意な逆相関の関係にある。したがって、これらは、肯定的老後生活観に促

表3.肯定的老後生活観と諸尺度との相関係数

	クロン バック の	相関 係数	有意 確率 (両側)	N
自分を大切にする3	0.780	0.374	0.000	2352
ストレス処理2	0.799	0.365	0.000	2360
自分を大切にする2	0.762	0.346	0.000	2353
支援資源	0.809	0.342	0.000	2376
明朗快活2	0.866	0.339	0.000	2371
明朗快活1	0.842	0.337	0.000	2368
ストレス処理1	0.743	0.323	0.000	2363
体力	0.775	0.315	0.000	2379
自分を大切にする1	0.744	0.308	0.000	2350
目標設定1	0.751	0.304	0.000	2350
目標設定3	0.566	0.304	0.000	2364
家族資源	0.817	0.298	0.000	2367
家族外資源	0.779	0.294	0.000	2376
目標設定2	0.739	0.294	0.000	2342
融和的社会関係	0.829	0.264	0.000	2385
ナルシズム・スマート器用	0.865	0.258	0.000	2363
スマート1	0.853	0.256	0.000	2344
フランク	0.774	0.256	0.000	2377
積極的親密性	0.808	0.252	0.000	2383
折り合い	0.610	0.238	0.000	2391
スマート3	0.835	0.237	0.000	2353
アスピレーション	0.835	0.235	0.000	2386
自己統制1(状況対応)	0.736	0.229	0.000	2368
合理的積極性	0.881	0.227	0.000	2389
おしゃれ	0.689	0.226	0.000	2359
計画性	0.788	0.225	0.000	2373
スマート5	0.852	0.217	0.000	2133
スマート2	0.857	0.216	0.000	2179
自己統制2	0.745	0.212	0.000	2386
手先の器用さ	0.627	0.210	0.000	2363
計画づくり	0.839	0.209	0.000	2337
ナルシズム	0.518	0.207	0.000	2329
怒りの処理2	0.603	0.162	0.000	2350
怒りの処理1	0.606	0.153	0.000	2334
合理的思考	0.816	0.141	0.000	2384
スマート4	0.472	0.130	0.000	2353
譲歩しない(妥協しない)	0.527	0.119	0.000	2390
自己主張2	0.746	0.090	0.000	2396
信念	0.768	0.082	0.000	2395
親和性	0.565	0.074	0.000	2374
自己主張1	0.777	0.070	0.001	2398
個性が強い	0.473	0.063	0.002	2396
ノーティ2	0.607	0.059	0.004	2341
フォロワー	0.569	0.057	0.005	2382
ノーティ1	0.625	0.036	0.083	2338
マイペース	0.555	0.024	0.241	2387
自分に忠実(率直)3	0.621	0.009	0.644	2386
自分に忠実(率直)4	0.672	0.000	0.991	2387
自分に忠実(率直)5	0.675	-0.022	0.277	2386
孤高	0.558	-0.033	0.105	2391
自分に忠実(率直)2	0.635	-0.036	0.075	2385
自分に忠実(率直)1	0.555	-0.038	0.065	2381
自分に忠実(率直)6	0.570	-0.038	0.062	2384
依存性	0.676	-0.084	0.000	2349
孤立	0.763	-0.209	0.000	2348

表4.否定的老後生活観と諸尺度との相関係数

	クロン バック の	相関 係数	有意 確率 (両側)	N
自分に忠実(率直)6	0.570	0.266	0.000	2377
自分に忠実(率直)2	0.635	0.259	0.000	2382
依存性	0.676	0.251	0.000	2345
自分に忠実(率直)5	0.675	0.246	0.000	2381
自分に忠実(率直)4	0.672	0.236	0.000	2381
自分に忠実(率直)1	0.555	0.236	0.000	2373
自分に忠実(率直)3	0.621	0.219	0.000	2380
孤立	0.763	0.204	0.000	2344
自己主張1	0.777	0.183	0.000	2392
孤高	0.558	0.173	0.000	2384
マイペース	0.555	0.117	0.000	2384
自己主張2	0.746	0.109	0.000	2390
信念	0.768	0.096	0.000	2389
個性が強い	0.473	0.083	0.000	2388
フォロワー	0.569	0.077	0.000	2379
親和性	0.565	0.060	0.003	2366
怒りの処理1	0.606	0.047	0.024	2331
怒りの処理2	0.603	0.035	0.094	2345
計画性	0.788	0.021	0.298	2363
合理的思考	0.816	0.021	0.307	2376
ノーティ2	0.607	0.008	0.710	2336
ノーティ1	0.625	0.003	0.879	2332
折り合い	0.610	-0.016	0.447	2383
合理的積極性	0.881	-0.016	0.442	2379
融和的社会関係	0.829	-0.024	0.252	2377
自己統制2	0.745	-0.029	0.156	2378
譲歩しない(妥協しない)	0.527	-0.032	0.122	2384
アスピレーション	0.835	-0.034	0.095	2377
積極的親密性	0.808	-0.045	0.027	2377
自分を大切にする1	0.744	-0.048	0.020	2345
自分を大切にする2	0.762	-0.056	0.007	2349
ストレス処理2	0.799	-0.076	0.000	2355
ストレス処理1	0.743	-0.080	0.000	2359
自分を大切にする3	0.780	-0.091	0.000	2345
計画づくり	0.839	-0.093	0.000	2328
自己統制1(状況対応)	0.736	-0.104	0.000	2362
目標設定2	0.739	-0.108	0.000	2333
明朗快活1	0.842	-0.112	0.000	2368
目標設定3	0.566	-0.115	0.000	2358
家族外資源	0.779	-0.120	0.000	2366
おしゃれ	0.689	-0.121	0.000	2354
手先の器用さ	0.627	-0.122	0.000	2354
家族資源	0.817	-0.129	0.000	2360
目標設定1	0.751	-0.130	0.000	2343
支援資源	0.809	-0.136	0.000	2369
スマート5	0.852	-0.138	0.000	2131
スマート4	0.472	-0.142	0.000	2348
明朗快活2	0.866	-0.143	0.000	2369
スマート2	0.857	-0.145	0.000	2180
フランク	0.774	-0.147	0.000	2373
ナルシズム	0.518	-0.152	0.000	2325
スマート1	0.853	-0.177	0.000	2343
スマート3	0.835	-0.178	0.000	2351
ナルシズム・スマート器用	0.865	-0.184	0.000	2359
体力	0.775	-0.230	0.000	2373

表5. ポジティブ・アフェクトと諸尺度との相関係数

	クロンバックの	相関係数	有意確率(両側)	N
自分を大切にする3	0.780	0.442	0.000	2066
目標設定 1	0.751	0.426	0.000	2069
目標設定 3	0.566	0.418	0.000	2074
自分を大切にする2	0.762	0.417	0.000	2068
明朗快活 2	0.866	0.414	0.000	2073
ストレス処理 2	0.799	0.413	0.000	2070
アスピレーション	0.835	0.407	0.000	2093
明朗快活 1	0.842	0.403	0.000	2074
合理的積極性	0.881	0.401	0.000	2093
積極的親密性	0.808	0.399	0.000	2088
融和的社会関係	0.829	0.397	0.000	2088
目標設定 2	0.739	0.395	0.000	2061
自分を大切にする1	0.744	0.383	0.000	2062
ナルシズム・スマート器用	0.865	0.359	0.000	2076
家族外資源	0.779	0.353	0.000	2070
ストレス処理 1	0.743	0.345	0.000	2074
支援資源	0.809	0.341	0.000	2071
フランク	0.774	0.325	0.000	2075
スマート1	0.853	0.325	0.000	2069
手先の器用さ	0.627	0.324	0.000	2063
体力	0.775	0.319	0.000	2082
計画づくり	0.839	0.318	0.000	2059
スマート3	0.835	0.315	0.000	2072
スマート5	0.852	0.310	0.000	1881
おしゃれ	0.689	0.305	0.000	2070
自己統制 2	0.745	0.301	0.000	2086
折り合い	0.610	0.291	0.000	2088
合理的思考	0.816	0.281	0.000	2090
計画性	0.788	0.273	0.000	2077
自己統制 1(状況対応)	0.736	0.273	0.000	2071
怒りの処理 1	0.606	0.263	0.000	2051
スマート2	0.857	0.254	0.000	1926
ナルシズム	0.518	0.254	0.000	2055
怒りの処理 2	0.603	0.248	0.000	2063
譲歩しない(妥協しない)	0.527	0.243	0.000	2090
家族資源	0.817	0.217	0.000	2065
スマート4	0.472	0.193	0.000	2072
個性が強い	0.473	0.160	0.000	2095
親和性	0.565	0.139	0.000	2081
ノーティ2	0.607	0.127	0.000	2063
自己主張 1	0.777	0.124	0.000	2098
自己主張 2	0.746	0.122	0.000	2095
ノーティ1	0.625	0.099	0.000	2061
自分に忠実(率直)3	0.621	0.079	0.000	2090
信念	0.768	0.076	0.000	2094
自分に忠実(率直)4	0.672	0.053	0.016	2091
フォロワー	0.569	0.033	0.126	2090
自分に忠実(率直)5	0.675	0.017	0.435	2090
自分に忠実(率直)6	0.570	0.013	0.562	2086
自分に忠実(率直)1	0.555	-0.007	0.740	2084
自分に忠実(率直)2	0.635	-0.012	0.589	2090
依存性	0.676	-0.019	0.381	2063
マイペース	0.555	-0.031	0.160	2096
孤高	0.558	-0.046	0.037	2092
孤立	0.763	-0.207	0.000	2067

表6. ネガティブ・アフェクトと諸尺度との相関係数

	クロンバックの	相関係数	有意確率(両側)	N
依存性	0.676	0.295	0.000	2125
自分に忠実(率直)6	0.570	0.250	0.000	2146
自分に忠実(率直)5	0.675	0.235	0.000	2150
自分に忠実(率直)4	0.672	0.235	0.000	2151
自分に忠実(率直)2	0.635	0.229	0.000	2150
自分に忠実(率直)3	0.621	0.220	0.000	2150
自分に忠実(率直)1	0.555	0.217	0.000	2144
孤立	0.763	0.194	0.000	2127
自己主張 1	0.777	0.151	0.000	2159
孤高	0.558	0.151	0.000	2152
個性が強い	0.473	0.135	0.000	2158
親和性	0.565	0.110	0.000	2140
マイペース	0.555	0.102	0.000	2157
怒りの処理 1	0.606	0.087	0.000	2116
自己主張 2	0.746	0.076	0.000	2155
怒りの処理 2	0.603	0.058	0.008	2126
ノーティ1	0.625	0.041	0.060	2126
フォロワー	0.569	0.036	0.092	2150
ノーティ2	0.607	0.025	0.246	2128
信念	0.768	0.024	0.260	2154
自分を大切にする1	0.744	-0.006	0.783	2122
融和的社会関係	0.829	-0.011	0.597	2147
合理的思考	0.816	-0.013	0.538	2150
おしゃれ	0.689	-0.014	0.525	2133
自己統制 2	0.745	-0.018	0.402	2148
自分を大切にする2	0.762	-0.021	0.330	2128
合理的積極性	0.881	-0.024	0.258	2154
積極的親密性	0.808	-0.028	0.201	2147
アスピレーション	0.835	-0.028	0.188	2154
譲歩しない(妥協しない)	0.527	-0.042	0.052	2152
計画性	0.788	-0.048	0.026	2137
ナルシズム	0.518	-0.052	0.017	2119
自分を大切にする3	0.780	-0.063	0.003	2126
折り合い	0.610	-0.066	0.002	2148
ストレス処理 2	0.799	-0.083	0.000	2132
目標設定 3	0.566	-0.092	0.000	2139
手先の器用さ	0.627	-0.102	0.000	2126
家族外資源	0.779	-0.103	0.000	2134
家族資源	0.817	-0.103	0.000	2128
目標設定 2	0.739	-0.104	0.000	2123
自己統制 1(状況対応)	0.736	-0.107	0.000	2133
計画づくり	0.839	-0.109	0.000	2120
目標設定 1	0.751	-0.112	0.000	2133
スマート5	0.852	-0.115	0.000	1936
支援資源	0.809	-0.117	0.000	2135
明朗快活 1	0.842	-0.120	0.000	2137
ストレス処理 1	0.743	-0.123	0.000	2134
スマート2	0.857	-0.123	0.000	1982
スマート1	0.853	-0.126	0.000	2130
フランク	0.774	-0.143	0.000	2137
明朗快活 2	0.866	-0.144	0.000	2136
ナルシズム・スマート器用	0.865	-0.147	0.000	2138
スマート4	0.472	-0.153	0.000	2132
スマート3	0.835	-0.163	0.000	2133
体力	0.775	-0.230	0.000	2145

表7.日常活動老化度と諸尺度との相関係数

	クロンバックの	相関係数	有意確率(両側)	N
孤立	0.763	0.251	0.000	2361
自分に忠実(率直)2	0.635	0.229	0.000	2399
自分に忠実(率直)5	0.675	0.222	0.000	2399
自分に忠実(率直)6	0.570	0.215	0.000	2395
自分に忠実(率直)4	0.672	0.215	0.000	2399
自分に忠実(率直)1	0.555	0.213	0.000	2391
自分に忠実(率直)3	0.621	0.188	0.000	2397
孤高	0.558	0.186	0.000	2401
依存性	0.676	0.154	0.000	2363
自己主張1	0.777	0.141	0.000	2412
自己主張2	0.746	0.108	0.000	2409
マイペース	0.555	0.094	0.000	2399
信念	0.768	0.092	0.000	2408
個性が強い	0.473	0.083	0.000	2403
フォロワー	0.569	0.025	0.219	2396
ノーティ1	0.625	-0.002	0.934	2348
怒りの処理1	0.606	-0.018	0.384	2344
ノーティ2	0.607	-0.026	0.214	2352
怒りの処理2	0.603	-0.027	0.196	2359
親和性	0.565	-0.042	0.042	2384
家族資源	0.817	-0.063	0.002	2375
合理的思考	0.816	-0.105	0.000	2393
譲歩しない(妥協しない)	0.527	-0.107	0.000	2402
ナルシズム	0.518	-0.110	0.000	2339
自己統制2	0.745	-0.115	0.000	2393
自分を大切にする1	0.744	-0.116	0.000	2356
折り合い	0.610	-0.120	0.000	2399
アスピレーション	0.835	-0.133	0.000	2395
合理的積極性	0.881	-0.133	0.000	2396
自分を大切にする2	0.762	-0.136	0.000	2360
スマート2	0.857	-0.140	0.000	2190
スマート5	0.852	-0.143	0.000	2142
計画づくり	0.839	-0.149	0.000	2344
計画性	0.788	-0.151	0.000	2377
ストレス処理1	0.743	-0.158	0.000	2376
ストレス処理2	0.799	-0.159	0.000	2371
自分を大切にする3	0.780	-0.162	0.000	2360
融和的社会関係	0.829	-0.163	0.000	2395
目標設定2	0.739	-0.168	0.000	2351
積極的親密性	0.808	-0.171	0.000	2394
支援資源	0.809	-0.171	0.000	2382
目標設定3	0.566	-0.174	0.000	2370
スマート4	0.472	-0.176	0.000	2365
目標設定1	0.751	-0.185	0.000	2359
自己統制1(状況対応)	0.736	-0.192	0.000	2377
スマート1	0.853	-0.196	0.000	2357
おしゃれ	0.689	-0.200	0.000	2374
フランク	0.774	-0.202	0.000	2386
家族外資源	0.779	-0.213	0.000	2378
手先の器用さ	0.627	-0.217	0.000	2367
スマート3	0.835	-0.221	0.000	2366
明朗快活1	0.842	-0.224	0.000	2378
ナルシズム・スマート器用	0.865	-0.232	0.000	2374
明朗快活2	0.866	-0.247	0.000	2380
体力	0.775	-0.317	0.000	2389

表8.心理社会的老化度と諸尺度との相関係数

	クロンバックの	相関係数	有意確率(両側)	N
依存性	0.676	0.260	0.000	2349
自分に忠実(率直)6	0.570	0.254	0.000	2380
自分に忠実(率直)2	0.635	0.239	0.000	2383
自分に忠実(率直)4	0.672	0.234	0.000	2383
自分に忠実(率直)5	0.675	0.234	0.000	2383
自分に忠実(率直)1	0.555	0.219	0.000	2376
自分に忠実(率直)3	0.621	0.213	0.000	2383
孤立	0.763	0.202	0.000	2345
孤高	0.558	0.173	0.000	2387
自己主張1	0.777	0.170	0.000	2396
個性が強い	0.473	0.119	0.000	2393
自己主張2	0.746	0.108	0.000	2395
マイペース	0.555	0.105	0.000	2388
親和性	0.565	0.093	0.000	2368
信念	0.768	0.071	0.001	2393
フォロワー	0.569	0.065	0.002	2383
怒りの処理1	0.606	0.053	0.011	2334
怒りの処理2	0.603	0.049	0.017	2349
合理的思考	0.816	0.030	0.147	2378
合理的積極性	0.881	0.020	0.338	2381
アスピレーション	0.835	0.019	0.350	2379
ノーティ1	0.625	0.018	0.376	2336
融和的社会関係	0.829	0.018	0.375	2379
ノーティ2	0.607	0.018	0.383	2340
折り合い	0.610	0.014	0.487	2383
譲歩しない(妥協しない)	0.527	0.004	0.844	2389
計画性	0.788	0.000	0.982	2364
積極的親密性	0.808	-0.006	0.766	2379
自己統制2	0.745	-0.020	0.327	2382
自分を大切にする2	0.762	-0.036	0.080	2349
自分を大切にする1	0.744	-0.037	0.071	2346
家族資源	0.817	-0.046	0.027	2365
ストレス処理2	0.799	-0.059	0.004	2359
自分を大切にする3	0.780	-0.067	0.001	2349
ストレス処理1	0.743	-0.067	0.001	2361
支援資源	0.809	-0.068	0.001	2372
家族外資源	0.779	-0.073	0.000	2371
目標設定2	0.739	-0.077	0.000	2336
目標設定3	0.566	-0.080	0.000	2361
自己統制1(状況対応)	0.736	-0.085	0.000	2368
計画づくり	0.839	-0.087	0.000	2332
手先の器用さ	0.627	-0.102	0.000	2356
目標設定1	0.751	-0.102	0.000	2346
ナルシズム	0.518	-0.104	0.000	2328
おしゃれ	0.689	-0.104	0.000	2358
明朗快活1	0.842	-0.105	0.000	2370
フランク	0.774	-0.127	0.000	2377
スマート5	0.852	-0.129	0.000	2133
明朗快活2	0.866	-0.134	0.000	2372
スマート2	0.857	-0.149	0.000	2181
スマート1	0.853	-0.178	0.000	2347
スマート4	0.472	-0.187	0.000	2352
ナルシズム・スマート器用	0.865	-0.191	0.000	2364
体力	0.775	-0.202	0.000	2378
スマート3	0.835	-0.212	0.000	2356

進的に作用しているコンピテンス/ライフ・スキルとみることができる。

(3) アフェクト・バランスとコンピテンス/ライフ・スキル

アフェクトバランスとコンピテンスの関係も以上の結果とほぼ同様である。ポジティブ・アフェクトと正の相関関係にあるコンピテンスを係数の大きい順にあげると、「自分を大切にする」、「目標設定」、「明朗快活」、「ストレス処理」、「アスピレーション」、「合理的積極性」、「積極的親密性」、「融和的社会関係」、「ナルシズム・スマート・器用」、「家族外資源」、「支援資源」、「フランク」、「スマート」、「手先の器用さ」、「体力」、「計画づくり」、「おしゃれ」、「自己統制」、「折り合い」、「合理的思考」、「計画性」、「怒りの処理」、「譲歩しない(妥協しない)」、「家族資源」、「個性」、「親和性」、「ノーティ」、「自己主張」、「信念」であり、「自分に忠実」、「依存性」、「マイペース」はポジティブ・アフェクトと正負いずれにおいても有意な関係は認められない(表5)。有意な正の相関関係にあるもののうち、「個性」、「親和性」、「怒りの処理」はネガティブ・アフェクトとも有意な相関関係にあるが、他はネガティブ・アフェクトとは逆相関の関係にあるか、有意な相関関係が認められない(表6)。

ネガティブ・アフェクトと総体的に強い正の相関関係にあるのは、「依存性」、「自分に忠実」、「孤立」、「自己主張1」、「孤高」、「マイペース」である。これらは、否定的老後生活観とも同様に強い順相関を示していたものであり、この結果も、先に述べた自己志向仮説を反証するものといえそうである。

(4) 老化度とコンピテンス/ライフ・スキル

主観的老化度との関係を見ると(表7、表8)、否定的老後生活観やネガティブ・アフェクトと順相関の関係にあるコンピテンス/ライフ・スキルの多くが日常的老化度および心理社会的老化度とも順相関の関係にあり、他のコンピテンスは逆相関にあるか有意な相関が認められない。日常活動老化度と心理社会的老化度に共通して順相関の関係にあるのは、「依存性」、「自分に忠実」、「孤立」、「孤高」、「自己主張」、「個性」、「マイペース」、「信念」である。「親和性」は、日常活動老化度とは逆相関の関係にあるが、心理社会的老化度とは順相関の関係にある。「フォロワー」と「怒りの処理」は、日常活動老化度とは有意な相関は認められないが、心理社会的老化度とは順相関の関係にある。

日常活動老化度にしる心理社会的老化度にしる、老化度と総体的に強い相関関係にあるコンピテンス/ライフ・スキルは、自己志向仮説でいう生活スタイルや生き方を促進する要因になっているとみることができる。また、逆に、老化度の水準の高さが、そうしたコンピテンス/ライフスキルを発達させ、そのことが自己志向型的生活スタイルや生き方をとらせるようになっていっているとみられることでもできよう。

ところで、本稿では、これまでに、例えば、「明朗快活」というコンピテンスを測定する尺度として、「明朗快活1」や「明朗快活2」といった2つの尺度を提案してきた。また、「合理的積極性」のように、「合理的思考」と「アスピレーション」といった1次元尺度を内包する2次元尺度もを提案してきた。いずれも、共分散構造分析による適合度やクロンバックの α に基づく信頼性分析による内部一貫性からいって、それら類似尺度や多

次元尺度のいずれもがそれぞれのコンピテンス/ライフ・スキルを測定する尺度として概ね有効であると考え。ところが、あるコンピテンスを測定しようとする場合、類似尺度が複数個あると、そのうちのどれを最適な尺度として選択するかが問題になる。

モデルとデータとの適合度を判定する指標の値や 値による信頼性係数は、ある一定の水準に達していれば、そのモデルや尺度が良好であると判断する目安あるいは下限値を表示するものである。したがって、あるコンピテンス/ライフ・スキルを測定する尺度として類似した尺度があった場合、それらの値がある水準に達していさえすれば、それら値の大小に拘ることなく、いずれの尺度を用いてもよいことになる。より一般的に言えば、ある対象を測定するための尺度が複数あった場合に、それらがいずれも測定尺度としての条件を満たしている有効な尺度であると判断されれば、指標や係数の値の大小をモデルや尺度の優劣の比較や選択の基準にする必要はないということである。

そうした場合、どの尺度を選択するかは、それら尺度を構成する項目の妥当性や必要性、重要性によって判断することになる。たとえば、A, B, C, D, Eの5つの項目で構成される尺度もA, B, C, D, Fで構成される尺度も同じくXという対象を測定する尺度であり、いずれも有効な尺度であったとする。このとき、Xを測定するには項目EよりもFの方が妥当性や必要性、重要性が高いと考えた場合、後者の尺度を選択することになるということである。

類似尺度を前にしたときにいずれの尺度を選択するかを検討する際に、尺度の反応度というか鋭敏度や測定力あるいは切れ味のようなものを確かめることができれば便利である。本稿で試みた老後生活観尺度やアフェクト・バランス尺度、老化度尺度との相関分析は、そうした要請に応える一つの方法でもあると考える。

たとえば、「自分を大切にする」というコンピテンス/ライフ・スキルに関して言えば、肯定的老後生活観およびポジティブ・アフェクトと正の相関関係が認められ、いずれとの関係においても、「自分を大切にする3」の相関係数が「自分を大切にする1」や「自分を大切にする2」のそれよりも大きい。この場合には、3つの類似尺度のうち、「自分を大切にする3」が老後の幸福感に最も反応度が高い尺度ということになる。ただし、そうした検討も尺度選択の絶対的方法というわけではないし、上で述べたように、そうして選択された尺度が他の類似尺度よりも優れていることを保証するわけではない。

4 . コンピテンス/ライフ・スキルを予測変数とする老後幸福感の重回帰分析

種々のコンピテンス/ライフ・スキルが老後生活観尺度やアフェクト・バランス尺度で測定される幸福感や老化度と相関があり、それぞれのコンピテンス/ライフ・スキルによって、その相関の大きさに違いがあることが明らかになったが、そこでの相関の大きさには、取り上げたコンピテンス/ライフ・スキル相互の影響が含まれており、個々のコンピテンス/ライフ・スキルそれ自体の相関の大きさではない。

たとえば、あるコンピテンス/ライフ・スキルが肯定的老後生活観とどの程度の関連を持っているかを知ろうとするならば、他のコンピテンス/ライフ・スキルの影響を除去しなければならない。そこで、本稿では、幸福感や老化度を従属変数とし、コンピテンス/

ライフ・スキルを独立変数とする重回帰分析を試み、それぞれのコンピテンス/ライフ・スキルが幸福感や老化度にどの程度の影響を及ぼしているかを探ってみることにする。

表9は、重回帰分析に用いた諸変数の平均と標準偏差を示したものである。ここでは、各コンピテンスに加えて、年齢と性別、経済的豊かさを示す変数として年間所得を説明変数に取り上げた。分析には、取り上げた諸変数の全てに欠損値を含まない完全回答1,646ケースである。なお、ここで用いるコンピテンス/ライフ・スキル尺度および幸福感尺度、

表9.重回帰分析に用いた変数

	平均	標準偏差	N
肯定的老後生活観	16.3	4.5	1649
否定的老後生活観	15.6	3.1	1649
ポジティブ・アフェクト	13.2	4.4	1649
ネガティブ・アフェクト	15.0	5.3	1649
日常活動老化度	11.9	3.3	1649
心理社会的老化度	19.6	4.5	1649
年齢(歳)	72.6	5.8	1649
性別(男=1,女=0)	0.5	0.5	1649
年間世帯所得(万円)	477.5	372.9	1649
合理的思考	11.5	2.3	1649
アスピレーション	26.5	4.9	1649
ナルシズム	3.7	1.2	1649
スマート3	14.9	4.0	1649
手先の器用さ	6.8	2.1	1649
積極的親密性	17.7	3.6	1649
親和性	4.2	1.2	1649
折り合い	7.7	1.7	1649
体力	14.2	3.6	1649
信念	12.8	2.8	1649
自分に忠実(率直)1	12.1	2.2	1649
孤高	5.5	1.4	1649
譲歩しない(妥協しない)	4.9	1.3	1649
個性が強い	7.0	1.5	1649
計画性	17.1	3.1	1649
孤立	8.6	2.4	1649
自己統制1	13.6	2.5	1649
家族資源	5.9	1.6	1649
家族外資源	8.1	2.1	1649
目標設定2	9.1	2.5	1649
ストレス処理	16.2	2.9	1649
明朗快活1	16.7	3.2	1649
依存性	9.1	2.1	1649
フランク	9.9	2.4	1649
ノーティ1	9.4	2.3	1649
自分を大切にす1	7.3	1.8	1649
おしゃれ	6.9	2.1	1649
怒りの処理1	10.3	2.1	1649
マイペース	10.2	2.1	1649

老化度尺度はすべて1次元尺度であり、先にみた各コンピテンスの類似尺度に関しては、ある尺度を構成する項目が他の尺度の項目として含まれていない尺度を用いた。そのことを明示するために、類似尺度には、多少違和感を与えることと思われるが、変数名に番後を付記した。

類似尺度間には、当然のことながら高い相関関係がある。類似尺度であっても、個々に取り上げる場合には問題がないが、そうした高い相関関係にある類似尺度を重回帰分析における独立変数にすると、いわゆる多重共線性を引き起こす。類似尺度に関しては、それらのうちの一つだけを取り上げるのは、そのことを考慮したためである。表10は、コンピテンス/ライフ・スキル尺度の得点間の相関係数である。

(1)一括投入法による重回帰分析

表11～表16は、全ての変数を同時に投入する変数一括投入法(強制投入法)による重回帰分析の結果を示したものである。表中の「共線性の統計量」欄の「許容度」とは、その変数が、投入されている他の独立変数によって説明されない分散の割合であり、次式で計算される。許容度 = $1 - R_j^2$ 。ここで、 R_j^2 は、 X_j を従属変数とする重相関係数の2乗である。ごく簡単に言えば、他の独立変数と関連していない度合いとみなしてもよい。この値が0に近いと多重共線性を引き起こし、

表 10. 変数間の積率相関係数

	年齢	性別	年間世帯所得	肯定的老後生活観	否定的老後生活観	ポジティブ・アフェクト	ネガティブ・アフェクト	日常生活老化度	心理社会的老化度	合理的思考	アスピレーション	ナルシズム	スマート3	手先の器用さ	積極的親密性	親和性	折り合い	体力	信念	
年齢	1.00																			
性別	-0.02	1.00																		
年間世帯所得	0.02	0.08	1.00																	
肯定的老後生活観	-0.01	-0.04	0.19	1.00																
否定的老後生活観	0.11	-0.05	-0.10	-0.33	1.00															
ポジティブ・アフェクト	-0.08	-0.05	0.15	0.45	-0.14	1.00														
ネガティブ・アフェクト	0.03	-0.15	-0.03	-0.31	0.55	0.06	1.00													
日常生活老化度	0.22	-0.05	-0.04	-0.30	0.49	-0.20	0.47	1.00												
心理社会的老化度	0.16	-0.07	-0.04	-0.20	0.60	-0.05	0.54	0.65	1.00											
合理的思考	-0.11	0.07	0.05	0.15	0.03	0.27	-0.01	-0.09	0.04	1.00										
アスピレーション	-0.09	0.09	0.05	0.24	-0.04	0.41	-0.02	-0.12	0.03	0.61	1.00									
ナルシズム	0.03	0.13	0.22	0.21	-0.15	0.26	-0.06	-0.11	-0.11	0.13	0.24	1.00								
スマート3	-0.03	0.16	0.15	0.25	-0.18	0.31	-0.16	-0.22	-0.22	0.26	0.38	0.56	1.00							
手先の器用さ	-0.03	0.00	0.07	0.20	-0.13	0.31	-0.10	-0.20	-0.12	0.23	0.33	0.40	0.55	1.00						
積極的親密性	-0.09	-0.05	0.10	0.28	-0.05	0.40	-0.02	-0.15	0.00	0.40	0.56	0.30	0.32	0.27	1.00					
親和性	-0.06	-0.12	0.02	0.09	0.04	0.14	0.11	-0.04	0.10	0.13	0.20	0.16	0.08	0.06	0.45	1.00				
折り合い	-0.07	-0.10	0.02	0.24	-0.03	0.28	-0.06	-0.14	0.00	0.40	0.46	0.20	0.29	0.25	0.48	0.25	1.00			
体力	-0.06	-0.02	0.12	0.32	-0.24	0.32	-0.22	-0.33	-0.20	0.18	0.33	0.29	0.38	0.32	0.32	0.08	0.24	1.00		
信念	-0.01	0.08	0.02	0.08	0.05	0.06	0.01	0.09	0.05	0.16	0.32	0.08	0.17	0.04	0.12	0.02	0.14	0.13	1.00	
自分に忠実(率直)1	-0.05	0.06	0.00	-0.06	0.24	-0.01	0.22	0.24	0.26	0.20	0.24	0.03	0.03	-0.04	0.10	0.11	0.13	0.01	0.33	
孤高	0.03	-0.04	-0.03	-0.06	0.17	-0.08	0.15	0.21	0.18	0.14	0.13	-0.07	-0.03	-0.01	-0.07	-0.10	0.09	-0.05	0.22	
譲歩しない(妥協しない)	-0.16	0.13	0.07	0.14	-0.05	0.25	-0.05	-0.11	-0.01	0.29	0.42	0.14	0.27	0.19	0.31	0.14	0.21	0.18	0.27	
個性が強い	-0.06	0.07	0.04	0.02	0.09	0.15	0.15	0.11	0.14	0.16	0.28	0.05	0.16	0.10	0.19	0.12	0.07	0.10	0.36	
計画性	-0.09	0.04	0.00	0.23	-0.02	0.27	-0.08	-0.16	-0.01	0.52	0.48	0.14	0.32	0.25	0.37	0.09	0.38	0.25	0.19	
孤立	0.04	0.15	-0.08	-0.26	0.23	-0.21	0.21	0.30	0.23	0.03	0.03	-0.06	-0.07	-0.10	-0.14	-0.06	-0.11	-0.11	0.22	
自己統制(状況対応)	-0.05	-0.05	0.04	0.25	-0.11	0.28	-0.13	-0.21	-0.11	0.37	0.37	0.28	0.38	0.34	0.37	0.10	0.44	0.28	0.07	
家族資源	0.06	-0.05	0.21	0.32	-0.13	0.22	-0.10	-0.06	-0.03	0.13	0.15	0.12	0.12	0.11	0.14	0.04	0.17	0.15	0.00	
家族外資源	-0.05	-0.17	0.10	0.31	-0.15	0.35	-0.12	-0.24	-0.10	0.17	0.20	0.21	0.22	0.21	0.36	0.23	0.28	0.26	-0.05	
目標設定1から専門友人を除く	-0.15	0.07	0.10	0.30	-0.13	0.41	-0.12	-0.21	-0.10	0.34	0.43	0.30	0.41	0.35	0.42	0.21	0.37	0.30	0.11	
ストレス処理	-0.08	-0.08	0.05	0.33	-0.11	0.34	-0.13	-0.17	-0.09	0.30	0.39	0.21	0.30	0.21	0.44	0.20	0.44	0.29	0.16	
明朗快活1	-0.05	-0.12	0.09	0.36	-0.14	0.40	-0.13	-0.25	-0.11	0.34	0.45	0.31	0.44	0.35	0.50	0.18	0.45	0.35	0.11	
依存性	-0.06	-0.16	-0.06	-0.11	0.26	-0.03	0.31	0.17	0.27	0.07	-0.01	-0.05	-0.18	-0.07	0.06	0.20	0.12	-0.08	-0.12	
フランク	-0.08	0.08	0.09	0.25	-0.16	0.32	-0.14	-0.20	-0.14	0.24	0.40	0.37	0.52	0.37	0.43	0.17	0.36	0.31	0.18	
ノティ1	-0.16	0.24	0.00	0.03	0.02	0.11	0.06	0.01	0.05	0.10	0.21	0.17	0.17	0.10	0.25	0.22	0.19	0.17	0.15	
自分を大切にする1	-0.08	-0.09	0.09	0.32	-0.07	0.39	0.00	-0.13	-0.04	0.31	0.41	0.30	0.34	0.28	0.46	0.24	0.39	0.27	0.12	
おしゃれ	-0.07	-0.30	0.07	0.22	-0.12	0.30	-0.01	-0.18	-0.08	0.20	0.28	0.37	0.39	0.36	0.33	0.17	0.26	0.34	0.04	
怒りの処理1	-0.08	-0.17	0.10	0.16	0.05	0.27	0.08	-0.05	0.04	0.31	0.30	0.18	0.25	0.19	0.36	0.24	0.34	0.18	0.11	
マイペース	-0.01	-0.11	-0.08	0.00	0.13	-0.06	0.13	0.15	0.13	0.04	0.05	-0.08	-0.11	-0.06	-0.01	0.05	0.14	0.00	0.21	

四角で囲んだ相関係数は $p > 0.05$ で、それ以外は $p < 0.05$ (片側)。N=1,649

(次頁に続く)

自分に 忠実 (率直) 1	孤高	譲歩し ない(妥 協しな い)	個性が 強い	計 画 性	孤 立	自 己 統 制 1	家 族 資 源	家 族 外 資 源	目 標 設 定 2	ス ト レ ス 処 理	明 朗 快 活 1	依 存 性	フ ラ ン ク	ノ ー テ ィ 1	自 分 を 大 切 に す る 1	お し ゃ れ	怒 り の 処 理 1	マ イ ペ ー ス
------------------------	----	--------------------------	-----------	-------------	--------	-----------------------	------------------	-----------------------	-----------------------	----------------------------	-----------------------	-------------	------------------	-----------------------	---	------------------	----------------------------	-----------------------

1.00																			
0.35	1.00																		
0.06	-0.02	1.00																	
0.29	0.15	0.32	1.00																
0.23	0.18	0.25	0.10	1.00															
0.31	0.27	-0.01	0.25	0.00	1.00														
0.05	0.10	0.17	-0.01	0.46	-0.11	1.00													
-0.05	0.02	0.06	-0.03	0.15	-0.21	0.21	1.00												
-0.10	-0.09	0.14	-0.02	0.21	-0.40	0.31	0.48	1.00											
0.05	0.00	0.28	0.18	0.47	-0.08	0.37	0.15	0.27	1.00										
0.18	0.09	0.19	0.06	0.42	-0.17	0.39	0.18	0.33	0.39	1.00									
0.00	-0.01	0.28	0.07	0.40	-0.28	0.56	0.35	0.53	0.37	0.44	1.00								
0.23	0.16	-0.07	0.00	0.06	0.17	0.06	-0.02	0.01	0.06	0.07	-0.09	1.00							
0.04	-0.05	0.32	0.21	0.34	-0.09	0.43	0.15	0.28	0.40	0.31	0.54	-0.20	1.00						
0.24	0.00	0.21	0.20	0.08	0.14	0.04	-0.08	0.01	0.17	0.22	0.09	0.09	0.22	1.00					
0.14	0.09	0.21	0.18	0.38	-0.07	0.36	0.15	0.24	0.42	0.47	0.40	0.07	0.33	0.24	1.00				
0.01	-0.01	0.10	0.08	0.27	-0.19	0.32	0.12	0.32	0.26	0.29	0.40	-0.03	0.34	0.05	0.36	1.00			
0.20	0.12	0.18	0.12	0.34	-0.08	0.37	0.15	0.32	0.35	0.44	0.36	0.20	0.25	0.17	0.33	0.27	1.00		
0.30	0.28	-0.09	0.08	0.07	0.13	0.08	0.00	0.03	-0.05	0.13	-0.01	0.23	-0.09	0.05	0.05	-0.04	0.11	1.00	

表 11 .肯定的老後生活観の重回帰分析（一括投入法）

	標準化 係数	t値	有意 確率	相関係数		共線性診断	
				0次	偏相関	許容度	VIF
年齢	0.013	0.587	0.557	-0.013	0.015	0.915	1.093
性別	-0.011	-0.407	0.684	-0.038	-0.010	0.648	1.542
年間世帯所得	0.098	4.409	0.000	0.193	0.109	0.882	1.134
合理的思考	-0.032	-1.094	0.274	0.153	-0.027	0.519	1.928
アスピレーション	0.016	0.487	0.626	0.241	0.012	0.393	2.547
ナルシズム	0.020	0.733	0.464	0.210	0.018	0.575	1.738
スマート3	-0.002	-0.049	0.961	0.250	-0.001	0.434	2.305
手先の器用さ	-0.007	-0.267	0.789	0.198	-0.007	0.620	1.613
積極的親密性	0.030	0.969	0.333	0.284	0.024	0.440	2.274
親和性	-0.010	-0.386	0.699	0.089	-0.010	0.702	1.424
折り合い	0.018	0.653	0.514	0.242	0.016	0.581	1.721
体力	0.139	5.669	0.000	0.319	0.140	0.721	1.386
信念	0.042	1.649	0.099	0.078	0.041	0.672	1.488
自分に忠実(率直)1	-0.047	-1.814	0.070	-0.060	-0.045	0.635	1.576
孤高	-0.031	-1.284	0.199	-0.060	-0.032	0.740	1.351
譲歩しない(妥協しない)	-0.004	-0.157	0.875	0.138	-0.004	0.691	1.446
個性が強い	0.000	-0.012	0.991	0.021	0.000	0.688	1.453
計画性	0.028	0.963	0.336	0.225	0.024	0.513	1.949
孤立	-0.127	-4.882	0.000	-0.263	-0.121	0.642	1.557
自己統制 2	0.007	0.237	0.813	0.252	0.006	0.527	1.897
家族資源	0.169	6.799	0.000	0.320	0.167	0.698	1.432
家族外資源	0.005	0.173	0.863	0.308	0.004	0.514	1.947
目標設定 2	0.094	3.423	0.001	0.298	0.085	0.569	1.759
ストレス処理	0.124	4.448	0.000	0.331	0.110	0.558	1.793
明朗快活 1	0.046	1.412	0.158	0.357	0.035	0.401	2.492
依存性	-0.067	-2.680	0.007	-0.114	-0.067	0.699	1.431
フランク	-0.002	-0.069	0.945	0.251	-0.002	0.507	1.972
ノーティ1	-0.032	-1.284	0.199	0.028	-0.032	0.702	1.424
自分を大切にする1	0.134	4.978	0.000	0.319	0.123	0.599	1.669
おしゃれ	-0.025	-0.923	0.356	0.215	-0.023	0.583	1.714
怒りの処理 1	-0.052	-2.013	0.044	0.159	-0.050	0.638	1.568
マイペース	0.033	1.406	0.160	-0.004	0.035	0.763	1.310

R=0.55, R2乗=0.30, 調整済R2乗=0.29 四角で囲んだ係数は P<0.05

表 12 .否定的老後生活観の重回帰分析（一括投入法）

	標準化 係数	t値	有意 確率	相関係数		共線性診断	
				0次	偏相関	許容度	VIF
年齢	0.121	5.267	0.000	0.110	0.130	0.915	1.093
性別	-0.030	-1.100	0.271	-0.054	-0.027	0.648	1.542
年間世帯所得	-0.037	-1.577	0.115	-0.102	-0.039	0.882	1.134
合理的思考	0.050	1.652	0.099	0.027	0.041	0.519	1.928
アスピレーション	-0.021	-0.600	0.549	-0.039	-0.015	0.393	2.547
ナルシズム	-0.047	-1.635	0.102	-0.153	-0.041	0.575	1.738
スマート3	-0.034	-1.026	0.305	-0.184	-0.026	0.434	2.305
手先の器用さ	0.012	0.420	0.674	-0.130	0.010	0.620	1.613
積極的親密性	0.058	1.740	0.082	-0.049	0.043	0.440	2.274
親和性	0.016	0.627	0.531	0.043	0.016	0.702	1.424
折り合い	0.010	0.340	0.734	-0.032	0.008	0.581	1.721
体力	-0.166	-6.412	0.000	-0.243	-0.158	0.721	1.386
信念	0.007	0.251	0.802	0.045	0.006	0.672	1.488
自分に忠実(率直)1	0.141	5.097	0.000	0.243	0.126	0.635	1.576
孤高	0.043	1.676	0.094	0.169	0.042	0.740	1.351
譲歩しない(妥協しない)	0.011	0.434	0.664	-0.049	0.011	0.691	1.446
個性が強い	0.037	1.412	0.158	0.093	0.035	0.688	1.453
計画性	0.028	0.925	0.355	-0.017	0.023	0.513	1.949
孤立	0.087	3.181	0.001	0.234	0.079	0.642	1.557
自己統制 1	-0.062	-2.030	0.042	-0.111	-0.050	0.527	1.897
家族資源	-0.061	-2.304	0.021	-0.132	-0.057	0.698	1.432
家族外資源	-0.022	-0.713	0.476	-0.154	-0.018	0.514	1.947
目標設定 2	-0.067	-2.295	0.022	-0.135	-0.057	0.569	1.759
ストレス処理	-0.091	-3.087	0.002	-0.108	-0.077	0.558	1.793
明朗快活 1	0.052	1.504	0.133	-0.140	0.037	0.401	2.492
依存性	0.164	6.215	0.000	0.257	0.153	0.699	1.431
フランク	-0.028	-0.893	0.372	-0.157	-0.022	0.507	1.972
ノーティ1	0.019	0.709	0.479	0.024	0.018	0.702	1.424
自分を大切にする1	-0.023	-0.794	0.428	-0.073	-0.020	0.599	1.669
おしゃれ	0.002	0.052	0.958	-0.117	0.001	0.583	1.714
怒りの処理 1	0.079	2.858	0.004	0.046	0.071	0.638	1.568
マイペース	0.010	0.406	0.685	0.130	0.010	0.763	1.310

R=0.47, R2乗=0.22, 調整済R2乗=0.20 四角で囲んだ係数は P<0.05

表 13. ポジティブ・アフェクトの重回帰分析（一括投入法）

	標準化 係数	t値	有意 確率	相関係数		共線性診断	
				0次	偏相関	許容度	VIF
年齢	-0.009	-0.417	0.677	-0.081	-0.010	0.915	1.093
性別	-0.035	-1.401	0.161	-0.051	-0.035	0.648	1.542
年間世帯所得	0.063	2.946	0.003	0.153	0.073	0.882	1.134
合理的思考	0.004	0.160	0.873	0.272	0.004	0.519	1.928
アスピレーション	0.185	5.817	0.000	0.405	0.143	0.393	2.547
ナルシシズム	0.022	0.821	0.412	0.257	0.020	0.575	1.738
スマート3	-0.035	-1.160	0.246	0.308	-0.029	0.434	2.305
手先の器用さ	0.065	2.580	0.010	0.305	0.064	0.620	1.613
積極的親密性	0.059	1.953	0.051	0.401	0.049	0.440	2.274
親和性	-0.066	-2.755	0.006	0.136	-0.068	0.702	1.424
折り合い	-0.036	-1.373	0.170	0.276	-0.034	0.581	1.721
体力	0.069	2.957	0.003	0.319	0.073	0.721	1.386
信念	-0.033	-1.370	0.171	0.060	-0.034	0.672	1.488
自分に忠実(率直)1	-0.025	-1.002	0.317	-0.008	-0.025	0.635	1.576
孤高	-0.067	-2.912	0.004	-0.078	-0.072	0.740	1.351
譲歩しない(妥協しない)	0.022	0.939	0.348	0.247	0.023	0.691	1.446
個性が強い	0.075	3.123	0.002	0.150	0.077	0.688	1.453
計画性	-0.034	-1.208	0.227	0.265	-0.030	0.513	1.949
孤立	-0.083	-3.350	0.001	-0.208	-0.083	0.642	1.557
自己統制 1	-0.020	-0.729	0.466	0.278	-0.018	0.527	1.897
家族資源	0.038	1.597	0.110	0.219	0.040	0.698	1.432
家族外資源	0.089	3.217	0.001	0.345	0.080	0.514	1.947
目標設定 2	0.142	5.358	0.000	0.408	0.132	0.569	1.759
ストレス処理	0.061	2.271	0.023	0.342	0.056	0.558	1.793
明朗快活 1	0.036	1.149	0.251	0.399	0.029	0.401	2.492
依存性	0.009	0.380	0.704	-0.027	0.009	0.699	1.431
フランク	0.016	0.571	0.568	0.323	0.014	0.507	1.972
ノーティ1	-0.003	-0.119	0.905	0.112	-0.003	0.702	1.424
自分を大切にする1	0.134	5.209	0.000	0.390	0.129	0.599	1.669
おしゃれ	0.019	0.713	0.476	0.299	0.018	0.583	1.714
怒りの処理 1	0.034	1.357	0.175	0.274	0.034	0.638	1.568
マイペース	-0.033	-1.426	0.154	-0.064	-0.035	0.763	1.310

R=0.60, R2乗=0.36, 調整済R2乗=0.35 四角で囲んだ係数は P<0.05

表 14. ネガティブ・アフェクトの重回帰分析（一括投入法）

	標準化 係数	t値	有意 確率	相関係数		共線性診断	
				0次	偏相関	許容度	VIF
年齢	0.035	1.540	0.124	0.030	0.038	0.915	1.093
性別	-0.122	-4.574	0.000	-0.150	-0.113	0.648	1.542
年間世帯所得	0.024	1.041	0.298	-0.027	0.026	0.882	1.134
合理的思考	0.000	0.009	0.993	-0.011	0.000	0.519	1.928
アスピレーション	0.076	2.223	0.026	-0.019	0.055	0.393	2.547
ナルシシズム	0.041	1.450	0.147	-0.058	0.036	0.575	1.738
スマート3	-0.034	-1.042	0.298	-0.155	-0.026	0.434	2.305
手先の器用さ	0.007	0.266	0.790	-0.095	0.007	0.620	1.613
積極的親密性	0.024	0.744	0.457	-0.023	0.019	0.440	2.274
親和性	0.051	2.000	0.046	0.112	0.050	0.702	1.424
折り合い	-0.062	-2.206	0.028	-0.064	-0.055	0.581	1.721
体力	-0.191	-7.563	0.000	-0.225	-0.185	0.721	1.386
信念	-0.021	-0.806	0.420	0.014	-0.020	0.672	1.488
自分に忠実(率直)1	0.095	3.512	0.000	0.220	0.087	0.635	1.576
孤高	0.037	1.502	0.133	0.147	0.037	0.740	1.351
譲歩しない(妥協しない)	-0.011	-0.423	0.672	-0.050	-0.011	0.691	1.446
個性が強い	0.100	3.862	0.000	0.149	0.096	0.688	1.453
計画性	-0.025	-0.841	0.400	-0.075	-0.021	0.513	1.949
孤立	0.070	2.608	0.009	0.213	0.065	0.642	1.557
自己統制 1	-0.075	-2.530	0.012	-0.125	-0.063	0.527	1.897
家族資源	-0.024	-0.920	0.358	-0.103	-0.023	0.698	1.432
家族外資源	-0.042	-1.395	0.163	-0.122	-0.035	0.514	1.947
目標設定 2	-0.081	-2.834	0.005	-0.122	-0.070	0.569	1.759
ストレス処理	-0.151	-5.263	0.000	-0.132	-0.130	0.558	1.793
明朗快活 1	0.040	1.171	0.242	-0.128	0.029	0.401	2.492
依存性	0.219	8.540	0.000	0.312	0.208	0.699	1.431
フランク	-0.025	-0.838	0.402	-0.142	-0.021	0.507	1.972
ノーティ1	0.053	2.079	0.038	0.056	0.052	0.702	1.424
自分を大切にする1	0.047	1.697	0.090	0.003	0.042	0.599	1.669
おしゃれ	0.073	2.587	0.010	-0.006	0.064	0.583	1.714
怒りの処理 1	0.094	3.486	0.001	0.079	0.086	0.638	1.568
マイペース	0.029	1.197	0.231	0.131	0.030	0.763	1.310

R=0.51, R2乗=0.26, 調整済R2乗=0.24 四角で囲んだ係数は P<0.05

表 15 .日常活動老化度の重回帰分析 (一括投入法)

	標準化 係数	t値	有意 確率	相関係数		共線性診断	
				0次	偏相関	許容度	VIF
年齢	0.196	9.110	0.000	0.224	0.221	0.915	1.093
性別	-0.106	-4.145	0.000	-0.052	-0.103	0.648	1.542
年間世帯所得	0.004	0.179	0.858	-0.038	0.004	0.882	1.134
合理的思考	0.019	0.655	0.513	-0.091	0.016	0.519	1.928
アスピレーション	-0.010	-0.305	0.760	-0.124	-0.008	0.393	2.547
ナルシズム	0.063	2.342	0.019	-0.108	0.058	0.575	1.738
スマート3	-0.021	-0.684	0.494	-0.217	-0.017	0.434	2.305
手先の器用さ	-0.040	-1.551	0.121	-0.201	-0.039	0.620	1.613
積極的親密性	0.056	1.793	0.073	-0.155	0.045	0.440	2.274
親和性	-0.033	-1.363	0.173	-0.041	-0.034	0.702	1.424
折り合い	-0.028	-1.057	0.290	-0.138	-0.026	0.581	1.721
体力	-0.240	-9.918	0.000	-0.328	-0.240	0.721	1.386
信念	0.033	1.299	0.194	0.086	0.032	0.672	1.488
自分に忠実 (率直)1	0.133	5.154	0.000	0.240	0.127	0.635	1.576
孤高	0.076	3.187	0.001	0.208	0.079	0.740	1.351
譲歩しない (妥協しない)	0.005	0.186	0.853	-0.108	0.005	0.691	1.446
個性が強い	0.059	2.366	0.018	0.112	0.059	0.688	1.453
計画性	-0.072	-2.528	0.012	-0.163	-0.063	0.513	1.949
孤立	0.129	5.048	0.000	0.304	0.125	0.642	1.557
自己統制 1	-0.074	-2.600	0.009	-0.214	-0.065	0.527	1.897
家族資源	0.088	3.599	0.000	-0.060	0.089	0.698	1.432
家族外資源	-0.090	-3.151	0.002	-0.240	-0.078	0.514	1.947
目標設定 2	-0.032	-1.182	0.237	-0.213	-0.029	0.569	1.759
ストレス処理	-0.050	-1.808	0.071	-0.171	-0.045	0.558	1.793
明朗快活 1	-0.030	-0.912	0.362	-0.250	-0.023	0.401	2.492
依存性	0.081	3.303	0.001	0.174	0.082	0.699	1.431
フランク	0.004	0.148	0.882	-0.199	0.004	0.507	1.972
ノーティ1	0.062	2.545	0.011	0.013	0.063	0.702	1.424
自分を大切にする1	-0.030	-1.116	0.265	-0.135	-0.028	0.599	1.669
おしゃれ	-0.009	-0.320	0.749	-0.178	-0.008	0.583	1.714
怒りの処理 1	0.043	1.673	0.095	-0.047	0.042	0.638	1.568
マイペース	0.055	2.336	0.020	0.154	0.058	0.763	1.310

R=0.56, R2乗=0.32, 調整済R2乗=0.31 四角で囲んだ係数は P<0.05

表 16 .心理社会的老化度の重回帰分析 (一括投入法)

	標準化 係数	t値	有意 確率	相関係数		共線性診断	
				0次	偏相関	許容度	VIF
年齢	0.175	7.706	0.000	0.159	0.188	0.915	1.093
性別	-0.049	-1.837	0.066	-0.069	-0.046	0.648	1.542
年間世帯所得	0.007	0.299	0.765	-0.043	0.007	0.882	1.134
合理的思考	0.027	0.883	0.377	0.044	0.022	0.519	1.928
アスピレーション	0.059	1.709	0.088	0.028	0.042	0.393	2.547
ナルシズム	0.010	0.361	0.718	-0.109	0.009	0.575	1.738
スマート3	-0.158	-4.801	0.000	-0.215	-0.119	0.434	2.305
手先の器用さ	0.022	0.798	0.425	-0.118	0.020	0.620	1.613
積極的親密性	0.048	1.457	0.145	0.001	0.036	0.440	2.274
親和性	0.051	1.977	0.048	0.098	0.049	0.702	1.424
折り合い	0.019	0.653	0.514	-0.001	0.016	0.581	1.721
体力	-0.143	-5.623	0.000	-0.200	-0.139	0.721	1.386
信念	-0.019	-0.733	0.464	0.053	-0.018	0.672	1.488
自分に忠実 (率直)1	0.137	5.048	0.000	0.256	0.125	0.635	1.576
孤高	0.051	2.026	0.043	0.176	0.050	0.740	1.351
譲歩しない (妥協しない)	0.038	1.463	0.144	-0.008	0.036	0.691	1.446
個性が強い	0.080	3.080	0.002	0.143	0.076	0.688	1.453
計画性	0.034	1.119	0.263	-0.006	0.028	0.513	1.949
孤立	0.097	3.584	0.000	0.233	0.089	0.642	1.557
自己統制 1	-0.079	-2.644	0.008	-0.113	-0.066	0.527	1.897
家族資源	0.027	1.045	0.296	-0.034	0.026	0.698	1.432
家族外資源	-0.011	-0.365	0.715	-0.101	-0.009	0.514	1.947
目標設定 2	-0.049	-1.695	0.090	-0.103	-0.042	0.569	1.759
ストレス処理	-0.084	-2.900	0.004	-0.086	-0.072	0.558	1.793
明朗快活 1	0.034	0.994	0.321	-0.112	0.025	0.401	2.492
依存性	0.158	6.109	0.000	0.265	0.150	0.699	1.431
フランク	-0.026	-0.839	0.401	-0.137	-0.021	0.507	1.972
ノーティ1	0.047	1.814	0.070	0.050	0.045	0.702	1.424
自分を大切にする1	-0.035	-1.247	0.213	-0.043	-0.031	0.599	1.669
おしゃれ	0.025	0.885	0.377	-0.085	0.022	0.583	1.714
怒りの処理 1	0.029	1.084	0.278	0.038	0.027	0.638	1.568
マイペース	0.012	0.473	0.636	0.135	0.012	0.763	1.310

R=0.49, R2乗=0.24, 調整済R2乗=0.23 四角で囲んだ係数は P<0.05

回帰係数の標準誤差が大きくなる。

VIF (Variance Inflation Factor) とは、許容度の逆数であり、分散拡大係数または変動インフレーション因子と呼ばれ、次式で計算される。($VIF = 1 / (1 - R_j^2)$)。これが大きくなると回帰係数の分散が増大して推定の正確性が大きく低下する。一般に、この値が2を超える場合は重大な多重共線性問題が生じているとみなされる。

全ての変数を同時に投入したこれら重回帰モデルでは、老後生活観および老化度のいずれにおいても係数が有意ではない変数が多い。また、VIFの値が2を越える変数も含まれているので、これらのモデルは適切ではない。そこで、次に、幸福感や老化度に有意な影響を与えているコンピテンス/ライフ・スキルで構成されるモデルを探索するためにステップワイズ法による重回帰分析を試みた。なお、各ステップにおける変数投入の基準はF値の確率0.05、変数除去の基準は同0.1である。

(2) ステップワイズ法による重回帰分析

表17～表22は、最終ステップの結果を示したものである。各表のVIF欄に示すように、変動インフレーション因子はいずれの独立変数においても2を越えたものはないので、このモデルにおける多重共線性は許容範囲内とみなしてよいであろう。

肯定的老後生活観とコンピテンス/ライフ・スキル

表17に示す重回帰モデルでは、肯定的老後生活観は、年間世帯所得と9つのコンピテンス/ライフ・スキルで全体の約30%が説明される。この表では、各変数は標準化係数の大きさの順に並べてある。

表 17. 肯定的老後生活観の重回帰分析 (最終第10ステップの係数)

	非標準化係数		標準化係数		t	有意確率	相関係数		共線性診断	
	B	標準誤差	β	標準誤差			0次	偏	許容度	VIF
(定数)	6.224	0.922			6.751	0.000				
家族資源	0.500	0.065	0.175	0.023	7.679	0.000	0.320	0.186	0.832	1.202
体力	0.183	0.029	0.144	0.023	6.283	0.000	0.319	0.153	0.817	1.224
ストレス処理	0.205	0.041	0.131	0.026	4.962	0.000	0.331	0.122	0.620	1.612
自分を大切にする1	0.325	0.063	0.130	0.025	5.176	0.000	0.319	0.127	0.678	1.474
目標設定2	0.185	0.044	0.103	0.025	4.178	0.000	0.298	0.103	0.712	1.404
年間世帯所得	0.001	0.000	0.096	0.021	4.447	0.000	0.193	0.109	0.934	1.071
明朗快活1	0.092	0.038	0.065	0.027	2.413	0.016	0.357	0.060	0.599	1.669
怒りの処理1	-0.123	0.053	-0.057	0.025	-2.305	0.021	0.159	-0.057	0.706	1.416
依存性	-0.160	0.047	-0.074	0.022	-3.387	0.001	-0.114	-0.083	0.890	1.123
孤立	-0.258	0.042	-0.137	0.022	-6.162	0.000	-0.263	-0.151	0.875	1.142

R=0.543, R²乗=0.294 調整済R²乗=0.290

分散分析表

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
回帰	9981.0	10	998.1	68.4	0.000
残差	23914.0	1638	14.6		
全体	33895.0	1648			

0 次の相関係数の欄に示されているように、肯定的老後生活観と各コンピテンスの関係を

それぞれ別個にみると、正の相関を持つ変数の中では、「明朗快活1」の相関係数が0.357と最も大きく、「ストレス処理」、「家族資源」、「体力」、「自分を大切にす
る1」、「目標設定2」、「年間世帯所得」、「怒りの処理1」と続いている。しかし、偏
相関係数欄に示されているように、変数相互の関係を排除すると、いずれの変数も係数の
値が大幅に低下し、肯定的老後生活観に対するそれ独自の影響度が大きく低下することが
わかる。そして、係数の大きさを比べてみると、順位が大きく変化している。

欄の標準化偏回帰係数に見るように、肯定的老後生活観に促進的に作用している変数
を影響度の順にあげると「家族資源」や「体力」、「ストレス処理」、「自分を大切にす
る1」、「目標設定2」、「年間世帯所得」、「明朗快活1」である。「年間世帯所得」
で表される経済的豊かさよりも、種々のコンピテンス/ライフ・スキルが肯定的老後生活
観に、より強い影響を与えていることがわかる。

肯定的老後生活観に阻害的に作用している変数を影響度の順に上げると「孤立」、「依
存性」、「怒りの処理1」である。「孤立」と「依存性」は0次の相関係数でも負値であ
り、これらは社会関係に関わる負のコンピテンス/ライフ・スキルであるから、この結果
は常識的にも理解しやすいが、「怒りの処理1」は、0次の相関係数は正值であったもの
が、このモデルでは係数が負値となって肯定的老後生活観に阻害的に作用している。怒り
を上手に処理できることは、精神的安定に通じるというよりは不満をくすぶらせることに
なるからだろうか。

否定的老後生活観とコンピテンス/ライフ・スキル

否定的老後生活観に促進的に作用している変数は、「依存性」、「自分に忠実(率直)
1」、「年齢」、「孤立」、「怒りの処理1」、「積極的親密性」、「孤高」であり、中
でも、「依存性」と「自分に忠実(率直)1」の影響が大きい(表18)。

表18. 否定的老後生活観の重回帰分析(最終第11ステップの係数)

	非標準化係数		標準化係数		t	有意 確率	相関係数		共線性診断	
	B	標準 誤差	β	標準 誤差			0次	偏	許容度	VIF
(定数)	7.954	1.145			6.947	0.000				
依存性	0.262	0.035	0.176	0.023	7.518	0.000	0.257	0.183	0.887	1.128
自分に忠実(率直)1	0.240	0.034	0.172	0.024	7.002	0.000	0.243	0.171	0.808	1.238
年齢	0.064	0.012	0.119	0.023	5.266	0.000	0.110	0.129	0.955	1.048
孤立	0.138	0.032	0.106	0.025	4.300	0.000	0.234	0.106	0.800	1.249
怒りの処理1	0.126	0.039	0.085	0.026	3.237	0.001	0.046	0.080	0.708	1.413
積極的親密性	0.066	0.024	0.075	0.027	2.810	0.005	-0.049	0.069	0.677	1.476
家族資源	-0.130	0.046	-0.066	0.023	-2.848	0.004	-0.132	-0.070	0.907	1.103
目標設定2	-0.085	0.033	-0.068	0.026	-2.596	0.010	-0.135	-0.064	0.697	1.435
ストレス処理	-0.094	0.030	-0.086	0.027	-3.151	0.002	-0.108	-0.078	0.649	1.542
ナルシズム	-0.231	0.064	-0.087	0.024	-3.587	0.000	-0.153	-0.088	0.830	1.205
体力	-0.149	0.022	-0.170	0.025	-6.923	0.000	-0.243	-0.169	0.804	1.244

R=0.455, R2乗=0.207, 調整済R2乗=0.201

分散分析表

	平方和	自由度	平均 平方	F 値	有意 確率
回帰	3354.0	11	304.9	38.8	0.000
残差	12877.4	1637	7.9		
全体	16231.4	1648			

「年齢」が上がるにつれて否定的老後生活観が強くなるという傾向が明らかであるが、それ以上に「依存性」や「自分に忠実（率直）¹」が否定的老後生活観に強い影響を与えている。このことは、「年齢」という人口学的要因にもましてコンピテンス/ライフ・スキルが老後の生活観を左右していることを物語っているといえるであろう。

否定的老後生活観に阻害的に作用しているコンピテンスは、「体力」、「ナルシシズム」、「ストレス処理」、「目標設定」、「家族資源」であり、中でも、「体力」の影響が大きい。この「体力」は、肯定的老後生活観にも大きな促進的作用を及ぼしていたから、「体力」という身体的コンピテンスは、様々な心理社会的コンピテンスに比べて、肯定、否定の両面にわたって老後生活観を大きく左右するものであることがわかる。

上で見たように、「年間世帯所得」は肯定的老後生活観に促進的に作用していたから、この否定的老後生活観のモデルでは阻害的に作用する変数になることが予想されたが、結果は、有意な係数としてモデルに組み込まれることがなかった。老後の経済水準が高齢期における満足感、幸福感を左右することは当然のことと考えられるが、肯定的老後生活観のモデルにおいても影響度がそれほど大きくなかったことも考え合わせると、高齢期における幸福感に諸種のコンピテンス/ライフ・スキルが及ぼしている影響の大きさが理解されよう。

ところで、否定的老後生活観に促進的に作用しているコンピテンスは、いずれも社会関係に関わるコンピテンスである。本稿で「自分に忠実（率直）」と命名した潜在変数を構成する諸項目は、見方を変えれば、いずれも自己中心的で非社会的な態度や行動を表す諸項目ともいえる。「自分に忠実（率直）」であることは、社会関係の文脈からは「社会的ではない」ということである。「孤立」も同様に社会関係網の狭さや社交性の低さを表している。したがって、「自分に忠実（率直）」や「孤立」が否定的老後生活観に促進的に作用しているという結果は、高齢期における「社交性の低さ」は生活満足感や幸福感を阻害すると理解することができる。

しかし、「社交性の低さ」とは全く逆のタイプとみなしうる「積極的親密性」も否定的老後生活観に促進的に作用している。表4および表5で見たように、「積極的親密性」は肯定的老後生活観と有意な正の、しかも他のコンピテンスに比べて相対的に高い相関関係にあり、否定的老後生活観とは有意な負の相関関係にあった。0次の相関係数から見るかぎりには、「積極的親密性」のような高い社交性は老後生活観を肯定的なものにしていることを示しており、そうした理解は一般的にも受け入れやすいであろう。ところが、表18に見るように、偏相関係数や重回帰分析の結果は、そうした一般的理解を否定するものとなっている。

「怒りの処理¹」は、対人関係に起因する怒りをうまく処理して人との関係を維持しようとする行為ともいえるから、「積極的親密性」と同様に「低い社交性」とは逆のタイプのコンピテンス/ライフ・スキルとみなすことができる。この「怒りの処理¹」は、表4および表5で見たように、肯定的老後生活観と否定的老後生活観のいずれとも正の相関関係にあるが、肯定的老後生活観との相関係数（0.153）の方が否定的老後生活観との相関係数（0.047）よりも大きい。しかし、重回帰分析の結果では、「積極的親密性」と同様に、肯定的老後生活観を促進する変数としてではなく、否定的老後生活観を促進する変数として登場している。

「積極的親密性」や「怒りの処理」といったコンピテンス/ライフ・スキルは、一般的には良好な社会関係を維持する能力と理解されており、高齢期における生活満足感や幸福感を高めると考えられている。それゆえ、以上の結果は、正直なところ意外である。この結果から判断されることは、要するに、社会的あるいは人付き合いが上手であることが、高齢期における生活満足感や幸福感を高めるものとはなっていないばかりか、むしろ阻害しているということである。この結果に関しては様々な解釈が可能であろうが、社会関係に関わるコンピテンスとサクセスフル・エイジングに関してあらためて検討しなければならない課題を提起していると考えられる。

ポジティブ・アフェクトとコンピテンス

ポジティブ・アフェクトに促進的に作用している変数を、その影響度の大きさ()の順に列挙すると、「アスピレーション」、「目標設定2」、「自分を大切にする1」、「家族外資源」、「年間世帯所得」、「個性が強い」、「体力」、「手先の器用さ」、「積極的親密性」、「ストレス処理」である(表19)。

ポジティブ・アフェクトは、肯定的老後生活観と同様に高齢期の生活満足感、幸福感を測定する尺度として用意したものであるが、ポジティブ・アフェクトの重回帰モデルにおいて促進的に作用する変数には、肯定的老後生活観の重回帰モデルに共通するものとそうではないものがある。共通する変数は、「目標設定2」、「自分を大切にする1」、「年間世帯所得」、「体力」、「ストレス処理」の5変数である。これら5つの変数も、肯定的老後生活観モデルとポジティブ・アフェクト・モデルとでは、その影響度に違いが

表19. ポジティブ・アフェクトの重回帰分析(最終第17ステップの係数)

	非標準化係数		標準化係数		t	有意確率	相関係数		共線性診断	
	B	標準誤差	β - η	標準誤差			0次	偏	許容度	VIF
(定数)	0.422	0.910			0.464	0.643				
アスピレーション	0.159	0.025	0.174	0.027	6.469	0.000	0.405	0.158	0.547	1.829
目標設定2	0.243	0.044	0.138	0.025	5.584	0.000	0.408	0.137	0.648	1.543
自分を大切にする1	0.331	0.061	0.136	0.025	5.439	0.000	0.390	0.133	0.638	1.567
家族外資源	0.268	0.051	0.126	0.024	5.232	0.000	0.345	0.128	0.684	1.462
年間世帯所得	0.001	0.000	0.074	0.020	3.616	0.000	0.153	0.089	0.955	1.047
個性が強い	0.219	0.066	0.073	0.022	3.338	0.001	0.150	0.082	0.831	1.203
体力	0.085	0.028	0.068	0.023	3.004	0.003	0.319	0.074	0.774	1.292
手先の器用さ	0.140	0.048	0.065	0.022	2.902	0.004	0.305	0.072	0.786	1.272
積極的親密性	0.076	0.036	0.061	0.029	2.104	0.036	0.401	0.052	0.475	2.107
ストレス処理	0.081	0.038	0.053	0.025	2.103	0.036	0.342	0.052	0.632	1.581
性別	-0.416	0.188	-0.047	0.021	-2.216	0.027	-0.051	-0.055	0.889	1.125
マイペース	-0.103	0.045	-0.049	0.021	-2.274	0.023	-0.064	-0.056	0.869	1.151
親和性	-0.223	0.082	-0.062	0.023	-2.720	0.007	0.136	-0.067	0.753	1.327
孤高	-0.246	0.071	-0.077	0.022	-3.469	0.001	-0.078	-0.086	0.805	1.242
孤立	-0.174	0.044	-0.094	0.024	-3.972	0.000	-0.208	-0.098	0.708	1.413

R=0.593, R2乗=0.352, 調整済R2乗=0.346

分散分析表

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
回帰	11439.2	15	762.6	59.2	0.000
残差	21045.9	1633	12.9		
全体	32485.0	1648			

見られる。肯定的老後生活観モデルにおいては、影響度の大きさは、「体力」、「ストレス処理」、「自分を大切にする1」、「目標設定2」、「年間世帯所得」の順であったが、ポジティブ・アフェクト・モデルにおいては、「目標設定2」と「自分を大切にする1」の影響度が「体力」と「ストレス処理」を大きく上回っている。そして、ここでも、「年間世帯所得」の影響力は、諸種のコンピテンス/ライフ・スキルよりも小さいことが示されている。

肯定的老後生活観モデルには促進的作用をする変数として含まれなかった変数で、ポジティブ・アフェクト・モデルに含まれるようになった変数は、「アスピレーション」、「家族外資源」、「個性が強い」、「手先の器用さ」、「積極的親密性」の5変数である。中でも「アスピレーション」の影響力が一段と大きい。「家族外資源」は、支援資源として取り上げた2つの種類の資源のうちの一つである。肯定的老後生活観モデルではもう一方の「家族資源」が促進的に作用する変数として含まれていたが、このポジティブ・アフェクト・モデルにはそれが含まれることなく、それとは異なるタイプの「家族外資源」が含まれたことは興味深い。

否定的老後生活観モデルでは阻害要因になっていた「積極的親密性」は、このポジティブ・アフェクトモデルでは促進要因になっている。その影響度は大きいものではないとはいえ、「積極的親密性」というコンピテンス/ライフ・スキルが高齢期の幸福感に及ぼす作用は複雑である。

ポジティブ・アフェクトに阻害的に作用する変数は「孤立」と「孤高」、「親和性」、「マイペース」、「性別」である。既に見たように、「孤立」は肯定的老後生活観に阻害的に、否定的老後生活観に促進的に作用していることから、「孤立」は高齢期の生活満足感や幸福感を明らかに阻害する負のコンピテンスであることがわかる。「親和性」がポジティブ・アフェクトに阻害的に作用しているが、ここでいう「親和性」は、むしろ「寂しさを紛らわすこと」と言い換えた方が、この結果を理解しやすいかもしれない。「孤高」と「マイペース」がポジティブ・アフェクトの阻害要因になっていることは、自己志向仮説を反証するものといえる。「性別」が阻害的に作用しているということは、「性別」が男を1, 女を0とするダミー変数であることから、この重回帰モデルで推計されるポジティブ・アフェクト得点は、男性の方が低くなるということである。

ネガティブ・アフェクトとコンピテンス/コンピテンス/ライフ・スキル

ネガティブ・アフェクトに促進的に作用している変数を標準化係数の大きさの順に列挙すると、「依存性」、「自分に忠実(率直)1」、「個性が強い」、「怒りの処理1」、「孤立」、「おしゃれ」、「アスピレーション」、「自分を大切にする1」、「親和性」、「ノーティ1」である(表20)。このうち、「依存性」と「自分に忠実(率直)1」、「怒りの処理1」、「孤立」は、否定的老後生活観モデルにおいても促進要因になっていたものであることから、これらは高齢期の幸福感を阻害する主要な要因であるとみなしてよいであろう。とくに、「依存性」という負のコンピテンスの影響が大きい。「自分に忠実(率直)1」と「個性が強い」がネガティブ・アフェクトに相対的に大きな影響度を持っていることは、自己志向仮説を反証するものといえる。また、「怒りの処理1」は、否定的老後生活観モデルの場合と同様にネガティブ・アフェクトに促進的に作用する変数と

表20.ネガティブ・アフェクトの重回帰分析(最終第16ステップの係数)

	非標準化係数		標準化係数		t	有意確率	相関係数		共線性診断	
	B	標準誤差	β	標準誤差			0次	偏	許容度	VIF
(定数)	8.593	1.161			7.398	0.000				
依存性	0.584	0.060	0.232	0.024	9.738	0.000	0.312	0.234	0.813	1.230
自分に忠実(率直)1	0.250	0.059	0.105	0.025	4.226	0.000	0.220	0.104	0.739	1.353
個性が強い	0.331	0.087	0.092	0.024	3.810	0.000	0.149	0.094	0.786	1.273
怒りの処理1	0.226	0.066	0.090	0.026	3.423	0.001	0.079	0.084	0.667	1.500
孤立	0.187	0.054	0.084	0.025	3.428	0.001	0.213	0.085	0.759	1.317
おしゃれ	0.180	0.065	0.072	0.026	2.772	0.006	-0.006	0.068	0.682	1.466
アスピレーション	0.078	0.031	0.071	0.028	2.516	0.012	-0.019	0.062	0.571	1.751
自分を大切にする1	0.164	0.079	0.056	0.027	2.064	0.039	0.003	0.051	0.624	1.604
親和性	0.221	0.100	0.052	0.024	2.196	0.028	0.112	0.054	0.829	1.206
ノータ1	0.112	0.057	0.048	0.025	1.962	0.050	0.056	0.049	0.757	1.321
折り合い	-0.181	0.084	-0.059	0.027	-2.165	0.031	-0.064	-0.054	0.615	1.626
自己統制1	-0.158	0.057	-0.074	0.027	-2.783	0.005	-0.125	-0.069	0.648	1.544
目標設定2	-0.209	0.056	-0.099	0.027	-3.708	0.000	-0.122	-0.091	0.643	1.555
性別	-1.341	0.266	-0.126	0.025	-5.048	0.000	-0.150	-0.124	0.734	1.362
ストレス処理	-0.280	0.051	-0.153	0.028	-5.451	0.000	-0.132	-0.134	0.587	1.704
体力	-0.287	0.036	-0.193	0.024	-7.876	0.000	-0.225	-0.191	0.768	1.303

R=0.499, R2乗=0.249, 調整済R2乗=0.241

分散分析表

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
回帰	11550.5	16	721.9	33.8	0.000
残差	34874.5	1632	21.4		
全体	46425.0	1648			

なっており、先にも述べたように、怒りを上手に処理することは高齢期の幸福感を高めていないことがわかる。

「親和性」は、ポジティブ・アフェクトに阻害的に作用していて「寂しさを紛らわすこと」と読み替えた方がよいことを述べたが、このネガティブ・アフェクトのモデルにおいて促進的に作用していることから、「依存性」や「孤立」と同様に負のコンピテンス/ライフ・スキルと見なした方がよさそうである。

「おしゃれ」と「アスピレーション」、「ナルシズム」は、0次の相関係数欄にみるように、単純相関ではそれぞれネガティブ・アフェクトと逆相関の関係にある。しかし、他の変数の影響を除去した偏相関係数および標準化(偏回帰)係数は正值であるように、この重回帰モデルでは、それらは、いずれもネガティブ・アフェクトに促進的に作用している。とくに、「アスピレーション」は、ポジティブ・アフェクトの重回帰モデルでは大きな促進的作用をする変数であったから、「アスピレーション」レベルが高いことが高齢期の幸福感を必ずしも促進するわけではないという結果は興味深い。

「ノータ1」は、茶目っ気があって気が置けない人柄のまま気ままに暮らすためのコンピテンス/ライフ・スキルと見ることが出来る。そして、そうしたコンピテンス/ライフ・スキルを持っている人はポジティブ・アフェクトの水準が高いと考えることができるが、結果はネガティブ・アフェクトに促進的に作用している。

ネガティブ・アフェクトに阻害的に作用している変数を、その影響度の大きさの順に列挙すると、「体力」、「性別」、「ストレス処理」、「目標設定2」、「自己統制1」、

「折り合い」である。このうち、「体力」、「ストレス処理」、「目標設定2」は、肯定的老後生活観モデルにおいて促進的に作用する変数であり、否定的老後生活観モデルにおいて阻害的に作用する変数である。そして、「体力」、「目標設定2」はポジティブ・アフェクトの重回帰モデルにおいて促進的に作用する変数である。したがって、これら4つのコンピテンスは、明らかに高齢期の幸福感を高めていることがわかる。

「性別」は、これまで見てきた肯定的老後生活観モデル、否定的老後生活観モデル、ポジティブ・アフェクト・モデルのいずれにも含まれていなかったものである。そして、このネガティブ・アフェクト・モデルにおいては、「体力」に次いで強い影響力を持っている。「性別」は男を1、女を0とするダミー変数であるから、「性別」がネガティブ・アフェクトに阻害的に作用しているということは、男性であることがネガティブ・アフェクトを阻害しているということである。言い換えれば、この重回帰モデルに含まれるコンピテンスの水準が同一であった場合には、女性の方がネガティブ・アフェクトの水準が高い、すなわち幸福感が低いということである。

日常活動老化度とコンピテンス

表21に見るように、日常活動老化度の重回帰モデルには14個の独立変数が含まれている。

表 21. 日常活動老化度の重回帰分析 (最終第 14ステップの係数)

	非標準化係数		標準化係数		t	有意確率	相関係数		共線性診断	
	B	標準誤差	β	標準誤差			0次	偏	許容度	VIF
(定数)	1.876	1.192			1.574	0.116				
年齢	0.114	0.012	0.200	0.021	9.494	0.000	0.224	0.229	0.952	1.051
自分に忠実(率直)1	0.213	0.037	0.145	0.025	5.827	0.000	0.240	0.143	0.687	1.456
孤立	0.199	0.034	0.145	0.025	5.812	0.000	0.304	0.142	0.684	1.463
家族資源	0.179	0.050	0.086	0.024	3.596	0.000	-0.060	0.089	0.745	1.343
依存性	0.124	0.035	0.079	0.022	3.536	0.000	0.174	0.087	0.850	1.176
孤高	0.176	0.055	0.074	0.023	3.186	0.001	0.208	0.079	0.781	1.281
個性が強い	0.133	0.050	0.060	0.022	2.657	0.008	0.112	0.066	0.844	1.185
マイペース	0.084	0.035	0.054	0.022	2.383	0.017	0.154	0.059	0.838	1.193
ノーティ1	0.073	0.033	0.051	0.023	2.222	0.026	0.013	0.055	0.807	1.239
自己統制1	-0.120	0.032	-0.091	0.024	-3.717	0.000	-0.214	-0.092	0.709	1.410
性別	-0.607	0.147	-0.092	0.022	-4.115	0.000	-0.052	-0.101	0.850	1.177
家族外資源	-0.153	0.042	-0.097	0.027	-3.641	0.000	-0.240	-0.090	0.598	1.673
計画性	-0.103	0.026	-0.097	0.025	-3.959	0.000	-0.163	-0.097	0.705	1.418
体力	-0.229	0.021	-0.248	0.023	-10.950	0.000	-0.328	-0.261	0.826	1.210

R=0.555, R2乗=0.308, 調整済R2乗=0.302

分散分析表

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
回帰	5530.2	14	395.0	51.9	0.000
残差	12436.8	1634	7.6		
全体	17967.0	1648			

日常活動老化度に促進的に作用している9つの変数を影響力の大きい順に列挙すると、「年齢」、「自分に忠実(率直)1」、「孤立」、「家族資源」、「依存性」、「孤高」、「個性が強い」、「マイペース」、「ノーティ」である。日常活動老化度を促進する要因の中では、「年齢」という人口学的変数が最も強く作用している。年をとるにつれて、誰

でもが大なり小なり日常的な活動の中での老化現象を経験しているということであるが、0次の相関係数に見るように、仮に独立変数を「年齢」1変数だけの回帰モデルを構成した場合には、説明力はわずか0.48%にしかすぎない。日常活動老化度は、「年齢」だけではとうてい説明できないということである。

「自分に忠実（率直）1」と「孤立」、「依存性」は、否定的老後生活観やネガティブ・アフェクトにも促進的に作用していたが、この日常活動老化度にも促進的に作用している。これら3つのコンピテンス/ライフ・スキルは、高齢期の幸福感を阻害する主要な要因になっていることがわかる。

「家族資源」は、0次の相関係数が正值であるから、見かけ上は日常活動老化度を阻害する要因のように見える。しかし、他の独立変数の影響を除去すると、偏回帰係数および偏相関係数が負値であるように、日常活動老化度を促進している。「家族資源」は、肯定的老後生活観の主要な促進要因であり、否定的老後生活観の阻害要因であったが、日常活動老化度の促進要因になっている。このことは、頼りになる「家族資源」を有するがゆえに日常的活動における老化を強く意識するようになる、ということを示しているのであろうか。「個性が強い」や「ノーティ1」が日常活動の老化度を促進しているということも興味深いところである。个性的であることやお茶目であることは、それだけ老化を強く意識するということがかもしれない。

日常活動老化度に阻害的に作用する変数を影響力の大きい順に列挙すると、「体力」、「計画性」、「家族外資源」、「性別」、「自己統制1」である。中でも「体力」の影響力が大きい。このことは常識的にもうなずける。ダミー変数の「性別」が阻害要因であることは、男性であることが日常活動老化度を阻害しているということであり、この重回帰モデルに含まれるコンピテンスの水準が同一であった場合には、女性の方が日常活動老化度の水準が高いということである。「家族資源」が促進要因であるのに対して、「家族外資源」が阻害要因になっていることは興味深い。「自己統制1」や「計画性」は、日常的な活動能力の低下を抑制していることがわかる。

心理社会的老化度とコンピテンス/ライフ・スキル

日常活動老化度と同様に、「年齢」が大きな促進要因になっている（表22）。

「依存性」や「自分に忠実（率直）1」、「孤立」、「個性が強い」も日常活動老化度の促進要因と同じである。これらは、主観的老化度を左右する主要な要因といえることができる。

しかし、心理社会的老化度の促進要因と日常活動老化度のそれとでは異なるところも少なくない。とくに、「アスピレーション」が促進要因になっていることは注目に値しよう。アスピレーションのレベルが高いからといって、若々しいとは限らないということであろうか。それとも、アスピレーションが高い人ほど心理社会的老化を強く意識するということであろうか。「親和性」はネガティブ・アフェクトの促進要因でもあったが、心理社会的老化度の促進要因として解釈する場合には、この「親和性」は、既に述べたように「寂しさを紛らわすこと」と読み替えた方が良いかもしれない。

心理社会的老化度に阻害的に作用している変数は、「スマート3」、「体力」、「ストレス処理」、「性別」である。「スマート3」は知的活動能力であるから、知力と体力が

表 2 2 . 心理社会的老化度の重回帰分析 (最終第 1 1 ステップの係数)

	非標準化係数		標準化係数		t	有意確率	相関係数		共線性診断	
	B	標準誤差	β	標準誤差			0次	偏	許容度	VIF
(定数)	3.020	1.622			1.862	0.063				
年齢	0.133	0.017	0.173	0.022	7.858	0.000	0.159	0.191	0.978	1.022
依存性	0.357	0.051	0.169	0.024	7.077	0.000	0.265	0.172	0.831	1.204
自分に忠実 (率直) 1	0.319	0.050	0.160	0.025	6.449	0.000	0.256	0.157	0.765	1.308
アスピレーション	0.093	0.024	0.102	0.027	3.831	0.000	0.028	0.094	0.670	1.492
孤立	0.175	0.046	0.094	0.025	3.818	0.000	0.233	0.094	0.776	1.288
個性が強い	0.275	0.073	0.091	0.024	3.792	0.000	0.143	0.093	0.814	1.228
親和性	0.229	0.083	0.064	0.023	2.767	0.006	0.098	0.068	0.884	1.131
性別	-0.477	0.205	-0.053	0.023	-2.329	0.020	-0.069	-0.057	0.896	1.116
ストレス処理	-0.110	0.039	-0.071	0.025	-2.809	0.005	-0.086	-0.069	0.733	1.365
体力	-0.173	0.031	-0.139	0.025	-5.642	0.000	-0.200	-0.138	0.783	1.277
スマート3	-0.171	0.029	-0.153	0.026	-5.978	0.000	-0.215	-0.146	0.717	1.394

R=0.477, R2乗=0.228, 調整済R2乗=0.222

分散分析表

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
回帰	7474.7	11	679.5	43.9	0.000
残差	25356.7	1637	15.5		
全体	32831.4	1648			

心理社会的老化度に阻害的に作用しているということであるが、標準化係数の大きさからいえば、「スマート3」は、「体力」以上に心理社会的老化度に阻害的に作用していることがわかる。そして、「ストレス処理」がうまいほど心理社会的老化度の水準が低い。そして、また、日常活動老化度と同様に、男性であることが心理社会的老化度を阻害しており、この重回帰モデルに含まれるコンピテンスの水準が同一であった場合には、女性の方が心理社会的老化度の水準が高いことがわかる。

(3) 各モデルの一覧

これまで見てきた6つの重回帰モデルを一覧したのが時頁の表23である。

どのモデルにも登場していない変数は、「合理的思考」、「信念」、「フランク」である。逆に、6つのモデル全てに組み込まれた変数は、「体力」と「孤立」である。5つのモデルに組み込まれたのは、「ストレス処理」と「依存性」である。4つのモデルには、「性別」、「自分に忠実(率直)1」、「個性が強い」、「目標設定2」が組み込まれた。3つのモデルには、「アスピレーション」、「親和性」、「家族資源」、「自分を大切に1」、「怒りの処理1」が組み込まれた。2つのモデルに組み込まれた変数は、「年間世帯所得」、「積極低親密性」、「孤高」、「自己統制1」、「家族外資源」、「ノーティ1」、「マイペース」であり、1つのモデルだけに登場した変数は、「ナルシズム」、「手先の器用さ」、「折り合い」、「計画性」、「明朗快活1」、「おしゃれ」である。

従属変数として用いる幸福感の尺度によって、高齢期の幸福感に影響を及ぼすコンピテンス/ライフ・スキルにかなりの相違が認められる。ある特定の幸福感尺度を従属変数として一つだけ用いたのでは、そうした相違は見逃されることになる。また、どのモデルに

も共通する変数が2つだけと少なかったこと、「合理的思考」、「信念」、「フランク」がどのモデルにも組み込まれなかったことは予想外であったが、以上の結果は、高齢期におけるコンピテンス/ライフ・スキルの問題を考える場合に、どのような観点から、どのようなコンピテンス/ライフ・スキルを取り上げるかが重要であることを示唆している。それによって、高齢者あるいは高齢期のコンピテンス/ライフ・スキルに関する議論が大きく変わるからである。

表 23 .各モデルの標準化回帰係数 ()

	肯定的 老後 生活観	ポジティブ ・ アフェクト	否定的 老後 生活観	ネガティブ ・ アフェクト	日常 活動 老化度	心理 社会的 老化度
年齢			0.119		0.200	0.173
性別		-0.047		-0.126	-0.092	-0.053
年間世帯所得	0.096	0.074				
合理的思考						
アスピレーション		0.174		0.071		0.102
ナルシシズム			-0.087			
スマート3						-0.153
手先の器用さ		0.065				
積極的親密性		0.061	0.075			
親和性		-0.062		0.052		0.064
折り合い				-0.059		
体力	0.144	0.068	-0.170	-0.193	-0.248	-0.139
信念						
自分に忠実(率直)1			0.172	0.105	0.145	0.160
孤高		-0.077			0.074	
譲歩しない(妥協しない)						
個性が強い		0.073		0.092	0.060	0.091
計画性					-0.097	
孤立	-0.137	-0.094	0.106	0.084	0.145	0.094
自己統制1				-0.074	-0.091	
家族資源	0.175		-0.066		0.086	
家族外資源		0.126			-0.097	
目標設定2	0.103	0.138	-0.068	-0.099		
ストレス処理	0.131	0.053	-0.086	-0.153		-0.071
明朗快活1	0.065					
依存性	-0.074		0.176	0.232	0.079	0.169
フランク						
ノーティ1				0.048	0.051	
自分を大切にする1	0.130	0.136		0.056		
おしゃれ				0.072		
怒りの処理1	-0.057		0.085	0.090		
マイペース		-0.049			0.054	
調整済みR2乗	0.290	0.346	0.201	0.241	0.302	0.222

5 . むすび

本稿では、筆者が作成した幸福感尺度（肯定的老後生活観尺度と否定的老後生活観尺度、ポジティブ・アフェクト尺度とネガティブ・アフェクト尺度）と主観的老化度尺度（日常活動老化度尺度と心理社会的老化度尺度）、コンピテンス/ライフスキル尺度を用いて高齢期における幸福感に及ぼす影響を分析した。

取り上げた種々のコンピテンス/ライフ・スキルと幸福感や老化度との関係を個別に見

ると、「自分を大切にする」や「ストレス処理」、「支援資源」（家族資源、家族外資源）、「明朗快活」、「体力」、「目標設定」、「融和的社会関係」、「ナルシズム」、「スマート」、「手先の器用さ」、「フランク」、「積極的親密性」、「折り合い」、「アスピレーション」、「合理的思考」、「自己統制」、「合理的積極性」、「おしゃれ」、「計画性」、「計画づくり」、「譲歩しない（妥協しない）」、「ノーティ」、「自己主張」、「信念」といったコンピテンス/ライフ・スキルは幸福感と有意な正の相関関係にあり、「依存性」や「孤立」、「自分に忠実（率直）」、「自己主張」、「孤高」、「マイペース」、「信念」、「個性が強い」、「フォロワー」、「親和性」、「個性が強い」、「親和性」、「怒りの処理」といったコンピテンス/ライフ・スキルは有意な負の相関関係にある。また、主観的老化度との関係では、「依存性」や「自分に忠実」、「孤立」、「孤高」、「自己主張」、「個性」、「マイペース」、「信念」、「親和性」、「フォロワー」、「怒りの処理」といったコンピテンス/ライフ・スキルが有意な正の相関関係を示している。

しかし、コンピテンス/ライフ・スキル相互の影響を除去すると、幸福感や老化度と有意な相関関係にあるコンピテンス/ライフ・スキルはそう多くはない。本稿では、幸福感および老化度を従属変数とし、コンピテンス/ライフ・スキルを独立変数とする重回帰分析を行った結果、「目標設定」、「自分を大切にする」、「体力」、「ストレス処理」、「家族外資源」、「手先の器用さ」、「自己統制」、「折り合い」、「明朗快活」、「ナルシズム」といったコンピテンス/ライフ・スキルが高齢期の幸福感を高めていることが明らかにされた。そして、「目標設定」や「自分を大切にする」、「体力」、「ストレス処理」といったコンピテンス/ライフ・スキルは、経済的豊かさよりも幸福感を左右しており、高齢期における幸福感に諸種のコンピテンス/ライフ・スキルが及ぼしている影響が大きいことが明らかにされた。

逆に、幸福感に阻害的に作用しているコンピテンス/ライフ・スキルは、「孤立」や「依存性」、「怒りの処理」、「自分に忠実（率直）」、「孤高」、「マイペース」、「ノーティ」である。

幸福感に促進的にも阻害的にも作用しているコンピテンス/ライフ・スキルは、「積極的親密性」、「親和性」、「個性が強い」、「アスピレーション」である。

「自分に忠実（率直）」や「孤高」、「マイペース」、「個性が強い」といったコンピテンス/ライフ・スキルが幸福感に阻害的に作用しているという結果は、筆者がいう自己志向仮説を反証するものとなった。これらコンピテンス/ライフ・スキルは、拘束的な社会関係と義務的活動から離れて、より主意的で選択的な社会関係の下で自分に忠実に、あるいは孤高を持してマイペースで我が道を行く、という生活スタイルや生き方を実現するものといえる。そして、そうした自己志向型的生活スタイルや生き方が許されるのも高齢期であるといえる。しかしながら、今回の分析結果は、高齢期における「社交性の低さ」は幸福感を阻害しており、筆者のいう自己志向仮説を反証するものとなった。

しかし、「社交性の低さ」とは全く逆のタイプとみなしうる「積極的親密性」や「親和性」、「怒りの処理」も必ずしも幸福感を促進しておらず、阻害している面があることも明らかになった。「積極的親密性」や「怒りの処理」といったコンピテンス/ライフ・スキルは、一般的には良好な社会関係を維持する能力と理解されており、高齢期における生

活満足感や幸福感を高めると考えられている。したがって、社会的あるいは人付き合いが上手であることが、高齢期における生活満足感や幸福感を必ずしも高めるものとはなっていないという結果は、正直なところ意外である。この結果に関しては様々な解釈が可能であろうが、社会関係に関わるコンピテンスとサクセスフル・エイジングに関してあらためて検討しなければならない課題を提起していると考えられる。

「アスピレーション」が幸福感に阻害的作用する面があることは、アスピレーション・レベルが高いことが高齢期の幸福感を必ずしも促進するわけではないことを示唆しており、この結果も一般的な理解を覆すものといえそうである。また、「ノーティ」は、茶目っ気があって気が置けない人柄のまま気ままに暮らすためのコンピテンス/ライフ・スキルであって、そうしたコンピテンス/ライフ・スキルを持っている人はポジティブ・アフェクトの水準が高いと考えることができるが、結果は幸福感を阻害していることを示している。

老化度は年齢によって大きく作用されると考えられるが、それだけではなく、コンピテンス/ライフ・スキルも大きく影響している。とくに、「自分に忠実(率直)」や「孤立」、「依存性」、「孤高」、「個性が強い」、「マイペース」、「ノーティ」といった幸福感を阻害するコンピテンス/ライフ・スキルが老化度を促進している。特徴的なことは、「家族資源」が老化度を促進していることである。このことは、頼りになる「家族資源」を有するがゆえに日常的活動における老化を強く意識するようになるということであろうか。また、「個性が強い」や「ノーティ」が老化度を促進しているということは、個性的であることやお茶目であることは、それだけ老化を強く意識するということかもしれない。

「アスピレーション」が心理社会的老化度の促進要因になっていることは、アスピレーションが高い人ほど心理社会的老化を強く意識するということであろうか。

「体力が」老化度を阻害していることは常識的に理解できるが、知力に関わるコンピテンス/ライフ・スキルである「スマート」が「体力」以上に心理社会的老化度に阻害的に作用しており、「ストレス処理」がうまいほど心理社会的老化度の水準が低いことが明らかになった。また、コンピテンスの水準が同一であった場合には、女性の方が心理社会的老化度の水準が高いことも明らかにされた。

以上、高齢者のコンピテンス/ライフ・スキルを高齢期の幸福感と老化度との関係から考察した。その関係は単純ではなく、考えていたよりもはるかに複雑である。今回の分析を通じての実感であり、正直なところ思いもかけない結果が多かった。いうまでもなく、幸福感や老化度を規定する要因は多様であり、コンピテンス/ライフ・スキルだけで説明できるものではない。重回帰モデルの説明力も20~30%程度である。しかし、今回の分析で、サクセスフル・エイジングへ向けた高齢期におけるコンピテンス/ライフ・スキルの向上という課題に対して多くの新たな知見が得られたと考える。それらの知見は、中高年者のコンピテンス/ライフ・スキルに関するこれまでの理解に修正を求めることになるであろうし、それらの訓練プログラムを再検討することを求めることにもなる。しかし、このことは、本稿における結果を絶対的なものであると主張しようとするものではない。異なったコンピテンス/ライフ・スキルを構成することは可能であるし、そうしたコンピテンス/ライフ・スキルを導入したモデルでは、また別の結果も得られるであろう。また、コンピテンス/ライフ・スキルを幸福感や老化度ではなくて別の対象と関連させて分析す

れば別の結果が得られるであろう。

残した課題は多い。とくに、道具的・手段的なライフ・スキルに関してはほとんど触れることができなかつた。高齢期において必要とされる、あるいは、高齢期の生活を充実させる道具的・手段的コンピテンス/ライフスキルにはどのようなものがあるか、ということについては、これまでも検討を重ねてきたが今回の調査には十分に盛り込むことができなかつた。ひとり暮らし高齢者とくに男性のひとり暮らし高齢者に対する料理教室などが開催されることがあるが、手際よく満足のいく料理を作ることができるスキルがあるか否かは適切な食生活ができるか否かを大きく左右するであろう。そして、そうしたスキルは、健康の維持と、そのことによって可能となる本人の望む生活スタイルを支えることになろう。衣食住に関するこまごまとしたスキルから、電子化、情報化された今日の生活に適應するためのスキル、趣味や仕事に関わるスキルなどが考えられるが、それら道具的・手段的なライフ・スキルも、心理社会的なライフスキルと同様にサクセスフル・エイジングを大きく左右するであろう。そして、道具的・手段的ライフ・スキルと心理社会的なライフ・スキルとの関係や、そのいずれがサクセスフル・エイジングをより強く左右しているか、ということも重要な課題であろう。そうした分析が筆者に課せられた次の課題である。

文 献

- Bradburn, N. N.(1969). *The structure of psychological well-being*, Chicago, Aline.
- Cavan, R. S., E. W. Burgess, R. J.Havighurst, H. Goldhammer(1946). *Personal Adjustment in Old Age*,Chicago, Science Research Associates.
- Diehl, Manfred(1998). Everyday Competence in Later Life: Current Status and Future Directions, *Gerontologist*, Vol.38,No.4,422-433.
- Featherman, D. L., J.Smith,J.G.Peterson(1990). Successful Aging in a Post-retired Society. in P.B. Baltes and M. M. Baltes eds., *Successful Aging: Perspectives from the Behavioral Sciences*, New York, Cambridge University Press.
- Lawton, M.P.(1972). The Dimensions of Morale, in D.P.Kent et al. eds, *Research, Planning and Action for the Elderly*, New York, Behavioral Publications.
- Neugarten, B. L., R. J.Havighurst, S.S.Tobin(1961). The Measurement of Life Satisfaction, *Journal of Gerontology*, 16,134-143.
- 小田利勝(1992). 「高齢者の老年観の測定尺度と分析モデル」『徳島大学社会科学研究』第5号、159-180、1992。
- 小田利勝(1993). 「サクセスフル・エイジングに関する概念的考察」『徳島大学社会科学研究』第6号、127-139。
- 小田利勝(1999). 「高齢期における自立生活と日常生活活動能力をめぐって」『神戸大学発達科学部研究紀要』第7巻第1号、201-222。
- 小田利勝(2002). 「高齢者の日常的コンピテンスの構造」『神戸大学発達科学部研究紀要』第9巻第2号、213-240。
- 小田利勝・野上智行・小石寛文(1997). 「サクセスフル・エイジングとライフスキルに関する一考察」『神戸大学発達科学部研究紀要』第4巻第2号、363-374。
- 中島康之・小田利勝(2001). 「サクセスフル・エイジングのもう一つの観点 - ジェロトランセンデンス理論からの考察 - 」『神戸大学発達科学部研究紀要』第8巻第2号、255-269。

補論

少子・高齢化社会の構造的特質と高度産業社会の行く末 - 21世紀のサクセスフル・エイジングの課題 -

はじめに

「人類が太古から追い求めてきたことをひとことで表現すると？」と問われれば、「より長く、より豊かに生きること」と答えてみたい。そして、「それは実現したか？」と問われれば、「おおむね実現しつつある」と答えておきたい。そして、また、「それは問題なく望み通りに実現しているか？」と問われれば、「残念ながら多くの問題を抱えている」と答えざるをえない。そして、さらに、「では、それら問題は容易に解決可能か？」と問われれば、「多くのことが試みられてはいるが・・・」と口ごもってしまう。

禅問答をしようというのではない。高齢化社会とは、どのような社会なのか、そして、人口の高齢化に伴う問題＝高齢化問題の本質とは何かを自問自答形式で考えてみようとしたまでのことである。

現在、高度産業社会が抱えている高齢化問題は、長命と豊かな生活という太古から人類が求めてやまなかった願望の実現と引き替えに、否応なしに抱え込まなければならなくなった問題である。言い換えれば、それは、高度に産業化された現代社会が抱える構造的矛盾の現れであるということである。そして、それゆえに、それは、解決が容易ではない、というよりは、本質的な解決を図ろうとするならば、現代の産業社会の仕組みそのものを問い直さなければならぬととも厄介な問題なのである。

高齢化問題や高齢化社会をめぐる研究あるいはエイジング研究や社会老年学研究に従事している者は、常にそうした自問自答を繰り返しては課題の大きさと問題解決の糸口をつかむことさえできないもどかしさに苛立ちをおぼえているにちがいない。ここで「ちがいない」という表現には、「そうであってほしい」あるいは「そうでなくてはならない」という私なりの期待と自戒の念が込められている。

実際には、(脳天気には、とは言わないまでも)高齢化社会に関する基本的な理解を欠いたままに、あるいはそうした認識に頓着することなく、したがって、そうした自問自答を繰り返したり、問題解決の難しさに頭を悩ますこともなく、あるいは、また、問題の根深さ故にそうした自問自答を中断し、高齢者や高齢期の生活に関わる諸現象の収集や整理、分析に熱心に取り組み、次々と解決策を見いだしていると自らを納得させている研究者や、先のことはともかく、ということで、当面の問題としての高齢化問題や高齢化施策を論評している論者の方が多いといってよいかもしれない。本稿では、そうした苛立ちを抱えながら自問自答を一時中断して、高齢化社会の構造的特質について、あらためて考えてみたい。

1. 高齢化社会とは、どのような社会か - パンドラの箱？

「パンドラの箱」(Pandora's box)というのを聞いたことがあると思う。この箱が、ギリシャ神話に由来することは断るまでもないが、太宰治が敗戦直後に書いた小説にも『パンドラの匣』というのがある。手元にあるのは、かつて読んだ新潮文庫(昭和48年版)であるが、その解説文には、「太宰文学には珍しく、向日的で明るく、希望に満ちた肯定的小説」(奥野健男)とある。

「パンドラの箱」という言葉を聞いたことはあってもその意味するところは知らない/忘れたという人のために、『広辞苑』(第五版)や『現代用語の基礎知識』(2000年版)の解説をкаいつまんで紹介しておこう。この箱は、ギリシャ神話での最高神で空を支配すると共に政治・法律・道徳などの人間生活をも支配するゼウス(ローマ神話でのジュピター)が、地上最初の女性としてギリシャ神話に登場するパンドラ(ギリシア語で神から「すべての賜物を与えられた女」の意)にあらゆる災いを封じ込めて人間界に持たせてよこした小箱または壺のことである。ゼウスの忠告に反してパンドラがこの箱の蓋を開いたため中から不幸が飛び出したが、急いで蓋をしたため希望だけが残ったという。あるいは、この箱を開くと中から人間の罪悪のすべてが飛び出して行って、あとには希望(未来の予知能力)だけが残ったということから、「予知不可能な困難を蔵したもの」の意に使われることがある。

なぜ、ここで、「パンドラの箱」などを登場させたか察してもらえただろうか。高度産業社会が抱えている高齢化問題は、どうもこのギリシャ神話が描く人類の災いに譬えることができそうだと大分以前から思っていた。どういうことかということ、長命と豊かな生活を享受する過程でパンドラの箱を開けてしまった人類は、蓋をするすべを知らないままに箱から飛び出した高齢化問題という災いに悩まし続けられ、希望さえも失いそうだと、いうことである。長命と豊かな生活をもたらしてきた/いる高度産業社会が現代社会の表の顔であるとすれば、この箱を横に置いて、高齢化問題という難題を抱えて苦渋の表情を見せている高齢化社会は現代社会の裏の顔とでもいえるかもしれない。

いずれにしても、今日およびこれからの人類は、その両方の顔と否応なしに付き合っていくことになる。高度の産業化に支えられた豊かな生活を享受しようとする限り、もはやパンドラの箱に蓋をすることはできないからである。

2 . 高度産業社会における高齢化問題

人口高齢化が出生率の低下と中高年層の死亡率の低下によってもたらされていることはいうまでもないが、このことは誰でもがわかっているかということ、そうでもなさそうである。社会が高齢化してきたのは平均寿命が延びたからだと思っている人の方が多いように思われる(しかも平均寿命が0歳児の平均余命を指すことはほとんど知られておらず、平均寿命の延びというのを誰でもが長生きすることと理解している人が多いようである)。学生なども、老年学関係の授業を聞く前は、あるいは聞いた後でも、人口の高齢化は医学・医療の発達によって平均寿命が延びたからだと思ひこんでいる者の方が多いようである。そして、高齢化を高齢者が増加することと理解している者も少なくない。そのために、人口の高齢化という現象が出生率の低下によってもたらされるということになかなか目が向

かないようである。

もちろん、一般的な栄養水準の向上や健康知識の普及に比べてどちらが寿命の延びに貢献したかは別にしても、医学・医療の発達が寿命を延ばすことに影響があったことは否定し得ないし、これまでの人口高齢化の過程では、年齢3区分でいう老年人口(65歳以上人口)は、全人口に占める割合の増大と平行して実数そのものも増加してきたから高齢者人口が増加したということも現象的には誤りではない。

しかし、そうした理解では、あるいは、そうした理解だからこそといってよいと思われるが、高齢化問題というとすぐさま高齢者問題とみなす(としかみなせない)ことになってしまう。高齢化社会の研究をしているという、高齢者問題なかでも高齢者介護の問題を研究していると見なされる場合が少なくないし、高齢化問題に関心があるという学生も、その内容を聞くと、ほとんどの場合が高齢者介護の問題である。そして、その理由を聞くと、これからますます介護を必要とする高齢者が増加して社会的に重要な課題になってくるからということである。いうまでもなく、高齢者介護の問題は高齢化社会においては重要な課題である。しかし、古代ギリシャあるいは古代日本における老後問題に関する議論を探し出すまでもなく、高齢期の問題や高齢者介護の問題など老人問題あるいは老後問題と総称される問題は、何もいま始まったものではなく、いってみれば人類普遍の問題である。もちろん、その量と質においては大いに異なるが、今日わたしたちが考えなくてはならない高齢化問題は、そうした普遍的な老後問題と区別される高度産業社会における高齢化問題だということである。

3 . 少子化と人口減少

「パンドラの箱」から飛び出した災いの背後に潜んでいたもう一つの大きな災いが、いま日本を脅かしている、といったら大げさであろうか。その災いとは、少子化と人口減少、そして、その先にある人口の消滅である。

高齢化というと、老年人口あるいは老年人口比率がどこまでも増加、増大して将来は高齢者ばかりの社会になると誤解している人も少なくないようである。高齢化問題イコール高齢者問題という理解は、そうした誤解がもとになっている。こうした誤解が生じるのは、高齢化社会という場合の高齢化という言葉が高齢者の絶対的増加を意味するのではなく、「人口の高齢化」(総人口の中で老年人口の割合が増大するという高齢者の相対的な増加現象)を指す用語であることが未だ一般に浸透していないことと、したがって、人口高齢化の主要因が出生率の低下であることに気がつきにくいからだといえる。

しかし、そうした誤解が生じるのも、ある意味ではやむを得ないかもしれない。というのは、既に述べたように、日本におけるこれまでの人口高齢化の過程は、老年人口の絶対的増加を伴ってきたことと、将来的にもしばらくはそうした現象が続くと推計されているからである。要するに、かつてに比べて高齢者が多くなり、今後も高齢者は増加し続けるだろうという一般的印象は、そのことに関する知識の有無とは別に、事実と整合しているということである。

65歳以上人口は、1970年当時は740万人ほどであったが1980年には1,000万人を越え、現

在は2千数百万人である。国立社会保障・人口問題研究所の推計では、2015年に3,200万人ほどに増加し(このときの老年人口比率は約25%)、その後はゆるやかに増加を続けて2040年頃に3,370万人ほどでピークを迎える(老年人口比率31%)。そして、その後はゆるやかに減少し続けて2050年には3,250万人ほどになり(老年人口比率32%)、2100年頃には2,000万人を下回ると推計されている(老年人口比率29%)。

世界各国の人口に照らしてみると、老年人口3,300万人という数字はカナダの総人口に相当し、フランスやイギリスの人口の半分、マレーシアの1.5倍、スウェーデンの3倍であり、デンマークやフィンランドの6倍にもなる。あと10数年もすると、優に一国を形成するだけの規模をもつ老年人口を日本は抱えることになるが、老年人口あるいは老年人口比率がどこまでも増加、増大し続けるということではないということである。

ところで、これまでの日本における人口高齢化は、生産年齢人口(15～64歳人口)および総人口の増加過程の下で進んできた。既に述べたように、そうした過程で老年人口も増加してきた。しかし、生産年齢人口は、国勢調査結果では既に1995年をピークにして以後は減少に転じており、総人口も、国立社会保障・人口問題研究所の2050年までの推計では、2005～2010年頃に127.6百万人～127.7百万人でピークを迎え、それ以降は急速に減少し、2050年には日本の総人口はおよそ1億人になる。ピーク時よりも2,000万～3,000万人減少することになる。この1億人という人口は、日本の高度経済成長期の後半1965年～1970年当時の人口である。

2,000万人というと、オーストラリアやルーマニア、ペルーなどの一国の人口に匹敵する。オランダ(1,500万人)やスウェーデン(900万人)、フィンランドやデンマーク(それぞれ500万人)の人口をはるかに上回り、3,000万人といえば、フランスやイギリスの人口(それぞれ約6,000万人)の2分の1にも当たる。これからの日本の人口減少過程は、そうした国々の人口に照らすと、50年後には一国あるいは一国の半分の人口が消えてしまうほどの規模で進行するということである。

4 . 風が吹けば桶屋が儲かる？

「風が吹けば桶屋が儲かる」の喩えではないが、豊かさと長命を追い求めてそれを実現し、その恩恵を享受してきたことが、その社会の人口を高齢化させて高齢化問題を引き起こし、ひいてはその社会を消滅に導くほどに人口を減少させるというのは、思いもよらぬ結果であろう。では、なぜ、長命と豊かさを実現した高度産業社会において、高齢化が、少子化が、そして人口の減少という現象が生じたか(生じるのか)、ということである。

繰り返すことになるが、高齢化の主要因は出生率の低下である。全年齢層にわたって死亡率が低下して平均余命が延びても、高い出生率が維持されていれば人口は高齢化しない。出生率が死亡率を大きく上回れば高齢化ではなく若齢化が進む。かつての日本にはそういう例が見られた。1920年当時の老年人口比率は5.3%であったが、1925年には5.1%、1930年には4.8%、1935年には4.7%と人口は若齢化した。1935年当時の0-14歳の幼年人口比率は36.9%であった。それ以降は老年人口比率は上昇し続け、幼年人口比率は逆に低下の一途をたどってきた。

それでは、出生率はどういうときに低下するかといえば、一つは、結婚した女性が、それ以前の時代の女性に比べて子どもを多く生まなくなったときである。いわゆる夫婦の少産化である。明治生まれの女性は、結婚すると平均して4人の子どもを産んでいたが、大正2桁生まれの女性になると2人台にまで減少する。しかし、その後は、今日まで、結婚した女性の生涯平均出生児数は2人台で推移してきている。

もう一つは、妊娠・出産が結婚を前提にしているとすれば、晩婚化が進行するときや未婚率が上昇するとき出生率は低下する。日本の場合、非嫡出子が少ないことが知られているように、晩婚化や未婚率の上昇は出生率の低下に直接結びつく。1975年以降の年齢別未婚率の推移をみると、男性、女性ともに上昇しており、1995年における25～29歳の女性の未婚率は48%、30～34歳で19.7%、35～39歳で10%である。1975年当時が、それぞれ20.9%、7.7%、5.3%であったから、未婚率は20年間で大幅に上昇していることがわかる。こうした結果、現在の合計特殊出生率は1.34と人口置き換え水準の2.08を大きく下回ることになり、少子化が急速に進行することになったのである。1997年には老年人口が幼年人口を上回るようになり、2050年には老年人口3,245万人(32.3%)に対して幼年人口は1,314万人(13.1%)と半分以下になると見られている。

5 . 産業社会への適応行動と人口高齢化の必然性 - 産業社会の構造的矛盾としての人口高齢化 -

高齢化の、そして少子化の原因は以上のように明確である。原因を特定し、それを除去する、というのが問題解決の基本的プロセスであるとすれば、高齢化問題や少子化問題ほど原因が明確単純な問題も他にはないといえる。原因が不明、複雑な場合と異なり、解決はたやすいはずである。中高年層の死亡率の低下が高齢化に拍車をかけているからといって、死亡率を上げることは選択肢としてあり得ないから、解決策としては出生率を上げること、そして、そのためには早婚化を促し、婚姻率を高めればよいことになる。にもかかわらず、それが解決困難な問題として苦慮しなければならないのはなぜであろうか。ここに、高度産業社会の構造的矛盾として少子・高齢化問題をとらえなければならない理由がある。

産業社会とくに高度産業社会の特質を一言でいうとすれば、その社会は、常に更新を続ける高度の知識と技術に支えられた社会であるということである。そして、そのことが所得水準や栄養水準、保健・医療水準を高め、教育を普及させ、長命と豊かな生活を実現させてきたのである。こうした社会においては、最新の知識と技術の担い手が常に求められ、そうした人間が歓迎され、そうした人間が自らの欲求をよりよく充足することができ、物質的にしろ非物質的にしろ多くの報酬を得てきた。その担い手は、最新の知識と技術を開発、提供する生産者と、その成果を理解し、利用する消費者に大きく二分されるが、いずれの側も高度の産業化を維持、促進する担い手であるということには変わりがない。そして、そうした担い手は、どこで、どのようにして養成されるかといえば、いうまでもなく、まず第一には学校における長期にわたる体系的な教育によってである。産業社会における教育の大衆化は、そうした二種類の担い手を大量に産出することを可能にし、また、産業

社会のそうした要請に応えることになった。

産業化は、自営業層を減少させ、雇用労働者(サラリーマン)を増加させる。自営業層にとっては子どもは家業を支え、発展させる重要な労働力であり、また、家業の継承者である。したがって、子どもは多い方がよいことになり、子どもを多く産み育てることは家業の発展と自分の老後生活を確かなものにするにつながる。子どもは、いわば、見返りが期待できる投資財である。これに対して、継がせるべき家業を持たない雇用労働者にとっては子どもには労働力としての価値はないから、多く生んで育てる利点を見いだすことは難しい。社会保障制度が整備されて退職後は年金で生活することが可能になると、老後の生活費を子どもに依存しなくても生活できるようになる。老後の経済保障のために子どもを多く産んで育てるということも必要ではなくなるということである。

加えて、高度産業社会の中で自分の子どもが、将来、自らの欲求をよりよく充足し、高い報酬を得る機会に恵まれるようにしてやるためには、高度の知識と技術を身につけさせることが必要になる。産業社会におけるそのためのもっともオーソドックスで合理的な方法、手段が大学まで長期にわたって学校で学ばせることである。継がせるべき家業を持たない雇用労働者が子どもに残してやれることは、ことの成否は別にしても、子どもの将来のために長期にわたって学校教育を受けさせてやることである。そして、産業化による全般的な所得水準の向上は、多くの雇用労働者にそのことを可能にさせた。これが、高度産業社会において高学歴化あるいは高等教育の大衆化といわれる現象が生じる理由である。いうまでもなく、そうしたことを意識して、あるいは意図的に子どもの教育に熱心になっている親は希であろう。多くの場合は、そうした行動は、理屈からではなく、際だった特殊な能力を持っている場合は別にして、いまの時代は大学に行かなければ不利だという現実感覚から生じているのであるが、小学校から塾に通わせるなど成績を上げるために多額の費用を費やし、高校や大学の「受験競争」に親子ともども一生懸命になるのは、いってみれば結果的に高度産業社会に対する適応行動になっているのである。そして、こうして育てられた子どもが産業社会を支え、発展させ、豊かな生活を実現させてきたのである。

長男だけが学業を積みよいか女は勉強しなくてもよいなどという時代ではないから、男であろうと女であろうとを問わずに生まれた子どもにはすべて同じように長期にわたって多額の教育費用を投じることになる。桁外れの金持ちは別にして、一般の雇用労働者にとっては、多くの子どもに長期にわたる教育の機会を提供してやることは容易ではない。もちろん、子育てには教育費用だけではなく、そのほかに諸々の費用がかかる。総理府広報室が平成9年9月に行った「男女共同参画社会に関する世論調査」の結果では、出生数減少の理由として多くの人があげた理由は、「子どもの教育にお金がかかるから」(58.2%)や「経済的に余裕がないから」(50.1%)である。要するに、現代社会における子育ては金がかかるのである。そうしたことが、いってみれば、少なく生んで濃く育てるという少数精鋭主義的な子育てになってあらわれているのである。そして、そうして育てられた子どもは、親になったときに、同じようにして子どもを育てていく。したがって、親には常に子どもからの直接的な見返りは何もないことになる。

雇用労働者にとっては、自営業層と異なり、子どもは全くの消費財でしかないことになる。子どもを多く生んで育てるということは、親にとっても、育てられる子どもにとっても利点が少ないということである。いうまでもなく、誰しものが何らかの利点を求めたり将

来の見返りを期待して子どもを産み育てるわけではない。子どもを産みたい、育てたいという本能的欲求にしたがっていることもあるだろうし、夫婦の証として子どもを産み育てることは当然のことだからという場合もあるだろう。しかし、そうだからといって、一般には自然に任せるままに妊娠・出産することはない。十数人の子どもを抱える家族がテレビ番組の特集で放映されることがあるのは、そうした家族が極めて例外的だからである。

高学歴化とくに女性の高学歴化は、いわゆる社会進出を促進させ、女性の婚期を遅らせ(晩婚化)、未婚率を上昇させてきた。このこと自体が出生率を低下させてきたのであるが、その背景には、女性あるいは夫婦の興味・関心の多様化と出産・子育てに伴う機会費用の増大がある。

高学歴化は、高度の知識や技術の習得というそれ自体の成果以外に、そのことによって関心や興味を多様化させることになる。そして、習得した知識や技術は、そうした関心や興味の充足を可能にする。習得した知識や技術を職業に生かすことはもとより、それによって得られる収入や職業を軸にした社会関係は、それ以外の多様な関心や興味の充足を可能にする。もし、出産・子育てに多くの時間と費用を費やすことになれば、そうしたことは不可能になる。言い換えれば、出産・子育てに多くの時間と費用を費やさなかった場合に得られたであろう収入や満足を失うことになる。高学歴ゆえに、そして、多様な関心・興味を持っているがゆえに、金銭的および心理的損失は大きい。上で取り上げた「男女共同参画社会に関する世論調査」の結果でも、「仕事をしながら子育てをするのが困難だから」(44.7%)や「自分の趣味やレジャーと両立しないから」(12%)という理由を出生数減少の理由としてあげる人が少なくない。

以上のように、高度産業社会に適応した婚姻・出産・子育て行動が高度産業社会を支え、一層の産業化を促進してきたのである。そして、そうすることによって長命と豊かな生活を実現、享受してきたのである。皮肉なことに、高度産業社会に対するそうした適応行動が - そして、それは、高度産業社会が人々に求めた適応行動でもあったのだが - 結果的に高齢化、少子化を引き起こし、人口を減少させることになるのである。そうした中で、たとえば、社会保障財源の縮小を理由に、年金の支給年齢の上昇や減額が進められている。多少情緒的な表現を使えば、高度産業社会を支えるために必死になって努力してきた個人や家族は、この高度産業社会は、もういままでのようには老後の面倒は見られませんよ、と冷たい仕打ちを受けることになったということである。なんといわれのないしっぺ返しであることか。

では、だからといって、そうした適応行動を変えて出生率を人口置き換え水準まで大幅に上げることができるであろうか。絶対にできない、とは断言できないまでも、極めて困難なことであろう。それを可能にするということは、豊かさと長命をもたらしている高度産業社会そのものを否定することになるからであり、そのことは豊かさと長命を放棄することになるからである。このことが、原因が明確であるにもかかわらず解決できない難題として高度産業社会が高齢化問題を抱えている理由なのである。

6 . 少子・高齢化の行き着く先 - 人口消滅？

ところで、あと数十年もすると日本は高齢化のピークを迎え、深刻な高齢化問題に直面する、という認識は、いまや国民的常識になっているが、誤解を恐れずに言えば、高齢化問題が盛んに論議されているうちは、その社会は高度の産業化に支えられて「長命と豊かな生活」を享受できる社会でもある。しかし、今日、既に、少子・高齢化(少子化・高齢化)や少子高齢社会という言葉で少子化をめぐる問題が高齢化と平行して議論されるようになり、次第に少子化をめぐる議論の比重が高まってきている。

少子・高齢化あるいは少子高齢社会という言葉は、少子化と高齢化が同時に進行している、あるいは少子社会であると同時に高齢社会であるという人口現象を指す用語にすぎないが、その言葉の含意は、そうした現象がもたらす帰結が人口の消滅であるということである。少子化をめぐる議論の比重が高まり、さらに将来の人口減少の問題に議論の焦点が移ってきていることは、「長命と豊かな生活」なかでも「豊かな生活」の享受を可能にしてきた高度産業社会の基盤そのものが動揺することへの危機感のあらわれである。

それでは、人口減少は、いつまで、どの程度まで続くだろうか。数年前に、人口問題研究所が将来の日本人口に関する興味深い推計結果を報告している(国立社会保障・人口問題研究所『人口問題研究』第53巻第3号、1997年)。平成10年度の厚生白書にも紹介されたから目にした人も少なくないと思われるが、その推計結果の概要は次のようなものである。

仮に、1996(平成8)年における女性の年齢別出生率(合計特殊出生率1.43)、出生性比(女性100に対して男性105.2)および死亡率(平均寿命男:77.01歳,女:83.59歳)がずっと続いた場合、日本の人口は、2100年ころ(100年後)には約4,900万人、2500年ころ(500年後)には約30万人、3000年ころ(1000年後)には約500人、3500年ころには約1人という計算になる。

いうまでもなく、500年先、1000年先のことを正確に予測することなどは到底望み得ないことことであり、これから100年の間に人口現象を大きく左右する何らかの変化が生じるかもしれないから推計通りにはならないかもしれない。したがって、この推計の方法や結果の是非をとやかく言ってもはじまらない。それにしても、今日のような少子化現象が超長期にわたって続くとすれば、1億2千万人を抱える現在の日本も、100年後には半減し、500年後には一地方都市程度の人口になってしまい、1500年後には消滅するという予測は衝撃的であることを乗り越えて腹を抱えて笑ってしまおうな話ではある。実際、2001年2月にスウェーデンのウプサラ大学社会学部で社会老年学グループと会合を持った機会に、この超長期予測のことを紹介したところドッと笑いが起きた。「少子」問題は、まさに「笑止」問題であるが、この「笑止」は、「勝事」の当て字で、本来は普通ではないことを指し、現在一般に使われている「笑うべきこと、おかしいこと」のほかに、「大変なこと、困ったこと、気の毒なこと、同情すべきこと」の意味がある。そういう意味でも「少子」(化)問題は「笑止」問題といってもよさそうである。

冗談はさておき、かつて超長期のシミュレーション結果に基づいて人類の将来に警鐘を鳴らした『成長の限界』は世界の耳目を集めたが、それに比べると、日本人口に関するこの超長期の予測はあまり話題になっていないようである。結果があまりにも日常的感覚からかけ離れているからかもしれないし、過去100年の間に急速な人口増加を経験してきた日本人にとって、日本という国が消失するほどに人口が減少し続けるということは、想像することさえ難しいからかもしれない。

ちなみに、国立社会保障・人口問題研究所『人口統計資料集(2000)』に記載されている過去および将来の推計値によれば、江戸時代から明治中期までの日本人口は3,000万人台であった。そして、明治中期以降になって急速に人口が増加していったが、上でみた超長期予測による100年後(2100年)の4,900万人という人口は明治43(1910)年の人口(推計値4,918万人)に相当し、第1回国勢調査時(大正9<1920>年)の5,596万人よりも少ない。500年後(2500年)の30万人というのは、弥生時代の日本には60万人がいたと推計されているから、その半分になる。1000年後(3000年)の500人というのは、縄文時代の約2万人にも遠く及ばないことになる。

人口が減少することは、考えようによっては悪いことではないかもしれない。周知のように、かつての日本は過剰人口を抱えた「後進国」であったし、現在でも国土面積や地下資源量に比して人口が多いのも確かである。日本の高度経済成長にはそれ以前に過剰人口とされた部分が豊富な労働力として貢献したが、今日の先進産業国がすべて日本のように1億を超える人口を抱えているわけではない。人口が減少すれば、都市圏の過密が解消されたり環境の汚染度が低下するなどして居住環境が良くなることも考えられる。国土全体に余裕ができて、農・工業の生産用地を拡大することもできよう。

しかし、現在の国民生活は、現在の人口で成り立っているという事実を忘れてはならない。過疎化で生産、生活の場としての機能を喪失した地域や炭坑が閉山した後のかつての産炭地域を例に出すまでもなく、大規模な人口減少は、それ以前の「豊かさ」を失わせることになる。人口が大規模に減少するということは、生産に従事する人口および消費人口が大規模に減少することであり、経済活動全体の水準が低下することだからである。

人口が安定あるいは増加傾向にあるときには、年齢構造が変わったとしても、経済活動はじめ社会の諸活動は何らかの対応が可能である。たとえば、少子・高齢化の進展は、一方ではマーケットとしての若年層が相対的に縮小することにつながるが、他方では高齢者層がマーケットとして相対的に拡大するから、高齢者向けの新たな商品が開発されたり、いわゆるシルバービジネスと呼ばれるような新たなビジネスが生まれる。教育に関していえば、少子化によって従来の学校教育システムにおける学齢期の年齢層が減少しても、社会人教育や生涯教育など新たな教育システムを導入することによって教育活動そのものは維持・拡大することができる。

しかし、ピーク時よりも2,000万～3,000万人減少して約1億人になるとされる50年後や、いまよりも人口が半減するとされる100年後はどうであろうか。国内市場の規模は全体的に縮小し、諸活動に参加あるいは関わる人口そのものが減少するわけであるから、それまでのような活動内容のシフトで対応することはできなくなる。経済活動でいえば、国内市場が縮小することによって国際市場での競争がいまよりも比較にならないほどに激しくなるであろう。先進産業諸国は、アメリカを除くと、50年、100年先は日本と同様に大幅な人口減少に見舞われ、日本よりも人口規模が小さい国の国内市場は一層縮小することになるからである。その期間、途上国の人口増加によって世界人口全体は大きく増加するが、現在の途上国も産業化されるであろうから、日本だけが一人勝ちをして日本国内に富を集積することができるとは期待しにくい。そして、一地方都市並みの人口になるとされる500年後においては、日本経済がどうなるかは、もはや想像することさえ難しい。

一国を成り立たせる最小規模の人口がどれくらいかは判断しがたいが、1,000人に満た

ない人口のヴァチカン市国(ホーリー・シー)は例外としても、フィンランドの人口は北海道と同じくらいである。世界には、そうした人口規模の国も少なくない。したがって、全人口が30万人程度になっても日本は存在しえよう。実際、2000年現在の世界191か国のうち、29か国が40万人未満である。とはいえ、そのときでもなお日本が先進産業国であり続け、現在のような経済水準が維持されていることを想像するのは難しいし、高齢化問題を議論する余地もないであろう。おそらく、そのずっと以前に少子・高齢化問題は過去の議論として歴史書に記載されていることであろう。

7. 期限付きの社会システムとしての産業社会 - 現代社会論としてのエイジング研究 -

以上に述べてきたことから言えば、エイジング研究や社会老年学研究は、単に老化や老年をめぐる問題あるいは老年人口の増加や老年人口比率の増大が社会に及ぼす影響を扱う学問にとどまることなく、高齢化という現象の分析を通じて現代産業社会の変動を扱う現代社会論として今後ますます重要になってくるであろう。高齢化という人口現象が人間社会の歴史や社会の構造、発展を大きく左右していることに注目するということからいえば、エイジング研究や社会老年学における歴史観は、いってみれば人口史観ということになるのか。

大衆社会論や産業社会論、脱工業化社会論、管理社会論、知識社会論、情報社会論など現代社会論と総称される領域におけるこれまでの議論においては、人口は一定あるいは増加することを前提としており、人口の減少ということには全くといってよいほど関心を向けてこなかった。少子・高齢化と、それに続く人口減少という高度産業社会の長期的動向は、豊かさと長命をもたらした産業社会という社会システムが、人類にとって期限付きのシステムであることを教えているといえるのではないだろうか。そして、この期限付き社会システムという発想は、これまでの現代社会論には一度として見られなかったものといえてよいであろう。

結び - 人口減少過程にどう対応するか

少子・高齢化と人口減少は高度産業社会が内包する構造的矛盾の現れであり、豊かな生活と長命を享受し続けようとする限り人口消滅に向かって突き進むしかないとすれば、今日の私たちには何ができるであろうか。ウプサラ大学社会学部で日本人口の超長期予測を紹介したところ笑いが起きたことは既に述べたが、その後の議論の中では、500年先、1000年先までにはまだまだたっぷり時間があるから、それまでの間には社会老年学研究者が取り組まなければならない課題はたくさんある、というところで話が落ち着いた。どのような課題に取り組むかは、研究者個々の関心や問題意識によって多様であろうが、社会老年学研究においては、それら諸課題を包括する言葉を用意するとすれば、やはりサクセスフル・エイジングということになる。その課題は別の機会に報告することにして、ここでは、どのように人口減少過程に対応していくかということを考えてみたい。

どのようにしても結末が望ましくないということが明らかな場合、人間は、それまでの期間をどのようにして過ごすであろうか。考えられる過ごし方は2つあるように思われる。一つは、先のことは考えても仕方がないとして、現在および近い将来のことだけを重視し、その短い期間を充実したものにしようとする過ごし方である。もう一つは、結末に至る期間が長くなることを期待して、できるだけ節制したり辛抱しようとする過ごし方である。

個人の場合は、いずれの対応の仕方をとるかは、その人の好みや価値観に左右されるだろうが、集団や組織、より一般的にいえば社会の場合は、後世(次世代)への影響ということが考慮されなければならないであろう。前者の対応の仕方は、後世(次世代)のことを考慮せずに、いま自分たちが生きている時代だけに関心を集中するとき採用される。そうした対応の仕方は、歴史が教えているように後世に解決が容易ではない付けを残すことになる。後者の対応の仕方での課題は、後世のことを考えるといても、どの程度まで現在の自分たちの欲求を抑制できるかということである。遠い将来のこととはいえ、いや、遠い将来のことであるがゆえに、いま求められているのは、現在に生きる私たちが、そのいずれの対応の仕方を選ぶかということであろう。それとも、豊かな生活と長命を享受し続けることができ、しかも一国が消滅に至るほどの人口減少を引き起こすことのない第三の道がいつか見いだされることを期待してよいのだろうか。

本稿では、高度産業社会の将来をあえて悲観的に描こうとしたわけではない。高度産業社会という社会システムの構造的性質が少子・高齢化社会を生み出し、そうした社会システムを維持しようとする限り果てしなく人口を減少させることになる必然性を考察したまでのことである。そして、その必然性に気づいたとき、人間は、そして社会はどのような対応ができるかを考えてみようとしたまでのことである。

出生率を上げて人口減少をくい止めようとする諸施策は国や地方自治体で様々な形で行われているが、目に見える効果は上げていない。その理由については、もはや説明するまでもないと思われるが、そうした諸施策は、現在の高度産業社会において、早く結婚して子どもを多く産むことが何にも増して利点が多いと実感できるようなものではないからである。

親が子どもの教育に熱心になればなるほど、国が科学技術立国を目指して科学技術教育や科学技術政策に熱を上げればあげるほど、ベンチャー企業の育成に熱を上げればあげるほど、景気低迷期だからと企業が人員削減を行えば行うほど、出生率は低下こそすれ人口置き換え水準に回復することはないであろう。もっと一般的にいえば、個人にしる集団・組織にしる、高度産業社会という社会システムに適応し、その中で自らの欲求を充足すべくがんばればがんばるほど、そして、そうしたがんばりを奨励したり促進する政策をとればとるほど、社会の消滅に向かって突き進むことになるということである。

いま、ここでは、そうしたことの是非を論じようとしているわけでもなければ、では、どうすればかよいかということ提言しようとしているわけでもない。冒頭で述べたように、自問自答を中断し、少子・高齢化社会という厄介な代物の正体をあらためて見極めようと試みたまでのことである。議論の素材になれば幸いである。

2002年3月1日 印刷
3月10日 発行

1997年度～2000年度文部省科学研究費補助金(基盤研究(B)(2)) 研究成果報告書
課題番号09410045

高齢者のライフスキルと
サクセスフル・エイジングに関する実証研究

編著者 小田利勝 神戸大学発達科学部人間科学研究センター
〒657-8501 神戸市灘区鶴甲3丁目11
電話・FAX078-803-7891 email oda@kobe-u.ac.jp

発行者 神戸大学 〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1

copyright T.ODA
